

ファンタステイック・
アカデミー！【異世界
×大学物】

丸いの

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

都内の大学で研究に勤しむ大学院生の平塚礼二（本名 ラステイレイ・フォルガント）は、転生した先の異世界から無理やり帰還した元日本人である。来年からは教員として大学の新キャンパスに赴任することになり、まさに順風満帆。

しかし新キャンパスができる場所を知らされて、彼の表情は一変した。

記されていたのは、二度と見ることは無いと思っていた異世界の王都の名前だった。

参画する研究者達に課された使命は、異世界に科学教育を伝えること。

剣と魔法の才能が無い故に一度は背を向けたファンタジーの異世界へ、彼は研究者として再度向かい合う。

※本小説はArcadiaと小説家になろうにも投稿しております。

某所で理想郷のドメイン失効が近いという噂を聞いたので、ちよつとずつ移行していきます。

※※新作始めました。

記憶の無い僕と黒い刃の彼女【異世界×異能力バトル】

<https://syosetu.org/novel/157840/>

目次

プロローグ

ここは東の学術都市

第一話「学術都市のアカデミー!!」

その1

その2

その3

第二話「襲撃!! 迫りくる銀色の影」

その1

その2

その3

その4

その5

1

8

23

38

54

64

74

93

108

その6

第三話「秒読み!! 大月左遷までに残さ

れた時間」

その1

その2

第四話「出征!! いざ異世界の大地へ」

その1

その2

その3

その4

第五話「開幕!! 国立大学異世界校」

その1

その2

122

137

149

164

176

188

199

209

224

第八話「観戦!! 異世界学園の祭典」	その4	348
	その3	342
	その2	333
	その1	321
第七話「乱入!! 緊急キャンパス見学会」	その4	303
	その3	287
	その2	273
	その1	259
第六話「探索!! 週末の学生街」	その4	245
	その3	235

第九話「帰還!! 帰省という名の出陣」	その5	423
	その4	411
	その3	393
	その2	382
	その1	366
	その1	430
	その2	443
	その3	449
	その4	456
	その5	465
	その6	472
	その7	487

その1	585	第十話「大詰め!! 中間報告会まであと 僅か」	その9	508
アカデミー!」			その8	499
第十一話「決戦!! ファンタステイック・	569		その6	556
			その5	549
			その4	539
			その3	528
			その2	516
			その1	

その6	712	第十二話「決着!! 王女の凱旋」	その3	609
その5	702		その2	598
その4	695		その4	618
その3	686		その5	632
その2	677		その6	642
その1	666		その7	654

その3

—

819

その2

—

804

789

電気と電腦の街、秋葉原 その1

後日談

ここは異界の学術都市

—

778

エピソード

その10

—

765

その9

—

754

その8

—

743

その7

—

728

プロローグ

ここは東の学術都市

肌寒さからようやく脱してきた陽気が頬をつく。春の到来、それは気温だけではなく周囲を見渡した光景からも感じることが出来た。僕が二度目の生まれ故郷を逃げ出してきてから、これでもう5回目の春になるのだ。随分と時間のたち方が早く感じる。

故郷を後にしたのは雪の降りしきる日だった。あの時は心に重くのしかかる後悔の念に蓋をして、己の目的地への希望を一心にしていた。ふと目をつぶれば、心残りを何とか減らそうとして書いた置手紙の文章が段々と頭の中に蘇ってくる。

* * *

親愛なる妹、レシルティアへ

君がこの手紙を読んでいるということは、私はもう家を出ているのでしよう。

机の上から二番目の引き出しの中、君との思い出を記した日記帳の最後に挟んであったこの手紙を見つけてくれてありがとう。

日記帳を読み返してみると、生まれてから12年の歳月があつという間に過ぎ去つてしまつたのだと痛感します。

最初の方に目を通すと、どのように引つ込み思案だつた君を外に連れ出すかで只管悩んでいたので、つい昨日の出来事のように思えます。

結局君は幼少期の殆どの時間を私と一緒に過ごしてきましたね。使用人との間に出来た子だからと強固な監視が付かないのをいいことに一緒に里山で冒険をして、本家の兄弟達が受けている魔法の授業をこっそり盗み聞きしたこともありました。

そんな私の後に着いて回るちんちくりんは、今や本妻の子供達も追い越す剣と魔法の才能を持った魔法騎士の卵となりました。

父上が私たちの家の夜会に君を出すと決めた時は鳥肌が立ちました。何とか頼み込んで君に内緒で給仕として夜会に潜り込んだ私は、感動で足が震えんばかりでした。

しつかりと手入れを施された長い銀髪、鮮やかな蒼い瞳。昔から普通の姿ではないと陰口を叩かれた片割れが、今や一国の姫にも劣らぬ麗しい容姿で大勢の人間を黙らせたのだから。

君が今度の春から王都の騎士学校へと入学すると聞かされて、やつと私も足を踏み出すとうとう気になりました。

私たちの家は、王家ともつながりを持つ伝統のある家柄です。残念ながらあまり体を

動かすことが得意ではない私は、父に別の方向で国に貢献をするためにと文官か魔術師を目指すように言われました。

だが、私の夢はそうじゃない。国への貢献よりもっとやりたいことが、それこそ生まれたときから存在していたのです。

しかしその夢を目指すには、この国から出なければならぬ。

君の保護者を自称する身としては、君を一人置いてこの土地を離れるということに強い抵抗を感じていました。しかし君だっていつまでも籠の中の鳥では無い。そのことをあの夜会の中で感じる事が出来ました。

いつこの場所へ帰れるかは分かりません。

ですが約束しましょう。いつの日か必ずまた君の顔を見に戻ってくることを。

王歴225年 白銀の月 45日

ラストイレイフオルガント 平塚礼二

* * *

こんな感じの手紙を日記のカバー後ろに入れておいた気がする。内容については日に日に正確な文面が記憶から薄れていくが、少なくとも出だしから過去の思い出振り返

り、そして家を出た動機の流れについてはこの通り綴った筈だ。

普段あまり書くことは無いフルネームを走り書きで残し、止めにアルファベット状の文字で調和した文体をぶち壊さんばかりに鎮座する漢字四文字もそのままだ。別段難しい字でもないが、そもそも日常ではまず使わない漢字を書くのはやや手こずるものがあった。いくら頭が物事を覚えていようが、それを実際に行動に移すのは別物というところか。

平塚礼二。そしてラステイレイ・フォルガント。片や極東の島国に住んでいそうな名前、そして片や祖国でも大きい部類に入る貴族の系譜。全く接点の無い二つを、別に伊達や酔狂で並べた訳ではない。

どうしたことか、自分には平塚礼二という前世の記憶とやらがある。いや、むしろ前世の精神がそのまま今の体に入っていると云ったところか。体に思考が引つ張られると言ったことは少なく、あくまで自分自身での感覚には過ぎないが、特に生前と比べても性格などの変化は無さそうなのも根拠の一つである。

——ゴトン——

ふと足元からやや強い揺れが足元に響く。

いくら首都の中心部を走る乗り物とは言えども、やはり物の上を走る以上揺れを完璧に無くすことなど出来ない。完璧になれないという点では、どこかこの乗り物に親近感

が湧いてくる。

双子を生んで間もなく病死した母、妾の子だと中々相手にしなかった本妻の周りの人々、基本的に家庭教師と使用人数名しか寄越さずに顔もほとんど見せない父。そんな境遇で果たして生まれてきた子供二人がただの年相応の子供だったならば、真つ当に育つはずが無いと思えてしまうのは変なことではないだろう。

素っ気ない使用人達には見向きもせず、只管僕の後を付いて回る事しか出来ない双子の妹を見て、やつと肉体と精神の折り合いが取れた頃、それこそ5歳にも満たない時から彼女がある程度育つまでは傍で支えてあげようと決心したほどだ。

——ゴトン——

秀でた魔法と剣術の才能を見せるまで育った妹に対して、周囲は露骨に見る目を変えた。

全く現金なことだ。確かに夜会でお披露目された妹の姿を見て目元は熱くなつたものの、同時に金塊を掘り当てたような表情を浮かべる父に対しては、気持ちには分からなくもないがあまりいい感情は向けられなかった。あまり期待をしていなかった妾の子供の片割れが光る逸材だったのだ。二人きりで話があると聞かされる前から、父が二匹目のどじょうを狙おうとしていたのは想像に難しくなかった。

だが生憎自分は魔術や剣術の才能は少なかつたため、彼の望みを満たせるほど完璧な

人間ではなく、そして本当にやりたいことは別にあつた。父に呼び出され王都の魔法学校への入学を告げられた時に、ようやく国を出ようと決意をした。前々から祖国を出る準備を進めており、一人立ちできるまで育つた妹や、父の野望を聞かされたことで踏ん切りがついたのだ。

——ゴトン——

しかし手紙の最後の言葉は果たして実行できるのだろうか。

放置したも同然の妹にどんな顔を向ければ良いのか。いや、そもそも問題はそこではない。我が祖国の栄える王都リーヴェルや故郷エルドリアンとはかなり離れた異国のこの都市だ、帰るのは簡単な話じゃない。

『次は新宿です。中央線、埼京線、山手線——』

そう、馬車が一番速い公共の乗り物であるわが祖国と、冷暖房や自動放送が完備された電車が普通に走る前世の祖国こと技術立国日本。ただ物理的な距離が遠いという訳ではない隔たりを挟むこの二つを自由に行き来する方法を、僕は知らないまま5年近い歳月が過ぎてしまった。

“ここは東の学術都市、世界的に見ても相当な規模の巨大都市に分類される”東京だ。

第二の故郷とは比較にならないこのメトロポリスの中心部を走る鉄道たちは、前世の

状態から更に網の目状の発展を続けているようだ。大量の乗り換え路線を淡々と述べる自動放送が耳の穴に入ってくると同時に僕は目を開き、チラチラどころかガン見してくる乗客の視線を無視してドアの方向へと歩き出した。そりやあ目立つだろうな。そこそこ人で込み合ってる電車の中で、銀髪真つ白肌止めはコバルトブルーな瞳の如何にも日本人じゃないよ的な風貌の少年が、そこから売ってそうな肩掛けバッグやポロシャツジーンズのラフな恰好で突っ立ってたら。

第一話 「學術都市のアカデミー!!」

その1

乱雑に積み上げられたようにも見える紙束。しかしこれらは皆種類ごとに纏められており、尚且つちよつとやそつとの衝撃を与えても紙が土砂崩れを起こすようなことは無い。

そんな山に囲まれた盆地のような机の中心部には、特価で買った機種遅れも甚だしいノートパソコンが鎮座している。ノートというには大型のわがままボディ、排熱がしっかりできていないことを指し示す妙な熱っぽい素肌。最近サポートの終了したOSよりも一段階だけ新しいソフトウェアで動くアホの子というこのポンコツが我が愛用のPCである。

脇に置かれたマウスパッドの上には何故かマウスではなくコーヒーカーップが居座り、半ば限界を迎えつつある愛機はタイピングしてからワンテンポ置いて画面に文字を映す始末だ。そろそろ乗り換え時なのかもしれない。

「礼ちゃん、先生が呼んでたよ」

愛しのPCの遅い反応に苛つきつつあった僕の後ろから声が響いた。

イヤホンを耳から外して振り返ると、背の高い青年がこちらを見下ろしていた。ゼミの同期である彼は何故かいつも僕をちゃん付けで呼んでくる。気に入らないが言っても止めないので今は放置している。

「これ今度の勉強会のレジュメ？ 相変わらず細かく書くなあ」

「まあドクターだから細かすぎるくらいが丁度いいんじゃないかな」

彼はパソコンの画面を覗き込みながら渋い顔を浮かべている。僕の次週には彼が勉強会の発表者の筈だから、そろそろ準備に取り掛からなければまずいと思っているのだろう。

「今先生は教授室にいるんだよね？」

「そうそう。話し合いをしたとかですぐ来てくれだつてさ」

同期の言うように、時折こうやって先生はそこらへんの学生を捕まえて人を呼ぶことがある。ならばしようがない。長時間椅子に座っていたため、立ち上がると軽い眩暈と一緒にこった部分が軽い痛みを訴えてくる。

小さく伸びをして頭を振り、呼びに来てくれた同期に視線を向ける。僕よりも頭一つ分大きな身長を見せつけられて少々苛立ちが湧きたつが、グツと飲み込んで我慢した。

「ありがとう。じゃあちよつと行ってくる」

最後にパソコンを閉じるのも忘れない。軽く礼を済ませると、僕は学生室の出口に向

けて歩き出した。

先生こと我がゼミのナンバー2に座る准教授の部屋は、廊下に出てから右に曲がるとすぐに辿りつける場所に存在している。ちなみにナンバー1はラボのあるこのフロアで一番良い部屋に住まうボスこと老齡の教授だ。廊下を歩きながら時代を感じるすすぽけたベージュ色の壁を眺め、この現代日本に戻ってこれてはや4年もの歳月が過ぎたのかと感傷に浸った。

当初この日本に戻ってこれた自分が対面したのは、懐かしの故郷の光景だけではなかった。換金するために持ってきた貴金属や宝石も、大手の質屋に持って行ったところで最初に身元の証明書の提示を求められたため断念した。やや胡散臭い質屋で売りさばこうにも、銀髪白人肌という見た目のせいではなかなかお金と交換してもらえず、やつとの思いでお金を手に入れた時は嬉しきで思わず涙を流した程だ。

質屋で奮闘した後は手に入れたお金で列車を駆使し、なんとか生前暮らしていた実家へと戻ってきた。家の見た目は全く変化せず、表札には自分の名前が書いてあったため懐かしさで胸を痛めながらインターホンを押した僕は、駆け値無しに人生で最大の驚きをする事になった。

「失礼します」

扉のマグネットで先生が部屋に居ることを確認して軽く扉を叩く。了承の言葉は特

に返ってこないが、いつもの事なので何ら気にすることは無い。

「おお、来たか。とりあえず椅子を持ってこい」

「分かりました」

部屋の奥に置かれた大きな机。僕のちんけな愛機とは比べにもならないほど立派な梨印のデスクトップパソコン。そして僕の机と大差ない積み上げられた書類。

そんな机の前で作業をしている彼は、Tシャツにジーパンを組み合わせたまるで学生の一人と見紛うくらい非常にラフな格好に身を包んでいる。大きな銀縁眼鏡を掛けて某16代合衆国大統領のように立派な顎髭を蓄えた姿は、准教授にしては若い30歳後半という実際の年齢よりも彼を大物に仕立て上げるのに一役買っている。

「今度の論文投稿に関する話ですよね」

「そうだが……今は俺達しか居ないんだから、口調を崩しても良いぞ？　むしろお前の敬語とかちよつと寒気がするから勘弁してほしい」

「……分かったよ。」平塚“先生”

そんな彼の名前は平塚礼二。この国立東都工科大学で若くして准教授まで上り詰めた、いわゆる期待のエースである。

そして部屋の隅から引つ張り出してきた椅子に座る僕の名前は、異世界じゃラスティレイ・フォルガント、現代日本では平塚礼二。この国立東都工科大学院で16歳という

異例の若さで現在博士号取得を目指している、銀髪真つ白肌ブルーな瞳の色物である。先生と僕、同姓同名漢字まで一致という事実以上に、もつとびつくりする繋がりがあったりする。

「いくら姿が違うからって内面がまるつきり、自分自身、の人間に敬語で話しかけられるって結構ゾワってするぜ？」

「もう4年半も経つんだからいい加減慣れりや良いのに」

あきれた調子で返してみても、彼は相変わらず苦々しい表情を浮かべていた。

「そんなこと言ったって自分自身だ。胸に手を当ててみて考えろ」

「……前言撤回。僕もそんな境遇になつたら寒気を感じるかもしれない」

フランクな口調で会話を弾ませる片や16歳の異国風の少年と、片や40手前の大物っぽい見た目の中年親父。僕たちは見た目こそまるで違うが、実のところ同一人物なのだ。

震える手でインターホンを押し、12年ぶりの再開となる両親に何と話をしようものかと考えを張り巡らせていたあの時。開いた扉の先に居たのは、結構な歳になつてははずの両親のどちらでもなく、どこか見覚えのある顔で怪訝そうに此方を観察する若い男だった。

見覚えはあるが誰かははつきりと分からない男を前にして、僕は非常に焦つたもの

だ。混乱しながら「平塚さんのお宅ですか」とどこかの業者みたいなことを口走る僕に若い男は大層警戒した様子で「そうですが、何の御用ですか」と全力で排除に掛かる始末だ。「僕は12年前に死んだ平塚礼二です。両親に合わせて下さい」と直球を投げつけければ「本物の平塚礼二を前にして勝手に殺したうえに名前を騙るたあい度胸だな」と鋭く打ち返す。「そもそもアンタは誰ですか」と異議を唱えれば「お前こそ俺の名前を騙ってるがこのどいつだ」と逆に問い詰められた。

新手的オレオレ詐欺と確信した彼と、なんとしてでも目の前の男を突破して両親に先立つた事を謝ろうとする僕の押し問答は更に加熱した。

思いつく限り生前の思い出を片端から列挙していく僕を前にして、男は段々と表情を真つ青にした。そしてパソコンの暗証番号など僕以外知らないはずの情報もペラペラと口から出すと、彼は真つ青な顔はそのままに僕の胸倉を引つ掴んだ。後から聞いてみたところどうやらハッキングを仕掛けられたものだと思つたらしい。

そして加速する言い合いの中で僕は目の前の人間がどうにも生前の自身の姿に似ているということに気が付き、男の方も出回る訳が無い自身の私生活について重箱の隅をつつくかのごとく語る僕に違和感を感じ始めていた。

両者が疲れ始めたせいで戦場は玄関口からリビングルームへと移行し、何故か彼は僕にも煎茶を注いで渡してくれた。部屋の間取りは記憶の通りで安心感を得る一方で、色

んな場所に置いてあったはずの両親の所有物がリビングに見当たらないという事実
少しの焦燥感が湧き始める。

恐る恐る両親について聞いてみると、ひたすらに僕を拒み続けていた様子から一変し
て、彼はやや苦々しい表情を浮かべつつ両親が田舎で第二の人生を歩んでいることを告
白してくれた。これに僕が心底ほっとした様子を浮かべたことが引き金となり、彼と僕
による腹を割った話し合いがようやく幕を開けたのだ。

「これからかなり粗探しする感じになるが許せよ。さて論文に軽く目を通したけど、ま
ず考察の項で少しだけ怪しい部分がある」

「ええと、どこころへん？」

平塚礼二という本名を持つ僕の主張は、12年前に通り魔に背中を刺されて死んでし
まい、その後この日本とは全く異なる大地で新たな生を受けたという突拍子もないと言
われても仕方のない物。一方で自分こそが本物の平塚礼二だと言い張る彼は、確かに1
2年前に通り魔の襲撃に遭遇して背中を刺されたが、懸命の治療の結果意識不明の重体
から奇跡的に回復したと主張した。

同じ存在を名乗る人間が2人も存在する。そんな状況は普通に考えてあり得る話で
はなく、互いが相手を偽物だと信じるのが自然だろう。だがその時、煎茶を飲んで一息
をついた僕の頭はどちらの主張も正しいのではないかという発想へと至ったのだ。つ

まり僕も彼も双方が”平塚礼二”という人間に違いないのではないかと。

二つの主張を組み合わせるのならば、そもそも僕がファンタジーな世界に転生した際に、一度死んでからという前提が違っていることとなる。ならば僕という人格は、事件によつて生死の境をさまよつた平塚礼二という魂の片割れなのではないか。その考えへと至つた僕は思わず頭を抱えた。生まれてから12年間ずっと信じ続けてきた常識のようなものが崩れるのは、想像以上に心へのダメージが大きかつたのだ。

「断言できるところはきちんと言断言した方が良い。それとこの論理はもう少し参考文献の補強が欲しいな」

「やっぱり当たり障りの無いようにつてのは連続しちゃいけないか」

僕の魂は事件によつて生死を彷徨つた貴方の魂の片割れだと言つたものの、想像通り男は信じてくれるどころかかわいそうな物を見る表情で此方を見るだけだった。

だが彼の目の前で湯呑に残つたお茶をポケットから取り出したなけなしの魔石を用いて瞬時に凍らせてみたり、子供のころに田舎の雑木林でカブトムシを取りに行つたことを筆頭に昔懐かしの話で盛り上がつていく内に、段々と彼は僕が自分自身と同じ記憶を抱えている異世界の人間だという認識を抱いていった。

日も傾き始めて互いに信頼が築かれ始めたころには、話題はお互いの近況報告へと移行していった。通り魔事件で意識を失つた僕がとある王国の有名貴族の妾の子として生

まれ、その世界では魔法という物が普通に存在し、双子の妹が居るといふ話をすると彼は大層興味深そうに聞き入った。一方の僕も、無事に通り魔事件から復帰した”平塚礼二”が熱心に研究へ勤しみ、博士号を取るだけに留まらず30前半なのに来年から准教授として大学に勤める予定と聞いて度胆を抜かされた。

そして原理はともかく何故此方の世界へ戻ろうかと思つたのかを問われて、生前続けていた研究をもう一度行いたいからだと答えた時、彼は少し驚いたような顔を浮かべ、その後遭遇してから初めて見せる優しげな笑顔を僕へと向けてきた。「その願い、俺なら手助けしてやる事が出来るぞ」という手を差し伸べるような言葉と共に。

「追々発表練習は行うとして……まあ今のところは三年卒業に向けて順調だな」

「上手くいけば17歳で博士号かあ。なんか言葉に出してみると日本じゃ考えられない快拳だね」

「本当にすごい話さ。ある意味で自分自身の快拳なものにも凄い嫉妬が湧くほどだ」

衣食住が欠けている僕に、生活が軌道に乗るまではそれらの援助をする。そして平塚礼二が現在所属している大学院の入試を受けられるように紹介状を書く。更には戸籍すらままならない僕の宙ぶらりんな状況を何とかする。一度その気になつたら突っ走るタイプの彼は、言つてしまえば記憶の繋がりに以外は全くの他人とも取れる僕に対してその全てを有言実行してくれたのだ。

「まあそう言うなって……」父さん」

「おいいくら養子縁組結んだからってその呼び方だけは本当に止める」

准教授と同姓同名で義理とは言えども父子の関係。現代日本にきて戸籍もクソも無かった僕が早一か月後には強力なバックグラウンドを持つに至れたのは、幸運以外の何物でも無いと今でも思い出すたびに感じている。

ところで論文を書く場合、著者名に「H i r a t s u k a R.」が並ぶことに成りかねないが怪しく見られはしないだろうか。少なくとも自分なら思わず二度見をするだろうから不安である。

* * *

時刻は12時。いわゆるお昼時というやつであり、今からキャンパス内の学食へ赴こうとすればもれなくわんさかと集まる学部生の波に揉まれることとなる。普段ならばグツと堪えて人足の遠のく13時以降に向かおうかと考える所だが、週末の今日という日にはそんな甘えは許されぬ。奨学金を人質に取られた僕は、学部生の実験授業にアシスタントとして就くことを半ば強制されている。その実験授業が午後の一コマ目から入っているおかげで、時間を外した食事に赴くともれなく授業の時間からも外

れてしまうのだ。

三週連続で我々のラボが担当する実験が続いているのは少々やりすぎなのではないかと思うこともあるが、アシスタントとしての業務は別に嫌いではない。昔こんなのやったなあと生前の記憶を思い出しながら、毎度学部生が四苦八苦している実験をサポートするのは案外面白いものだ。外人ですよと言わんばかりの見た目のせいで初回こそは質問されることは少なかったものの、適応力に富んだ学生たちは日本語が通じると分かるや否や積極的に僕に話しかけてくれたのも一因かもしれない。

「カツ丼と味噌汁お願いします」

「あいよー」

おぼちゃんの威勢のいい返しを聴いてふと思う。最近になってようやく衆人の視線に晒されながらも堂々とカツ丼を注文することが可能な豪胆さが身についた気がする。

しかし見た目のおかげでどうにも注目されることが多い。最初は自分が自意識過剰なだけだと信じて心の平穏を保っていたが、指を差されて内緒話に花を咲かせる者共を何度も見かければどうしようもない。まあ流石は東京でもトップクラスの大学と言ったところか、勝手にスマートフォンで写真を撮り始めるようなモラルに欠けた学生が現れない辺りしつかりした教育を受けているのは分かる。

「カツ丼と味噌汁、合計で478円だよ」

「RAMOSでお願いします」

混雑したレジで時間を掛けないようサツと多機能磁気カードを取り出せる程度には、僕は周囲に配慮を配れていると思う。財布をバリバリ言わすでもなく軽く機械にかざすその一振りだけで決着がつく辺り、もっと皆もRAMOSを切符以外の方法に使うべきだ。

そんなこんなで会計を終え、次の試練は椅子の確保だ。長机が並べてあるこの空間には大量の学生で賑わっており、結構な割合で友達と食事に来ているような集団が纏まって座っている。一番混み合う正午近い時間にまとまって空いているスペースは少なく、僕のような一人で食事に訪れる客はそうした集団の間に作られた空席に座ることが多い。

なんとか空いてる席を見つけて腰を下ろし、両手を合わせてカツ丼に箸をつけようとしたその時。軽く肩を叩かれて何事かと思ひ振り返ると、髪の毛を茶色に染めた若い男が、チャラそうな見た目に反して申し訳なきような顔を此方へと向けていた。

「あの……すんません。1つ左にずれて貰っても良いですか？」

「……構いませんよ」

どうやら僕の座った席の隣には、サークルか何かの集団が座っているようだ。見ればお盆に定食を乗せた状態で立ち尽くす女子の姿があり、どうやら集団に混じって座りた

いのだろう。直接隣に座っている訳ではない彼がわざわざ言いに来る辺り、この集団内でのまとめ役か、もしくは後輩でパシリをやらされているかのどちらかだろう。

割りばしを割った後に退けと言われたため一瞬ムツとした表情を浮かべてしまったが、彼が苦勞人ポジションに収まっているような気がしてならなかったため、ここは快く譲つてあげることにする。

「あ、ありがとうございます!!」

「いえいえ、お気になさらず」

お盆を持ち上げて隣の空席へとずれ込む僕に、彼は三回ほど頭を下げてくれた。そしてどいた席に例の女子が座るのかなと思いきや青年が集団の真ん中付近の椅子から自分のお盆を空席へと移し、新たに空いたスペースに女子が何のためらいもなく腰かけて、軽く青年に礼を済ませるのも束の間にすぐに集団の面々と雑談を始めてしまった。あまりにも鮮やかに行われた一連の下種い動きに思わず僕も目を見開いてしまう程だ。

「……君も大変だね」

「アハハ……まあ頑張るッス」

あまりにも女子鼻息というかなんというか。この集団は崩れる時は一瞬だろうなと思いつながらぼそりと青年に話しかけると、彼は軽く苦笑いを浮かべていた。

まあこの青年もグツと耐え忍んでいればいつかは大物になるだろう。なんとたって日

本語どころか英語も通じるか分からないような見た目の銀髪真っ白肌ブルー目の色物に、失礼を承知の上で退いて下さいと頼み込む程の豪胆さがあるのだから。少なくとも通り魔に刺される直前の僕には不可能な芸当だ。そしてどう見ても自身より年下で身長も平均よりは低い僕に敬語を使ってきたのも高得点だ。頑張れ青年、負けるな青年よ。

さあ食事再開だ、ともう一度割りばしを手に取った僕の前に、ドカツと腰かける音が響いた。

まあ空いている席も少ないことだし、がさつに座るのは少々いただけないが小さなスペースに人が詰まっていくのは別に不思議なことでもない。特に気にするそぶりも見せずにカツ丼へ箸の先端を付けようとしたその時、前に座ったと思われる人影は腕を伸ばして僕の頭を小突いた。

「ちよつと無視しないでよ」

人様の食事を邪魔したのはどこのどいつだと顔を上げて確認してみたら、目の前に居たのは肩ほどまで伸ばした光沢を放つ赤紫色の髪を揺らしながら不満げな表情を浮かべた美人さんだった。

「出たな重金屬。君が居ると目立つから向こうの方で食事を取ってもらえるとありがたい」

「金属言うな!! 目立つっていったらアンタの銀髪も相当なモンでしょ」

赤紫色と銀色。この日本では真夏や真冬の有明に行かなきや早々見つからない組み合わせが成立してしまつたおかげで、食堂内の注目度が急激に上昇した気がしてならない。隣の苦勞人青年君も呆氣に取られた様子で僕と彼女を交互に見渡している。

カラフルな重金属の元素を髪の毛に取り込んでいる疑惑があるこの少女は、我がゼミの新入学部生であり、同時に信じられない話だがなんと僕と同郷の人間である。

その2

この少女との遭遇は凡そ一年前までさかのぼる。確か日曜日に研究室に訪れた僕は、普段と同様実験で得られたデータをパソコンで整理をしていた。そうして訪れる昼の時間、さあ何を食べようかなと考え始めた僕にゼミの同期がニヤニヤした様子で話しかけてきた。

「礼ちゃん、コンビニへ行こう」

「……まあ今日は特に行きたいところもないから良いけど、藪から棒にどうしたのさ」「礼ちゃんは土日だとちよつと遠出して昼を食べているんだよな。良いことを教えてやろう。今日コンビニに行くと幸せな気分になれるぜ」

ウキウキした様子で話しかけてくる同期の話を纏めると、この建物の近くにあるコンビニエンスストアで最近かなり美人のバイト店員が入ってきたそうだ。その美人さんとやらは基本的に土日にシフトを入れているらしく、世間一般における休日くらいは美味しいものを食べたいという欲を出す僕は研究室近くのコンビニに訪れるようなことも無いため今まで気が付かなかった。

別に僕は面白いという訳でもないが、確か彼女持ちだったはずの同期がここまで浮か

れた様子で話すということには興味を惹かれた。どうにも今日は遠出をする気にもならないし、食事を買に行くついでに冷やかしがてら見てくるのも悪くはないだろう。こっちの色物臭い見た目で相手が絶句すれば、それは僕の勝利ということにしよう。

パソコンを閉じて作業を中断し、他にも数名のラボ面と共に学生室を出た。キャンパスの外れに位置している我がラボの入る建物からは、裏門を出てすぐにあるコンビニに行くのにそう時間は掛からない。

歩くこと数分、全国展開されているおなじみの看板が目に入った。僕は足早に自動ドアをくぐり抜けると冷房の効いた店内でまず深呼吸をした。そして一服を吐いた頃にここに来た目的を思い出してレジの方向に目を向けたが、そこにはおばさんが一人レジを打っているだけだった。

「……言いたくはないけど、彼女さん泣くよ?」

「ち、違うって!! 本当に外人な見た目の美少女さんがいる筈なんだけどなあ……」

外人さんな見た目の僕からしても、流石にレジで仕事を続けるおばさんは異国風な見た目にも、ましてや美少女にも見えやしない。同期にしても予想外の事らしく、危うく彼にババ專のレットルを張ってしまう所だった。

臨時にシフトを外れたか何かだろう。まだ見ぬ美少女との遭遇を潔く諦めて、ぶーぶー文句を垂れる同期達を放置する。まずはおにぎりコーナーを物色しようと足を進

めた僕は、店内の奥へ目を向けて、思わず絶句した。

光沢を放つ淡い赤紫色の長髪、肌は外人にしても真つ白でしみ一つない。こちらに視線一つ寄越さずにいらつしやいませと言う声は、ただの定型文にもかかわらずまるできめ細やかな絹のように優しく耳を刺激する。

そんな絶世の美少女さんがおにぎりを柵に並べている物だから下手に近付くことも出来ず、そしてその姿にどこか嫌な予感を張り巡らして静止した僕の後ろから、同期が得意げな様子で話しかけてきた。

「どうだ、本当に居たる？ すんごい美人さん、まるで深夜アニメか何かから出てきたようだぜ」

「……君みたいな人間でも彼女が持てるんだから、この世の中は間違っていると思うよ」同期の言葉を軽く流しながら、再度僕は彼女の方へ視線を移す。

大方客から美人だ云々は言われ慣れてきているのだろう。見物している僕たちを全く意に介した様子もなく彼女は作業を続けている。たしかに外人のような見た目だし、同期がここまで褒めちぎるのも分からない話ではない。ないんだがなあ。

「俺はこの大学にきてからここまで美人さんを見たことは無いね。あ、琴葉ちゃんは除くよ」

「お熱いことで……まあ、確かに美人だね。まるで”この世界”の人間じゃないみたい

だ」

その瞬間熱心に作業をしていた筈の彼女は、まるで凍りついたかのように止まった。

「へえ、不思議な褒め方をするなあ礼ちゃんは」

「そして魔法とか普通に使つてそんな国で王女とかやつてそうなくらい美人さんだね」

どういう原理か知らないが彼女の髪が一瞬跳ね上がり、ギギギと擬音が付きそうなほどぎこちなく僕に視線を向けてきた。

「ねえ、あの人は土日しかシフト入つてないんだよね？」

「そのはずだが……もしかして礼ちゃん一目惚れしちゃつたかな？」

「逆だよ逆。これからは絶対に平日しか来ないようにする」

おにぎりはしようがないので諦めて適当にそこらへんの菓子パンを引つ掴んでレジへと向かう僕に、同期は啞然としながら立ち止まつてしまった。だつて明らかに地雷じゃないか。特徴的な淡い赤紫色の髪色に加えて、それっぽいワードを言つただけで明らかに動揺した様子を見せるなんて。

僕がまだこの現代日本に復帰する前、お情けで大貴族の子供が集まる園遊会に参加させて貰つたことがあつた。相変わらず後ろを付いて離れる様子の無い妹の手を握りながらなるたけ邪魔にならないよう会場を歩き回つていた僕は、国内でも有数の貴族の子供を多く観察出来た。その中でも最たる家柄の子供が、現国王のまだ幼い娘だった。

僕よりも一回り歳が大きいと思われた彼女は、王族の証でもある淡い赤紫色の髪の毛を持つており元気に園遊会を楽しんでいた。当時はそういう人間もいるものかと遠い目線で見っていたが、その園遊会が終わってからすぐに王女が行方不明になったとの知らせが国中を走った時は大層驚いたものだ。まさかとは思うが、王女が誘拐されたのではなく僕とは別ルートで現代日本に転移していたら、彼女は丁度目の前の女性と同じくらしいの年になっているのだろう。

ただ僕は同郷のよしみだからといってわざわざ知り合いになろうなんて気は起きなかった。僕は此方の世界で満足できる生活基盤をもう築きあげており、無理に異世界を思い出すようなことはしたくないということもある。それにもかかわらずたら本当はただの外人の美少女で、日本のサブカルチャーに精通した中二病患者なのかもしれないのだ。藪をつついて蛇を出す必要性は感じられない。

「ちよ、ちよつと待つて!!」

待ちません。既にレジのおばさんに菓子パンを渡して鋭くRAMOSを構える僕には、後ろから聞こえる声なんて届かない。

『待ちなさいってば!!』

しかし再度響いたのは明らかにイントネーションが日本語とは違い、昔懐かしの言語に思わず振り返ってしまった。店員の制服を纏ったエルトニア王国の王女と思わしき

彼女は、振り向いた僕に得体のしれない物を見るかのような視線を向けている。

『あなた、一体何者？』

『……日本語で言ってくれないとちよつと何言ってるのかよく分からないです』

異国の言語で日本語じゃないと分からんと発言する矛盾も甚だしい一言を残し、納得などするはずもない少女へ振り返ることも無く僕はコンビニエンスストアを後にした。

自分のデスクに舞い戻り安っぽい味のコッペパンに齧り付いた時、ようやくラボ面を放置して戻ってきてしまったことを思い出した僕は、少し遅れて血相を変えて学生室に突入してきた同期に開口一番「ごめん」と漏らした。

ここで終われば事の発端でも何でもないが、生憎そう簡単に終わる話でもなかった。

コンビニから帰ってきたラボ面達にあの子とどういう関係なのだと色々問い詰められたが、僕の怪しげな髪の毛の色に何らかのシンパシーを感じたのだろうと適当にホラを吹くことで事無きを得た。いざこざは結局夕方までには立ち消え、日が沈むよりも前に帰り支度を終わらせた僕にまだ同期が何か言いたそうにしていたが特に相手をすることなく部屋を出た。

時代を感じる建物、その一階には特に需要も無さそうな長椅子が並んでいるエリアがある。多分研究室間の交流が行われることを理想として設置された空間なのだろうけ

ど、そもそもその一角に人が座っていることすらほとんど見たことがないのが実情だ。階段を下るとそんな無意味に見えるエリアに繋がっており、建物の外に出るには無駄に長椅子スペースを歩かされることになる。出来れば自動販売機の一つでも置いてほしいところだが、義理の父親こと平塚准教授がじきじきに建物の責任者に苦言を呈しても変わらないのだ。最低でも今後5年は叶わないだろう。

「……あ」

そんな薄暗く死んでいるスペースにも、驚くべきことに今日は誰かが居るようだ。椅子に腰かけてうつらうつらと船を漕いでいた人物は、僕が通りかかったのを見た瞬間顔を上げて小さく声を漏らした。

「ふああ……急いでこっちへ向かってきて正解だったわ」

「ええと、多分人違いだと思いますよ?」

「流石にアンタのような見事な銀髪頭がこちらへんに他にも居るとは思えないんだけど」

欠伸と伸びをして立ち上がり、やや不満げな顔を浮かべる彼女の背丈は僕とほとんど変わらないくらいか。義父、というか前世の僕は余裕の180超えだったにもかかわらず、今の僕は背丈が170をやっと超えたくらいで収まってしまっている。そう考えると彼女は平均的な女性の身長よりは高めなのであろう。

果たしてどう言い訳をして逃げようかなと思案する僕の顔を覗き込んだ彼女は、無遠慮にじろじろと人の顔を眺めてくる。見せモンじやねえぞと怒ってやりたいところが、昼間に僕を含めたラボ面一同で彼女を見物しに行ったことを思い出すと何も言うことが出来ない。

「……なんでこの建物だと分かったのかな？」

「アンタと一緒に来ていた背の高い男の人に聞いたのよ。5号館の研究室に所属してるって」

「やっぱりね。あんにやろ崇ってやる」

見える訳もないが頭上を見上げて貴様よくも人の情報を易々と渡してくれたなあと邪念を飛ばす。

「そんなことはどうでも良いの。アンタ、名前は？」

「平塚礼二といいます。今日はお疲れ様でした」

「帰るなつての。それとそつちの名前じゃない」

仕方なく名乗った直後に脇を抜けて帰ろうとしたが、それを許さない彼女に腕を強く引っ張られて危うくずっこけるところだった。自慢ではないが中性的な見た目に違わず貧弱な体力を誇る僕だ、下手をすればこの少女よりも力は弱い可能性がある。掴まれた腕を振りほどかないのは別に僕が紳士的であるからというだけではなく、力負けして

振りほどけなかった場合を想定してのことである。

そしてそっちの名前じゃないと来たか。エルトニア周辺国の共通語を喋った辺りからほとんど確定したも同然だったが、この言葉で更に彼女が現代日本由来の人間ではないという確信が深まった。

「……ラストイレイ・フォルガント。これで満足かい？ 呼ぶときは今の名前で頼むよ」「うん!! 私にはヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニア。こっちの世界じゃ藤沢レナと名乗っているわ」

ようやく嬉しそうな声を上げて喜ぶ彼女の姿を前にして思わずドキリとさせられる。笑顔を浮かべたる魅力的な美少女さんがすぐ目の前にいるということも恥ずかしながらあるが、一番の理由は彼女の名前の中に含まれてるエルトニアというフレーズだ。

基本的に第二の祖国エルトニアでは国名を苗字に持つなど王族にしか許されないことを考えると、この名前を信用するならばやはり彼女は行方不明になっていた王女として間違いはないだろう。

こんな快活な少女が、僕みたいな妾の子供だと前の世界じゃ並び立つことも許されないような王族の系譜なのか。想像した通りの大物に、なんだかよく分からない恐怖感と感動が心の中に巻き起こる。

「藤沢さん、ね。一応確認のために聞いておくけど、君はエルトニア王国出身だね？」

「勿論。あとレナでいいわよ。多分私の名前から察してくれていると思うけど、その国の王女をやつてたわ。8年くらい前に日本に飛ばされてきたんだけどレイは？」

「僕は来年の冬で5年になる。てかレイってアイツのリスペクトかよ」

レイと呼ばれるとすぐにニヤニヤと笑う長身の同期が脳裏にポツと浮かんでくるのが非常に腹立たしい。だがラスティという今の名前とは似ても似つかないあだ名で呼ばれるよりマシかもしれない。

「こんな薄暗い所で話すのも嫌だし、ムックかどこかへ移りましょ」

「僕の本拠地を薄暗いとはご挨拶だな。大方同意するけど」

昔は確かに王女様だったのかもしれないが、そんな彼女の口から大手のファーストフード店の名前が出てくるなんて随分と世俗的な生活に染まったようだ。コンビニでバイトをしていたりなど現代日本に馴染んでいるように見える足早に建物を出て行くとする彼女を、僕は追おうとはしなかった。

「ええと、レイ？ 早く行きましょうよ」

「ねえ藤沢さん。君は僕と何を話そうとしているんだい？」

その言葉を浴びせた途端、笑顔が浮かべていた彼女の表情が固まった。

「僕は今の生活に手いっぱいだ。先ほどコンビニで君を置いていったのは、そこそこの人生を捨ててまで現代日本に来れたのに異世界事にまた引きずり戻されるんじゃない

かって思ったからなんだよ」

「れ、レイ？ アンタ何を言ってる……」

「初対面の君と僕。話す内容はおのずとこの日本から外れるだろう。君はもとの世界に帰りたいのかもしれないが、現在の生活に満足している僕は今更無理やり過去を振り返りたくはないよ」

過去を振り返るとなると、僕の胸の中にはエルトニア王国で過ごした12年が脳内に走馬灯のように蘇るのだろう。

精神的には日本生まれ日本育ちを自称する僕だが、再度人生のスタートを切ってから長い間を過ごした異世界には望郷の念を抱くこともあるのだ。そしてただ望郷の念を抱くだけならまだしも、その故郷に帰れないことが明確であると分かっている以上、羨望は満たされない物として心の中に積み重なっていくだけだ。

「君はどうだか知らないが、僕は特異点と呼ばれる場所で有りつ丈の魔石を用いた転移魔法を使うことでこちらの世界に来れたんだ。魔石をほとんど使い切った今、体に保有された雀の涙程度の魔力じゃたとえこちらの世界で特異点を発見できても帰ることは出来ないよ」

「……私だって、別に元の世界に帰りたいからアンタに頼ろうとしているわけじゃないわよ!!」

「そんなことはバイトしたりムックへ行くなどこの社会に適應している君を見れば何となく分かる。そうだとしても、やはり異世界事となると僕には辛いものがあるんだ。この世界に満足しているからって、別にあの国への愛着が消えて失せた訳じゃあない」

満たされない欲望ほどもんどろくさいものは無いと思う。それにただ祖国への愛着が問題になつてゐるわけではない。

「僕は元の世界に妹を置いてきた。先が見えない異界に彼女を連れて行くのは危険過ぎたからだ。そして書き残した手紙には必ず会いに戻ると記したんだ」

「……アンタは自分の意志でこっちに來たつていうこと？」

「そうさ。僕は自分の意志で故郷を捨てて、そして妹を捨てたんだ。飛んだ笑い話だろう、再会が果たせるなんて保障は何処にも無かつたのにまた会うなんて絵空事を記すなんて」

僕はため息を漏らしながら長椅子へと腰かけた。書かなければ良い物を、妹を安心させるために記した一文は永久に僕の肩に重く押し掛かつてゐる。それを思い出すと、そんな希望を持たせるようなことを書かなければよかつたと後悔の念に駆られてしまう。「多分君も元の世界に帰る手段は知らないんだろ？ そんな二人が届きやしない過去の話に花を咲かせたところで、結局は虚しい気持ちにしかならないよ。お互い今の生活が軌道に乗つてゐるんだから尚更だ」

「……私は新月の夜に王宮の一角にあった禁じられた間に入ったらこちらの世界に飛ばされたわ。直前に誰になんの言葉も残すことも出来ずにね」

僕の脇に藤沢さんが腰かける。随分突き放したというのに彼女は怒って帰るようなことも無く、僕の傍を離れようとする素振りも見えない。

「未練も何も残せずにごつちに来て、8年も経ったのよ？ 過去を思い返したところで、今の生活を捨て置いて帰ろうなんて思わないわ」

「……じゃあ何で僕に近付こうとするんだい？」

「簡単な話よ。初めて絶対に信じて貰えないような秘密が共有できる人を見つけることが出来たから」

言葉の響きにドキリとして彼女に顔を向ければ、あんなに酷いことを言った僕に向けられているのは優しげな笑顔だった。不意打ちの笑顔を前にして、自分の顔が段々と熱くなつていくのが分かる。

「場所も言葉も分からない、そんな私を保護してくれた優しい老夫婦がいたわ。でも彼らにも秘密を打ち明けられないまま8年が過ぎてしまった。秘密を抱き続ける苦しみ、今まで何度も思い知らされてきた」

考えてみれば、僕には日本へと転移した直後から秘密を打ち明けることが出来た存在が居た。自分自身ということもあり遠慮をせず接していける平塚先生のような存在が、

彼女には居なかつたのだろう。地球儀を見渡してもどこにもない国からやつて来たという秘密を、彼女は只管自分自身の中に隠し続けてきたのだ。

「そんな難しい話じゃないわ。アンタの悩みを聞いてあげるし、私も時々愚痴を漏らすかもしれない。だから……友達になりましょう?」

「……君はよくコミュニケーション力高いって言われるだろ?」

「ちよ、ここでそれを言う!? そ、それに色々話せる友達なんてそんな……ともかくどうなの!」

慈悲深い女神のような顔から一変してあたふたと慌てる藤沢さんの様子に、思わず僕は小さく吹き出した。過去について腹を割って話したり秘密を共有したりする。それらが行き場の無い故郷への羨望に繋がるかといえ、必ずしもそうなるかは分からないかもしれない。

前世も含めれば義父と同じ年を生きておりながら、こんな少女に諭されるなんて僕はまだまだ見た目相応の子供だなあと自嘲した。そしてあたふたする彼女に手を差し出した。

「これから色々考え直してみようと思う。こんな僕でも良いのなら、友達になろうか?」
「……ふふつ、こちらこそ!!」

手を握りながら改めて彼女と目を合わせた僕は、少し首を傾けながら微笑みかけた。

すると藤沢さんは分かりやすいくらいに顔を真っ赤にしながら手を離れた。

伊達に4年間同期の男にちゃん付けで呼ばれているわけじゃない。銀髪真っ白肌ブルー目の僕が一度天使の微笑みを浮かべれば、同期は何故か頭を撫でて来るし義父は見えない物を見直してしまったような苦々しい表情を浮かべるのだ。ここは僕が一枚上手だったな。

「……因みに僕はこう見えて38歳のオッサンだ」

「え、どういうことよ!？」

「そしてなんと博士の2年だ」

「私よりも先輩だった!？」

それから調子に乗って色々とかミングをした結果、半ば混乱した様子の藤沢さんにムックまで引きずられて根掘り葉掘り問い詰められる羽目となった。

その3

「得意げな様子で君が研究室見学に訪れた時はどうしたものかと思つたね」

「別におかしな話でもないでしょ。研究分野に興味があつたんだから」

そんな未知との遭遇から一年後、当時学部三年生だった藤沢さんは転科をしてまで我が栄光なるゼミへと進学してきた。そこそこ人気な研究室であるウチに転科して入れたということは、相当成績が良かったのだろう。

まあ我がラボに入ってきたのは良い。熱心に新しいことを学ぼうとする姿勢は評価できるし、明るい性格のおかげで学生室の雰囲気も何となく明るくなったような気がする。見た目のおかげで敬遠されるのではないかと心配もしたが、そもそも新入生以外は僕の見た目に慣れていたため髪の毛がメタリックな外人風の彼女に対して壁を作ることはなかった。そんな彼女に対して、僕は一つだけ不満を抱えている。

「しかしマンガン娘よ、そろそろ僕に敬語を使い始めても良い頃じゃないかな」

「研究室じゃ敬語を使っているじゃない。それとマンガン言うな」

一応、本当に一応だが彼女はゼミ内では僕に対して敬語を使っている。しかし他の人に聞かれていないことが分かるや否や敬語を即投げ捨てるし、更には我が同期は僕と彼

女が普段敬語を使った会話をしていないのを多分察知しているのだろう。藤沢さんが敬語で僕に話しかけている脇で口元を押さえてニヨニヨと笑う同期を僕は幾度か目撃している。

「問題です。僕は博士3年、君は学部4年。先輩はどっちでしょう」

「ところであなたは16歳らしいわね。私は20の大病が見えてきたんだけど」

フンこの年増がツと漏らせば彼女が手に持つフォークが飛んでくる恐れがあるため、危機回避能力に長けた僕はぐつとこらえる。

20に満たない歳で学部4年というチート臭い頭脳を持った彼女と、多分17歳で博士号を取得予定の胡散臭いを超えた何かを持つ僕。彼女の言い分としては、学年的には下であっても実年齢が上回っているからイーブンという事なのだろう。精神的な年齢で言ったら僕は研究室ナンバー2と同じ歳なのだが、彼女はそれをスルーしているようだ。

「僕は実のところ平塚先生と同年齢だけど、果たして藤沢さんは先生にもタメ語でいけるのかな」

「うっ、それは出来ないけど……でもアンタだって先生に対しては人目が無ければ敬語無しでしょ？」

「流石に自分自身と話す際は特殊事情だからノーカンで」

井ぶりの下の方には、たれと融合して新たな存在へと転生を果たした米粒が待ち構えている。ここから井を引つ挿んで一気にタレ付き米粒を頬張るのがマイルトレンドだ。

もぐもぐと口を動かす僕のの前では、不満げな藤沢さんがまだ何かを言いたそうに此方を見ている。こんな押し問答をしたのは一度や二度の話じゃない。結局折り合いが付けられないまま会話が自然に終わるのが常だ。

「別に今更氣にすることもないでしょ？ それに、わざわざ隔たりも作りたくないし……」

「あ、デレた」

「い、いちいち茶化すなバカ!!」

彼女が少々恥ずかしそうにした瞬間を逃さずに茶々を入れると、面白いくらいに顔を真っ赤にして怒り出してしまった。そして目立つ見た目のザ・メタリックヘアな藤沢さんが大きな声を上げるものだからさあ大変、僕らの会話を見物していた不届き者共の視線が一段と増したのが何となく分かる。

藤沢さんはどうやら目立つということに慣れてるようで、周囲からチラチラと見られても特に気にするようなことは少ない。多分王女という生まれのせいで幼いころから目立つことに関しては抵抗が少ないのだろう。だが小市民な僕は視線に晒されるとどうにも背中中の辺りがむず痒くなる。今の状況は僕としてはマズイから早急に場の空気

を収めねばならない。

「ま、まあ敬語云々は一旦良いや。カツ半切れあげるから機嫌を直そうか」

「別に要らないわよ……そういうえばレイは進路決めたの？ 小田原さんは企業の内定を取ってるって話だけど」

小田原さんというのは最初に僕をちゃん付けで呼び始めたあの不屈き者の同期である。僕と同じく来年で卒業できる見込みのついた彼は既に一般企業の内定を受け取っており、昨日も見学会やら内定者懇親会があるとかでゼミを休んでいたはずだ。

「そういうえば君にはまだ話してなかったか。僕は今のところ内定の申請中さ。企業じゃないけどね」

「アンタみたいな未成年でも応募出来るところがあつたのね。それでどこ？」

「未成年で博士号なんてももの凄いレアキャラなんだぞ、馬鹿にすんな。応募先は君もご存じココだよ」

指で机をチョンチョンと指し示すと、一瞬困惑したような表情を浮かべた彼女は、徐々に本気で憐れむような目線を向けてきた。

「レイ……いくら取ってくれるところが無いからって博士号持ちで学食勤務はどうかと思おうわ」

「馬鹿だろう君は。流石にそこまで才能の無駄遣いをする気はない。学生食堂じゃなく

て、ここの大学ってことだよ」

おぼちゃん達に混ざってカレーの盛り付けをするドクター卒の未成年碧眼外人ボーイなんて無駄に濃いキャラにはなりたくはない。数学科を卒業してソムリエとなった人間も居るらしいが、それは専攻として異常過ぎるだけだから参考外だ。

「この助教に応募をしているのさ。特別募集ということもあつて募集人員がかなり少なかったけど、何分“こつち”に戻つた理由が研究活動をもう一度やりたいつてことだから夢は捨てないよ」

「じゃあもしかして勤務先は、今の研究室のままだったりするの?」

「いや、助教になろうが内定漏れでポストクになろうが今んとこ平塚先生の下に就くことにはなつていない。来年度以降あのオッサンは今の研究室から独立するから、僕も来年はおさらばだね」

そこそこの規模を誇る我が大学は、どうやら大月の方に新しいキャンパスを作ることに関心があるらしい。着工状況は知らないが、色々な研究室から人員を引き抜いて来年度から本格的に新キャンパスを運用するとかしらぬか。その引き抜かれた人員の中には僕のカタワレこと平塚准教授も含まれており、彼に師事することが確定している僕も来年度から自動的に山梨の僻地に流刑予定だ。そんな僻地で十分に経験を積み、更なる新天地への栄転が現状の夢である。

勿論今暮らしているアパートは引き払わなければならない。大学近くに構えた今の住まいから大月へ向かおうとなると、どんなにうまく列車をやり繰りしても二時間はかかるのではないか。必要な時間が三十分足らずで済んでいる今の状況と比べると信じられない増加幅だし、僕はそんな通勤時間を連日味わいたくはない。

「え……せつかく大学に残るのに、離ればなれになるんだ……」

「別に確定したわけじゃないよ。先生は手持ちの学生たちの中で希望者は連れて行くらしいし、今度一斉に聞くらしいから君も希望すれば未知のキャンパスに来れるんじゃないかな」

未知のキャンパスなんて洒落たことを言ってみたが、本当に未知なのだから始末に負えない。見学の申請でもしてみようかなと本キャンの窓口を訪れたら見事に突っ返されるし、ネットで検索を掛けてみてもうちの大学が新キャンパスを作るなんて話は全く出てこない。

実は壮大な釣りなんじゃねと思ってみても、現に平塚先生が上から聞かされているなどと話しているため、どういう目的があるのかは知らないが秘密裏にことを進めているのだろう。

「未知ってアンタ……でも良いことを聞いた。来年から私も新キャンパスに行くわ」

「ゆっくり考えた方が良いと思うけどね。情報がそんなに無いんだし、青春最後のひと

時を大月で終えるというところでもないリスクもあるんだしさ」

大月とはまた遠い所にキャンパスを作ったものである。八王子程度なら東京の中心街に行くのにさほど苦勞はしないだろうが、県境を通り越した更なる奥地である大月ともなれば難儀するだろう。いつそ甲府に作ったほうが、生活の利便性ははるかにマシだろうに。そもそも頭に東都と記した大学が都の外側にキャンパスを作るとするのは矛盾している気がしてならない。

「別に街じゃないからなんて変な理由であきらめたりはしない。研究テーマがアンタと同じ分野なんだから、着いていけるところまで着いていくわ」

「あ、またデレた」

「だからデレてないっての!!」

今度は鋭いチョップが頭を襲う。丁度味噌汁を飲みきって一息をついていた僕に神速の突きを見切ることは出来ず、ぐえあと死んだアヒルのような情けない声が口から洩れてしまった。まあ新しいキャンパスに行きたいと本人が真剣に思うのなら止めはしないし、僕に頼って勉強をしたいというなら鼻高々だし悪い気はしない。勿論今は声には出さないけども。

「いきなり暴力に訴えるのはどうかと思うな」

「アンタが変なことを言うから……それに、友達となるべく一緒に居たいっていうのは

変な話じゃないでしょ？」

「つ……ま、まあ過度な馴れ合いにならない程度なら、好きにすればいいんじゃないかな」

「……ありがとっ」

僕は彼女に対して先輩風を吹かしている節があると思う。そりやあ異世界からやって来たという身の上が共通しているし、前世を含めたら結構な歳になるんだから不思議なことじゃないと思う。だけど今は自分もまだまだ未熟だなあと思い知らされている。精神的な年齢で言ったら二倍近く離れているはずの小娘なのに、不意打ちの素直にはいかんだ顔を目にして僕は歳甲斐なく頬を染めてしまったのだから。

軽くせき払いをすると、僕は足早に椅子から立ち上がり空になったどんぶりを乗せたトレーを持ち上げた。早く学生実験室に行かなければアシスタント業務に支障が出るからであり、別に場の空気に耐えられなくなった訳じゃない。

* * *

「さてと、今日はもう帰るかな」

学部生の実験手伝いが予想以上に長引いたため、我がラボへ帰ってこれたのは日が落

ちてからかなり経ってからだった。研究室内に残っている人間は疎らで、流石にこの時間になってしまったら今から自分の実験を始める訳にもいかず、きりが良いこともあるので帰ることに決めた。

荷物を適当にポイポイと鞆へ詰め込んでいく。至急読まなければならぬ論文や資料以外はデジタルデータとしてパソコンに保存しており、住居とラボがそこまで離れていないこともあるため、基本的に行きかえりで運搬する荷物はそこまで多くはない。

「あ、待って。私も帰る準備済ませちゃいます」

「まだ残っているなんて、学部生だからあまり無理をしなくてもいいのに」

「別に無理はしてないです。でも知識がどうしても足りないんだから可能な限り詰め込まないと」

他の学部生が全員帰っている中で、どうやら藤沢さんだけは学生室に残って論文を読んでいたようだ。土日という連休を眼前に控えた金曜の夜遅くまで残っているのは感心だが、無理はしない方が良いと思う。四苦八苦した様子で中々読みなれていないであろう専門用語が並んだ英文書に目を通していた彼女は、僕が帰る準備をし始めると便乗して荷物を纏めだした。

部屋には他にまだ学生が残っているためか、感心なことに彼女は忘れずに僕へ敬語を使っている。これをぜひ人に聞かれていない場所でも徹底してほしいものだ。ただし

ナチュラルと一緒に帰ろうと言い出すのはお兄さんどうかと思うな。同期のニヨニヨな笑顔が最近更に深みを増しているのは気のせいではないだろう。

「……学部時代の僕よりも君は随分と勉強熱心だね」

「先輩の学部時代って……もしかして」

言葉を続けそうになった彼女の前で首を振ると、周りにまだ学生が残っていることを思い出してくれたのか慌てて口を閉じてくれた。

僕が学部生だったのは生まれる前の人生での話なわけで、それこそ二十年近くも前になる。当時はまだこの建物もキャンパス内を見渡した中では比較的新しく、来たるべき二十一世紀がどうたらこうたら言ってた時代だった。別段成績優秀者というわけでもなかった僕は、新設されて間もない今の研究室に進学した当初はそこまで研究に熱心なわけでは無かった。

一年間研究室の空気に流されるように勉強を続けるうちにようやく自分の研究内容の面白さに気が付き始め、研究生活がやっと軌道に乗り出した修士一年目の中盤辺りに、通り魔に襲われた平塚礼二は「僕」として異世界へと飛ばされたのだ。これじゃあ意地でも帰ってきたくなる。

一方で平塚礼二という存在は実際のところ通り魔事件では死んでおらず、事件から立ち直り勉学に復帰した行く末が我が義父である。今まで言ってきた学部時代における

僕の生活態度は全て平塚准教授にも当てはまるのだ。僕の特殊な事情を知る藤沢さんは、研究に人生を見出したような義父が実は学部生の頃はそこまで勉強熱心ではないことを信じられないのか少々驚いた様子だ。

「僕という人間は、好きになつた物事にはのめりこむけどそうじゃない物には最低限の労力しか向けないタイプだからね」

「……信じられないけど、まあそういう事にしておきます」

気が付けば彼女は帰る準備を既に終わらせており、中々スリープモードになつてくれない我が愛機のおかげで逆に僕が彼女を待たせているような構図になつてしまつていた。動けよこのポンコツがア!!とPCに手を這わせれば、異常な熱と共に異音を響かせるファンの振動が手へと伝わり思わずあんどりと口を開けてしまった。

「どうしたんですか?」

「このアホの子ももう限界かもしれない。悲しいなあ」

半ば達観した笑顔を浮かべながら、一向に止まる気配のない我が愛機の電源ボタンに指を乗せる。僕だつて非情なこととはしたくない、でも言う事を素直に聞いてくれない君が悪いんだよ?

「安らかに眠れ、バイオンちゃん」

「……馬鹿やつてないで早く行きますよ」

いくら語尾が敬語だとはいえ、その物言いはどうかと思うんだ。残された最終手段である電源ボタン長押しで異音を強制終了させると、まだ熱の残ったパソコンをカバーに入れてバッグの中へ放り込んだ。こっちだつてやりたくて馬鹿をやつてるわけじゃない、全ては愛機の造反が招いたことなのだ。

ようやく帰る準備が終わった僕はまだ部屋に残つて作業を続ける面々に軽く会釈をしながら出口を目指した。後ろから着いて来ていた藤沢さんは、ひとたび廊下に出て周囲に人が居ないことを確認するや否や早速敬語を無かつたことにするかのごとく話し始めた。

「やっぱりアンタ相手に堅苦しい言葉は慣れないわ」

「……最低限、研究室ではこのまま続けようか。せめて僕の肉体年齢が君よりも上だつたら名実共に敬語を使つて貰えたかもしれないのに」

もしかしたら男の癖に線は細いわ背も高くないわといった、女装をすれば普通に女子としてまかり通りそうな見た目が悪いのかもしれない。いつかは自分も来たるべき第二次性徴の荒波にもまれるのだろうか。と樂觀視してここ数年が過ぎたが、一向に肩幅が大きくなつたり髭が生えたり声が低くなつたりする素振りが見られないのは果たしてどうしたものか。

下手をすれば藤沢さんに負けかねないほど細く貧弱な腕だけど、これについてだけは

鍛えることで何とかできるかもしれない。しかし生活が結構カツカツな身としては、ジムに行つてナイスボディを手に入れる時間を確保するのは難しいし、そもそも飽きっぽい自分じゃあ長続きはしないだろう。

「……最悪坊主頭にすれば男っぽくなるんじゃないかね」

「急にどうしたのかは知らないけれど馬鹿なことだけは止めなさい」

考え直してみれば坊主頭というのは頭部が均整の取れている形の人間しか得をしな
い博打ともいえるカットだ。じゃあもう少しマイルドなスポーツ刈りならどうなるか
と考えると、妹と同じサラサラと柔らかめの髪の毛じゃスポーツ刈りにしたところで全
部頭皮にへばり付いた悲惨な見た目になるかもしれない。

「男らしいっていうのはかくも難しきかな」

「別にわざわざ男らしく振る舞おうとしなくても良いじゃない。見てくれだって悪くな
いんだし……」

「あ、デレ」

「言わせないわよ!?!」

言い終える前に頬をむにゆりと抓られたために気の抜けた声しか出すことが出来な
かった。最近君からの扱いがどうにも先輩に対する物ではない気がしてならないよ。

そんなこんなで生産性の無い会話に乗じている内に、とうとう建物の玄関口へと辿り

ついた。自動ドアが開いた向こう側からは梅雨の到来を予感させる温かくジメツとした空気が漂っており、草や土由来のすえた匂いが辺りに充満している。街灯の光の中では細かい雨粒が霧のように掛かっており、どうやら研究室で一息吐いている内に雨が降り始めたようだ。

幸い折り畳み傘をいつも鞆の中に忍ばせている僕は、こんな雨にも動じずに荷物をこそごそ漁って傘を取り出した。一応携帯用の折り畳みの傘であるが、そらのコンビニで売っているような安い物ではなく少々大き目のサイズを誇り、無骨な見た目に違わず強風の中でも骨が折れることは今まで無かった優れたものだ。さてこれで一安心と思つた僕は、絶望した眼差しで夜空を眺めるマンガンヘアーを目に入れた。

「うう……今日は天気予報じゃ降らないって言つてたのに」

「せっかくラボに自分用の机を手に入れたんだから置き傘の一本や二本置いてりやいいのに。それに最近は曇りが続いたからね、こういう時に雨が降らないと予想する天気予報は曲者だよ」

「……しようがないわね。ちよつとラボに戻つて共用のビニール傘借りてくる!!」

走つて階段の方へ向かおうとする彼女だったが、それよりも先に僕は藤沢さんの手を掴んでいた。

「れ、レイ? いきなりどうしたの?」

「別に走って戻ることもないでしょ。どうせそんな大した雨じゃないし、一緒に使おうよ」

「え……」

もう一度階段を三階分も往復するのもアホらしいし、さした傘を回しながら何の気なしにそんなことを提案した僕は、少し間を置いた後顔を赤くして立ち尽くしてしまった彼女の顔を見て、ふと自分が実はもの凄く軟派な発言をしているのではないかと思いついた。

「じゃ、じゃあ失礼するわ……」

既にさしてしまつた傘をわざわざ畳んで彼女をラボまで追い返すなんて外道臭いし、ややぎこちなく僕のすぐ隣に歩み寄ってくる藤沢さんの姿を見てると何だか自分までこつ恥ずかしい気分になせられる。いわゆるアンブレラシエアというやつであり相合傘ともいうこのスタイルは、お話で見るとよりもよっぽど両者の距離は近いのか。

綺麗な艶を放つ彼女の髪の毛が僕の肩口に触れ、普段はマンガンを水に溶かしたようだからかいかいもするその髪色がひどく魅惑的に見えてしまつてならない。ちよつぴりの甘酸っぱさと少々の気まずさ、そして勢いに任せての行動に対するリスクアセスメントを怠つたことへの反省が心の中に巻き起こる。

「ハア、若いなあ。ホント青春時代が懐かしいよ。いやそもそも前世じゃあ女子とあま
り話をしたことがなかったっけか。あー枯れてんなあ平塚先生は」

「……バカ」

いくら親しい間柄とは言えども、静かな雨の夜道をほとんど密着も同然な状態で歩く
というのは間が持たない。歩きながらなんとか空気を元に戻す為に思いつく限りの
トークを披露してみるが、隣の王女様はお気に召さない様子で小さく罵倒をしてきた。

第二話 「襲撃!! 迫りくる銀色の影」

その1

「論文投稿の目途がついたな。これが終われば後はもう博論に向けて準備をするだけだ」

「筆頭の学術論文じゃ、卒業前の最後からラス2になるだろうね」

夏は過ぎてさあ秋だ。研究活動に勤しんでいると時間が過ぎるのはあつという間でも困る。

例年には無いレベルの猛暑がだらだらと続いた結果、十月に入ったにもかかわらず一向に秋っぽい爽やかな空気が訪れていない。第二の故郷が避暑地としても知られるような夏場も涼しい場所であり、そんな場所でぬくぬくと育った貧弱ボーイの僕はこの夏冗談抜きで死にかけた。軽い脱水症状のせいで意識を朦朧とさせながら自販機で買った飲み物で命を繋いだ回数は一度や二度じゃない。

茹だるような暑さを久々に体験した四年前の夏場は本当に危なかった。どうせ氷魔法で体を涼しく保てるから平気だとタカを括っていた僕が直面したのは、前世の状態から気温湿度共に数段のパワーアップを遂げた煉獄だった。へたに魔法を使おうものな

らさあ大変、大した効果が望めないのに意識だけはかなりの集中力を必要とされるから逆に頭が熱くなってくる始末だ。

いくら周囲の空気が多少涼しくなろうと照り付けてくる光は防ぐ事など出来やしない。銀色の髪の毛が太陽光を反射してくれるかなとも思ったが、そんな事は全く起こらず。そして少し風が吹いただけで冷気のコーティングが生暖かく湿った空気に置換されることを知った僕は、日本の夏をなめていたことを思い知らされた。

「しかし博論か……」ここまで長かったよ。先生はもう何年も前に通り過ぎた道だろうけど、なんか不思議な気分させられる」

「そうだよな。お前は俺が修論を出すよりも前に分岐したんだから。まあそんな気張るなよ」

目の前に座るは我が分身こと平塚准教授。今自分のやっていることが、もう一人の自分が既に十年近く前に済ませていることなのかと思うと、どうにもすごく出遅れている感じがしてならない。

精神年齢は一緒だし、僕と彼は准教授と一学生という立場にありながら互いを対等な関係と見ることが多い。そんな僕を鏡に映したような存在の彼は、大学での研究に関して言えば間違いない僕よりも先輩なのだ。十二年間異世界で過ごしたことによるブランクは相当大きく、大学院に入ってからここまで出来る限りの勉強や研究を続けてきて

も彼に追いつくなんていうのは夢のまた夢の話だった。

「……敵わないよ、本当に」

「そら、もつと俺に対抗心を燃やせ燃やせ。知識のアドバンテージじゃ俺に分があるけど、お前はまだ若いんだからいつかは俺も超せる時が来るかもしれないぞ」

そしてこういう時に限って彼は少しだけ先輩風を吹かすのだ。自分と同じ性格を持っている彼のことだ、茶化す感じではなく心から追い抜かしてみろと思っっているのだから。

「そうそう昨日発表されたようだが、助教内定おめでとうな。こればかりは俺もお手上げだよ」

「……うん、ありがとう」

そう、彼の言うとおり僕は大学の用意した助教という非常に狭き門をくぐり抜けることに成功したのだ。こればかりは現状で僕が先生に鼻高々になれる要素かもしれない。彼も彼で三十前半で准教授になるという脅威の出世速度なのだが、卒業当初は博士後研究員として下積みしていた時期があったとか。

つい昨日発表された内定者一覧表の中に平塚礼二という名前を発見した時は、思わずドデカい声を張り上げて拳を突き上げたものだ。論文や実験に追われる日々の中で、大学の最高司令部みたいな偉い人たちが集う中で面接をさせられたり選考書類に気を焼

いたりしていたため、その努力が報われて軽くハイになったのである。

「昨日はテンションが突き抜けて、隣部屋の藤沢さんに何事って問い詰められるくらい大声で騒いじやったよ。アパートなのに配慮が足りなかったね」

「……そういえばお前藤沢の隣に住んでるんだったな」

「僕が住んでいる隣に去年の暮れごろ彼女が越してきたんだ。まるで僕が彼女をストーカーしてるような言い方は止めようよ」

僕が住んでいる古アパートは、日が差し込まないとか見た目がボロイとかの理由が積み重なって家賃がかなりお手頃な優良物件だ。去年の暮れごろにお隣さんだった学生が内定を得ることが出来た自分へのご褒美とか何とかで引っ越していったことで空き部屋になったそこを、藤沢さんは見逃さなかった。

特に親交もなかったがお隣さんが居なくなるのは少し寂しいよねとラボ面に話しておよそ数日後、隣の部屋に引っ越し業者の人が来ていたから新しい隣人に挨拶でもしようかと思つて赴いてみたら、驚いた様子で僕と目を見合わす藤沢さんの姿があった。どうやら孤児院の卒業目安年齢の十八歳を超えた彼女は、大学近くに家賃的な意味で優良物件だった我が本拠地に空き部屋が出来たことを知り、これをきっかけにお世話になっている孤児院を出て移り住んできたようだ。

「そういうことだから、僕の方がアパート歴は上だよ」

「まあそれは良いんだけどよ、お前たちは二人とも来年には新キャンパスの方に異動だからな。彼女も一年後にすぐ引越して落ち着かないだろうに」

「僕らは縁が無かったからよく知らないけど、孤児院出身つてのは色々大変なんだろうさ。いくら大学から奨学金をもらつてるとは言えども、孤児院にお世話になりっぱなしというわけにもいかないだろうし」

王女としての華やかな生活から一転して、彼女は孤児院で暮らす外国人の子供となることを余儀なくされたようだ。

現代日本に転移してからすぐ平塚先生の保護を受けることが出来た僕には到底分からない苦しみもたくさんあっただろう。面と向かつていう事は無いが、いきなりの転落人生からこの大学の優等生として返り咲いた彼女を僕は本気で尊敬している。

「……ちよつと考えなしたつたな。それはともかく、来年春から大月だから準備はしておけよ。俺も実家のことを何とかしなければなあ」

「まあ確かに実家から大月は毎日通勤するにはキツイよね。もしかして家を引き払うの？」

「親父たちがすでに山形の方で生活基盤を固めてるから今更戻つてこいなんて言えないさ。だからといって建て壊すのは惜しいし、一応は借家という扱いしておくよ」

彼の今住んでいる家は、当然生前の僕が暮らしていた家の事でもある。昔懐かしの家

が取り壊されるんじゃないかと思つた僕は、借家という形でも残るといふことにホツと胸をなで下ろした。

「新規で寮の建築も行つていそうだ。あと言い忘れていたけど、来週の土曜日に新キャンパスについての説明会があるから予定を開けておけよ。戻る時に藤沢にも伝えてきてくれ」

「了解。じゃあ失礼しました」

投稿予定の論文プリントを脇に抱え直すと、僕はパイプ椅子を部屋の脇に戻しながらまだ少し暖かい空気で満たされた廊下へと出た。

大月に出来上がったという噂の未知なるキャンパス。その実物を見たという証言は聞かないが、来年から運用するとなるとさすがにもう形として出来上がっていないと厳しいだろう。まさか風景と同化していたり、山々の地下に隠し作られている訳じゃないだろうか。

そんな怪しさいっぱいの新キャンパスに、この研究室から赴くことになった人間は悲しいことに平塚准教授に僕、そして藤沢さんの計三人だけだった。当初は随分薄情だなあと思つてはみたが、そもそも平塚先生が担当している学生にしか大月に行くか行かないかの選択権は与えられてない訳だし、その中でも残るといふ他に就職を選択する学生もいる訳だから仕方が無い。教授の異動というのはかくも大変なものなのである。

* * *

「藤沢さん、ちよつと良いかな」

先生から言われたことを伝えなければと学生室に戻ってみれば、藤沢さんの姿は無い。コアタイム中なのだから実験中だと思つて実験室の方へと向かつてみると、少々宜しくないことを藤沢さんが実行しようとしている現場に遭遇した。

「あ、ええと、先輩どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもないよ。君は今一体何をしようとしていたのかな」

彼女は少々慌てた様子だが、僕は気にした風もなく問い詰める。彼女が今やろうとしていたことは、これから科学者として生きていく際に決して許されない行為であるからだ。

「……その、加熱炉を使おうとして」

「違うよ。別に今言いたいのは加熱炉がどうこうした話じゃない」

彼女がオーブンの蓋に向けていた手を少し強引に引つ掴む。普段なら顔を赤くして怒る彼女だろうが、今は自分がしようとしていたことを見つけられたことに気が付いているようだ。何を言ったらいいのか分からず顔を青くする彼女の手を解放すると、僕は

深いため息を吐いた。

「僕が怒っている内容は分かるよね。周りに人が居ないから言わせて貰うけどさ、君は今魔法を使おうとしていただろう?」

実験室に入った時に手が仄かに赤く光っていたのを僕は見逃さなかった。人の姿を見てすぐに術式を引つ込めたようだが、見間違いで済ますと後々取り返しのつかないことになるかもしれないから厳しく言わなければならぬ。

「多分内部の温度を早く上げたかったんだよね。だから焔術なんて使おうとしていた」

「……機械を傷つけないようにやる自信があつたから、少しだけなら平気と思つて……」
「平気じゃないッ!! もし不慮のミスで機械が壊れたらどうするんだ!? それに実験器具や試料が駄目になるだけならまだしも、火災になったら取り返しもつかないんだぞ!!」

なるたけ事の重大さを分かつてもらうため、強い口調で僕は彼女を叱りつけた。

後ろには装置の取扱説明書が置いてあり、最低限構造を理解した上でことに及ぼうとしたのだろう。しかしいくら取説とは言えども機械の構造全てが網羅している訳じゃないし、炉の内部を加熱したつもりが隠された回路まで焼け焦げるおそれもある。

そもそも制御外の外的要因で機械を扱うということそのものが危険な行為だ。最近じゃリスクアセスメントに優れた実験器具が多くあるが、変な使い方をすれば一瞬でた

だのガラクタになるといふ事は昔とそれほど変わっていない。

しかし難儀な話である。そもそも普通の人間だったら自分の力で機械の内部だけを温めようなんて出来るはずも無いことは思い立ちもしないだろう。しかし彼女や僕はそれが出来てしまう。だから僕たちは普通の人間以上に研究者倫理を理解する必要があると思つてゐる。

「それだけじゃないよ。仮に魔法を使つて実験が上手くいったとして、君はどう記録につけるんだい？」

「ええと、それは……」

「書けないよね、オーブンにサンプルを入れて魔法も使つて加熱しましたなんて。誰でもしつかり再現できる実験じゃなきゃそもそもやる意味なんて無いよ」

現代日本に復帰してから大学院に入る間、平塚先生に言われた事がある。まだ初対面の頃に先生の前で熱い煎茶を魔法で凍らせたことがあつたが、当初はすごいと喜んでゐた先生も入学が近付いたある日僕に忠告してきたのだ。

「絶対に実験へ魔法を持ち込むな。僕も入学前平塚先生に硬く約束をさせられたよ。むしろ君が此処に入つてから半年もの間言つてなかつた僕が悪かつた」

「その、ごめんなさい!! 魔法を使おうとしたのは今回が初めてで、その……この機械の予定表で次の予約までに終わらすには魔法を使うしかないと思つたから……」

藤沢さんが視線を向ける先には、壁に張り付けた装置の使用予約表が張り付けている。それを見てみると、確かに今日の夕方ごろから使用予約が入ってるじゃないか。ていうか予約者は僕だった。昨日予約したというのにすっかり忘れてしまっていた。

「遅れるならばそう言ってくれば良いよ。僕の後予約を入れてる人も居ないし、別に実験が明日に伸びたって構わない。だからもうこういう事はしないようにね」

「……わかったわ」

随分と萎れてしまった彼女だが、やはりこれは言わなければならぬ事だった。これが初犯というのが本当に幸いだ。とにかく今はしっかりと反省してもらおう。大月の寮については別に今言わなければならぬ事でもないのだし。

その2

所変わって学生室。学食でも行こうかなとふらりと外へ赴いてみれば、なんと普段じゃ余る筈の無いカツ丼弁当が売れ残っているではないか。この出会いに運命を感じた僕は勿論即購入し、学生室内に置かれた電子レンジを駆使してホカホカの弁当を食べていた。

適度に甘みを含んだ味は最高だ。体に悪そうな食糧ではあるが、ここ数年同じような食生活が続けていても特に健康上問題が起こるような様子もないので強気でいられる。

——ルルルルル

ポンコツPCの前で優雅な食事タイムを満喫していた僕の後ろから無粋なコール音が鳴り響いた。箸をおいて出ようかと思えば、近くにいた後輩が先に電話を受け取ってくれたので安心して食事に戻る。

弁当をつまみながら作業の経過を眺めるためにパソコンへと目を移したが、このノートパソコンも卒業と同時に新調するのもいいかもしれない。グラフの描写ソフトとワードを同時起動させると露骨に動きが遅くなるし、スクロールももの凄くぎこちない挙動だし。そんなところに、受話器片手に後輩が後ろから声を掛けてきた。

「すいません、平塚さん。ええと、外務省の川崎さんという方からお電話です」

「……え、外務省？ それって平塚先生にじやなくて？」

「はい。学生の、と言つてましたから間違ひはないと思います」

外部から僕宛ての電話が来ることはそれなりにあるが、そのなかで決して少なくはない回数で人違いがあつたりする。電話を変つた途端に平塚准教授へ向けていると思われる訳の分からない話をされて首を傾げたことは一度や二度で済む経験ではない。

しかし学生と指定をしてきたことから、どうやら僕は本当に外務省などというよく分からなところから電話が来たのか。外務省から電話なんて、はたして夏場に海外の学会へ行つた時に何かやらかしてしまつていたのだろうか。

「うーん……分かつた。電話ありがとうございます——はい、お電話かわりました。平塚です」

後輩に軽く礼を告げると、子機の待機状態を解除した。果たして一体僕は何をしてみつたんだろうか。

『平塚さんですね。外務省人物交流室の川崎といいます。お忙しい中お電話すいません』

「いえいえ、ところでどういった御用件でしょうか」

『はい。来年度から運用される貴大学の新キャンパスについての話なのですが』

思わず僕は固まつた。一体どんな内容を言われるんだと身構えていたその頭の上か

ら殴られた気分だ。大月新キャンパスについて外部から電話が来るのはまだ許せるが、なぜよりによつて外務省からなんだ。いつから大月は外国扱いになったというんだらう。

「ええと、すみません。それつて大月の件ですか？」

『はい。ただし少々込み入った件なので、つきましては実際にそちらに赴いてお話ししたいと思っています。今日の夕方からお時間を頂けますか？』

「だ、大丈夫ですけど……込み入ったつてどういう事ですか？」

『それについても後ほどお話いたします。それでは5時から5号館2階の第三会議室でよろしく願います。失礼しました』

「あ、ちよつと!!……ああ切れちゃったよ。なんだつてんだもう」

なんだか言いたいことだけ言われて碌に質問する事すらも許されなかつた気がする。一体何の話をするのか皆目見当もつかないというのは不気味過ぎる。

「礼ちゃん難しい顔してどうしたの？」

「ああ、君か……何かね、今僕宛てに外務省から電話が来たんだ」

「外務省だあ!!」

ちようどコンビニから戻つてきてビニール袋を手からぶら下げた同期が、こちらが求めて以上の大袈裟なりアクションを披露してくれた。僕にだつて訳が分からない

んだから、彼からしたら意味不明もいいとこだろう。外務省から電話がかかってきて表情一つ変えずに僕へ電話を受け渡した後輩君はもつと評価をされるべきだ。

ふと気になってパソコンを動かしてインターネットブラウザを開いてみる。何度かマウスをクリックしていき、行きついたページは会議室の予約表が置いてある。よく見てみると、いつの間にか指定された会議室はこの研究室名義で5時から1時間の予約が取られている。外部からのアクセスは出来ないはずなのだが、教務課辺りに先に根回しでもしたのだろうか。

「なんかすごい大変なことに巻き込まれた気がするよ」

「……一応聞いておくけど、変なことをしてかした訳じゃないんだよね？」

「自分の記憶のかぎりないとは思うけど……今度の新キャンについての話らしいし、ますます訳が分からない」

僕と同期は一緒に頭を捻ってみたが、結局2人そろって答えを見つけることは出来なかった。

* * *

学位論文の執筆に取りかかってみたのは良いものの、先ほど掛かってきた電話のおか

げで文章を書くという作業に集中できる訳が無かった。

キーボードをかたかた叩いていても、頭に浮かぶのは全体の文章の構成やどうやって理論立てていくかなどという建設的なものではなく、何故外務省が新キャンパスについての話をしてくるのかという疑問が浮かんできしまい作業どころでは無くなる。

外務省の人物交流室という物について簡単に検索を掛けてみたが、外国との人物交流事業に関係しているという話以外は分らず仕舞い。そして大月の新キャンパスについてはネットのどこを探しても載っていない。もう運用を半年以内に控えてこの有様というのはさすがにおかしすぎる。

「あー……あんまり進んでいないのにもう時間だよ」

画面の右下に映された時計は既に約束の時間まで十五分に迫ったことを指し示している。もうこんな時間になってしまったのなら、これ以上パソコンの前で唸った所で作業の進展はないだろう。仕方が無くパソコンを閉じると、僕は重い体に鞭を打って立ち上がった。

その外務省の人の話を聞いたらこの後の作業を再開しよう。もしかしたら悩みが消えた反動でもの凄いはかどるかもしれないだし。

研究棟であるこの建物は三階から六階までに色々な研究グループが入っており、一階は講義室や談話室が、二階は事務室やミーティング用の会議室で占められている。階段

を1つ降りたフロアが今回指定された場所であり、廊下の右側には事務室が、左側には数個の会議室が並んでいる。

僕のラボが占領している三階には学生室と教授室にくわえて実験室まで入っており、ミーティングなどの用事がある時も一つ下の階に行けば済んでしまうために利便性に優れている。中にはラボがあるフロアとは別に七階の集団実験室を使用している研究室も存在しており、それらと比べると我がラボは移動に関しては非常に恵まれていると言える。

第三会議室というところちょうど廊下の真ん中らへんに面した部屋の筈だ。すれ違った会議室は第一第二とも空室となっているが、大体どの研究室も利用したい時間帯というものは被っているらしく、週の初めの夕方などはほとんどの会議室が勉強会などで予約が埋まる。

そうして辿りついた第三会議室。部屋の名前が書かれたプレートの下には、使用中という札が立てかけられている。もしや前の時間帯に使っている団体が残っているのではないかと考えるが、そういうえば先ほど予約表を覗いた時には前後の予約は取られてはいなかった。

「失礼します」

時間には少しだけ早い、まあ良いだろう。全く関係の無い人間が使っているのなら

ばやんわりと言い聞かせて出てもらえばいい話だし。

扉を開けてみて中を見渡してみると若い男が机の前に座っており、部屋の後方にはサングラスを掛けた二人の大柄な男が直立している。かなり規模の大きい研究室でもミーティングをする際に狭くならないように大きく作られた部屋、そんな空間に三人しかおらず内二人がSPのような恰好で居るものだから異様さが半端無い。

思わず僕が部屋を出たくなってしまったのもしょうがないだろう。しかしただ突っ立っているわけにもいかないようだった。

「わざわざお時間を頂きすいません。電話をさせていただいた外務省人物交流課の川崎義春といいます」

「平塚礼二です。ええと、後ろのお二方は……」

「あー、まあ護衛みたいなものですよ。お気になさらず。とりあえず座りましょうか」
川崎と名乗った男は自身が座っている前を指差してきた。しかし後ろの二人を気にするなつて無理だよ。むちやくちや目立っているよ彼ら。いくら外務省とはいっても人物交流室という響きからは護衛が必要になるレベルの人間を抱えているとは到底思えないのだが、どうやら僕の認識は間違っているらしい。

とりあえず椅子に座った僕を、川崎さんは興味深そうな様子で観察している。後ろの護衛さんたちも含めて非常に居心地が悪い。

「……僕の容姿が気になりますか？」

「ああ、すいません。無遠慮でしたよね」

「別に構いませんよ。自分の容姿が変わっているのは承知の上ですし、名前とのギャップもある事でしょう」

因みに僕の戸籍上の扱いは、平塚先生が養子として海外から連れて帰ってきた孤児という事になっている。もし洋風な見た目の理由を突っ込まれるならばこのことを言えば相手も大抵の場合はそれ以上のつつこみをしてこなくなる。

「さてと、まずは助教内定おめでとうございます」

少し身構えて臨もうとした僕は、川崎さんが放った一言でいきなり窮地へと追い込まれた。確かに助教内定の知らせはインターネットに公示された情報だけど、昨日の今日だしいくらなんでも情報収集が早すぎる。

「ど、どうもありがとうございます。でもそれを何で……」

「実はですね、今回の新キャンパスプロジェクトについては我が外務省も絡んでいるのですよ。そしてプロジェクトの中でも重要な人物の一人である君の動向については我々も注目しています」

そして何とか立ち直ろうとした僕に二発目のボディブローが襲い掛かる。

外務省が大月の新キャンパスに絡んでいるのは百歩譲って認めてやろう。日本政府

的に大月は某グンマーのような未開の土地としての扱いを下しているということ、ギリギリ説明がつかないこともない。

だがそのプロジェクトで何故僕が重要人物となるんだ。そもそも僕が大月の新キャンパスに行くことになったのは、担当教員である平塚先生の異動に着いていくことになったからだ。一步違えて僕が気まぐれで就職活動を始めたか、それとも新キャンパスの話には全く関わらなかつたか、かもしれないのに、この男は僕が重要人物だと抜かしている。

「平塚さんが将来的に助教や研究員を目指していると聞いて私もホツとしました。そうでなければ無理やり誘致をしなければならなかつたからです」

「話が見えないんですけど、何で僕がその大月新キャンパスプロジェクトとやらの重要人物なんですか？」

「厳密に言うならば、およそ半年前のあるきっかけで君はプロジェクトの重要人物に挙げられました。とりあえず最初から説明した方が良さそうですね」

川崎さんは一度話を区切ると、鞆の中からノートパソコンを取り出した。後ろに控えていたSPの一人がテキパキと外部スクリーン出力をするための準備をし始めて、もう一人のSPは相変わらず表情が読めない顔つきで突っ立っている。

何だかもう意味が分からない。新しい校舎を作るのだから、大学としては結構前から

用意をするはずだ。計画が開始したのはそれこそ僕が大学に入ったころまで遡るんじゃないだろうか。そんな息の長い計画に、何で今更僕が重要人物に挙げられなければならないんだ。

混乱がピークに行つたところでどうやらプロジェクトの準備が終わつたらしく、いきなり部屋前部の照明が落とされた。スクリーンに映し出されたのはデフォルトの味気ない壁紙であり、ポインタがその中に並べられた一つのフォルダの上で止まった。

「平塚さん。これはまだ世間には未発表の情報です。多分これから映す資料を見てくれれば、何故新キャンパス事業に外務省が関わっているか、そして何故君が重要であるかが分かるでしょう」

カチリとマウスを叩く音が響き、スクリーンに一つのパワーポイント資料が映し出された。そのタイトルを見た瞬間、ゾワリと全身の鳥肌が立つような感覚が走った。

「に、日本及びエルトニア王国共同出資による……国立東都工科大学リーヴェル校の最終構想だあ!？」

その3

一言で言えば、新キャンパスは何故か我が祖国エルトニアの首都リーヴェルに開校予定らしい。

いくらなんでも予想外過ぎて頭が目の前の状況についていけない。大月に新キャンパスを作っていると信じていた僕は、実はとんでもない思い違いをしていたのか。しかし平塚先生からは大月としか聞かされていないから、そもそも先生が間違った情報を掴まされていたということか。

ぱっぱっぱと切り替わるスライドの中には昔一度だけ見た事がある王都の大聖堂やら荘厳な様を誇る王城の写真が載せられている個所もあり、今回の話が壮大な嘘である可能性が段々と小さくなっていく。

「二国間で共同出資して教育施設を作る計画が浮上したのは今から三年前ですね。エルトニアと日本が行き来出来る事が発見されてからおよそ二年後の話です」

「え……ということは五年前にはもう日本との交流が始まっていたということですか!?」

「はい。貴方が日本に来た頃ですよ。当時はまだ交流も本格的じゃなかったですがね」

しかもこの外務省の役人に僕が異世界人だとばれてる始末である。

僕がまだエルトニアに居た頃には日本へのゲートが開いたなどという話は全く聞いたこともなく、怪しげな紙束が漂流するといういわくつきの場所を探し当てたことで日本へと帰って来ることが出来たのだ。そういう背景を省みると、日本との交流を発見できていれば当時そこまで苦勞しなくて済んだんじゃないかという思いにさせられる。

「行き来出来るゲートが結んでいるのはリーヴエル北部の森林と大月の山中です。大月に作られたのはキャンパスではなく、エルトニアへ行くための玄関口ですね」

「ああ、大月ってそういうこと……」

「最初は言語も通じず価値観も違うということでリスクが大きく、政府内でもエルトニアと交流するかどうかは揉めるに揉めました。しかし彼らが持つ翻訳魔法で状況は好転しました。言語の壁が一応取り除けたおかげで交流が十年進んだとも言われます」

翻訳魔法という物は、喋っている言葉そのものは聞き取れないにもかかわらず内容だけは理解することが出来るという、それはもう奇怪な代物である。多分精神感応系の魔法だったはずだ。未知の言語を使う民族と交流するとなると少なくとも対等な関係となるのは難しいだろう。この魔法の存在で平和な関係を作るきっかけとなったのなら、翻訳魔法様様だ。

「さてと、日本政府は現地に教育機関の設立を進めています。行く行くはエルトニアと

の共同研究事業も目指していて、第一弾とも言うべきものが国立東都工科大学リーヴェル校による科学技術の教育なんですよ」

川崎さんがキーボードを叩いて、また新たなスライドが目の前に現れた。

そこにはあくまでイメージ図なのだろうが、煉瓦造りの建物の脇に並ぶように作られた少々古めかしい見た目の建物の絵が描かれており、その絵の横に建物の構造スペックが列挙されている。

「校舎は周囲の景観を損なわないようなデザインに加え、目立たないように屋上へメガソーラーを設置しており環境にも配慮をしました」

「……王都は一度しか言ったことがないからよく覚えてませんが、脇にある建物は王立の魔法騎士学校か何かでしたっけ」

「ええ、流石は現地の出身だけありますね。エルトニア王国立魔法騎士学園の一角にある使われなくなった校舎を大幅改装したのが先ほどのイメージ図にもある一号館で、行くは完全新規の校舎も建造予定です」

更にスライドが捲られていく。次のページからはどうやら着任することになるスタッフの名簿一覧のようだ。顔写真と共に乗せられた名前や現所属先を見てみると、他大学の名前が半分程度混ざっており必ずしもうちの大学からしか出向しないというわけでもなさそうだ。非常に特殊な事情だからか、新キャンパスに着いて行く学生たちは

ほとんどが博士課程に進学済みであり、しかも数は教授一人につき一人居れば多い方といった有様である。

ある程度名前が並んだページが続き、とうとう見慣れた顔写真がスクリーン上へ映し出された。多分大学職員の名簿帳から引つ張つてきたと思われる、妙にキリツとした表情の平塚准教授が映り、その下には一緒に移動することになる学生の名前が書かれている。学部四年の藤沢レナに、博士課程三年で助教内定済みと脇に添えられた平塚礼二の名前。そしてさらに括弧で括られた中には、つておい。

「僕の所の名前が……」

「ああ、一応平塚さんのところには本名も載せておきました」

小さい文字ながら異様な存在感を放つラステイレイ・フォルガントの並び。久しくこの字の並びを見ていなかったから、自分の名前にもかかわらず危うく鳥肌が立つところであった。

一体僕の名前は何処から漏れ出たというのか。というかそもそも何故僕が異世界出身ということはこの川崎という男は認知しているのだろうか。流石に見た目から判断をしたというのは根拠が薄く、その理屈で言うならば実際はかなりの大物であるはずの藤沢さんの欄に本名が書いていないことがおかしい。

「あの、そろそろ何で僕がエルトニア人と分かったのかを教えてくださいませんか？」

「……そうですね。では一旦スライドはここまで、と」

川崎さんが指を打ち鳴らせば、すぐにSPの人が部屋の照明を元に戻した。

薄暗い部屋が急に明るくなったことで目がチカチカするが、そんな事よりも何故僕の秘密が知られてしまったかである。確かに未成年で大学院に所属している異世界っぽい見た目の博士課程なんて十分目立つ要素は多いかもしれない。しかしエルトニアにおける僕の名前に関して言えば平塚先生と藤沢さん以外には漏らしたことは無い。

「……もしかして平塚先生経由ですか？」

「いえいえ、多分貴方からすればもつと身近な方からですよ。今回貴方に会いに来たのが人物交流室の私ということがミソでしてね」

彼の物言いに少しだけ安心が出来た。僕にとって前世の自分である平塚先生以上に身近な人間というのは存在しないにもかかわらず、彼が僕にとって身近ではないと言いつ張った。ということは僕の最大の秘密である”平塚礼二は一度転生している”という事実に関しては知られてないのだろう。

「半年ほど前から日本政府とエルトニア王国の交流の一環として、エルトニア王国立魔法騎士学園の中から十人程選出して東京見学会を行おうという計画が持ちあげられました」

「若い世代へ日本に対する壁を取ってもらおうということですか？」

「それもありますね。一部の貴族からは未だに日本との交流を取りやめるべきだとの声も根強いんですよ。そうして希望者の面接を去年行なった時、希望者の中に面接官へある願いを申し出た学生が居ましてね」

川崎さんは一旦言葉を区切ると、パソコンをかたかたと動かし始めた。

「ある人物の名前が書かれた手紙を見せられたんですよ。その面接官は勿論エルトニアの文字は読めませんでしたから最初は困ったそうなんです……最後まで目を通して大層驚いたそうです」

そして目的の画像ファイルを探し当てたのか、彼は小さく笑うと画面が見やすいように僕の方へとPCを向けた。

「多分平塚さんはこの手紙に見覚えがあるのではないですか？」

画面に映っている画像、それは少々黄ばんだ紙に現地の言葉で書かれた一枚の手紙の写真データ。忘れる筈もない、とある兄が旅立つ間際に妹へ向けて書いて日記の中へ隠した、果たせるはずもない再会を約束した手紙だ。

「私も文字の解読は出来ませんが、手紙の最後に書かれた漢字くらいは読めますよ。平塚さん、この手紙を書いたのは貴方ですね？」

「……確かに僕が書きました。ということ、その生徒というのは……」

「半年後の見学旅行に向けた面接に勿論その生徒は通りましたよ。そして平塚礼二とい

う名前を調べた結果、我々は貴方の存在に行きつくことが出来ました」

彼の話では面接を行なったのは凡そ半年前だったはずだ。そしてその面接は半年後に向けた東京見学に向けての物だともいう。もしかしてと顔を上げた僕の目の前で、川崎さんは大きく指を鳴らした。

いつの間にかSPが一人居なくなっており、何処へ行ったのかと探すのも束の間、第三会議室の扉がゆっくりと開けられていく。

「五年振りの再会ということになりますか」

居なくなっていたSPに連れられて入ってきた人物に僕は目を丸くすることしか出来なかった。

腰ほどまで伸ばされた長く煌めく銀髪を揺らしながら部屋に入ってきた彼女は、間髪入れずに僕に目を合わせた。吸い込まれそうなほど綺麗な碧眼、冷徹さすら感じさせるくつきりとした顔立ち、染みと欠片さえも見当たらない素肌。僕は石になってしまったかのようにその場に固まり、動けない僕の下へ彼女が一步ずつ近付いてくる。

やがて僕のすぐ前で立ち止まった彼女は、じつと僕の目を食い入る様に見つめた。碧眼と碧眼、銀髪と銀髪。髪の長さを除けば鏡に映したような姿を持つ彼女が、ゆつくりとその紅色の唇を開けていく。

『……………久しぶりだね、レシルぶへあぼっ!』

『兄さん!!』

なんと言っているのか分からず、とりあえず再開の挨拶でもと口を開いたその矢先。我が日本の誇る国技の頂点に位置する横綱にも匹敵する加速度で駆け出した彼女は、どうやっても見切れない速度で無防備な状態の僕へと抱きついた。

鳩尾こそ無事だったが抵抗する間もなく肩口が大きく突つ張りをくらい、予想外の一撃で体が後ろに吹っ飛びかける。しかしそれを見逃して貫えるはずもなく、今度はすぐに彼女に肩を引つ掴まれたおかげで僕の体に対して逆方向に凄まじい加速度が加わり、赤ベコの如く首がガクンガクンと揺らされた。

「うぼあだだだだ!!」

『何で今まで会いに来てくれなかったのさ馬鹿ア!!』

そしてがっちりとホールドされた僕の体は、仕上げとばかりに万力の如く力を発揮する剛腕にギリギリと締め付けられる。体が完全に密着している為に僕の胸の辺りに少しだけ柔らかい感触が伝わるが、そんなことに気を向けていられないほど想像を絶する腕力で背中を絞められており、段々と呼吸すらも難しくなっていく。

少しずつ耳鳴りが聞こえはじめて来て危機感が本格的なものへと変わる。ギブギブと背中を叩いて離すように懇願しても、まるであやしていると錯覚でもされたのか締め付ける力は強くなる一方だ。なんでこの子僕とほとんど体格変わらないのにこんな全

身凶器みたいなことになっているんだよ。

もう会うことは叶わないと思っていた、でも五年振りの再開を果たすことが出来た、たった一人の僕の妹。絶世の美人へとすくすく育った彼女に、何故僕は絞殺されかけているんだ。

「こひゅっ……離、し……」

「あ、あのフォルガントさん？ 再会の喜びもそこらへんにしてまずは座りましょう、ね？」

段々と曇っていく視界の中、少々引きつった顔を浮かべながらも助け舟をよこしてくれた川崎さんに、僕は今日初めて感謝の念を抱いた。

* * *

いつの間にか向かい合うように並び替えられた長机。此方側には酸欠由来の眩暈や頭痛に襲われた僕が座り、反対側には苦笑いを浮かべる川崎さんと、ひたすら僕の顔を食い入る様に見つめてくる銀髪の少女。後ろで控えているSPさんがどこからともなく取り出したペットボトルのお茶が目の前に置かれており、冗談抜きに眩暈でぶっ倒れそうだった僕は遠慮なくそれを頂くことにする。温いけど美味しい。

「ゼエ、ハア……」

「……そろそろ大丈夫ですかね」

僕の息が直るまで話を待ってくれた川崎さんは、実は結構いい人かもしれない。お茶を半分程度飲み干し、せき払いを一つ残してようやく話せる状態まで回復することが出来た。

再度前へ向き直ると、僕の生き写しのような容姿で此方に笑いかける銀髪の少女が目に入った。まさかいきなり捻じ込まれたこの会合でこんな驚くべき再開を果たすなんて僕は思ってもいなかった。

レシルティア・フォルガント。五年前に故郷に残してきてもう会えないだろうと思っていた、僕のたった一人の妹だ。もはや見捨てたも同然とも言うべき別れ方をした彼女に、さてどう接していけば良いものか。

「……久しぶりだね、レシル」

「本当に久しぶりだよ、兄さん」

背丈や碧眼、銀髪まで僕に似ていると思っていたらなんと声までそっくりである。やや僕よりも高い声で僕を兄さんと呼ぶ彼女は、純粋に嬉しさを表した笑顔を僕へと向けてきた。

「彼女は今回の東京見学会メンバーの一人、レシルティア・フォルガントさんです。平塚

さん、彼女はあなたの妹さんということでは宜しいですね？」

「ええ、間違いありません」

五年間全く会っていないが、エルトニアでも中々見かけぬ銀髪碧眼という特徴的な組み合わせに加えて、そもそも僕と背格好諸々が似通い過ぎている彼女だ、実は人違いでしたなんてことはないだろうし、おそらく川崎さんも形式的に確認をしただけなのだろう。僕が即座にそうだと答えても、特に表情を変えることなく話を進めていく。

「さて、リーヴェルキャンパスの本格運用は来年度からですが、実のところ既に出向されている先生方は存在しています」

「……どういうことですか？　もしかしてフライングで現地で研究を行っている人も居るんですか」

「いいえ。まだ研究活動は設備の問題で行われていません。しかし来年度からの開校に向けて予備授業を行っています」

そこで僕はハッと顔を上げた。今までこの五年間僕は研究室所属の身で過ごしてきたために、大学と言う物がひたすら研究活動を行う場と認知をしていた節がある。しかし実際には研究室に入る前の学生たちの基礎学力を養成するステップも非常に重要な大学の役割の一つである。

新キャンパスを作るにあたって新規の学生をどのように募集して基本的なものごと

を教えていくのか。件のエルトニアは大月なんて比べにもならないほど僕たちの常識が通用しない場所だ。今まで先進理学など存在してなかった地域に対しての開校であるわけだから、そのあたりは非常に難しい筈である。

「詳しい話は後日プロジェクトに参加される先生方を集めた合同説明会にてお伝えしますが、平塚さんの存在は新規学生を育成するにあたって非常に大きな武器となります」
「それって、僕が現地の言葉が喋れるからですか？」

「はい。いくら翻訳魔法が万能とはいえ、相手に知識が無ければ貴方達研究者にとってはその凄いな簡単な理系単語であつても上手くは通じませんからね」

精神感应系の魔法である翻訳魔法は確かに意志の疎通に便利ではあるが、相手が知らない常識や単語については上手く伝わらないことが多いと聞いた事がある。

多分その問題の根っこは物理という物を勉強する前の子供に、重力によって物体が落下すると発言しても理解してもらえないということと同じだろう。ならば一から説明をしていけば良いのではないかと思つても、ある概念の説明をするために使用する単語も通じないとなると非常に骨が折れる作業となるのは間違いない。

「入学内定者は名門と言われるリーヴェル魔術学校の生徒がほとんどです。希望者の内筆記試験である程度ふるいにかけて、現地語に翻訳された教科書で予備授業を行っています。定期考査の結果を見るかぎり芳しい状況とは言えないのが実情です」

「リーヴェル魔術学校ですか。当時父に進学を勧められた関係で知つてますが……その生徒でも芳しくないか？」

「そうですね……予備授業の内容は日本で言うならば高校レベルなんですが、着いていけずに既に入学を取り消した生徒も出ている程です」

妹の学校が優秀な騎士を育成する場なら、リーヴェル魔術学校は優秀な学者や文官を育成する由緒ある学校だった筈だ。しかしそんな学校の生徒でも、全く魔法に関係しない科学という話になってしまえば素人も同然なのだろう。未知の分野を前にしても彼らの持ち前の洞察力でなんとかなるっていうのは、いくらなんでも博打過ぎたということか。

「来年度は四年制大学の一年生向け講義の他に、科学を基礎から見直す講義も作るように教育内容を検討していると聞いています。平塚さんには後者のタイプの講義を担当していただくかもしれませんね」

「えっ……僕も講義を持つんですか？」

「来年度から平塚さんは助教ですからね。そこはお願いしますよ」

大変だなあと他人事のように思っていたが、全然他人事ではなかった。言われてみればたしかに助教という職は我が大学において講義を持てる人間としてカウントされる。

今までは授業の手伝いが精々だった僕だが、一から自分で講義を持つとなると一体何

をすればいいのかが全く思い浮かばない。しかも相手の学力レベルがそこまでよろしくないという以外全く分からないのだから尚更だ。

「それと来年度からの住まいの件なのですが、こちらで用意させていただきます」

「それについては先生から聞いていましたが……一応聞いておきます。その住まいというのは大月市内ですか？」

凄まじく嫌な予感がする。平塚先生に寮の話が聞かされた時は、大月市内にある寮にでも移り住むのかなと思っていた。キャンパスから近いだろうし家賃も高くはないだろうと想像し、精々の欠点は都心から異常に離れていることくらいかとかなりポジティブな感想を抱いていた。

だが実際のキャンパスは王都リーヴェルであり、大月はただのエルトニアへの玄関口に過ぎないという。そんな意味不明な環境において、果たして彼らは僕たちに大月市内から通勤することを許してくれるのだろうか。

「いえ、建設中の寮は校舎から程近いリーヴェル市内ですよ。学園区なので周囲も学生が多く住み心地も良いと聞いています」

「やっぱりかよこんちくしょう!!」

案の定ともいえる返答に思わず敬語を忘れてしまう。川崎さんの表情が一瞬ビクツツとして、妹が驚いた顔を浮かべているがそんなことはどうでも良い。

駅から見えるのはちっぽけな町と壮大な山々。近場の街に行きたければ甲府か八王子の二択。そんなお世辞にも住みやすいとは思えない大月という土地が、今の僕には手も届かぬ高級住宅地にも感じられた。

「平塚さんのとつては故郷に近い空気でしょうから、多分すぐに慣れますよ」

「い、いやあそうなんですけどね……」

言える訳が無かった。僕の本当の故郷が東京の真ん中らへんの一軒家なんて。

「とりあえず今日伝えなければならぬことは以上です。何か質問などはありますか？」

「……いきなり色々と知ったため質問が出る以前の状態です。後日合同説明会を行うんですよね」

「はい。来週の土曜日に貴大学の大使室にて行ないます。長めの質疑応答時間を設けますので、その時でも宜しいですか？」

「ええ、とりあえず今は色々と整理をしないと……」

いくらなんでもこの場で知らされた内容は短時間で頭の中で整理をするには重すぎる。妹との再会だつて大事件なのに、それに加えて自分の就職先があるうことが元々住んでいた国なのだから、混乱して慌てふためかなかつたことだけでも褒められてしかるべきだ。

ともかく今は考える時間が欲しい。今日は早めに研究室を引き上げて家に帰ろう。一人でゆつくりと考えれば、ちよつとくらいは考えが纏まるかもしれない。

「では今日はありがとうございませした」

「ああ、平塚さん。まだ伝えなければならぬことが一つ残っていますので、もう少しだけおつきあい下さい」

椅子を立とうとした僕を川崎さんが急いで呼び止めた。まだ残っていることがあるのかと少しげんなりとしていると、ふと強い視線を斜め前から感じた。

「むー……」

「最後にですが、フォルガントさんについて少々お話があります」

我が妹はじーつと何かを言いたそうに僕に視線を向けている。今まで散々相手にされていなかっただうえに、そそくさと急いで学生室に戻ろうとした僕に不満を抱いたのか。続けざまに新情報を頭から浴びせられたために、情けないことに彼女について少し気を回せなかつた。

そう言えば彼女はたしか東京見学会に参加をしていたんじゃないか。久しぶりの再会ということで話したいことも山々であり、他の参加メンバーと合流をする前に少しだけ時間が欲しい。

「それより前にちよつとすいません。妹は東京見学会の途中ですよね？　他のメンバー

の所に合流する前に少々時間を頂けますか？」

「構いませんよ。むしろお話というのはその件に關してですので」

その件とは一体何事だろうか。少しだけ疑問が浮かぶが、一転して嬉しそうな笑顔を浮かべる妹を見ているとなんだかどうでも良くなってくる。

「既に見学会の参加者はエルトニアに帰国しており、フォルガントさんだけが日本に残っていますからね」

「……えっ」

さて一体何を語りあおうか。時間は限られているわけだしまずは近況報告でも、などと考えていた僕の頭は、川崎さんの放った言葉で現実へと引きずり戻された。

「い、いやそれってどういうことですか？ 妹だけ特別なスケジュールを組んでいるとか？」

「そういうことになります。勿論本人の希望によるものですよ」

良かった、ハブにされた訳じゃあ無いんだな。そういうこととなれば、あまり時間と氣を使わずに話せるかもしれない。ホッと安心しながら担当者も柔軟な人間だなあと感心していると、川崎さんは含み笑いを浮かべながら妹に視線を向けた。何事かなあ思っていると、ずつとしゃべらずに僕達の話を聞いていた妹がおおずとおおずと口を開いた。

「兄さん。今回の見学会ではボクは相当無理を言っている2つの要望を通してもらった

んだ」

少し恥ずかしそうに話し始める妹の姿は、僕を絞殺しかけた時のような快活さではなく、まだ小さい頃に僕の後を着いて回っていた時の雰囲気を感じさせる。その様子に僕は懐かしさを感じるとともに、彼女を一人にしてしまったことへの罪悪感もチクリと胸を刺した。

いつの間に妹の一人称がボクとなったのかが凄く気にはなるけど、僕はできるだけ柔らかい笑顔顔を浮かべながら、優しい口調で口を開いた。

「……本当企画を立ち上げた人たちは柔軟な人達なんだね。それで、要望っていうのはこの会談のことかい？」

「それもそうだけど……もう一個はね、一日帰る時間を遅らせて兄さんの家に泊まらせてほしいって言ったんだ」

「そうかあ……えっ」

なんか今日は不意の発言に驚いてばかりな気がする。

顔を少し赤らめながら僕の反応を小動物のように伺う妹の姿に顔がだらしなく崩れてしまいそうになる一方で、彼女が発言した内容が結構とんでもないんじゃないかと僕の理性が冷静な判断を下す。貴族の娘である彼女が滞在するにはどうかと思われる汚部屋だし、そもそも妹とは言えども外交上かなり気を使わなければいけない人間を泊め

るとなれば相当な警護と一緒に着いてくるんじゃないか。

「平塚さんの存在へと行きつくことが出来たのは彼女のおかげですし、我々としても彼女の意見を尊重したいのですよ。久しぶりの再会なのでしようし、丁度良い機会じゃないでしょうか」

「今日はよろしくね……兄さん」

だがこれ程期待した顔を浮かべる妹を前にして、喉元まで上がってきていた反論の言葉はすごとごと消え去ってしまった。

その4

そそくさと机の上の荷物をまとめ上げていく。普段ならば帰るには少々早い時間だが、今日に關して言えば込み入った事情があるため仕方が無い。

「戻ってきたんだな。礼ちゃん、一体何だった？」

「あーと……まあ、特に問題になるような事は無かったよ」

心配した顔でわざわざ声を掛けてくれた同期には悪いけども、先ほどの話を漏らす訳にはいかないため軽く返すに留めた。

当然彼は納得するはずもなく二の句を続けようとするが、「色々込み入っているから話すことは出来ない」と返すと、しようがないといった風に彼は自分の席へすすごと戻っていった。普段は僕にちゃん付けで呼んだり鬱陶しい所もある彼だが、人との距離を測るのに長けているのか、ある程度までは構うけど踏み込んでほしくない場面では絶対に引き下がるあたり世渡りが上手いなあと感じさせる。

「それじゃあ、お疲れ様」

「……お疲れさん」

やれやれと言った調子で頭を振る同期の後ろを通り、僕は学生室の扉に手を掛けた。

「あつ……」

「お疲れ様。今日は早めに上がるよ」

扉を開けようとしたその時、丁度学生室へ入ろうとした藤沢さんと目が合った。一瞬表情を強張らせた彼女を見て、さて僕は何かしたかなあと思い返す。すると実験室内で魔法を使おうとしていた現場を叱りつけたことを思い出した。僕が彼女に対して怒鳴り声を上げたことは、真面目な理由による物としては多分初めてだと思う。そう考えると彼女が僕に対して少し萎縮をしまつてもおかしくはないかもしれない。

「失敗は誰だつてするもんだよ。以後同じミスをしなければ良いだけなんだから、そんなしよぼくれていないでもっとシャキツとしなさいな」

「分かりました……」

先ほど叱りつけたときは反省して欲しいがためにフオローを入れることなく実験室を後にしたが、少し失敗だったかもしれない。一応のフオローで少しだけ藤沢さんの顔が明るくなったため一安心といったところか。

満足をしてさあ早めに帰ろうと彼女の脇を通り抜けようとしたが、普段の調子を少しだけ取り戻した彼女は、僕が鞆を担いでいるのを目敏く発見をしたようだ。

「ところで先輩はもう帰宅ですか。私も荷物をすぐ纏めちやいますので、待っててもらっても良いですか？」

「ええと……うん、君はもうちよつと残つて調べものをするのも良いかもしれないね。勉強会も近いだろうしさ」

案の定彼女は僕が帰ろうとすると、それに着いて行こうとしてきた。普段は割と遅くまで残る僕と同じ時間まで論文を読んだりしながら勉強していることが多い彼女だから、相変わらずよく一緒に帰ろうとする点は置いとくとして、今日ぐらいは早く帰つたつて罰は当たらないだろう。

ただし今日はマズイ。非常にマズイ。そもそもこの建物の一階付近で妹が乗せられている車が待機している時点で既にマズイのだ。

川崎さんから別れ際一つだけ言われた事がある。どうやら先ほど僕が全体説明会よりも前に情報を知る事となつたのは、妹の存在があつたというやむを得なかつた事情による物らしい。

そのため情報の拡散を防ぐという名目の下、たとえ平塚先生や藤沢さんのようにプロジェクトの参加メンバーであっても今日された話を漏えいすることは無いようにと釘を刺されている。なので彼女がこれから僕と一緒に帰ろうとしているのは非常にマズイのだ。僕の生い立ちを知る彼女の事だ、僕と似たような見た目のレシルを目撃したらすぐに僕の妹と見抜かれかねない。そうするとエルトニアに置いてきた妹が何故日本に居るんだと問い詰められてしまう。

「……というわけで後は頑張れ。お疲れイ!!」

「あつ、ちよつと」

藤沢さんが僕を呼び止めようと声を上げるが、振り返らずにスタコラサツサと階段の方へ向かう。

彼女もエルトニアの関係者であり、行方不明の王女という肩書から考えるとエルトニアへの玄関口が大月にあるということをお早く知らせた方が良かったのかもしれない。そう考えて先ほどは本気で彼女の秘密について川崎さんに教えて相談をしようかと思つたが、彼女に無断で機密情報を漏らすのも気が引けてしまい、結局は言わず仕舞いとなつてしまった。そのため今藤沢さんを見ていると、どうにも心の中に後悔やら罪悪感やらが湧いてくるのだ。

後ろから誰もついてくることがないのを確認して、足早に一階ロビーを突き進む。そうして見えてくる5号館の前道には、一台の黒塗りの車が佇んでいた。

普段は試薬や工具を販売しに来てくれる業者のワゴン車しか停まることのないスペースに、堂々と停車しているとある一台の自動車。妙に艶のある黒い表面を見せつけて、鼻先に四つ股印の社印を掲げ、おまけに内部が見られないようにスモークガラスを利用した高級車。目立つ目立たない以上に、不自然極まりない光景である。

近付くのも気が引けてしまう外務省の公用車と思わしき車両に歩み寄ると、なんと

取っ手に手を伸ばす前に扉が開いて僕を迎えた。

「平塚さん、お待ちしてりました」

「あ、ありがとうございます……」

助手席の扉から出てきたのは、先ほどのSPさんのどちらかであろう。運転席にもアスリートのように体格のいいサングラスの男が座っており、どうやら川崎さんは車には乗ってはいないようだ。

黒塗りの車は見た目が高級すぎてただ乗る事にすらも緊張を感じてしまうが、じつと見つめてくるSPさんが放つ無言の圧力に押されてすごすごと車の中へ入るしかなかった。

「兄さん!! 遅かったじゃないか」

「……君が平気の平左なのに僕の方が緊張しているってのは情けないなあ」

前に護衛のごつい男が二人も乗った、マフィアの送迎車もかくの如しな高級車の中で、我が妹は平然とした様子で薄い何かの絵本的なものをペラペラと捲っていた。僕の姿を見つけた彼女は相変わず花が咲く様な笑顔を浮かべているが、僕は君の豪胆さにひたすら恐れおののくばかりだよ。

「では平塚さん。貴方の家までお送りしますので、すいませんが道順を教えてくださいませんか」

「……分かりました」

妙に静かなエンジン起動音から少しだけ遅れて、車がゆつくりと動き出した。大学構内は徐行専守となつてゐるためゆつたりとしたスピードで景色が後ろへと流れていき、レシルは興味深そうに銀杏の並木や立ち並ぶ校舎を眺めてゐる。

景色でも眺めて少しでも気分を落ち着かせようと外に視線を動かした僕は、次の瞬間頭を抱えたくなつた。この時間は学部生たちにしてみれば四限目が終わつたくらいであり、学生が校門へと向かう帰宅ラッシュのまつただ中だ。そんな中黒塗りの高級車が徐行で走つていたら注目をこれでもかというくらい集めてしまう。僕だつて歩行者の身だつたら、キャンパス内でスモーク外車が隣を通つたら何事かと思つて凝視してしまふよ。

これはちよつと高級なタクシーだ。椅子は革張りでガラスはスモーク、運転手は屈強なSPさんだけど高級なタクシーとも思つてなきややつていられない。構つてほしそうにちよいちよいと肩をつついてくる妹に対し、僕は引きつった笑顔しか向けてあげれなかつた。

* * *

「明日の7時にフォルガントさんのお迎えに上がります。それでは我々は周囲の警護にあたります」

「は、はあ……ここらへんは大学街なので騒ぐ若者はいるかもしれませんが、多めに見てあげて下さい」

飲み会後で気分が高揚した若者が屈強なSPさん達にボコボコにされるなんてことはまず起こらないだろうが、一応念には念を入れておいた方が良いだろう。そんな僕の言葉に軽く頷くと、二人のSPさん達はおんぼろの金属とびらを丁寧に閉めて部屋を後にした。

それにしても疲れた。本当に疲れた。たかだか徒歩で二十分程の距離にある我がマイホームに対して車で向かうということそのものにまず徒労を感じたし、通行人から妙に注目され続けながら車に乗るということも精神的な疲れを感じさせる。いくらスモークガラスで顔が割れていないとは言えども、注目を集めるということそのものが結構キツイ。

「ここが兄さんの家……」

「どうだい。昔一緒に住んでいた館の部屋よりも大分狭いだろ？」

「たしかにそうだね。それにボクが今住んでいる寮の部屋より小さいや」

僕よりも一足先に部屋の中へ入った妹は、興味深そうにうろちよろとしながら景色を

眺めている。

黄ばんだ壁や妙に細長い間取り。妹が現在佇んでいるリビングルームにはプリントが悠然と山を作っており、冷蔵庫の上に電子レンジを乗せる攻めの姿勢でなんとか場所を確保しようとした努力の跡が見て取れる。

洋服筆筒を兼ねた小さなベッドの隣にはテレビを見ながら食事が可能な小さいちゃぶ台が置いており、この台を退かして僕が床の上に寝れば二人分の睡眠場所は確保できるだろう。

「適当にそこらへんに座っててね。ちよつと紅茶でも入れて来るよ」

リビングから玄関に行くための廊下の壁に設置された台所へ向かい、置きっぱなしになつているヤカンの中に水を少しずつ入れていく。

そんな折に視線を感じて振り返ると、粗方部屋の中の観察を追えて満足したレシルが、ベッドに座りながらニコニコとした笑みを浮かべながら僕の方を眺めていた。

この部屋で人の視線を感じるなんてことは、それこそ同期が酒を片手に我が拠点へ乗り込んできたときや、藤沢さんの愚痴をひたすら聞きながら食事会を開いた時ぐらいだ。少なくともここ一か月はこの部屋に僕以外の人間は入ってきていない。

最大火力でギリギリカップ2人分の水を加熱したためすぐにお湯が沸き、正四面体型の安物のティーバッグを放り込んだカップの中にじよぼじよぼと注いでいく。多分彼

女からしてみれば信じられないくらい不味いお茶かもしれないが、この味に慣れてしまった僕からすれば生クリームを垂らしただけで十分満足できる一品となる。

「出来上がりしましたよつと。お好みで砂糖を加えてね」

「わあ、ありがとう!!」

机の上に入れたばかりで熱々の紅茶を二杯並べ、その脇に角砂糖が入った瓶を添える。ちゃぶ台の上に置かれたバスケットには普段から常備菜のような感じでナッツやビスケットの類を入れており、即席のお茶会には十分な装備が整った。

レシルは紅茶を受け取ると、早速中に角砂糖を数個投入していく。そう言えば彼女は昔から甘いものが好物だったはずだ。最近消費する速度が落ちて溜まりつつあるお菓子のビスケットも喜んで食べてくれるだろう。

床に置いた座布団に腰を下ろしてホッと一息を吐いた僕は、ベッドに座りながらふうと息を吹きかけて紅茶に口をつける妹の姿を改めて眺めた。

金属光沢にも似た冷やかな艶を見せる銀色の長髪、黙っていれば冷やかな印象を与える目つきや口元。東京見学に合わせて貸し出されたのかもしれないが、白くすつきりとしたワイシャツにチェック模様のスカートを合わせた彼女の恰好はどこかの高校の制服のようにも見え、エルトニア人の彼女にもよく似合っている。

しかし何分双子の兄妹ということもあってか彼女の容姿は僕と似ている部分が多く、

女子高の制服を着ているような彼女の姿を見ると、忘年会の一発芸で女装をしなければならなかった時のことをふと思ひ出してしまった。ブルリと一瞬寒気が走り、頭を振って嫌な思ひ出を追い出す。

「……ねえ。兄さんはさ、どうしてボクの前から姿を消したの？」

猫柄のティーカップを机に置いた彼女は、ふとそんなことを聞いてきた。

バスケットでもと伸ばした手を一旦引つ込めて、僕は彼女を見つめた。幼少期の自分を捨てたと思われても全く不思議は無いのに悲しみもせず怒りもしない、激情を見せることなく彼女は僕にその理由を尋ねてきている。

「どうして……か。手紙に書き残した内容じゃあ不満かい？」

「幼い頃からずっと一緒にいてくれた兄さんが、ボクが騎士学校に進学すると決まって、キリが良いという理由だけで居なくなっちゃったなんて信じたくないよ」

再会してから今までの様子から、快活にはなったもののちんちくりんな根幹は全く変わっていないと思っていたのに、どうしたわけか我が妹は予想以上に鋭い視野を持って育ったようだ。

正直な所、僕が家を出た切っ掛けはたしかに一つだけじゃない。妹の騎士学校進学が決まり、もう守ってあげなくても平気だろうから夢を追うことにした。なんとも無責任で自由すぎる動機なことか。僕は手紙にこの動機だけを書き残すことで、自分の心の中

にある汚い物を覆い隠そうとしたのだ。

現代日本にやって来たもう一つの理由は墓場まで持つていく秘密の一つのつもりだった。同郷の友人である藤沢さんや、自分自身でもある平塚准教授にも話していない。自分の中の醜い感情なんてわざわざ人に公開したい代物ではないからだ。しかし促すように視線を動かすことなく目を見つめる妹に、僕の心の奥に覆い隠した物が見られている気がしてならない。

「これからボクは兄さんにとても失礼なことを言うかもしれない。もし兄さんの本心と違っていたら、聞かなかったことにしてくれろと嬉しいよ」

「……その時は適当に流すよ。後腐れなくね」

彼女はその秘密を既に把握しているのだろう。失礼なことを言うかもしれない。そんな前置きをしている時点でほとんどばれていると言っても過言じゃない。

「兄さんは、ボクが剣術や魔法に頭角を現したことに、純粹な賞賛以外の感情を持っていないじゃないかな」

「……つまり僕が妹の君に、誇らしさと一緒に嫉妬を持ち合わせていたというのか。どうしてそう思ったんだい？」

幼少期からずっと世話をしてきた妹が、大貴族の当主である父すらも喜ぶ才能を見せた。これを喜ばずして一体何を喜ぼうかというのか。

「それは……あの日から兄さんが笑うことが増えたからだよ。遊んでいる時も、一緒に王都に連れて行ってもらった時も、ボクが顔を向けた時はいつだって——」

——仮面のような笑顔を浮かべていたよね。

ひたすら妹の成長を喜ぼうとしていた僕は、心の奥底で燻りはじめたある感情に蓋をしたまま妹とふれあっていた。臭いものには蓋をして、自分の汚さから目を背けて。自分は精神的にずっと年上で、こんな小さな子供に対して”嫉妬”など向ける筈がない。そう信じ続けた僕の顔は、いつの間にか薄っぺらい笑顔が張り付いて離れなくなってしまうた。

「昔は優しい笑顔で褒めてくれて、時々厳しく叱ってくれて、使用人たちに秘密で飼っていた小鳥が死んじゃった時は一緒に泣いてくれたよね。そんな表情豊かだった兄さんが、いつの間にか感情を無くしたかのような笑顔しか浮かべなくなつて、本当はすごい怖かつたんだ」

嫉妬の感情を抑え込むようにして泥のように塗りつけた笑顔は、段々と乾燥していきヒビが入り始める。そして父に呼び出されて、お前にはレシルのような才能がないから文官を目指せと言われてから、塗りたくつた能面の笑顔がボロボロと崩壊を始めた。

「そしていつの間にか、そんな笑顔すらも消えつつあった。ボクを見る兄さんは時々苦しげな表情を浮かべて……そしてある日完全にボクの目の前から姿を消してしまつた」

「……まさか一番ばれたくなかった君に最初に暴かれるなんて、僕もまだまだだね」

なんてことはない。精神年齢では三十をも越していた僕は、まだ十歳を過ぎたばかりの妹に嫉妬という暗い感情を浮かべていたのだ。

幼少の頃より現代日本へ帰ろうと決心していた僕だが、その一方で本当に帰るべきなのかという心残りに常日頃苛まれていた。そんな背中を大きく押ししたのは、自分の中に潜む嫉妬心を認めたくないというちんけなプライドだった。

「そうだよ。君に抱いてしまった嫉妬心を、僕は認めることが出来なかった」

魔法なんて摩訶不思議なものが存在して、騎士などという職業の人間が栄光を纏いながら街を歩く。死んだと思ったらこんな不思議な世界に生まれ変わったのだ。いつかは日本へと帰り研究活動の続きをしてやるんだという決意の脇で、ファンタジーな世界で生きてみるのも悪くはないんじゃないかという思いも持ち合わせてしまったのは無理もないだろう。

「君が小さい内は、このままエルトニアに留まって生きていくのも吝かではないと思うこともあった。そしていざ才能の差が明らかになって、今までずっと後ろを着いてきた君に抜かされたと思った僕は、どす黒い嫉妬心を抱くようになったのさ」

そこからは簡単だった。魅力的な響きにも思えた「剣と魔法の世界」は一瞬にして僕と妹を隔てる壁に変わり、妹への嫉妬心をこれ以上膨らませたくなかった僕は、なん

としても現代日本への復帰をすることを決意したのだ。

「兄さんが居なくなっちゃって、ボクはすごい悲しかったよ。今までボクが一番近くに居た兄さんが消えちゃって、騎士学校に入れられた時は心の中にぽっかり穴が開いた感じだった」

「……本当に、置いて行ってゴメンね」

ベッドに腰掛けていたレシルが、床に正座で座る僕に近付いた。彼女の澄んだ碧眼が、僕の両目をしっかりと見据えていた。

「兄さんは……もうボクから離れていかない？」

「流石に嫉妬も立ち消えたさ。君は剣術と魔法を極めて、僕は科学を追究する。もはや目指す方向性が違うんだから、こそこそと逃げ惑う必要もないよ」

僕の目の前に座り、どこか不安げに聞いてくる彼女へ、僕は自信たっぷりに言う。もう君から目を背けるような事はしないと。

「……しんみりしちゃったね。話すこと話していたらお腹も空いたことだし、夕飯の準備でも始めるよ」

ホツとした様子で笑いながらも目の端に小さく涙を流すレシルの頭をポンポンと優しく叩く。ずっと内緒にしてきて、これからも胸の中に隠していこうと思ってきた秘密を吐くことが出来て、正直な所僕も安心した勢いで泣きそうになっていた。

これ以上妹と目を合わせていたら僕まで泣き出してしまう。兄としてのプライドを守るべく、僕はすぐ後ろを向いて冷蔵庫の物色を開始した。

その5

中途半端に残ったキャベツの中心部、冷凍保存を施していた豚肉の細切れ、野菜室の奥に転がっていたニンニク、半分にかットされて放置してあったニンジン、トドメは本当に微妙な量しか残っていない焼肉のタレ。

買った物をすっかり忘れていた僕は、冷蔵庫の中にあるものだけで夕飯を作ることになった。幸運なことに豚とキャベツの炒め物がちょうど出来そうな具材がゴロゴロと冷蔵庫の中に転がっており、未知の余り物料理の探索という冒険はしなくてもよさそう
だ。

キャベツと豚肉炒めの他には、非常食として溜めこんでおいた冷凍食品から餃子をチヨイスし、これまた冷蔵庫から発掘したタクアンを添えて、買いだめしておいたインスタントみそ汁に増殖ワカメちゃんを投入、勿論主食は白米だ。新規購入せずとも冷蔵庫の中身だけで一回くらいなら結構まともな食事が仕上がるのか。

お客さんであるレシルには手伝いをさせずにちやぶ台の前に座らせて待っていてもらっている。

彼女が現在通っているというエルトニア王国立魔法騎士学園では食事についてどう

なっているかは知らないが、国の中でも大きな貴族に入るフォルガント家の娘として入学しているレシルのことだ、十中八九自炊はしていないだろう。先ほどから妙に視線を感じるのも、もしかしたら彼女にとって食事が目の前で作られているのが珍しいからかもしれない。

『あーっと、ワンバウンドボール。またもフォアボールです!! これですーアウトながら満塁のピンチ!! 内野手がマウンドに——』

「また初回炎上の流れかよ。レシルー、机の上にある直方体の物体の、十二個同じようなボタンが並んでいる中のどれでも良いから押してくれないかな」

「うん。分かったー」

ラジオがてらに着けていたテレビの野球中継では、試合開始から間もないにもかかわらず焦げ臭い展開となつているようだ。幸いリモコンの使い方を間違えなかったレシルのおかげで大参事の現場の目撃だけは回避できそうだ。威勢のいい実況アナウンサーの声がプツリと立ち消え、淡々とニュースを解説していく落ち着いた声に切り替わる。

「兄さんっていつも自分で食事を作っているの?」

「なるだけ作るようにはしているよ。外で食べてばかりだとお金がかかるしね」

「そっか……昔は使用人たちが食事を作ってくれてたし、兄さんが料理をしているのを

みるのは初めてかもしれないな」

庶子とは言えども貴族の系譜の僕たちだ。衣食住に困ることなく育った幼少期においては、確かに自炊をした経験は無い。精々が野外に飛び出したときに釣った川魚をたき火で焼いたりした程度か。

そんな僕が今では余り物で夕飯を作れるまで成長したのだ。食べている物のグレードは間違いなくダウンしているが、これが現代を生き抜いていく術なのだから僕は全く恥じるつもりは無い。

「あんまり期待はしないようにね。間に合わせの物しか作れないから」

「ううん、兄さんが作った料理だからすごい楽しみだよ!!」

全く嬉しいことを言ってくれる。人に自分が作った料理を食べて貰えるなんてそういうある機会じゃないから、僕自身楽しみでもある。

加熱したフライパンの上で焼いている冷凍餃子が香ばしい匂いを漂わせ始めた。コイツらを皿にのせて、前もって沸かしてあるお湯をインスタントみそ汁の具を入れたお椀に流し込めば、今日の夕飯は出来上がりだ。少し多めに作っていることだし明日の夕飯にも転用できるだろう。

「そろそろ出来上がるからねー」

「兄さん手慣れている……」

いくら生まれてから十数年間使用人に頼つてばかりの生活をしていたとは言え、そんな状態からでも数年一人暮らしを続けていれば嫌でも家事のスキルは上昇していく。料理を作る際も死んだ待ち時間というのが段々と減つて来ているのが自覚できる。

餃子を適当に並べた皿を持ち上げ、お腹を空かせている妹の元へと持つて行こう。そんな時だった。

——ピンポーン

来訪者の存在を告げる鐘の音、なんて言つたら格好いいかもしれない。我がアパートのドアチャイムは年代物のせいかどこかくもつた怪しい音色を持つているため、移り住んだ当初は来訪者がベルを鳴らすたびに驚いたりもしていたものだ。

普段だったら居留守の一つでも使おうかと思う所だが、今日に限つて言えば僕は機嫌が良い。なんたつてレシルと再会できたうえに、その間に作つてしまつたわだかまりも解消できたのだから。

「え?! な、なに今の音?!」

「なあに、ただの呼び鈴だから怖がることは無いよ。誰が来たのかちよつと確認してくる」

普通のベルの音ならばまだしも、鳴り終わりで音階が半オクターブ下がる不気味な響き方をするから、初めて聞くならばこれぐらいの反応は想定の内だ。手に持つた餃子の

皿をちやぶ台に置くと僕は玄関の方へ引き返した。時間は既に六時半近く、新聞の勧誘にすると少々時間がずれすぎているような気がする。果たしていったい誰だろうか。

「はーい、どちら様ですかー?」

「あ、レイ? ちよつとお願いがあるんだけど、開けて貰つていい?」

誰かと思つたら、先ほど一緒に帰るといふ選択を回避した藤沢さんじゃないか。扉に掛けた手が、思わず凍りついたように止まる。

「え、ええとどうしたんだい? こんな時間に訪ねて来るなんて」

「それがさ、急にウチの炊飯器が壊れちゃつてね。お米炊こうとしてもうんともすんとも言わなくて……今度埋め合わせするから、今夜はそつちで一緒に食べてもいいかしら」

「ご飯はたくさん炊いてある。主菜も余り物を一掃したために大目に作つてある。味噌汁もインスタントだからお湯を沸かせばそれで終わる。しかし彼女を僕の部屋に入れてしまえば、レシルと鉢合わせすることになってしまう。」

川崎さんに言われたことを思い出す。今日言われた情報を漏えいさせてはならない。その約束は、レシルと藤沢さんがかち合っただけで簡単に破り捨ててしまうことになりかねない。

「あ、あはは……じ、実は僕は今日もう外で食べてきちゃつたんだ」

「そう……なら炊飯器だけ使わせて貰っていいかしら？　夕飯が食パンっていうのは避けたいし……あとなんでドアを閉めたままなの？」

「えーとだね……ちよつと僕の所も炊飯器がぶつ壊れててさ」

「……もしかして、今日のこと、まだ許して貰えてていないの？」

なんとか言い訳をつけて彼女にこの部屋への進入を諦めて貰えないか苦心していた僕の耳に、急にトーンを下げた藤沢さんの声が届いた。

「……叱られた時に自分の認識の甘さに気付かされたわ。特殊な力を持っている以上、一層科学者倫理に気を使わなければならないことも分かった。でも、まだ私の考えに甘さが」

「ああ、もうっ」

この子は存外に長く引きずるタイプの人間なのか。後ろを見て玄関からは妹の姿が死角になって見えないことを確認すると、僕は仕方が無く扉を開け放った。そこには案の定、僕が扉を開けたのを驚いた様にして見つめる藤沢さんの姿があった。

「さつきも言ったでしょ。失敗から学ぶことが重要だつて。それに僕は一度説教を終えた後にネチネチ嫌味を言う性格じゃありません!!」

「レイ……うん、そうよね……良かった」

また叱られるのではないかと思っていたのか強張った表情の藤沢さんは、ヤケクソに

なって放ったフオーローによって安心させられたようだ。それにしても根に持つ性格だと言われたような気がして心外である。

一転して僕が不満げな顔になり、藤沢さんが安心したように笑う。ひとまず解決とあったところか、ちよつぴりの小競り合いもここまでかなと思つた僕は、再度扉の取っ手に手を掛けた。

「まあそういう訳だから、今日はごめんね。おやすみ」

「……ちよつと待って」

後少して扉が閉まるかなという所で、藤沢さんがガシリとドアノブを掴んで阻止した。鼻をスンスンと鳴らして顔を段々と剣呑な物へと変えていく様子を見て、思わず口から変な声が出てしまう。

「ヒイツ!? ど、どうかしたのかな?」

「アンタさつきは外で食べてきたつて言つたわよね。でも何だか妙に香ばしい匂いがしないかしら」

冷や汗を流しながらなんとかドアを閉めようとするが、扉と玄関の間に身を乗り込まれては僕の腕力が貧弱であろうとなかろうと、もはや扉を閉めることは叶わない。

玄関の近くに台所があり、そのすぐ奥にはリビングがあるという間取りが原因だ。夕飯の炒め物や餃子の匂いが玄関でもはつきりと分かるくらい漂ってきている。胡散臭

そうに此方をみる藤沢さんに果たしてどう言い訳をしたものか。冷や汗を垂らしながら考えている僕の背後で、更に最悪な音が響いた。

「兄さん!! ご飯冷めちゃうよ!!」

「あつ」

思わず後ろを振り返ると、リビングから顔を出して不満げな声を漏らす我が妹の姿。自分の顔から血が引いていくのがびつくりするぐらい感じ取れた。ギギギとぎこちなく首を後ろにやれば、妹の姿をばつちりと目撃しちやつた藤沢さんがいましたとさ。

「ねえレイ。ちよつと話を聞かせて貰えるかしら」

「あれ? 兄さん、お客さんつてこの人?」

川崎さん、先に謝っておきます。あなたとの約束、どうやらその日の内に破ることになりそうです。

* * *

直径が僕の身長にも満たない、一人暮らしには手ごろなサイズの丸ちゃぶ台。普段は一人でこのちゃぶ台で食事を摘みながらテレビをぼんやりと見るといった夕飯タイムを満喫しているが、今日に関しては大分様相が異なる。

僕の右斜め前では銀髪の髪の少女が少し不満げな様子でキャベツをフォークでつつき、左斜め前には赤紫色の髪の後輩が隣に座る少女と僕を見比べて何かを言いたそうな顔を浮かべている。このどんよりとした空気に耐えられなくなつてチャンネルを野球中継に戻したテレビをわき目で見ていたら、鋭い目で見据える藤沢さんがリモコンを引つ掴み電源ボタンを押して消してしまった。

「レイ、この女の子ってどちら様？」

「え、ええとねえ……田舎から東京に遊びに来た妹がウチに泊まりたいって言つてさあ」
「へえ。正直に妹さんと認めたのは感心するわね。ところでその田舎つてどこかしら」

僕は間違つたことは言つていない。そう言えば藤沢さんには、僕には双子の妹が居るという話をしたことがあつたか。そんな彼女に馬鹿正直にレシルを妹と言つてしまうなんてなんたる不覚。しかし良く似た他人ですよと言つたところで彼女は絶対に納得しないだろうな。流石の僕も翻訳魔法を介してだが日本語を流暢に話す僕によく似た銀髪少女を、さつきそこで意気投合した赤の他人ですと言ひ張る豪胆な精神は持ち合わせていない。

「ねえねえ!! 僕と兄さんの夕食会にいきなり混じつてきて、結局君は誰なのさ?」

「あなたはレイの妹さんね。まだ自己紹介が済んでいなかったわ。私はあなたのお兄さんと同じ学校で勉強している藤沢レナといいます」

僕に向けていた胡散臭いものを見るような顔つきから一転して急に柔らかい笑顔で浮かべる藤沢さんに、レシルは調子を崩されたように困った顔で首を傾げた。

「ええと、ボクは……レシルっています」

フルネームではなく敢えてニックネームをチョイスしてくるあたり、多分彼女も川崎さんから言われた約束を守ろうとしているのだろう。少し表情を硬くしたレシルの顔を覗き込んだ藤沢さんは、小さく笑顔を浮かべた。コイツ絶対悪巧みしていやがる。

「レシルちゃんね。多分私はあなたと同じ国の出身よ。故郷ではヘレナ・ヴィクトリアス・エルトニアと名乗っていたわ」

「……えっ!? ヴ、ヴィクトリアス・エルトニアって……あわわわわ」

まずレシルはいたずらっ気に笑う藤沢さんの顔を見つめ、次に特徴的な赤紫色の髪の毛を見つめて目を見開き、最後に僕の方へ助けを求めるような視線を向けてきた。流石に現役のエルトニア人、しかも貴族社会にもまれて育って現住所は王都な彼女だ。名前を聞かされたら一発で藤沢さんが王族の一人だと分かるよね。

「に、兄さん!? なんて殿下がこんなところにいるのさ!!」

「どうしてって……炊飯器が故障してしようがなく来たんだろ」

「いやそうじゃなくって!! てか、彼女ってボク達がまだ小さかったころに行方不明になった……」

「あら、よく知っているじゃない。8年前まで王女として振る舞っていたのも今じゃ良
い思い出よ」

ターゲットが我が妹へと移った事だしチャンスかもしれない。手をするするとりモ
コンへと伸ばし、あと数センチで野球中継をつけることが出来るとこまで来た。そして
手が触れるか触れないかという所で、慌てふためくレシルを見ていたずらつ気に笑つて
いた藤沢さんが瞬時に僕へ鋭い視線を飛ばした。

美人さんが怒ると怖いというのは本当のようで、鋭く睨まれると思わず委縮してしま
い手をすぐごと引つ込める。僕の方が精神的には年上のはずなのに、なんだか逆らつ
ちやいけない雰囲気を感じる。

「まだアンタへの話は終わってないからテレビは禁止。王族についても知っているし、
そもそもアンタの妹さんだし。彼女どう考えてもエルトニア人じゃない」

「ええと、これには深い訳があつてだね……」

さて、一体どう話したのか。馬鹿正直に本当のことを話してしまい、川崎さんとの
約束をいきなり破るか。それともレシルも別経路で東京へと流れ着いたと嘘を話すか。

多分後者を選択しても、上手く話せば疑念は残るかもしれないが真実を隠し通せるだ
ろう。彼女がレシル関連で知っている情報はあくまでも「僕に妹がいる」のと「僕が妹
をエルトニアに残して此方の世界に来た」くらいだ。僕が転移した後には彼女が何かに巻

き込まれてこっちに漂流してきたと言っても、藤沢さんにはそれを嘘と断言する証拠もない。

「カ、カワサキさんから聞いてないよ……行方不明になった殿下がトウキョウに来てい
るなんて……」

「レシルちゃん、川崎さんってどなたかしら」

「ええと、ガймシヨウってところの役人さんで……ってウソウソ!! 今のは忘れて下
さい!!」

動転していた妹は、ぶつぶつと漏らしていた独り言に目敏く気が付いた藤沢さんに、
あろうことかとんでもなく重要な情報を漏らしてしまった。知らない知らないとブン
ブン頭を振るレシルの姿に藤沢さんは少々の罪悪感を感じたのか、優しく彼女の頭を撫
で始めた。その一方で僕はどんどん逃げ道が塞がれていく状況に目が回り始めた。

「ええと、彼女は僕に遅れること三年でこっちに辿りついて……」

「その言い訳は通用しないわ。どうせレシルちゃんも私たちと同じ経路を辿って来たど
か言おうとしていたんでしょ。でも彼女は外務省と繋がりと漏らしてしまった。
ただの戸籍も怪しい漂流者が、何で外務省なんかと関わりを持つのよ」

外務省が関わってきているということは、つまりレシルの存在が外交上の取扱いに
なっていることと同義である。パツと思いつく言い訳がもはや見つからず、正直もう手

詰まりだ。降参と言わんばかりに僕は両手を上げた。

「あーあ駄目だもう隠しきれない。一応言っておくよ。妹の件に関しては完全に機密事項だ。僕個人が秘密だと喚いている訳じゃなくて、外務省の役人に直々に言われたんだ」

「……私が無遠慮に言いふらすように見える？ それに、予想だけどその事情は多分私も無関係とは言えないんじゃないかしら」

「たしかにそうさ。無関係どころか、君の人生の今後に関わる話かもしれない。良いか、絶対に言いふらすなよ」

「分かっているっての」

結局こうなってしまったか。なんとか誤魔化せないかなと思っていたが、エルトニアに居るはずのレシルが東京にいるという案件に外務省が関与していると知られたからには、もはやエルトニアと日本に極秘の外交ルートが築かれていると予想させるには十分すぎる。

責任を転嫁するならば、このアパートの周りを巡回しているSPさんが藤沢さんが部屋に侵入してくるのを阻止しなかったことだ。本当に情報を漏えいさせたくないのなら、僕の部屋を訪れようとする人間を片っ端から排除をするべきだった。大分むちゃくちゃな理論なのは自覚をしているが、藤沢さんにばれてしまったのは完全に僕のせい

とは言い切れないはずである。

「……この始まりを話す前に、まずは身近な所から。来年から僕らは大月キャンパスに異動だったよね」

「ええ。でもそれがレシルちゃんとの何の関係があるのよ」

「聞いて驚け。大月に作られてんのはあくまで玄関口で、実際の異動先は国立東都工科大学リーヴェル校だ」

どうしようどうしようと口から漏らしながら死んだ目で頭を抱える妹の背中をポンポンと叩きつつ、藤沢さんにそんなことを言い放った。最初こそ彼女は意味の分からなといった顔をしていたが、僕が言った内容を理解するや否や、結構なお点前の顔芸を披露しながら驚愕の叫び声を上げた。

その6

少し冷めてしまったが、適度に火が通ったキャベツの芯は歯ごたえがあつて美味しい。甘辛いタレや肉と一緒に頬張ればご飯が進む。ここまで美味しいものが作れるんだから余りものも捨てた物ではない。丁度冷蔵庫に眠っていた野菜や焼き肉のタレを使い切ることが出来たのもグッドだ。

そんな感じでポリポリと夕食を頬張る僕と妹、そして藤沢さんの三人。お腹が空いていたということもあり、今日川崎さんから受けた説明は食事をしながら話すことに決めたのだ。そういう訳もあり、一応テレビは消したままにしてある。

「へえ、俄かには信じられないけど……予想もしていなかったタイミングで故郷に戻れることになりそうね」

「僕にとつての故郷は王都から離れたエルドリアンだけど、藤沢さんはもろ実家がキャンプス近くにあるもんね」

彼女の実家、それはすなわち王宮である。もしかしたら実家通いも夢じゃない、そんな冗談も浮かんできてくるが彼女の顔は少々曇り気味だ。

「実家……ね。8年間行方不明だった人間が顔を出したところでダミーか何かと思われ

る可能性も大きいし、こっちに來て日が浅い時ならまだしも今更王族として振る舞う氣も……」

失われた8年を取り戻す為に王族として名乗りを上げるか、それともこの8年間培ってきた経験で現代人として生きるか。いつかは考えなくてはと常日頃僕に愚痴を漏らしていた彼女は、思わぬタイミングで決断の時が近付いているのかもしれない。

「ねえレシル、川崎さんは藤沢さんの身元については知らないんだよな」

「うーん……少なくともボクや兄さんの前では殿下の話はしてはいないはずだよ」

初めて食べるであろう炒め物や餃子を結構な勢いで食べていく妹は、口をモゴモゴとさせながら首をかしげた。たしかに川崎さんからの話で藤沢さんについての話が出てこなかったし、そして出向者名簿の中に藤沢さんが偽名のまま記載されていたことから、日本政府は彼女の正体を把握していない、もしくは把握していても裏が取れているわけではないのだろう。

そうなれば、藤沢さんが自己申告をしなければ少なくとも来年の春まで問題を先延ばしにすることが可能だろう。これからどういう立場で生きていくのか、大きな問題だから考える時間は多いにこしたことはない。

「レシルちゃん、今の私は王族じゃなくてただの学生に過ぎないわ。気軽にレナって呼んでくれると嬉しいな」

「で、でも不敬なんじゃ……兄さん、どうしよう」

「本人が良いって言ってるんだから良いんじゃないかな。変に壁を作ると藤沢さん拗ねるよ」

ギロリとマンガンヘアーな彼女から視線が突き刺さるが、手を伸ばしても届かぬちやぶ台の向こう側だ。強気にフンと鼻を鳴らしても大丈夫なのは良いことである。手が出せないことを悔しそうにしている藤沢さんに僕は満面の笑みを返す。そんな僕らの様子を見ていたレシルが口をあんぐりと開けた。

「……随分仲が良いんだね」

「まあ互いに唯一の同郷出身者だからね。気兼ねなく話せるつてのは大きいよ」

元王族を煽ってニヨニヨと笑う貴族の端くれ。この関係は妹にとって非常に不思議で驚きを感じる光景なのだろう。騎士学園でレシルがどれ程の成績を収めているのかは知らないが、フォルガント家のバックアップで学園に通う彼女の立場はそれなりに高いだろう。そんな彼女にとっても王族という存在は天上の人に違いない。ただしこの場合は相手が相手だし、早めに藤沢さんに慣れてくれると僕としてもやりやすい。

「……レナさんは、王女として戻ってきてくれないんですか？」

「いきなりの話だし、まだ分からないとしか言えないわ。たしかに両親と再会して詫びの一つは入れたいけれども、今まで居なかった王女が戻ってきた結果次代の玉座争いが

激化する可能性もあるし、正直な所今の生活を壊したくはないというのもあるわ」

言われてみればそうだ。今のエルトニアは日本との交流を進める余裕があるくらいには政界が安定しているのだろう。しようがない話ではあるが、8年前に何人かいる王の跡継ぎの中から一人が消えたくらいでは国は傾かないということか。

そんな穏やかな水面に、神隠しで忽然と姿を消した王女ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアが加わったらどうだろうか。予想だにしない帰還は喜ばれはするだろうが、下手をすると跡継ぎ候補が増えるおかげで政界がごたくごたく可能性がある。

ただ生存報告をしただけで国がごたくごたくかもしれないなんて、王族は面倒くさいものだ。たとえ実家に戻ったところで妻の子供だから跡継ぎ争いに端から加わることのないであろう僕は、しがらみを考えなくても良いという意味ではすごく恵まれているのだろう。

「あー、そうだ。実家といえば、今のフォルガント家はどんな感じになってるのかな」
少々重い話題を変えるべく、ふと頭に浮かんだ疑問を口に出した。跡継ぎ問題に僕が加わる筈がないのは既に承知の上だが、果たして妹についてはどうだろうか。実力主義的な考えを持っている当主は、優れた才能を見せたレシルをもしかしたら次代フォルガント家当主として据える可能性も考えられなくはない。

だがそうなると本妻の子供達は黙っちゃあいないに違いない。こうしてみると一

人っ子で親戚とも良好な仲を築いている前世の僕こと平塚先生や、現代日本に復帰できたことで貴族の生活がもはや他人事になっていく僕は本当に気軽であるように感じられる。

しみりとした表情を浮かべつつスプーンで白米を掻っ食らっていた妹が、何かに気が付いたように顔を上げた。もしかしたら僕に何かを話し忘れていたのを思い出したのだろうか、きちんと物は嘔んでから飲み込んだ方が良いと思うな。案の定中途半端に嘔んだ状態で一気に飲み込んだせいで苦しそうな表情を浮かべるレシルに、僕は無言で自分の麦茶を渡した。

「ケホツ……あ、ありがとう兄さん。それでフォルガント家についてだけど、兄さんに一つ話し忘れていたことがあったんだ」

どこか気まずそうにもぞもぞとするレシルを見て一瞬トイレにでも行きたいのかと変なことを考えてしまったが、フォルガント家に関して僕に伝える話で、尚且つ妹がどこか気まずくなるような話なんて、思いつくのは一つしかない。

「……もしかして僕はもう父上から勘当でもされたのかな？」

「えっ!?……なんで兄さんがそれを……」

「やっぱり。さつき僕とレシルの間にある個人的なわだかまりは解いたからね。君が僕に気まずく思うこと、しかもフォルガント家関連なんて自ずと限られてくるよ」

フォルガント家からの除名処分。これは現代日本に流れ着いた時から既に覚悟の上だった。庶子の身分にありながら大貴族の庇護下から逃げ出したのだ、一族から破門にされたところで文句も言えない。

毒気を抜かれたような顔でポカんとする妹の一方で、僕はその知らせを聞いても楽観的でいられる。何故かは決まっている。フォルガント家一族としての立場が無くされたところで、今更何も困る事なんてないからだ。こちらで生計を立てていて衣食住は勿論のこと就職先まで決まっているのだから、影響があるとすれば精々がラスティレイ・フォルガントと名乗ることが認められなくなっただくらいか。

「フォルガントの姓が名乗れないのは別に大した問題じゃないさ。もう平塚礼二の名前で慣れちゃったし、こちらの戸籍でもそうなっている」

「……兄さんまで名前を捨てるの？　じゃあボクは兄さんをなんて呼べば……」
「普通に兄さん、もしくはは礼二、それが嫌ならラスティで良いじゃないか。フォルガントの苗字は消えても困らないけど、別にラスティレイの名前まで捨てる気はないよ。だからレシルもそう難しく考えるなって」

途端に顔を明るくするレシルに、こちらの顔もだらしがなくニヤついてしまう。

しかし本当に勘当されているとなると、川崎さんに一応話を通しておいた方が良くかもしれない。重箱の隅をつつくような指摘だが、僕が既にフォルガント家の一員では無

いことが確定した以上、今度の合同説明会用のスライドにおける僕の名前の場所にラストイレイ・フォルガントと書いてあるのは宜しくはない。

「……せつかく故郷に戻れるって言うのに、なんだか嬉しさよりも先に出て来るものが多いわ。レイも私もこっちの世界に馴染みすぎたのかしらね」

「そもそもエルトニアに故郷として戻るといふよりも、出張先というイメージが先行しているよ。今お前は何処の人間だと問われたら、僕は日本人と答えるだろうさ」

ズズズツと味噌汁を啜りながら憂いを帯びた表情で藤沢さんがぼつりと漏らす。故郷ではあるけど故郷じゃない。そんなモヤモヤとした感覚は、僕にも分からなくはなかった。

* * *

「兄さん兄さん」

どこかしんみりとした空気で食事が進行し、明日の朝レシルがリーヴェルに帰る前にもう一度顔を見せる約束をした藤沢さんは、おやすみなさいと一言残して自分の部屋へと戻っていった。

結局川崎さんに言われた約束を破ることになってしまったが、事実を聞かされた藤沢

さんが取り乱したりすぐに故郷に帰りたい等と騒がなくてよかった。まあ元々自分の故郷のほずであるエルトニアをどこか客観的に捉えていることが多かった彼女だから、僕も最初からそのようなトラブルについてに心配はあまりしていなかった。

僕も彼女も、まずはゆっくり考えることが重要だ。もう一度あの世界を前にして、今度はどういう立場で向き合えば良いのか。僕は実家から勘当されたが妹という繋がりが、彼女は王家の一族という肩書を持つている。ただ未知の職場で働くというわけではないのだから、頭の中を整理するに越したことはない。

「ねえ兄さんってば!!」

「うわあ!! 急にどうしたのさ」

「どうしたもこうしたもないよ!! 呼んでいるのに無視するなんてひどいよ」

知らぬ間にすぐ隣に近付いていた妹の姿を見て驚いてしまった。レシルはずっと押し黙って考え事をしていた僕を不満そうに見つめながら、肩口を指で突つついてくる。

「ゴメン、ちよつと考え事をしていた。それでどうしたんだい?」

「うん。兄さんに貸してもらったバジャマだけど、この格好おかしくない?」

「まあちよつとダボついてるけど、寝間着なんて着やすけりやいいだろう」

シャワーを浴びてきたために銀の長髪はほんのりと湿っており、艶のある肌が淡く火照っている。ダボダボの男用寝間着に身を包み鎖骨の辺りを肌蹴させた彼女は、適当に

あしらったせいか再度不満げにムーっと唸った。

この部屋には女物の服や下着は無い。当然だ、僕は男なのだから。押入れの奥の方にはチエックススカートにひらひらシャツがビニール袋へぶち込まれているが、アレは何時ぞやの忘年会一発芸のために買わざるをえなかつた曰くつきの一品のために思い出したくはない。逆に言えばそれ以外には男物の物しかないのだ。

そんな折に僕の部屋に上陸したこの銀髪少女。代えの下着くらいは自分で持つてきていたそうだが、生憎寝間着に関しては考えてなかつたようだ。そのまま下着で寝ようかな、ととんでもないことを言い出したレシルに、僕は普段自分が使っているパジャマを明け渡したのだ。体を拘束することのないダボダボ感、首の部分が広く通気性も良いというお気に入りの一品だが背に腹は代えられぬ。しょうがないので僕は今日は普段着就寝だ。

色々有ったため既に目蓋が重くなっている。普段ならばもう少し長く起きて論文の執筆やらなんやらを進めるところだが、生憎今日はもうそんな気力もない。

食事を乗せていたちゃぶ台を部屋の隅っこの方に動かし、リビングルームの中心部に一定以上のスペースを作成する。周囲をテレビやベッド、そして冷蔵庫に囲まれているが、最低限一人寝るスペースは確保できただろう。

「兄さん何してんの？」

「ああ、寢床の作成だよ。この部屋は狭いから、二人以上の人が泊まるとなるとこの手の作業が必要になるんだ」

不思議そうに此方を見つめる妹をとりあえずベッドに座らせて、ある程度の広さを得たら次にベッド下の箆笥をこそごと探る。一人暮らししか想定していないこの部屋では、二人目以降の掛布団なんてものは存在しない。日中は暖かいが夜になると気温がだいぶ下がる、そんな秋口の気候で布団を掛けずに寝るのはよろしくない。しかし予備のバスタオルも妹に貸してしまつて今は部屋干し中であり、今は別のタオルケット候補を探さなくてはならない。

季節外れの服が詰め込まれた箆笥から適当に取り出したのは、冬に部屋で着るちゃんちゃんこだ。少々厚ぼつたい見た目だが、コイツを纏つて寝れば寝心地はともかく風邪をひくようなことはないかと思う。着々と床寝の準備を進める僕の背中に声が掛かったのは、何を枕に使うかと悩み始めたときだった。

「あ、あのさ……そんなことしなくても、ベッドに2人で寝れば良いんじゃない？」
「……うん、まあ、うん」

それを回避するために頑張っているのだ。いくら兄妹とは言えども、同じ布団に包まつて寝るような歳はとうの昔に過ぎ去っている。それに彼女の案は物理的に難しいのだ。

「僕らはもう大人に近い歳なんだから良くないよ。それに、そのベッドは紛れもなく一人用だ」

レシルが腰かけているベッドは、リサイクルショップで見つけてきた筆筭一体型の優れものだ。しかし堅いとか熱がこもりやすい等といった問題点が存在し、その中でも最たるものがただ只管に狭いということだ。

このベッドを買った当初、僕は寝ている間にベッドから転げ落ちるなんて漫画やコントじゃなければあり得ないと思っていた。そして部屋に設置して満足して、記念すべき第一夜目に寝相で床に転げ落ちた。理由は簡単だった、ただ只管にベッドとして狭かったのだ。今では別の部屋の住民に騒音が伝わらないように、落下先となる床の上にカーペットを敷いている始末だ。

寝転がった時にベッドの両端が自分の肩幅よりもやや大きいくらいしかなかったのを危険と捉えていれば、もしくははベッドの両端が妙に丸みを帯びていて体勢が崩れた時にすぐ床に転げ落ちる可能性があることに気が付いていれば、おそらくこの欠陥ベッドを買うことはなかっただろう。もしかしたらリサイクルショップに売られていたのも、前に使っていた人が度重なる墜落に嫌気がさしたからなのかもしれない。

「今年ぐらいになって体が慣れたのかようやく転げ落ちることはなくなっただけど、その狭い空間に2人並んで寝たら絶対にどっちかが墜落する。そもそも二人ならんで寝る

「ことすら困難だものね」

「た、たしかに狭いけど……むう」

理解はできるけど納得はできない、そんな顔をレシルが浮かべている。まあ何を言つたところで狭苦しいベッドが広くなるわけでもないのでしょうがない。

「じゃあ灯り消すよ」

「……はい」

部屋の隅にある電灯のスイッチを押すと明るかった部屋が一気に闇に包まれる。街灯のぼんやりと淡い光が窓から差し込み、その光を頼りにして仮の寝床へそりそりと歩き出した。そうしてベッド横に腰を下ろそうとした時、闇の中から伸びてきた白い手が僕の腕を引つ掴んだ。

「ヒイツ!? な、何事……」

「ふふん、驚いた?」

体勢を崩した僕は引つ張られる腕につられてそのままベッドに倒れこんでしまい、立ち上がるうとしてじたばたしても正面から何者かに強い力で抱きつかれている為上手くない。いきなりのことで気が動転している僕の耳に入ったのは、いたずらが成功したかのような茶目つ気を帯びたレシルの声だった。

「ちよ、ちよつとなにするのさ。離してくれないと寝床に行けないよ」

「たしかにこのベッドは二人ならんで寝るには狭いけど、これだと平気だよね」

僕の言葉なんて聞く耳を持たないでレシルが得意げに言う。彼女が編み出した並んで寝ることが難しいこのベッドに2人で寝る方法、それは片方が抱き枕になれば良いんじゃないかというワイルドな物だった。すっかりとホールドされてしまった僕の前には、暗いからよくは見えないが嬉しそうに笑う妹の顔があった。

体同士が密着しているから仄かな熱と柔らかい感触が服の上から直に伝わり、熱っぽい吐息が鼻の頭に掛かる。相手がいくら妹だからといって、とんでもない美少女さんに抱きつかれている状況だから顔が赤くなつて頭がくらくらとしてしまう。相手は自分と同じような見た目だと思いつつも、視覚以外の感覚を遮断することが出来ずに思考が更に纏まらなくなっていく。

なんとかしてレシルの拘束から逃げようにも、体全体がしっかりと抑え込まれてしまつているためびっくりするほど動けない。押さえ方が上手いのと、そもそも力が強いこともあるのではないか。会議室で絞殺されかけたときもそうだけど、なんでこの子は僕と同じ体格でありながらこうも身体能力に顕著な差が生まれてしまつていいのか不思議でならない。

「近すぎるって!! とりあえず離れようよ!!」

「……兄さんが家を出ていく前までは、よく一緒に寝てくれたよね。今日だけ、もう一度

お願い」

息遣いも感じられるような場所からレシルの声が聞こえる。彼女の一言が頭に入ってきた瞬間、あたふたと顔を赤くしていた筈の自分の頭が急激に冷静になっていくのが感じられた。5年振りの肉親との再会、まだ甘え足りなかつた分を取り戻そうとする彼女に対して、僕はあろうことか欲情にも近い感情を抱いていたのか。冷めた心の奥から自己嫌悪の感情が湧き出てきて、同時にレシルに対して非常に申し訳ないという思いも強くなった。

「……たしかに昔はよくこうやって一緒に寝たもんだね」

「うん……兄さんが居なくなつてからの一時期は抱き枕がないと寝れないこともあつたよ」

自由に動くようになった片腕で、ゆっくりとレシルの背中を抱きしめる。今や僕の後ろを付いて回るひ弱な子供ではなくなつた彼女は、それでも僕の妹には変わりはない。そして実家から勘当処分をくらい、フォルガント家の一族ではなくなつた僕も彼女の兄に違いない。妹と一緒に寝たいというならば、昔みたいに背中をポンポンと叩いてあやしめながら寝てやろうじゃないか。

「本当に幾つになつても甘えん坊さんだな。しょうがない、今日は一緒に寝てあげるよ」
「ありがとう……苗字の繋がりは消えても、兄さんは兄さんだよ」

そして互いにおやすみなさいと言ひ交して僕たちは目を閉じた。

第三話 「秒読み!! 大月左遷までに残された時間」

その1

「……なんと言うか、すごくコメントに困る説明会だった」

大学近くのカフェテリアで魂が抜け落ちた様子でしんみりと話すのは、前世の僕こと平塚准教授だ。4人席の反対側に腰掛けるのは僕と藤沢さん。僕以外は双方ともにごんよりとした雰囲気纏っており、それほどまでに先ほど聞かされた話が重かったことを示している。

「藤沢にしてみれば一応は帰郷という形なんだろうけど、そう簡単な話じゃないだろう」「自分を隠していなきゃ下手すりゃ政界ががたつきますよ……以前レイに聞いていたとはいえ、実際に自分の耳で話を聞いたら結構くるものがあるわね」

「本当大変だよな……って、おいレイ!! お前まさか前もって話を聞いていたのか!」

ここの微妙な空気が漂っているのは、僕たち3人が先ほど参加したとある説明会に原因がある。レシルがリーヴェルに帰還してからおおよそ1週間後の今日、とうとう壮大なる大月キャンパスの秘密が計画の参加者全員に知らされたのだ。

「うん、先週の木曜日に外務省の方から個別に聞かされたんだ。妹と再会するついでと

いう形でだけどね。担当者の人から口外しないように言われたから申し訳ないけど黙っていたんだ」

「妹って……ああ、たしかレシルティアという名前の。そう言えばさっきの説明会で人物交流が始まっているって聞いたけど、その関連か？」

「そうみたい。本当は藤沢さんにも黙っているはずだったんだけど、妹の存在がばれちゃってね……」

僕と藤沢さんの秘密を知っているのは、身内の人間では平塚先生くらいだ。およそ一年前のこと、研究室見学に訪れた藤沢さんの髪の毛を目撃した平塚先生は顎に手を当てて何かを考え始め、設備や研究内容の説明を終えてホッと一息をついた僕と藤沢さんを教授室に拉致して色々と問い詰めてきたのだ。僕の事情を把握していた平塚先生は、藤沢さんの淡赤紫の髪の毛がただ染めているだけには見えなかったようだ。最初はどう誤魔化そうかと思っていたが、あっさり藤沢さんが本当のことを話してしまったために、秘密を共有する人間が3人になったのだ。

そんなこんなでエルトニアの存在を前もって知っていた先生は、質疑応答時間では呆然とする参加者の中で際立って烈火の如くバンバンと質問をぶつけまくった。やれ治安は大丈夫なのか、現地住民の同意はとれているのか、研究設備はどうなっている、とどうか研究する時間はあるのか、果てはそもそもこのリーヴェル新キャンパス計画に学

術的な意義が存在するのか等々。質疑時間のおよそ3分の1を平塚先生のマシンガン質問が占めていたような気がする。

「しっかしなあ、今回の計画の学術的な位置づけが言わば科学技術の布教だろ？　こりゃあ相当重い話だよ」

「僕もそう思うよ。それに学生が致命的に足りていない。これじゃあ少なくとも最初の2年くらいは研究室活動は上手く回らないんじゃないかな」

事実、教授昇進を順調に進める平塚先生や、助教として一步目を踏み出すことになった僕にとってかなり重たい話である。研究時間がどれ程取れるのかはまだ分からないが、業績をアピールしていかなければならない僕たちにとって、研究活動が滞りなく行えるのかどうかは死活問題となってくる。

川崎さんから話を聞かされた当初は故郷を見据えてどうしようかなどと少々甘く考えていたが、数日ほど経ってからこれってかなりのいばら道なんじゃないかということに気が付いたので。そうなるってからは大変だった。日々ひたすら死んだような顔を晒す僕を心配して話しかけてくれるラボ面もいたが、秘密にしなければならぬ情報のために平気を装わなければならなかったのだから。

「いくら大学からの評価が新キャン事業で上がるつつたつてなあ、そもそも研究者として株を上げられなきゃ話にならない」

「助教としての一步目からドン詰まりじゃ笑えないよね。藤沢さんも来年はちよつとキツイ年になりそうだよ」

「ええ……来年修士一年生の学生つて、明言はされなかつたけど名簿を見たら私だけじゃない。授業は本キャンに行かなきゃならないし……東京とリーヴェルを往復することになるのかしら」

実質大月と本キャンの往復とはいえ、1週間の中で通学場所が国を跨ぐつて凄いことだと思います。

各々がそれぞれ胸の内に今回の計画への壁を抱えてしまっているというのが実情だった。エルトニアが初耳というわけではない僕たち3人でさえこの有様なのだから、急に異世界行というトンでもない話を聞かされた面々はもう心臓が止まるんじゃないかという勢いで混乱していることだろう。

おそらく辞退を願ひ出る教員や学生もいるだろう。明確なりターンは給料アップに加えて未知の国へ赴けるということだが、それを得るためのリスクが高すぎる。そういった層に対して政府の実行委員会はどういった対応を取るのかは分からないが、せめて頓挫だけはして欲しくはない。

「難しい計画だけど、仮に辞退者続出で計画が火の車という事態になると困るんだよね。役人に僕の身の上がばれているから辞退出来ないし、苦しくなるとしわ寄せをくらうの

は間違いないよ」

「……そういえばお前の名前欄、なんだかミドルネームっぽく平塚・ラストイレイ・礼二つてなっていたな。思わず吹き出しそうになったけど、そういう事情があったのか」

僕に関して言えば逃げ出すという選択肢が端から用意されていないため、選ばれてしまったことには頑張つて職務をこなすしか道が無い。一応ながら、今回の計画においてはある短期的な目標が提示されているため、少なくともゴールも見えない中で足掻き続けると言ったことは無さそうで安心した。

「まあ先が見えないという訳でもなさそうだしね。とにかく目指すはプレゼンの成功か」

プレゼンの成功。簡単には言ってみたものの、これの成功というのめかなりの鬼門だろう。それなりに学会で発表した経験がある僕でも、これほど特殊で特異なプレゼン発表はやったことがない。

その理由は明確だ。僕たち研究者の専門性に富んだ研究成果の発表相手が、専門知識の欠片も持ち合わせていない相手なのだから。それも高校生に大学へ興味を持ってもらう、もしくははまだ小さな子供に理系を目標してもらおうきつかけとなるようなスピーチなどではない。未だ日本との交流に疑問を持っている貴族を対象とした、こちらに否定的な印象を持っている人間に科学技術の素晴らしさを伝えるという超難関プレゼンで

ある。

* * *

先ほどの合同説明会は、異世界行を知らされて大半の参加者が呆然となつている中で淡々と司会者が説明を進めていくという非常にシニールな様相を呈していた。大体は事前に川崎さんに説明されていた内容であつたが、所々先日は聞いていなかった情報もちらほらと散見され、僕は両隣に座る平塚先生や藤沢さん共々一字一句聞き逃すまいと前を見据えていた。

そんな中で説明会もおよそ中盤も過ぎて、まだ仮段階なのだろうが新キャンパス計画の今後の指針について話題が移つた。

「今後の展望を見据えて、まず開校からおよそ4か月後の8月5日に、エルトニアの皆さんを招いたプレゼン発表を計画しています」

大教室の一番前で喋るのは、今日の合同説明会の司会者を務める男性だ。スケジュールと大きく称されたスライドの中には、彼が言ったように来年度の8月の欄に発表会の旨が記載されていた。

「このプレゼン発表は、我が国の科学技術の素晴らしさを伝えるまたとないチャンスで

す」

指定された時期は、幸いなことに平塚グループとして参加している学会の発表会とは被っていないかつたはずだ。しかしまたとないチャンスと言われても、そもそも大学計画が沸き起こる前に初歩的なプレゼンについては行っていると思うのだが、専門家たちによる発表というものは初めてなのだろうか。

「皆さんが普段参加されているような学会ほどの専門性は求めてはおりません。何故ならば、オーデイエンスとなるエルトニアの方々はほとんどが理学に関しては素人だからです」

素人という言い方が少々どうかと思う点もあったが、確かに僕の記憶の限りではエルトニアの科学事情は現代日本と比べて大きく後れを取っていたはずだ。

蒸気機関で工業が一気に前進し、照明灯がランプの炎から電球へと移り変わり、空気中の窒素を化学的に肥料へと変換する。そんな各分野の爆発的な進化も昔の話で、今や目を向けているのは大空のその先だったり、はたまたミミリなんて目じやないナノスケールの世界等々、この世界の科学者の研究は飛躍に飛躍を重ねている。

その一方でエルトニアがある世界は摩訶不思議なエネルギーである魔力とやらが存在し、生まれながらに魔法技術を持った者が持たない者を統率する構図だ。庶民が魔法技術の恩恵にあずかるには高価な魔石が必須であるが生活基準の向上に一役買ってお

り、魔術の研究が各国の総合的な豊かさに結びついていると言っても良かった。

「リーヴェルでの生活や講義等を通して、日本との違いなど見えて来るものがあると思います。全く知識のない相手に対してのプレゼンは難しいでしょうが、なんとか乗り切っていきましょう」

* * *

「ああ、例の中間活動報告会って奴か」

平塚先生はコップに残ったアイスコーヒを一気に飲み干し、やや苦々しい表情で口を開いた。普段先生と会話するなかで時折エルトニアの話題が上る時があり、彼も向こうの世界の事情については断片的にだが把握している。その知識の中には、エルトニア周辺諸国では魔法技術がデカイ顔をしており科学技術の発展はほとんどないということも含まれている。

「相手に専門的な知識がない、それだけだったら別に大学入学希望者への研究テーマ説明みたいな感じではできるんだがな……」

「多分そんな簡単には行かないだろうね。どういう層が来るのか僕もあまり把握できていない訳じゃないけど、事前に聞いた話じゃこのプレゼンは大学設立反対派の貴族も対象

にしているとか」

僕の言葉に、平塚先生は難しい顔を浮かべてこめかみに手を当てた。先ほどの担当者の話では向こうの生活の中でどのようなことを纏めて発表をすればいいのかを考えてくれとのことだが、果たして開校から4か月やそこから科学技術が発達していない場所に適したプレゼンを全員が構成出来るのだろうか。

「結構難しいわね……私たちの研究テーマは太陽光発電だけど、そもそも太陽光をエネルギー源に使いますといつてどこまで通じるかはわからない」

「原理はともかく最近の小学生も太陽電池は知ってるよね。だから多分言葉の壁がある程度解消されている以外は、言葉は悪いけど未開の地にプレゼンしに行くのと何ら変わりはないんじゃないかな」

「常識が通用しないというのは、大変さで言えば言葉の壁に匹敵するのではと僕は考えている。」

今のところ頭の中で思いついている大きな障害の一つが、僕の研究分野がどういう点で既存の魔術よりも優れているのかを伝えるかである。流石に自分の研究分野であるわけで、既存の研究成果からどのような進歩を遂げているのかはすぐにも説明をすることが可能だ。

そして現代社会における自分の研究の立ち位置も客観的に十分分かっていづもり

である。今後の人間社会にどのように役立っていくのかなんて、今まで幾度となく論文に記してプレゼン発表もしてきたのだ。

しかし今度のプレゼン発表対象はエルトニアの方々だ。科学技術が進歩していないのはただ遅れているというわけではなく、そのような技術が無くても世界が回っているからということもあるだろう。そうした中で最先端の科学技術が向こうの世の中でどのように生かせるかなんて、説明をするのはかなり難しいだろう。それこそ初歩的な蒸気機関だったら彼らの社会に組み込むのも困難な話ではないだろうが、なまじこちらの世界でも最先端な技術なわけだから良さを分かってもらえるまでが茨の道だ。

「それだけだったら何とかなるけどよ、相手は此方に好印象を抱いてないと来たもんだ。こりゃあ相当重い話だな」

「まあ、先生が重い言っちゃいけないでしょ。平塚グループの中では最年長になるわけだし、経験も豊富だし」

「都合がいい時だけ年下宣言するな。それにお前は向こうの国の常識も知っているんだから、もっとお前の存在を推して行っても良い気がする」

頼むぞ助教、と先生に頭をワシワシと撫でられる。隣に座る藤沢さんも生暖かい笑みを浮かべており、元は自分の発言が原因とはいえ双方から年下扱いされているように感じる。

好き放題人の頭を弄繰り回した義父は少しだけ調子を戻したようで、ずっと浮かべていた難しい表情が今は引っ込んでいる。全員が飲み物を飲み終えたことを確認した彼は、お盆を持って立ち上がった。

「まあ今は目先のことにも目を向けなきやな。レイは博論、藤沢は学論があるんだから。ここまで来て受理されなかったら笑いも出ないから頑張れよ?」

「……そうだね。いくら悩んでも博士号が取れなかったら皮算用だ。藤沢さんもこれから数か月、気合入れて行こうか」

「勿論よ。私も大学5年生になる気はないわ」

時間帯としては昼下がりが。店の外に見えるのは夏場に比べて大分穏やかになった日の光と、それに照らされて明るく輝くいちじょうの黄色い葉っぱだ。今日は土曜日だけれども、この大事な時期ではそうそうのんびりもしてられない。説明会明けのぼんやりとした頭はこの場で一応リフレッシュすることも出来たし、このまま夜まで研究室で頑張ろう。

「俺はこのままラボに戻るが、お前たちはどうするんだ?」

「僕も研究室に向かうよ。色々と迫ってきているし、せつかく頭の中も切り替えられたことだしね」

「一緒に行きます。今日中に1個くらい実験が出来そうですし」

結局カフェテリアを出た僕たちの足は、全員いつもの校舎の方角に向いていた。1週間前と比べると急に冷え込んだ空気が首筋に吹きかかり、思わず鳥肌が立ってしまい首をすぼめた。最近の天気予報を見ると、これからどんどん移動性高気圧に覆われて朝方の気温が低くなっていくようだ。からりとした風に吹かれて視界から消えていく葉っぱたちの向こう側に、僕の学生生活の終わりを垣間見た気がした。

その2

「皆さん飲み物は行き渡りましたね？ それではただ今より、今年度最後のイベント、早川・平塚研究室追いつきを始めさせていただきます!!」

大学の最寄駅から数駅の少々大きな街の一角、この研究室でうちあげをやる際にはよく利用している飲み屋で、ラボの面々が一齐にグラスを持ち上げた。総勢20人強のメンバーは誰も彼も笑顔を浮かべており、来年度で修士2年になる学生が音頭を取ってグラスを高く掲げた。

「卒業される先輩方、そして大月の地へ出征される平塚先生と藤沢さん!! 皆さんのこれからの成功をお祈りして、乾杯!!」

彼の合図と共に全員が乾杯と大声で祝いながら近場のメンバーとグラスをうち付けた。僕も両隣や前に座るラボ面とグラスを鳴らし、そのまま一気にグラスの中身を飲み干した。

「よっ、平塚さんいい飲みっぷり!!」

「ぶっはあ!! ソフトドリンクだからこそ出来る芸当だから絶対真似しちやいけないからね!!」

机にグラスをうち付けた直後、一気飲みをした反動で喉の奥からシヨウガの匂いを纏った炭酸ガスがげっぷとして出てきた。周囲がグラスの中にアルコール類を注いでいる中で、僕は未成年ということとでジンジャーエールをたのんでいる。僕の言葉に曖昧に頷きながらも後輩は結構な勢いでビールを飲んでいき、あれよという間に空になったグラスを片手にピッチャーへ手を伸ばした。

乾杯の合図が終了したのを確認したのか、店員さんが目の前の鍋に火をかけて、コースメニューであるサラダの盛り合わせが机の真ん中へ置かれた。すると直後に後輩の一人が僕の皿にサラダを取り分けてくれた。

「おお、ありがとう」

「いえいえ。そういえば先輩は卒業もするし大月遠征もするしで二重の意味でのお祝いですね」

「そう言えばそうだったね。でも憂鬱だよ、もうすぐ東京の地から足を洗わなきゃならないなんてね」

今は3月の初週であり、来週から研究室にある平塚グループの実験器具や装置が搬出される。普段ならばこのゼミの追いコンは月末の卒業式近くに執り行うはずだったが、今年に関しては准教授の異動というイベントがあるために月の前半に前倒しになった形だ。

本拠地のおんぼろアパートの一室は既に家具があらかた纏められており、予定では来週末に執り行われる引っ越し作業に向けての準備は順調に進んでいる。いざ片付け作業を進めていくと、およそ5年間過ごした部屋は元の殺風景でボロツちい風景から随分と自分が住みやすいように手を加えていたのだと実感をさせられた。

「4月からはラボも人が少なくなりますよね。今年は博士課程に進む先輩いないし、それに加えて平塚先生も異動だし、寂しくなるなあ」

「その代わりに新しい助教さんが来るそうじゃないか。それに順調に行けば来年頃には米原先生が准教授に昇進するんじゃないかな」

次年度からはこのラボにおける教授職の人間がボスこと早川教授だけになる。この5年間平塚先生が加わり順調に回っていた研究室の運営だが、多分ベテランの早川先生のことだから再度一人教授のラボになっても上手くやっていけるだろう。それに米原先生というやり手の助教もいることだから、これからもこの研究室は安泰な気がする。

グループは違えど、早川教授や米原先生にはかなりお世話になった。基本的に僕は平塚先生の元で指導を受けたり研究活動を続けてきたが、彼らに貰ったアドバイスは数多くに上る。最近では助教としての心構えを米原先生からたくさん聞くことが出来たし、このラボを出てからも頭は上がらないだろう。

「僕だってこの研究室とのつながりが切れた訳じゃないよ。研究内容が大きく様変わり

するわけじゃないし、学会発表で会うかもね」

「そんな時は俺もちゃんとした発表が出来るように精進していきます!!」

「その意気だ、頑張るんだよ。お兄さんとの約束だからね」

酒が回ってきたのか、全体的に赤らんできた顔で後輩は豪快に宣言をした。飲み会の席の口約束であるが、彼が宣言以上の成長を遂げてくれるのを切に願うばかりだ。

まだ飲み会は始まったばかりだが、机の各地で賑やかな会話がなされている。こうやって仲良く接することもあれば、時には発表会練習の場で厳しく叱ることもある。ただの子供じみた馴れ合いではなく、しっかりとした絆を作り上げてきた仲間だ。今まで送り出す側に立ったことはあるが、送り出される側に立ったことは前世の高校の時にまでさかのぼる。立場が逆転するだけでセンチメンタルに思う気持ちが一層強くなる、この感覚を思い知らされるのは久しぶりの話だ。

ポリポリとサラダを頬張りながら、後輩と色々な話の花を咲かせていく。やれ今後の学生生活だ、彼女を作りたい、はたまた俺は先輩よりも年も身長も高いんじゃないか等々。最後の話題に關してはチョップを入れておいたが、こう生意気な会話もこれからは交わす機会が無くなると思うと、不思議と全てを許せるような気がしてくる。そんな僕たちの後ろに忍び寄る影が居るのに、全く気が付くことはなかった。

「君たち楽しんでるかな?」

「あ、小田原さんどうもです」

今年で卒業する同期こと小田原が、ニヤニヤしながら僕たちの後ろに控えていた。グラスを差し出してきたため、とりあえず僕と後輩も飲み物を注ぎ直して3人でグラスを鳴らし合わせた。

「ちよつと礼ちゃん借りて良いかな？ 向こうの方で先生方がお待ちかねだ」

「どうぞどうぞ、持つて行っちゃって良いですよ」

「僕は物じゃないぞ」

一応苦言を呈すが、酒が回りつつある後輩からははいはいと軽くいなされ、同期に至つてはこれ見よがしに高い身長差をいかして人の頭をわしやわしやと撫でてくる。

そしてそんな光景を離れた席から腹を抱えて眺めている人間がいた。早川教授の近くに座りながら人を指差してげらげらと笑っているのは平塚先生だ。この野郎、いっそのこと羞恥心を投げ捨ててこの場でパパと連呼してやろうか。

「はいはい、礼ちゃん行くよー」

「手を引くな手を。酒なんて入りようがないんだから普通に歩けるよ」

ラボ面が座る後ろをひよいひよいと歩いて奥の机へと向かつていく。途中で周囲を見渡してみれば、藤沢さんが他の女生徒たちに混じつて会話を花を咲かせている。彼女達にとつても、今日が最後の語り合いの場だ。後悔が残らないようにしっかりと今日と

いう日を楽しんでほしい。

「早川先生、礼ちゃんを連れてきました!!」

「来たか。まあ座んなさい」

そうしてやって来た長机の奥の一角。平塚先生と早川教授が向かい合って座り、そしてまた都合のいいことに平塚先生の隣には空席が出来ている。僕をここまで連れてきた同期は、入れ替わりということなのか僕がいままで座っていた席に腰かけてしまった。ニコニコと楽しそうに微笑む老齡のボスは、その席に座った僕にグラスを突き出した。

「改めて博士号取得おめでとう。17歳で博士号取得は、当然私の研究室じゃ最年少記録だ」

「ありがとうございます。僕もここまで順調に来て、自分のことながら結構驚いてますよ」

グラスを打ち付けあい、互いに中身をおおる。朗らかに笑うこの壮年の男性が、長年東都工科大学で教鞭を振るうこの研究室の主こと早川教授だ。昔の思い出と比べてしわが増えて髪の毛もかなり白くなっている彼には、本当に長くお世話になった。

「君を見ていると、昔平塚君がまだ学生だったころを思い出すよ。ああ、現在准教授の彼のほうだ」

「本当に紛らわしいですよ。まあ彼は僕よりも出世コースを歩んでいますから、これからが大いに期待できますよ」

早川教授に賛同の意を示す平塚先生は、僕を見て笑いながら茶々を入れた。確かに卒業後に即助教というのは、最近の研究者事情を考えればかなり恵まれているといつても過言ではないかもしれない。しかしたとえ自分自身からとはいえ、こう褒められるとうにも背中がむず痒くなる。

「この5年間、見た目は全然異なっているにもかかわらず君が平塚君に重なることが多かった。名前が一緒ということもあるんだが、学生時代の彼と似ているところも多かったからね。彼がこのラボに准教授として戻ってきたときに入学し、そして彼の異動に合わせて着いて行く。君たちはかなり巡りあわせが良い」

早川先生が昔を思い出すように、僕も二回目の大学院生活の中で前世の学生時代を思い出すことが多々あった。もう15年以上前になるのか、まだ僕が学部3年だったころに研究室見学を始めたとき、色々と回った中でピンと来た研究室の名前が早川研であった。当時はまだ准教授だった早川教授のもとで教えを受け、段々と研究テーマへの興味が強くなっていった。生憎僕は研究室に入ってから2年後にエルトニアに転生してしまつたが、それでもまたこうして同じ場所で学べたのは非常に貴重な経験だと思ふ。

「今後は君も助教に昇格だから、平塚先生というと完全に混ざってしまうな」

「あはは……新キャンパスじゃどう呼んで貰ったらいいですかね」

フォルガントの姓を名乗れなくなった今、果たしてどう呼び分けて貰うかは結構な問題だ。リーヴェルキャンパスでも平塚先生とタッグを組んで活動を行う以上、呼び分けの方法は考えておいた方が良好だろう。何も知らない人の目には、平塚姓の教員が2人もいる研究室というのは少々異様に映るかもしれない。

「まあそれはコイツと一緒に追々考えていきますよ。銀髪版とか髭版とか色々ありますからね。ところでレイ、あの衣装は着てこなかったんだな」

はてあの衣装とは一体何のことかな。ひらひらシャツやチェックなスカートなんて僕は知らないよ。素知らぬ顔で首を傾げてやると、平塚先生は苦笑いをしながら注ぎ足されたビールをあおった。

「良い性格してるな。この感じじゃ向こうに行っても乗り越えて行けそうだ」

「お褒めいただきありがとうございます、父さん」

「おうその呼び名だけは止める」

横に座る平塚先生からすぐに頭を小突かれて制裁されてしまった。色々と言い返してやりたいところだが、周囲に人がいる以上対等な口調であーだこーだ言うのは避けられた方が良好だろう。

そうこうしている内に、どうやら鍋の方が仕上がったようだ。蓋の隙間から時折細か

な泡が出ては消えていき、それに伴って海鮮類の独特の香りが漂い始める。乾杯を終えてから口に含んだものがサラダシがなく、中途半端に胃に物が入った状態でのこの匂いは、口の中に唾液を充満させるには十分すぎる破壊力を持っている。

「少々失礼します。お鍋の蓋を開けますね」

「あ、お願いします」

タイミングを見計らったように、僕たち三人の真ん中に置かれた鍋を覆う蓋を店員さんが取り外してくれた。一気に良い香りを含んだ湯気が舞い上がり、白煙の向こう側に見える赤くなつた海老の甲殻やひたひたになつた菜っ葉が食欲を駆り立てる。

鍋の蓋のかわりに店員さんは机に人数分の取り皿を残して去つて行つた。僕は全員分を取りそろえようと皿に手を伸ばしたが、それよりも一歩早く早川先生が取り上げてしまった。

「今日は私が送り出す側だ。遠慮せずに座つていなさい」

「あ、ありがとうございます……」

壮年の教授にこんなことを言われてしまったら大人しく座っているしかない。海老が丸ごと一尾取り分けて貰えて、モクモクと湯気を立てる小皿が目の前に置かれた。平塚先生は自分の皿を掴んだまま早川教授がお玉を手放すタイミングを虎視眈々と狙っていたが、そんな努力も無言で手を差し出す教授の前には無駄であった。

「ほら、君も貸しなさい」

「いい、いえ……本当に恐縮です」

結局ラボのトップに皿を取り分けて貰うという非情に恐縮な状態となった僕と平塚先生は、苦笑いを浮かべながら視線を交わした。今日は確かに祝われる立場とはいえ、前世と今世の双方でお世話になった恩師に鍋を取り分けて貰うのはかなり緊張する。

「君はこれから困難が増えるだろう。博士から助教、求められるものも一段と大きくなるはずだ。開いて間もない研究室は運営していくのも一苦労だよ」

お玉を鍋の隣に置きながら、早川教授がゆっくりと話し始めた。僕が前世で早川研究室に配属された時は、まだ開設されて間もない研究室だった。国立の研究所から准教授として招かれてまだ三年ほどだったか、学生数は少なく予算も十分とは言えないところだった。生憎僕という人格は小さな早川研究室が段々と存在感を増していく黎明期を知らないが、ここまで来るのに相当な苦労があつたに違いない。

「特に一緒に行くことになる学生が藤沢くんしかいないのだから、初期は助教の君も雑用に追われることがある。その序盤をしっかりと乗り越えていけるかがまず第一歩だ」
「思えばこの研究室もよく序盤を乗り切りましたね。研究テーマは当時から他にも強い研究室があつたし、僕が研究室史上一番目の博士課程でしたよね」

「当時は君にも大変な思いをさせてしまったね。君が一度ポスドクでここを離れてか

ら、かなり頼っていたことがあったと実感したよ。君は平塚君に負担を強いるんじゃないよ?。」

こうして前世の僕と前世の恩師が杯を交わしながら過去の話の花を咲かせているのを見てみると、なんで自分の中に加われないのだろうと不満に思うこともある。もし通り魔に刺されなかつたら、そもそもラスティレイ・フォルガントなんて人間は存在せず、僕が平塚先生としてこの研究室で活動をしていたのかもしれないのに。

僕の知らない気苦労があり、僕の知らない成功もあるだろう。二人の楽しい様子を見て、僕は少しだけ嫉妬をしてしまった。

* * *

司会担当の後輩が会計を行っている間に、ラボ面達と共に僕は飲み屋の外へ出てきた。このナリだからだろうか、忘年会や追いコンに参加をした後に集団で帰り道を歩いていると、駅前の交番近くで見回りをしている巡査に声を掛けられたことは少なくない。年齢もまだ二十歳には達していないし酒を自主的に控えていたため毎度事無きを得ているが、こっちの見た目が銀髪白人ブルーアイなんて色物なんだからいい加減覚えりやいいのとは思う。

三月初旬の夜は、日中の心地よい暖かさが消えてしまつて少々肌寒い空気が蔓延している。周囲のメンバーはこの寒さを見越して上着を持つてきている者が多かったが、その一方でここまで冷えると考慮をしていなかったのか少々寒そうにしている人間も少なからず存在した。

「藤沢さん。上着忘れたの?」

「……うん。天気予報みて今夜は暖かいでしょうつて聞いていたんだけど、外れちゃつたわね」

苦笑いを浮かべながらポリポリと頬をかく彼女は、半袖とは言わないが薄手の七分袖カーデイガンのために少々寒そうに見える。アルコールを摂取した後ということもあり、白い頬がほんのりと赤らんでいる。この状態では普段以上に寒さというのは体にダメージとなるわけだし、大月出征前最後の一週間で一人風邪を引いた状態というのは笑えない。

「しようがないね。はい、これでも着て」

「え、それじゃあレイが寒いでしょ?」

自分が羽織っていた麻の上着をやれやれといった調子で差し出すと、藤沢さんは困つたような様子で首を振つた。そんな中でふと強めの風が飲み屋前の通りを吹き抜けていき、もろに冷気にあてられた彼女が小さく体を震わせた。

「ほら言わんこつちやない。酒飲んで血管広がってんだから、寒さは普段以上に気をつけないきや。僕は禁酒してるから気にしなくても平気だよ」

「……ありがとう」

少々恥ずかしそうな様子で僕の手から上着を受け取ったのを見届けて、僕はホツと一息をついた。脇を見れば飲み会の最中藤沢さんと仲良さ気に話していた女学生が面白いものを見るような目つきで此方を伺っており、何事だと見返せばすぐに視線をそっぽに向けられた。

「それでは流れ解散とします。今日は皆さんお集まりいただきありがとうございます」

会計を終わらせてきた後輩が飲み屋から出てきたのを合図に、集団がぞろぞろと駅前を目指して歩き始めた。狙ったわけではないが藤沢さんは僕の隣を付かず離れずの距離を保ちながら歩いている。特に話すネタも無いため黙っているが、互いに近くを歩いているながら双方口を閉ざしたままなのは少々恥ずかしい。わき目でチラリと視線を動かして、彼女の方も此方を伺っているのを見ると思わず顔ごと反らしてしまった。

「おーふたーりさん。金属色の髪の毛の君たちが並んでいると夜景に映えるねえ」

「……夜景っていつてもそんな大したものじゃないだろ。それで何の用かな？」

後ろから小走りで近づいてきた同期が、僕の肩を小突いてきた。いつものようにいた

ずらつ気な笑顔を浮かべた彼は、僕の隣を押し黙って歩く藤沢さんの上着に目をつけたのか、再度ニヨニヨな笑みを絶やさず僕に向き直った。

「おお、礼ちゃんもやるじゃん」

「うっさい。琴葉さんに学位審査公聴会で君が汗ぐつしよりだったのをチクってやろうか」

「それだけは止めろよな!! ええとだね、この後の二次会に君たちも来るかなってのを聞きに来たんだ」

二次会、恐らくは全員さらに酒をあおりながらカラオケにでも入るのだろう。酒が飲めない体で出席するのも皆の士気を下げてしまうのではないかと思い、普段ならば二次会への出席は遠慮してそのまま家路につくのがお約束だ。この一年は何故か藤沢さんも僕に着いて帰ることが多かったが、ラボ面のみんなとはっ茶けられるのも今回が最後のを思うと、士気がどうか関係なく出席をしたくなかった。

「藤沢さん、多分これがみんなと騒げる最後の機会だ。僕は行くけど君はどうするのかな?」

「……小田原さん、私も行きます」

「よっしゃ、ウチが誇る二次元コンビが双方出席とは盛り上がるな!!」

二次元言うな、という僕の渾身の叫びにも彼はひらひらと手を振って相手にせず、恐

らく二次会の幹事に僕たちの出席を伝えに行くのだろう、前の方に小走りで向かっていった。思わず僕は藤沢さんと目を合わせ、互いに苦笑を浮かべながら歩くペースを上げた。

第四話 「出征!! いざ異世界の大地へ」

その1

「えー、皆さん!! 今日土曜の早い時間にもかかわらず集まっていたいただきありがとうございます
ございます」

まだ肌寒さが残る三月半ばの朝方、普段学生が研究室に来るよりも少々早いタイミン
グでラボ面が五号館の前に揃った。平塚先生と僕、そして藤沢さんの三人が立つ前
には、早川平塚研究室のメンバーが勢ぞろいしている。まるで船出の送り出しのような光
景だが、実際そんな状況である。

「明日から新天地大月での研究に向けての準備に入るため、僕たち三人は今日で実質的
にこの研究室に来るのが最後となります」

三人の中央で喋る僕の目じりにうっすらと涙が浮かんでくるが、適当に袖口でごしご
しと拭いて誤魔化する。

「皆さんのおかげでこの研究室で有意義な研究生生活を送ることが出来ました。本当にあ
りがとうございました!!」

最後に礼をして顔を下げた。ありきたりな言葉になってしまったが心からの本音で

ある。下げた頭の向こう側から小さな拍手の音が響き、続いて段々と音が大きく広がっていく。

「平塚君。この五年間、よく重責に耐えながら頑張ってきた。これからも、しっかりと足を踏みしめて歩き続けなさい」

早川教授の言葉に、僕は今までの五年間を走馬灯のように思い出した。思い返せばかなりの修羅の道であった。准教授である平塚礼二の紹介で大学院試験に臨み、筆記試験そのものは特に苦も無く突破したものの周囲からの視線は強かった。学士を取らずに大学院に居るといふ事実がどれ程異常なのかを面接試験で思い知らされ、いざ研究室に入ってから最初の内はラボ面からの評判は悪くはなかったものの、きちんとした研究が行えるのか懐疑的に思う視線を向けられることが多かった。

それでも着実に研究成果を挙げていき、二度目の人生で初となる対外発表を成功で終わらせてから、研究室内での僕の評価はどんどん上がっていった。博士過程に進みたいと早川教授に相談をした時は、むしろ行かないはずは無いと思っていたよと返されてしまうほど、僕の地位は確固たるものへとなったのだ。

「それでは次は僕が。配属されてわずか五年で独立という忙しい研究生生活でしたが、皆さんと共に研究の更なる飛躍に努めてくれたと思います」

センチメンタルな気分に沈む僕の横で、今度は平塚先生が別れの挨拶を喋りはじめ

た。僕がこの大学に舞い戻ると同時に彼の准教授生活はスタートした。そんな助教という立場から准教授に昇格して五年、順調に研究活動が続けていた彼に命じられたのが新天地への異動だから、言葉の通り彼も随分と忙しい異動となってしまったものだ。「正直これからどれくらいの時間をかけて研究生生活を安定したものにできるかは分かりませんが、なんとかしてこの早川研究室と肩を並べるくらいのゼミを目指します」

彼からすると二度目の旅立ちだ。一回目は博士号を取った後にポストクとして国の研究所に派遣された時、二度目は東都工科大学リーヴェルキャンパス計画の一員として選出された今回だ。学生として、そして教員として合わせて十年以上在籍してきた研究室なわけだから、思い入れも人一倍だろう。

「米原先生、僕の担当していた学生を引き入れてくれてありがとうございます。菊川君と金谷君、そして掛川君。米原先生の下でもきちん勉強をしていくように」

順々に学生の名前を呼びながら平塚先生が激を飛ばした。今回の平塚先生の異動に伴い、まだ助教である米原先生が特別に大月に来ない学生の指導教員となることが決まった。元々の実績に加えて学生を持ったことから、来年度までには准教授昇進はほぼ確実と見ていいだろう。自分も助教の身になったおかげか、こうして目の前で助教から准教授へ昇格しそうな人を見るとどこかわくわくする。

「最後に早川先生。先生には研究者としての心得や、教鞭に立つ者としての在り方を教

えて貰えました。これからの新天地で、その教訓をしつかりと生かしていこうとお思います。本当に長い間お世話になりました」

大きく礼をした平塚先生に大きな拍手が浴びせられた。平塚先生が早川教授に心構えを教えて貰ったように、僕も平塚先生にこれからの教員生活のアドバイスを貰うのだろうか。これまでもそうだったが、自分の可能性の一つが現在の平塚先生であると思うと、彼に教えを乞うということに対してどこか不思議な気持ちになる。

一歩下がった先生は、隣に立つ僕と目配せをした。それぞれ挨拶を終えた僕たちには吹っ切れたような笑顔が浮かんでおり、そしてその二つの笑顔は僕の隣で緊張した面立ちで立ちつくす藤沢さんへと向けられた。

「さて、とりに藤沢さんにお別れの言葉を述べて貰おうと思います」

「え、ちよつと!! レイ何を言って……」

急に話を振られた藤沢さんは、もの凄く慌ててしまったようだ。どのくらい慌てたのかといえば、ラボのメンバーが目の前に勢ぞろいして僕たちに視線を向けているのに、あろうことか僕に対して敬語無しと名前呼びの二重コンボを仕掛けてしまうほどに。

「おつ、藤沢さんが言葉を崩した!!」

「小田原さんから聞いてたけどレナちゃん平塚さんには普段敬語使わないって本当だったんだね!! その勢いで頑張れ!!」

いきなり沸き立つ後輩たちは、僕が一睨みを聞かせても涼しい顔だ。己の失言に気が付いた藤沢さんは、髪の毛に負けないくらいに顔を紅潮させてあたふたとしてしまっており、彼女と仲が良かった女学生から応援の声が浴びせられる始末だ。

僕たち二人の見た目は、並みの外国人留学生などとは比較にならないくらい目立つた。髪の毛の色が茶髪や淡い金色なんて目じやない色合いだったし、二人揃って全体的な姿が同期の言葉を借りるならば二次元からこんにちはをしたような感じだったからしょうがない。それこそ最初の内はそれなりに外人に慣れているはずのどちらもラポの面々が遠慮してしまうほどだった。しかしこうして弄られているのを省みるに、僕たちは随分と馴染めてたのだと実感させられる。

「ゴホンツ!! ええと、皆さん。研究室に入つて間もなく知識も少なく右往左往していた私に、先輩方は丁寧に指導してくれました。この一年でお別れというのが心苦しいですが、培った経験で新天地でも一生懸命頑張つていきます。ありがとうございました!!」

短いながらもきちんと感謝の意を述べた藤沢さんに、一段と大きな拍手が送られた。彼女は顔を赤くして照れているようだが、それでも安心したような笑みを浮かべている。

これから平塚研究室では彼女が唯一の学生となるのだ。大月では研究室の横のつな

がりが強いらしいから学生として肩身が狭い境遇にはならないと信じたいが、それでも新しい地で右往左往してしまうのは間違いないだろう。僕は今まで直接彼女の上について指導を続けてきたのだ。助教となったこれからも彼女が独り立ちできるまでしっかりとサポートをしていかななくてはと思う。

「……そろそろ時間だな。諸君の成功を願っています。行つてらっしゃい」

いつの間にか花道のように整列したラポ面達の間を、僕たち三人は歩き出した。大学が用意した大月へ向かうバスの時間まであと少し。それはこのキャンパスに在籍するタイムリミットでもあった。おんぼろの校舎を振り向いて見つめて、前世を含めて七年間通い続けたこの建物に会釈をして心の中で別れを告げた。

* * *

朝早くの土曜日ということもあり、校舎の正門近くにはあまり学生の姿はない。そのため校門のすぐ傍に大きなバスが停めてあったとしても、さほど邪魔にはなっていない。そうだ。

バスのサイズ的にはこれから旅行にでも行くのかなという感じであるが、近くに集う面々を見てみると全員が顔に浮かべているのは嬉しそうな表情ではない。緊張した表

情をした人間が大半であり、酷いところではまるで乗り物酔いでもしたのかというくらいに蒼白な顔色で放心している人もいる。

そしてトドメは妙に高級そうなバスの姿だ。内部を覗き見ようとしても、スモークガラスを使っているのかなか見ることが出来ず、表面もかなり艶々である。バス会社の保有する車の中で一番高級なのを引つ張ってきたのだろうか。しかもそんなシロモノが縦に三台も停まっていたら、それはもう壮観な眺めである。

「レイ……なんかこのバス妙にツヤツヤしてるわね」

「うん、乗る前から気持ち悪くなるっていう感覚は分からなくもないね」

並んで高級バスを呆然とした様子で眺める僕たちは、案の定ちらほらと視線が向けられていたようだ。研究室のみんなは慣れっこになっていたが、やはり銀髪と淡赤紫ヘアの組み合わせはかなり浮くのだ。しかしそんなんじやエルトニアではやっていけないぞ。向こうにはそこらの通行人が緑色の髪の色を持ってたり、獣耳の種族がいたり、我が日本の常識は通用しないんだから。

ラボ面による送別会を終わらせてから一緒に来た平塚先生は、どうやら他の教授との会話に乗じているようだ。この場に揃うのは、一部の物珍しさに此方を伺う通行人を除けば一緒に異世界キャンパスに流刑される仲だし、知りあうにこしたことはないだろう。

ならば僕もさっそく回るかと歩き出そうとした時に、その平塚先生が手招きをしているのが見えた。どうやら僕たちも挨拶をしろということらしい。

「こちらが、僕の研究室の卒業生で今年度から助教になる平塚です。レイ、彼は東北理学院大学の浜松先生だ」

「初めまして。今年度から助教として働かせていただく平塚礼二です。先生の論文は何度も参考にさせていただいています」

「おお、君がああの平塚・ラスティレイ・礼二君か。それにまた変わった髪の毛だね。どうも、今年から同じキャンパスになる浜松です」

恰幅の良いこの男性は、名前や前の所属先を聞く限り何度か参考にした論文の執筆者でもある先生のようなだ。彼らのグループの研究内容をこれまで何回か参考にしたことがあるため、これから同じキャンパスで働くとなると非常に心強い。しかし半年近く前の説明会での僕の名前表記を覚えていたのかこの人は。こうも細かいところを覚えていると、こちらは苦笑いしか出来ない。

それにしてもどうにも周囲の人々に比べて彼の表情は明るく穏やかである。僕の髪の毛を見ても変わっていないで済みますあたり、見た目通り緊張とは無縁な人なのかもしれない。

「ええと、初めまして!! 平塚先生の元で学ばせて頂いている藤沢レナです。よろしく

お願いします!!」

「あらこれまた偉い別嬪さんだね。初めまして、浜松です。君たちは太陽電池について研究しているんだってね？ 私の分野もそれなりには近いから、相談したいことがあつたら遠慮なく来なさい」

他の参加者にも挨拶回りでもしようかなと思つた時、校門の外から向つてくる数台の黒塗りの車の姿が目に入った。どうやら浜松先生も気がついたらしく、にこやかな笑みが少々険しい顔に変わった。

「着ちやつたか。どうやらそろそろ東京ともお別れのようなだね。ではまた後ほど」

浜松先生は手を振りながらバスの近くへと歩いて行つた。他の参加者も今回の計画の担当者が来たことを察したのか、各々バラバラに立つていたところからバスの周囲へと近づいていく。僕たち三人も平塚先生の後に続いた。

バスのすぐ近くに停まった公用車からボディガードを連れ添つて降りてきたのは、ピシツと背広を決めた川崎さんだった。集まつた研究者たちを一通り確認すると、彼は集団の前に小走りで近づいてきた。

「皆さん、今日はお集まりいただきありがとうございます。今日から開校までの十日間、予定通りまずは現地での研究の準備を行つて頂きます。既に割り当てられた研究室や実験室に先日送られた備品が届いておりますので、現地に到着後はそれらの調整などを

各自お願いいたします」

その他にも今日の予定やら着いてからは担当者の指示に従って貰うやら、大月に到着したところで持ち物検査を行う等々。事前に知らされていた情報の中で重要と思われる点を川崎さんがリストアップしていった。

およそ五分くらいをかけて彼の話が終わると、待つていたかのように高速バスの乗車口が一斉に開かれた。遠目に見てみるとバスの入り口付近には番号が記されており、事前に配布された書類によると僕たち平塚グループの三人は全員が三号車に割り当てられていた。

「最後に、車両内でのタブレット端末の操作等は情報の漏えいに繋がる危険性がありますのでご遠慮下さい。それではバスへの移動をお願いします」

学会等以外の要因で総勢で五十名以上の研究者が校門近くに一堂に集結しているのは珍しい。そしてそんな集団がぞろぞろとバスの中に向かうなど、結構異様な光景に見える。

平塚先生に続くようにして最後尾に止められた車両に近付く。外見は高級な高速バスだが、一步車両に踏み入つてみると内部も相当ゆつたりとしたつくりになっていた。車両そのものの幅が広いことに加えて、客席が前後左右で相当余裕のある並びをしている。車内灯も安っぽい蛍光灯ではなくガラス細工のシャンデリアチックな物であり、こ

こまで内装にも気を配っているバスに乗るのは初めてである。

「SPまで乗っているなんて相当気を使っているのね……あっ、この席ね」

「良かった真ん中あたりで。こんな気を張ってるのに酔いやすい車輪の上とか地獄だよ」

隣同士となった藤沢さんが指定されていたイスに腰掛けた。彼女の言うとおり、バスの前列や後方には黒服のガタイが良い男性が数人座っている。果たして彼らが僕たちを護衛しているのか、はたまた逃亡しないように監視をしているのかは分からない。ただ一つ言えるのは、彼らのおかげで腹の奥が緊張でキリキリと痛み始めたということくらいだ。ポケットの中のスマートフォンは結局取り上げられることはなかったが、黒服の彼らが監視をしている中で指一本でも触ろうなんて気は全く起きない。

僕と藤沢さんのひとつ前の席には、先ほど挨拶を交わした浜松先生と平塚先生が腰かけた。あまり緊張感とは縁がなさそうな二人も、妙に重苦しい雰囲気の中の雑談を交わそうという気はないようだ。

「……とうとうここまで来たのね」

「いやいや、まだここ東京のど真ん中だから。そのセリフはせめて大月に着いてからでも遅くはないと思うな」

顔を緊張に染める彼女を茶化す僕も、正直言って普段の調子は出ていない。足元から

エンジンがかかったことを指し示す重い振動が響いた瞬間、僕と彼女は情けないことに揃って小さな悲鳴を上げてしまった。

その2

「はい、大丈夫です。次の方どうぞ」

係員さんから返された肩掛けバッグを貰うと、誘導に従うままに建物の内部へと進んだ。まだ造られて間もないのだろうか、早川平塚研究室が拠点としていた建物とは比較にならないくらいに壁も床もツヤツヤしている。大きな窓から見える景色は、大月の山のまったく中というだけあって大自然の一角が広がっており、丁度春先ということもあって山桜の花や鮮やかな黄緑色の新芽が大きな窓枠の外を彩っていた。

中央道の大月ジャンクションから出た後に、国道を経由して山間の道を走り続けて十数分。付随して走る黒塗りの公用車が無ければ、ゆったりとした内装や穏やかな眺めが合わさって観光気分になれそうな旅路だった。厳密な地理は分からないが、景色からしてもかなりの山間部に位置しているのだろう。多分中央本線の大月駅からは徒歩で来れる場所ではない。

「随分山の中なんだな。向こうもこんな感じか？」

「流石に首都だからここよりも栄えているよ。それに街の外を見比べてもエルトニアには山桜は無いから、春先の季節で比較したら結構印象は違うんじゃないかな」

待機スペースの中でホチキス止めしたジャーナルに目を通していた平塚先生は、荷物検査を終わらせて部屋に入ってきた僕を見つけると、窓の外を指し示しながら苦笑いを浮かべた。

首都リーヴェルは計画的な街づくりがなされているとかで、区画ごとに何があるかは大体決まっている。流石に街中に大月並みの自然は無かったはずであり、草木を楽しむには街の外側を散策するのがメジャーな方法だった気がする。六年くらい前に一回だけしか行っていない街の情景を思い出すのは案外難しく、リーヴェルの様子を聞いてくる平塚先生には正直にあまりわからないと告げた。

「しようがないか。お前の故郷は、そのリーヴェルとやらじゃないんだろ？ 藤沢にもちよつと聞いてみるかな……」

「彼女はもつときついんじゃないかな。最後に街を目にしたのが八年前じゃねえ」
その噂の藤沢さんが、ちよつと急いだ様子で待機部屋に乗り込んできた。そして僕たちが座る机に空席があるのを見つけると、一直線に此方へと向かってきた。彼女は僕よりも先に荷物及び身体の検査を受けていたはずだが、女性ということもあって色々時間がかかるのだろう。

三号車の中でも最後尾に近かった我々三人が全員検査終了して少々経ち、どうやらこの場には参加者全員が集まったようだ。藤沢さんが椅子に座って間もなく川崎さんが

迷彩服を着た男性達を引きつれて待合室に入ってきた。

「お待たせしました。それではこれからバスの乗車番号順に分かれてゲートの方へ向かって頂きます。まずは一号車の方から廊下へ並んでください」

車両順となると、僕たちは一番最後となる。まだ向かわなくていいと聞かされた平塚先生は、バッグの中に仕舞いかけた論文をもう一度引つ張り出して机の上に置いた。もしかしたら論文読みが彼独自の緊張を鎮める方法なのかもしれないが、前世の自分がかうなのだと思うと少々複雑な気持ちになる。

一方の僕も読みかけのジャーナルを持ち歩いてはいるが、緊張のせいでも分目を通したところで目が右から左に流れてしまつて理解するどころではないと思う。他に時間をつぶせそうな物としてはタブレット端末があるが、バスに乗る前に使うなど言われた手前持ち出す訳には行かない。

「まだまだ時間があるね」

「……向こうについたら街とか歩けるのかしら」

「どうだろう。僕は歩けるんだつたら適当にぶらつきたいもんだね」

そうなれば、結局のところ時間をつぶす方法は同じくそわそわしている藤沢さんとの雑談くらいしかない。一号車に乗っていた面々は全員が廊下に退出しており、自衛官と思われる男性が先頭で案内でもしているのだろう。部屋の中には参加者の他に川崎さ

んや黒服のSP、それと自衛官数名が残されている。

今更ながらに、自衛官が建物に居るとなると結構緊張する。流石に自動小銃を持ち歩いているわけではないが、彼らが身に纏う迷彩服はけっこうな威圧感ポイントであると思う。川崎さんの話を信じるならばこの建物の内部にエルトニアへのゲートがあるらしく、彼らは言うなれば国境監視隊であるのだろう。

「自衛隊の人って、生で見るとは初めてだわ」

「内陸の大月で国境警備に就くことになるなんて彼らも思ってもなかっただろうさ」

僕らの会話が聞こえたのか、扉近くに立っている自衛隊員が苦笑いを浮かべている。格好そのものは威圧感を感じるが、中身は結構気の合いそうな兄ちゃんなのかもしれない。まあ僕たちは見た目だけは最年少コンビなわけであり、微笑ましいものとして見られている可能性も無きにしも非ずだが。

こちらを見ていた自衛官と目が合わさり軽く会釈をしていたところで、川崎さんが二号車に乗っていた面々に廊下へ出て貰うように告げた。第一陣が既にエルトニアの大地に降り立っているのかは知らないが、想像以上に移動のスパンが短くて驚いた。

「……レイ。俺はすごい緊張してきたぞ」

「何度も学会で国外に行ってるんだから今更だよ。とりあえず平気平気」

珍しく狼狽した様子を見せる平塚先生は、案の定論文の内容がさっぱり頭に入らない

からか、諦めたように鞆の中に仕舞いこんだ。対する僕も、言っている内容は落ち着いているように見えるが、正直かなりお腹の辺りがキリキリと痛んでいる。人生で初めて飛行機に乗った時以上に緊張している。

最年長が露骨にそわそわしだしたからか、藤沢さんも緊張の波に飲み込まれたようで、隣をチラリとみてみれば手を固く握りしめて虚空を見つめ始めてしまった彼女の姿があった。どうにかして雑談のネタを捻りだそうとしてみるが、思いつく内容が昨日の晩御飯はなあにくらいしかない。今そんなことを聞いてどうするかという話だが、互いに黙りこくつていているよりかはマシかもしれない。

「ね、ねえ藤沢さん。昨日の晩ごはん」

「では最後に三号車の方、ご起立願います」

開きかけた口は、川崎さんの言葉によって塗りつぶされてしまった。顔から表情を消した平塚先生と、冷や汗を額に浮かべた藤沢さんが立ち上がり、緊張が言いようのないやるせなさに覆い隠された僕も腰を浮かせて部屋の出口へと足を向けた。

* * *

「ゲートの大きさは大型車両が通れるぐらいには広いんですよ。物資のやり取りも輸送

車がつかえるので、校舎建造もスムーズに行なえました」

エレベーターで地下に降ろされた僕たちは、長く続いている動く歩道を歩かされていた。時折同行している川崎さんが解説を交えているが、歩いている場所が広いとはいえず殺風景な地下通路のために全く異世界行と言う雰囲気は出ていない。

「今私たちが歩いているこの歩道はそのままエルトニア郊外へと続いています。今回は皆さんの身体検査を行う必要があつたため大月国境警備所で一度降りましたが、以降は車両による移動も可能です」

どうやらこの歩道と隣接するように車両が通行できる道が作られているようで、時折響いてくる微弱な地響きはその車両用の道路から来ているらしい。大月国境警備所とやらに入る前の地形を思い返すと、今自分たちが歩いている場所は建物の後ろに続いていた山々の地下である。車両用の通路は山間部を走る高速道路にあるトンネルのような物なのかもしれない。トンネルを抜けただけで雪国どころか異世界に行けるだなんて、昔苦労して乗り越えた世界を隔てる壁が随分と小さく感じる。

そのまま歩き続けている内に、一瞬だけ全身に奇妙な感覚が走つたような気がした。静電気よりも弱い刺激はあつという間に体を抜けてしまい、気のせいかと首を傾げていると隣を歩く藤沢さんも己の肩口に触れて怪訝そうな表情を浮かべていた。

「もしかしてなんか変な感覚が走つた？」

「うそつ、レイも？　なんだか一瞬だけ静電気みたいな刺激を感じただけど……」

小声で藤沢さんに聞いてみれば、どうやら彼女も奇妙な感覚を覚えていたようだ。そんな中で先導して歩く川崎さんが、こちらを振り返つてにこやかな笑みを浮かべた。

「二部の方はもう分かったようですね。ちょうど今我々はゲートを通り抜けてエルトニアへと入りました。向こうの国境警備所までは後少しです」

見た目には何の変哲もない空間だが、どうやらゲートとやらは光り輝いていたり魔法陣がしっかりと描かれているといった物ではないようだ。日本の古新聞が漂流してくるとか、魔法が強く発動しやすいと言われている新月だと日本に飛ばされるような場所がある等、僕と藤沢さんの証言を纏めるとそれなりに日本とエルトニアは近い世界同士なのかもしれない。しかしここまであっさり来れるとは思つてもいなかった。

正面へ目を移すと、川崎さんの言うとおり長々と続いていた歩道の奥に改札口のようなものが見えてきた。歩道としては幅が広い通路であったが、同じような景色が延々と続いて脇に部屋の一つもない人間味の無い場所は歩いていると精神的に疲れる。

「なんだか空港の搭乗口みたいな見た目だな」

「あの改札の奥じゃ新着ニュースがテロップで流れていたりしているかもね」

空港が空の玄関口ならば、このゲートは陸の玄関口ということになる。空港のような作りをしているのは、異国への入り口ということを実感しやすいようにする意図がある

のかもしれない。もつとも、空港が開放感のある大空が見えるのに対して、こちらは蛍光灯の光に照らされた地下道の壁しか目に入らないために、風景の美しさでは天と地の開きがある。

動く歩道が途切れてから出口までは後電車一両ほどの距離がある。川崎さんは一度立ち止まって全員揃っていることを確認している最中だが、後ろから着いて来てくれている自衛官が見守っているのだから迷子になるといふことはないだろう。

「皆さん全員揃っていることが確認出来ましたので、そのまま国境警備所に入ります。再度皆さん私の後ろに着いて来てください」

再び動き出した列の最後尾に着いて歩きはじめる。改札口といってもどうやら形だけのようで、ビザを確認されるようなことはなく抜けることが出来るようだ。ごそごそと胸ポケットを漁りかけた平塚先生はバツが悪そうに頭を掻きながら無人の改札を抜け、僕と藤沢さんがそれに続いた。

「明るいね。どうやらこっちは地上みたいだ」

「入り口が地下なのに出口は地上なんて、まるで渋谷ね」

今まで歩いてきた道に特に勾配などは感じなかったし、ゲートを介しているというところで入り口と出口の環境の違いは結構あるのかもしれない。

改札外の建物の内部を見渡してみると、受付の人は居ないものの窓口のような物が数

個並んでいたり、待合室のような感じで長椅子が数本並べて置いてあったり等々。建物の出入り口と思われる場所や所々に設置された窓からは日の光が差し込んできており、これで立ち食い蕎麦屋や小さな売店が併設されていたら空港というよりは田舎のターミナル駅と表したほうがしっくりと来るのんびりとした雰囲気である。大月側の警備所が相当立派な建物であったため、こちらの小さくまとまった感じのつくりには少々意外さを感じる。

「えー、我々が今居る場所がリーヴェル国境警備所です。これからはキャンパスの方までバスで移動することになります。その前に皆さんにお渡しする物がありますので少々お待ちください」

川崎さんの言葉と共に、出入り口の傍で控えていた自衛官が大きな箱を担いで僕たちの方へ近づいてきた。

「では一人一つずつお取り下さい」

どうやら箱の中身にあるのは小さなネックレスのようだ。一人一人に配られていくそれは、透き通るような蒼い小さな石に紐を通してネックレス状にされている。順番が僕に回ってきて、小石を手の上に乗せると昔はよく親しんだ暖かさにも似た感覚がジワリと手のひらに広がった。

「エルトニア政府の懇意で、皆さんには一人ずつ翻訳魔法が組み込まれたネックレスが

貸し出されます。原理はただ今日の物理学研で調べておりますが、首から下げることでもエルトニアの方との会話が可能になるとのことです。一応申し上げておきますが、改造及び分解は借り物のためご遠慮ください」

手の上で淡く光るそれは、魔石に術式を書きこんで自動で魔法が発動するように作られたお守りのようだ。一応事前の説明会で翻訳魔法の効能についての話は出ていたはずだが、外国語の研究を鼻で笑うような効能の術式をこの小石が秘めているというのは簡単に信じられる話ではないだろう。参加者たちはそれらを光に透かしてみたり、軽く小突いて感触を確かめたりしているが、見た目そのものは夏祭りの売店で買えそうな物だから効果を信じられなくても仕方がない。

僕や藤沢さんを除けば、平塚先生も含めて参加者は誰一人納得した様子が無かったが、川崎さんの指示に従って皆仕方がなく首元にネックレスをぶら下げたようだ。

「……私たちはどうする？」

「指示されたんだからつけりゃいいさ。見た目もオシャレだし」

石そのものの色や形は悪くない。蒼い色や細かく書き込まれた紋章によって、空から落ちた時に体を浮遊させてくれるような某石にも見えなくはない。確かに元から此方の言語が話せる僕たちがネックレスを下げなければいけない理由はないが、オシャレ目的としてみても悪くないデザインだからせっかくだし貸してもらったことだし着けるにこ

したことはないだろう。

「全員身に着けましたね？ それではロータリーにバスを用意しておりますので移動しましょう」

先ほどと変わらず川崎さんが先頭に立ち、後ろを僕たちがぞろぞろと続いて歩く。出口に差し掛かった途端、地下道の蛍光灯とは比較にならない白光の眩しさに思わず目を覆い隠す。薄目を開けながらなんとか集団に遅れないように足を進め、そのうち眩しさにも目が慣れてきた。

「……森の中の並木道といったところかしら」

「確かに見た目そのものは富士の樹海バイパスの一角にそっくりだ」

一体どんな光景が待ち受けているのかと期待を抱いたものの、目の前に広がっているのはそこそこ生い茂った森林だった。地面を覆うように群生する蒼い花をつけた下草には幻想的だし、適度に開けた森の中は日が明るく差し込んでおり非常に美しい。確かに美しいのだが、見ようと思えば富士山麓や白神山地あたりでも発見できるような光景だ。

この警備所はそんな森の中にポツンと作られた広場に建てられているらしく、驚いたことにその背後には巨大な岩の崖が鎮座している。そして横に目をずらしていけば、まるで高速道路のトンネルの入り口のようにも見える車両用の通行路がすぐ横に通され

ていた。どうやら崖の中を通されたトンネルの奥に大月と繋がるゲートがあるのだろう。見様によつては樹海バイパスの中に作られた料金所と、それに併設してある休憩所のようにも見えなくもない。

そしてどうやら此方側の警備をしているのは自衛官だけではないようだ。警備所の入り口の両隣に軽めの甲冑に身を包んだ二人の兵士が立っており、僕たちの動向を目で追っているようだ。試しに軽くお辞儀をしてみても、特に反応が返つては来ない。こちらに良い印象を持つていないのか、はたまた職務中は気を抜かない主義なのかは知らないが、鎧に剣という現代日本じゃあり得ない組み合わせを見ると異国っぽさが増すように感じる。

「おお、チヨタの燃料電池車じゃないですか、感心感心」

「エルトニアはまだ科学技術が盛んな土地じゃありませんからね。環境には配慮をしませんと」

そして周りの先生方が好き勝手に風景を眺めている中で、平塚先生がマイクロバスに目を着けて川崎さんがそれを解説している。なんというか、平塚先生はひたすらぶれないなという感想しか湧いてこなかった。

その3

「見て見て大聖堂よ!! 写真で見るよりもやっぱり立派ね!!」

「お、おう」

人通りがある場所は低速専守。それは大学の構内もそうだし、今僕たちが通行している道にも言えることである。マイクロバスが通行する道は、幅は十分なれど人の行き来が激しいために徐行運転を余儀なくされている。そしてゆっくり走るだけならまだしも、一番大きな乗り物が精々乗合馬車くらいしかないリーヴェルの地でマイクロバスなんて代物を走らせようものなら、そりやあもうすごい注目を浴びる訳で。半年前にレシル同伴で大学からアパートまでを公用車で送られた事があったが、現在は明らかにその時の注目度を超えている。

最悪なことにこのバスの窓ガラスは外から見えないような配慮はされておらず、へたに景色を眺めようものなら外のやじ馬と目線があつてしまう。そんな中でも外の景色を純粹に楽しめている藤沢さんは、鉄の心臓を持っているんだなあと実感させられる。僕や前の席に座る平塚先生がなるだけ外を見ないようにしているのに、八歳まで王女生活をやっていたのは伊達じゃないようだ。

「学園区って来たことがなかったけど結構道幅も広いのね。ねえ、せっかく窓側に座っているんだしレイも下向いてないで外を見なさいよ」

「僕も君みたいな豪胆な精神が欠片でも良いから欲しかったよ」

廊下側に座っていないがらしきりに風景を観察しては歓声を挙げる藤沢さんがうらやましい。バスに乗る他の先生方の中には景色を楽しんでいる方もいるが、僕は下を向きながらなるたけ無心を貫こうとしている。時折こうやって肩を突きながら景色を見ると催促するといった邪魔は入るが、適当な返事をして頑なに下を向き続けることにする。

ちなみにどうやらただ今は説明会のスライドにも載っていた大聖堂の近くを通行しているらしい。一度だけ王都に来た時に学園区の近くで遠景を見たことはあったが、実際に近くに寄ったり中に入ったことはない。写真を見るかぎりではくすんだ灰色石造りの巨大な建物だったはずだ。観光地として栄えるならば多分王宮に次いで人気スポットになりそうだ。

「というか君はもうちよつと身バレとか気をつけた方が良いんじゃないかな。僕が窓際を占拠しているのは別に景色が見たいからじゃないよ」

「……すっかり忘れてたわ。でも窓越しじゃ問題ないとは思うんだけど」

「君の髪の毛は目立つんだから、気を付けるに越したことはないさ」

僕の前まで身を乗り出して窓に顔を近づける藤沢さんに一応釘を刺しておく。通行人と目を合わせたくない僕がわざわざ窓際を選んだのは、失踪したはずのヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアが異国の民が持ち込んだ妙ちくりんな乗り物に乗せられているとやじ馬に見られないようにするためである。

藤沢さんは僕が障害物となっていているおかげで完全に窓の近くまで顔を近づけてはいないので、おそらく王女がどうかばれる心配はないだろう。ただしそういった危険性については本人にも知ってもらっていた方がよい。

「何度か夢にも見た光景だから、ガラス越しとはいえ実際に目にする感慨深くさせられるわ。検問所や大聖堂に大通り……そして王宮も」

「結局実家への挨拶はどうするかは決めかねているんだよね」

「ええ。こちらの情勢がどうなってるのかなんて分からないし、恐らく私個人でどうこうなる話じゃない。もし顔を出すとすれば外務省の役人同伴になるわ」

わき目で窓の外を伺うと礼の大聖堂のより奥に城壁が連なっているのが確認できる。そしてその上に姿を見せているのが、この街でも一番高い場所に存在する王宮であり、隣に座る藤沢さんのご実家でもある。

半年前の全体説明会から彼女は自分の身分についてを悩みぬいたが、結局答えらしい答えが見つからないまま今日を迎えてしまっている。大聖堂の向こう側の王宮を見つ

める藤沢さんの顔に浮かぶ苦笑いが、故郷の地を前にしても手放しでは喜べない複雑な状況を物語っているようだ。

少々会話が途切れてしまい、手持無沙汰になった僕は仕方がなく窓の外に目を向けることにした。相変わらず大通りを歩く人々は、僕たちが乗るマイクロバスを珍しそうに観察している。学園区に入ったためか、リーヴェル市内に入った直後に比べると全体的に若者が多い気がする。

通りの片側を見てみると鉄柱の塀で区切られた向こう側には広々とした草原が広がっており、その向こう側には大きな目の講堂のような物が連なっている。国立東都工科大学も23区内の大学にしては広々とした土地を持つていたが、この通り沿いにある学校と比べると結構狭く見えてしまうかもしれない。

この学園区にはエルトニア王国立魔法騎士学園やリーヴェル魔術学校などの有名なところを筆頭にいくつかの学園が集結している区域である。学校が複数集結した地域という、日本にも筑波研究学園都市や神戸研究学園都市などの名の知れた学園地域が揃っている。リーヴェルの学園区が元々がどういった理念で構築されたのかは分からないが、学校が近場に揃っているということは互いの交流も盛んなのだろう。うちの大学が殴り込みをかけるには上々の立地だ。

「沢山の学校が首都に集約してるって、なんだかすごいな」

筑波の学園都市は元々が首都に集中し過ぎた学校を首都から切り取って離れた地域へ纏めて移転させることを目的としていた。一方のリーヴエル学園区は王都の中に含まれる形で存在しており、おそらくは移せるものは完全に首都へ集中させようという目的なのだろう。都市としては古くからの伝統ある地域であり、昔から学術に力を入れているエルトニアらしきが見て取れた。

そんな折に、ゆつくりと通り過ぎていた草原の光景が不意に途切れた。急に並木がよきによきと姿を現したかと思えば、進行方向の先に紅色の大きな建造物が見えてきた。

「この学園の入り口かしら。随分荘厳な作りをしているわね」

「懐かしいね。レシルがこの魔法騎士学園を見学する際に僕もついでだけど連れてこられたんだよ」

大きな石造りのアーチの中からは、この学園の生徒がちらほらと出入りをしている。正門を抜けた彼らの視界には、すぐ目の前の通りをゆつくりと走るマイクロバスの姿が映っているはずだ。騎士の卵たちとは言えども好奇心旺盛な若者だ、見慣れないこの車両は彼らの視線を一気にその身へ集めた。

そんな好奇心に満ち溢れた視線を気にした風もなく、車は正門付近でゆつくりと曲がりだした。正門付近で警備をしている兵士達がやし馬となっている学生たちを離れた

場所まで誘導している間に、車両は門の中をくぐり抜けていく。

「まさかこの大門をもう一度、しかもバスでくぐることになるとはね。予想だにしていなかったよ」

「そりゃあこんな状況なんて予想も出来ないでしょ」

正門をくぐり抜けた先に続く並木道を通り抜けると、確か噴水のある広場に辿りつくはずだ。昔にここを訪れたときは、随分と土地の広さに物を言わせたつくりをしている学園だと思つたものだ。生徒として多くが貴族のご子息が在籍し、国内どころか周辺国を含めてもトップクラスの実績を誇る騎士の養成所だけはある。

そうして相変わらず人目に晒されながらゆつくりと走るバスの前方に、この車両と同タイプのマイクロバスが停車しているのが見えた。どうやら僕たちよりも先に出発していたグループが乗っていた車両のようだ。

「車が入れるのはここまでです。前から順にお降り下さい」

構内が広いとはいえ、車でずんずん進めるのはこの広場までなのだろう。大きく息を吐いて、藤沢さんの後に続いて立ち上がる。バスを遠巻きに眺める異国風の生徒たちや正面に立ちふさがる伝統ある学園本講堂。先ほどの警備所なんて比じゃないくらい濃厚な異世界の地面を、僕はぎこちない様子で踏みしめた。

* * *

「レイ、早くいきましようよー」

部屋のドアを勝手に開けた藤沢さんが早く部屋を出るように催促をしてきた。確かに今やる事といえれば荷物が届いているかを確認するだけなのだから、もう用事は終わったも同然である。

備え付けのふかふかなベッドに置いといた鞆を背負い直し、改めて今居る室内を眺める。奥行は引き払った本キャンパス近くのアパートと同程度だが幅がかなり大きくなり、部屋の広さは明らかに此方の方が勝っている。寮の外装こそは周囲の景観を損ねないようにあえて古めかしい物となっていたが、一方の内部といえれば新築を思わせる汚れの少なさで居心地も良い。

「まあ待ちなつて。僕は今すごい感動しているんだよ。寮の部屋がここまで広くて綺麗なんてすごいじゃないか」

「そうね。床にどの方向で大の字になつても余裕があるなんて久しぶりだわ」

仮にも元貴族の端くれだったり王族の子息だったりという僕たちが、こんな一人部屋に感動しているなんて少々情けないかもしれない。でも実際に以前住んでいた部屋よりもかなりの余裕が出来たものだから浮かれてしまつても仕方がないと思う。

大学の方で部屋を用意していると聞いていたからどんな物が割り当てられるのかと楽しみにしていたが、ここまで立派な部屋ならば僕としては満足の一言に尽きる。仮に大月から通うことを許されていたら、恐らくここまで良い部屋を見つけることは出来なかつただろう。

「でも部屋なんて夜ゆつくり堪能すれば良いじゃない。昼食会まであと10分よ」

「……えっ、そんな切羽詰つてたの!？」

部屋の間取りに感動して時計もみることなくぼんやりとしてしまっていたが、どうやら結構ピンチのようである。今日は懇親会も兼ねて昼食は新キャンパス計画の参加者全員で取る予定になっている。流石に初日から遅れていくのはまずいし、年配者を待たせて若者が遅刻をするなんて確かにあつてはならないことだ。

急いで部屋を出ると藤沢さんと一緒に早足で階段を目指した。この寮のは二階と三階が居住スペースとなっており、一階部分は談話室や食堂などがある。どうやら食堂の従業員の中には現地の人間も混じっているようで、もしかしたら第二の故郷の料理を堪能することも可能かもしれない。

「ええと、確か入り口の右側が食堂だったよね」

階段を駆け足で降りてきた僕たちは、目の前の廊下を小走りで突き進む。どうにも昼食会に向かう人と会わないことから、もしかしたら僕たち二人以外は既に食堂に集まっ

ているのかもしれない。若い衆が揃って遅刻なんてことになれば、ヘタすりや平塚研究室の信用に関わるから何としてでも間に合わなければならぬ。

そして見えてきた食堂入り口。寮の正面ロビーの右側、一階のおよそ半分近くを占めているスペースからは話し声が漏れ出ており、案の定かなりの人が集まっているようだった。走りながらも一応腕時計で時間を確認するが、5分だけだが時間に余裕があるようだ。ギリギリになってセーフなどと喜ぶ気はないが、遅刻だけは避けられて本当に良かった。

「おいおい、初日から揃って遅刻寸前ってどうしたんだ」

「すいません。荷物を纏めてたら思いの外時間が過ぎてしまつて……」

大きな食堂スペースに並んだ二個の長机、その端つこの方に僕たち平塚研究室の席が割り当てられている。すでに座席には食事が用意されており、今日のメニューはカレーライスの上に豚カツが添えたものだ。参加者がこちらの世界で初めて口にする物がカレーとは、色々有つて疲れている人にも食べやすいしゲン担ぎも含めてのことなのだろう。そして周囲を見渡す限り全ての席が埋まつており、どうやら僕と藤沢さんが最後だったらしい。

殆どが三十台も過ぎた大人たちが集まる中で、全員がカツカレーを前にして一斉にいただきますと口を開くのは少々不思議な光景かもしれない。思い出すならば小学校の

給食のような風景であるが、一人さびしくカレーライスをつまむよりはマシだろう。

「お前たちは一人暮らしだからアレとして、俺にとつては狭くなつたから残念極まりな
ら」

「……そりゃあ独身で一軒家住まいならば広々してたでしょうね」

一応周囲に人がいるために敬語を使って平塚先生と言葉を交わす。両親と僕、少なくとも17年前までは平塚先生の実家は三人が暮らしており、家が狭いと感じたことは特になかつたはずだ。それを一人で使うとなれば相当余裕のある広さだろう。

「そうそう、食後から搬入物の整理を始めるからしつかり食べておけよ。力仕事になるからお前は大変だろうけどなんせ人手が足りないからな」

「力仕事……ですか」

「ぶ。ぶつ、下手すりゃ先輩は私よりも力仕事苦手ですからね」

わざとらしい敬語を使って手を口に当てて笑う藤沢さんをわき目で睨みつけるが、彼女の言うことを完全に否定できない自分が恨めしい。女子の如く細い腕は見た目通りの貧弱さを誇るし、重い物を持ち上げようものなら膝が小鹿のようにプルプルと震えだすのだから情けないつたらあらしめない。

「明後日までには設備を整えておきたいな。ガスの配管取り付けもあるし、ベースの測定もやり直さなきゃならない。こりゃ忙しいぞ」

「……精一杯頑張らせていただきます」

今でこそそうやってのんびりとカレーライスをつついているが、研究準備や論文執筆、それに加えて自分が担当する講義の計画も今後は行わなければならない。四か月後のプレゼンよりも前に、僕の前には何枚もの大きな壁が聳え立っている。

その4

「終わった……そして疲れた……」

「私たちは勝ったわ……生きる力を犠牲にして」

「おー、物品の配置がまさか一から初めて三日目の内に終わるとはなあ。後はサンプルデータの打ち込みだけだ」

リーヴェル新キャンパス三日目。運び込まれた設備の配置を決めたり、重い計測器をせつせと運んだり、消耗品や薬品の追加発注の準備を行なったりと精力的に働いた結果、僕と藤沢さん共に目の下に見事な隈が出来上がったが三日目の日の入り前に現状で出来るかぎりの作業は大方終了した。

新キャンパスにおける実験室は、研究内容が似通っている浜松先生などの他のグループと共同の物となっている。そのため僕が死んだ目で深呼吸をしている奥では他の研究室の学生や教員が準備作業を続けていたりする。現状僕たちのグループは三名しか在籍していないが、一方で得ることが出来たスペースはその三倍の人数が使っても十分な広さだ。後に現地の学生が入ってくることを考慮しているのか、1グループごとに割り当てられた実験室面積は人数の割にはかなり広いようだ。

「計測結果は解析した後共用のデスクトップにファイルを作っておくから、先生と藤沢さんは後で自分のパソコンに入れといてね」

「了解。それにしてもお前達目の下の隈が酷いけどどうしたんだ？」

「……寝る間を惜しんで物品購入表やデータの解析ソフトを作っていたんだ。正直初日や二日目から飛ばし過ぎたよ」

「私はこちらに来てから緊張してあまり寝られません」

一段落ついたと頭が認識した途端、目蓋が急激に重くなったし視界もどことなくぐもって見えてくる。実験室の床でも寝転がったら多分一分以内に寝つけるであろう僕の様子を見た平塚先生は、呆れたようにため息を吐いた。

「根詰める場面じゃないのに無理をするな。社会人は体調管理も仕事の内だぞ。まあレイはお疲れ様とだけ言っておく。しょうがない、お前たちはデスクで少し仮眠でも取ってろ」

彼の大きな手が無遠慮に人の頭をわしゃわしゃと撫でつけてくる。普段ならば文句の一つも言つてやりたいところだが、今に限って言えばそんな気力も出てこない。

「今寝たら多分夕飯までに起きれない」

「私も自信が持てません」

「……寝過ぎしたら飯抜きだからなあ。しょうがない、外を散歩でもして夕飯まで何と

か意識を保つてろ」

食堂のシステムは本キャンパスにある学食とは大分異なっており、何時でも好きなタ
イミングで好きな物を食べられるわけではない。毎日朝昼晩の決まった時間に食事会
が開かれ、全員のメニューは基本的には同じというスタイルだ。参加している研究者や
学生数が50名を超えており、尚且つ異世界という立地のため、食堂の実態はレスト
ランというよりも給食に近いものになっている。

そんな取り決めがあるために、食事の時間を寝過ごしてしまうと夕飯にありつけない
という緊急事態が発生するかもしれない。当然たかだか一食抜いたくらいで死にはし
ないけど、僕だつて新天地に来てからそんなに経つてないのに生活を極限まで追い込み
たくはない。結局平塚先生に追い出されるような形で僕と藤沢さんはふらふらと廊下
へと出た。

寮の隣に作られたこの新校舎は、周囲の風景に溶け込んだ古めかしい外観をしている
にもかかわらず、内部は最新の校舎だけあつて設備がしっかりしている。実験室の入り
口は特殊なIDカードを通さないと開かないようになっていて、火災時のスプリンク
ラーも設置されているという。

正面ロビーへ向かう道すがらに見える光景も、本キャンパスに新しくできた最新の校
舎に勝るとも劣らない清潔感がある。まだ何も張られていない掲示板のコルクボード

も、この建物が最新のものであることを示しているようだ。

「あの、失礼します。眠気覚ましがてらに学園区を散歩したいんですが、外の出歩きって大丈夫ですか？」

「大丈夫だけど今日は学園の敷地内に留めてね。それと勝手に他の校舎に入らないこと。ここに記名を、それとIDカードの方は大丈夫かい？　もしもの際にはこちらの本部まで電話をするように」

入り口付近には守衛さんが既に配属されている。一応彼に話を通しておかないと、実は今は外の出歩きが禁止されていますなんて事があつたら面倒極まる。そして驚いたことに、この学園の敷地内では電話をすることが可能らしい。どうやらこの校舎の屋上にアンテナが取り付けてあるようで、もしものことがあつたらポケットにねじ込んであるスマホを使うことになりそうだ。

「それと二人とも夕食開始時刻には食堂に戻ること!!」
「了解です」

二人分の名前と携帯電話の番号を記入すると、やっと守衛さんが道を開けてくれた。外からこの建物を見たときに、恐らく唯一である近代要素が建物の入り口だ。ここいらの学園の建物とは違い、この校舎は外と中が明確に区切られている。そしてその扉はよくありがちな木製の引き戸などではない。

「ここだけ見れば雰囲気ぶち壊しだなあ」

「見事に入り口だけ近代的ね」

なんてことはない、赤外線センサー付きの自動ガラス戸、しかもどうやら防弾機能を備えた優れたものだそう。ガワだけ石造りだけど見た目だけは荘厳なこの校舎の入り口が今風のガラス戸というのは、何とも雰囲気欠けるものであると感じる。その隣に備え付けられた大学の校章も、ただの飾りではなくIDカードリーダーを兼ねているために本当に隙がない。

これから何度も通うことになるこの校舎をじろじろ眺めるよりは、昨日バスを降りた後に通るかかった噴水広場周辺を歩き回った方が楽しいだろう。そう思い直して視線を新校舎から外して歩みを進めることにする。

「意外に生徒が少ないわ」

「まだシーズン始まってないらしいし、ここに来ていない生徒も多いんじゃないかな」

川崎さんの話では、ここの土地の所有者であるエルトニア王国立魔法騎士学園はこの時期はまだ新学期が訪れていないそう。こちらの暦では現在では一年の終わり近いはずであり、新学期は今から一週間ほど後の年明けかららしい。

そうなればこの時期に学園に留まっているのは、家が都市単位で離れていたりするために完全に寮で住み込んでいる層や、家は近いものの自主訓練に励んでいる頑張り屋さ

ん辺りがメインなのであろう。もしかしたらレシルも新学期までは実家で過ごしているのかもしれない。

そういうわけで一応前情報として生徒の数が少ないとは聞いていたが、それでも歩いている道の先の方にはちらほらと生徒の姿が見える。藤沢さんも彼らの存在を気に留めているようで、腰元のポーチから折り畳み式の帽子を取り出した。どうやら彼女は王族以外では中々居ない赤紫色の髪の毛を隠すため、日常的にかつらや帽子を持つようにしているようだ。

「……当然だけど、私たちの恰好は結構浮いているね」

「なんなら白衣でも取りに戻るかい？　もしかしたら僕たちの普段着よりも意外と目立たないかもよ」

もちろんこれは冗談で、基本的に薬品が付着している白衣を無暗に実験室から持ち出すのはあまり宜しいことじゃない。藤沢さんも呆れたように首をふる。しかし周囲を歩くこの学園の生徒が白を基調として所々黒いラインを走らせたという妙に目立つ制服を着ており、案外ジーパンにカッターシャツなんて普段着よりかはこちらも白衣に身を包んでしまった方が浮かないかもしれない。

噴水が近付いてくると、そこで談笑をしている学園の生徒たちの姿もはつきりと見えるようになる。巨大な白い石の杯から放射状に噴出される水は大層涼しげで、水場をぐ

るりと取り囲む花壇が黄色い花を咲かせて鮮やかに彩っていた。広場の各所には多くの長椅子が並べられて、腰かける生徒たちは噴水を眺めながら団欒を楽しんでいる。国でも権威のある学園ともなれば、生徒の憩いの場が美術館の庭園レベルにまでランクアップするものなのか。

「綺麗……」

「まあ流石に錦鯉とかは泳いでいないか」

広場に足を踏み入れるかというところで、どうやら僕たちの姿がまどろんでいた生徒たちの目に留まったようだ。学園の制服でないどころか、エルトニアの住人が着なさそうな服装のことだから注目を集めるのもしょうがない。彼らとしても日本政府が学園の土地を間借りする形で校舎を建てたのをおそらくは知っているだろう。これからはこうやって普段着姿の日本人が広場にふらりと姿を現すかもしれないが、段々と慣れていってもらえれば嬉しいものだ。

まあ今現在は、帽子で髪の毛を隠している藤沢さんとはともかく、僕は首から上は銀髪に碧眼という少々変わった見た目ではあるが異世界フェイスだから、彼らとしてもそこまで異物感を感じないかもしれない。

「ここにはいないけど多分学園内を探せば観賞魚を泳がせてる池もあるんじゃない？」

「本当にありそうで怖いや」

腕時計を見てみるとこの広場周辺を適当に歩き回っていけば夕飯の時刻となる。遠くの空に橙色の夕日が浮かんでおり、燃える焔のような太陽の姿が吹き上がる水を照らしているのは大層幻想的な光景だ。夕日が並木で遮られたら校舎に戻るくらいが丁度良いだろう。

「……あと一週間くらいで開校ね」

「それが本当の始まりだね。果たしてこの生活は一体どうなることやら」

そろそろ学園の生徒たちは夕飯の時間なのだろう。ぼんやりと輝く夕日を眺めながら言葉 exchanges を交わす僕たちの脇を、生徒の一団が広場の出口を目指して通り過ぎて行った。水が跳ねる音を背後に感じながら彼らの方へと振り返ると、一団は楽しそうに会話に花を咲かせながら荘厳な正面校舎の方へと歩を進めていた。

頭にすぐ浮かぶような妙に格式ばった貴族の子息の姿とは違う垢抜けた様だ。もし自分に魔法や剣術の才能があったのなら、そしてこの世界への愛着が研究への執着を超えていたならば、あの四人組の中には銀髪の少年が一人混じっていたのかもしれない。

「リーヴェル魔術学校の学生の中での希望者だつてさ、新キャンに入学するのは」

「そこつてレイが行くかもしれない学校だつて。そう考えると不思議なものね」

「本当だよ。何かの歯車が違っていたら、僕は教える側ではなくて教えられる側だった

かもしれないんだ」

心の中は40手前のオツサンだし、もはや青春時代など当の昔に過ぎ去った道だと頭は理解をしようとしている。二度目の青春のチャンスをあつさりとは投げ捨ててこの道を選んだのだ。夕日を後ろに置きながら友達と談笑しながら食堂へ向かうあの学生のような未来を選ばず、手に取ったのはよれよれの白衣なのだ。

それでもこうやって若い学生たちが精一杯青春を謳歌している姿を見かけてしまうと、当時の選択への微かな後悔が胸の中に沸き起こるのだ。二度目の人生を生き急いできて今や僕は二十歳を超す前に彼らのような学生を通り越して教員側へと回ってしまった。

この地位が念願の物には違いはないが、それでももう少しだけ無駄な青春というものに価値を見出しても良かったのではないか。毎日に一喜一憂して喜怒哀楽に正直でいられた日々、それをもう一度得ることが出来たかもしれない千載一遇のチャンスを手放して本当に良かったのかと。

「もう少しだけ学生って身分を堪能した方が良かったのかなあって、彼らのような若い学生を見ると頭に浮かんじやうんだよ。眠気もあるから思考がちよつとおかしくなっているのかな」

「……アンタが教える対象の学生って、多分私と同じくらいよね」

「大体そんなもんだよ。こんな精神状況じゃ、見ていて一番考えさせられる年代だ」
ゆつくりとした步調で噴水の周囲を歩き回つて数分、気がつけば入り口付近に足が向いていた。ぺちやくちやと話している内にどうやら広場を一周歩き終えてしまったようだ。

時間が結構遅いためだろうか、広場に居る学園の生徒達は帰りは始める同胞の姿を目に入れると自分たちも校舎に帰る用意をし始めているようだ。僕たちと行き会うようにしてまた生徒の一団が広場の出口を目指して通り過ぎて行つた。僕たちが広場に来たタイミングがどうやら生徒の帰還ラッシュと被つていたようで、気がつけば広場の人口密度は半分程度にまで落ち込んでいる。

「……ちよつと早いけど僕らも帰ろうか。歩いている内に夕食を乗り切れる程度には目が覚めた」

「そうね。それと食べ終わつたら今日は早めに休みなさいよ」

「藤沢さんも明日までに隈をしつかり取るんだよ?」

なまじ彼女は顔が整い過ぎていてから目の下にくつきりとした隈があると異様に目立つ。藤沢さんの目をじーつと眺めていると、彼女は少し頬を赤らめて僕の背中を小突いて早足でもと来た道へ引き返し始めた。

第五話 「開幕!! 国立大学異世界校」

その1

「見事選ばれた生徒諸君、まずはおめでとう」

四月の頭というと、まだ前世で学生をやっていた頃では桜が咲き始める時期だった。エルトニアから東京に舞い戻ってからの五年間は温暖化などの影響によって桜が満開となる時期は少々前倒しとなってしまうていたが、それでもこの季節の花といえば桜一択であるのには変わりはない。

しかし今いるのはエルトニアだ。王都の街路樹には桜なんて一本たりとも生えていないだろうし、国立東都工科大学が新キャンパスを建てたこの土地にも見当たらないだろう。そもそもこちらの世界に生れ落ちてから東京へ逃亡をするまで、春先に咲く桃色の花などついぞ見たことはなかった。

「おそらく学ぶことになる内容は、我々エルトニアの民には非常に難しい物事だろう。君たちが培ってきた魔術についての知識も、もしかしたらあてにはならないかもしれない」

こちらに戻って来てから数日が経ったが、桜の花どころか白桃色という色すらも目に

入らないとなると段々と今が入学シーズンであるという事実が現実味を帯びなくなっていく。初々しいスーツ姿の学生たちが散りつつある桜の木の下を興奮しながらも緊張した様子で歩くという光景が、この新生活が始まるシーズンには欠かせないからだ。「しかし私は君たちの卓越した頭脳を信じている。君たちには日本国の皆の知識をしっかりと学び取り、そして祖国の更なる繁栄への足掛かりとなつてもらわねばならない」

調べてみればゲートをくぐり抜けた先の大月ではどうやら桜祭りなる物が開催されるようだ。生憎ながら予定が詰まつている為に祭りに現地へ赴くことは難しいだろうけど、週末には申請書を出して大月の桜の木を見て回るのも良いかもしれない。彼方に富士山が見えるなか散りゆく桜の花というのは、これでもかというくらいに和のテイストを感じる眺めだろう。

「諸君らの更なる活躍に期待をしている。私からは以上だ」

壇上から響く話を右から左に聞き流しながらまだ見ぬ大月の桜花への思いを心の中に抱いていると、急に周囲から大きな拍手の音が鳴り響いたために僕も慌てて手を叩き始めた。

社会人のくせして偉い人のスピーチを聞き流すのは如何なことかと思いましたが、興味がないものにはやはりどうやっても集中することは出来ない。

それに聞き流していた終わり間際は僕のような教職員へ向けた物ではなく、記念大講堂の中央近くに集団で座る白い制服の一団に対しての物だろうから、おそらく僕に対してはそこまで注意をしなければいけないものではないはずだ。船をこぎ出さなかつただけでも上出来といったところだろう。

一面の拍手を身に浴びても表情一つ変えずに貴賓席へと戻った人を見て、今度は僕の隣でどこか居心地悪そうにしている藤沢さんの姿を見る。

未だ鳴りやまぬ拍手の対象となつてゐるのは、長く伸ばした赤紫色の髪の毛をティアラで留めて、おそらく貴族基準では落ち着いたデザインの黒いドレスに身を通した若い女性だ。髪の色こそ派手に感じるが、やり手のキャリアウーマンのような話し方や引き締まつた表情からは知的な美人といった印象を受ける。そんな彼女は役人の話ではこの国一の才女とも言われる、エルトニア国王の令息の一人だ。

そして一方で僕の隣で下を向いてゐるのは、最近購入したという黒のかつらを被つて見た目だけは黒髪美人と化した藤沢さんだ。僕や平塚先生などの教職員メンバーと同じく黒いスーツに身を包んでおり、修士一年生という学生の身分にしながら新入生の中ではなく僕たちと同じ職員席に座っている。

「……あの人ももしかしなくても君の姉妹の誰かだよね」

「ええ……記憶が確かなら姉のライアに間違いないわ」

彼女が自分の膝をじつと眺めているのは、おそらく一瞬たりとも貴賓席に座るライア・ヴィクトリウス・エルトニア殿下と視線が合わさらないようにするためののだろう。しかしスピーチ中に頑なに前を見ないというのもそれはそれで目立つ気がするのだがどうなのだろうか。そもそも黒髪集団の中で一人だけ銀髪という色物な僕の隣に座っているのだからどうしても視線は向くだろうに。

拍手が小さくなってきたから、いくら声を小さく潜めてるとはいえこれ以上雑談を続けたら周囲の迷惑になってしまう。僕と藤沢さんとの会話を切り上げて改めて前向き直り、続いて壇上に登るウチの大学側のお偉いさんに視線を向けた。

それにしても今日は大物な方々が非常にたくさん来ているようだ。新規入学者が100人に満たない大学の入学式なんて、言葉で聞いたただけじゃあすぐくこじんまりとした会に聞こえるだろう。しかしこの式典に訪れているのは外務大臣をはじめとする日本の閣僚が数名、そしてちらほらとエルトニアの貴族らしき方々、果てはエルトニアの王女陛下ときたものだ。ここまで豪華なラインナップの入学式なんて僕は前世含めて経験したことがない。

そして入学式が執り行われている建物もこの場に居る人間の数に対して非常に大きいサイズだ。周辺国を見渡しても最大規模の騎士学園であるエルトニア王国立魔法騎士学園が入学式等の記念式典を行うホールだそうで、結構な人数を収容できる立派な空

間だ。国立東都工科大学リーヴェル校の開校式も兼ねた今回の式典は、外務省などの役人の活躍の結果特別にこの大講堂を使わせてもらえることになったらしい。

「……初々しいなあ。若いなあ」

「アンタも歳じゃあ負けてないでしょ」

生徒達の全体的な雰囲気を見るかぎり、彼らの平均的な年齢は一般の大学一年生と同じくらいだろう。どういった経緯で魔術学校からこちらに転科をしてきたのかは分からないが、未知の分野に足を踏み入れるのには結構な覚悟があったに違いない。

聞いても聞かなくても大差なさそうな学長の話を真剣な表情を浮かべて聞き入っている新入生たちが眩しくて叶わない。思わず口から漏れ出た独り言に隣から無粋なつつこみが入るが聞こえない。

藤沢さんとは逆隣りに座る平塚先生は、船こそ漕いではないものの腕を組んで目を閉じている。一見して学長の挨拶に聞き入っているように感じるが、おそらくはただ研究内容についての考え事をしているだけだろう。教育者がこの有様だから、生徒達の眩しさも更に増すのだ。

「えー、続きましては日本国外務省大臣からの挨拶です」

意外にも早々に挨拶を切り上げた学長に変わって壇上に上がるのは、恰幅のある小さな中年親父だ。学長のスピーチはまだ自身と関係のある立場の人間ということもあり

意識を向けていたが、根っからの文系さんである外務大臣の話なんて聞いてどうするんだという感情が沸き起こる。

自分もはや我慢の限界だ。隣の年配者を見習うが如く、手を組んで目を閉じて瞑想にふけることにする。これからの研究や講義の進め方など思考のネタに困ることは絶対にならないから、開校式が終わるまでの時間をつぶすには十分過ぎる。隣二人が目閉じてしまったためか心配した様子で藤沢さんが袖口を突いてきたが、小声で「寝てはいないから気にしないで」と言い残して思考の海に意識を沈めた。

* * *

入学式と開校式が終われば、土地を間借りする身分の僕たちは早々にエルトニア王国立魔法騎士学園の記念大講堂から撤退をしなければならない。貴賓席に座るお偉いさん方がまず講堂を後にして、次に新入生の一団が係の人の後に続いてそろそろと新校舎に移動をし始める。後に残された教職員一同は、一番最後に講堂を出ることになるのだ。

記念大講堂をはじめとする騎士学園の講堂と、国立東都工科大学の新校舎。建物としての立派さを比較しようと考えてみたが、外見こそは双方古めかしいつくりをしている

が内装に関しては片や外装のイメージと同じ歴史を感じる石造りで、片や白を基調とした最新鋭の研究棟だからすごいベクトルが完全に異なっている。記念大講堂を後にした生徒達が新校舎にどんなイメージを持つのが楽しみである。

「藤沢さんは早速明後日から本キャンの方で授業だっけ」

「ええ。毎週授業の日に關してはこっちに戻るのが夜になってからになりそうだわ」

「無理をしないことだね。授業オンリーの日も割り切つて作るべきだ。担当の人に発表や合同勉強会のスケジュールも考慮してもらおうよう伝えておいてね」

大講堂の中に残っているのが日本国の関係者のみになったからだろうか、藤沢さんは被っていたかつらをビニール袋の中に押し込めており、すっかり普段通りのセミロングマンガンヘアアに戻っている。やはりこのパッションな色の方が藤沢さんに似合っているように感じる。

一方の平塚先生とは言えば、式典の最中は終始腕を組んで目を瞑っていたがやはり寝ていたわけではなかったようだ。式典終了の言葉と共に眼鏡の奥の双眼をカツと見開き、胸ポケットから取り出した手帳に何やらサラサラと書きこんでいた。普段から先生は頭に浮かんだ使えそうな物を忘れない内にアイデア帳に書きこんでいるから、おそらくそれだろう。

「先生一応起きてたんだ」

「失敬な。こう見えても意識はしっかりと保っていたぞ」

教職員連合もどうやら出口に向かい始めるようだ。先導する係員の後ろにつき、流れに乗って平塚グループの三人で纏まって歩きはじめた。

「俺達はもうお役御免のはずだろう？ ラボにすぐ戻らないとな」

「新入生たちは一階の大教室で説明会だから行き先は途中まで一緒だね」

やや薄暗い大講堂の出口をくぐり抜けると、立ち並ぶ石柱の合間から差し込む陽光が顔を真正面から捉えた。存外に明るかったために思わず目を覆い隠す。何度か瞬きを繰り返して明るさに慣れてきたところで、ようやく周囲の光景が目の中に飛び込んできた。

今しがた後にした大講堂はこの学園の入り口通りからみて正面に作られており、出口から少し進むと先日藤沢さんと散歩をした噴水広場へと辿りつく。明後日に学園側の入学式が控えているためか、我々東都工科大学関係者以外にも広場や講堂の周辺には人の姿がそこそこ見受けられる。

明後日からの新学期に向けて、実家や地方に帰っていた学生たちが学園内の寮や下宿先に戻ってきているのだろう。明らかに一週間前よりも若い少年少女の姿が多くなっている。

しかしやはりというべきか、白を基本色とした制服に身を通した彼らの視線は、黒い

スーツに身を通して集団で歩く僕たち教職員の一人団に向けられている。ただでさえ目立つ一団が現地基準で目立つ格好をしているのだからしょうがないが、不審者を見るような視線を浴びせられるのはやっぱりあまりいい気持ちはしない。藤沢さんはどうやら講堂を抜ける直前から帽子を被っていたようなので一安心だ。

「レイは明日からいきなり授業が入っているだろう？ 当然準備は大丈夫だよな」

「そりやあもう。エルトニアに来る前から授業で使うプリントは準備してあるよ」

広場に差し掛かった集団はそのまま学園の外れへと繋がる道を目指して進んでいく。噴水広場は憩いの場だけあって談笑をしている生徒達がたくさんおり、そんな中に黒服の集団がぞろぞろと入ってきたものだから空気が変わるのを感じられた。僕たちは悪くないはずだが、和やかな空気を壊してしまったようなので少々申し訳なくなる。

中には物好きな人間もいるようで、大講堂を出た僕たちの後ろを歩いて歩いてくる生徒もいるようだ。振り返ってみればこちらを物珍しそうに眺めながら着いて来ている生徒の一人と目が合ってしまった。

「はあ、大分目立っているね」

「これからは目立つのが茶飯事になるんだ。気にしていると禿るぞ」

ばつちり目が合ってしまった生徒は驚いたようにすぐ目を逸らしてしまう。この微妙に罪悪感を感じる間は結構苦手だ。そんな彼の他にもこちらに興味を示して後ろに

着いてくる生徒がいる。彼の後方から駆け足で近づいてくる学生もそんな手合いの一人だろう。後ろを眺めていても特に得るものもなさそうなので、前に向き直ろうとした。

「……………えっ」

噴水広場を抜けようかという集団に駆け足で近づくと一人の学生。しかしよくよく目を凝らせば駆け足なんて生やさしいものじゃなく、陸上選手もかくの如しな全力走法で僕たちに近付いてきている。丈がそこまで長くない制服のスカートを気にした風もなく、銀色の長い髪の毛を後方へ派手に靡かせながら全速力で近づいてくる姿には若干の恐怖心を覚える。

そしてその人物は、集団で移動する我々の中でもピンポイントで僕の目を見据えている気がしてならない。ぐんぐんと近付いてくる彼女の顔には満面の笑みが浮かんでおり、それが実の妹だと気が付いた頃には既に声が届く範囲にまで接近していた。

「ラストイ兄さーん!!」

何事だと周囲の先生方が後ろに振り返ったりする中、僕はおよそ半年ぶりの再開となるレシルを迎え入れようと両腕を広げた。彼女は寸分の狂いなく僕めがけて走ってきており、速度を緩めるどころかささらに加速をしたような気すらもする。アレなんかヤバいんじゃないかと思ったころにはもう遅かった。

「久しぶりー!!」

「うーべあッ」

咄嗟に中腰の姿勢になって重心を低くしたのが幸いした。あと一秒でも対応が遅れていたら、体がビリヤードのボールのようにレシルが着弾した衝撃で弾き飛ばされていたかもしれない。

上半身を中心に響く強烈な打撃にもなんとか踏みとどまれたが、それでも肺の中の空気が呻き声と共に体の外にひねり出される。幸いながら半年前のように突撃から絞め技へ派生するようなことはなく、軽く抱きついてきたレシルは直ぐに僕の体を解放してくれた。

「兄さんもとうとうこっちに戻れたんだね!!」

「ケホッ、今からここの学園の外れに作られた校舎に勤めることになったのさ……すいません。後からすぐに向かいますので先生方は先に向かっただけでいいですよ」

いきなり銀髪少女の突撃をくらった僕には、学園の生徒だけではなく一緒に歩いてきた先生方からも注目を浴びてしまっている。先生方に頭を下げて先に向かってもらいうように頼み込むと、怪訝そうな表情を浮かべながらも彼らは広場の出口へと向かっていった。一方で広場の生徒達は、いきなりのレシルの登場に若干の驚きを感じているのだろうか、一層視線が強まったような気がする。

後に残ったのは僕とレシルと藤沢さん、そして何故か平塚先生も腕を組みながらレシルの姿を見つめていた。先生の第一印象は、なんと言ってもその立派な顎髭のおかげで少々気難しそうな男性に見えると思うし、高めの身長や眼鏡の奥のやや鋭い目つきからはそれなりに威圧感を感じるだろう。そんな彼にまじまじと観察されているせいか、レシルは僕のスーツの裾を握りしめて一歩近付いてきた。

「別に悪いオッサンじゃあないからそんなに警戒してくれるな。私は君のお兄さんの担当教員だった平塚礼二という者だ」

「……レシルティア・フォルガントです。兄さんがお世話になっております」

平塚先生に警戒心を抱いているのだろう。レシルの口から出てきた自己紹介は、僕を知る彼女の柔らかく楽しげな口調ではなく、酷く事務的で落ち着いた響きで耳へと入ってきた。

「久しぶり、レシルちゃん」

「レナさんもリーヴェルに来たんですね」

一方の藤沢さんに対しては、レシルは警戒心をそこまで見せずにとととと近寄っていく。一応顔見知りということもあるわけだがあまりにも対応に差があったためか、顎鬚を弄り回している平塚先生は心なしか落ち込んで見えるようにも見える。

「兄さんはニホン国の学校の先生なんだよね？　じゃあいつでも会いに行けるね」

「いつでもはちよつとキツイかもしれない。新校舎は基本的にカードキー無いと開かないからレシルは入れないし、僕自身研究室にこもりきりなことが多いし」

流石に一日中完全に研究室へ缶詰めになる気はないが、そう気軽に外にホイホイ出るような時間もなかなかないだろう。そんなことを考えながら話してみると、目に見えるくらいにレシルが表情を暗くしてしまった。

「あー、でもちよくちよく時間は作ろうと思えば出来るさ。それに週末は予定が開くことが多と思うよ」

「じゃ、じゃあその時なら大丈夫だね!!」
「詳しくはまた追って話すけど、多分大丈夫なはずだよ」

そんな妹の姿にすかさずフォローを入れると、すぐに顔を明るくして勢いよく食いついてくる。しかしここまで一緒に居るといふことに喜びを感じて貰えるなんて、兄として冥利に尽きるといったものだ。

そして発言の後になって週末に跨った予定というものを考えてみると、論文執筆であつたり校外への出張などが挙げられる。こちらも可能ならばせつかくの休日を仕事で潰したくはないが、避けられないものならば甘んじて受け入れるしかない。

まだ何か話したそうにしているレシルだったが、遠くの方から鐘を打ち鳴らす音が響いてくると慌てたように後方に振り返った。わき目で見てみれば、広場の生徒達の中に

は鐘の音と共に腰を浮かせて歩き出す者もいる。レシルの目が向いている方向を見てみると、先ほど僕たちが出てきた大講堂の上部には巨大な時計が据え付けられていたようだ。長針が天辺に到達しており、どうやら鐘の音はその時計から響いて来ているようだった。

「ああ、もう訓練の時間だ!! 兄さんまた今度ね!!」

「一応明日の夕方にも広場に向かうよ。そっちも頑張つてねー」

始業式をむかえていないのに訓練とは、彼女もしっかりとした意志をもってこの学園で暮らしているのだろう。僕の境遇で例えるならば、土日を返上して研究室に赴いて実験を行うような感じだろうか。

最後にブンブンと大きく手を振ったレシルは、砂埃を巻き上げる勢いで広場を走り去っていった。長いとは言えないスカートを身に着けておきながらよくもまあそんな思い切った行動が出来るものだなあと感心さえする。彼女は相変わらず陸上選手のような驚異的なスピードで遠ざかっていき、こうもまじまじと兄妹間での身体能力差を見せつけられると対抗しようという気すらも無くなってしまった。

「随分元気な妹さんね」

「……うん、少なくとも僕よりは快活そうだ」

周囲の生徒達の驚く様な視線。鐘の音に対しても気にした風もなく広場に留まる彼

らの視線は、レシルがいなくなつたにもかかわらず僕の方へと向けられている。果たしてそれがレシルと妙にそっくりな僕に対しての物なのか、はたまたレシルの行動に対しての物なのか。軽く考えてみても答えが浮かぶわけもなく、最後にため息を一つ残して広場の外へと向かう先生と藤沢さんの後に続いて歩き出した。

その2

多量のプリントを押し込めた強靱な紙袋を手にぶら下げて、白色で統一された新校舎の廊下を歩き続ける。段々と日が沈みかけてくる時間帯だからだろうか、節電重視のこの建物でも廊下のLED照明は灯されている。腕時計を見てみると約束の時間まで残り5分程度といったところか。研究室を出てから目的地に行くまでにそんな時間がからないなんて、やはり同じ建物の中に色々纏まっていると非常に楽である。

そうして見えてくる目的地。片手に持った校内地図と現在地を見比べて、目的地の扉に書かれている「105講義室」という文字を見てホッと一息をつく。いくらまだこの建物に慣れていないとはいえ、たかだか研究室から講義室に移動するだけで迷子にはなりたくはない。立ち止まる僕の脇を通ってその扉を開けて入っていく生徒も数名おり、場所は間違いのないようだ。

扉に設けられた小窓からは、きちんと椅子に座っている生徒達の姿が少しだけ見ることが出来る。これから自分がどういう立場として振る舞っていくのかを考えるとどことなく緊張をしてしまうが、軽く頭を振って扉の取っ手へ手を伸ばした。

「失礼します」

扉を開けて入ると、着席していた生徒達の視線がちらほらと僕に向けられるのを感じた。彼らが騎士学園と同タイプの制服に身を包む一方で僕はカッターシャツにジーパンという非情にラフな姿なわけだから、目立ってしまったてもしようがないかもしれない。ライトブラウンや淡い金色、そして現代日本じやまず染めてもいない限りあり得ない青や緑。そんな色の髪の毛を眺めつつ、教卓に手提げの紙袋をおろした。

「そろそろ先生が来ると思うから席に座った方が良いよ？ それと制服はちゃんと着なきゃ」

荷物の中から今日使うプリントを取り出していると、教室の前列に座る一人の生徒が小声で僕に話しかけてきた。おそらくは彼女なりの親切心なのだろう、きつと僕が座る場所を間違えてあろううことか教卓に荷物を下ろしてしまっただけだろうか。屋さんの学生に見えたのかもしれない。

確かにそのような勘違いは仕方がないかもしれない。講義室に座る面々の年齢は恐らく僕と同程度だろうし、そもそも年齢よりも下に見られやすい見た目のおかげで彼らにとってみれば私服姿の年下としか思えないだろう。それに今日の他のコマを担当した先生方は、揃って中年以上の歳に加えて日本人然とした容姿のはずだ。銀髪で色白という異世界風の僕は、初見じゃ講師と思わない人の方が多くかもしれない。

「うん、心配してくれてありがとうね……えー、皆さん!! ちよつとだけ早いですがそ

そろ授業を始めます」

手を軽く叩きながら雑談を続けている生徒達をけん制する。親切心を見せてくれたライトグリーンヘアの女学生は少々驚いた様な表情で此方を見つめており、他の学生たちもプリントの束を纏めはじめた僕に怪訝そうな視線を向けている。この反応は予想をしていたとは言え、ここまで驚いた様を見せられるといかに自分が教師っぽくない見た目をしているかを思い知らされる。

「自分の分を取ったら後ろの人に回していってください」

試しに作ってみた授業プリントの束を最前列の生徒達に配っていくと、少々きこちない感じだが彼らは一枚ずつ取りながら自分の後方に座る生徒へプリントを回し始めた。エルトニアの公用語を使った手書きのプリントに驚いているのか、はたまた後ろにプリントを回していくという文化そのものが無いのか。何にせよ東京の常識で授業を進めていくのは止めた方が良さそうだ。

「この授業は基礎物理化学演習第一です。講義を間違えている人はいませんね？」

初回の授業ではこの手の確認をするべきだと研究室を出る直前に平塚先生から言われている。辺りを見回しながら少しだけ待つてみても、特に教室を出ていくような生徒はいないようだ。

「ではまず自己紹介を。前期の基礎物理化学演習第一を担当する平塚礼二です。まだ皆

さんとそう歳も変わりませんが、こう見えても先生です。これからよろしくお願いします」

一番後ろ側の生徒にまでプリントが行き渡ったことを確認してから口を開く。ゼミという小さな単位での勉強会ではない一対多の大きな講義という物は、最後に受けたのが大学院に入ってから最初の一年の時までさかのぼる。そう考えるとこのようなスタイルの授業という物に結構な緊張感を覚えてしまう。今は自分が教える側に居るのだから尚更だ。

「さて、この講義の頭には基礎という言葉がついています。この講義は昨年まで君たちが受けていた予備教育、その復習を目的としたものです」

基礎という言葉が発すると、一様に生徒達の顔が曇っていく。彼らの多くはこの国立東都工科大学に入学する前には、リーヴェル魔術学校に通っていたのだ。かの名門校は入学審査がかなりの難関であるとのことだから、彼らは相応の学力を備えていたのだろう。

まだちよつと顔を合わせただけの僕には軽々しく判断することは出来ないが、おそらく彼らの心の中にあるのは自分自身への憤りのような感情だろう。生徒達がどういった考えで東都工科大学に移ってきたのかは定かではないが、その第一歩目である予備授業で後れを取って、記念すべき大学での授業初日のラストを飾るのがこの基礎復習講義

だ。講義の対象となる生徒も昨年度末の定期考査に引っかけた層くらいだし、屈辱に思う人がいたところで何ら不思議は無いのだ。

「君たちはこれから他の授業、例えば物理学第一や化学第一などで大学範囲の勉強も行っていくものと思います。この講義はそれらの応用範囲を勉強するためにもう一度基礎を見直そうという理念で行います」

だがこちらとしてみれば、今まで魔術関連の勉強しか行ってこなかった人間が、宜しくはない成績とは言えども予備授業を心を折らずに乗り切ったというのは凄いと言いたい。いくら予備授業の範囲が一般的な高校過程の物だとはいえ、このエルトニアでは全く流布していないような事柄を一年間で頭に詰め込まなくてはならないのだ。そもそもカルキュラムとして無理があり過ぎる。

「もしかしたら今更基礎なんてと思う学生さんもあるかもしれませんが。しかしこの授業で学習する範囲は後に勉強する分野の基礎になる部分です。何となく知ってる程度で済ませると後に綻びが生じます」

こんな話を僕は身を持って思い知ったことがある。それこそ時系列は前世の高校時にまでさかのぼるが、当時とある苦手科目の補講を僕は寸でのところ回避をした。そしてセーフと思いきや、対象分野の勉強をなあなあで済ましてしまったがために次学期以降にエライ思いをした。授業を聞いても何のことかさっぱり分からず、一方で同じく

その科目を苦手としていて補講を受けた知り合いは妙に成績を伸ばしていく始末。結果テスト前でもないのにかなりの時間を費やして復習をする羽目になったものだ。

「綻びがある状態で発展分野を学んだところで訳が分からなくなるのがオチです。テストの点が低かったからここに居る、なんて考えるのは止めましょう。分からない分野があつたから復習をする、ただそれだけです」

最初に話そうと思つていたことを言い終えた。一応学生面々の表情を見てみたが、明らかに不機嫌になつて居るような人は居ない。一連の話で彼らの琴線に触れるといつたことはなかつたようだ。初っ端から随分と説教臭くなつたが、定期考査の補講程度と捉えられてしまうと講義を受ける方も行う方も面白くはない。

「分からないことがあつたらその場で質問するでも良いし、恥ずかしいなら後で個別に来るでも良い。せつかく授業に出ていることだし、分からないことをブラックボックスにするのだけは止めましょう。緒言としては以上だけど、何か質問等がありますか？」
ここまでは順調つちや順調だが、リーヴェル魔術学校がどのようなスタイルで授業を行つて居るのかは分からない。日本じゃ基本的に教授が板書やスライドで授業を行い、時折生徒に対して質問を投げかけるのがメジャーだ。

一方でアメリカでは学生に予習をしつかりさせて、授業では生徒間と教授を交えた討論会のようなスタイルが普通だ。国が違うだけでここまでやり方も変化があるのだけ

ら、世界の壁を跨いだこちらの授業スタイルが想像もよらない物である可能性は大にある。

多分授業を何回か行つていく内に、生徒達のアドバイスも出てきてちよいどいい形式を見つけることが出来るだろう。他の先生方が担当する授業ではほとんど全員の学生が出席するために、総人口が100名近い大所帯だから小回りが利きにくい。だが僕の講義は生徒数20人以下のこじんまりとしたものだ。教室が研究室の勉強会で使う会議室程度の大きさしかないが、それでも授業を行うには十分過ぎるくらいだ。要望があれば講義形式を弄るのだからそこまで大変ではないだろう。要望があ

「……はい。1つだけ質問を宜しいですか？」

「どうぞどうぞ、遠慮なく」

およそ10秒ほど教卓に腕を乗せて教室全体を眺めていると、すぐ目の前で手が上がった。誰かと思えば、授業の直前に僕に話しかけてきた明るめの緑髪の女学生だ。気が付いてみれば部屋に入つてすぐの時は同年代に対する口調だったが、今はきちんと先生や年上の人間に対する敬語に変化している。

「授業と直接関係する話ではないんですが……ヒラツカ先生は、科学とは一体何だと考えていますか？ 漠然とした質問ですいません。しかし去年の予備授業では、学んだ知識をどのように生かせるのが分からなくて……」

「科学は何だ、ですか。人々の役に立つとか、人類の未来を切り開くとか。まあそんな壮大過ぎる世辞文句は去年の予備授業で散々聞かされたんじゃないかな？」

質問をしてきた彼女だけではなく教室全体を見回すようにして問いかけてみると、ちらほらと頷いている生徒の姿が見受けられる。成績の基準の付け方や課題についての質問が飛んでくるのかなあと思っていたら、存外に重い内容の物が来て正直なところ驚いている。こういった質問がいきなり浴びせられるあたり、彼らがただの成績不振な補講受講者では無いことの証明でもあるのかもしれない。

「多分今の答えじゃ魔法にも当てはまっちゃうんだろう。魔法は便利だよ。詠唱一つで冷やすも温めるも自由だ。難しい方程式を立てるところかエネルギーを考えるまでもない」

「じゃあ、科学のメリットってなんなんですか？」

「うーん、よく言われているのが誰が扱っても同じ結果を得られる技術であるということかな」

実験一つを取ってみても、実験ノートをきちんと記載していれば同じ結果をもう一度得ることが出来る筈である。魔力の流れやら精霊の気まぐれで左右される魔法とは違い、そもそもその現象の本質を牛耳ろうとしているのが僕たちだ。

「同じ結果ならば卓越した魔導師だって……」

「魔法が使えない人には逆立ちしたって現象の再現は無理だよ。それとね、これは僕個人を考えただけど、現象の本質が分からないのに結果だけにあやかるなんてもの凄い気持ちが悪くないかな」

この辺の考えになってくると、専攻の違いによつて意識の持ち方も大きく変わつてくる部分だろう。僕のような理学系の人間なら、根つこの原理を説明しなければ新しい発見をしても完結はしないことが多い。工学系や医学系はまた少し違つたポリシーを持つて日々の研究を行っているはずだ。しかし科学者全員の共通意志として、分からないことの放置はなるべくしたくはないはずだ。辿れる範囲で現象を紐解くことが、自分の研究の確実性にもつながるからだ。

魔法の研究は、細かな詠唱の違いを追及したり、過去の失われた秘術の解明などをやっているのだろう。しかし魔法がどのようにして発動するのか、そもそも燃やすにしろ冷やすにしろ一体何が対象の分子に対して影響を与えているのかは定かではないはずだ。言つてしまえば魔法は中身がブラックボックスのプログラミング言語に近いのだ。

「分からないことを無くしていきましよう。ブラックボックスは明るみに出しましよう。多分ココが魔法と科学の最大の違いにして科学の本質だと思つよう」

「分からないことを……無くす」

「そうさ。更なる発展を目指すのならば暗礁なんて少ないに越したことはない。それは科学もそうだし、この授業の目標でもある」

なんだかすごい自然な流れで授業の話に戻せた気がする。いきなりの重量級の質問に対しても余裕を持って答えられたし、授業と関係の無い話から授業に関連付けることも出来た。顔には出さないが、今の僕の心を表情にするならばドヤ顔というやつである。

「……ありがとうございます。今まで聞いたどの説明よりも、分かりやすかったです」
「このような質問が飛び出すあたり、やっぱり君たちは優秀な生徒なんだなあって緊張しちゃいます」

「ええ、まあ……それともう一つだけ宜しいですか？」

どうやら女学生はもう一つだけ聞きたいことがあるようだ。余裕を持った態度で促しながらも、また妙にへビーな質問が来るのかと内心びくびくしながら待ち構えてみると、彼女の口から出てきたのは意外な質問だった。

「先生は先ほどから私たちと翻訳魔法を介した会話をしていませんよね？ 今日他の授業では先生方は全員自動発動型の魔石を使用して授業をしていましたが、ヒラツカ先生はそうではないですよね」

「あー……事前にこっちの言語の勉強をしたからね」

ウソは吐いてはいない。新しい生を受けてから一年とかそういうレベルまでさかのぼるが、こちらの言語を死ぬ気で覚えたことには変わりはないのだ。しかし女学生はとうにも納得した様子を見せない。

「それだけじゃありません。他の先生が基本的に黒髪だったり東方系の顔立ちなのに、ヒラツカ先生は銀髪に加えて碧眼です。まさかとは思いますが、先生はエルトニアの生まれなんじゃないですか？」

「……現状じゃノーコメントで。ただし戸籍は間違いなく日本にあるとだけ言っておきます」

あつという間に感づかれてしまった。しかしそう簡単に自分の出生の秘密をペラペラと喋る気にはなれない。

藤沢さんが下手をすれば国が傾きかねない秘密を抱えている一方で、僕もまたある種の爆弾を抱えているのだ。貴族事情というのは面倒くさい。レシルがらみのフォルガント家の事情が分からない今、庶子の片割れであるラストレイ・フォルガントの存在が明らかになってしまえば、もしかしたらあまり宜しくない影響がレシルに伝わるかもしれないのだ。まだ疑問が残っていると言外に語る女学生の質問を無理やり締めて、僕はホワイトボード前に置かれたマジックペンに手を伸ばした。

その3

授業を無事に終わらせることの出来た僕は、ただ今新校舎をふらりと離れて噴水広場に向けて散歩中だ。夕飯の時間にはまだまだ余裕があるし、講義前に研究室を出たときに既に平塚先生に寄り道をする旨を伝えてあるので、多少戻るのが遅れても大丈夫だろう。

こうやって風景を眺めながら歩いていても、頭に浮かんでくるのはなんだかんだ言つて先ほどの授業のことだ。講義の最中にそれとなく他の先生の授業がどのようなスタイルを取っているのかを聞いてみたが、現地語で書かれた教科書を事前にある程度予習させておくとか、ホワイトボードに板書する内容は図や数式などの言語に関わらない物のみとか、ボードの板書よりも喋る内容をノートに取らせたり等々。やはり先生方皆さんは言語の違いに難儀しているようだった。

彼らの様々な頑張りを聞いてみると、現地語を話すだけではなく書くことも出来るというのには本当に便利なのだと実感させられる。数式一つとつてみても軽く脇に添えるような説明があると分かりやすいし、授業内容は別に数学などではなく化学なのだから板書の内容も数字だけではいかなくなる。長らく書いていなかった言語をボードに板

書するのは意外と大変だったが、それすら不可能な状況に比べれば大分マシだろう。

そんなわけで広場の入り口が見えてきた。一週間くらい前に藤沢さん同伴で訪れたときは妙に豪華な見た目に若干の居辛さを感じたものだが、ここ数日広場の近くを朝の散歩ルートにしてからは流石に慣れてきた。

少々離れてはいるが、噴水広場の様子はここからでも見ることは出来る。よく目を凝らしてみれば、噴水のすぐ近くに置かれた長椅子の脇にここへ来た目的の人物が立っているのが見えた。夕日をきらりと反射する銀色の長髪に向けて急ぎ足で近づこうとしたが、その人物と対面する数名の人影がいることに気が付いた僕は慌てて歩みを止めた。

「おっとっと。お取込み中かな」

入り口付近の茂みにサツと身を隠し、頭だけを出して我が妹に視線を向け直した。友達と談笑している場面に乱入するのは気が引けるし、レシルが友達と会話する時にどのような雰囲気を出しているのかは下世話だとは思うが気になる。

「……うん？」

しかしどうにも様子がおかしいように見える。遠目に見てもなんだか無表情そうなレシル、そして彼女と相對しながら険しい顔を浮かべた背の高い二人組の男子生徒。どこをどう見ても親しげに談笑をしているような空気ではないように感じられるし、喧嘩

にしては双方の間の温度差が不自然過ぎる。広場に居る他の生徒達も彼らを露骨に裂けているように見受けられるし非常にきな臭い。

「それで……結局それに何の得があるんだい？」

「お前、エルトニアの貴族としての自覚は無いのか!？」

疑問に思い視覚だけでなく聴覚にも注意してみると、ギリギリ彼らの会話内容が聴こえてきた。感情の見えない冷え切った声でレシルが二人組の片割れに質問をして、それに激昂した青年が怒声を上げながら一歩彼女に詰め寄った。

「ボクの質問に答えなよ。そもそも君たちの話はボクに欠片も得はない。君らの主もそんなインチキで勝ったところで偽りの名声しか入らないさ」

「偽りであろうと、名声が入ることには変わらない。それに、貴様にもあのお方に華を持たせたという賞賛が飛ぶ。貴族の端くれなら分かってるだろう」

「……ボクは演技つてものが大の苦手なんだよ。無駄話もここまでだ、ボクにも待ち合わせがあるんだからさっさと帰った帰った。全く、無能な自称右腕達を持ったあの人には同情するよ」

なんだかエライ場面に遭遇してしまったみたいだ。長らく見ない内に妹はむちやくちや変貌しちやったようです。非常に冷淡な様子から一変して口端で薄笑いを浮かべながら蔑むような話術を披露する肉親の姿を見て、果たして兄としてどんなりアクショ

ンを取ればいいのかさっぱりわからない。つい昨日見かけたレシルの姿と剥離し過ぎていて、陰から見ている僕の額に冷や汗が浮かぶ。

「貴様ア!! 庶子上がりの分際で偉そうな口を叩くな!!」

とうとうレシルの不遜な態度に耐えきれなくなった青年が嘲笑を浮かべる彼女の襟元に手を伸ばした。目測で190センチに達している彼の姿は近場で見ればかなりの威圧感を感じるだろう。そんな人間に目の前で怒鳴られて胸倉を掴まれたら、情けないけど僕だったら有り金の半分くらいなら差し出してしまおう。

しかしいくらなんでもこの展開はさすがに見逃すことは出来ない。可愛い妹が暴力沙汰の被害者になるなんて到底看過するわけにはいかない。代わりに謝るでも良いし、後に菓子でも送るでも良い。なんとかして場を収めようと茂みを飛び出しかけた僕の前には、更にとんでもない光景が飛び込んできた。

「女に手を挙げるなよ、見苦しい」

「がはッ!」

早業過ぎてよく見えなかったが、突き出された腕を避けたレシルは、足を払うとともに青年の鳩尾を容赦なく殴りつけたようだった。巨体を石張りの地面に仰向けで張り倒されたかと思えば、すぐに丸くなって腹を押さえながら呻き声を漏らす大柄の青年。殴られた瞬間一瞬だけ宙に浮いていたり苦しそうに何度も咳き込んでいる辺り、相当強

く鳩尾を打たれたのだろう。

「おい、大丈夫か!？」

「う……ゴホッ」

慌ててもう一人の青年が倒れ伏した相方に駆け寄るが、苦悶の表情を浮かべまともな返事も返せないほどの苦痛のようだ。見ているだけでこっちまで鳩尾あたりが痛くなってくる。一方のレシルといえば、罪悪感の欠片も感じない涼しい顔をしながら当然の報いと言わんばかりにうづくまる青年の姿を見下ろしていた。

「まさか……まで伸びちやうなんてね。悪いけど彼を背負っていつてくれるかい?」

「デメエ……こっちが大人しくしていれば調子に乗りやがって!!」

レシルを睨みつけながら拳を握りしめる青年。その腕からは見間違いでなければ赤白い火花が弾けており、彼が大きく地面を踏みつけると火花同士が繋がりがあって空中に一本の稲妻を走らせた。しかし青年の怒りを正面から受けてもレシルは全く動じることは無かった。

「アリーナ外での魔術行使は感心しないね。でも君がその気なら、ボクも全力で身を守らなきゃいけない」

「うっ……」

軽く腕を振ったと思えば、いつの間にかレシルの手には透き通るような輝きの小剣が

握られていた。夕日を散乱させながら白い靄を立ち上がらせる剣の切っ先は、腕を突き出した体勢のまま固まった青年へと向けられている。その顔には苦虫を噛み潰したような表情を浮かべており、腕に走る火花がどんどん弱々しいものへと変わっていく。

「良い判断だ。ボクは不意の乱闘で怪我をしたくないし、ましてや同級生の腕を切り落としたくなんてないよ」

「……チツ。冷徹極まる氷銀の魔女め。お前に頼み込まなくとも、あのお方なら実力でお前を凌駕するだろう」

どうやら青年は戦意を無くしてくれたようで、最後に捨て台詞一つを残すと倒れたままの相方に駆け寄った。妹に対する態度は険悪の一言に過ぎるが、未だ顔を真つ青にしたまま自由に動けない相方に肩を貸すあたり根っからの悪い奴ではないような気がする。

一方のレシルといえば、遠ざかっていく二人を見送るでもなくぼんやりとした無表情で夕日を眺めていた。手に握りしめている小剣は大量の滴り落ちる冷水となつて形を失つていき、彼女の白い手先を濡らしながら石畳の地面へと消えていく。遠巻きに今までのやり取りを眺めていた他の生徒達も、わき目でレシルを伺うものの誰一人話しかけに行く者は居ない。それどころか一人、また一人とバツが悪そうな顔で広場の外へと向かいだす始末だ。

誰一人近付かない、まるで氷の中に閉じ込められたよう。そこで表情の無い顔で立ちすくみ続けるレシル。思い返すのは、幼少期に誰にも懐こうとしなかった頃の妹の姿だった。彼女が掴んでいたのはいつだって僕の手ひらや服の裾だった。魔法の制御から外した氷剣をわざわざ溶け出すまで持つていなくても良いのに、彼女は何かを堪えるようにして握りしめていた。彼女の氷水で濡れた手を握りしめる人間は誰もおらず、ほんのりと赤く色付いた白い握り拳は滴り落ちる水以外に触れている物はない。それが酷く寂しげで、そして酷く心が痛んだ。

「……レシルー!! 遅れてゴメンね!!」

見ている内に、何故だかわからないが猛烈に彼女の傍に居てやりたいという気持ち胸の中に沸き起こった。茂みの中からそと這い出て深呼吸をすると、大声で彼女の名前を叫んで自分なりに精いっぱい速さで彼女に向かって駆け出した。

「……あ。に、兄さん」

「すまないねえ、ちよつくら授業が長引いちやつてさ」

一瞬近付いてきた僕に抱きつこうとしたのだろうが、すぐに体を強張らせるとレシルは不自然に腕を引っ込めた。濡れてしまった手を乱暴に制服の裾で拭こうとしているみたいだが、霜焼けのように赤くなってしまった肌が見えて痛々しい。

「あらら、噴水にでも手を突っ込んだのかな? この時期はまだ水が冷たいんだし、せつ

かくのすべすべな手が荒れちやうよ」

僕に見えないように拭こうとする手を掴んで引き寄せると、レシルは大層驚いた様な表情を浮かべた。ジーパンのポケットに丸めて突っ込んであつた手拭きタオルで冷たくなつてしまった手をなるとけ優しく拭い、粗方水気が取れたというところで手をしっかりと握りしめた。想像していた通り赤みが差した彼女の手は冷たくなつており、指同士も絡めてなるたけ早く温めることが出来るように組み直す。噴水に突っ込んだ程度でここまで手が冷えることはないだろうから不自然な言い訳だつたらうけど、濡れっぱなしの手を見なかつたことにすることは出来なかつた。

「もしかして、兄さん見ていたの？」

「な、何をかなあ。今着いたばかりで見てたなんて一体何のことやら」

「……目が泳いでる。分かりやすすぎだよ」

手をきつく握り返してきたレシルは、バツの悪そうな顔で小さく笑つた。

「あ、あはは……なんだか嫌なところを見せちゃつた。ごめんね、ただ待ち合わせただけなのに……」

無理に笑おうとしているのだろうが、どうにも表情が歪んでしまう。先ほどまで無表情で佇んでいた少女の姿とは似ても似つかない、まるで泣きそうな強張つた笑いを一杯肉親に浮かべようとするレシル。目蓋が歪んで肩が震えだし、手を握りしめる力が

ちよつとだけ強くなる。

一体何を言えればいいのか分からない。今までレシルのことを快活で甘えん坊な年齢よりもちよつとだけ幼い雰囲気少女と想っていた僕のことだ、例え口を下手に開いたところで見当違いの慰めしか出てこないだろう。結局のところ、今の僕に出来ることといえば、震える彼女の体をゆっくりと抱きしめてやるだけだった。

「う、ううう……」

「……ごめん」

とうとう涙を流し始めてしまったレシルの頭を胸元に抱え込む。おそらく彼女が冷徹さと幼さを兼ね揃えた性格となつてしまった原因は、5年以上も放置してしまつた僕にあるのだろう。自然に口から出てきたごめんという言葉にどこまでの意味があるのかは、言つた本人である僕にも分からない。しかし肩を震わせて目元を擦り付けてくるレシルを見ていると、言わずにはいられなかった。

「……落ち着くまでは、このままでいようか」

今後の予定についての話し合いなんて日が落ちてから初めても十分だ。押し付けられた銀色の頭が小さく頷くのを確認し、出来るだけ優しく銀色の長い髪の毛を撫でた。

銀髪と銀髪、碧眼と碧眼。十七年という大人に差し掛かる年数が過ぎたにもかかわらず、僕とレシルは男女の壁を乗り越えてよく似た容姿へと育つた。しかし六年前の離別

によつて、僕たちは全く違う人生を歩むことになった。僕は現代日本の波に揉まれながら研究者の一端へと成長し、レシルは貴族社会の中で己の才能を更に磨いている。今や僕たちの人生は完全に違う方向を向き、後戻りなんて今更出来やしない。異世界大学計画によるエルトニア派遣が互いに分かりあえる最後の機会かもしれないのだ。

僕が一方的に妹へ抱いていたわだかまりは去年の秋に再会した時に解消することは出来た。しかし僕とレシルの間には、たった一度の再開なんかじゃ埋まらない何かはまだ横たわっている。それが一体何なのかを直接聞き出すことは難しいだろうし、レシルから話してくれるまでは踏み込むべきではないかもしれない。それでも近いうちに僕たちのわだかまりを解決するための糸口をつかもうと、僕は固く決心した。

その4

「皆さん、今日はお忙しい中お集まりいただきまことにありがとうございます」

週末を目の前に控えた日の夕方。やっと学校としてオープンした最初の一週間を無事に乗り切ったからだろうか、勤務時間としてはそこまできつくはないはずだが大分体に疲れが溜まっているような気がする。そんな疲れにも逆らって、僕は新校舎二階研究フロアの奥の方につくられた会議室に来ていた。

「司会を担当させていただきます、平塚研究室所属、助教の平塚です。それではこのようなタイトルで始めさせていただきます」

手元のポインターを操作して、薄暗い会議室のスクリーンに映し出された発表スライドのタイトルを指し示した。

” 第一回対外活動報告会 準備編”。今からおよそ4か月も後に控えるこの報告会こそが、予定では一連の異世界大学進出計画における初の公式対外イベントである。外部から現地の有力貴族をかき集めて、各研究グループが己の研究内容を簡潔に報告を行うのだ。

外務省などの政府の役人も貴族へ話を通したりなどの準備を行なってくれるだろう

が、この小さな会議室に集う面々がその報告会で実際に動くことになるメンバーとなる。その一方でこれが今後の計画の成否も掛かっている重要なイベントであるが、参加するメンバーは教授職のベテランではなく比較的若い層で占められている。

「初日の今日は、エルトニアについての基本情報について話していこうと思います。こちらの人に分かってもらうスピーチを行うにあたり、ある程度の相手のバックボーンの知識が有ると無いのでは大きく違いますよね」

平塚研究室からは僕と藤沢さんが参加しており、他のグループからも博士課程の学生やまだまだ若い助教が会議室に顔を出している。

藤沢さんはエルトニアで十歳程度までは貴族の中でも最たる地位である王女として過ごしていた関係上、こちらの貴族関連の常識についてはそれなりに詳しい。そして第二の人生の幼少時より本に目を通す事の多かった僕は、歴史や社会的なバックボーンについての知識については自信がある。大学計画の実行委員会に籍を置く川崎さんが僕を司会に据えたのは、割と真つ当な人選だったかもしれない。

「まずは国そのものについて簡単に説明をしていきます。エルトニアの国土は現地の地図などから類推するにドイツと同じくらいの広さとされています。内陸に位置するため周辺を他国に囲まれており、山脈も多く起伏にとんだ地形のため人が住めるような土地は案外狭いですね」

一週間ほど前、川崎さんからこの会議の司会を依頼された時に聞いた話では、当初はエルトニアについての説明をリーヴェル学園区の学校から人員を適当に見繕って行なう予定だったらしい。確かに現地についての説明は現地の人間が一番得意なのは自明だし、出向してきている僕たちには翻訳魔石が貸し出されていることもあり言語の問題もスルー出来る。

しかし川崎さんはあることを思い出す。そういえば参加者の中にエルトニアの知識が豊富な人間が混じっていたなあという事実を。結局直前になって現地説明も司会の僕が担当することになってしまったようだ。

「エルトニアの強みは魔石鉱山です。現代風に言うならば化石資源の大鉱脈を国内に保有しているという感じですよ。鉱山宿から発展した街もあるようですよ」

聞いている側からすれば、僕は流暢な日本語で喋る奇妙なエルトニア人に見えるかもしれない。なんとたつて見た目が日本人のソレではないからだ。

東京からこちらに出向してきてからの最初の数日間、僕と藤沢さんは揃って特異な視線に晒され続けた。何も知識がなければ僕たちは多少ファンシーな色の髪の毛を持った外人に見えるかもしれないが、学園内の敷地を歩く緑や水色と言った凄まじい髪色の人間を見た後では僕らもその同類なのではないかという疑念を持たれても仕方がないだろう。

「そのためエルトニアは魔法関連の技術が他国よりも一歩先に行つてます。魔法技術は一般市民の生活にも根深く浸透し、魔法学校などの教育機関には知見を得ようと他国からの留学生も多く訪れているようです」

豊富な魔石の貯蔵量のために大規模な魔術の発動も可能で、生まれつき魔力を持たない人たちも照明や冷却程度の簡易な魔術ならば魔石でなんとかなるのだ。

技術が進歩しているというのは、言い換えればそれだけ豊かな国であるということでもある。周辺国よりも一歩進んだ魔法技術を持つているために、食糧的な事情でやや苦労をしているエルトニアは魔法技術を対価に豊かな暮らしを可能としている。

「その一方で、豊富な資源を狙つて数十年前までは他国との小競り合いが絶えなかったようです。最近の情勢は落ち着いているようですが、国力の維持ということで騎士の育成も盛んですね」

騎士の育成が盛んと言つたが、その最たる例が僕たち国立東都工科大学が間借りする土地の持ち主ことエルトニア王国立魔法騎士学園である。

「そのような背景でエルトニアは昔から魔術系の学問に力を入れています。ここ王都リーヴェルの学園区は、魔術系の学校が集う、言わば学問の聖地のような場所ですね」
スクリーンに映されたスライドの中には、エルトニアでも名だたる名門校の写真がずらりと並べてある。正直な話をする、川崎さんから司会担当を依頼されるまでは学園

区に集う学校の名前なんてエルトニア王立騎士学園とリーヴエル魔術学校くらいしか知らなかった。片や妹のレシルが現在進行形でお世話になっており、片や僕が父上に入学を勧められたという縁がある。

川崎さんに聞いてみれば、その二つ以外の学校もかなり名門として知られている学校であるらしい。学園区の中核である学校の数を見ると、世界有数の研究区として知られる筑波研究学園都市にも勝る勢いだ。

「しかし忘れてはいけないのが、ここに並べた名門校は全て魔術系の分野を扱っており、純粋に科学だけを取り扱うものなんて周辺国を見渡してもここ国立東都工科大学だけなのです」

ポイントのボタンを一つ押せば、名だたる有名校の写真を覆い隠すような勢いで我が大学の新校舎の写真がドドンと姿を現す。他の写真が荘厳な正門やら時を感じさせる大講堂の写真なのに、ウチの大学の物は適当に正面から新校舎を撮影しただけのものなのだから違和感が凄い。それもそのはず、前者は川崎さんから資料として譲り受けたプロが撮影した写真で、後者は三日くらい前に自分で新校舎を撮影した物なのだからクオリティに差が出るのも仕方がない。

「我々からすれば魔法なんて全くの未知領域ですが、彼らから見ても私たちが取り扱う理学は未知なるものなのです。そのため報告内容は学会や討論会の物よりもずっと簡

潔に行う必要がありますね」

ここまででエルトニアの背景事情の説明は終わりだ。勿論話のタネが尽きた訳ではない。伊達に十年エルトニア人をやってない、やろうと思えば特産品やら食糧事情等について、更には故郷のおススメ観光スポットについても語れる。しかし報告会に向けた勉強会という本筋に対してみれば、それらの話題は脱線も良いところだ。

特に質問が飛んでくるわけもなく、僕は次のスライドへ移した。

「では次に貴族という存在について説明していきます。実際に報告会に来るのは、貴族を中心として招待された人のみとなります。でも私たちにしてみれば、貴族とは何ぞやという疑問は至極当然の物でしょう」

公家や大名が無くなって久しい現代日本において、貴族という存在は非常に曖昧な物として感じられるだろう。貴族っぽい人々とは一体どういう物かと問われたら、大きなお寺の系譜だったり、代々有力議員を排出している家柄が現代日本人の頭の中にポツと浮かぶかもしれない。

しかしこのエルトニアは貴族制というものが現役で機能している国である。貴族は一般市民と明確に区別されて、尚且つ名ばかりの地位なんかではなく権利と義務がきちんと課されている立場でもある。

「一口に貴族と言っても色々な区分けがあります。地方都市の領主として活動する公

爵や子爵だけではなく、身分としての騎士や文官も含まれます。前者は割と想像しやすい貴族の形ですが、後者は公務員のような立場ですね」

スライドに表示されているのは、数日前に突貫で作ったエルトニアの支配構造だ。社会科の教科書によく掲載されている内閣府と各省庁の関係図のように、王家と公爵等の大貴族下級貴族を樹形でまとめてある。

「報告会へ招待されるのは、主に文官等の小規模な貴族方となるでしょう。貴族の中でも一番多い層ですしね。ただし、彼らだけを対象にしたスピーチを行うというというのは得策ではないでしょう」

確かに一番多く訪れることになるのは小貴族の面々で間違いはないだろう。そもそも絶対数が一番多いわけだし、声を掛けて回ればそこその人数を召集出来るのではとは思っている。しかし計画の実行委員会としては、大物を引き連れてくることを目指しているに違いない。それに小貴族の彼らを動かすよりも先に、その上に居る人間を引き入れてしまえばかなり有利に計画が進むだろう。

「貴族の繋がりが社会の一つです。横のつながりがあれば縦のつながりもある。小貴族たちの親玉、公爵をはじめとする大規模な貴族の引き込みこそが、効果的なエルトニアでの科学技術への理解に繋がるでしょう」

大貴族。そんなワードが出た瞬間に、今まで大人しい様子で特に眠そうな様子も見せ

ずに話を聞いていた藤沢さんが、意味ありげな視線を僕の方へと向けてきた。その視線に僕も苦笑いを浮かべながら返す。

彼女は言わずもがな、大貴族どころかそれを束ねる立場にある王家の娘さんだ。そして今まで他人顔で貴族が云々と話し続けてきた僕も、いくら除籍処分をくらったとはいえなんだかんだで貴族の系譜なのである。それもそこの貴族とは比較にならない。

「その中でも、六大家と言われる貴族を引き込むことが出来れば大きいでしょうね。数百年前から続く由緒正しい家柄ですし、国内での発言力も王家に次ぐとの話です」

ボードに映されたのはエルトニアの地図の中に、六大家と称される大きな貴族の家名が、統治をしている場所ごとに書かれている。それぞれの名前は一つを除いてこちらで生活していた頃に聞いたことがある家柄であり、そしてその唯一の例外も別に知識がなかったというわけではない。

”エルドリアン統治 フォルガント家”。聞いたことがあるなんて程度じゃない、まさか実家をこういうところで紹介することになるなんて、家出をした時には想像すらもしていなかった。

* * *

「アンタもそういえばフォルガント家っていう大貴族だったのよね」

「実感は皆無に等しいよ。そもそも除名済みだしさ」

無事に初回の勉強会を終わらせて、ただ今マイデスクにて今週の実験成果を確認している最中である。時計に目を移してみればもう夜の九時も回ったころだ。夜間になるとメガソーラーによる自家発電が不可能になるため、なるべく電気を使わないようにとのお達しが出されている。そのためだろうか、扉から見える廊下の景色は最低限の明かりしかついておらず、ぴかぴかの新築だというのに少々不気味な雰囲気だ。

終夜で仕掛ける実験も限度を守るように指示を出されることもあり、リーヴェルキヤンパスに来てから早二週間経つ今じゃ、参加メンバーが自然と朝型の生活をするようになった。夜に電気を使えないのなら、早起きをして実験そのものを前倒しにしようという考えである。

「君の実家の方々は、ライア殿下が科学技術普及賛成派らしいね。国として推進する方向に動いているのも、殿下の行動によるところが大きいとか」

「……懐かしいわね。姉様は昔から頭の良さで評価をされていたけど、ここまで頑張っているなんてね」

朝型の生活が普及しているということは、つまりは夜遅くまで残っている人々も少なくなるといふことである。平塚先生を始として他の先生方や学生の姿は既に見えず、居

室に残っているのは僕たち二人だけだ。だから秘密にしなければならぬような内容の会話も気兼ねなく行えるというわけだ。

ただし人が居ないから気楽で良い等というわけもない。ようやくあらかたデータの解析も終了し、やっと寮への撤退準備に取り掛かれるところまできた。そして藤沢さんも、どうやらプリントの束に目を通しながら時折雑談のタネを仕掛けてきていることから、帰ろうと思えばいつでも行けるのであろう。

「……ねえ、六大家の子息に対して大きな顔が出来る人間ってどういう層だと思う？」

「えっ、藪から棒にどうしたのよ」

「まあ、ちよつと疑問に思つてね」

異動記念で新調した新型のノートパソコンを閉じてそんなことを尋ねてみると、藤沢さんは怪訝そうな声で返してきた。少々話題の振り方が雑だっただろうか。

「どういう想定なのか分からないからなんとも言えないけど……普通に考えて、他の六大家の人間か、もしくはさらに上の家柄の人間じゃないの？」

「更になねえ……」

六大家の中でも一番規模が小さいとされている、元我が実家ことフォルガント家の一族よりも上に立っている面々を上げようとすれば、他の六大家の由縁がある人々か、もしくは全ての貴族の上に立つ王家ということになる。

先日レシルに絡んでいた二人組の男子生徒は一体どこの人間なのだろうか。あの時のレシルの対応を見ている限りでは、彼らはおそらく王家の間人ではないだろう。貴族社会を生きている彼女の事だから、どんな事であろうとも王家の人々に手を上げるなんてことは絶対にはしないはずだと信じたい。

ならば彼らは六大家に関係する人物なのか。しかしレシルはそもそもその生まれが僕と同じくやや特異な立場にある。あまり聞こえの良い話ではないが、庶子であるという事実を抱えて生きていると色々苦労があるのかもしれない。ともすれば、彼ら二人は六大家などではなく別にそこまで大きくはない家柄の出身の可能性もある。

そして一番の懸念は、彼らが口にしていた”あのお方”とやらの存在だ。考えられるのは、男子生徒二人はその誰かの付き人に過ぎず、その誰かこそがかなりの大物であるということだ。

「……ちよつと怖いなあ」

「だからどうしたのよ。まさか講義の最中に変な輩にでも絡まれたの?」

「ちよつとくら気になっただけさ。僕がそういう訳じやあないから安心してね」

とりあえずこの先は明日改めて考えることにしよう。そもそも当事者不在の状況で色々考えたところで、結局はただの類推でしかないのだから。

「さてと、僕は帰る準備が出来ました。そんじや電気と鍵ヨロシク」

「いや、そこは待ちなさいよ。こつちも後は鞆に押し込めるだけで終わるっての」
帰る旨を伝えてみたら、案の定藤沢さんはジロリと僕を一睨みして荷物を纏めはじめた。彼女の言うとおりのパソコンの電源は既に落としてあつたようで、ファイルを読んでいた論文プリントを挟み込んで筆箱と一緒に鞆にしまえば、もう部屋を出る準備は万端だ。

結局一分足らずで席を立つた藤沢さんを横に引き連れて、薄暗い廊下へ身を乗り出した。流石は最新設備だけあり、人が通りかかるとセンサーが反応して照明が灯されるようにつくられているようだ。一步踏み出した瞬間から廊下の薄暗さが大分和らいだ。

「藤沢さんは最初の一週間はどんな感じだった？ 本キャンに行ったりこつちに戻ったりはやっぱ大変じゃないかな」

「……流石に週に二日向こうに行くのは大変ね。早朝の大月との連絡バスに乗っているのは私だけだし、その大月からかなり早い電車じゃなければ一限の授業には間に合わないわ」

行きが大変ということは帰りも大変ということだ。授業後にどんなに急いで本キャンパスを出ても、リーヴェルキャンパスに到着するのは夕食会が始まる少し前らしい。つまりは完全に一週間の内の二日が潰れてしまうということなのだ。

「列車の中で勉強しようにも、疲れて眠気が着ちやうし……なんとか慣らしていくしか

ないわね。レイはどうなの？」

「僕かい？ まあ、ボチボチと言ったところだね。授業や今日のような勉強会があるから以前より実験に割ける時間は減ったけど、多分藤沢さんほど激務じゃないと思う」

階段を下り終え、二人揃って新校舎の出口をくぐり抜けた。流石にこの時間になると守衛さんも常駐してはいないよう、人気は僕たち以外には感じられない。外に出てすぐに、おそらく東京よりも一回り以上冷たいであろう空気が頬を撫でる。灯りの多い東京の夜では決してあり得ないような満天の星空が頭上に広がるが、その星々の配置はここ五年間や前世で覚えた物とは全く異なる物だ。

新校舎と寮の周囲には、どうやら僕たちのような夜遅くまで残っている層に配慮をしているのか、簡素な街灯が配置されている。新品にもかかわらず随分と弱々しい光を放っているが、この光すらも無くなったらおそらく周囲はほとんど完全な暗闇になってしまうて歩くどころでは無くなる。しかしそれでも足元に注意をしなければならぬ程度に薄暗いことには違いなく、自然と僕と藤沢さんの距離は近い物となっていた。

「あ、そうそう。言い忘れたことがあったんだ。藤沢さんは明日何か予定ある？」

「特に予定はないけど、どうかしたの？」

「なら良かった。明日の朝食後に時間を貰えるかな。妹の件で少し相談があつてね

……」

怪訝そうな表情を浮かべる藤沢さんだったが、明日話すと最後に付け加えるとしようがないという様子でため息を吐かれた。

最初に彼女と遭遇した時に、悩みや愚痴を言い合えるような仲になろうと藤沢さんは言っていた。当初はほとんど愚痴を聞かされるだけなのだろうなどと思ったりもしたものだだったが、なんだかんだ言って僕が彼女に頼る時もあるのだ。こんなのにびりとした関係は、僕は嫌いじゃない。

第六話 「探索!! 週末の学生街」

その1

ガリーリックトーストの横にスクランブルエッグとこんがり焼いたベーコンを添えて、更に食感シャキシャキなサラダで彩ったプレート皿。その脇に湯気を立てるコーヒーマグカップを置けば、少なくとも僕基準で考えれば朝食食べるものとしては最高峰のライオンナップである。

現代日本から未開同然の街に赴いてから二週間近くが経過したが、気軽に外へ赴けないということ以外には特に不満などはないというのが現状だ。異世界行きをする直前まで衣食住のグレードダウンを覚悟していたものの、無用な心配だったようで本当に良かった。

「ねえレイ、もう朝食始まっているのに先生の姿が見えないけど……」

「平塚先生は東京に向かっているよ。藤沢さんには伝え忘れてたみたいだね。送りきれずに早川研へ置いてきたサンプルを持ってくるんだとさ」

向かいの席でパンを頬張る藤沢さんが、本来であれば平塚先生が座っているであろう空席を怪訝そうな視線で眺めた。確か先生は昨日の夜に本キャンの方に忘れ物を取り

に行くという話をしていたから間違いないはずだ。

空席と言えば、食堂全体を見渡しても今日は人の入りが少ない。普段ならば長机に空席が出来るなんてことは殆どないが、今日は目に見えて人口密度が下がってしまったている。加えて言うならば席についている面々は比較的若いメンバーが多く、どうやらちらほらと見える空席達の主は、その多くが教授職系の方々のようだ。

「みんな一段落したからかな。多分一時帰宅している先生方が多いようだ」

こちらに来るまで現代日本とエルトニアとの行き来が非常に大変なものだとは思っていたが、どうやら面倒くさい手続きもいらずに案外簡単にこなせるものであるらしい。早朝から既に大月駅行きのマイクロバスが運行しており、藤沢さんも本キャンパスに向かう際には始発便にお世話になっているとか。

そんな感じで現代日本への帰還が割かし敷居が低いということもあり、単身赴任という形でエルトニアへ出向している先生方はこぞって週末になると一時帰宅をしているようだ。今日の実験室は人が少ないということもあり、作業をするならば普段以上に集中出来る事だろう。

「今日は人も少ないから実験日和だね。いつもよりも伸び伸び出来るそう」

「でもレイは今日レシルちゃんの話で話したいことがあるって言っていたじゃない」

そう、確かに今日は実験日和ではあるし、土曜の一日くらいは潰して研究にあてても

良いと思えるくらいの環境ではある。しかし今日に限ってはそういう訳にもいかないのだ。

「うん。わざわざ予定を開けてくれてありがとうね」

「元から週末は空いていたから大丈夫。それにアンタの方から相談なんて珍しいから気になったのよ」

「相談というかなんというか……ちよつと藤沢さんには負担を強いてしまうかもしれない」

一度離ればなれになったとはいえ、おそらく僕はレシルにとつてかなり親しい位置にいる肉親だろう。本来ならば彼女が抱える悩みを解決するのは、そんな親しい親類が支えてやるべきなのが筋だ。僕自身、可能ならば彼女と二人で話し合つて解決していきたいとは思っている。だが、数日前に直面した妹の件は、正直な所僕一人だけで賄いきれる自信がない。

そもその問題は、レシルが裏表を持った性格に育ってしまったていることだ。まだ再会してそんなに顔を合わせた訳ではないが、冷酷な側面を見せる彼女の姿は、昨春秋に東京の旧宅にて2人きりで話していた時には欠片も見られなかった。

「実はね……先日妹の姿を見かけた時、少々様子がおかしかったんだ。なんと言うか、すごく冷たい雰囲気、騎士学園の学生とにらみ合ってたのさ」

「レシルちゃんか？　去年レイの部屋で会ったときは快活で素直そうな子に見えたんだけど」

「それだけならまだしも、その直後に僕が見ていたと分かるや否や、今度は泣き出しちゃってね……」

僕の言葉を聞いてもうまい具合に想像をすることが出来ないのだろう、藤沢さんは首を傾げながら眉をひそめた。気持ちは痛いほどわかる。彼女の言うとおり、確かにレシルの再会した当初の印象は快活で素直そうな女の子だったのだ。そんな彼女が冷徹な面を見せつけただけでも驚くべきことなのに、一転して泣き顔を見せるなんて言葉に表してみたなら不安定極まる。

「それって、レシルちゃんが仮に裏の顔を持つとして、兄であるレイに見られたくなかったってことかしら」

「多分そんなところだと思う。正直心当たりはあるよ。なんせまだ幼い彼女を放り出したのは僕自身なのだから、それがきつかけで二面性を持ったのかもしれない」

空になりつつある白皿を尻目に、まだ湯気を切らしていないマグカップに口を付ける。一つまみも砂糖と牛乳の混じらぬ苦味が、少し喋り疲れた口内にじんわりと行き渡った。

「取りあえず導入はこんなもんだよ。これ以上はまた後にして、まずは食事を済まし

「ちやおうか」

「……存外に重そうな話ね。今本題に入ったら食事時間が無くなりそうだから賛成。それで、食後は居室か適当な会議室とかでやる?」

食事を終わらせて食堂を後にする人がチラホラと現れはじめたようだ。彼らの多くは週末の今日も新校舎の方に移動して、居室でデスクワークをしたり実験室で作業をしたりするのだろう。だから彼らの邪魔をしないためにも居室で相談会は止めておいた方が良さだろう。じゃあ適当な会議室というのはどうだろうか。週末なんて人が少ない勉強会が入ることもそう無いだろうから、平日でなければ当日予約という選択肢も悪くはないだろう。しかし、僕にはそんな選択肢なんて最初から用意はされてはいないのだ。

「藤沢さん。僕は昨晚相談があるって言ったね」

「そうだけど……それがどうかしたの?」

「すまんね。そりゃあ実は嘘なんだ」

「……はあ!」

一瞬ポカンとした表情を浮かべた藤沢さんは、直後に大きな声を上げながら眉を顰めた。問い詰められるように淡い金色の瞳で睨まれると毎度ごめんなさいと謝りたくなってしまうが、ここはグツとこらえてなるべく平静を保つ。

「なので、藤沢さんは食後に黒髪かつらを持ってきてください」
「……それでもしかして」

「最初にこつちへ来たとき、しつかり街を歩きたいって言つてたよね。外出届はちゃんと藤沢さんの分も申請しているから、後は外出準備をするだけだ」

彼女の顔がすぐさま驚きに変わるのを見て、少しだけ得意げな気持ちになれた。確かに話し合い程度ならば校舎内でも十分可能ではあるが、折角の週末なのだからもう少しだけ奮発したって罰は当たらないだろう。

それに、まだ藤沢さんに明かしていないことがもう一つある。今回の話し合いが果たして相談なのかは、実のところ外れているのだ。

* * *

学生という人種は、時に妙にけち臭くなり、時には妙に羽振りが良くなったりするのだ。前者の状態では彼らの足は格安の定食屋へと向かい、後者の状態では少々洒落たカフェテリアへと向かう。古くからの大学街では、多くの場合どちらの需要も満たせる店が揃っている。現に僕も前世の頃は安い定食に舌鼓を打った数日後に、個人経営の喫茶店で妙に高いコーヒーで一服したものだ。

そして国が違えど街並みは似通ってくるというのだろうか。リーヴエル学園区の店並びも、大衆食堂がドカンと配置されていたと思えば妙に小奇麗な軽食屋が一角を自己主張している。楽しそうに食堂へ入っていく男子学生の集団、テラス付きのカフェテリアでケーキのようなものを食べながら談笑する女子たち。エルトニアと日本、世界が違いうし常識もまるで違う二つの国。しかし学生街という単位で見れば案外似ているところも多そうだ。

エルトニアでも今日は休日として扱われており、この学園区も休日の大学街のように閑散としているのかと思っていた。しかし蓋を開けてみれば、どこの店を見ても満員とは言わないものの若い客の姿があつた。

「いつらつしやいませ!! 何名様ですか?」

「二人ですが、もう一人が先に来ていて待ち合わせなんです。それとホットを二つお願いします」

そして今入ったこの喫茶店も、中を見わたしてみれば満員というわけではないけれどチラホラと若い客の姿が見える。中にはご丁寧にも学園の制服と思わしき服装で談笑する少年少女もおり、改めてここは学生街なんだなあと感じる。

内装は日本で言うところの隠れ家カフェのような感じだ。小窓から入る日光が薄暗い店内を淡く照らし、白塗りの壁にあるランプ照明が橙色光を優しく発する。ところど

ところに掛けられた小さな絵は、手ごろそうなサイズとは裏腹に結構なお値段がしそうな気がする。棚の中に並べられた銀や陶磁の食器たちは、果たして実際に使うために置いているのか、それとも観賞用なのか。

全体的に値段が高そうな雰囲気のお店だ。大理石の床や椅子などといった分かりやすい高級感つぽさが無い分、むしろ逆に上流階級感があるといえよう。日本円換算をするならばコーヒー一杯が500円ワンコインではまずすまないだろう。前世の学生時代に背伸びをしたことはあったが、ここまで高級そうな店に立ち寄ったことは記憶にない。

「……レイって普段こういう店に来ているの？」

「んな訳無かるうて。そもそも本キャン近くの大学街にやこういう店はほとんど無かったはずだよ」

そんな高級そうな店の客層が若い学生メインという点、少々どころかかなり違和感がある。しかし思い直してみれば、この学園区の学生たちの中には貴族の身分だっているのだ。我が東都工科大学が間借りをしている土地の主も貴族が多く通う学園として有名であるはずだ。そうなるうちよつと一服してくると言った軽い気持ちでこんな店に入ることであって案外造作も無いことなのだろう。

少しだけ緊張感を覚える僕と藤沢さん。片や元貴族、片や元王族なんて人間だが、心

はすっかかり庶民なのだ。

「……妙に様になってるわね」

「僕だったらこんな空間で一人ポツンといたらドキドキのバリバリだね」

「ドキドキはともかくバリバリって何よ……」

待ち合わせている相手の姿は、探すまでもなくにすぐ見つかった。ポツンと漏らす藤沢さんの通り、椅子に腰かけて本を片手にコーヒーに口を付ける姿は異常に様になっている。年齢は他の若い客とそう変わらないというのに、その机だけが妙な存在感を醸し出す程度には。

伸ばされた銀髪は薄暗い店の中でも金属質な輝きを失わず、閉じられた目元が年齢以上の風格を与える。姿こそそっくりな僕でも、果たしてここまでこの空間にマッチした雰囲気醸し出せるかと問われたら、まず首をふってしまおうだろう。

「お待たせ、レシル」

「……あつ、兄さん着てたんだね!! ちょっとボンヤリしてて気が付かなかったや」

凜とした貴族令嬢の風格を漂わせていた我が妹は、声を掛けた瞬間に一気にその雰囲気柔らかいものへと変えた。ついさつきまで冷たさを感じさせていた切れ長の目は、今じゃ大きく開かれてしつかりと僕の顔を碧眼でとらえている。ここまで雰囲気はココロと変わるといえるのは、中々にすごい事だと感じる。

「レナさんも来たんだ!! おはようございます!! あれ、でも髪の毛が……」
「おはよう、レシルちゃん。それとこれはかつらよ。ほら、素の色だとこの街じゃあ結構大変じゃない」

藤沢さんの誇るマンガンヘアは、今は入学式の時と同じく黒いかつらで覆われてしまっている。二週間近くも大学校舎の中で生活をしているとついつい忘れそうになるが、僕たちが居るこの街はいわゆる城下町なのである。この喫茶店へ訪れた時に通った大通りでは遠景に王宮の姿を見ることが出来るくらいには、市民にとっても王家と言うのは身近な存在なのだろう。そんな街を王家の人間のシンボルともいえる赤紫色の髪の毛を晒して歩けばどうなるかなんて分かったものじゃない。

「それで、結局相談がウソってのはどういうことなのよ」

「見ての通りさ。当事者不在のまま部屋で話し合うだけじゃあ解決への道が遠そうだし、ならいつそのことオープンな場で事を運ぼうと思ってるね」

藤沢さんが呈した疑問の内容がよく分からないのか、レシルは不思議そうな表情を浮かべつつ首を傾げた。思わず目元がにやけてしまった僕の表情は、それはもうだらしがなく歪んでいるのだろう。思わず彼女の頭に手を乗せたくなってしまう。

藤沢さんに言った通り、今日やろうとしていることはただの相談なんかではなく、どちらかと言えばリハビリテーションに近いものである。

レシルと学園の生徒がトラブルを起こしたあの日、彼女が泣き止んだ後に僕は一つの提案をした。もし予定が開いているならば週末に街を散歩でもしないかと。妹の一緒にいる時間を何とかして作ろうという思いつきで提案したことなのだが、彼女と別れて夜部屋で考え直してみれば、コンディション次第じゃもしかしたら状況が好転するきっかけになるのではと思ったのだ。

レシルには失礼な話かもしれないが、そもその問題はもしかしたら彼女は他人との距離感を押し量れていないのではと思つたのだ。最初から友好状態で話しかけてきた藤沢さん相手は別として、我が義父こと平塚先生と相對した時の彼女の事務的な対応は、この間の男子生徒達とのいざこざに通じる何かを感じさせるのだ。

しかしそこを解決するためには、兄である僕だけじゃあおそらくは難しいだろう。なつたつて他人との話し合いに慣れて貰いたいと思つているのだ。肉親の僕じゃあ練習になんかならないだろう。その点、初対面時のインパクトから壁を作る間もなかった藤沢さんは、結構適任であると思つている。赤の他人ほどハードルが高いわけでもなく、だからといって友達というわけでもない。良い感じに微妙な距離感だ。行く行くは平塚先生も交えていきたいが、彼は彼で僕以上に忙しいから今は目標に留めるにしておく。

「というわけで、ここで一服ついたらウィンドウショッピングにでも行こうか」

丁度ウエイトレスさんが机にカップを二つ置いた。よく市販のコーヒーのキャッチコピーで挽きたてがどうかとかが出てくるが、本当の挽きたてコーヒーは匂いの強さも香ばしさも段違いだ。言う程こういう店に訪れたことがあるわけじゃあないけど何となく分かる。朝食で飲んだコーヒーが不味いとは言わないけども、やっぱりこちらの方が味も強くて好みだ。

「それにしてもこういう隠れ家的なカフェってこっちにもあるんだね。良いところを知ったよ、ありがとうレシル」

「えへへ……」って静かだし客層も安定しているから、結構落ち着くんだよね」

惜しむべくは値段が想像通り高めなところだ。わき目でメニューを見てみればコーヒー一杯で日本円換算で千円札一枚に少し届かないくらいで、試しに置かれたコーヒーの近くに小銭を置いてみればウエイトレスさんは感謝の言葉を述べながらもごく自然な流れでそれを受け取った。このチップを加味してみると、実質コーヒー一杯が千円に相当することになる。うん、高い。

しかしチップを置いた瞬間の藤沢さんの視線は怖かった。相手が若くてかわいい系の女性であり、客である僕はちゃんとした男性。確かに机の上にお金を置いて渡すところを見れば、金でナンパか何かをしている場面に見えないこともない。まあいくら日本にチップという文化が無いにしろ、僕のような小心者が人の前で堂々とナンパをするわ

けが無いことも分かっているのだろう、すぐにチップの支払いをしていると理解をしてくれたようだった。あの路傍の生ごみをどう処分してやろうかという視線は、向けられるだけですくみ上げるから是非とも止めていただきたいものである。

「あくまでもウインドウなのね」

「助教をなめるなよ。本の執筆とかで稼いで行かないと飯に困窮しちゃうんだからね。住処と食事が格安で賄われている現状は、本当助かっているんだよ」

だらしがなく肘をついて愚痴を漏らしてみれば、藤沢さんは何とも言えない表情でため息を吐いた。去年まで支給されていた奨学金の返済を助教の職という最終防衛ラインを駆使して逃げ果せたが、それでも安月給ということには変わりはない。論文執筆は研究活動の発表だけじゃあなく自分の生活を向上する手段なのだと言った昔平塚先生に言われたが、今になってその意味が身にしみてわかる。

「はあ、なんだか夢も希望も無い話ね……まあいいわ。じゃあトコトン見回ってやろうじゃないの。レシルちゃん、今日はレイを引きずってでも歩き回りましょうね」

「え、ええと……うん、今日はよろしくお願いします!!」

威勢よく返事をするレシルの姿を見て、やはり彼女にはこういう明るい姿が似合うとしみじみ思う。少なくとも今日に関しては、意地でも彼女には悲しみを感ぜさせないようにしてやろう。それこそこの身を引きずり回されることになっても、絶対にそれだけ

は守り通してやる。

その2

「その綺麗なお嬢さんがた!! あまーい焼き菓子を食べていかないかい?」

「魔石のネックレスがお手頃な値段だ!! 嬢ちゃん達、見ていくだけでもいいぜ!!」

わいわいがやがや。学園区から中心街にかけての通りは、流石は首都の休日といった人の入りだ。そうした大量の通行人を何とか引き止めて財布の紐を緩ませようと、通り沿いに立ち並んだ商店の主たちが威勢のいい声で引き止めに掛かる。休日にもかかわらず貴族が多く通う騎士学園の制服を身に纏うレシルを筆頭に、若くて金払いが良さそうな三人で並んで歩いているからであろうか、どうにも僕たちに対する客引きの声は妙にはりきっている気がしてならない。

しかし見た目は鴨がネギを背負ってきているようでも、僕の財布の紐はそう簡単には緩まない。焼き菓子ならば先ほどのカフェで既に腹に入れてきたし、当社比で安いと言われたって他との比較が無ければ信用できるデータではない。それに彼らが嬢ちゃん達と言っているのが、果たしてレシルと藤沢さんに対してなのか、それとも僕の性別を誤認しているのか。それが見ていて非常に怪しいからなんだか近付いてやろうという気にはなれないのだ。

「とりあえず服屋とでも思ったけど、やっぱり中世チックな街並みにはなかなかないものだね……うん？」

隣を歩いているであろう藤沢さんやレシルに話しかける感じでポツリと漏らしてみたが、不思議なことに何も反応が返ってこない。これじゃあ独り言を平然とぶつぶつ話すおかしな人みたいに見えてしまうじゃないか。せめて適当に流すでも良いから何らかのリアクションが欲しい物である。

もしかしたら歩くペースが速すぎて彼女達を置いて来てしまったのではないか。そこまで僕は早歩きでは無いはずだが、隣を振り返ってみると驚くべきことにいつの間にか二人の姿が消えていた。まさかと思つて後ろを確認してみたら、せつかく小さなお土産屋っぽい店を素通りしようとしたのに女性陣二人は立ち止まってしまった。

「レシルちゃん、魔石つてこんな安い物なの？ さつきのコーヒーにちよつとおまけしたような値段だけだ」

「うーん……多分これは一般的な魔術で使うような魔石じゃないです。原石から製錬する際に出る不純物を研磨したのかなあ」

一応これらの副生物の魔石モドキは閃光粉としての用途もあつたはずだが、ここで売っているものはそれらを観賞用にカットしたものらしい。しかしなんだその高速度路のパーキングエリアで売つてするようなパワーストーンが、実は近所の河原で拾つてき

た綺麗な石でしたみたいな夢も希望もない話は。不揃いな失敗作のビー玉を海と称して売るといふ童話もあつたが、果たして彼女達が眺めるその首飾りとやらにはそこまで秀逸なオチがあるのだろうか。

そして二人共ウインドウショッピングを始めるどころか、あろうことか置いてある品を随分と現実的な目で観察し始める始末だ。

「じ、嬢ちゃん達っ、確かにコイツはそういう要らないものだったかもしれねえが……けどよ、暗がりでも光るなんて綺麗で珍しいだろっ?」

「世の中には暗がりでも短い間ならば発光を続ける物質なんて普通にあるわ。それも魔法なんて全く関係なしにね」

「そもそもこの石だと、濃度が薄すぎて魔石かどうかはすぐには分からないレベルだよ」
そしてこの有様である。必死になつて店屋の主人が商品のフォローをしても、二人は素知らぬ顔で言いたい放題だ。確かに商品そのものは若干値段的に怪しい部分があるが、それならば目を向けずにスルーするだけで済むものになんでわざわざ燃やしに行くのか。しかしここまで商品に対して否定的なことを言われても、表面上は強張りつつも商売笑顔を張り付けている店主の根性には頭が下がるばかりだ。彼のご厚意に甘えるのもここらへんにして、そろそろ引き際だろう。

「二人共、その辺にして——」

「それに!! この鮮やかで綺麗な黄色い表面を見てくれよ!! 草原の花々にも勝る明るい色だろう? こんな綺麗な色なんてこんな街中じやまず見たことなんかはないはずだ!!」

「——黄色い物体なんて実験で腐るほど見ているからどうでも良い。黄色っていうのはある波長からをバサツと落としたり簡単に見えるんだよ。それを見たことがないなんて馬鹿にするのも大概にしる。そもそも光を当ててどう見えるかなんて二の次だ。こちらと色がどうかなんて手段であって目的じゃないんだよ」

ここまで言ってしまうと思わず口を塞ぐ。なんということだ、未だ舌戦を繰り広げる姿勢全開だったレシル藤沢さんペアを何とか宥めて場を収めようとしたのに、その僕が店主の言葉に思わず自然に反論をしてしまった。

軽く目を瞑って深呼吸。ホッと一息吐いたらゆっくりと目を開けて周囲の様子を観察する。直前まで更なるいちやもんをつける気満々だったはずのレシルと藤沢さんは、一転して援護射撃を行ったことに驚いのか僕を見て固まっている。そして店主も思わぬところから飛び出た罵詈雑言に、困惑しながら「そ、そうか」とだじろいでしまっていた。そしてどうやら僕の声というものは存外に大きく響いてしまったようで、チラリと後ろに視線を向けてみればこちらを伺う通行人と目があってしまった。

「さてと……うん、行こっか」

こんな訳分らない状況になってしまったならばしょうがない。僕に残された最後にして唯一の選択肢は、ずばり逃亡だ。少しだけ集まったやじ馬の中心で、段々わなわなと震えだす店主。そりやあそうだ、いきなり商品の悪口を言われて、それに必死の弁明をしていたら逆に客の一人が怒り出す。最初こそ面食らったのかもしれないが、冷静に考えてこんな客が表れたら堪忍袋の緒が切れてもおかしくない。

「……オメエら、散々俺の商品扱き下ろしやがって!!」

「お騒がせしてすいませんでしたっ!!」

爆発した店主の怒りを背後に受けながら、藤沢さんとレシルの手を引つ掴んで僕は通りを駆けだした。そして直後に「二度と来るんじやねえ!!」という怒号がやじ馬の壁を越えて後方から響き渡った。

「二人共っ、言い過ぎっ、なんだよ!!」

「火種を、爆散させたのはっ、アンタでしょ!!」

「でも兄さんすぐく先生っぼかったー!!」

大通りを駆け抜けながら藤沢さんと息を切らして言い合いをする傍ら、結構な速度で走りながらものほんとしたレシルが楽しそうに笑う。本当ならば十分反省をして欲しいところだが、彼女のいたずらっ子のような笑顔を引き出すことが出来たから今回は不問としてやろう。

* * *

「君はアレだ。本音を隠すつて事を知らなさすぎる。本音と建て前については右に出ない日本で長らく暮らしていたのに情けない」

「そつくりそのままその言葉をお返しするわ。いきなり説教をかますなんて瞬間湯沸かし器も良いところよ」

言葉の上だけ見れば僕と藤沢さんは口げんかを交わしているように見えるかもしれない。だが僕たち二人は半笑いで虚空を眺めながら隣同士腰かけている。双方内容はともかくして言い方に棘はなく、自分が発言した内容がすっぽり自分に当てはまってしまふなど承知の上だ。

結局のところ僕たちは悲しいぐらいに理系の人間なのだ。自分が齧っている分野でちよつとでも突っ込める隙を見つけると、目敏く発見して突っつきまわしてしまう。普段は相手や場の状況を察してなるべく留めているのが、胡散臭すぎる物を見つけるとどうにも物申したくなるのだ。

「しかしまさか妹まで正論をズバズバ言うタイプだったとはね」

「この兄あつての妹つてところかしら。長年会つていなかたつて言うけど、存外似て

いるじゃない」

「ごそごそごそ。通りに面した建物の二階。賑やかな通りとこの店内を隔てるのはたったの壁一枚なのに、どういう訳か辺りはかなり静かな空間が広がっている。そして商品の劣化を防ぐためかは知らないが、窓から差し込む日光が最小限に抑えられているため、日中の首都だというのにまるで地下か何かに居るのかという不思議な感覚に陥ってしまう。」

そんな静かな店内だからだろうか、僕らが座るソファの前にある試着室から聞こえてくる物音が、妙に鮮明に耳へと入ってくるのだ。年頃の女子が着替えている音が聞こえるなんてすぐくヤラシイ響きではあるが、相手が妹となればそんな感情もスーっと引いていくのだ。

「……それで、僕を一時的に店の端っこに追いやってまでコーディネートしたレシルの服装はどんなのだよ」

「……で言っちゃつたら意味はないでしょ。ふふん、楽しみにしてなさい」

お土産屋さんっぽい商店から何とか逃げ果せた僕たちは、次は服屋へ入ろうという流れになった。自分としてはそこまで衣服というものに興味はないが、同行者二人が女の子ということもある。こういう場合はとりあえず服屋に行つて商品を見て回りながらおーおー似合うよなどと言つてれば無難にことを運べると考えたのだ。それにこの場

ならば服関連でレシルと藤沢さんがうまい具合に会話を重ねてくれるだろう。

確かに店内に入ってから少しの間は、レシルと藤沢さんで展示してある服を見ながら会話を花を咲かせていた。一方の僕も、迷惑代のつもりで手ごろな値段の小さな薔薇の髪飾りを購入して、軽く店員に商品を適当に見物させてくださいとお願いをした。なんとか順風満帆な雰囲気へと舵を戻せたと思ったその矢先、何かを思いついたのか店員が優しく笑いかけてきたのだ。

「それにしても試着室なんてあったのね。昔こつちにいたころはこういう店は来たことなかったから、なんだか意外だわ」

試着コーナーもあるので使いませんか。そんな言葉に目の色を変えたのが藤沢さんだった。ポンと人の肩に手を置いたと思えば、店の端っこに置いてある椅子の前まで連行してきて待機命令を言い渡す。そして満面の笑みを蓄えながらレシルを引き連れまわしながら店内を行ったり来たりと忙しく動き始めたのだ。

手持無沙汰にポツンと椅子に腰かける。店内には僕たちの他にも少数ではあるが客が入っており、服を選ぶでもなくボーッと座っているだけの僕をチラチラと見る視線を幾度か向けられた。なんというか、非常に心が痛かった。

「レナさん、言われた通り着替え終わりましたけど、この格好って……」

「よしっ、じゃあお披露目よ!!」

試着室からレシルの若干困惑したような声が聞こえてくる。藤沢さんはすぐノリノリな様子で椅子を立ちあがり試着室へと向かっていくが、果たして我が妹が困惑する格好とは何ぞや。どこことなく嫌な予感が胸中に湧き上がる。

店内と試着室を隔てるカーテンの裾を掴んだ藤沢さんは、非常に得意げな顔をこちらへと向けている。一体どんな自信作を披露するのかは分からないが、倫理的に問題がありそうな格好ならば手段を問わずに即刻止めさせなければ。まさかとは思うがこのマンガンめ、人の妹を着せ替え人形か何かかと勘違いしてはあるまいか。

「さあ括目しなさいっ!!」

「他のお客さんの迷惑にな——」

別に口を押さええつけられたわけではない。自然に、そう自然に言葉が口の奥へと引っ込んでしまった。目の前に現れた光景に思わず息をのみ、ゆっくりと立ち上がる。

「え、えへへ……変な恰好じゃない、よね?」

襟の部分を黒いリボンで飾り付けた純白のワイシャツ、その上から腰ほどまである丈の長い薄手で漆黒のベストを羽織りつける。その中ほど、へその辺りを軽く締めるように銀色の大きなリボンが結び巻かれ、艶めかしいくびれが大きく強調されていた。そのすぐ下から急に服全体が膨らみを持ち始め、元凶である白く大きいスカートの上半分をベストの裾が覆い隠す。

膝丈まで上げられた真つ黒な靴下とスカートの裾の間から見える領域から無理やり目を離してみれば、恥ずかしげに此方を伺うレシルとぼったり目があった。顔をほんのりと赤らめながら、手持無沙汰に銀髪のを弄っている。その頭の上には、どこに置いてあったのか知らないが黒い小さなシルクハットがちよこんと乗せられていた。

「……ワオ」

「お客様、もしよろしければこのような品も……ワオ」

どうやら何かの商品を抱き合わせて買ってもらおうかと思っているのだろう。一階の方から上がってきた店員さんが、僕と全く同じリアクションをしながら我が妹の姿に目を奪われたようだ。

画面の中ではそこまで浮くようなものではないが、いざ現実で見ると相当目立ってしまう。黒と白というコントラスト、その上銀色の長髪ときたものだ。全体的なバランスが絶妙的過ぎる。

「ふふん。どうよ、このコーデイナート力は」

「……すごいとしか言いようがないよ。よくもまあ、ありあわせの商品で完全にゴスロリを構築出来たね」

「ゴス、ロリ……?」

何やらすごく真剣な様子で人様の妹を観察し始めた店員さんは放っておいて、改めて

居心地悪そうにしながらも何とか笑いかけてきてくれているレシルの姿を目に入れた。

店員さんの様子から考えて、このリーヴェルではゴスロリに相当する格好というものはおそらく存在しないだろう。ということとは、この紛れもないゴシックロリータ要素を構築している衣服たちは、もともとこの組み合わせで着ることを考えてはいない、全く別の用途に向けての物なのだろう。おそらく丈の長いベストは平塚先生レベルに背高のつぼの男性用の物で、スカートは若い女性のお洒落着だろう。小さすぎるシルクハットは子供向けの物かもしれない。

「これは、もしかして……」

「……ねえレシル。ちよつといいかな」

試着室の前で、一人は得意満面の顔で佇み、一人はふらふらと夢遊病のように歩きだし、そして一人はどこから取り出したのか木版に何かを恐ろしいスピードで書き込んでいく。傍から見れば異常極まりない光景であることは間違いない。

一步、また一步とレシルに近付きながら、本当は後でプレゼントする予定だった純白薔薇の髪飾りを袋から出す。ゆっくりと手を伸ばす先は、レシルの銀色の頭、その上で小さく自己主張をするシルクハットだ。彼女の碧眼がすぐ近くに迫った僕の顔をびびくりしたように見つめる中、両手を伸ばして純白の薔薇をシルクハットへと結びつけた。

「に、兄さん!? どうし、たの?」

「……詰めが甘かったわ」

「これで、完璧だよ」

フツと小さく息を吐きながら、僕と藤沢さんは短く目を交わす。黒一食で少しだけ浮いていたはずのシルクハットが、純白の薔薇飾りによつて他の強すぎる要素に負けない部分へと昇華した。これこそが、完璧なるゴスロリだ。

周囲を見てみると、いつの間にか他の客の姿もあつた。彼らは実に幸運だ。ふらりと立ち寄った店で、地上に降り立った天使の如き我が妹の姿を拝めるだなんて。しかし加度的にレシルの顔が真っ赤になっていくのを見ると、いたずらにオーディエンスを増やすのはよろしくないかもしれない。

「……レシルもそろそろ恥ずかしいだろう。今回はこのあたりで」

「ねえレシルちゃん。一人だから恥ずかしいのよね? もう一人横に並んだら、何かのポーズも決められるかしら」

「よし出ようかそろそろ君たちもお腹が空いてきたところだろう今日は僕のおごりだすいません皆さんお騒がせいたしました」

危機回避能力に長けた僕は、つま先を90度回してすぐさま階段へと向かおうとした。しかしあと少しで戦線離脱と言った瞬間、無情にも細い手首が万力の如き力で握り

しめられた。

「……兄さんも、着替えよっか」

「そうだねケーキはどうかかなデザートがしつかりしたところとか」

「着替えよっか」

ゴスロリ少女こと我が妹レシルティアは、果たしてその華奢な見た目のどこにそんな力があるのか、僕の手首をしつかりとつかんで離さない。軽く動かそうとしても、まるで空間に張り付けられたかのようにびくともしない。思わず冷や汗がにじみ出る。

「れ、レシル……」

「兄さん。着替えようね」

「……ハイ」

彼女の顔に浮かぶのは純粹な笑顔。顔は笑わず目は笑っていないなんて中途半端な状態じゃあない。屈託も混じりつ気もない笑顔というものは、時として何よりも残酷な物なのだ。なんとかして断れないか。そんな気持ちでガラガラと壊れていくような感覚が、胸の奥で響いている。

既に藤沢さんは新たななるコーデイナーのために店内の探索を開始しており、入れ替わるようにして僕は満面の笑みを絶やさないとレシルに試着室の中へと押し込められた。思い出せ、自分よ。今日という日はレシルを笑わせるのがマストオーダーだ。その為な

らばなんだってしてやると決めたのだ。さすればゴスロリくらいなんてことは……
「……あるんだよなあ」

僕の小さな眩きに答えてくれる人は、生憎ながら狭い試着室の中にいるわけが無かつた。

その3

賑やかな王都の大通りに面したお洒落なオープンテラス。場所が学園区内で若い客が多いことも合わさって、本来ならば非常に華やかで楽しい場所なのだろう。しかし僕が見るかぎり、その場所のある一点だけは明確に周囲から浮いていた。

「……………うわあ」

良い感じの軽食屋を見つけて意気揚々とテラス席へと向かってみれば、僕たちの前にあったのはとある異様な光景だった。

昼としてはやや遅い時間帯だが、それでも休日の後となればこの手の店は結構混んでくるはずだ。そうなれば個人で来ている客は四人席でゆったりと座るようなことは難しいだろう。しかしとある机の客だけはたった一人で来店しているにもかかわらず、四人席にさも当然のように腰かけながら寛いでいた。皿の上には食べかけのサンドが並んでおり、手元のカップからはまだ湯気が立ち上がっている。少なくとも長時間場所を占拠しているというわけでも無さそうだ。

「よく似た別人……………ということはないよなあ」

「絶対ないわね」

目元に掛けるのは大きな銀縁眼鏡。手に持つのはホチキス止めした紙束。自身の周囲に軽いドーナツツ化現象が発生していても、まったく気にした様子もなく手元の論文に目を通しながらサンドイッチを頬張る彼は、紛れもない我が研究グループの若きトップだ。この古風なヨーロッパっぽい街の中でも、これ程までに何一つ周囲に溶け合わせようとする姿勢を見せないのはある意味賞賛に値すると思う。

「……平塚先生。一緒に座つてもいいかな？」

「ああ……つて、お前たちもここに来たのか。別に構わないよ」

わき目で此方をチラリと確認した先生は、目を少しだけ見開いて驚いた様だ。ならば遠慮なく隣に座らせてもらうことにする。

僕なんかは相手がある意味自分自身ということもあるからそこまで気兼ねなく座ることができるとは、藤沢さんにしてみればボスである准教授相手と同席につくからか、少々遠慮がちに先生の正面へと腰を下ろした。そしてレシルは、警戒感丸出しの様相を隠そうともせず、つい先ほどまでのにこやかな表情を消して僕の正面へと腰かけた。ただ座るといふ行動一つをとってみても、各々が平塚先生にどのような意識を持っているかが分かる。

「先生は確か東京の方にサンプルを取りに行ったつて聞いたのですが、早かったですね」「それな。大月について列車の時刻を確認していたら、ちょうど早川先生から電話が来

たんだよ。聞いてみたら学内郵便で送ったサンプルはもう届いたかってな」

「どうやら、僕たちの元ボスである早川教授がわざわざサンプルたちを送って下さったようだ。学内郵便で送ったとのことだが、果たして東京の本キャンパスからリーヴェルのど真ん中に物を届けることが出来るのだろうか。」

「その後関所で問い合わせたら、物はきちんとして届いていた。これから新校舎の方に送るらしい。本当先生には頭が下がる」

その後、わざわざ東京の方に出向く用も無くなってしまった先生は、とりあえず大月からこちらへ戻ってきたらしい。空いてしまった時間を利用して校舎の外を軽く散策でもして、さあ昼食でもしようかというところまで丁度僕らとかち合ったのだろう。

「大月を散歩するのも良かったけど、もう桜も結構散っちゃったからな。何ならこっちを見て回った方が興味深い」

「まあ四月に入って一週間以上たつたしね。来年こそは満開の中で大月さくら祭りを見物してやる」

しかし見て回ろうというのならば、手に持ったその紙束は一体何なのか。近付いてみてみれば、予想通り紙面には何かのグラフや詰め込まれた英字が踊っていた。休日を満喫する時でさえ論文で情報収集をする勤勉さが彼の研究人生の糧となつているのだろう。しかしそんな姿がもう一人の自分自身だとはちよつと思いたくない。僕もこま

で勤勉な研究者になれるのかは結構不安だ。

「さて、二度目の対面ということになるか。国立東都工科大学准教授、平塚礼二だ」

「……レシルティア・フォルガント。あなたの生徒ラスティレイ・フォルガントの妹です」

やはりと言ったところか。平塚先生と挨拶を交わすレシルは、表面上こそ丁寧な口調を使っているものの、その態度は赤の他人に対する物としても冷たすぎるように感じる。そして言葉のトーンが下がったためか、正面に座る彼女から冷たい大人っぽさがにじみ出ているように見えた。

「相変わらず嫌われているな。こりゃあ参った」

顎に手をあてて渋く笑う平塚先生。年上の人間に対する我が妹の態度は、身内びいきに見ても流石に褒められたものではない。それを軽くいなして笑う辺り、先生は大人であると感じられる。本当は中身を辿れば僕と全く同じ存在であるはずなのに、なんだか遠いものか思えてしまうくらいには。

一方のレシルと言えば、怒るでも困るでもなく小さく笑い続ける平塚先生の姿を前にして少々毒気を抜かれたようだ。困ったように僕へ視線も向けてきたが、こちらから何らかの助け舟を出すことは出来ない。

「お前さんの妹は髭面の中年が嫌いとか、そういう人なのか」

「いやいや、多分そういうわけじゃあないよ。ちよつと込み入った事情があつてね……」
机に置かれたメニューボードを吟味しながら答える。案内メニューの数は少なく、周囲の机を見回してみるとお洒落な軽食屋だけあつて小奇麗で小さなプレート系の物が多い。美味しそうなのだが、想像通り量は少々心許ないか。

「春野菜のテリーヌ、旬のグリル……美味しそうなんだけど藤沢さんには足りるかなあ」
「おいコラ。先生に写真見せるわよ」

「ほう。気になるぞ見せろ見せろ」

ちよつとからかつてみようかなと思つたが、どうやら今の状況ではとんだ失言だつたようだ。何の写真かは明言されていないが、脅すネタで言うならば先ほどの服屋で起きた惨事に違いがないだろう。

それはもう酷い有様だつた。なんとか己を殺して屈辱の時間が終わるまで耐え忍んだのは良いが、その間に結構な枚数の写真を撮られてしまった。しかもレシルとポーズを合わせるというオプション付きで。その上何故か服屋の店員に簡易スケッチされる始末。もうあの店には行きたくはない。

「先ほど服屋に行つてきたんですよ。そこで撮つた写真です」

「ふむ。どれどれ……あつ……レイ、俺は別に人の趣味を否定する気はないよ。まあ、似合つて無くはないし、実生活に影響が出ない程度にやるなら……」

「何いきなり開示してくれてるんだよオツ!!」

机の向こう側でスマートフォンを向ける藤沢さんに怨嗟の咆哮を挙げてみても、届くもんなら取つてみなさいとばかりに涼しい顔で鼻を鳴らされた。そして禁断の写真を目撃してしまった先生はいえば、なんだか申し訳なさそうな顔でフォローをされてしまった。そのゴメンなど言わんばかりの妙に憂い気のある顔を向けるな。全面的に僕が被害者のはずなのになんだか罪悪感が湧いてきてしまう。

「レシルちゃんも見て見て。すごく良い組み合わせでしょ」

「ええと……うん!! 兄さんすごいかわいいよ!!」

「……もうやめて」

兄のくせして妹に純粋な気持ちでかわいいと言われると、何とも苦々しい感情が沸き起こる。そして腹が立つことに、藤沢さんはしっかりと僕にも見えるようにスマホの画面を向けてきた。

互いに密着するほど近付いて向き合い、相手の肩に両手を乗せた二人組。双方が共に白と黒のコントラストが映えるゴシックロリータに身を包み、片やスカートで銀色の長髪、片やハーフパンツで銀色の短髪と酷似しているながらも対象的という不思議な組み合わせだ。その体勢でカメラの方へ顔を向けた二人は、片や頬がほんのりと赤らんで恥ずかしさを感じているながらも笑顔を浮かべ、片や表情というものを完全に消し去った無機

質な視線を投げつけていた。

ナルシストというわけではないが、なまじこの組み合わせが絶妙にマッチしているだけに始末に負えない。背景が無機質で薄暗い着衣室だからだろうか、ある種幻想的な光景にすら見えるのが非常にいたたまれない。あの時は何も考えないように心がけていたが、そんな状態で写真に写ると無表情系のキャラっぽく見えるものなのか。レシルがなんだかんだ言って楽しそうだから良いけど、出来れば写真という媒体を通してゴスロリ衣装に身を包んだ自分なんて見たくはなかった。

「土に還りたい……」

「……なんだか知らんがお前も苦勞してんだな。若い時の苦勞は買ってでもしろとは言うが、買い過ぎるなよ。しかし、無表情かと思いきや笑っているじゃないか」

平塚先生が含み笑いを浮かべながら視線を動かす先には、ハツとして慌てた風に表情を消したレシルがいた。だがいきなり無表情を作るには少々無理があったようで、銀縁眼鏡の奥からじつと見据える先生から逃れるように顔をそっぽに向けてしまった。

「そうそう、先生には後日頼もうかと思っていたんだけど、ちょうど良い機会だから今言うよ。月に一回くらい週末の時間を貸してはくれないかな」

「週末、か。出張が入ったらきついし、なんだって予定は流動的だ。出来れば一週間前には知らせてくれると助かる。それで、要件つてのは……お前の妹のことじゃないだろう

な」

どうにももう一人の自分は勘が鋭いようだ。僕の細かな挙動を見逃さなかつた先生は、やれやれといった調子で首をふつた。

「あのなあ、お前の個人的な用事に果たして俺が介入する必要があるのかよ……あまり言いたくはないがな、俺の予定を潰すだけの意味はあるのか？」

「……正直自分だけじゃあ手に余るんだ。レシルの前で言うのもしのびないけど、彼女は人との距離を測りかねている節がある」

その瞬間、目の前にいるレシルが驚いたように目を見開いた。そりゃあそうだろう、再会してから今まで無条件に自身に対して抱擁するような発言を繰り返していた兄が、急に突き放すようなことを言い出したのだから。

「え……兄さん、ボクはそんなんじゃない……」

「ゴメンね。でもここではつきりさせないともう手遅れになるかもしれない。先日見たあのやり取り、もしかして日常的に発生しているんじゃないだろうね」

オーダーを取りに来たウェイターさんを藤沢さんに任して、しっかりとレシルの双眼を見据える。言いたくないのだろうか、揺れる彼女の瞳、時折視線を逸らそうと左右を動くその碧眼を僕は全く顔を動かすことなく見続けた。

「……そうさ。ボクは、何かと人に冷たい態度を取る節がある」

とうとう僕の視線に折れたのか、レシルはゆっくりとした口調で話し始めた。

「氷の魔女。なんともまあ安直な通称だよ。でも学園のボクはその通り名に反論できない振る舞いをしている。兄さんが見たのも、学園じゃ割と日常だよ」

「……正直に言わせてもらおうと、あの時のレシルの姿には結構驚いたよ」

僕の言葉に対し、レシルは「やっぱりね」と言いながら小さく笑った。この本音を隠そうかと一瞬間んだが、おそらく彼女に本音を話せる機会は今を逃せばそう多くはないだろう。オーダーを伝え終えた藤沢さん、腕を組んで押し黙る平塚先生。二人共が僕たちのやり取りを静かに観察する中、レシルは諦めたような口調を崩さずに続ける。

「あの手の輩に絡まれたのが先か、鼻につくような態度を取ったのが先かはもう覚えてないや。でも気が付いたら妙なあだ名が浸透していたんだ」

「それは、今の学校に入ってから間もない頃からなのかい？」

その問いかけに対して、彼女は小さく頷いた。想定通りだったレシルの答えは、やはり想定していたように僕の肩に重くのしかかってきた。

「まったくもって兄さんの言葉の通りさ。果たしてボクに近付いてくる人間が好意を持つているのか、悪意を持つているのか。急に小屋の中から野に放された状態じゃあ、そういうことはさっぱり分からなかった」

思い出してみれば、まだレシルと共に故郷のエルドリアン郊外で暮らしていた頃、彼

女はいつも僕について回っていた。何をするとときも隣か後ろには幼い妹の姿があり、そして不思議なことに彼女は僕以外の人間には懐こうとはしなかった。あまり愛想が良いとは言えなかつたお手伝いさんには勿論のこと、時折見かける街中の同世代の子供達にすらも。

「そりゃあそうさ。ボクの隣にはずっと兄さんがいた。いや、兄さんしか居なかつたんだもの。幼いころから他人に触れあつてないんだから、急に一人になつて分かるわけがない」

「……入学をしてから、今のようになつたの？」

「兄さんは貴族社会から遠のいていたから忘れているかもしれない。如何に家柄が六大家という立派な箔があつても、ボク達は庶子に過ぎないんだ」

僕が東京に辿りついてから程なくして彼女が入学したのは、貴族が多く通うエルトニア王立騎士学園。果たして父上が入學までの期間彼女に対してどれ程の貴族教育を施したのかは定かではないが、十年以上も貴族社会から離れた生活をしていたレシルがどれ程身に着けるかなんてたかが知れているだろう。

「常識知らずの偽お嬢。そんなことを言われた時期もあつたさ。目の上の瘤だつたんだらうね、庶民に毛の生えたようなボクのバックに、六大家のフォルガント家がついてるなんて」

淡々と話していく彼女の姿は、どこか諦めというものが含まれているように感じる。

「幸い、ボクには剣術と魔術の才があった。そんな陰口を無くす程度、一年あれば十分だったよ。その一方で氷の魔女なんて安直なあだ名がついて回っていた」

自嘲的な笑いを浮かべるレシル。その冷たい笑顔は、どことなく先日見たいざごぎの時に見た冷酷な嘲笑へ通じるものがあつた。

「ボクは人との距離の測り方が分からない。だから殻に閉じこもつて、身を護ろうとして、他人を突き放すんだろう……兄さんにしか、甘えられないんだ」

「……正直五年以上も放置をして今更肉親面をするのもどうかとは思ふ。でも、僕は君を助けたいよ」

何がもう籠の中の鳥じゃあないだ。僕がやったのはまだ幼く籠の中でしか生きられない小鳥を、無理やり野に放しただけではないか。半年前の自分を殴り飛ばしたい。快活で甘えん坊な姿を彼女の全てと信じ込み、やっと再会を遂げて満足をしていたなんて。

一言も発せずと僕たちを観察していた平塚先生に向き直る。そして、今度は軽い調子ではなく、しっかりと頭を下げた。

「お願いします。月に一回で良いので、話し合い、グループワークのための時間を貸して下さい」

人との距離が分からないならば、その練習をすれば良い。僕だけじゃあそもその心の距離が近すぎて練習にはならない。だから適度に距離を持った藤沢さんや、あまり話したことがない年齢層と思われる平塚先生の助力が必要不可欠なのだ。これで五年ものブランクが埋められるかは分からないが、行動をしなくては始まらない。

「そうか。これじゃあ反対だ」

「な、何で!？」

「いくら肉親のためとはいえお前一人が空回ってどうする。肉親の事情だから普段よりも相当身内びいきになっているようだが、それはお前が頼むことじゃない」

あつさりと首をふった平塚先生。彼の言い分が一体何なのか、それを思いつくよりも先に、先生はレシルの方へ顔を向けた。

「詳しい事情はよく分からんが君の兄は相当妹馬鹿だな。頼まれてもいないのに率先して行動して、普段は軽口叩く相手に頭まで下げた。でもそれはコイツがしても意味はない」

「……何が言いたいんですか?」

「変わるきっかけを作りたいのか、それともこのままでもいいのか、それを決めるのは君自身だ。これから社会人になるんだろう。何時までも兄に頼ってはいられないよ」

冷たく言い返すレシルに対して、怯むどころかささらに先生は言葉を浴びせていく。彼

女がどうなりたいたいかは、決めるのは僕ではなくて彼女自身なのだ。だから、先生に頼み込むのは僕の意志ではなくて彼女の意志でなくてはならない。確かにもつともな意見だ。普段ならば僕も気が回る場面も、妹のこととなると少々暴走気味になってしまっていたようだ。

「何も知らないあなたに、一体何が出来るんですか」

「さあな。何も分からん。むしろ君は一体どう変わりたい？ 何事も受け身でいちやあ駄目だ。君の所の騎士学校ではどういう教育をしているかは知らんが、俺達の世界では勉強つてもものは自ら進んでやるものだけ」

突き放すように、その一方で受け入れるように、先生は淡々と言葉を紡いでいく。

「人との距離が測れないんなら測る練習をすればいい。今だつてその練習中みたいなものだ。道徳なんて門外漢だが、適当なテーマに関するグループディスカッションの場くらいは作れるさ」

如何に冷たい反応を返しても、まったく心を揺らさずに見据えられるなんてあまり経験したことがないのだろう。レシルはちらちらと此方を伺ってくるが、今は手を差し伸べられない。押し固めていた達観で冷徹な雰囲気はすっかり鳴りを潜め、あたふたと慌てる様は完全に年相応の女の子の物だ。

「……ボクは、変われますか？」

「君次第だ。今の君がどういふ人間かを詳しくは知らないから、無責任なことは言えない」

今までのトーンとは完全に異なり、か細い声で恐る恐る問いかけたレシル。それに対する平塚先生の対応は、なんともぶれない物だった。

「あはは……まるで兄さんみたいですね。ボクが昔兄さんに叱られた時は、いつも何が悪かったのかを自分で考えさせられたなあ」

「そうか。まあ、そうだろうな」

「ボクはあなたをまだ信用できない。でも、兄さんがあなたを信用しているから……お願いします。ボクの会話の練習相手になって下さい」

そしてようやく、レシルは僕と藤沢さん以外の人間に笑いかけた。まだその笑顔はぎこちなく、少しだけ声も震えているが、それだけ前進出来たということなのだろうか。

「正直に物を言うなあ。会話の練習相手か。良いよ、構わない。細かな内容についてはレイに一任するが、俺も出来るかぎりのことは協力する」

「あ、ありがとうございます」

あつけらかんといった様子で了承する先生に少々押され気味のレシルだったが、きちんと感謝の意まで言いきれた。肩の荷が降りたのか、レシルはホツとした表情を浮かべて近くに置かれていたお冷へと手を伸ばした。たかが自分から問題を解決しようとする

動をただけではあるが、それでも今の彼女にとっては大きな一歩には違いない。

「先生、ありがとう」

「お前の妹だ、まあ完全な無関係というわけでもないしな。週末の時間を捻出できるなんて、俺が独身であったことを喜ぶといい」

自虐気味にニヤリと笑う先生だが、なんだか今はそれすらも渋格好良く決まっているように見えてしまう。やはりは本当の大人は一味違う。子供時代を二回過ごした僕、順当に社会の荒波の中で今の地位を手に入れた先生。悔しいけど認めざるを得ない。精神的に大人であるのは、間違いなく平塚先生の方だ。

「レシルちゃん、良かったわね!!」

「レナさん苦しいよ」

レシルの後ろからギュツと抱きつく藤沢さん。言葉上じや離してくれと頼んでいるようにも見えるが、控えめながらも笑顔を浮かべている辺り満更でもないのだろう。同性からのスキンシップというものに縁がないのだろうか、助けを求めるところにこちらを伺ってくるが、むしろ僕が藤沢さんに代わって抱きしめてやりたいところだ。

とりあえずは一件落着きといったところか。実際は問題の入り口に立っただけに過ぎないが、それでも解決の糸口を掴めただけでも今日彼女達を連れまわした意味があった。

「誰かと思えばフォルガントか。それに、お前たちは……そうか、騎士学園に間借りする連中だな」

「……ライル殿下」

背後から響いたこんな言葉がなければ、四人で楽しく昼食会へとしゃれ込めたというのに。僕の背後に視線を向ける妹の顔には、折角浮かんでいた豊かな表情がどこかに消えてしまっていた。

その4

「先日はすまなかつた。私の友人がお前に無礼を働いたと聞いている」

「いえ……」

「お前が手を上げたことは目を瞑る。その代り今回の件は水に流してくれると助かる。それはそうと……」

背後からゆつたりとした様子で歩み寄る青年は、遠慮なんて欠片も見せることなく僕たちをじろりと観察していた。賑やかな話声で満ちていたはずのテラスは、一転して妙に静かな空間へと移り変わっている。客の目線がチラチラと向けられているのを全く気にも留めず、僕たちが座るテーブルの隣から椅子を勝手に拝借した彼は深々と腰かけた。

「お前が渡来人の集団と親しく話すところを見たという噂は耳にしていたが、どうやらそれは嘘ではないようだ」

「……殿下、このような小さな食事処にどのような御用ですか」

「ほう、ご挨拶だな。王族が城下町を歩いて何が悪い。それに私はまだ学生の身だ。このような場所ぐらい訪れることはある」

平塚先生ほどはある高い身長、そしてひよろながの先生よりも幾分かがつしりとした体格。レシルと同じく休日にもかかわらず騎士学園の制服に身を包んだこの氣位が高そうな青年は、鮮やかな赤紫色のレイヤーヘアを氣だるげに掻き雀った。

その特徴的過ぎる色の髪だったり、目立つ黄金の瞳であったり、レシルが先ほどから口にかけている殿下という言葉だったり。これらの情報から想像できるのは、信じられないような話だが僕らの目の前に立つ青年が王族の一人であるということである。長い足を組んで切れ長の瞳をこちらに向ける彼からは、確かにただ者ではないオーラのようなものを感じる。

「この連中とお前がどういった関係なのかは知らんが……ふむ、渡来人にしては妙な風貌だな」

彼の金色の瞳がレシルから僕へと移された。彫りが深めとはいえ元より黒髪の日本人である平塚先生、そして顔のつくりが完全に日本人のソレではないがかつらのおかけで黒髪となっている藤沢さん。この二人と比べたら、銀髪碧眼を晒したまんまの僕は非常に悪目立ちをしているに違いない。それに加えて、間が悪いことに青年の位置からは異常に風貌の似ているレシルと僕の二人が相対して腰かけているように見えているのだ。僕たちはただの通りすがりの日本人で、そこらへんで意気投合をしたんですよ、などと到底言える状況ではない。

「ええと、彼は……」

「ライル殿下、お初にお目に掛かります。私、国立東都工科大学のラスティレイと申します」

椅子から腰を離し、その場で右足を軽く折り曲げて深々と頭を下げる。後に自己紹介をする先生と名前が被るのを避けるために、あえてラスティレイの名前を出す。要らぬ配慮かもしれないが、転ばぬ先の杖というのはいつのどういう場面でもやっておくにしたことはない。

貴族社会における目上の人間に対する挨拶だなんてここ数年身経験したことがないものではあるが、頭をフル回転させて適切な行動の仕方をなんとか思い出すことが出来た。二度と使わないと思っていた知識がこうやって役立つ時が来るなんて、人生分らないものである。

「渡来人のお前に敬われる覚えはない……と言いたいところだが、どうやらそう簡単な話ではないようだ」

含み笑いを口元に浮かべながら、青年はレシルと僕を見比べるようにゆつくりと首を動かした。

僕とレシルの見た目は、それこそ髪の毛の長さや服装以外ほとんど変わらない。そんなに姿が似ている人間が並べば、そりゃあ何らかの疑心を持たれてもおかしな話ではない。

もはや僕がただの日本人です等と誤魔化すことは叶わないだろうけど、果たしてどうこの場面を乗り切ろうか。僕とレシルの関係をぼろつと言ってしまうと、僕はともかく彼女の方に問題が出てしまわないだろうか。

どうしようかとレシルの方に視線を向けてみれば、意を決したように息を力強く吐き出した彼女の姿があった。

「彼は、ボクの実の兄です」

「見た目が似すぎているからまさかとは思ったが、やはりな。そうなれば、お前の名前はさしずめラストイレイ・フォルガントといったところか」

「……まったくもって殿下の仰る通り、僕は彼女の兄です。今は独立していますが、幼少から十数年間彼女と共にフォルガント家のお世話になつておりました」

どうやって彼女との関係を誤魔化してやろうかと思つていたが、当のレシルがあつきりと話してしまつたために肩すかしをくらつてしまつた。なんとか言葉を選んで波が立たないようにした自己紹介も、もしかしたらそこまで気を使う程の状況では無いのかもしれない。

「なるほど。エルトニアの生まれでありつつ、妹とは違い渡来人として生活をしているのか」

「そういうことになります」

「そうか、実によく分かった——」

目を閉じて意味ありげに何度も頷く青年の顔は、真意の読み取れない薄笑いが浮かんでいる。なまじ顔のつくりがアイドルも素足で逃げ出す勢いの美形さんのために、薄笑いという表情からは非常に不気味な物を感じる。

「——つまりはお前、エルトニアとの繋がりを一度は捨てたということだな？」

何度も見せつけるように頷きを繰り返していた彼は、急に底冷えするような声でそう問いかけてきた。何が彼の琴線に触れたのかは不明瞭であるが、災難なことにおそらく何らかの地雷を踏んでしまったのだろう。鋭く向けられる黄金色の瞳は、目を逸らしたくても動かせないような威圧感を持っている。

さて、彼は一体僕に何を言わせようとしているのだろうか。青年と交わした会話は、それこそ自己紹介に過ぎない短いものだ。おそらくこの短い会話の中に、触れてしまった逆鱗が混じっているのだろう。

「……言葉を選ばせて頂くならば、僕は確かにエルトニアから離れて異国の地へと渡りました」

「そしてカガクとやらに染まったのか。この国の貴族という立場を踏みにじって」

青年は明確に不満を表へと出している。端正な顔立ちに小さく皺を寄せ、口調もぞんざいなものへと変化をしていた。

「先に言っておこう。私は渡来人が信用ならない。姉上はいたくお前たちをかつているようだが、私は認めない」

「下つ端に過ぎない僕も、我々が万人に受け入れられるわけが無いということは重々承知しています」

下手に反論をしては火に油を注ぐ結果に成りかねない。この場を収めるためには無難に相手へ同調するのが最善だろう。

「承知の上でその場に立っているのか。一度祖国を捨てたというのになんという厚顔さだ」

「そのような言われも身に染みております。まことに申し訳ございませんでした」
「……ハッ、立場どころか誇りまで捨てたのか」

しかしそんな思慮も全く功を奏さなかったのか、怒りで歪めた顔で僕を睨みつけた青年は、とうとう吐き捨てるような口調になってしまった。激昂の理由が何も掴めない現状では、このまま成すがままにされて彼の気が晴れるのを待つしかないだろう。

「そしてどうせこのまま私の怒りが勝手に過ぎ去るのを待とうという魂胆なのだろう」
「それは……」

「凶星か。ガワはエルトニア人だが、中身はすっかり魂を売り渡したのだな」

嘲るように響く僕への罵倒は、まったく止まる様子が見えない。しかしここは耐えて

忍ばなければいけない。下手なことを口に出せば、窮地に追い込まれるのは僕なのだから。

「何がカガクだ。お前の妹は独力で学園の頂点が見えるレベルにまで魔術の才能を高めたというのに、その兄がこの様か」

「僕たちは、目指す物が違うだけです。彼女は剣術と魔法を極めて、僕は科学を追及する。ただそれだけのことです」

見下すような視線と共に放たれる言葉に、視界の端でレシルの表情が強張るのが見えた。せっかく半年前の再開で解せた兄妹間の捻じれの原因を平然と口にする青年に、僕だけではなく彼女も思うところがあつたのだろう。机に置かれた彼女の手が強く握りしめられており、放っておいたら彼に向って反論か何かを言ってしまうかもしれない。「そのカガクとやらに逃げただけじゃないのか。妹に敵わないと知ってしまったから。違うか?」

「……いい加減にっ」

「レシルっ!! ……確かにきつかけはそうだったかもしれませんが。しかし結果的には、僕は晴れて異世界の地で教鞭を執るにまで至れました。あの時の選択が間違っていたなんて、今の状況を省みれば考えられません」

案の定耐え切れずに机を叩きながら立ち上がりかけたレシルを、寸でのところで抑え

られた。数度会話を交わしてみたが、彼が僕を挑発していることは明確だ。それに乗ってしまえばもはや相手の思うつぼなのだから、最善の選択肢は深呼吸をして心を静めて淡々と事実を述べることに違いない。

これは根競べだ、お前の挑発になんか乗るものか。口元に薄笑いを浮かべながらなんとかして僕の怒りを煽ろうという青年を前にして、僕は絶対に怒りという感情を表に出さないようにして平素を装い彼の金瞳を見据える。互いに視線を交わすだけで口を開かない青年と僕、まだ何かを言いたそうにしていながらも拳を握りしめて我慢をするレシル、目つきこそ青年に負けず劣らずの鋭さだが表情は安定している藤沢さん、ずっと両手を組み合わせて表情一つ変えずにやり取りを見守る先生。周囲の客までもが囁き声押し殺してしまつたため、真昼のテラスには通りから響く雑踏以外の音が消えてなくなつてしまつていた。

「……興をそがれた。机が空く素振りは全く見えないし、何しろ居心地も最悪だ。お前たち、邪魔をして悪かつたな」

「……ちうこそ、殿下の気分を害するような対応をしまい、申し訳ございませんでした」

結局先に折れたのは青年の方であつた。蔑むような表情はいつの間にか霧散して、気だるげな様子でゆっくりと椅子を立ちあがった。それにつれて僕も一緒に腰を浮かせ

て幾分か僕よりも背の高い彼に視線を合わせ続ける。

「フォルガント。次の闘技大会、下手な遠慮はするな」

「言われなくても、たとえ殿下が相手でも全力で叩き潰しに行きますよ」

身内の僕ですらゾツと感じる底冷えした声で、レシルは青年の宣戦布告に堂々と応じた。彼らの関係が果たしてライバルなのか知り合いなのかは類推できる場所ではないが、青年が特に気にした様子もないことから日常的に険悪な関係ではないのだろう。

よく分からない内に嵐が去ってくれるとホツとしてみると、既に背中を向けてテラスの出口へと歩き始めていた青年に対して、あろうことか隣ですつと押し黙っていた先生が動きを見せていた。

「ライル殿下。最後に一つお聞かせください。どうしてそこまで科学を、ひいては渡来人を嫌うんですか」

「お前は……」

「申し遅れてすいません。国立東都工科大学准教授、平塚という者です」

さつきの僕の対応を見様見真似で実行しているのだろうか、先生はぎこちない様子で王族への挨拶を実行していた。藤沢さんとレシル共々思わず目を見開き、僕も慌てて止めようと手を伸ばす。しかしそれよりも先に、先生は自己紹介を始めてしまっていた。

「……いちいち言わなければ理由も分からないのか。ようやく安定した世の中にいきな

り入ってきた異物を危険に思う。それはそこまで不自然なことではないだろう」

「そうですか……ふむ、貴重な意見をありがとうございます。わざわざ呼び止めてしまい、すみませんでした」

「別に気にしてはいない……では、またな」

含ませ気味に顎に手を当てる平塚先生を後に残し、青年は再度大股で歩き始めた。ちよūdどオーダーしていたセットを運びに来ていたウェイターの隣を颯爽と歩きぬける姿を見るに、おそらく敗走でも何でもなく、言葉の通りに興がそがれただけなのだろう。本当に彼の挑発に乗って場を泥沼化させずに済んで良かった。

何事も起こらなかったことにホッと一息を吐いた僕の隣では、最後に尺玉火花を炸裂しかけた平塚先生が人の気苦労も知らずにコーヒーカップを片手に思案顔を浮かべていた。思わず机の下で先生の向う脛を蹴りあげてしまっても、おそらく罰は当たらないだろう。

* * *

「一時はどうなるかと思ったけど、今日はしっかり楽しめたわね」

「はい!! すっごく楽しかったです!!」

藤沢さんとレシルが、夕日が伸びる噴水広場の前を並んで歩いている。銀髪と黒髪、片方はかつらとはいえ、色の対比が夕暮れの中で妙にくつきりと映える。おい藤沢さんよ今すぐその場を僕と代わるのだという邪念を後方から飛ばしつつも、並んで楽しげに会話をする二人組を見ていると彼女達を引き合わせることが出来て本当に良かったと思えてくる。

確かに今日は色々大変なことがあった。笑えるところでは、お土産屋に三人そろって全力で喧嘩を売りつけたたり、服飾屋でゴスロリファッションに身を包む羽目になったり、スイーツ食べ放題というメニューを見つけたレシルが文字通り食べ放題し始めた。そしてライル殿下という青年との遭遇が、今日の最大の壁だった。

「このレシルちゃんのかわいい格好の写真、今度印刷して持つてくるわ」
「う……恥ずかしいですけど、ふふ、兄さんもすごい似合ってる」

彼女達の非常に不穏な会話はこの際目を瞑ろう。

王族の一人という大物を前にして、更にはつい最近まではかなりナイーブだった場所を幾度も刺激をされて、よくもまあ僕とレシル共々爆発をしないで乗り切れたものだと思う。科学技術推進の壁になる層の中でもっともやり玉にあげりそうな人間に遭遇するだなんて、運が悪いにもほどがある。しかし逆に言えば、今遭遇をしておいたことで彼の人間性の一端に触れることが出来たのは大きな収穫かもしれない。

「レイにもあげる。せっかくのレシルちゃんとのツーショットなもの」

「片割れの服装をピクシヨでジーパンカッターシャツに加工してから渡しなさい」

結論としては、彼が何故科学というものを毛嫌いするのはつきりとは掴めなかった。妙に思案気な表情を浮かべていた先生も、後に聞いてみればよく分からないの一点張りで、真相は今のところ闇の中だ。

ただし、彼が科学技術だけではなく、僕たち日本人に対してもよくないイメージを抱いているということは分かった。それが坊主憎ければ袈裟まで憎いといった単純な物なのか、それともそうではないのかははつきりとはしないが、妙に僕に対して挑発的な態度を取ってきたことからおそらく間違いないだろう。

「さてと、ここいらで今日は解散かな」

夕暮れの広場はいつも通り閑散としている。騎士学園の中心部へ続く通りと、東都工科大学の新校舎がある外れへと至る小道。その分岐点に立った僕たちは、改めて互いの姿へ向き直った。

満足げな笑みを浮かべつつも少しだけ表情に影を差しているレシルは、まだ遊び足りないといった感情があるのだろう。つい先日に出た場所のこの時間で冷水に手を濡らして立ちすくんでいた時と比べれば、なんとも年頃の女の子っぽくなったことだ。

「兄さん。今日はわざわざわざ時間を作ってくれてありがとう」

「僕もレシルとたくさん話したり遊べたりで楽しかったよ。ちよつとだけ昔を思い出すことも出来たしね」

「……正直、まだ遊び足りないや」

いたずらつ気な笑顔を浮かべたレシルに対して、僕は当然のように笑顔と共に言葉を返す。

「なるだけ週末には会って話そうか。来週も、一緒に街とかを歩こうよ」

「……うん!!」

「私も無理のない範囲で着いていくわよ。蚊帳の外に成りかけているけど念のために言っておくわ」

しっかりと視線を交わす僕たちの隣で、やり取りを見守っていた藤沢さんがため息を吐いていた。

今日のイベントに関しては、彼女には感謝をしてもしきれない。自身に対しても若干ながら内向きだったレシルに対して、彼女は積極的に話しかけてくれた。今日の趣旨がレシルに人と積極的にコミュニケーションを取ってもらおうというものだったから、肉親である僕以外にもたくさん話せたというのは満足いく結果である。

「それじゃ、また来週」

「じゃあねっ!!」

大きく手を振ったレシルは、何度も此方を振り返りながら広場の出口へと駆けていく。すぐに解散せずにそこらのベンチで少し話をしていても良かったのかもしれないが、ちよつとばかり未練があつた方が来週また会つたときの喜びもひとしおだろう。

「……さてと。それでどうなんだい？」

「どうつて……ああ、そのことね」

完全にレシルの姿が見えなくなったのを見届けてから、僕たちも回れ右をして帰路へと足を進める。その最中に藤沢さんへ何の気なしに一見中身のなさそうな質問を投げかけてみれば、彼女は最初こそは怪訝そうな顔をしていたものの、すぐにため息を吐きながら表情を渋いものへと変えた。

「ライル殿下。本名ライル・フランシス・エルトニア。腹違いだけど、弟には違いはないわ」

「へえ。王室の一人だとは分かつてはいたけど、やはり直系の皇太子さまだったか」

彼女から聞かされた名は、紛れもない王家直系の人間が持つべき名前だった。よくよく思い出してみれば、藤沢さんは腹違いとは言うけれども隣を歩く彼女と先ほどの青年の容姿は、特徴的な赤紫の髪色以外にもそこそこ共通点が多いように感じる。

金色に煌めく意志の強そうな瞳やら、シミひとつない綺麗な頬、すらつとした高めの背丈、そういえば青年も男の割にはまつ毛がキュインとアクセントになっていたっけ

か。青年の姿を思い浮かべながら藤沢さんの姿をしげしげと眺めていると、微妙に頬を赤らめた彼女にジト目で睨まれた。

「き、急に見つめるんじゃないわよ……」

「あー、よく見れば例の青年と君が結構似ているなって思ったんだ。嫌な気分になったのならゴメンね」

「別にそういうわけじゃ……」

「あ、デレた」

軽くからかってみれば、瞬時に彼女の手による制裁が僕の頭へと下された。ポコンという良い音が響き思わず頭を押さえる。

「デレてない。ふふっ、こんなやり取りも久しぶりね。確かにレイの言う通り、昔から彼とは母が違うのによく似ていると言われたものよ」

「君の反撃も相変わらず鋭いよ。ふうむ、見た目が似ているつてのは僕の気のせいじゃないのね」

なだらかな下り坂の先に、寮と新校舎の頭が見えてきた。背後から照らす夕日も大分弱々しくなってきた。あと少しで合同食事が始まるような時間だ。

「彼とは母違いだったけれどよく一緒に遊んだ仲だったわ。その時は特に高飛車な感じもなく、むしろ大人しい雰囲気の子供だったけどね」

「二度会っただけだから何とも言えないけど、まるで今の彼とは真逆だね」

一人称こそ私と落ち着いてはいるが、纏う雰囲気の高さは大人しいという言葉とはかけ離れているように感じたし、僕へ向けた言葉の連撃からは微塵も大人しさを感じなかった。首を傾げていると、藤沢さんは「歳を取ると人は変わるのね」としみじみ呟いた。二度も思春期を繰り返しているながら、性格の根幹が幼少の頃から微塵も変わらない僕は一体何だというのだ。

「そんなに簡単に人の性格がコロコロと変わるなんてねえ」

「でも事実彼は変わってしまった。それにプラスして日本人への嫌悪感も、あら？」

話の端を折るようにして、彼女はオーバーコートのポケットをこそごと探ったかと思えば、振動音を響かせるスマートフォンを取り出した。一応学園区内であれば電波は生きているらしく、エルトニアのど真ん中においてもメールの着信があるというのは別段変な話ではない。

「僕にも着ているみたいだ。全体メールかな」

そして僕のポケットからも、スマホ由来の振動が響き始めた。同時に別々の場所からメールが届いたというよりも、研究グループ内での全体メールが送信されたと考えた方が自然だろう。特に不思議に思うこともなく、後で内容を確認してみようかなとポケットにしまおうとしていたら、隣でスマホをいじる藤沢さんの表情が驚愕で塗りつぶされ

ていた。

「えっ……うそ」

「どうしたのさ。なんかヤバイ内容でも書いてあった？」

「レイにも送信されている全体メールだけど、ちよつと見てみて」

彼女が差し出してきたスマホの画面を覗き込んでみると、確かに送信元は新校舎の運営部となっており、全体メールであることは間違いがなさそうさ。しかしタイトルの頭に“緊急”という文字が入っているのがどことなく不安を予想させる。そしてその不安はすぐ下に続いていた本文を流し読みしてみたところ、どうやら間違つた物ではなかつたようだ。

「……これは、すぐに戻つた方が良さそうだね」

「ええ、まったく同感だわ」

すぐに歩調を速めて校舎への道を歩き出す僕の後ろを、携帯をポケットに放り込んだ藤沢さんがやや焦つた様子で追いかける。

”今日から三日後の午前中、講義室及び各研究グループにエルトニアの視察団が訪れることが決定しました”だなんて助教の僕でさえ初耳なのだから、修士学生の身である藤沢さんが知る由もない。そして視察団のメンバーの中に王室の人間が混じっていると書かれているのだから、焦るなという方が無理難題も良いところである。誰が来るか

なんて具体的なことは何も書かれてはいない。だが急ぎ足で新校舎へと向かう傍ら、どうにも脳裏にあの背の高い赤紫髪の青年の顔が浮かんでしようがなかった。

第七話 「乱入!! 緊急キャンパス見学会」

その1

「おかしい……こんなことは許されない……」

「これでも頑張った方なんですよ。それとなく難色を示しても、これ以上遅らせることは出来ませんでしたし」

背広というものは何でこうもゴワゴワとした肌触りなのだろう。最後にこれを着たのは開校式にさかのぼるが、式典の後研究棟へ戻る前に寮で普段着に着替えてしまうくらい、僕はスーツというものが苦手である。だが百歩譲ってスーツを着なければならぬことは許そう。新卒社会人の身だ、明日から背広遵守になったとしたら、不満に思うことはあっても文句を口に出そうとは思わない。それに現状は、服装の指定なんて目じゃない事態に飲み込まれているのだ。スーツがどうかかなんてそれに比べりゃ軽い。

「……説明役に僕が選ばれた基準というのは、エルトニア人だからですか?」

「ええ、やはりエルトニアの常識を知っているというのは大変心強いですからね。この計画に携わって精々二年の私よりも、平塚さんの方がこちらの勝手を知っていますでしょう」

新校舎の入り口前で僕と並んで立っているのは、今日もビシツとスーツで決めた川崎さんだ。詳しい年齢は知らないが、彼は見た目から判断すればまだ三十に行つてゐるかも怪しいような風貌だ。しかし妙に様になっているところは、流石は役人さんといったところか。

周囲には黒服にサングラスを重ねたゴツツイ方々が並んで立っている。まだこの校舎を本拠地としてから日は浅いし、そこまで校舎に馴染んだわけでもない。しかしボデイガードがザラツと並んだ壯観なロビーに対してちくはぐさを感じる程度には、僕もここになれたというわけか。

「詳しいっていつても、王都については知識でしか知りませんよ。当時はこの街からかなり離れたところに住んでいましたし……」

「構いません。それにこちら側に魔石を使わなくても会話が通じる人がいるというのは、それだけで大きな武器ですから」

どうにも僕が助教として採用されるに至れたのは、おそらく学術的に価値のある人材として選ばれただけではなく、異世界に大学を作るなんて言う奇想天外な計画において役に立つ存在として見られたせいもあるのだろう。

純粹に研究者としてこの道を志した身としては少しばかり思うところはあがあるが、立場が上手く働いたと思えばむしろ好都合でもある。だが対外イベントがあるたびにメイ

ンを張らなければならぬとなると、そうも言ってられない。

「……別に看板教授というわけじゃないのに、この手の対外イベントに結構な頻度で表に出るといふのは、少々居心地が悪いですね」

「そうご謙遜なさらずに。むしろその若さで助教就任なんですから、もつと胸を張つてもバチは当たりませんって」

それとなくあまりこういう対外行事でメインを張りたくないと思つてみても、川崎さんはこちらの本心を知つてかしらでか小さく笑いながら流してしまつた。なんとも攻略の難しいものである。

開校から第二週の今日、午後の最終コマまで担当授業が無い僕は本来ならば実験室にこもつて作業をしているはずだつた。やる事は山ほどあるし、それなりに順調に研究を進められるような結果もこの数日間で連続して出ているから、出来ることならば今すぐスーツをそこらへんに脱ぎ捨てて己の実験台に逃げ帰りたい。

しかしそうも言つていられない状況だ。なんとつて今日は、今後の異世界大学計画に関わりかねないような緊急で重要な要件が入つてしまったのだから。

「おさらいなんです、今日視察に訪れる面子について確認してもよろしいですか？」
「ええ、まだ少しだけ時間にも余裕がありますからね。まずは商業大臣のトロス卿。早い話が、エルトニア王国の官僚さんです」

川崎さんが手帳を確認しながら話を進めていく。地方に住んでいると中央政権についての知見がなかなか入ってこない。だから数年前までエルトニアの地に暮らしていたというのに、商業大臣という名の役職があるだなんて恥ずかしながらこの一件で初めて知った。

「そして彼らの配下が数名。いわゆる秘書とかの下級役人だそうです。他にも他の大臣の部下がチラホラと散見されます」

「……結構な大所帯ですね」

「人数にしてみれば全員で10名程度ですよ。おおよそゼミの見学で一度に捌ける人数の最大値くらいでしょう。そう考えれば肩の荷も落ち……ませんよね」

全然肩の荷は押し掛かったままである。軽く頭を振ってみせれば、川崎さんも苦笑いをしながらため息を吐いた。

彼ら役人にとつても今回の視察は寝耳に水の情報であると聞いている。僕に関して言えば、当日訳の分からない偉そうな肩書の間人相手に説明をして半日時間が潰れるだけではあるが、川崎さんたちはいきなりの要求をしてきた視察団側に対して何とか日にちの折り合いをつけたり大学側への説明をしたりで、かなりの負担があつたのだろう。そう考えれば単純に面倒だなんて愚痴も吐いてはられない。

「それと最後に大物です。エルトニア王室第二王子、ライル・フランシス・エルトニア殿

下。いやー、こんな大物がやって来るなんて大変ですよ」

「本当に、ほんつとうに同感ですけど、かなりぶっちゃけましたね」

「彼がいなければいきなり予定をこじ開けるのは無理ですって通せましたが……まあ、そういうわけで緊急の視察団ということですよ」

少しだけ見せた本当に参ったというような表情から察するに、かなりの圧迫交渉だったに違いない。今日の一件が片付いたら缶コーヒーの一本でも奢ってあげよう。

おさらしいした通り、先日緊急のメールが届いた時に感じていた悪い予感は見事に的中してしまった形だ。まさかメールにある王族ってライル殿下のことなんじゃないか、なんて藤沢さんと話していた矢先に事実だと聞かされて、僕たちは二人揃って口をげんわりと開けてしまったほどだ。

いつ僕とレシルの感情が爆発炎上してもおかしくはなかった雰囲気の中でライル殿下と会話を交わして、見事耐え忍んで事無きを得たのがほんの数日前のことだ。明らかに僕を含めた日本人に対して良い感情を抱いてはいない彼がやってくるだなんて、果たしてどう対処をすればいいのか見当もつかない。願わくば彼の側から積極的に喧嘩を吹っかけてこないことを祈るばかりだ。

「それで視察ルートですが、基本的に学生の授業風景、それと研究フロアの実験室風景だけですね。授業の担当教員は浜松教授、それと見学予定の研究グループには平塚准教授

が率いるグループも入っています」

「浜松先生はベテランだから何の問題も発生しなさそうですね。僕のグループも、急ごしらえとはいえ形にはなりました」

平塚グループに視察が入る懸念としては、身分を隠しているとはいえ肉親の者である藤沢さんが所属していることと、構成員三人が全員先日殿下と顔を合わせていることくらいか。後者は火の手がなければ懸念ではなくなると思いたい限りだ。

「おいでなされたようです」

「……本当ですね」

正面ホールに並ぶ黒服の皆さんが、急に慌ただしく動き始めた。静かだった空間はいつの間にかバタバタとした空気へと変化し、しきりに小型の無線機で連絡を取る人の姿が目に入る。通信は隣に立つ川崎さんにも届いているようで、小さなマイクとイヤホンで外部と何かの連絡を取りあっているようだ。

無線機もマイクも持っていない僕は、なんだか周囲から取り残されてしまった感がある。色めきたった周囲に合わせた行動が出来ないし、だからといってへんに行動をして川崎さんの手を煩わせるわけにもいかない。最終準備段階へと入ったこの一団の中で、何もせず突っ立っているというのは非常に居心地が悪いが、ここはグツと我慢をするしかない。

「——了解しました。では彼を連れていきます……さて、もう視察団は新校舎の目と鼻の先です。行きましようか」

一度大きく深呼吸をする。黙っていると、いつもよりも刻みが早い胸の鼓動が明確に知覚出来てしまう。

「……分かりました」

意識をして同じ側の手と足が前に出ないように歩きだし、特に理由もなく腕時計へと目を向ける。そろそろ一限目の授業が開始し、各研究グループも本格的に一日の実験を始めたような時刻だ。まあ今日に限っては訪れるであろう高貴な見学者のための最終準備でもしているのであろう。

「平塚さん、大丈夫ですか？」

「え、ええ……昔っからこころざという場面じゃあがり症なんです」

なんとか緊張というものを忘れるために色々なことを考えてはいたが、結局何を思い浮かべようと最後に残るのは緊張感なのだ。今まで幾度も大きな発表会で講演をしてきたが、助教昇格の今になっても緊張感というものは毎回付きまとってくる。何度も経験している学会でこれなのだから、言うなれば大学の顔として外国の官僚と顔を合わせるとだなんて緊張するなという方が無理がある。

開け放たれた自動ドアの向こうから、まだ肌寒さの残る空気が容赦なく全身にふりか

かる。いつの間にか額や首筋に湧き出ていた汗が冷気と混じって強烈な寒気を捻出し、元々の震えとの相乗効果でもはや風邪で大熱出したかのような感覚が全身に走った。春の日差しも雲の切れ間から微妙に照らすに留まり、着なれていない背広に温かさは期待できない。せめて手袋あたりでも着けていれば良かった。

しかしそんな寒さに長く耐える間もなかったようだ。新校舎へと続くかなだらかな下り坂の頂点に数名の人影が見えた瞬間、周囲の黒服の男性方が一斉に姿勢を正した。

一団の先導を務めるのは、まさに騎士といった格好の人物だった。護衛か何かだろうが、街中で写真を見せたら十人中の十人が騎士ですと答えそうな格好の方々が目に入る。一応生まれはエルトニアだけでも、こんな人たちが先導を務めるご一行を迎えた経験はあるわけもなく、既に尻込みしてしまいそうだ。そして段々と見えてくる視察団と思わしき方々。少なくとも僕のような身分の人間は袖を通したことがない服を纏った人たちが、護衛の騎士の間から見え隠れしている。

「……本当に大丈夫ですか？」

「気合です、気合」

そんなに今の僕は顔面蒼白のゾンビなのだろうか。気を落ち着かせようと深呼吸を繰り返していたのが、川崎さんに見てみたら過呼吸で死にそうな状態に見えたのかもしれない。一応こう見えても立派な平塚流緊張解除術である。前世から続けていて、割と

効果は期待できる筈だ。

深呼吸の回数が優に二桁回数を突破したころには、既に視察団の表情が視認できるときに接近していた。そしてその先頭を歩く、肩章やらなんやらで飾り立てられた軍服を着こなした赤紫の髪を持った青年が、明らかに僕に目を向けているのも分かってしまった。

「見られてますね」

「見られてますよ」

視線をこちらに向けずに川崎さんがぼそりと呟き、僕もなるべく顔を動かさないように小さく返した。川崎さんも気付いているということは、ライル殿下が僕に視線を向けているのは自意識過剰による気のせいではないということか。

黒服に黒髪で一行を出迎える役人に混じって銀髪頭がいたら、そりやあすぐに見つからさう。目を逸らしたい、でも逸らせばなんか因縁つけられる気がする。

ある程度一団が近付いたところで、川崎さんが彼らを出迎えるべく歩き出した。小声で「行きますよ」と話す彼の後を、緊張で固まろうとする足に鞭を打ってなんとかついていく。気分は団体客を前にした温泉宿の女将見習いだ。視察団側も、先頭を歩く護衛の騎士が横に退いて、ライル殿下のすぐ後ろを歩いてきた壮年の男性が大股で近づいてきた。地面につきそうなほど長いローブに、なんだか無駄に高級そうな青いスカーフ

と、見るからに位が高そうだ。

「おはようございます。日本国外務省の川崎義春です」

「エルトニア王国商業大臣のヴェルト・ゼバスティン・トロスだ。本日はよろしくお願ひするよ」

川崎さんと、トロス卿と名乗った男性が握手を交わす。年齢だけ見れば親子といつても差し支えないくらいの開きがある。ここで抱く感想としては的外れかもしれないが、改めて川崎さんが若くしてすごい環境で働いているという事実には驚いてしまう。

「ニホン国の最新鋭の研究が行なわれている場所だ。殿下も楽しみにしていなさる」
「まあ期待はしている。エルトニア第二王子、ライル・フランシス・エルトニアだ」

ライル殿下も合わさって簡単な挨拶を交わす三人だが、それも束の間にライル殿下の視線が僕へと向けられた。

「ほ、本日の司会を担当させていただきます、国立東都工科大学の平塚礼二です」
「ヒラツカ……？ まあ良い。よろしく頼む」

一瞬ライル殿下の顔に怪訝そうな表情が浮かぶ。思い返せば、先日彼と顔を合わせたときには単にラストイレイと名乗っていたからそのためかもしれない。考えようによつては、まるで偽名を名乗っていたようじゃないか。思わず寒気が背中を走るが彼は特に追及することもなく、小さく胸をなで下ろした。

「皆様、本日は国立東都工科大学エルトニア校へようこそいらつしやいました。本日の見学会は私川崎義春と、こちらの平塚礼二で進行させていただきます。本日はよろしく願います」

トップ同士の挨拶が粗方済み、川崎さんが参加者全員に向けての挨拶を始めた。先ほどまでは苦笑いしながら大変だと言っていた姿からは一変し、穏やかな笑みを湛えて丁寧なお辞儀を見せている。いくら若くても流石は役人といったところか、纏う雰囲気もこうもササツと変えられるなんて隙がない。名前を呼ばれた僕も、川崎さんと共に参加者一同に向けて頭を下げる。

「それでは、さっそくですが見学会に入らせていただきます」

その言葉と共に、新校舎の自動ドアが開いた。普段は入構証をかざしたうえで近付かないと開かないようになっていたのだが、今日は特例の演出なのだろう。

川崎さんが先導するように入り、参加者一同の先頭をライル殿下とトロス卿が続く。どうやら今回の見学会には護衛として黒服のSPさんの他にも、エルトニア側の騎士も同行するようだ。参加者一同が全員入ったのを確認してから最後に校舎に入ろうとする僕の横を、背の高い騎士が並んで歩き始めた。

「若い司会者君。君はここの生徒かい？」

「……いえ、生徒ではなく、むしろ教える側です」

「そうか、それはすごい!! ニホン国では君のような歳でも先生になれるのだな!!」

そして歩き出してから間もなく、予期せぬ相手から妙にフレンドリーなハスキーボイスで話しかけられて思わず変な声が出そうになったが、なんとか持ち直す。騎士というのだから寡黙でダンディーだと勝手に思い込んでいたが、少なくとも顔の上半分が隠れた鎧に身を包む彼ないしは彼女は違うようだ。

「ええと、そういう訳でもないんですよ。それに教える側に回ったのは今年からです」

「じゃあタマゴというわけだな。まあ今日は少々難しいかもしれないが、頑張れ、少年!!」

妙に勢いがある人だ。性別はどちらかは分からないけど、すごく爽やかな体育会系っぽく感じる。人のことを少年と呼ぶのは少々いただけないが、ここまで好意的に褒められてあまり悪い気もしないというのが本音だ。

しかしこの騎士さんの言う“難しい”とは一体何なのだろうか。途中の神妙な口調の意味を一瞬考え込みかけたが、川崎さんの催促するような視線を感じてすぐに歩調を速めた。

その2

身長を大きく損なつた今世の自分よりも縦に大きく、かなり細長い体格である前世の自分こと平塚先生よりも横に広い。多分僕や平塚先生よりもよつほど教師っぽい見た目の浜松教授が、広めの教室で教鞭を振るつてゐる。一方で、席に着き時折後ろの様子を気にしつつもノートにペンを走らせるのは、日本人然とした姿形の浜松教授とは対照的にカラフルな髪や瞳の生徒達だ。

そんなちよつぴりちぐはぐは授業風景を、広めな教室の後方座席を陣取つて見学するのは、古風な絵画で見かけるような、日本の常識からは大きく外れる衣服に身を包んだ一団だ。

「この部分をもつと電子を引き付ける形に変えれば——」

明らかに非日常な風景を前にしても素知らぬ顔で授業を淡々と進める彼は、流石はベテランといったところか。視察団が教室に入つてきた時に簡単な挨拶をした以外に、浜松教授は全く彼らに意識を向けることはなかつた。普段通りの授業風景を見せるという意味では何の問題は無いけれども、まったく配慮をしないというのはかなり強い心臓をしていると思う。

「反応の進みややすきを変化させられる要因としては他にも——」

むしろ教師本人が視察団の面々に対して全く気にした様子が無いから、生徒の方が見学者にチラチラと気を取られてしまっていることが非常に悪目立ちしているように感じられる。ふと生徒陣を見わたしてみれば、例えば僕が持っている授業でも見かけた緑髪の女学生は、少なくとも三回は後ろを振り向いて内二回僕と目があつてしまつてすぐに視線を前に戻しているくらいだ。

当の見学者の皆さん方の反応は、わき目でこつそりと伺つてみるとどうやら可もなく不可もなくといったところか。かなり初歩の範囲とはいえ、現在授業の題材となつている分野は完全な専門分野であり、予備知識のない彼らにしてみれば全然わからない学問に過ぎないのだ。この場において得られる情報としては、精々生粋の異世界人の学生達があつかり勉強していますよという程度しかないだろう。

「——さて、偉い人たちの前で真面目な話を続けるのも疲れちゃうから、少し小話でもしようか」

授業を受けている生徒達に全体的に浮ついた雰囲気蔓延しているのは、新人ペーペーの僕にも流石に分かる。むしろ教室最後尾で起立しながらじつくりと観察しているからか、教壇に立つて授業を行なつたときよりも生徒達の細かな仕草も結構目に付くものだ。

そんな空気を察したのだろうか、言葉とは裏腹に全く疲れた様子も見えない浜松先生は、若干の苦笑いを浮かべつつ教卓に手をついた。年齢的にも結構なベテランで、論文検索をすれば相当な数がヒットするほどの彼にこのような態度を取らせるだなんて、結構失礼なことだろう。ただし生徒達にとっては彼はまだまだ一教員に過ぎない。おそらく遠くない未来で、授業を担当している先生方の実績を知って口をあんどりと開く生徒の数は少なくはないだろう。

「今皆さんが受けているこの講義、ぶっちゃけ何の役に立つんだって考えている人も居ることでしょう。そう思うのは自然なことです。そこで、この授業に少し関連した有用なアイテムを用意してきました」

「ごそごそと教卓近くに置かれていた鞆を漁りながら平和そうに笑う浜松先生。おそらく先生の話が凶星である生徒数は少なからずいるだろう。魔法がものを言う世の中で学習してきた生徒達にとって、この授業が役に立つ具体的な場面を想像しろというのは無茶が過ぎる。」

「この袋の中のアイテムを開く前に、皆さんに一つ質問です。きらびやかな色で溢れる王都の高級住宅街を歩いていても中々見かけない、そんな色は何色でしょうか？ 制限時間は30秒です」

「こういう時に生徒を引き込むための良い雑談のネタは、授業に関する身近な物と相場

が決まっている。さっきまで後ろに構える視察団のせいであつて浮ついていた教室の空気が少々変化した。隣同士小声で相談する生徒や、腕を組んで何か思いつかないかを考えだす生徒。世界は違えど彼らは知識に貪欲な部類に入る人種だ。問題を提議すれば結構な割合で食いつくのかもしれない。

なんとなく手元の腕時計で時間を確認しつつ、残り時間が半分を切った辺りで先ほどから時折目についていた緑髪の女学生が手を上げた。

「青、ですか？」

「すごい、正解だ!! そう、王都を見回してみても青い色というのは珍しい。これは私の故郷でも昔は同じだったらしいんですよ」

浜松先生の言うとおおり、純粋な青という色はこの王都でもそうおいそれと見かけるものではない。詳しいところは僕も把握はしていないが、魔石の精錬の際に排出される不純物中に微量だけ含まれる蒼い鉱物が、もつとも一般的な青の塗料として市場に流通するらしい。しかしただの不純物と侮るなかれ、適当にそこらへんへ放置をしておけば群青色の表面がどんどん赤らんでいき、ただのくすんだ赤紫色の粉末と化してしまうのだ。

そういうわけで青の色は悪い意味で安定しているために供給量が少ない。それに乗じてか位の高い人は時折深みの強い青色の装飾品を目立つように身に纏っていること

が多いとか。

「魔石生成の際に使われる青色塗料は、時間経過で劣化をしてしまうと聞いています。おそらく空気中では不安定なのか、光で自己反応を起こしているのでしょうか」

見栄を張って邸宅の壁を魔石由来の青で塗り上げた貴族は、以降1年に1回高い資金を投じて壁の一斉塗り替え作業を行うらしい。家の壁を塗りつくす量の青い塗料はそれだけでかなりの金額に上るだろうに、毎年一回塗り替えなければみすばらしいと陰口を叩かれるなんて、下手な見栄は張るものではないと思う。

「壊れにくい構造で、尚且つ安価。そんな青色の塗料があればこの王都の色の常識は根本から変化するでしょう。そしてそれはこの袋に入っています!!」

浜松先生が勢いよく袋から取り出したのは、小さな絵の具のチューブだった。一瞬ポカンとする生徒達を前にして、彼はキャップを開けると少量を紙に塗りつけた。

なんてことはない、やや群青がかった青い絵の具の汚れが、裏紙の一部にへばり付いているだけである。そんな物体を彼は得意げに手に取ると、生徒全員に見えるように前へ突き出した。

「私は絵を描くのが趣味なんです、この絵の具は高いやつだけど一本500円。こっちのレートならランチ一食分よりも安いんじゃないかな」

現代日本に染まった僕には何の特別感もない物品も、世界が変われば金の塊のような

扱いを受けるのだ。精製直後の魔石塗料に比類する鮮やかな青色の塗料が、昼食代よりも安い価格で結構な量を買える。このカルチャーショックは生徒達の意識を後ろの視察団から完全に切り離すには十分過ぎるものらしい。

「私の国がある世界でも、昔は青つていうのは貴重な色だったんだよ。でも科学の発展と共に、希少鉱物を原料とする天然の青色塗料に代わって、こんな安価な有機系塗料が登場をしたんだ。そして青だけじゃない、虹をさらに細分化した多くの色が工業的に作られている」

生徒のみならず、視察をしている役人たちの一部も事務的な様子から変わって興味深げに浜松先生の話に耳を傾けている。

「この絵の具を造り出した学問の基礎を、この授業で取り扱っているんだ。皆さんからすればこんな暗号か何かかって授業も、実はすごい有意義な分野へ応用できるんだ。皆さんから得意げに語る浜松先生。風貌は青い絵の具で汚れた裏紙を片手に佇むただの恰幅が良い中年男性ではあるが、後進へ学問の姿を語る様はすごく誇らしげで、それでもつて格好良く見える。」

「授業を受ける意味は何なんだろうって考え込んでいても中々思いつかないかもしれない。でもこうして脇に逸れてみれば、案外関係しそうな物事は転がっています。何事も視野を広く持つことが、この業界で大成するための第一歩です」

紙を折りたたんで袋にしまった彼は、教卓に両手をつけて全員を見わたした。浮ついた空気はとうの間に立ち消えて真剣な表情を浮かべる生徒達はまだしも、授業に対して第三者と言つても差し支えない視察団の面々に対しても、浜松先生は真摯な態度で笑顔を向ける。

「という感じで、時々雑談をねじ込んでいくのが私の授業のスタイルです。関係なさそうな事柄を化学の視点で考える、そんな力を皆さんで養っていきましょう」

流石はベテランだけあって授業の進め方が上手いなあ、というのが率直な感想である。雑談だなんて当の本人は言っているけれど、単なる雑な話で終わらせない辺りに上手さを感じる。そしてたかが雑談と侮るなかれ、こうした小技は聴衆の耳を傾けさせるのに大きな役割を果たすのだ。

前世の大学に入ったころあたりなんて、急激に勉強をする分野が難しくなつて何度も壁にぶち当たつた記憶がある。そんな気がまいってしまふような状況下においても、勉強や小話何でもござれといったような話し上手な教員が担つていた授業は、難しい内容のはずなのに自然と引き込まれていくのだ。常にフルスロットで真つ直ぐ勉強に向き合える人間はそう多くない。難しい話の合間を縫つて適度にリラックスをさせる技術、うらやましいものである。

「それでは授業に戻ろうか。先ほどの反応、こいつの例を——」

大学の教授なんて研究成果をあげることが出来れば、授業のうまさなんて大きくは問われない。それでも折角時間を割いて後進に指導を行うのだから、彼のような話の上手い教師を目指したいものである。

教師が主に喋りつつも、生徒達が完全に受け身にはならないようにする。僕が選択した授業スタイルは、偶然にも浜松先生と似通ったものである。どういうところで学生の気を引く話をするのか、授業全体の雰囲気はどう作るのかなど、真似できそうなところはなるべく真似を試みよう。

「……何がカガクだ」

ただしいくら授業の進め方が上手くたって、全ての人間を話に引き込むことは出来ないようだ。お立ち台の上に立って見事な演説を行い、聴衆はその話に乗せられて熱狂していく。偶然通りかかった一般人は、その熱狂に当てられて聴衆の一人と化していく。そんな場においても、絶対に聴衆へ混じらずに話へ耳を傾けない者がどうやって存在するのだ。

無関心そうな表情を浮かべつつ、耳を澄まさなければ聞こえないような小声でそう呟く赤紫髪の青年。腕を組んでつまらなそうに佇む彼の姿は、ようやく後ろの視察団の姿が気にならなくなって授業に集中し始めた学生たちとは真逆なものだ。端から反抗的な姿勢を崩さない者は、どうやったって聴衆に引き入れることは出来ないのかもしれない。

その3

教室の後ろで突っ立って講義を聴くのはひどく久しぶりの経験だった。前世の大学入学したての頃、単位が取りやすいことで有名な講義の初回授業で椅子がすべてうまっていた時以来だろうか。ただでさえエルトニアの偉い人たちを引率するという立場で緊張をしているところに加えて一時間以上動かないで立ちっぱなしだ、足が棒のように疲れてしまった。ふくらはぎが若干プルプルとしている。

授業が終了するよりも一足先に予定通り視察団を引きつれて退出し、最後に浜松先生への一礼も忘れない。その際に彼が返してくれた小さなガッツポーズは、おそらく激励の意味が込められていたのだろう。真っ先に講義室を後にしたライル殿下をわき目で伺っていた浜松先生は、疲れたように小さくため息を吐いていた。終始講義や雑談にさえ興味の欠片も見せない人物が、最後列のど真ん中とかなり目立つところに座っていたのだから、教卓に立つ彼の目から見て気にならないはずがない。

「それでは次に研究施設へご案内いたします」

一団の先導に立って歩く川崎さんの向かう先は、大学の肝といって差し支えの無い多くの研究室が並ぶフロアだ。この数週間の生活で、寮から新校舎へ移動して二階からの

研究フロアへ向かうのが日常として体に刻み込まれた。しかし今は普段と違ってお偉方を先導しながらの移動となる。いつもならば足取り変わらず歩む階段も、今は上るのに少し抵抗を感じてしまう。

「君、先ほどの教師が言っていた青の塗料についての話は真か？」

「ええ。ただし先ほど紹介された絵の具は、主に紙に塗りつけるものです。建築物の壁に塗装するものはまた異なってきますが、こちらでも安定して生産されています」

「そうか。ニホン国との外交が始まって五年となるが、やはりそちらの事情に関しては知らぬことが多いな」

トロス卿といったか、壮年の男性が浜松先生の雑談に関連した質問を投げかけてきた。おそらくこの視察団の中ではライル殿下の次に位が高い人物なのだろう。この国の商業大臣なんていう肩書を持っているし、常に彼の後ろには部下と思わしき二人の参加者がつき従っている。

「しかし異世界の学校と聞いてどのような珍妙な授業を行うのかと思つたが、案外こちらのものと変わらないのだな」

「エルトニアの学校も似たような形式で行なうのですか」

そしてどうやら、この人や配下の役人たちは国立東都工科大学に対してある程度は関心を持っているようだ。このような姿勢を示してくれると、こちらとしても説明を行な

いやすい。

「王都の学区には名前の通り多くの教育機関が名を連ねているが、私の母校エルトニア王立騎士学園は少なくとも一般教養は先のものと同じような授業方法だった。流石に教導訓練は別だがな」

「本学も教養科目は基本的に先ほどと同じスタイルの授業を行っていますが、物によっては学生間のディスカッションをメインにしています。そして、これから紹介する場所は先ほどとは全く異なる形式の教育現場となっております」

「そうか、どのようなものなのか期待しているぞ」

言葉通りに楽しげな表情を浮かべるトロス卿や、その配下と思われる役人たち。彼らの様子を見てみると、いわゆる普通の見学会の参加者であるとすんなりわかる。見学会なんて普通興味を欠片も持っていないければ参加はしないし、トロス卿達のような姿勢が一般的であるはずなのだ。

しかし研究フロアに続く階段を歩く視察団の中には、どうやらトロス卿のような興味を持つて見学会に参加しているわけではなさそうな層が存在しているようだ。

「……その研究施設とやらは先の教室とは隔離でもされているのか？」

「研究と教育のそれぞれに専念できるよう、フロアは明確に分かれています。当初の計画では校舎ごと分ける予定もありました」

「そうか……」

先頭を歩く川崎さんと言葉を交わすライル殿下の様子をこっそりと伺う。表面上では気になった点について質問を投げかけているように見えるが、よく見れば彼の表情は川崎さんの返答に対しても特には興味を抱いていない様子だ。あくまでも儀礼的な質問に過ぎないということだろうか。

おそらくトロス卿を中心とする派閥がこの見学会に対して純粹に何らかの興味を抱いている一方で、ライル殿下及び彼につき従う役人の一団はそういうわけではないのだ。明確にこの場にいる人間は二分されるのだろう。

「ここから先が研究室フロアとなります。各研究グループは分野によって三チームに分かれています。チーム内はもちろんのこと各チーム間での議論も気軽に行なえる空間となっております」

「なるほどな。学者というものはどうしても閉鎖的という印象を抱きがちだが、こちらはそうではないのか」

川崎さんの説明に対して、トロス卿側は周囲を見回したり頷いたり何らかのリアクションは取ってくれているが、ライル殿下側は右から左に聞き流しているかのように無関心さを表に出している。彼側の人間でプラスな反応を見せているのは、ライル殿下の少し後ろを歩く護衛の騎士が例外的にすごく興味津々な様子できよろきよろしている

くらいか。

これではまるで水と油だ。こうも露骨に態度が違うとなると、説明をする側としては気分が悪くなる。見た目こそ温和な表情で説明を続ける川崎さんも、この参加者の態度の違いに気づかないわけが無い。

「普段研究フロアに入るためには毎回解錠することになっています。機密保持のためです」

そもその疑問は、何故ライル殿下がこの見学会に参加をしているのかということろまでさかのぼる。先日の彼の様子から考えて、彼が嫌う科学技術の総本山ともいえる大学の研究室を視察するだなんておかしいのだ。ついさつき彼の護衛から言われた”難しい”という言葉は、おそらくあてずっぽうなどではないのだろう。どうにも嫌な予感がして堪らない。

しかし泣いても笑ってももう目的地は目の前にまで迫っていた。研究フロアと廊下を隔てる自動ドアの前で川崎さんがカードリーダーに職員証をかざすと、ピロリンという小気味良い音と共にガラス戸の施錠が解除された。

「この先が各研究グループの居室となっています。そしてこのフロアの上が実験室です。これから順番に案内をしていきますので、皆さんお入りください」

川崎さんから伝えられた予定では、ここから先は僕がメインで案内をすることになっ

ている。平塚先生は今日の見学会が終了するまではいつでも出勤出来るよう手配をしてあるし、僕の実験に関しては朝方から自動で動かせるものはスタートさせており、藤沢さんにも何でもいいからとりあえず実験ほいことをしておいてくれとは伝えてある。平塚研究グループに関しては、おそらく真つ当な説明をすることが出来るはずだ。

だが何かを説明をすれば何らかの返しがあるトロス卿は良いとして、今まで暖簾に腕押しなライル殿下とその仲間たちをどう扱うか。これまでのライル殿下の様子から考えて、とてもじゃないがただ単に研究内容を説明をするだけで見学会が平和に終わるはずが無い。表情こそは川崎さんを見習って笑顔を浮かべてはいるものの、その内は無事に終わってくれという一心で研究フロアへ足を踏み入れた。

その4

「こちらのスペースは各研究室のメンバーが各々事務作業をするための場所となっております」

研究棟と事務棟、講義棟を一つの建物に押し込んだこの建物は、階層ごとに完全に役割を変えて運用されている。一階には講義室と事務室を置いて、二階以降は研究室のみを配置している。極端といえば極端ではあるが、教育兼研究施設として大学を見たときに最低限必要なものが一か所に揃っているから、エルトニアでの第一号棟としてみれば実用的にも試験的にも悪くはない。

今はあくまで試験期間ということなのだろう。現在エルトニアに籍を置く人員はまだまだ少なく、学生の数なんて研究室が運用できる最低限しか揃っていない。一方で施設側にはより多くの人員が入っても余裕があるように出来ている。そんなわけで本来なら大きい研究室が占有しそうなこの部屋には、現在複数の研究室のメンバーで共用して使っている。エルトニア大学計画の上層部は複数の研究グループが一同に集うことで議論が云々と謳っているが、あれは多分建て前だ。

「この時間帯はこちらではなく実験室側の方が人が多いですね。実験室の方は後ほどこ

案内いたします」

横長の居室の先に走る廊下を挟んで、広めの実験室がフロア奥の一角を占めている。ガラス窓を介して向こう側の景色を覗くと何人かが作業している様子が垣間見える。

「ここに在る者達はこの学園の生徒なのか？」

「もちろん生徒もいます。しかし私のように教職員の一部もこの部屋に席を持っています」

周囲を見回すトロス卿の質問にそう答える。そもそも今彼が立ち止まっているデスクは助教である僕のスペースだ。就職記念に新調した最新鋭のノートパソコンに加えて、学生時代から引き継いだ専門書籍やら資料をミニ本棚に並べた、小さいながらも立派な我が領土だ。エルトニアに来てまだ数週間ではあるが、この机へ順調に根を伸ばしつつある。

「なるほど……教師と生徒が同じ場所で勉学を共にするのか。私の母校の魔術科と似たような形態か」

「教師といつても、どちらかというと教育を補助するスタッフです。いわゆる先生と言われる職員は、別途専用の部屋が用意されています」

ちなみに平塚先生も教授室を個人持ちする一人だ。エルトニア大学計画に参加している人員は、三割程度が教授や准教授といういびつな配分である。そのため集団居室に

席を置くメンバーの数を考えると、教授一人で占有された部屋の数は明らかに多すぎだと感じる。

「このように、この部屋では教職員と学生が共に研究生を送ります。そのため学生同士だけでなく教職員も交えた議論が起こりやすい環境です」

視察団たちが立つ居室の入り口付近は、僕たち平塚グループの場所となっている。各グループを隔てるものは精々が机に備え付けられたボード程度であり、現状仕切りなんてあつてないものだと思つて差し支えは無い。そもそも平塚先生を除いた平塚グループの人員は僕と藤沢さんのみといった驚異の身軽さである。そうなれば必然的に他のグループとの連携を取らなければ研究活動の続行すら怪しくなる。そしてこれは僕らのグループに限つた話ではなく、どこもかしこも似たような状況に置かれている。議論が行われやすいとは言うけれども、実際は提携しなければやつてけないという事情もあるのだ。

そんなわけで現在ライル殿下が立っている横に置いてあるホワイトボードには、よく雑多な情報やら議論の痕跡が書きこまれているのだ。ちようど昨夜に藤沢さんと隣の研究グループの学生を交えて簡単な議論を交わした跡が、数式やら図形やらといった形で残されている。

「先ほどは生徒達は授業を受けていたが、ここの生徒たちは違うのかい？」

「もちろん授業を受けなければいけない学生はいます。しかし学年が上がると授業ではなくここで研究がメインとなります。先の講義のような大規模の物ではなく、より小さな単位で教育を行います」

「ほう!! 私もトロス卿と同じくエルトニア王立騎士学園の出だが、あそこの騎士科は学年が上がると小隊に入るのだよ。小さく分けられるという点では共通しているな」

無表情で周囲を眺める主に代わって、本来ならば護衛に徹するものかと思っていたハスキーボイスな騎士さんが興味津々といった様子で質問を問いかけてきた。革を基調とした儀礼用のお洒落な鎧ではあるが、騎士だけあってご立派な長剣を腰に下げている。こんな状態で実験室へ案内したら、鞆の先端が引つかかって物品や機器をはっ倒しそうで非常に怖い。

しかしこの騎士さん、ライル殿下とは対象的にこの見学会を満喫していらっしやる。場の空気を盛り上げてくれるのは非常にありがたいが、出来れば僕には全く意図が見えないライル殿下をどんな形でいいからリードしていただきたい。

「研究室での基本的な生活サイクルは、実験室で実験を行い、こちらの居室で事務的な作業を行い、そして勉強会や発表会を定期的に行ないます。一見すると単純なサイクルですが、こうした積み重ねの中で新たな研究者を育成していきます」

授業風景から研究フロアでの説明に移行してから、見学者の二層化はより顕著なもの

となつた。より活発に研究棟を観察したり質問をしてくるトロス卿を中心とするメンバーたちに対して、儀礼的な質問すら行わなくなつてきたライル殿下の一派。後者の一団の狙いが分からないし、立場が王族という下手にさわることも難しいこともあつて、正直流れに任せるしかなくなつてきている。

「それでは続いて実験室の方へご案内いたします」

「何らかの行動を起こす気配がないライル殿下たちがいつ動き出すかは分からない。しかし見学会の予定が半分以上過ぎたことを考えると、そろそろ何らかの変化があつてもおかしくはないだろう。内心気を引き締めつつ、なるべく表情に変化を出さないようにして視察団の先頭に立つた。」

騎士に貴族、そして王族。居室の机の間を縫つて歩き出すこの一団は、それはもう珍妙な見た目に違いない。この見学会の最中ずつと机の前で作業らしきことをしていた数名の学生も、時折こちらに視線を向けている。まあ絶対に気にするなというのは無理な話だ。異世界というのはぶつ飛び過ぎているから置いておくとして、王族や官僚が視察に来ているだなんて早々ないことである。しかし出来る事ならば自分も彼らのように外野でこの光景をわき目で眺めていたかつた。

廊下を挟んで向こう側の実験室は、外側から様子が見て取れるように廊下との間は強化ガラスで仕切られている。数週間見続けたおかげで僕にとってはようやく見慣れた

景色となつてゐるが、ガラス窓の奥に大小たくさんの計器が並んでゐるのは、初めて見る方々には新鮮なものに違ひない。

平塚先生が話す所によると、去年の暮あたりにエルトニア計画に参加する研究室宛てに大学側からどのような計測機器を新たに導入したいかを問われたそうだ。試しに使いそうな機器を片っ端からおねだりしてみたところ、驚くべきことにその要望の過半数が通つたらしい。お陰様で測定のために東京にしよつちゆう舞い戻るなんてことは無さそうだし、異界のど真ん中でありながら設備の充実さは国内でもぴか一というよく分からぬ状況になつてゐる。

「ここから先が実験室となります。事故や怪我を防ぐために、機器へ不用意に触れないようお願いします」

特に騎士さんの剣を見つめながら念を押す。八桁単位の金額を要する設備がポンと置いてある部屋だ。正直新人生ならばまだしも完全な部外者をこの中に案内するのは気が引けるが、上から頼まれたのだから断るわけにはいかぬ。扉に掲げられた関係者以外立ち入り禁止の文字は、まったくもって同意であるけれども。

「なんだ……この部屋はかなり五月蠅いな」

「常に何らかの機械が稼働している状況なので、このレベルの音は常時響いています」
「よくもまあ、こんな状態で作業が出来るものだ」

実験室に入って露骨に顔を顰めたライル殿下は、周囲を見回しながらため息を吐いた。彼の言うとおり、稼働している実験機器からは駆動音の他にも付属の真空維持装置やら冷却器によつて決して小さくはない音が鳴り響いている。何年もこんな感じの空間で過ごしたせいで気にはしていなかったが、確かに言われてみればうるさい気もする。

部屋をぐるりと見回すと、居室よりはやや人口密度が高いか。やらせというわけではないが、お偉いさんを招いた見学会を行うことは研究メンバー全員に周知してあるため、普段以上に黙々と実験をしているような姿勢でいてくれた。別にまじめに実験しているような雰囲気醸し出せだなんて告知は出ていないだろうが、やはりそこはきちんとそれっぽい様子を見せてくれるのだろう。

「この時間帯は多くのメンバーが各々の実験を行っています。先ほどの部屋と同様、それぞれが自分のスペースを持ち、意見交換も行きやすい空間です」

そして実験室の真ん中らへんにある自分の実験台の近所、というか隣では黒いセミロングヘアな後姿の学生が実験を行っている。無論、本日も外部見学者のために黒いかつらで変装をしている藤沢さんである。彼女には実験っぽいことをしてねと直接伝えてあったが、真似ではなく普通に実験をしているようだ。

「また本学が保有する実験設備は、日本でも有数のレベルにあります。たかが学生と侮

るなかれ、この場では学生を含めた全てのメンバーが、国内どころか世界各国を見ても最新鋭の研究を行っているのです」

「研究というと、学者が先導して行い、魔術科の学生はあくまでその補助に回るのがこちらの常だが、国が違えばこういうところも違うのだな」

「本学のカリキュラムは研究者を育成することに特化していますからね。学年が上がると、集団で授業を受けるスタイルから少人数単位で教師の下について専門分野研究に移行し、研究者として育成していきます」

トロス卿に説明をしながらわき目でライル殿下の様子を伺うと、どうやら先ほどまでとは違う様子が見受けられた。ひたすらに無感動で無表情といった様子を見せていた彼は、実験室に入ると僅かではあるが辺りを見回したり、少しだけ歩き回ったりしている。ここにきてようやく変化が表れたということは、そろそろ今日に無理やり見学会をねじ込んできた彼の目的が分かるかもしれない。

「当研究グループは自然環境に目を向けた研究を行っています。学生はそれぞれ研究テーマが与えられ、私たち教職員がサポートをする中、問題の解決へ向けて自主的に勉学研究共に励んでいます」

「生徒の自主性を重視する環境であるならば、貴校で学ぶ我が国の優秀な学生たちも間違いなく飛躍するだろうな」

「ええ、必ず育て上げてみます」

満足げで頷くトロス卿にホツとした。今日の視察団の中にいる二人の大貴族のうち片方を満足させられたのだから、肩の荷も少しは軽くなる。

「今まで話でしか聞いてはいませんが、存外異世界の学園というのはかなり良い環境ではないですか」

「……そうだな。確かに悪くはない」

「この見学会、殿下からの急な持ちかけで驚きましたが今の内に視察を行えるのは良い経験ですよ」

この学校に在籍した年数が前世含めてかなりの期間に及ぶからか、トロス卿とライル殿下の会話を聞いているとまるで自分が褒められたような気がしてしまい思わず顔が緩んでしまったが、すぐに会話の違和感に気が付いた。今回の見学会の発案者はてつきりトロス卿なのかと思っていたが、彼らの話を信じるならばどうやらライル殿下から持ちかけたようだ。

ここまで見学会の中で興味のなさそうな風を醸し出していたライル殿下が主導であるとなると、彼の目的は見学会の内容ではなく、見学会を開催することそのものなのかもしれない。そこにどのような意味があるかは分からないけれども。

「私も少し知りたいことがあったからな。それに話で聞くのと目で見るのは違う。渡来

人の実状はきちんと己の目で把握するべきだ」

そう言い終えたライル殿下は、一人で勝手に実験室の奥側へ歩みを進め始めた。一瞬だけ何をするつもりなのかと見送ろうとしてしまったが、ここには毒物やら使い方次第では簡単に壊れるものやらが溢れている危険な場所だ。何も知識がない人間がスイスイ歩くだなんて危険過ぎる。

「あつ、ちよつと!!」

「おい……お前。それはいわゆる実験というものか?」

慌てて追いかけてよとしたところで、彼は手近な場所で実験を行っていた学生に話しかけた。見学会のメンバーに意識を向けずに実験ノートへ熱心に書き込みをしていた学生——藤沢さんは、実験機の隣に立つライル殿下の姿を見つけると遠目に見ても分かるぐらいに驚きの表情を浮かべた。

「ええと……現在行っている実験の手順や様子について、このようにノートへ纏めていきます」

「ほう。学生というより最早学者だな。わざわざエルトニアまで赴いてまでご苦労なことです」

藤沢さんに限らず、この実験室で作業をする面々は、背後で僕が先導する見学者の一団が居ることくらいは転寝でもしていない限り分かっていただろう。しかし生徒の方

に飛び火してくるとはあまり予想もしていなかっただろうし、そもそも僕が話題を振るのではなく参加者自ら話しかけてくるだなんて想定外の範囲外だったのだろう。今まで自分の実験卓に向かい合っていた学生や同僚の助教さん達が、ライル殿下から話しかけられた藤沢さんの方をこっそりと振り向いていた。

一方の藤沢さんは、いきなりの質問に慌てた様子は見せたものの、すぐに気を取り直したように受け答えをしていた。

「渡来人からすれば未知なる土地である我が国だ。研究ならばニホン国でも可能だろうに……お前、なぜこのエルトニアに拘ったのだ？」

「……自身の研究を続けられる場所がこのエルトニアへ移転した研究グループだからです。そしてエルトニアの生徒達の成長にも携わってみたいという希望もあります」

ライル殿下の質問に対する答えは、突き詰めてしまえば指導教官が何故かエルトニアに飛ばされることになってしまったからということである。場所がエルトニアという異世界の国だけに複雑なように思えるが、普通教授が他大学やら他の研究室に異動する際は下についている学生も一緒にについていくものだ。

藤沢さんもそういう経緯で東京からエルトニアへ異動をしたに過ぎない。それをよくもまあ、短時間できっちりと簡潔かつオブラートに包んで説明出来たものだ。

「そうか……どこまでいっても学問、か」

藤沢さんの返答としてはベストに近いものであったと思う。しかし相對するライル殿下の表情こそ見えないものの、ぼそりと小声で呟かれた言葉のなかからまるで彼女の返答が期待外れであったかのような雰囲気を感じられた。なまじ藤沢さんに話しかける直前までは今日の見学会においてもっとも心情が上向きに見えただけに、妙な落差のようなものが感じられる。

「お前、名前は何という」

「……藤沢レナです」

「藤沢、か。私はライル・フランシス・エルトニアだ。邪魔をしたな」

本来ならば腹違いとはいえ姉と弟の会話だというのに、このよそよそしさだ。ライル殿下が藤沢さんの正体を知らないだろうから仕方がないのだけど、僕とレシルの関係とよく似た境遇であるからか、見ていると非常にモヤモヤとする。

トロス卿を含めた見学者の面々がいつの間にかライル殿下と藤沢さんの会話に耳を傾けている中、彼女にもう用はないといった様子でライル殿下は僕の方へと戻ってきた。彼の顔は結局実験室に入るまでと変わらない、無表情でつまらなさそうな様子へと戻ってしまっていた。

「すまない。少し手間を取らせた」

「いえ、構いません。ただし実験室は細心のリスクマネジメントを行っていますが、それ

でも危険な物等がありますのでくれぐれもご注意ください」

一応ライル殿下にくぎを刺してみても、特に反省したり腹を立てたりする様子もなく、ただ淡々とした様子で見学者の一団に戻ってきた。

「それでは次に本校舎の設備についてご説明します」

ここでライル殿下の目的が掴めるかと期待をしていたが、彼の取った行動の中で特出するようなのは精々結局藤沢さんと二三言葉を交わした程度。結局何も分からず仕舞いのまま、視察団を引きつれて実験室を後にするしかなかった。

* * *

「本日は長らくお付き合いいただき、ありがとうございます」
「我々こそ急な申し出の中、案内を感謝する」

授業風景、研究フロア、新校舎の施設等々。通して説明するには少々過多なものではあったが、正午を過ぎる前に無事粗方の紹介が終わった。

「貴校の技術面の革新さは当初から聞き及んでいたが、教育の行い方にも新しさがあった。母校から講師数名を連れてくるべきだったよ」

「本学がエルトニアに進出したのは、科学を単なる新しい技術だけでなく教育としても

見て欲しいという意図があります。皆様に視察をしていただくことも、我々にとっては非常に重要なことなのです」

いたく満足した様子でトロス卿と川崎さんが握手を交わした。商業大臣という肩書からしてエルトニア国民の教育事情については門外漢なのだろうが、それでもここまで話に引き込めたというのは上々だ。この見学会が電撃開催だという事実を除いたならば、本学としては何も不満は残らないだろう。

しかし僕個人としては現状だとわだかまりが残る。この見学会で川崎さんと共に司会を務める中で、終始不明なままの謎のおかげで随分と精神的に疲れてしまっている。そしてそれは見学会の閉幕である今も変わらない。

「私からも礼を言わせてもらおう。今日の見学会は、私にも皆にも非常に良い経験になった」

未だに表情が読み取れない青年が、この見学会の最中ずっと肩の重石になり続けている。見方によっては常に冷静沈着で我を崩さないようにも捉えられるが、それにしただってライル殿下は見学会を通して浮き沈みが少なすぎた。

今も淡々とした様子で閉会の挨拶を述べているが、そんな彼が主導となつて今回の見学会を無茶言つてねじ込んだのだから不思議な話だ。先日レシルと会つていた時に遭遇したときのライル殿下の様子から、もしかしたら見学会を口実に何らかの問題を起こ

しに来たのかと思えば、別段そういうわけでもなく。

「それでは、今日の見学会を終了させていただきます。夏に行われる本学の中間報告会も振るってご参加ください」

川崎さんの挨拶と共に、見学会に参加した役人から拍手が鳴り響いた。隣で参加者に対して深くお辞儀をしている川崎さんと同じく、僕も頭をペコリと下げた。

結局ライル殿下は何かをしでかすこともなく、見学会は何とか終了した。エルトニア王国立魔法騎士学園の正門に続く道へ歩き出すトロス卿の後には、他の役人たちも何らかの会話をしながら続いていた。

「平塚さん。本日はお疲れ様でした。無理を言って協力をお願いしてしまい、すいません」

「いえ、紹介する内容は僕たちのホームグランドですし、そうなれば若手の僕が司会を行うのが当然です。川崎さんもお疲れ様でした」

未だにライル殿下を含む数名の参加者は正門方面に向かわずに新校舎の外観を眺めている。この建物は学園区の他の建物と比べてそんな変な見た目ではないだろうが、逆に外観と内装の差が激しいから不思議に見えるのかもしれない。

「それでは上部に報告をします。後の処理は私たちにお任せください」

ペコリと一礼をした川崎さんは、近くに控えていた黒服のエージェントっぽい人を数

名引きつれて新校舎の中へと戻っていった。さつきまで常に少なくない人数を引きつれていたから、周囲に人が居なくなつて少しだけ安心をする。坂道を歩いて去つていく見学者たちを見送りつつ、ゆっくりと深呼吸を行う。

ふと腕時計に目を向けてみれば、やつと正午を回つたくらいか。平塚先生に緊急ヘルプを頼まずに済んだし、何事も問題は起こらず、川崎さんから聞かされていた通りの時間に無事見学会を終了出来た。数日前にいきなりこの見学会の予定を聞かされた時はどうなるものかと不安に思っていたが、終わってみればなんてことはなく、立場が強い位置にいるトロス卿を満足させることが出来たし成功と違って差し支えはないだろう。

「ラボに戻ろっかな」

とりあえず藤沢さんや他の学生達に無事終了出来たと知らせに行かなければならぬ。僕や川崎さんだけではなく、こんな事態の中でも普段とあまり変わらない様子で実験室にいてくれた人たちも、今回の見学会における立派な功労者だ。新校舎のメンバー全体に送られた電撃見学会の知らせに肝を冷やしたのはみんな一緒だ。

伸びをしながら新校舎の自動ドアへ向かおうとしたその時、背後に誰かが近づく気配がした。

「待てフォルガント。いや、今はヒラツカだったな」

「……ライル殿下。どうしましたか」

振り向いてみれば案の定。高い背丈から見下ろしてくるのは、赤紫色の髪の毛を風で揺らしながら気だるげな様子で佇むライル殿下だった。取り巻きの役人や引きつれておらず、護衛の騎士さんは僕たちから少し離れて佇んでいる。そんなわけで僕は今日初めて一対一で彼と面と向かって相對していた。

「なに、単に挨拶をしに来ただけだ。先日お前が教師と聞いて何の冗談かと思ったが、今日の様子では冗談ではないのだな」

「……ええ、まだ新人ですがね」

今日の見学会の最中ずっと警戒をしていたからだろうか、なんとかリラックスをしようとしてもライル殿下への警戒心を解くことが出来ずにいる。

「お前が案内人を選ばれるのは驚いたが……まあその方が都合が良かったのかもしれない」

「えっ……それはどういう……」

含ませるような彼の言葉に思わず一步前に詰め寄ろうとしたが、ライル殿下は僕の質問に答える気はないと言わんばかりに踵を返した。

「……嘘を嘘と見抜けなかったのか、それとも嘘じゃないのか、結局分からず仕舞いだ」
思わず伸ばした手は当然のように空を切り、ライル殿下は騎士さんを伴って坂道を登る役人たちの後を歩いて行った。去り際に小声で呟かれたその言葉は辛うじてにしか

聞き取れなかったけれども、間違いなく今日の見学会で一番本音が表れていて、少しだけ寂しげな響きを伴っていた。

* * *

ライル殿下が公式に国立東都工科大学のエルトニア計画に対して否定的な声明を出したのは、この見学会から一週間後のことだった。

第八話 「観戦!! 異世界学園の祭典」

その1

日本とエルトニア。どんなに長い距離を移動しようが決して辿りつけない隔たりを持つていた二つの国は、エルトニア大学計画の参加者限定とはいえ今やマイクロバスの定期便で行き来できる間柄にある。よく人が神隠しにあうとかいう曰くつきの場所で、精々が荷物を少し離れた場所に送る程度でしか使われない転移魔法を、有りつ丈の魔石を用いてあるうことか自分に掛ける。文字通り自分の人生を掛けて行った一世一代の覚悟と同等の成果が、今じゃバスの中で景色を眺めながらボーっとしているだけで得られるのだから良い時代になったものである。

手元にはタブレット端末とまだ冷たき十分のお茶。イヤホンでゆったりとした音楽を聴きながら、後ろに人が居ないため座席を限界まで後ろに倒す。エルトニアや最愛の妹との今生の別れを決意していた当時と比べるとエライ環境の違いである。

大月山間部の関所を出てから十分少々。ゲートのこちらも向こうも山間部には変わりがなく、世界を隔てるトンネルを越えた道の両脇は緑が生い茂る風景へと変化をしていった。春も中ごろを過ぎたエルトニアは適度に涼しくカラツとした陽気に覆われてお

り、バスから外を眺めているだけでもちよつとした旅行気分になることができる。本当は自然を散策したいところだけど、アウトドア向きの恰好でないことが残念でたまらない。

「このバスは途中下車が出来ないんだよね」

「山のと真ん中で降り立ってしようがないでしょ」

関所から少し離れたところへんは異国風の林道といった様子だし、装備がきちんとしているならば見慣れない林間の草花を眺めながら散歩をするのも悪くはないと思う。しかし隣の藤沢さんにとってはアウトドアなりフレッシュはそこまで魅力的なものではないようだ。

「こんな良い陽気なんだ。ちよつとは散歩もしたくなるよ」

「分からなくはないけど、私はあまり趣味ではないわ。そもそもアンタは予定的に無理なんじゃないの？」

木々の間を抜けると、青々とした草原がバスの周囲に広がる。道の続く先には王都リーヴェルの街並みが聳えており、何回かは見た光景ではあるけれどもやはり素晴らしい眺めだ。海外に行ってもなかなか見れない古風な街並みが、大月から十数分バスで移動するだけで堪能できるのだから不思議なものだ。

「僕は午後から研究室入りの予定だから一応時間には余裕があるよ。まあ学園区の散歩

に留めておこうかな」

僕たちが乗っている始発から二本目くらいのバスが国立東都工科大学エルトニアキャンパスに到着する時間は朝の九時程度であり、そこから正午までは何をしようが自由なのである。春にエルトニアへやってきて一か月ほどが過ぎ、何度かリーヴェルの街並みを歩いたことがある。それでも学園区を隅から隅まで散策したわけじゃあない。王宮前の大広場や商業特区、散歩するあてはいくらでもある。

「測定データを解析するのは午後になってからで十分さ」

「そうね……後でデータの扱い方について少し教えてくれるかしら」
「お安い御用。何なりと聞いて下さいいな」

なぜこんな朝一にバスで我がホームグラウンドへ向けて移動をしているのかというと、僕と藤沢さんは前日に朝から晩まで外部で測定を行っていたからである。

各教授のおねだりが功を奏して様々な計器が揃ったエルトニア新校舎だけど、所属している全メンバーが行ないうる全ての測定に過不足なく対応するなんてことは常識的に考えて不可能だ。エルトニアでの科学教育プロジェクトには相当の資金が投じられているんだらうけど、専属のスタッフが居なければ稼働できないものや、巨大な敷地を必要にするものはいくらお金があっても保有できない。そんなわけで行いたい測定がエルトニアで出来ないのならば、当然外部に頼るしかないのだ。

ただし逆に言えばエルトニアには普段の実験で扱うような計測機器は大抵揃っている。そのため外部に行かなければならない測定は基本的に大がかりなものとなる。そしてそんなものをそう何回も行くことは無理な話だから、基本的にはある程度測りたいものをまとめてお願いする形となるのだ。

「……結局久しぶりの東京を満喫することなんて無く帰ってきてしまったわね」

「今回は東京なんてただの経由地に過ぎなかつたんだからしょうがない。それに終日やってたんだから観光する気力も湧くわけないし」

その結果が一日を丸ごとぶっ潰しての終日測定である。そうそう依頼できない外部の研究施設なのだから、ちよつとでも測つた方が良いかなと思つたサンプルを全て持ち込んで、一気に後腐れなく測定を行うのが正しいやり方なのだ。

こんな感じの終日測定はまだ本キャンに籍を置いていた時にも数回だけやったことがある。朝から半日以上外部の施設で頑張るのだから、ラボに戻つてこれるのは大方日が沈んでからとなる。しかし今の僕たちはエルトニアに籍を置いている関係で、当時よりも厳しいスケジュールとなつてしまった。

お世話になる研究施設はただでさえ本キャンからかなり離れた場所にあるのだ。リーヴェルは当然として、僕らの本拠地への玄関口である大月でもそんな本キャンからも離れているのだから、総合的な移動距離は行楽シーズンにおける一般的な旅行と比べ

ても割といい勝負をするだろう。外部測定を終えて三時間以上列車に揺られて辿りついた僕たちの前に待っていたのは、エルトニア行き連絡バスの最終便が大分前に出発したという現実だった。

「まあ今回の一件で関所に宿泊施設が付随していることが分かって良かった」

「いや、アレって一般人向けじゃないでしょ。宿直職員が生活するスペースとかそういうの」

幸運なことに大月関所へ連絡を入れてみたら迎えの車がやってきて、駅構内以外ほとんど真っ暗な大月駅前で立ちつくす僕と藤沢さんを関所の方まで回収してくれたのだ。日付が変わる前に布団の中に潜れたことに感謝をしてもしきれない。

話し込んでいる内にエルトニアの検問所に辿りついたようだった。現代日本基準で十分舗装された道路から整ってはいるけれども石造りの街道に入れば、当然タイヤから伝わる振動は激しいものとなる。

検問所で一時停車をして簡単に兵士から見回りを受けた後は、以降徐行運転でリーヴェル内部の街道を通ってエルトニア校舎に向かうことになる。このバスが定期通行することになって初めの内は街の住民からかなりの注目の的となっていただろうことは想像に難しくないが、今ではそこまで人だかりができずにチラホラと通行人の視線を集める程度だ。定期便を走らせるうちに、彼らも少々風変わりな乗合馬車程度としか思わ

なくなつたのだろう。

通行人からの刺すような大量の視線を感じないと分かると、こちらも気兼ねせず景色を楽しむことができる。初めてこのバスに乗ってエルトニアへやって来たときは目を伏せていることが多かったが、こうしてバスから見える風景を眺めていると遠く離れた場所まで来てしまったのだとしみじみ思う。自分自身が厳密にはエルトニア人であるのに変な話だ。

平塚先生と人生を分けてから十一年もエルトニアに住んでいたくせに、現代日本で六年程度生活するうちにすっかり価値観が日本の物に戻ってしまったことを実感する。ガラス越しに見えるのは立ち並ぶ簡易商店や誇らしげに聳える大聖堂——そして遠くで様々な建物を見下ろすようにして立ちかまえる王宮の姿も否応なしに目に入ってきた。

「……はあ。見たくないモン見ちゃった」

「ええと……ああ、なるほど」

王宮の姿を視界の端っこへ入れただけで、折角忘れかけていた事柄をすっかり思い出してしまった。どこことなく行楽気分でのほほんとしていた脳内が、完全に台無しとなつてしまった。隣にチラリと視線を移してみれば、藤沢さんも深くため息をついて眉間にしわを寄せている。このタイミングで思い出させてしまうなんて、悪いことをしてし

まった。

「……ゴメンね。思い出させる気はなかったんだけど、つい」

「まあ分からなくもないわ。例の声明が出されたのが直々に案内したその一週間後だもの」

* * *

電撃的にエルトニア新校舎の見学会が行なわれたのが今から二週間程度前のことだ。新校舎が本格的に稼働をし始めてから初めての対外向けの見学会という大事なイベントで僕が司会者に抜擢されたのは、ただ単に若手だからなどという理由ではないはずだ。生まれの関係上エルトニアに関する知識が全ての職員の中で一番豊富なのだから、客観的に見てもエルトニアの重役たちを案内するという大役を任せるにはこれ以上ない人材だろう。

当日の説明は全てが予定通りに進行し、参加者の半分近くに本学へプラスのイメージを抱いてくれた。ライル殿下をはじめとするもう半分のメンバーが不自然に静かであったのが気にはなったが、終わってみれば突貫で行われた見学会にもかかわらず何も問題無く終わった。そう、少なくとも僕や川崎さんを含めた日本側から見たら、今回の

見学会は問題など起こらずに閉幕できたはずだったのだ。

ことが動いたのはそれから一週間が過ぎた日のことだった。急な見学会もすっかり後の話で、研究グループのメンバー達はいつも通りの様子で各々の研究に勤しんでいた。偉い人たちの先陣に立って歩いた僕でさえ、その時は見学会のことなどとうに頭から抜け落ちて日常の実験生活へと落ち着いていた。

藤沢さんや他の教授の下についている学生たちにどんな学会を勧めようかなあなんて考えながら、計測器の前でデータの整理を行う。そんな春も中旬を過ぎた実験日和のエルトニア新校舎の研究フロアの中に、知り合ってから初めて見る焦った様子の川崎さんが急ぎ足で入ってきたのだ。普段は落ち着いた笑みを絶やさずに浮かべていた彼の顔が、そのときばかりは焦りを隠す様子がない険しい表情を作っていたのを今でも鮮明に思い出せる。実験室に入って僕の姿を見つけた川崎さんは、何が起きたのか分からず立ちつくす僕の方へかなりの早足で近付いてきてこう言った。

——先の見学会についてお聞きしたい事があります。

なぜ一週間も経ってからこのようなことを聞かれるのだろうか。もしかしたら見学会について上に報告する際に何か情報が足りないのかもしれない。こんな風に最初は報告等の不備を埋め合わせるためにこちらへ訪ねてきたのかと軽く考えていたが、川崎さんの真剣な表情を見ている内にことの深刻さを薄々と感じ始めた。

ちょうど隣にいた藤沢さん共々有無を言わさない様子の彼に手近な会議室へ連れられ、開口一番に川崎さんはこちらの度胆をぬくことを言ってきたのだ。

「先に述べさせていただきます。ライル殿下が国立東都工科大学に対して否定的な立場を示しました」

「否定的って……今になってですか？」

むしろ今までは否定的な立場じゃなかったのか。レシルと会っていた時に相対した彼の姿を見るに、坊主憎けりや袈裟まで憎しかどうかは知らないが、日本人と大学の双方に好感を持っていないのは明らかであった。怪訝そうな表情を隠そうともしない僕や藤沢さんの様子を前に、川崎さんは首を傾げた。

「もしかして、お二人共彼とは既に面識があるのですか？」

「ええ。先日妹と会っている時に少々。その時にも感じましたが、ライル殿下は明確に僕らへマイナスの感情を持っています。そんな彼が今更になって否定的な立場を表すのは……」

「なるほど……我々も彼が自分たちに反対的な態度を取っているのは把握をしています」

「じゃあ何で、という言葉がこちらから出て来る前に、川崎さんは眉間にしわを寄せて口を開いた。」

「しかしあくまでそれは個人の感情レベルの話だ。王室の一員という立場で表明するものではなかったはずだ」

「……今回は違うということですか」

つまりはエルトニアの王子という立場で、彼はこの大学の計画を批判したということなのか。入学式でスピーチを行った王女ライア殿下が大学計画の推進派であるのにもかかわらず、それに対抗しようというのはそう簡単に出来ることじゃあないはずだ。

「今までは一部の貴族が批判をしている程度だったのですが、あくまで散発的なものすぎなかった。しかし今回の一件で、ライル殿下は彼らをまとめ上げて派閥を作るかもしれない」

川崎さんは持っていた鞆の中から一枚の紙を取り出した。緊急報告書と書かれたそれには、本日の日付と共にライル殿下の発言を要約したと思われる文章が書き連ねている。

「理念に共感できない、エルトニアにおける科学の必要意義を感じない……まあ内容としてはそこまで突飛ではありません。問題なのは公的な立場で表明したことで、この時期です」

「……見学会で何かしらの切っ掛けがあったかもしれない。そういうことですか」

深く頷いた川崎さんは、メモ帳を懐から取り出した。そこまで広くはない会議室の中

で藤沢さん同伴とはいえ少数人数で向かい合って座るだなんて、まるで警察の取り調べのようだ。

「見学会当日、何かおかしなことはありませんか？　細かいことでも何でも、教えては頂けませんか」

前言撤回。警察の取り調べみたいなのではない、取り調べそのものだ。口調こそこちらに尋ねているようだが、川崎さんの問いかけは有無を言わさない尋問にしか聴こえなかった。

* * *

当日はライル殿下が自ら行動を起こすようなことが少なかったから、彼に関連する事柄も自然と限られていた。そしてその日僕と川崎さんの両名で案内役をしていたから、僕が話す内容は川崎さんも大方把握していることだったようだ。

他の視点から見た物事というのは結構重要な資料になるかもしれないが、結局は既存の情報の焼き直しに過ぎない。思い出せる範囲で見学会の様子を話したり、時折藤沢さんも当日の様子を語ったり。結局二十分少々でその取り調べは終了した。そして川崎さんが会釈をして会議室を出る間際に、辛うじて思い出した見学会最後の事柄について

伝えることができた。

「結局、あの時彼はなんて言ったんだっけ……」

見学会の終わり際に、研究室に戻ろうとする僕を呼び止めたライル殿下は、どこか憂いを感じさせる口調で何かを喋っていた。一体何を話していたのかは日が経ってしまつたおかげで忘れてしまつたが、もしかしたらライル殿下が異議表明した理由に繋がっているかもしれない。その日一番の真剣な表情を浮かべて川崎さんは凄まじい速さでメモを取っていたのが、一週間前の聞き取りでの最後の思い出だ。

「レイ、そろそろ到着みたいよ」

「あー、うん。降りる準備しなきゃね」

ずっと考え込んでいる内に、バスはどうやら目的地の近くにまで来ていたようだ。学園区の中でも最大級の広さを持つエルトニア王国立魔法騎士学園、その脇に造られた通りをバスがゆつくりと走る。通り沿いの商店には多様な制服を着た学生たちが闊歩し、流石は休日と言わんばかりの盛況さを感じられる。

タブレットをケースにしまいこみ、イヤホンをぐるぐる巻きにしてポケットへ突っ込む。学園の敷地内に差し掛かると、生徒の数は一段と増した。しかしよくよく観察してみれば、学園の正門通りを歩いているのはどうやら学生だけじゃあないみたいだ。

「お疲れ様でした。エルトニア王国立魔法騎士学園、終点です。お忘れ物の無いようご

注意ください」

バスの運転手のアナウンスに小さな笑いが出る。ここと関所、そして大月駅前にしかならず停車をしないのに終点とは大きく出たものだ。もしかしたら今後の展望次第ではリーヴェル内他の地点にもバス停を作る気なのかもしれない。

おそらく他の研究グループの職員だろうか、どことなく見覚えのある他の客へ続いて僕と藤沢さんも降車口へと向かう。たかだか三十分程度の移動とはいえ、朝起きてからそう時間も経たずにお世辞にも広いとは言えない座席に押し込まれていたのだから、体の節々が歩き出すと共に鈍痛を伝えてくる。

「いつつ……やっぱりいつもよりも賑やかだ」

「確かにそうね。学生以外にも人がいるようだし、出店なんか普段はないわ」

藤沢さんの言うとおり、正門から噴水広場に行きつくまでの通りには祭りの屋台のように小さな出店がチラホラと並んでいる。昨日の朝に外部の研究施設へ向かうためにここを通ったけど、その時にはまだこんな出店は無かったはずだ。

「お祭りか何かかなあ……学園の外は普段通りだったから、学園祭とかかな」
「ちょうど時間があることだし、少し学園の内部を見ていこつ」

一度その気になったら結構行動派である藤沢さんが、エルトニア新校舎へ向かう列から外に出て学園の方へ歩き出した。僕もそれを慌てて追いかけていく。

香ばしい匂いを漂わせる出店に意識が少しだけ向くが、藤沢さんはそれらに全く意識を向けずにずんずんと進んでいく。普段はただの通路にこんな色々な出店が立ち並び、それに群がるのは学生だけではなく地域住民もいる。まるで祭りのようだと思っただが、案外間違いいではないのかもしれない。

「懐かしいわ。まるで学園祭みたいね」

「……本当に懐かしいよ。この六年間くらい学園祭なんてあつてないような物だったし」

そのような文化がエルトニア王国立魔法騎士学園にあるかは別として、彼女が言うように確かにこの感じはまるで学園祭のようだ。懐かしいっっちゃあ懐かしいのだが、如何せんエルトニアから日本に移転してからの学生生活で本学の学園祭に欠片も関わらなかった身としては、人が多すぎて食糧の確保が難しい日という夢の無いイメージが先行してしまう。

噴水広場の更に先へ向かうのは、入学式に出席したとき以来だ。このまま先へ進めば、入学式で使用した大講堂をはじめとするエルトニア王国立魔法騎士学園の施設が立ち並ぶエリアへと繋がる。このお祭りのような雰囲気は何かは分からないけど、とりあえず人の流れについていけば何かしら分かるだろう。

——ッ!!

それにしても賑やかだ。僕らと同じ向きに進む人達の話声の他にも、噴水広場から聞こえてくる大きな笑い声や、どこからともなく響いてくる怒声やら。ここらへんは毎朝の散歩コースに含めているが、土日でこのくらいの時間だと普段はもつと人氣が少ないし静かだ。ここまで賑わっていたのは入学式以来かもしれない。

そして見えてくる大講堂。人の流れは更に学園の敷地の奥へと続いているようだ。未だに何のお祭りなのか不明ではあるが、こういつた状況の方が答えが分かっているよりもわくわくする物である。

——まてええツ!!

子供か何かと逸れてしまったのだろうか。振り向いてよく目を凝らせば後ろの方から走って近付いてくる姿が見えた。周囲の人達も何事かと少し気にした風ではあるが、こっただけ人が多ければ迷子の一人や二人も出るだろうからしょうがない。

「どうしたのかしらね」

「迷子か何かでしょ。それよりもちやつちやか先に行こう。列の先には面白いものがあるって相場が決まっているんだ」

願わくば大声の主が目的人物を確保できますように。大講堂よりも先となると、僕にとつては完全な未知のエリアとなる。レシルが魔法騎士学園を見学した時も実際に入学する予定が全くなかった僕は別所で待機をしていたから、ここより先は見たことがな

いのだ。大声に気を取られた様子の藤沢さんを急かすように歩調を速めた。

「ゴリアア!! 待てつて言つてんだろオオオツ——」

なんとも物騒なものである。迷子や逸れた仲間を見つけたならば、もつと穏やかに行くべきだ。

「——フオルガントオオツ!!」

そしていきなり怒声と共に響いてきた僕の元実家の呼び名に、僕と藤沢さん共々変な声を上げながら振り向いてしまった。金色のサイドテールをブルンブルンと震わせながら僕たちへ猛進してくる女性の姿に、追加で「ヒイツ!?!」という情けない叫び声を上げてしまったのも仕方がないことだと思う。

その2

「いやあ、驚かせてすまない!!」

大きな声で謝るは、周囲の視線も憚らずに突進してきたこの女性。藤沢さん共々硬直しながら出迎えたが、案の定人違いだったようだ。こちらに駆け寄っていざお説教をと構えた彼女であったが、服装や態度の違いから探し人違いであると判断をしたようだ。おそらく僕のような珍妙な見た目の人間と見間違えた人物は、どうせ妹のレシルティアだろう。どうやら現在本来いるべき場所におらず、絶賛逃亡中らしい。

「いえいえ。少しびっくりはしましたが大丈夫です」

「二度目の顔合わせなのに見間違えるだなんて、本当に君は私の探し人と似ているよ」
「……二度目、ですか？」

はて、二度目とは言うけれども以前に彼女と顔合わせをした記憶はない。女性の中では高身長な部類に入る藤沢さんやレシルを超える背丈で、尚且つ金髪サイドテール。知り合いにいたら流石に忘れることは無さそうな凛々しい姿であるだけに、以前会ったことがあると言われても首を傾げることしか出来ない。一応藤沢さんの方を向いてみても、軽く首をふって見覚えがないとアピールをしてきた。

「ああ、分からなくても無理はないよ。確か二週間くらい前だったかな」

「……大学見学会の時にもかかして参加されていましたか？」

「見学者としてではなく、護衛の騎士として参加していたよ。顔を合わせたと言っても鎧越しだから、君達からすれば私は初対面だ」

言われてみれば、確かに見学会の日はライル殿下を護衛しながら参加者の一団と行動を共にしていた騎士がいたのを覚えている。声が高めで妙に気さくな人であったが、まさかその鎧の中の人が目の前にいる彼女だとは驚きだ。

「では改めて。エルトニア王国白銀騎士団所属、そしてこの学園で講師もやっているエリシユナ・ノーリスだ」

「国立東都工科大学助教の平塚礼二です」

「ええと、同じく東都工科大学の学生の藤沢レナといいます」

挨拶と同時に差し出された手を握り返すが、やはり身長の高さと比例して大きな手のひらだ。そして騎士をやっているというのは伊達じゃないようで、どこことなく手の質感が硬めである。

「ところで、もしかしてノーリスさんは誰かを探している最中でしたか？」

「そうなんだよ。まったく、アイツは私の言うことも右から左に聞き流すわ、あろうことか今日この日に雲隠れするわ……」

恨みつらみとまでは行っていないさそうだけど、ノーリスさんの口からは探し人——おそらくレシルへの愚痴がつらつらと漏れ出している。人の話を聞かないなんて僕や藤沢さんと一緒にいる時のレシルの様子からは考えづらいが、一方で何時ぞやの噴水広場で男数名を蹴散らしていた時の雰囲気を考えれば無い話ではないのかもしれない。

そして今日のこの学園の盛況具合は講師であるノーリスさんや一学生に過ぎないレシルにとつても決して無関係なことではないようだ。彼女の話口から類推するに、今日行なわれているイベントらしきものはレシルも何らかの役割が与えられているのかもしれない。そうなれば、急にいなくなってしまったというのは少々どころでは無く問題だ。

「せっかくだから君たちにも聞いておこう。私の探し人は君と非常によく似た女子生徒だ。見た目は髪の長さや服装以外ほとんど君と同じで……家名は違うが、まさか兄妹か何かかい？」

質問の最初と最後で内容が異なっていることに小さな苦笑いが自然と顔に浮かんだ。やはりここまで見た目が似通っていれば、ほとんど初対面に近くても兄妹を疑われるくらいに僕とレシルはそっくりさんということだ。しかしそんな妹の居場所については生憎全く分からない。毎週末に顔を合わせているとはいえ、それは日本というところの日曜日である。そして今日は土曜日で、一緒に出掛ける予定は入っていないのだ。

「あの、確實という訳ではないですが、居場所に心当たりがあります」

レシルとの関係は適当にはぐらかしつつ見かけてないよと答えようとした横で、意外にも藤沢さんがそんなことをポソリともらした。

「その前に一応……レシルちゃんは明日外せないような予定とかが入っていますか？」

「ほう、君たちはフォルガント君の知り合いか。外せない予定……まあ確かに入っているな」

なるほどと小さく頷く藤沢さんは、確かに何かしらの情報を握っているようだった。しかし実の兄が知らないような事情を知っているというのは、なんだか負けたような気がして堪らない。

「もしかして本当になんか知ってるの？」

「うん、さつきも言ったけど確証はないけれどね。ノーリスさん、少々お時間よろしいですか？」

「構わないさ。やみ雲に探しても良い結果は得られそうにないからな。時間にもまだ余裕はある」

「ではこちらへどうぞ」と先導しだした藤沢さんの歩き出す先は、意外にもノーリスさんが走ってきた噴水広場だった。外部から訪れる人たちとは完全に進行方向が逆であり、僕とノーリスさんが共々首を傾げた。もしかしたらレシルとの待ち合わせで時折使

うコーヒー一杯千円を超える隠れ家カフェに向かうのだろうか。

「フジサワ君、といったか。ついさつき噴水広場を隈なく調べたときは彼女の姿は無かったんだが……」

「いえ、目的地はそのさらに先です」

確証はないと彼女はいうものの、その足取りは言葉の割に随分としつかりとしたものを感じる。その自信はどこから来るのか分からないが、とりあえず行き当たりばったりではないという安心感があった。

歩くこと数分。学園の奥へと向かう人の流れに逆らって噴水広場を通り抜けた後、つつきりそのまま学園の敷地を出てどこか別の場所に向かうのかと思えば、進行方向はまったく別の場所であった。先ほどの賑やかな様子から一変して、ほとんど行人がいないならかな下りの坂道。ノースさんは知らないが、僕と藤沢さんは割と歩きなれているウチの大学校舎に向かう道だ。ここまで来たら流石に目的地は新校舎以外の何物でもないはずだろう。

「私たちはほぼ毎週末にレシルちゃんと会っているんです。だからつつきり今週も普段通り明日にどこかで落ち合うものと考えていました」

「そうなのか!! あいつにも気心知れた仲がいるのは良かったよ。しかし明日はフォルガント君と出かけるのは、時間にもよるが難しいぞ」

本学のエルトニア校におけるカルキュラムにおいても、土曜と日曜は授業が完全に休みとなる。そのため新校舎へ向かうこの下り道にはエルトニア人の学生すらおらず、目的地が近付くにつれて先ほどの喧騒が嘘のように思えるほど静かになっていく。

「先週会ったときにレシルちゃんも予定が塞がっている旨を私たちに伝え忘れています。だから……やっぱり」

藤沢さんが指し示す先は、ようやく全体像が見えてきた我が本拠地だ。遠目に見ても立派な建物と分かる新校舎、その正面口近くの段差に腰かけている銀髪頭が太陽の光を反射してキラキラと光っているのが目に入った。

「レイ、早くいってあげなさい。多分レシルちゃんわざわざ明日は会えないってこつちまで伝えに来てくれているんだから」

藤沢さんに言われるまでもなく、自然と歩調が早くなる。基本的に入講証を持たない人はセキュリティの観点から常にカードロックがかかっている新校舎の入り口を開けることが出来ない。無論大学計画に関しては全くの部外者であるレシルが入講証を持つていないはずがないが、入ることができなかった彼女は立ち去るわけでもなく新校舎入口の前に体育座りで佇んでいた。

藤沢さんの言うとおりに、律儀にこちらの校舎に赴いて予定の旨を伝えに来てくれたのだろうか。そんな彼女を一人ぼっちで待たせて学園の散歩に行こうとしていたと考え

ると、胸の内に罪悪感が沸き起こった。

「レーシールー!! 待たせてゴメン!!」

「……やつと会えた。おはよう兄さん」

座り込んだレシルに手を差し伸べ、彼女も何のためらいもなく僕の腕を掴んで立ち上がる。意図せずとは言えども彼女をほったらかしにしていたけど、そんなレシルは不満げな表情を欠片も見せずに屈託のない笑顔を僕へと向けていた。

「先週言い忘れてたことがあったからこつちに来たんだ。兄さんに会えて良かった」

「ふむ。それって明日レシルが僕らと会って話すのが難しいってことかな」

軽くスカートの裾をポンポンと叩いて砂埃を落としているレシルは、何気ない感じで切り出した僕の言葉に一瞬間を置いて驚いたような仕草を見せた。

「あれっ、なんで兄さんがそれを知っているの?」

「——それはなあ、私が教えたからだ。まったく、こんな所にいたのか。庭園を周囲を探しても見つけれないわけだ」

藤沢さんに連れられて、新校舎の見た目を見物しつつ呆れたようにノーリスさんが話す。僕の背後に居る彼女の姿を視界に入れたレシルは、次の瞬間には露骨に他人行儀な表情を浮かべていた。

「ノーリス先生。ボクは今日出番が無いはずですよ。少しくらい見逃してくれません

か。こつちも限られた時間から捻出しているんです」

「馬鹿モン。明日に備えての軽い訓練とか、同級生の応援に少しくらいは参加をしろっ」
途端に令嬢モードに変化をしたレシルに相對するノーリスさんは、怒り少々に呆れ多数といった様子で大きなため息をついた。レシルのことだからノーリスさんの前では僕たちには向けないような冷たい態度を多く取っているのだろうが、彼女の目の前でさつきまでにこやかな様子で僕と会話をしていた直後にその態度に戻したのは、ある種滑稽な光景かもしれない。

しかしレシルから断りを入れてくる、前日から訓練を必要として尚且つここまで街の住民が訪れるイベントとは何なんだろうか。ただそもそも魔法騎士学園という立地上、なんとなくだがイベントの本身は想像ができなくもない。

「明日戦う相手が相手なだけに、生半可な心意気でなんとかなるわけがない」

「……戦う、ね。なんとなく想像が出来てきたわ」

説教をする教師とそれを適当に聞き流す生徒。そんな光景を一步離れたところで眺めていた藤沢さんも、なんとなく内情を察したようだ。

「あの、すいません。レシルが明日予定があると話していますが、それっていわゆる闘技大会というのですか？」

「なるほど。ヒラツカ君は我が学園についてそこまで明るくなかったな。君の言うとお

り、今日と明日で選抜学生対抗の闘技宴だ」

大方僕と藤沢さん共に想像通りといったところか。日本で言うところの体育祭に相当するものだろうと判断をしているが、それ目当てにここまで人が集まり屋台まで出るというのは凄いことだと思う。流星はエルトニア王国でもトップレベルにあると言われる騎士の養成学園だ。

「ちようど良い。君たちも明日予定が開いているならば来るといい。こいつのせつかくの晴れ舞台だからな」

日曜日なんて普段から空けているし、最初からレシルと会って話そうと予定をしていたから時間的な余裕は存分にある。そもそもたった一人の妹の晴れ舞台なのだから、観に行きたくないわけがない。

「ぜひ明日観戦させていただきます」

「私も行くこうと思います。レシルちゃん、観に行ってもいいかしら？」

完全に乗気な僕たち二人の姿は、レシルにとつても喜ばしいことのようにだ。ノーリスさんの眼前ということもあり、レシルは一生懸命表情を固定して露骨に嬉しさを前面に出すのは控えているようだが、それでも口端が僅かに上向いているのは隠しきれない。

「ええと……うん、来てほしい。二人が来てくれると、ボクはもつと頑張れる」

「フジサワ君と、詳しい事情は聞かないが兄まで来てくれるんだ。明日良い試合をするために、今からでも出来る事をするべきじゃないか」

「なんだか僕と藤沢さんが都合よく彼女のモチベーションとして使われた気がしないでもないが、それでレシルのやる気が向上するならば特に不満に思うこともない。何度か僕たちの顔を見回したレシルは、ようやく諦めたように苦笑を浮かべた。

「……明日に備えて今日はもう戻るね」

「試合楽しみにしてるね。悔いが残らないように準備をするんだよ。そして明日は終わった後はみんなで何か美味しいものでも食べに行こう」

「向かい合わせになってポンポンと肩を叩きながら僕なりの激励を伝えた。こういう場面では絶対に勝てだとか、本気を出しきるとか、そういう重たい応援は好きではない。観に行くよ、という言葉だけでも相手を勇気づけるには十分なのだ。」

「二人共、さらばだ!! さあ戻って訓練だ。準備を怠れば不甲斐ないところを見せかねないぞ。ライル殿下相手なのだからな」

「そんなことは前から分かっている。じゃあ兄さん、レナさん、また明日!!」

「早足でもと来た道に戻るノリスさん、そして彼女の後を半ば吹っ切れたように歩いて続くレシル。ブンブンと手を振る彼女に対して、なんとか表情を強張らせずに手を振り返せた自分は、想像しているよりも中々に隠し事が上手いのかも知れない。」

ライル殿下。先日の見学会に参加をした直後に、大学計画へ批判的な立場を取ったこの国の王子。見学会当日に僕と共に案内役を務めた川崎さんの様子を考えるに、今後の大学の運営に影響をきたすかもしれない。現状であまり聞きたくない名前といえそんなライル殿下の名前が間違はなくトップに居すわっているだろう。どうしてそんな人物と、こういう場面で関わり合いになるのが不思議でたまらない。今更帰り道を行く彼女達を呼び止めてまでやはり明日は観に行けないなどと言う気はないが、それでも手放して楽しみなわけでは無くなったのも事実ではある。

「……嫌な巡り合わせだよ」

「本当、なんだかついていないわね」

ため息を吐きつつ、ポケットからカードキーを取り出した。確かに妹の晴れ舞台を観に行けるのは嬉しいけど、無論手放しに喜べる状況でもなくなってしまった。まだ研究室へ戻る予定の時間よりは大分早い、あまり周囲を散策しようという気分にはどうしてもなれそうにない。

その3

十年近くのブランクがあつたとはいえ、子供の時から混雑の聖地である東京住まいの身だから人の群れの中を進むのは慣れた話である。混雑した駅や車内で鍛えられた感覚を駆使して、行きかう人の中をぶつからないようにしてひよいひよい進むのはそこまですごくはない。

「あ、すいません……レイ、もうちよつとゆっくりお願い」
「ごめん、少し早足過ぎたかな」

しかしここ数年は大学付近に住居を構えていたため満員電車とは縁がなかった藤沢さんは、この人混みを割って進むのに大分苦勞をしているようだ。腕がぶつかった人に頭を下げる彼女の顔にはげんなりとした表情が張り付いていた。

少し息が上がっている藤沢さんのために歩くペースを落とし、ついでに彼女の腕から荷物を数点受け取った。小さなハンドバッグは普段から持ち歩いているようだから良いとして、昼食を食べた直後だというのに屋台で買った軽食もついでに貰う。鶏肉のサラダを薄生地で巻いただけのものだけど、お祭りの中の屋台というものは彼女にとって不思議と寄ってしまいたくなるものらしい。

「ありがと……それにしてもかなり混んでいるわね」

「今日は昨日よりも集客効果は大きいからね。噴水広場の時点で人の列が形成される程だもの」

先日の朝にレシルと遭遇したときも学園構内は闘技宴を見物しに来た人々で結構な混雑っぷりだったが、今日はそれを超えた人の入りだ。新校舎付近は閑古鳥が鳴いているといいうのも相変わらずではあつたけれども。

「殿下の雄姿はもはやお金が取れるレベルなんじゃないかな」

今日の学園がここまで混雑している理由は唯一つ。闘技宴の二日目にある一大イベント、ライル殿下の模擬決闘戦が予定されているからである。この人混みの中でひとたび耳を澄ませば、殿下がどうかという話が簡単に聞こえてくる。

「それで、その対戦相手がレシルちゃんか。彼女も随分な大役を押されているわね。それだけ実力が認められているのかもしれないけど」

「まったくだよ。ほら、あれとかさ。なんだあの煽り文句は」

やつとこさアリーナの観客席に辿りついて、さてどこに移動しようかと思渡してみれば、立て看板を掲げて大きな声で何かを喋る青年達の姿が嫌でも目に入った。ふらりと近付いた他の見物人が銅貨のような物を支払い、青年達の一人が代わりに小さな紙切れを渡す。

おそらくスポーツくじ、言葉を変えれば簡単な賭博なのだろう。日本ならば私設でこのような賭博行為を働くのは法令に触れかねないが、ここまで大っぴらにやっている辺りエルトニアじゃあそういうわけでもないのだろう。いつもならば特に気にも留めない光景だけど、彼らが掲げる看板に書かれた煽り文句がどうにも癪に障る。

「紅焰の貴公子と氷銀の魔女、ねえ。彼はまあ良いとして、レシルちゃんにまでこんな二つ名があるだなんて」

「気に入らないよ。以前学園の生徒数名とレシルが言い合いをしている現場を見たことがあつてね。その時に妹はその名前で吐き捨てられていた」

氷銀の魔女という響きは確かに格好いいけど、どちらかといえど敵対している相手へ使うような呼び名に聞こえてならない。そもそも人の妹を捕まえて魔女とはなんだ。この二つ名の下に書かれている数字は恐らくオッズだろうが、ライル殿下と比べてレシルが結構高い値となっていることも苛々を加速させた。

この闘技宴に出場しているのは全てがエルトニア王立魔法騎士学園の生徒である。自分の学校で開かれている模擬戦なのだから本来アウェイやホームなんて概念は存在しないはずだ。だが蓋を開けてみれば、多くの観客たちの注目はライル殿下へ向いてしまっている。これじゃあほとんど敵地も同然だ。

「本当、まるでアウェイね。聞こえてくる会話が殿下がどうかばっかり」

「僕は空気を読む気はないよ。遠慮なくでつかかな声でレシルをでつかく応援してやる」丸い闘技場をぐるりと取り囲む観戦エリア、その最前列へ中途半端に空いたスペースに藤沢さん共々もぐりこむ。ここからならばもしかしたら応援の声がレシルに届くかもしれない。

「それにしてもよくもまあ学園の行事でここまで人が入るものね。今日はまだしも、昨日もかなりの人が押しかけていたようだし」

「数少ない娯楽なんだろうね。テレビや映画なんてものはないから、こういう場を楽しみにしている人は多いはずだよ。それにプロじゃなくて学校主体の大会は甲子園をはじめとしてこっちにもたくさんあるさ」

学会などの用事で海外の大学へ赴いたときに、その大学保有のスポーツ施設が目に入る機会があった。実際に人の入りを見たことはないけれど、競技によつては観客十万人越えなどという、プロの試合顔負けの動員数を誇ることであってあるのだ。ただ現地に行つた時はいつも生憎都合が合わず、学生対校の試合というものを自分の目で見たことはないというのが残念ではある。

大学対抗の野球やアメリカンフットボール大会について藤沢さんに話してみると、彼女にとつては新鮮な話だったようで興味深そうに頷いている。見るからに西洋人なナリな藤沢さんだけど、幼少期に日本へ迷い込んでからずっと孤児院暮らしが続いていた

のだから、海外の大学スポーツ事情なんてそんなに詳しくはないというのも納得である。

そんなこんなで雑談をすること数分。観客席のざわつきが一段と大きくなり、時折近くを通る売子の子の声が完全に隠されるくらいの歓声がアリーナの一点から鳴り響いてきた。

『定刻となりましたので午後の試合を始めます』

淡々としたナレーションとは裏腹に、一度火がついた観客席の歓声はより全体に広がり、大きな物へと変化していく。

『呼ばれた選手は入場して下さい。紅組、ライル・フランシス・エルトニア』

その名前が指名された途端、ただでさえ大きな声援がゲリラ豪雨のような迫力と轟きを持ってアリーナを包み込んだ。思わず顔を顰める超大音量の中じゃあ、隣で僕と同じく巨大な歓声にやられかけつつ何かを話しかけてくる藤沢さんの声なんて聞こえやしない。

ちようど僕たちが位置する場所とは反対側の入り口から人影が出てきた。いつの間にか拍手と共に連呼されるライルの名前、そしてその野太いコールを彩る黄色い歓声。右を向いても左を向いても皆が声援を向けるその人影は、日の光が彼の鮮やかな赤紫色の髪の毛を照らしだすと同時に、片腕を軽く振りあげた。ただそれだけなのに、今日一

番の大ききの拍手と歓声がこれでもかと言うほど響き渡った。

「うわっ、これはまた随分フランクな挨拶ねえ。まるでアイドルよ」

「……まああながち間違っちゃいないだろうさ。声援の大ききつたらすごいモンだ」

時折テレビでアイドルグループのライブ中継等が流れている時がある。あの一体となった声援をさらに増幅したら今の状態になるんじゃないか。紅いラインが所々に裝飾された白い革を基本とする、随分とまあお洒落な格好だ。歓声を全身に浴びつつアリーナ中心部へ向かって歩き続けるライル殿下の不敵な姿も、背中に背負った剣がなければなんとなくワイルド系と言われるタイプのアイドルの登場シーンに見えないこともない。

男の僕から見てもかっつけえなあと思うのだから、そりゃあもう女性人気が高いに違いない。現に今も近くにいる若い町娘と思われる一団が、彼に聞こえるわけもないのに一斉に黄色い歓声を飛ばす。ただ隣でどこかげんなりしたまま表情を変えていない藤沢さんは、まあ身内補正というものだろう。

『続いて白組、レシルティア・フォルガント』

「ウオオオオアアアッ!! レシルー!! ここだー!!」

「えっ、ちよつとアンタ何やってんのよこのバカッ!!」

周囲が未だライル殿下へ向けられている惜しみない歓声に負けないう、身振り手振

りを交えて大きな声を上げて叫ぶ。未だレシルの姿がアリーナに見えてはいないが、名前を呼ばれた瞬間について反射的に行動へ移してしまった。ついでに藤沢さんが持つウチワの一撃も反射的に僕の頭へ炸裂したようだ。小気味良い乾いた音が響いているが、当たった場所が縁じゃなくて本場に良かった。

「いきなり何すんだよ。酷いじゃないか」

「……まあ周囲が相手方一色だから気持ちからは分からないでもないけど、周りの歓声にかき消されてなかったら今頃私たちは晒し者よ？」

悪目立ちしたくない、そんなことを普段藤沢さんは口にするのがあまりない。どうしたのだろうかと頭を傾けること数秒、どうやら分かりやすい例えが頭の中に浮かび始めてきたようだ。

場所は関西の某屋外球場。見わたす限り縦じま模様で埋め尽くされた外野スタンド。独特の覇気に燃える人海に掲げられた戦旗に揺らめくは、当然例の猛虎フェイスだ。眼前には金字で『獣王無敵』と書かれた黒Tシャツに腕を通すスキンヘッドのおじさんが大声で先発投手の名前を叫ぶ。そんな中出てきた轟員のチーム、周囲からすれば敵の一番バッターにでつかかな声援を送る。こりやあ怖いしさらし者にもなる。

「……すごい危ない橋渡なことをしていたようだね。気を付けるよ」

「多分すごく大袈裟な妄想していたようだけど、ともかくこういう場で無暗に騒ぎ立て

ないことよ」

そんな馬鹿馬鹿しいやり取りをしている内に、レシルの方もアリーナへ姿を現したようだ。アリーナ中央で一人佇むライル殿下がふと一点を見つめ続け、にわかには彼へむけられていた歓声が萎んでいく。明確に変わった空気を全身で感じながら、身乗り出して僕たちがいる観客席の真下を注視した。

「レシルだっ」

「わ、私も見る!!」

直前にあんなに目立つなど言っていた藤沢さんも、僕と同じようにアリーナの手すりから少し身を乗り出した。無骨な砂色の地面に現れる、純銀の長髪。完全に殿下の領域となっていたアリーナへ進み出る足取りは臆するような雰囲気は感じさせず、むしろ自然なほど淡々としている。一歩進みでるとともに轟音のように鳴り響いていたはずの歓声が徐々に萎んでいく様子が、どこか爽快でありながらも不思議ともの悲しさも感じさせた。

「なあ、あの銀髪の少女が殿下の対戦相手か……?」

「フォルガントって、あの侯爵家の……」

まるで季節が変わったかのようだった。別に彼女が一步歩くごとに足元へ霜が生えるだなんて事態にはなっていないし、冷たい吹雪も吹き荒れてなんかいない。でも真夏

のように熱気にあふれていたはずの空間は、深い冬が訪れたかのように妙な緊張感が降りてきているように感じられてならない。

いつの間にかさつきまで殿下に大歓声を挙げていた周囲の観客たちも、僕らと同じようにして客席の最前列に張り付いて眼下の光景に食い入っていた。白を基調としながら、ライル殿下とは対照的にライトブルーのラインが走る厚手のローブを身に纏ってアリーナ中心部を目指すレシルティア。不思議なことに目を凝らしてみても刀剣を所持しているようには見えないことも、アリーナ中央で待ち構える殿下との差異を深くしていく。

「——ライル様っ!! 頑張れー!!」

時間にしてはわずかだけど、それでも先ほどまでの喧騒と比べて異様なほど静かな空間となっていた観客席。それを元に戻そうとするがごとく、近くにいた町娘の一団が大きな声で殿下への応援を再開した。そしてあつという間に観客席が元の雰囲気へと戻っていく。凍りついた地面が一気に解凍されていくように、町娘軍団を起点として歓声が再び沸き起こっていった。

『それでは個別技能戦第十試合を始めます。両者、礼』

いつの間にか向かう会って並び立つ二人の騎士。片や儀礼風とはいえしつかりとした鎧をまとい、背に長剣を背負った赤紫の騎士。片や遠目に見ても軽装と分かる装備

の、どこに剣を持っているかも分からない白銀の騎士。

「殿下!! 負けんなっ」

「そうだつ、そんなひよつ子叩きのめせつ!!」

観客たちの無遠慮なヤジにも彼らは顔色一つ変えない。当然だ、アリーナの入り口ならばまだしも、観客席から結構離れた中心部じゃあ個人の発言なんて聴き取ることは出来やしない。

淡々としたナレーションに従い小さな礼を互いに向けた二人は、くるりと振り向いて数歩進んだ。ちょうど来た時とは反対方向、観客席の方へと向き直ったレシルは、普段僕たちには見せない無機質な表情を浮かべたまま、視線をやや上へと向けた。

「チツ……あいつら好き放題言いやがって……」

すぐ隣から物騒な呟きが聞こえてきたが、僕も概ね同じ感想だ。周囲の多くの観衆が、殿下にレシルが倒されることを望んでいる。王都リーヴェルという都市の中央に王宮を構える土地柄、殿下を応援する人が多いというのは分からなくはないし、そういった人々の応援を否定する気もない。だが自分の応援を周囲に合わせる気なんて、僕も藤沢さんも端つから持ち合わせちゃあいないんだ。示し合わせたわけじゃないけど、藤沢さん共々目一杯息を吸い込んだ。

「レシルちゃん、負けるなアアアア!!」

「レシルッ!! 思う存分やり切れエエ!!」

幸か不幸か、ちょうど応援の切れ間に二人揃って喉をぶっ壊しかねないもの凄い大きな声で声援を送ったせいか、思いの外僕らの声がでっかく響き渡ってしまった。周囲の人々が何事だと言わんばかりにチラリとこちらを確認してくるのがなんだかいたたまれない。なんでこのタイミングで応援の切れ間が訪れるんだ。思わず顔を覆ってしまったが、過ぎたことはどうしようもないので諦めてアリーナへ向き直った。

そしてちょうど目に入った、顔を上げていたレシルの表情は、無機質さなんてどこかに捨て置いた小さな笑顔が浮かんでいた。観客席と闘技場の中心部、距離にしたらそんなに近くはない。しかし彼女は沢山の人混みの中から僕を見つけ出し、しっかりと僕の間を見つめて笑顔を向けていた。そして小さく手を振ったレシルは、再度ライル殿下の方へ向き直ってしまった。

「……なあおいッ、今あの子俺の方見て手を振ってきたぞ!」

「馬鹿が。お前みたいなさえない髭面にそんなことあるわきゃねエだろ」

近くでそんな会話が聞こえてくるが、どうでも良い。彼女の晴れ舞台の前に、大分離れていたとは言え、きちんと顔を合わせることができて良かったという安心感が胸に充満していく。

「……ちゃんとお見送り出来て良かったわね。お兄さん?」

「うん。良かったよ、本当に」

『開戦5秒前。4、3、2——』

ライル殿下が背中の長剣に手を伸ばす傍ら、レシルはやや体を低く構えた。

『——1、両者始め!!』

号令と同時に殿下が長剣を手に取って勢いよく薙ぎ払った。抜刀した瞬間から鮮やかな紅焔が刀身を覆って、遠目に見ても鮮烈な輝きが目に入る。模擬とはいえ決闘の場にもかかわらず、思わず「危ないだろツ!!」と身を乗り出して叫んだが、そもその距離から言って彼の剣はレシルを掠りもしないはずなのだ。

「うわっ、レシルちゃん凄いわね」

呑気そうに喋る藤沢さんの言うとおりに、彼女はさすがに殿下の対戦相手に選ばれているだけあって一筋縄でいくわけなんて無かった。殿下の剣が炎を撒き散らしながら前方を払うと同時に、白煙が巻き起こったり、金属音が鳴り響く。そして彼の後方には、白煙を放つ数本の氷剣が台地に突き立てられていた。

迫る炎を後ろに宙返りしながら避け、手のひらに新たな氷剣を顕現させたレシルは、紅焔を滴らせる長剣を構えるライル殿下の周囲を駆け巡りながら何本もの氷剣を投擲していく。ある物は長剣が纏う炎に絡められて蒸発し、その炎の壁を通り抜けた氷剣は長剣本体に弾き飛ばされる。

その場から避けもせずに氷剣を防いでいく殿下は傍から見て余裕がありそうではあるが、攻防が続くにつれてレシルも攻撃の密度を増加させていく。片手に顕現する氷剣が一本から二本、そして三本と増えていき、最終的には両手を振るえば十に近い氷剣が弾幕のように殿下の元へ迫るまでとなった。

「科学の道に戻って来れて正解だったなあ……」

「ちなみにレイはあの手の剣は出せるの？」

「……まあ折れたエンピツを頑張れば削れる程度には」

要するにほとんど無理だということである。人には向き不向きというものがあると
いういい例だ。

当初はレシルの氷剣がほとんど有効打にならず焼け石に水という戦況が、今や数で押し
して逆にライル殿下がギリ貧になりかけているという真逆の状況へと変化をしている。
その場から動かずに簡単そうに氷剣を防いでいたのはつい先ほどまでの話で、弾幕が何
倍にも膨れ上がった現状では同じ防御は通用するはずが無かった。

常に体全体を捻りながら炎を巧みに操り、迫りくる氷剣の群れを迎撃するライル殿
下。しかし時折タイミングをずらして飛翔する氷剣に狂わされ、大きく横へと回避して
駆け出す。直後にその場所へ何本もの氷剣が突き立てられた。

「ら、ライル様あ!! 負けないでっ!!」

「殿下が押されるて……なんだあの娘っ子は」

悲鳴にも似た応援やら呆然とした声が周囲から聞こえる。常に一定の距離を保ちつつ切れ間の無い弾幕を張るレシル、なんとかして彼女を捉えようとしつつも迂闊に近づくことができないライル殿下。だが驚いたことに僕の目に間違いが無ければ、殿下はこんな状況にも関わらず満面の笑みを浮かべていた。

激しい動きで氷剣をいなし続けていた殿下が、急に長剣を構えて立ち止まった。好機とばかりにレシルは開幕してからおそらく最高密度の氷剣達を続けざまに投擲していくが、次の瞬間には弾く音さえも聞こえずに全ての剣が消し去られた。

「本気モードってやつか……レシルー!! 攻め続ける!!」

さっきまでとは見違えるくらい長剣に纏いつく紅焰の規模が大きくなっていた。炎の量と輝きを増した長剣は、氷剣の群れを一薙ぎで蒸発させたところで終わらず、紅い長大な刀身となってレシルへと襲い掛かった。

対するレシルも負けてはいなかった。今まさに振るわれんとする紅蓮の大刀に怯むでもなく、両手を軽く振ったと思えば顕現させていた氷の小剣が二の腕を超える長さへと成長していた。

「投擲近接どつちもいけるのね……」

「妹を本気で格好いいなんて思う日が来るとは……本当にすごいよ」

試合は中距離戦から近接戦へと移行をしていた。殿下が振り下ろす熱剣はレシルの右の水剣に打ち止められ、その隙に突き出された左の水剣が刀身から溢れた紅焰によって防がれる。水剣と長剣が打ち合わさるたびに、炎の勢いが一時的に氷冷されて減衰し、水剣そのものも水蒸気を巻き上げて大きく失われる。しかし再度両者がぶつかる時は、どちらも元の形を取り戻していた。

「やつべえよ、殿下ア頑張れツ!!」

幾多の大きな歓声が轟く中でも、剣撃が放つ無機質な快音は打ち消されることなくアリーナ全土に響き渡る。

氷と炎の舞いなんて、本当藤沢さんの言うとおりびつくりするぐらいにファンタジーな光景だ。長くない時間東京に住んで価値観が引き戻されたこの身にとって、この眺めには現実感が無いし、まるで夢か何かを見ているような気分ですらなる。でもここは今、僕が何と思おうと確かに戦場なのだ。

僕には生憎彼らのような戦いに向けた素質は存在しないし、この二人の戦いを見ていたってすごい以外の感想は浮かんでは来ない。そんな自分にもなんとなく分かることもある。殿下は女相手に手を抜こうなどと言った慢心を欠片も抱いてはいないし、レシルも王族相手に接待をしようなんて言う使用人根性など持ち合わせちゃあいなんでしょう。彼らは全力で戦っているんだ。

「……レシルツ!! 最後までやり切れ!!」

後方へ跳躍したライル殿下が上段に構えた長剣には、彼の全身を包み込まんばかりの炎が纏わりついていていた。紅を通り越した、眩い白色で輝き始めた長剣の刀身を中心に空気が揺れている。

そして迎え撃つレシルの手からも片手用の細い氷剣など既に消え去り、いつの間にか水で作られた大きな十字剣の切っ先が殿下へと向けられていた。紅と白の炎を煌めかせる彼とは対照的に、冷やかな蒼銀の輝きを放つ十字剣の周囲に纏わりつく無数の白い氷粒が日の光によって幻想的に煌めく。

「ライル様っ!!」

「レシルちゃん!! ここまで決着よっ!!」

観客の熱気も最高潮だ。これからの王家を背負って立つ、数多くの歓声を浴びる誇り高き貴公子。周囲が勝手につけた呼び名にも負けない、凛々しさと高貴さを兼ね揃えた銀髪の戦乙女。彼らが互いに向け合うのはこの日一番の大技だ。この場にいる誰も彼も、次の一撃で勝負が決するかどうかで感じているのだろう。

「いっけええええッ!!」

煌めく焔を引く白色の長剣。銀の霜を剣筋に描く氷の十字剣。互いを打ち消す威力を持ったそれらが打ち合わされ、その瞬間闘技場全体に金属が軋むような強烈な音が鳴

り響いた。互いの武器が相手の得物を受け止める。熱剣に白い水塵が纏わりつき、十字剣に純白の炎が絡みつく。

灼熱と冷氣、真逆の二つをぶつければあつという間に打ち消しあつて終わりのはずだ。でも押し付けられあう彼らの得物が纏うエネルギーは、傍目に見えても弱まるどころか相手を飲み込ままばかりに勢いを増していく。

——キ イ イ イ イ——

強烈な温度差の物体が通常の耐久限界を超えた長時間接していたせいだろうか、耳障りで思わず鳥肌が立つような音が響き始めた。弾ける陽炎や舞い上がる水塵で彼らの表情はとうに窺い知ることには出来ない。でもどちらも一歩も引かず、互いの武器をより一層の力を込めて押し込んでいた。次第に大きくなる軋んだ高音に耐え切れず、思わず顔を顰めて目線を外す。

『両者そこまで!!』

目を離していた一瞬のときだった。金属の悲鳴を覆い尽くすようにして、幾多もの声援の中をガラスが砕け散るような快音が響き渡った。

長剣に纏わりついていた白炎が、そして対抗するように立ち込めていた白靄が急速に消え尽きていく。視界が晴れていくアリーナの中心部に見えるは、湯気を上げる長剣の切っ先、半ばから砕かれた氷の十字剣。既に武器としての機能を失った十字剣に代わり

レシルの片手に新たな氷剣が顕現し、それが殿下に向けられるよりも先に彼の長剣がレシルの眼前に突き出されていた。

『勝者。紅組、ライル・フランシス・エルトニア』

感情を乗せずただ結果のみを伝えるナレーション。そして瞬時に状況を把握した何人もの観客による歓声の大合唱。

どんどん大きくなるライル殿下のコールの中、眼の前に突き出された長剣を眺めていたレシルは、ただの氷塊と化した十字剣の持ち手と小剣を地面に投げ捨てた。まるで僕は彼らの戦いを観ている夢うつつにでもなってしまったのだろうか、ここへきてようやくレシルが敗者へとなったことを認識し始めていた。

「……お疲れ様。レシルちゃん」

「最後まで、しっかりと見届けられたよ……レシル、お疲れ様っ!!」

対戦者同士の簡単な会釈の後、殿下よりも一足早くアリーナの出口を目指して歩き出したレシルは、周囲の轟音に負けじと手をブンブンと振る僕たちの方を向いて口を動かしていた。鳴りやむ気配が見えない歓声で声なんて聞こえるわけがないけど、確かに彼女は笑顔で「ありがとう」という言葉を僕たちに向けているように見えた。

その4

「……それで、結局ここで待つからね」

「出待ちなんて僕は選手下の出入り口の場所も分からないんだから出来ないし、ならばよくみんなでする場所で待っていた方が良いんだ」

噴水広場の人の入りは昼間に訪れたときよりも幾分かはやわらいでいるように見える。噴水脇のベンチにも空席が見られたのが幸いだった。

「でもレシルちゃんはこのつちに来れるかしら」

「来てくれることを願うよ。まあ少し待つて来ないならばレシルも忙しいってことだろうから僕らも帰ろう」

レシルの試合が終わった後、僕たちは熱気が覚めやまない観客をかき分けて一足先に闘技場を後にしていた。今日一番のイベントであろうライル殿下の一戦が終了しても、この後もまだまだ試合が残っている。お陰様で闘技場に混雑が集中しているため、ベンチに座れる程度にこちらは空いているようだった。

「……何やってるの?」

「情報収集。紙媒体のようにかさばらないし容量もあるし、こんな逆光でも読める。新

型タブレットの強みだね」

横から顔をひよっこり覗かせてこちらの手元をのぞいて問いかけてくる藤沢さんの表情は、どこかげんなりとしたものであった。せつかくの休みの日、それも外出先で分野の情報誌なんぞに目を通すなどという意見も分からなくはないが、立場が学生の身じゃなくなるとそうも言ってられなくなるのが悲しいところである。

「まさか読みたいとか？ これ藤沢さんの分野にも近いし、なんなら貸すよ」

「流石に今は結構よ……いや、別に勉強が嫌いつて訳じゃあないし、ちゃんと読むときは読んでいるし……」

冗談交じりのこちらの提案をいつも通りバツサリと否定したと思えば、急にしどろもどろになりながら弁明のような言葉を並べていく藤沢さん。視線も明後日の方向へ向けているし何かあったのだろうかと考えてみることに数秒、なんとなく状況が掴めてきた。

今でこそこんな感じで妹関連で一緒に出掛けたりなど友達同士ともとれる行動をしているけれど、その実僕は助教で彼女は学生なのだ。少なくともゼミ関連では完全にこつちが教える側で藤沢さんは教えられる側である。彼女にしてみれば、助教がわざわざ勧めてきたものを無下に取り扱ったに等しい状況なのだ。

「んじゃ後で教えるよ。というかこつちも冗談だからそこまで本気にしなさんなって」

「うん、その……ありがとう」

藤沢さんは少し恥ずかしそうな様子でプイッとそっぽを向いてしまった。少々いたずらが過ぎてしまったかもしれない。苦笑いを浮かべつつも、内心で少しだけ反省をする。

教職員と学生という立場になった今、僕としても相応の距離感は大切であるとは感じている。ただ、現代日本において互いに唯一の同郷出身者で、そして秘密を共有し合えた良き友達でもある。こっ恥ずかしくてとてもじゃないが彼女の前では言えないけれど、藤沢さんは平塚先生と並んで色々なことを話せる大切な人だ。だから少し距離を置くべきだという理性的なところとは裏腹に、今まで通りの関係が続けていきたいとも思ってしまう。

「……なに？」

「いんや、別に何でもない。レシル遅いなーってさ」

僕の名誉にかけてこの内心は探らせるわけにはいかない。ジトツとした藤沢さんの視線をどうにかやり過ぎしつつ、ベンチの先に続く学園への通路へと目を移した。特段寝不足というわけではないが、何も考えずにボーッと一点を眺めていると段々と自分が起きているのか寝ているのかが曖昧な感じになってくる。

「……さつき騒ぎ過ぎたから疲れたみたいだ。なんだか眠くなってきた」

「あんだだけバカ騒ぎした後になんな小さな文字見てるからそうなるのよ。ちよつとだけでも寝てたらどう？」

「ボクも疲れたし、みんなで昼寝も悪くはないけど……」

とうとう出てきたあくびに思わず頭を押さえる。どうにもこの体は眠気というものに強くないらしい。もう二十年近くも前の話だから詳しいところは覚えていないけど、自分が真つ当な平塚礼二だったころと比べると日中眠気が訪れない生活を送るのに必要な睡眠時間は多くなっている気がする。

それに以前よりも疲れが眠気へと直結しているのも困り者だ。もちろん個人差はあるだろうが、僕は睡眠という点で日本人とエルトニア人の遺伝子レベルの違いを身をもって証明しているのかもしれない。

しかし藤沢さんのお言葉に甘えて目を閉じること数秒後。いくら疲れていてもここが屋外だからなのか、眠気が増大するようなことはなくむしろ周囲の音がより敏感に聞こえてきてしまう。そんなモヤモヤとした感覚の中で、ふと背中に小さな刺激を感じた。まるで指の先でツンツンと突つつくような刺激。寝ていても良いよと言った舌の根も乾かぬうちに藤沢さんがちよつかいを掛けてきたのだろうか。

「でも労わりの言葉の一つくらいは欲しいかな」

そんな刺激と共に背後から聞こえてくるその声色は、毎日己の口から出てくる自分の

声と非常に良く似た響きを伴っている。眠気で頭の回転が極端に落ちていたならばまるで自分自身の声と誤認してしまいそうなそれは、紛れもない我が妹の物に違いがなかった。

「気配消して後ろからニユルンと近付くのは止めようか。それと……お疲れさま。しっかりと見届けたよ」

「……ありがとう。これで殿下をパパツと倒せていたらもう少し格好はついたんだけどね」

振り向いてみれば、ベンチの背に手をつくレシルが苦笑いを浮かべていた。近くでこうして見る僕にとつて普段通りの彼女の姿は、つい先ほど凛々しくも冷たい雰囲気纏って乱舞していた氷の剣士とはどうにも重なり辛い物がある。

「レシルちゃん、いつの間に……」

「本通りは人が多いから裏道を通って来たんです。レナさんも、ボクを待っていてくれてありがとうごさいます」

そのまま僕の隣に腰をおろしたレシルは肩にコテンと頭を乗せてきた。サラサラとした銀色の長髪が首筋を撫でるのが結構こそばゆい。髪質や色は自分も似たようなものだけど、それが自分のものではないというだけでここまで感じ方が変わるといふのだから不思議なものだ。

「……思えば兄さんの前であそこまで魔法を使ったのはすごい久々だったね」

「僕がこつちに居たころの話だから、六年は開いている。でもそんなに経っているのに、僕の中でのレシルの魔法のイメージは一緒に氷魔法でかき氷を作っている姿がまず思いつくんだ。本当、よくここまで磨き上げて来たね」

当時は本妻の兄弟達を盗み見ながら見様見真似で覚えた氷の魔法を使って、大きな霜柱を作ったり小さな氷の家を作ってみたものだ。未知の技術に興味を惹かれて色々試していた僕と、それに引きずられるようにして僕の魔法をたどたどしく真似していたレシル。僕たち兄妹にとって、始めの内は魔法なんてただのお遊びの道具に過ぎなかったのだ。

しかし気がつけばレシルの魔法の技術は見る見るうちに成長を重ね、使用人か誰かがこつそり報告をしたのか知らないが、彼女の才能は父上ことフォルガント家主人の耳にも入るようになった。そしてあれよという間に彼女は魔法を使う者のエリートコースを歩み始め、その玄関口であるエルトニア王国立魔法騎士学園への進学を決められたときには、彼女の魔法はもう僕の把握出来る範囲ではなくなっていた。そして月日が経過しての今日の試合だ。なんともまあ凄まじい進化を遂げていたものである。

「……ねえ。兄さんは、僕の魔法怖い？」

「そりゃあ怖いに決まってる。特に外界から何かするでもなく物体が超低温になるって

もう熱力学に反しまくりだし——って冗談だからそう深刻そうな顔しない」

再会してからは取りあえず僕の方のわだかまりは解消出来たとは思いますが、彼女の方の深層ではまだまだリハビリが必要なのだろう。彼女が日常で接する人間がどう思おうが、僕自身が彼女を怖がるだなんてあり得ない。いつかはこんな軽い冗談を言い交せるような仲へと持っていきたいものだ。道端の毛虫をさてどうやって処分してくれようかという視線を僕へと向ける藤沢さんを何とか視野に入れられないようにして、一瞬悲しげな顔を浮かべかけたレシルの手をポンポン叩く。

「何にせよ僕はレシルのことを怖いだなんて思うわけがない。ところでレシルの方はこつちに来てでも大丈夫なのかい？」

「ボクの学年の試合はさっきので全部終了したし、先生にも許可は取っているから平気だよ」

先生というのは、おそらく昨日会ったノーリスさんのことだろう。昨日あそこまで一生懸命にレシルを探し回っていた彼女のことだから、レシルの試合の最中も多分目を離すようなことは無かっただろう。そしてレシルがここにいるってことは、試合後の最低限の反省などは済ましているはずだ。血気迫る様子で走り回っていたノーリスさんが、眼前でレシルの逃亡をおめおめ許すだなんて到底信じられない。

昨日の話しづりを思い出すに、彼女なりにレシルのことは気にかけているのだろうか

思う。レシルの外出許可を出しているということは、彼女から見てレシルがやらなければならぬことは粗方終わっているものだろう。色々考えて行き着いたのは、要はこの後レシルを学外に連れ出しても問題は無さそうだということだ。

「んじやみんなでカフェにでも行こうか」

「そうね。さっきの模擬戦とか近況とか、色々話すこともあるでしょ」

立ち上がって小さく伸びをする。高々十数分しか座ってはいないのにポキポキと体が鳴るのは如何なものかとは思いますが、日常で体を動かすことが稀な完全なるもやしっ子となった今じゃあもうしょうがないと割り切るしかない。いくら容貌が似ているとはいえ、レシルと自分じゃあ身体能力が段違いなのだ。

さて、カフェと言ってみたは良いけどどこに行こうか。何時ぞやのレシルと待ち合わせで使ったところも良いし、バスの窓からも数軒ほど良さそうな場所は見つけてある。今日はなんとなく隠れ家系の店よりは明るい雰囲気のお喫茶店が望ましい気がする。そうすれば通り沿いのオープンテラスの店とかが良いかもしれない。そんな風にどうしようかと頭を捻る傍らで、藤沢さんはベンチに腰かけたまま一点を見つめていた。

「……………どうしたの？」

「向こうの方が妙に騒がしくて……………ほら、アレ見て」

ずっとレシルの方を見ていたため、藤沢さんが指差している学園への通路には全く気

を向けてはいなかった。確かに言われてみれば、通りの方から聞こえるざわめきは混み具合から判断すると妙に話し声の大きさが大きい気がする。一旦気になりだすと解明したくなるのが理系の性である。よく目を凝らして何が起きているのかを眺めようとしてみても、通りの方へ集まった人ばかりで何にも見えやしない。

「もしかして今日の試合が全部終わったのかしら」

「……予定じゃ試合はまだ続くはずです」

レシルの言うとおり、今日の試合のスケジュールは夕方近くまで組まれていたはずだ。それに別段人が増えた訳ではなく、もとからこころにいた人々が集まって妙に騒ぎ立てているようだ。首を捻ること数秒、そもそもこれから学園の出口へ向かおうとしている僕たちにとっては特に関係がないということに気が付いた。

「たしかに気にはなるけど、僕らこれから外に行くんだしほつとこうよ」

「わざわざ首を突っ込むことでもないか。ゴメン、足止めさせちゃったわね」

手元を開いたままのタブレット端末を操作して、味気ない小さな文字の羅列を仕舞いこんで別のウィンドウを呼び出す。このところほとんどの週末にこうやって外を散策することが相次いでいることだから、せっかくだし自前で地図を作ろうとして頑張ること数日、行った店の場所とその種別のみを書いたすごく簡単な地図が出来上がりつつある。

レシルと藤沢さんの二人に見えるように画面を傾けてみると、どちらも驚いたような表情を浮かべながら地図へと目を向けた。藤沢さんは大方わざわざ時間を割いてこんな地図を作っていたのかなんて驚き半分呆れ半分といった心境なのだろう。一方でレシルはそもそもタブレット端末が見慣れない物なのだろうから地図だけでなく他の部分のしげしげと観察している。恐る恐る画面に触れたり、スライドさせてみたりといった様子が非常に初々しいし、可愛らしく思う。

「……結構書いているみたいだけど、チラシの略図レベルね」

「黙らっしやい。見て分かれればいいんだよ、分かれば」

たしかに縮尺や道の形は滅茶苦茶かもしれないけど、少なくとも今まで行った店や見かけた店がどの配置にあるのかくらいはなんとなく分かるはずだ。他の研究グループも巻き込んでグルメマップを作ろうと呼びかければ、もしかしたら結構な有志が集まるかもしれない。一人でここまでやれるんだから、複数名でやったら商業レベルのものだって夢じゃないはずだ。そもそも施設運営課とかがこういうマップを率先して作らないのが良くないのである。

「このメモ帳すごいね……ええと、ここって前にボクが紹介したとこだね。それでこつちは——ツ!？」

多分レシルにとつてはこのタブレット端末が生まれて初めて触れる家電製品になる

のだろう。たしかに見た目だけじゃあなんだかすごいメモ帳に見えないこともない。しかし彼女は興味深げに地図を眺めていたのはホンの数秒で、いきなりタブレット端末を放り投げるのじゃないかというほどの鬼気迫る様子で背後を振り返った。

「——ごめん、ちよつと時間かかりそう」

「どうしたの？ 知り合いでも通りかかったのかな」

「知り合いといえぱたしかにそうだけど……」

彼女が視線を向ける方向は、さつきまで藤沢さん共々何かがあるのかなあと眺めていた、また試合が続いているこの時間帯には少々不思議な人ばかりである。どうにもさつきよりざわめきは大きくなっていくが、だからといってレシルが剣呑な目つきをするほど特別何かが変わったかといえば、少なくとも僕にはそんな気配は感じられない。

藤沢さんとこつそりとアイコンタクトを交わしてみるが、彼女もレシルの変貌に対してさつきぱり何もわかりませんという感じのようで、ふるふると小さく首をふった。ここまで警戒心を露わにするなんて、一体何が表れたというのか。あてずっぽうで言った知り合いが云々という問いかけに対して否定はしなかったところを省みるに、あまり仲が良くない人間がここにやってくるのだろうか。

もしかしたら昨日お世話になったノーリスさんかなあと思ったが、それでもここまでの警戒心を露わにするには少々不自然なところがある。しかしそんな疑問は、まるで海

を割って進むが如く、人の群れの中を何の造作もなく歩みを進めてこちらに近づく人影によって氷解した。

「王族相手の闘技後というのに挨拶ひとつ無く足早に立ち去ったから何かと思えば……なるほどな」

「……単に殿下のお連れの方々に遠慮をすることです。ただでさえ多くの方に取り囲まれているので、会釈をする程度に留めさせて頂きました」

遠目に見ても良く目立つ赤紫髪に長身のコントラスト、それに加えて剣呑な視線がこちらに向けられているのだから、一瞬でも視界の端に映れば否が応でもライル殿下の存在に気付かされる。レシルの言にもあるように、今日の彼は一人で歩いているのではなく、両脇やその後ろに数名の人間を引きつけて、こちらに向かってきていているようだ。殿下自身の服装はそこまで過剰なものではないが、その脇に居る数人の若い女性たちといえば、金持ちの娘ですと言わんばかりの煌びやかな装飾品を身に纏って周囲に晒していた。

その5

ライル殿下の姿を視界に収め、思わず己の顔が強張るのを感じた。面と向かつて彼と顔を合わせるのは見学会以来となるが、その見学会のすぐ後に殿下は大学の存在意義について疑問を問いかける内容の発言をした。少なくとも記憶の限りは当日の案内役を務めた僕を含めた、大学側の全てのメンバーには発言や行動上何の落ち度もなく、もはや最初からいちゃもんをつけるために見学会に参加をしたのではないかという疑念さえ湧いてきてしまう。そんな経緯からかいぎ彼を目の前にすると、どうにも殿下を負のイメージというフィルター越しに見てしまう。

「ライル様。フォルガントさんもそう言っていますから私達も何処かへ行きましょう？」

「そうよ。別に負かした相手に用など無いでしょう。向こうがわざわざ気をきかせているんだから」

「お前たちは少し静かにしている。あの異常な空間で私相手に全力で挑んだお前にせめての賞賛の言葉でもと思ったが、様子を見るにその必要は無さそうだ」

付きまとう女学生の言葉を少し語気の強い言葉で黙らせた彼は、再度僕の方へと顔を

向けた。レシルに向けていた偉そうな笑顔と無表情の中間から、わざわざ剣呑な目つきへと変えて。

「見学会ぶりだな。その節は世話になった」

「いえ、こちらこそ殿下の案内役を務めさせて頂き光栄でした」

喋る内容こそただの挨拶に聞こえるけど、その実はお互いに腹の中へ本音をひた隠している嫌な会話だ。彼は形式でも笑顔を浮かべようとせず、僕も頑張つて笑顔をなんとか張り付けているような有様だ。

「下らない。別に今更取り繕うなどと考えなくても良い。何か私に聞きたいことがあるんじゃないか」

「……殿下からストレートに来ていただくのは助かります。私も腹の中に何か隠して平然と話し続けられるほど人間は出来ちやいけませんから」

当然と言えば当然か。ライア・ヴィクトリウス・エルトニア第一王女を筆頭とするエルトニアへの科学技術導入に積極的な派閥のおかげで、もはや大学の存続が半ば国の方針になりつつある中で、下手をすれば造反になりかねない立場を取るといふのは不可解な点が多すぎる。加えて見学会から一週間というそう日も経っていない中で電撃的な大学への否定的立場の表明だ。疑問を抱かない訳がない。

「殿下は恐らく日本人ないしは日本そのものに良いイメージを抱かれています。にもか

かわらず今回見学会の打診をされたのは何故でしょうか」

それとなくレシルと藤沢さんを向かい合う僕たちから遠ざけ、ライル殿下に今の自分の中に存在する疑問の根底を投げかけた。まさか本当に大学のイメージを下げる理由づけのためだけに出的のではないのかと、言葉の陰に潜ませながら。

「切っ掛けはあくまでも純粋な興味だ。どう捉えるかはお前たちの自由だが、そちらの役人にも同様のことは既に伝えている」

「ただその見学会で何か思うところがあつた、それでよろしいですか?」

一つ目とは違い、こちらの問いかけには頷きも首をふりもしない。それが肯定や否定なのか、それとも答える気がないのか、無表情の彼から意図を読み取るのは不可能だった。

「……もう一つだけ。今回の立場表明を行われた理由は、見学会前後で変わりは無いのでしょうか」

「ああ。恐らく初めて顔を会わせたときに、お前とその上役に言ったと思う。行き過ぎた技術は危険な存在に成りかねない。だがそれに待ったを掛ける人間は散発的でまともまりがない。だから私が懸念を示した」

確かに理由にはなっている。少なくとも大学関係者の僕たちにとってみれば迷惑の上ないことではあるが、しかし真つ当な国の運営には政府の直進を遮る存在が必要な

のも確かだ。そう考えれば立場表明の時期以外には不思議な点は見当たらない。でも、その不思議な点がしこりのように残り続けている。

「……ただ、こんな大言壮語を言っておきながらも私は人間なんだよ。話はここまでだ。お前たちも何か予定があるそうじゃないか」

「えっ、ちよつと……いえ、わざわざお時間を割いて頂きありがとうございます」

今までは一変して少しの憂いを含んだ彼の様子は、あのと見学会の最後に彼が見せた物と一緒にだ。今の彼には本音が表れているに違いない。だがこれ以上の追及はさせないと言わんばかりに少し早口で話を切り上げた殿下に対して、相手が王族ということもあつてより深いところへ踏み込む勇気が無かった僕は、当たり障りの無い感謝の意を述べることにしか出来なかつた。

「今更にはなつてしまふが、フォルガントも見事だつた。私に遠慮をせず挑んでくる者は希少だ。これからもよろしく頼む」

「……次がいつ訪れるかは分かりませんが、その時も一切の遠慮はしません」

相も変わらず、僕や藤沢さんの前とは随分と異なる様子だ。ライル殿下はもとより、その後ろに控える鋭い目つきで睨んでくる数人の女子生徒を前にしても、涼しい顔をして打倒宣言をさらりと述べるだなんて凛々しいといふかなんというか。その女子生徒達の姿を見て顔を引き攣らせる僕や藤沢さんとは大違いだ。

「——このままだと私たちが多数派になるかもしれない。さてどうする」

そして去り際に何かを小さな声で言っていると思えばこれだ。聞こえてきた内容がそれはもう爆弾級であり、思わず首の稼働限界ぎりぎりまで振り返ってみたら、既に大股で人混みの中に歩き始めたライル殿下の後ろを取り巻き数名が追いかけてはじめていた。少し離れていた藤沢さんも、僕と同じく声が聞こえていたのかギョツとした顔で殿下の後姿を見つめていた。

「多数派って……流石にいきなり大学がエルトニア追放なんてならないだろうけど、でも夏の研究発表会には間違いなく響くだろうね……藤沢さん？」

「……えっと、ええ。確かに響きかねない、そうね」

どこか上の空と言った雰囲気藤沢さんは、名前を呼んだ瞬間慌てて返答をして僕が言った内容を復唱する始末だ。まあ彼女としてみても、まだ学生の身分にも関わらず最悪の場合学び舎が変わりかねない事態に結構な動揺をしているのかもしれない。

まるで嵐のような時間だった。いきなりやって来たと思えば、こっちの精神状況に大きな波風を立てて、そして気がつけば颯爽と去っていく。殿下の去って行った方向を未だに鋭い目で見つめるレシル、そして僕共々ヤバイ内容を知ってしまったって半ば放心状態の藤沢さん。この場にいる全員がこんな状況で、さあ仕切り直してもう一度カフェ選びでもとはすぐに行けそうもなさそうさ。そもそも僕自身がそういう精神状態にはなれ

そうにもない。

「……ねえ、レシル。近々ちよつと日レベルで時間を頂くかもしれない」

「えつと、それって一日二日丸ごとって感じだね。余裕を持って言ってくれば多分大丈夫かもしれないけど……どうしたの？」

そしてあまり考えが纏まる前に勝手に口からこんな言葉が出てきてしまう。僕がいま考えている内容は、一人で抱えるには重すぎるし、勝手に行なっても良いような事でもない。それでもなんだか無性に現状を打破できるような行動を取らなければ行けない気がしてきてしまう。そして今の今までもはや関係がないと考えてきた自分の生い立ちは、現状を変えるにはおあつらえ向きのものに違いはない。

「実はね、一度帰ってみようと思うんだ。実家にさ」

一介の助教に過ぎない自分が国の計画の一端である大学計画に対してここまでやる義理はないし、やって何かが変わるといふ保証もない。それでもこれ以上後手に回るのは取り返しが付かなくなるかもしれないし、それに面白くない。実家、エルトニア王国の中でも王家に続いて発言力を持った六大家の一つであるフォルガント家。そこに行けば現状打破に向けた何らかの可能性は見えてくるだろう。

ただ、ワンテンポ置いてからようやく内容を把握した二人組の驚くような顔、特に藤沢さんの「とうとう頭がおかしくなったか」と言わんばかりの疑念の視線を向けられて、

少し早まったかなあとという後悔が小さく沸き起こった。

第九話 「帰還!! 帰省という名の出陣」

その1

「えー、皆さんもう課題は行き渡りましたね？ まだ貰ってないよという人は手を上げて下さい」

授業ももうほとんど終わり、後は今日行なった内容に関する課題を配るのみとなった。目の前に座るのは総勢二十人に届かないような小規模の集団だ。プリントの配布数を間違えるだなんてへまは起こりにくいし、仮に配布ミスがあったとして彼らが手を挙げる前にはそれを察知することは十分可能だろう。こういった公的な講義を持つのが初の経験とはいえ、伊達に一か月以上この講義を続けちゃいけないのである。

当然誰も手を上げるようなことはなく、無事に本日の授業でやらなきやいけないことの全てが片付いた。学生の皆さんは今日の講義の発展と次回の内容の初歩問題からなる課題を行い、次回の授業に繋げていくという流れである。ありきたりなスタイルと言ってしまうばそうだが、世の中に王道というものが流行る理由はそれ自身がなんだかんだで優れているからなのだ。ただ今回に関しては何週に解説を、という流れではなくなるのだ。

「授業の頭にも話しましたが、次で僕のパートが終了するので、来週は今までの分野から簡単なテストを行います。なので復習をしてきてください」

荷物をまとめつつそんなことを話してみると、案の定テストと聞いて多くの学生がげんなりとした表情となった。同じ研究グループに所属する助教の先生と講義の前後半を分担しており、それぞれでテストを行って授業評価を決定するという仕組みになっている。いくら人が少ないからとはいえ、助教一年目の春先からアシスタントではなく一般の講師として登用するのは如何なものかと思わないことはないけれども、研究活動が深まってくる夏ごろに手が空くのは助かる。

「皆さん頑張つてね。それじゃあお疲れさまでした」

腕時計を眺めつつまだ予定の時刻が遠いことに小さく安堵をする。ちよつとやそつと授業が長引いた程度では全く問題がないような余裕はあるが、何分控えている予定が逃してしまうとかなり大きな問題になりかねない物であるから中々に気を抜くことができない。

「ヒラツカ先生、今日の授業の内容で少し聞きたいところがあるんですが……」

「えーと……うん、何かな?」

緑髪の女学生、普段から前の方に座っていてこの学生たちの中でも特に授業へ積極的に参加をしてきてくれた彼女が、帰る準備がほぼ万端となった僕を寸でのところで呼び

止めた。一瞬だけ、予定がありますの一言で諦めて貰おうという考えが頭を過ぎったが、今日がテストの前の授業ということもあってこのまま放置して帰ることに大きな引け目を感じてしまった。

ただ、なるべく分かりやすく彼女の質問を答えながらも自身の脳裏には今後の予定の内容が勝手に浮かび上がってくるのだ。出張、それも国内の研究施設や海外の学会といった割とあり得そうな用では無く、地方の大貴族に頭を下げに行くという後にも先にも到底体験する機会がなさそうなもの。勿論こんな要件で出張を行ったことなんて無いし、出張申請を受ける側だって初めての可能性が大いにある。そんなことだから本来ならばもう少し前には終わっていいような出張準備も、前日になってまで申請が掛かっている事態に陥っているのだ。

「つまりこの近似を行なえばいいんですね。それでこつちの問題ですけど……」

人にものを教えること自身は嫌いじゃないし、そもそも嫌いだったらこんな職になんかならない。でも今はなるべく早く切り上げたい気持ちが沸き起こり、視線が女学生と腕時計を行ったり来たりをしていた。

* * *

「フオルガント家に、ですか……」

思いついたらまず行動とほぼ勢いだけで川崎さんに電話を掛けたのが、二週間ほど前のレシルの試合が行われた日の夕方である。電話回線を通して異世界の大地からゲートの向こうにある東京都心に声を届けられるのは中々に言葉にしてみると凄い事だと思う。そんな世界の壁を越えた通話に少々の感動を覚えていた僕の耳に入ってきたのは、案の定というべきか、やや怪訝そうな川崎さんの声だった。

まあ当然だ。そもそも僕のような一介の職員が、大学を運営する役人に電話をするなんて早々ある話ではない。それに話の内容を取ってみても、いきなり地方の大貴族にお目通しを願いたいなんて言い出すなんて客観的に見れば突拍子が無さすぎる。例えば僕自身がエルトニアにおける大学計画を積極的に推し進める役人的な立場ならそこまですごい。ただの助教に過ぎぬ身なのだかわざわざ動くような立場でもない。

「やはり難しいですかね。まあもし可能となりましたらいつでも連絡を……」

「いえ、そんな実行するのが難しいなんてことではありません。むしろこちらにしてみればわたりに船な話で少し驚いています」

しかし受話器の向こうから返ってきたのは、僕の予想とは反して、逆にこちらの案をサポートしていくかのような内容だった。

「実はですね、つい先ほどの会議で六大家についての話が持ち上がりまして」

川崎さんの話をざっくりとまとめるならば、ライル殿下を中心として持ち上がりかけている大学反対派に対抗するために、更なる地盤作りを行なおうという計画が委員会の中で立ち上がったそうだ。

ライル殿下が大学計画に否定的な意見を表明したことで、僕や平塚先生のような現場で働いている人間には波紋が広がっている。ただでさえ異界の地での研究活動なんていう常識的に考えたら異常極まりない状況に加えて、現地の有力者からも良い顔をされないなんていろいろ終わっているなど、何人もの現場の人間が思っているに違いない。そしてそのような問題意識は、当然運営委員会にも共有されていたようだ。

「彼がまとめ上げる勢力は絶対に無視できない。ならば我々も対抗して勢力を広げようという考えです」

「それで、その目標が六大家ですか。でも今になってですか？」

向こうがその気なら、こつちもやってやろうということである。たしかに国の各地方を任された六大家のどれか一つでも巻き込むことが出来れば、基盤づくりとしては申し分が無いだろう。むしろ今まで彼らほどの有力者と関わりを持たずにいたことが不思議でならない程だ。

「これを言っているのか……ここからの話はなるべく内密にお願いします」

そこからの川崎さんの話は、今になってようやく実害を及ぼし始めたこの大学計画の少々歪な部分についてだった。

エルトニアと日本は関わり合いをもつてからまだ五年という短い付き合いにある。空と海の航路が縦横無尽に地球を取り囲んだこの現代社会で、一定水準以上の新規文明国と交流を持つなんて、普通に考えたらあり得るような話じゃあない。だからきちんとした国交を樹立するのには相応の時間が必要とされるであろうことは想像に容易い。しかしこの二国は関わり合いを持ってから僅か二年で両者共同の教育機関を設立する計画が持ち上がるにまで至っている。

「王都の発達した学園区が象徴的です。教育に力を入れるエルトニアの政府は、すぐにこちらの科学技術に目を着けました」

日本の外務省と対話に臨んだのは、当然エルトニアの王家である。貿易や文化交流といった基本的な事柄と並行、もしくは優先する勢いで教育機関の導入が推し進められ、結果として国家間が互いを認識してから僅か五年の間に本学開校にまでこぎ着けた。

ただしこんな促成栽培染みた教育交流には当然弊害も存在した。些細なものでは、本学がどのようなことを教えているのかについて現地住民の認識が未だ足りていないというものや、本学校舎の位置が現地の一学園を間借りしている等。そして深刻なものは、現在直面しているように、エルトニアにおける本学の後ろ盾が王家の一部しか存在

しないということだ。

「トントン拍子に話が進み過ぎたんです。そのツケが、彼の行動によってようやく明るみに出たんですよ」

「……なるほど。そして足場作りの第一歩が、という訳ですか」

「そしてお恥ずかしい話しながら、六大家のどれとも碌に交流が取れていないのも問題です」

山間部の多いエルトニアは、国の中央に位置する平野部を王家が治め、小規模の山脈で区切られた幾つかの土地を六大家が王家から任される形で統治をしている。一応王家の配下という立ち位置に入るものの、彼ら大貴族はある程度の独立を許されている。

「地方領主なんてまるで戦国の世ですが、エルトニアでは現役のシステムです。国の中央と彼らは完全な上下関係ではない。そして中央と交流を持っていたとしても、その流れで六大家とも、とは出来ないんです」

だからこの国立東都工科大学エルトニア校という存在は、国の中央とは密接な関わり合いを持つ一方で、地方領主からしてみればそんなあったね程度でしかない。非常に宙ぶらりんな状況と言えよう。

僕たち現代日本の感覚で言えば、六大家は国内の有力貴族というよりかは、隣接する友好関係にある小国の主と言った方が適切かもしれない。そしてそのエルトニア王国

は、僕らに取ってみれば小国が集った一種の連合国家として捉えられる。おそらく最初に日本政府が交流を持つことが出来たのが国の中央である王家であったことも、六大家とのパイプライン建設が後回しになった理由の一つだろう。

「今までは王家との話し合いだけでなんとかなっていました。そしてそろそろ地方領主とも繋がりを作ろうとなった矢先……すいません、少し愚痴臭くなってしまいました」
「段々話が見えてきました。確かにそんな状況ですと、僕の提案は渡りに船なのかもしれません」

「……平塚さんには是非ともフォルガント家との最初のパイプラインになって頂きたい。無論なるべく業務に差し支えの無いよう最大限配慮は致します」

その言葉を耳に入れたとき、受話器越しの直接伝わった肉声では無いうえに視覚的な情報を何ら持つてはいなかったにもかかわらず、まるで川崎さんが頭を下げてきているかのような錯覚を感じた。

「なんたつてこんな空前の空腹時に鴨がネギを背負ってきたかのような状態だ。露呈した六大家との繋がり不足という問題を至急解消しなければならなくなった状況において、大学側の関係者でありながら六大家の一つであるフォルガント家の関係者がわざわざ自分から名乗り出てくるだなんて。僕が川崎さんの立場ならば、多分速攻で現地に赴いて頭を下げるだろう。」

「自分から言い出しといて何ですが、必ずしも僕が交渉役として適役なのかは未知数です。確かに僕はフォルガント家の庶子だった時期もあります。しかし現状では、生憎実家から除名されています」

ただいざそんな期待を大いに向けられてしまうと、今度は僕自身のやや特殊な立ち位置ゆえに不安な点が露出する。僕がフォルガント家の関係者だったのは数年前までの話であり、レシルから既に聞かされている通り既に除籍済みだ。まったくの非関係者という訳ではもちろん無いのだが、僕がフォルガント家とのパイプライン役として最適であるかと問われれば正直な所自信は無い。

「そんな自分で宜しければ、是非協力をさせていただきます」

でも、当然やってやろうという気持ちは立ち消える筈もなかった。今まで何かと避けていた節のあるフォルガント家に能動的に関わる切っ掛けなのだから、みすみす手放すなんてことはしたくはない。数秒遅れて帰ってきたありがとうございますの言葉には、ホツとしたかのような響きが多分に感じることが出来た。

* * *

とまあ、そんなわけでわざわざ頭を突っ込んで参加をすることになった出張の出発日

を迎えた。思えばある程度の期間完全に研究室を離れるような規模の出張は、この立場になつてから初めての経験である。行き先がアメリカやらヨーロッパではなく異世界の都市というぶつ飛び具合から、多分今後の人生の中でも妙に濃い思い出として残るんだらう。

「……つと、もうそろそろ行かなきゃ。とりあえず指摘した点を確認するつてことで、得られた結果とかは僕が帰つて来るまでに纏めといてね」

「ええ、ちよつと大変だけど善処するわ」

現在の時間は午前九時の少し眼前くらいである。朝食から出発予定時刻まで中途半端に時間が開いていたから、ぎりぎりまだ作業に取り掛かっていたいなかった藤沢さんをとつ捕まえて、時間つぶしがてらに研究の進捗を話し合っていた。

そうこうしている内に予定していた時間になったことをタブレット端末の画面が伝えてきた。朝食を食べてから一時間程度が経過して、大体の人は既に作業を始めているであろう時間帯だ。デスクワークをするスペースには実験室に赴いている人が多いために、僕らの他は人の入りが疎らである。

「別に全部が全部揃つてなきやダメつてことはないから、無理が無い範囲で頑張つてね」藤沢さんの言うとおおり、大変という文言におそらく誤りは無いだろう。彼女は所用のためにちよくちよく都心の校舎まで出向かなくてはならない。ようやく異界の地での

生活スタイルがある程度確立できたのだから4月の頭に比べれば能率も相当向上をしているのだが、他の人と比べると藤沢さんは時間的に結構なハンデを背負っていると言えよう。

普通は先生と言う存在はどちらかといえば発破をかけるものだと思っていたけれど、藤沢さんに関しちやあ例外だ。僕からこういう風に言わないといつか彼女はぶつ倒れるんじゃないか。大袈裟かもしれないが、普段から研究棟が開いてから閉まるまでの間ほぼずっと何らかの作業をしているところを見るかぎり、冗談では済まされない予感を感じる。最近土日に街の探索に乗り出すメンバーが増えている傍らで、レシル関連の用事以外は大抵僕と同じく休日返上して籠りきりだし。前々から人が疎らな週末に僕と藤沢さん、そして平塚先生の三人が妙に揃う頻度が高いなあとは思っていたのだ。

「うん、そうする。五日間だっけ……レイも居なくなっちゃうしね」

「本人目の前にして鬼の居ぬ間に洗濯って発言は戴けんよ」

こどもぼそりと視線を逸らしつつものを言う様は、見た目がよろしいだけにあざといなあと感じる。ただ内容が内容であるために同時にため息も吐いてしまうけども。あまり自覚はしていなかったけど、普段からそんなに焦らせているようならば今後は改善が必要かもしれない。

簡単な会話を交わしつつも出発するための最終準備を終わらせていく。とりあえず

使い切ることがない程度まで変換した現地通貨、インターネット環境が皆無だから電子手帳程度の役割しか果たさないタブレット、貧弱な電気周りに対抗するための代えのバッテリー等々。

普段とは少々変わった荷物セットが有効に働いてくれるのを祈るばかりだ。確か実家の方は、夏場も頂上部に雪が残るような山脈にほど近いということもあって初夏の到来までは肌寒い機構が続いていたはずだ。小さめのキャリーバックとリュックサックを装備して、寒さ対策を兼ねた厚手のジャケットを羽織れば準備は完璧だろう。

「行つてらっしゃい。レシルちゃんにもよろしくね」

「そつちも怪我とかしないように気を付けてね。お土産期待しているように」

鬼がどうか言っていた割に、藤沢さんはなんだかんだ部屋を出るまでこちらを向きつつ、去り際には小さく手を振つてくれていた。こちらもお返しとばかりに手を振り返しつつ、何故か妙な気恥ずかしさに苛まれて早歩きで部屋を後にした。

ここのシーンだけ切り取ってみたらまるで青春の1シーンのようなホンワカとした甘さを感じるのだけでも、そんな雰囲気のまま出発が出来たのかといえどそんな訳もなく。居室の前の廊下をキャリーバックを引きながら歩き出した瞬間、狙っていたかのように平塚先生の部屋の扉がガラリと音をたてて開き、「すまん昨日聞こうとして忘れてた。5分で終わらせるから」という文言のもと研究の進捗について話し合うために平

塚先生によつて部屋に引きずり込まれたのだ。

早めに出発したことがある意味で項を奏した。きつかり5分で済んでしまった話合いの後早歩きで目的地向かいつつ、今後は自分も藤沢さんに電撃的な議論を持ちかけるのは止めようと小さく心の中で決意をした。

その2

エルトニアの主要交通とは何ぞやと言われると、長距離且つ大量輸送に優れた駅馬車一択と言わざるを得ない。そもそも主要なものにも普通の庶民に与えられた選択肢がそれくらいしかないのだから、現代日本に慣れた現状から言えば不便極まりない。

国の中心部である首都リーヴェルこそ平野部に位置しているが、そこから各地方都市に行こうとすると大抵何かしらの山間部に突っ込むこととなる。故郷エルドリアンから王都リーヴェルへの道のりは、たかだか国内の移動だというのに駅馬車を乗り継いで三日間という現代日本じゃまず考えられないような時間スケールを要するとのことだ。馬を使いつぶさないようにとの措置と思われるが、山間部の通過に要する時間の長さを考えると人間だけではなく馬にとつても走破が苦痛であることは想像に容易い。

「なんせやる事が変わりばえの無い景色眺めるか雑談するか、あと寝るかしか無いし……」

ただ今回使う乗り物は幸運にもそんなに時間を要するような物ではない。流石に往復込みで一週間を超える期間を不在とするような出張は難しいと川崎さんに打診を試みたら、あっさりと乗合馬車に代わる足として車を用意してくれた。

一般的な自動車に対応した舗装済の道は現在リーヴェルから大月に通じるゲートの間しか通じていないから果たして車を使うのは大丈夫なのだろうか。そんな疑問が湧かなかつたと言えば嘘になる。ただ長時間の待ちぼうけをしなくても良いという喜びの方が大きかった。

「……ずいぶん立派な車だなあ」

そしてこの魔法騎士学園の正門近くに停まっている車の外観を一目見た途端、そんな疑問もボワツと立ち消えてしまった。凹凸がそこらの車よりも大きなサイズのタイヤに加えて、岩を踏んでも平気と言わんばかりに車体そのものが地面から結構浮いている。まさにオフロード車といって差し支えの無い、アメリカの映画に出てきそうなゴツツイ車である。

「にーいさーん!! おはよー!!」

「ゴメン、待たせちゃったようだね。おはようさん」

そんなオフロード仕様車のドアがバタンと開いたかと思えば、今日も今日とて満面の笑みを浮かべたレシルがひよこつと飛び出してきた。格好は学園指定の制服のままではあるが、実家に帰るのなら仮にも貴族なんだしオシャレをしたってバチは当たらないんじゃないか。ただその一方で、大貴族の一員という立場でありながら庶民的な感覚を忘れないというのは個人的に好感が湧くポイントでもある。

「おはようございます。平塚さん、今回の一件ご協力感謝致します」

「いえ、こちらこそ急な申し出に答えていただきありがとうございます。実際の話し合いは明日以降ですが、お互い頑張りましょう」

レシルに続いて運転席から姿を現したのは、普段よりも少しばかりラフな格好に身を包んだ川崎さんだ。ビシツとしたスーツが彼のトレードマークとして頭に焼き付いていたからか、私服姿は新鮮さを感じる。その上どうやらこのパワフルそうなオフロード車は普段おとなしい様子を見せている川崎さんが運転をするのだろうから、人は見た目によらない。

そんな川崎さんだが、車から出て来るなりまず頭を下げ、握手を交わしてくるあたり、思いつきで僕が彼にあてた提案が、想像以上に彼らの痒いところに手が届くものだったのかと実感をする。

「先日連絡した通りですが、おそらく遅くても今日の夕方までにはエルドリアン入りが出来るでしょう。途中何度か休憩は挟みますが、基本は早さ優先です」

「分かりました。確認ですが、ここから向こうまでの道については大丈夫ですか？」

「ええ。エルドリアンへの道順は以前伺ったときのものが記録として残っています。頭に叩き込んできましたし、なんたって地図も手元にありますから問題は無いでしょう」

車の後部に荷物を積み込むのを手伝ってもらいながら川崎さんに数点の確認をして

みたが、なるほど想定したようなトラブルの芽は今のところは無さそうだ。

運転席には川崎さん、そして後部席に僕とレシルが乗り込んだ。一般の乗用車とは比較にならない車高は、ただ車に乗り込むだけでも段差が大きいから一苦労である。

「それでは車を出します」

川崎さんの言葉と同時に、オフロード車のエンジンがかかった。一般の乗用車とは比べにもならない大きな振動と音に、思わず僕とレシルで揃ってビクツと身を震わせた。

「ああ、注意し忘れてました。これ意外と揺れるんですよ。ここに法的規則はありませんが、お二方とも安全のためシートベルトを着用してください」

バックミラー越しにチラリと写るどこか楽し気に喋る姿から、絶対この人揺れで僕たちが驚くのを分かかって言わなかったなと容易に推測できる。格好やオフロード車を運転するという事実に加えてこれだ。川崎さんという人は、僕が思うほど事務的でお堅い存在では無いのではないのかもしれない。

彼の指示通りシートベルトを着用し、レシルも見様見真似でそれに続く。学園の敷地を出た車は、道を行く馬車や手押し車達の速度に合わせて徐行運転で流れに乗っている。いくら車が大きいとはいえ、バスとは違って僕らの視点は通行人たちと大差はない。ということとは、道なりに進む明らかな異物の存在に向けられる通行人たちの視線は、中に乗る僕らにも容赦なく向けられるのだ。

「ちよつとの辛抱です。街の検問抜けたら飛ばせますんで」

「飛ばすつて言つても街道はそんなに走りやすくないんじや……」

「大丈夫ですよ。こいつはオフロードにも対応してますし、街の近くは割と整備されている方なので80なら余裕です」

実はこの人結構な飛ばし屋なんじやなかるうか。80という高速道路レベルのスピードで、アスファルト等で舗装されていない道を走破したらどうなるか。慣れた様子の川崎さんは置いといて、僕やレシルはまず間違いなく乗り物酔いするだろう。それどころか道へのダメージが洒落にならないレベルに成りかねない。

「安心して下さい。これまで何度かここらで運転しましたが、道や車に問題は起きていませんよ。この街道も案外ちゃんとしたつくりをしているみたいですね」

「何度かつてことは、やはり遠方まで何う用が多いんですか?」

「最近はどうでもないんですが、半年くらい前までは何度かありましてね」

道なりに進んでいくと、バスに乗っていた時は視点が高いからあまり気にしていなかったが、段々と道行く他の車両に差異が生じ始めてくる。洒落た感じの馬車やら小さな荷車等は姿が少なくなり、大きな貨物車や乗合馬車の割合が高くなってきた。そして細かな馬車が減つた分、道の混雑具合そのものも段々と空いてくる。

「今はシーズン外で王都の内外を行き来する人たちが少ないから空いてるね。収穫祭の

頃だと街の門はもの凄く混むんだ」

なるほど、周囲を進む車両は街の外に用がありそうなものが多く見受けられる。レシールの言うとおり、街自体が繁忙期となればこういった車両が増えてごった返すのだから。

「その時期に走ったことはありませんけど、もう酷いものでした。街の外に出るだけでもかなり時間が掛かるわ、街道も混んでいるから追い抜きも難しいわで……」

ともなれば、そんな混雑があまりない今日は、一体川崎さんはどこまでかっ飛ばすのだろうか。街の門が眼前に迫る中、なぜ酔い止めを用意するという思考が無かったのかと、今朝の自分を呪った。

「安心してください。街を出るまでは飛ばしませんから」

ということとは、街を出た後は一体どこまで飛ばすのか。笑顔とともに差し出されたその言葉に、安心できる要素などみじんも感じられなかった。

その3

街の外で待機していた別の車両と合流してはや三時間。多少の道の乱れなんて何のその、巨大なタイヤは小さな石や段差を難なく踏みつぶしながら勇ましく進んでいた。まるでCMの一場面に出てきそうな、未開の道を猛進する三台並んだオフロード車。もう平原地帯は当の昔に抜け、エルドリアンへの難所である山道の尾根の中頃に差し掛かって、オフロード車軍団はスピードを緩める兆しは待たなく見せていない。

さて、確かにオフロード車だけあって、段差や陥没にタイヤが差し掛かっても何事もなかったかのように通り過ぎていく。しかしいくら通行に問題がなくても、内部へ伝わる揺れは全く軽減されない。その揺れをむしろ楽しんでる疑惑のある川崎さんや、矢のように過ぎていく外の景色をずっと眺めているレシルとは対照的に、案の定というべく自分は絶賛車酔いに陥っていた。本来であればこんな無駄なこと考えていないでさっさと意識を沈めて寝てればいいものを、前日しっかりと睡眠をとっていたり、到着した後のことが頭を過るせいもあって、さっぱり眠気が訪れない。

——ゴットン!!——

「やはりこういう道なき道に行くのは良いですね。日本じゃあこんな経験ができる道は

ないですよ。曇ってきたのが玉に傷ですが、景色が良いですね」

今の衝撃は胃に来るものがあった。朝食を少なめにしていたよかつたと、本気で胸をなでおろす。

「もう2つ目の宿場町だよ。クルマつてすごいね」

「……川崎さん、なんか予定よりもえらく速いペースじゃないですか?」

今よりはまだ道が平坦だった平野部。そこを通過している最中に、速度メーターの値が時折90を越していたのを、僕は後部座席から冷や汗を浮かべながら見つめていた。半日かかるはずの旅程が、なぜ高々3時間で半分を余裕で越しているのか。その理由のすべては、対向車を避けたり馬車を追い抜かす時以外は常時80 km/hを越していた事実起因しているはずだ。むしろそれ以外に存在するものか。

「ついつい飛ばし過ぎちゃいましたね。後一時間と少しといった感じですか。平塚さんももう少しの辛抱ですよ」

さわやかな笑顔で我慢を強いる川崎さん。まあ今更ゆっくり走ったところで、むしろ車酔いに苦しむ時間が長引くだけのような気がする。ならば後は如何に到着するまでの時間無心で過ごすかだ。

「顔色悪いけど、兄さん大丈夫?」

「は、はは……頑張るよ」

最初こそ積極的に話しかけてきたり、こちらの肩口を突っついてきたりしたレシルも、山間部に差し掛かり本格的に車酔いへ浸かった僕の様子にただ事じゃないと思ったのか、とうとうちよっかいを出してこなくなった。

なぜ車に乗った経験がそんなにないレシルが平気の平左で、現代日本歴トータルで30年近い僕が車酔いにどっぷりと浸かっているのか。世の中は理不尽で塗れている。

「到着後の予定を確認しましょうか。平塚さん、よろしいですか？」

「……問題ないですよ。お願いします」

正直今この状態で話を聞くのはつらいものがある。ただ、それで音を上げるのは何か癪に障る。吐き気をグツと飲み込み、ルームミラー越しに川崎さんへ頷いた。

「では遠慮なく。フォルガントさんは、日が暮れる前にフォルガント家当主に話を通し、明日に私たちと共に当主と謁見できるように取り計らいをお願いします」

「父上は現在本家にいるはずなので、伝えるくらいなら着いてすぐに出来るかもしれないです」

そもそもの目的がフォルガント家当主、つまり父上へ話を通さなければ始まらない以上、レシルを連れてきたのは正解だった。

「あ、もちろん兄さんも一緒に連れていきます」

「そうですね……確かにお二人で行ったほうが、後々スムーズに進むかもしれませんね」

その直後に言った兄妹同伴というレシルの発現に、若干思案顔になった川崎さんが同調した。何年も前に泥を塗ったあの家にもう一度顔を見せる。しかもその相手が父上と来たか。レシル同伴でもなければ、まあまず到達不可能な難題だ。

「それで許可を取った後、2日目に大学運営に関する話を私と平塚さんで行います。言わばそこが本番です。そのためにも今日に謁見許可をもらえるかが重要です」

「……任せてください。妹頼りになるのは否めませんが、必ず吉報をお持ちします」

* * *

『お前には、レシルティアのような魔法の才はない』

妹がフォルガント家の主催する夜会で社交デビューを果たした日の夜、父上の執務室にて言われた言葉がそれだ。

このころはもはやこの騎士と魔法の世界に見切りを付け、魔石の購入と異界から流れ着いた雑具に関する情報の収集に執念を燃やしていた。だから、今更妹との差を数少ない肉親に指摘されたとしても、自分の表情はたぶん欠片も変化していなかった。

『だが、それを差し引いても勉強、知識、洞察力。能力は眠らせておくには惜しすぎる。お前も、確かにフォルガント家の血筋を継ぐ者なのだ』

それがどうしたというんだ。そのほとんどが、今から10年近く前に早川先生から直々に叩き込まれたものだ。決して、この家だからどうだなどと言われるものなんかじゃない。僕の努力だ。早川先生のアドバイスから自分の手で試行錯誤し、研究世界という特殊な環境で生き抜くために身に着けた、この俺の力だ。

『その才を伸ばしたいのならリーヴェル魔術学校へ行け。お前の能力は、長男たちの大きな助けとなる』

ご生憎様だ。僕が学校に通うとすれば、それはリーヴェル魔術学校や妹が通うことになる騎士学園等ではない。はいつくばってでも、僕には戻るべき場所がある。あの懐かしいの先生たちがいる所に。

『幸運なことにエルトニア王国立魔法騎士学園との距離も近い。レシルティアと共に切磋琢磨して王国に尽くすのだ』

レシル、今の僕にとって唯一といってもいい、互いに理解しあえる存在。そして彼女が独り立ちできるまでは絶対に離れないと誓った人。

お前は最愛の妹を見捨てて、日本へ一人で帰るのか。そんなこと欠片も考えていないはずの父上の言葉が、なぜかそんな意味合いを持って耳に染み込んでくる。日本へ帰る、それはこちらの世界に生まれた時から目標だ。絶対に変えることなど、あり得ない。

『お兄ちゃん……私、王都に行かなきゃいけないって……』

いつの間に、僕の後ろにレシルの姿が現れた。彼女はギョツと僕の寝巻の裾を握りしめる。周囲の光景は僕たちに用意された小さな部屋。立派な燭台の明かりなど影も形もなく、僕たちを照らすのは窓から差し込む銀色の月明りだけ。

『あの人は、お兄ちゃんも王都に行くって言つてた、よ？　これからも、私たちは——』
——ずっと、一緒だよ？——

あの言葉に「うん」と答えた僕の顔は、どんな物だったのだろうか。妹へ振り返ろうとした僕の視界に、机の上に置かれた鏡が目に入る。僅かな月明りで目を凝らせば見れる、その鏡に映し出された僕の表情は——

* * *

「起きてー!!　兄さん着いたよ!!」

肩を揺らす衝撃で、自分がこの暴走車の中で眠りに落ちたという事実には驚愕しながら意識を戻した。車酔いが一定の水準を越し、とうとう防衛本能に火が付いたのか。

周囲の光景は、代り映えのしない木々や山道からは大きく変わり、広大な畑に混じつて小さな家屋がいくつか建っている。そしてオフロード車の列が向かう先には、王都

リーヴェルと同じく街を覆う城壁が見えた。乗合馬車に混じって列に並ぶ三台のオフロード車。その先には、簡易的な検問が設営されている。記憶の限りでは、この検問の通過に際し、王都リーヴェル程の厳密さはなかったはずだ。

「また、戻ってきたんだな」

重苦しい曇り空の下に広がるは、フォルガント家統治領、エルドリアン。レシルと共に10年少しを過ごした、我が第二の故郷。再びこの地に訪れる機会があるとは、雪が降る中一人街を去った時には考えてもいなかった。

その4

乗り合い馬車の停泊所に並んだ3台のオフロード車。王都ほどの道幅がない中で領主の館まで巨大な車で走破するのは難しいという判断から、車は置いていくことになった。それに仮に道幅に余裕があったとしても、全体的に舗装が十分でないこの都市でオフロード車を走らそうものならば、道の至る所がボコボコになるのは想像に容易い。

行楽シーズンから外れているためか、停泊所にはある程度の余裕があったことが幸いした。管理人に話を通して相場よりも高い使用料を払うと伝えたら、二つ返事で使用許可が出た。ただ、馬小屋脇に併設されているから馬の生活臭が漂う車両置き場にたどり着いた途端、川崎さんが物凄く渋い顔を浮かべていたのが思い起こされる。結局三台とも停車させたが、せめてもの抵抗なのか、川崎さんの運転していた車は馬小屋から一番離れた場所に停められた。

そんなわけもあって、現在はメンバー全てが街中を徒歩で移動している。城壁に囲まれた街の規模は王都リーヴェルよりも小さく、その中央に位置する当主の館に歩いていくのは苦ではない。

検問所近くの宿泊街を通り過ぎ、いくつかの露店が立ち並ぶ中央通りを移動する。

リーヴェル程とは言わないがそれなりに通行人の数は多く、数年越しの故郷エルドリアがさびれた地方の一都市に変化していないことに少しほっとした。都市部への一極集中が顕著な現代日本では、高々数年の経過であっても地方の町が一個衰退することは珍しくもない。

外部からの襲撃に備えて曲がりくねった中央通りの先には、街の中心部に聳える大きな建物の姿が見える。周囲の赤レンガ屋根の建物と同じトーンを感じさせながら、その規模は他よりも幾分か立派に見える。そしてエルドリアン全体を見渡せる一本の高い塔が、その建物の外周部に鎮座していた。

六大家の一つ、エルトニア北西部一帯とその中核都市エルドリアンを統治するフォルガント家。その由緒ある一族が住まう場所が、ようやく目の前に見えてきた中規模の城だ。当主やそれに近い者が居を構える城本体、そして兵士やメイドたちが生活をするいくつかの小規模の建造物。それらをグルッと取り囲むのはいくつかの見張り台を備えた城壁だ。城塞都市の中でさらに城壁で囲まれた区域が、僕たちの目的地たるフォルガント邸である。

「我々はここまでですね。お二人とも、後は頼みましたよ」

「分かりました。夜前に一度そちらの宿に伺いますので、また後ほどお会いしましょう」
数名の部下を率いた川崎さんが城壁前を通る道の対岸で手を振っている。城への正

門近くで彼らとは一旦別行動となり、その後は僕とレシルの二人だけでこの城壁の中へ入ることになっているのだ。

「……顔があまり明るくないね」

「兄さんも、ボクとお互い様だよ？」

まるで僕らの上に広がる灰色の雲の如く、恐らく僕の顔には緊張とも覚悟ともとれるこわ張った表情が張り付いているだろう。そして脇を歩くレシルの顔も、あまり優れていないように見えた。共に幼少期を過ごした間柄だ。エルドリアンの街そのものはいざ知らず、この城壁の中での思い出に複雑なものも多いのは分かっている。多少なりとも、目の前の城門を潜り抜けるのには覚悟が必要だ。

ポケットに入れていない右手が、レシルにぎゅつと掴まれた。彼女はその手を引いたまま、城門の両脇を固める衛士に近づいた。

「レシルティア様!? 一体いつ王都からお戻りになられたのですか!? それに今は学園の休みでは……」

「父上に用があつたので帰郷しました。彼はボクの客人だ。身元については……見れば分かるはずですよ」

仕えている公爵家の令嬢が、護衛一人も無しで王都から戻ってきている事実は大層慌てたのだろう。城門を守護する衛士の一人がこちらの顔に目を向けた瞬間、血相を変え

て走り寄ってきた。ただ心配と驚きをありありと示す彼に対して、レシルの対応はずいぶんとそつけないものだ。その彼が、レシルに言われるがまま客人扱いとなつてゐる僕の顔を覗き込んだ。こちらも苦笑いを浮かべて見つめ返す。

数秒間、互いに瞬きせずに相手の顔を見つめる。この衛士の顔は、残念ながら己の記憶には残つていないようだ。当時から対した接点もなかった兵士のうちの一人なんて、数年間も合わなければ記憶からさっぱり消えてしまう。その一方で、相手のほうはそうではないようだ。

「そんなまさか……貴方は、ラストイレイ様ですか……?」

「……覚えていただいたみたいですね。昔はこの家でお世話になつておりました。現在は、平塚礼二と名乗っております」

正直に言おう。ものすんごく気まずい。

此方は当の昔に家出をして勘当された身だ。ただでさえ家の中における立場は高いほうではなく、それでいながら公爵家の加護から抜け出したのだ。言わば、二度と帰つてくるはずのない存在の筈だった。その僕を前にした彼の反応は、まるで腫物を扱うかのように。久方ぶりの再開への喜びはおろか、僕が行なつた常識外れの行動への怒りすらも感じられない。言わば彼は、6年前に死んだ人間を前にして硬直しているかのような状態なのだ。

「この度は、フォルガント家当主、テオル・アルマルク・フォルガント公爵へのお目通りをお願いしたく参りました。レシルティア様のお許しは既に頂いております。お通しいただけますか？」

胸に手を当てて、斜め15度程度の角度で礼をする。二度目の少年期に身に着けた、目上の人へ挨拶をする際の正式なマナーである。固く、冷静に、そして落ち着いて最後までやり通すことを努める。この家で上手く立ち回るには、己という存在をなるべく殺して一見して冷徹とも言われるくらいが丁度良かったのだ。今みたいな形式ばった挨拶も、あの時は日常茶飯事だった。

「……お嬢様のご客人という肩書ならば問題ありません。どうぞお入りください」

許可を受けたその瞬間、レシルが僕の手を引いて城門へと速足で歩き始めた。まるで引つ張られるようにして、己の足はフォルガント家の敷地へと向かっていく。

たとえ嘘でもいいから、おかえりなさいの一言が欲しかった。仮にも生まれ育った家。その実態が本妻の子供たちとは隔離された場所での妹との共同生活であったとしても、肉体が幼かった時の世界のすべてはこの広大な邸宅を中心としていた。だからここは、今の人生における故郷に違いはない。

足が踏みしめるのは、あの頃から変わらなず整備された館へと続く石畳の道だ。正面に見える領主の一族が住まう本邸、左右の奥に控える兵舎と使用人の宿舎。6年前に見た

あの時から何も変わらない。そしてその風景の中を連れたつて歩くのは、やはり相も変わらず妹なのだ。結局見える範囲で変化をしているのは、精々が僕たちの年齢だけだ。

一体、今の僕は何処に帰ればおかえりなさいと言ってもらえるんだろう。無人の自室か、もはや引き払った前世からの実家か、山形に移り住んだという前世の両親の家か。たった数文字の言葉を言ってもらえる機会が、思い返せばすごく希薄になったものだ。記憶に残っている限りでは、平塚先生と共に実家へ間借りして住んでいたときが最後か。とても丁寧とは言えないような、平塚先生のおかえりという声。それが、記憶の中の最後ののだ。

荘厳な扉の前に足が止まる。一家の誰にも知らせていない帰郷のためか、お手伝いさん方が先んじて扉を開けているなんてこともない。一見して重厚そうな扉をレシルが片手で軽々と押し開き、そしてこちらに向き直った。

「また兄さんと一緒にここに帰ってこれるなんて、まるで夢みたいだよ。ようやく、ボク達は故郷に帰ってこれたんだ——」

目じりに涙を浮かべ、レシルは小さくはにかんだ。

「——おかえりなさい。兄さん」

「……ああ、ただいま。そして、おかえりなさい」

すつと、レシルの言葉が胸に入ってきた。久方ぶりに言われた言葉。それはこの兄妹

にとつておそろいのものなのかもしれない。ただの数文字で終わるその言葉を、ずっと言つてほしくて、ずっと言つてあげたくて。僅かばかりにぼやけた視界の中で、レシルはただ穏やかに破顔していた。

彼女に手を引かれるがままに、幾分軽くなつた足取りで扉を通り抜ける。目の前に広がるのは、臍気ながら見覚えのある二階まで吹き抜けの開けた空間だ。飾り付けられた鎧や豪華な燭台、触ることすら憚れる金の額縁に彩られた絵画が目に入る。幼少期において別邸でレシル共々暮らしていたためか、これらの眺めにそこまでの馴染みは無い。ただそれでも僅かながらに残つた記憶が、この場所が生まれ育つた場所の一部であることを示している。

ちようど人が少ないタイミングで訪れたのか、ロビーには僕たち以外の人影が見えない。ずいぶん静かだ、燭台に垂れ下がる硝子細工の揺れる音まで聞こえる。そんな空間に聞こえ始める自分たち以外の足音。音のする方向に注意を向けていると、奥のほうから駆け寄ってくるメイドさんの姿が見えた。

「お、お帰りなさいませ、レシルティア様。お出迎え出来ずに申し訳ございません!!」
「別に良いよ。こつちが急に帰ってきたんだから仕方がない」

見た感じレシルと同じくらいの年齢だろうか、年若い茶色髪のメイドさんがレシルの元まで駆け寄り、何度か頭を下げている。それに対するレシルの様子といえは、よく言

えば気にした風もなく、悪く言えば面倒そうに冷たく流している。帰宅時に使用人一同がずらりと並んでお帰りなさいと述べる光景は、確かにレシルは嫌いそうだ。

「彼は客人だ。父上に面会を願いたい。彼は今何処に？」

「お客様……ですか？ ええと、テオル様は現在商工組合との話し合いの最中です」

彼女は僕とレシルを見比べて少々不思議そうな表情を浮かべている。非常に似通った見た目の人間が並んで立っているのだから、彼女の反応も何らおかしいことは無い。僕らの関係性について気付いていないということは、おそらくこのメイドさんは僕がこの家を飛び出した後にここへ奉公しに来たのだろう。

「分かった。どのくらい掛かりそう？」

「先ほどから始まったので、おそらく夕刻までは掛かるかと……」

彼女の言った時間は案外長いものだった。完全に日が沈む前までに面会をすることは可能だろうが、川崎さんたちに報告できるのは想定よりも遅くなりそうだ。

別に自身に非がある訳なんて無いだろうに、メイドさんは申し訳なさげに頭を下げている。それを一瞥したレシルは、別に気にしていないとばかりに首を振り、すぐに彼女から視線を外した。

「ならその時に父上に会うことにするよ。ボクの部屋で待機をしているから、会議が終わりそうなタイミングで呼びに来て」

「し、承知しました!! あの時、お待ちになるのであれば、談話室をお使いになればよろしいかと」

用は終わりだといわんばかりに再度玄關扉に向かうレシルを、メイドさんが慌てて呼び止めた。振り返ったレシル、その顔には若干の険しさが見える。何かを言おうとして口を開けかけたレシルは、その直後に小さく首を振った。

「……いや、わざわざありがとうございます。だけどボク達は部屋で待つよ」

メイドの少女へ向けられたのは、ぎこちなさはあるながらも穏やかさを持ったレシルの笑顔だった。少し驚いた表情を浮かべてこちらを見つめる少女を放置し、レシルは僕の手を引いたまま本邸を後にした。相も変わらず親しくない人間には冷徹な令嬢モードを通すのかと思えば、最後にはきつちりと年相応の表情を向けることが出来ていた。彼女が僕や藤沢さん以外に心からの笑顔を見せる日は、おそらくそう遠くは無いかもしれない。

その5

「ここが、この家におけるボクの部屋だよ」

フオルガント卿の会議が終わるのを待つことになった僕らの姿は、本邸の建物から離れた場所にある別の小屋にあった。使用人宿舎からそう離れていない場所にある、本邸よりは質素ながらそれなりにきれいにまとまった小さな建物。この離れに、今のレシルが使っている、ないしは僕がまだ家を出る前にレシルと共に暮らしていた部屋があるのだ。

曇り空の下、少し薄暗い部屋の景色に目をやった。未だに二つ並べられたベッド。作業や本を読むための小さな机も窓辺に二つ並べられている。机の上には小さな鏡が置かれており、全体的な部屋の内観は昔から何一つ変わってはいないように見える。当時の違いとして目に入ったのは、社交用のドレスが収納されていると思われるクロゼットが部屋の隅に置かれていることか。また着替えに使っているのだろうか、ベッド脇には全身がすっぽりとうつる大きな鏡が設置されていた。

先ほど訪れた本邸に比べると、むしろこの部屋のほうが故郷に帰ってきたことを実感できた。数年間使う人間がいなかったはずの片方のベッドにも、当時の光景を思わせる

ように最低限寝つ転がれるだけのシーツが被せてある。恐らくレシルが使用人に頼み込んで、家からいなくなり勘当までされてしまった片割れの分も、いつでもすぐに使えるように残しておいてくれたのだろう。

「……あの時のままだ。年頃の公爵家令嬢が住む部屋にしては、ずいぶんと質素じゃないか」

「父上に頼み込んだんだ。ボクの部屋は、これからも別邸のここなんだって。これでボクは思い出の場所を手放さないし、義母上もボクの顔を見る頻度を減らせる」

ベッドに腰かけたレシルは、こちらを向きながら座っているとなりをパンパンとたたいた。隣に座れということなんだろうか。だが敢えて彼女の隣ではなく、昔自分が使用していたベッドの上に腰を下ろした。露骨にムツとした顔になるレシルに、思わず笑いが噴出した。

「義母上や義兄達とは、やっぱり疎遠なのかな」

「当然だよ。ボクは庶子の身だ。休暇期間も食事は別でとるくらいだよ」

当時から僕たちにあまりいい顔をしていなかった、フォルガント家の本妻達。彼らとの関係性は、数年経過した今でも相変わらずのようだ。むしろ年齢が大人に近づき、跡継ぎやらなんやらの話が頭をよぎる今のほうが面倒になっていられるのかもしれない。レシルが父上の会議が終わるのを待つ場所に本邸から離れたここを選んだのも、なるだけ

彼らと鉢合わせをしたくなかったからなのだろう。

ポスつと、隣にレシルが腰かけてきた。こちらが行かなかつたから、どうやら向こうから近づいてきたらしい。二の腕のあたりに風に吹かれた彼女の銀髪がさらさらと当たった。

「……この家で、ここが唯一の安らぎの場なんだ。ここならばあの連中もわざわざやって来ないし、使用人も最低限の用でしか訪れない」

幼少期を過ごしたこの部屋で、昔のように兄妹二人きりで並んで座る。この今の状況が、本当に昔懐かしく思えた。月明りが部屋を照らしていた夜は、明るいから眠れないというレシルを寝かしつけるために、こうやってベッドに隣同士で座って現代日本で聞いた昔話や童話を聞かせたこともあった。

「なんだか、いっぱい話したいことがあったはずなのに、兄さんと並んで座ってたら眠たくなつてきちゃった」

「……そうかい。夕方まではまだ時間があるよ。少しばかり昼寝をしたって良いんじゃないかな」

冗談めかして膝をポンポンと叩いてみれば、待つてましたと言わんばかりにレシルは人の太ももの上に頭を乗せてしまった。少しばかり乱れた銀色の長髪を手で梳かしてやれば、彼女はくすぐったそうに頭を揺らした。部屋の窓側を見つめるレシルの表情は

こちらから見るとは出来ない。ただ、何度か頭をポンポンと撫でているうちに聞こえてきた小さな寝息から考えるに、たぶん安心した笑みを浮かべていてくれるだろう。

規則正しい寝息が聞こえ、どうやら彼女はすっかり寝てしまったようだ。片手はレシールの頭の上に乗せ、もう片方の利き手で持ってきた荷物をごそごそと漁りタブレット端末の電源を付けた。一応仕事は切りのいいところで中断しているとはいえ、ちよつとばかり時間が空けばすぐに再開できるようにファイルの一部をこうやってタブレット端末に移してきているのだ。やはりこの立場になつてからは、扱うべき書類の数が学生時よりも膨大になつてしまった感がある。ちよつとでも気を抜けば、こなさなければならぬタスクはすぐに僕をペしやんに押しつぶすだろう。

そんなこんなで作業でもしようかなと思つた間際、視線がタブレット端末の画面から、すやすやと寝息を立てるレシルへと移動した。指は開こうとしたデータファイルではなく、おのずと右下のカメラアイコンに向かつていた。ちよつとくらい、こんな無防備な姿で寝ている姿をカメラに収めたって良いだろう。小さなシャッター音は彼女を起こすようなことは無く、画面には窓辺から入る光をキラキラと反射する銀髪頭が映し出されていた。

「…………意外と重いな」

やはり幼少期とは体の大きさが違う。昔は何ら苦にならなかつた膝枕も、お互い育つた今じゃ意識して分かる程度には太ももの血流が阻害されている。たぶん彼女が起きた暁には、足のしびれで悶絶する未来が待っているだろう。ただそんなで起こすようなことはしない。時折すりすりと頭を揺らすレシルを眺めつつ、意識をタブレット端末へと移した。

* * *

「レシルティア様、失礼します。テオル様の会議が終わりました……レシルティア様？」
日が沈みかけて雲も厚くなってきたのか、部屋の中にはタブレット端末のぼんやりした光が妙に目立っていた。そして窓辺から聞こえる雨音に混じり、扉の外からメイドさんの声がした。返事がないことに不審に思ったのか、再度の呼びかけも聞こえる。ただそれに答えるべき人間は、昼寝を通り越して完全に爆睡状態にあつた。等間隔で寝息を漏らすレシルは、まあちよつとやそつとで起きそうには見えない。そしてそれ以上に、僕も動けない状態になつていた。

「レシル、起きて。もう時間だよ」

小声で呼びかけるが、無反応。肩をポンポンと叩いても覚醒する兆しは見えず、強め

に体をゆるすろうにも膝枕という体勢のために下手に揺らせばレシルの体が床に墜落しかねない。ついでに言うならばこつちも両足共に完璧に痺れてしまい、指先の感覚なんぞ全く感じられない。今無理に立ち上がるものならもんどりうってぶつ倒れるのが目に見えている。

「レシルティア様、入りますよ?」

「だ、大丈夫だ。これから父上の元に向かうから、君は戻っても大丈夫だよ」

少し声のトーンを落として、それっぽい口調を作つてメイドさんに返す。今彼女に入つて来られたら、一介の客人がベッドの上で公爵家令嬢を膝枕して寝かしているなんていう現場を見られてしまう。自分でもびっくりするくらい似ていたレシルの声真似で、何とかこの場面を切り抜けられないものか。

「それが、テオル様はすぐにレシルティア様とご客人を執務室にお連れしろと言つておられました」

「お兄ちゃ……まだ朝じゃ……」

グシグシと瞼をももにこすり付けながらレシルが寝言を漏らしている。彼女の頭が動くたびに足の先まで電流が流れるかのような痺れが伝搬し、うめき声が出そうになるところを何とか飲み込んだ。

まずい。動けないし起きないし、扉外のメイドさんは帰る気配もない。場を切り抜け

ようにも、まず何からすりやいいのかさっぱりわからん。そして考えがまとまりきらないうちに、背後から扉がきしむ音が聞こえてきた。

「も、もしかしてお加減が優れないのですか!？」

「あつ、ちよまつ」

冷や汗を流しながら後ろを振り返った僕と、こつちが何にも言っていないのに勝手に慌てて入ってきたメイドの少女の目が、ぼつちりと重なった。お互い沈黙。沈みつつある太陽の光が窓辺を照らす中、両者ともに困惑気味の表情を向けあう。

そんな人の気も知らず、太ももを枕にすやすやと眠り続けるレシルの寝息が、静かな空間に聞こえる唯一の音だった。寝返りと共にこちらを向いた彼女の寝顔は、それはもうずいぶんと幸せそうなものだ。まるで久方ぶりの心底の安心感に包まれているように、外の出来事など関心を向けることなく夢の中にいるのだ。

僕とレシルが同じベッドにいる様子を凝視して、段々と顔を赤くしていくメイドの少女。まさかと思うが令嬢と客人のムフフな情事か何かと勘違いをしているのではないか。扉に手をかけてゆつくりと後ずさる彼女に、これは誤解だといわんばかりに全力で手を伸ばした。

その6

「使用人が言っていた話からまさかとは思ったが……やはりお前か、ラスティレイ」

遠方から響く雷鳴が、ほの暗い執務室の窓から侵入をしている。燭台にもされた執務機の向こうに、その雷鳴と共にゆつくりと喋り、こちらの目を見据えている一人の男がいた。こちらに関心の欠片も向けられないような無感情の蒼い瞳、後ろに撫でつかされた茶色の長髪。忘れるはずもない、彼こそが僕たち兄妹の実の父親にして、このフォルガント家の当主である、テオル・アルマルク・フォルガント公爵だ。

「……お久しぶりです、公爵閣下」

その彼に対して、一歩前に出て頭を下げた。威圧感というものだろうか、彼を前にするとどこことなくピリピリとした刺激を感じる。気を抜いてしまえば表情がこわ張りそうだ。しかし胸の内に沸き起こる様々な雑音をさとらせないように、努めて彼の双眼に己の視線を合わせ続けた。

「今の僕の名前は平塚礼二と申します。お目通りいただき、ありがとうございます」
「ヒラツカ、だと？　そうだったな、お前は既に勘当をした身だった」

そう、今の状況こそこの世界に再び帰還したときにいつか訪れるべきだった再会の場

なのだ。かたや公爵家の主、かたやその庶子で今は勘当の身。そんな絶対に折が合いそうにない状態にあつても、エストニア内で特殊な身分をもつて暮らすのであれば、絶対にはいつかは顔を合わさなければならなかった。そのいつかが、今なのだ。

「レシルティア、お前がラストイレイを再びここへ引きずり帰ってきたのか？」

「それは違います。ボクが兄さんを連れてきたんじゃない。兄さんは、自分の意志でここに来たんです」

部屋の扉近くで僕たちを見つめていたレシルが、フォルガント卿の言葉をすぐに否定した。彼はその言葉を耳に入れると、再度此方へその蒼い双眼を向けてきた。

「答えなさい、ラストイレイ。お前は一度フォルガント家から逃げ出した。その身でなぜこの場に戻ってきた」

彼の目つきが鋭くなる。普通に考えれば、たとえうまくお目通りがかなつても直後に突つ返されてもおかしくはない状況だ。下手なことを言えば、即お終いだ。すぐ様にフォルガント家の敷地から追い出されて、明日に控える川崎さんも交えた国立東都工科大学に関する話し合いが前提から行えなくなつてしまふだろう。

僕に切れるカードはただ一つ。今の僕は、庶子の身分としてフォルガント家で細々と暮らす、魔法も剣術も才能がない一人のちっぽけな少年のラストイレイ・フォルガントなんかではない。技術立国日本でも最上位とうたわれる国立東都工科大学にて17歳

で最高学位を取得し、母校で助教として教育と研究にまい進する一人の立派な研究者である平塚礼二だ。

そして、政府主導で推し進めるエルトニア近代大学計画のプロジェクトに最前線で参加をしているメンバーでもある。鋭くなったテオル卿の目つきを、こちらも目を見開いて見つめ返した。こういう圧力を感じる場での話し合いは、今までだって何度もあったんだ。

「僕がこの場に戻ってきた理由はただ一つです。フォルガント卿、閣下に国立東都工科大学リーヴェル校の協賛者となって頂きたいと思えます」

「二ホンが王都リーヴェルに建てたアレか。ライラ殿下がいたくご執心の……なぜお前がそれを？」

ややいぶかし気な表情を浮かべた公爵を見て、心の内側で一息ついた。あの無表情をどんな形でもいいから崩せたことは、間違いなくこの場を切り抜けるための第一歩なのだ。

「僕は今あの大学にて助教、こちらでいうところの研究員兼講師という役職にあります。日本国における最高学府の素晴らしきは、私自身十分に体感しています」

嘘偽りを全く含まぬ本心を喋る口は、こちらを見据える眼光に負けることなくつらつらと言葉を紡ぎだす。

「しかし我々の大学が持つ知見の強み、理念、そしてエルトニアに対する利点は貴族の方々へ伝わっているかといわれると、十分ではないのが現状です。そこで六大家の一つであるフォルガント家当主、テオル卿に我々の大学のことを知っていただきたいと思えます」

元来このフォルガント家という家系は、国境線を死守し武力でのし上がってきたというような武闘派の家柄ではない。どちらかといえば政治的な面で王家の統治をサポートしてきた実績に富んでおり、過去にも何人かの大臣を輩出してきたそうさ。そんな非体育会系の家柄から察するに、大学という外来のシステムの有用性をきちんと説明すれば、その利便性について理解を示してくれる可能性は他の六大家と比べても高いだろう。川崎さんがどこまで考えてフォルガント家に狙いを定めたかはわからないが、その選択は誤りじゃないはずだ。

「つきましては、明日担当の者を交えて本学の詳細や我々の研究内容についてお話したいと思います。今日はその打ち合わせに参りました」

とりあえず言うべきことは全て言った。この間に粗相はしておらず、表情もなるべく自然に笑顔を作れていたはずだ。

「……まさかあの得体のしれないアカデミーに、お前が関与をしているとはな」

彼にとってみれば、僕という存在は数年前に勘当して以降行方知れずの人間だったは

ずだ。確かにフォルガント家の加護から外れたただのラストイレイという名の人間は、この世界からは6年前に完全に消えている。今回の訪問は、彼にとってみれば完全な不意打ちだったのだろう。

執務室に入ってからからのテオル卿の様子を見るに、彼は僕の近況、この家を出て行つて以降の行方を全く知らなかったに違いない。ということは、レシルが去年東京見学会に参加した際に僕と会つているといふ情報は、彼には流れて行つてないのだろう。彼女も案外秘密主義なところがあるのかもしれない。

「まあいい、話は分かった。私もあのアカデミーに興味がなかったわけではない」「つ、ならば……」

彼に見えないよう小さく拳を握り締めた。因縁のある一方で大きな助けにもなる間柄のこの公爵を味方に引き入れることが出来たことに、自然と口元も笑顔になりかけた。

「だがそれを差し引いても、お前の提案ということに私は疑念を抱かざるを得ない」
ゆつくりと立ち上がった彼は、一転して険しい表情でこちらを見据えていた。いつの間にか降り始めていた雨が窓を伝う水流を作り、その奥でひととき大きな雷鳴が鳴り響いた。

「お前は覚えているか。この部屋で私と交わした最後の会話を。レシルティアと共に王

都で学び、国に尽くせと伝えた私の言葉を、覚えているか？」

風向きの変わる執務室の様子。外の大雨につられてか、部屋の中の空気までもが一段階寒くなったかのような錯覚すら感じる。

机に手を付き、強い調子で問いかけるフォルガント卿に、僕はわずかに頷いた。忘れるはずもない。こちらに来る途中の車の中で夢に見るくらいには、あの時の光景はあまたの中に焼き付いている。いふなればあの一夜が切っ掛けだった。現代日本に戻るために用意をし始めていながらも若干の迷いがあった僕が、引き金を引くことを決意したあの日。

「しかしお前は私の言に従うどころか、家を出てフォルガントの名に不義理を働いた。忘れてはいまいな」

時折夢で見るあの日の光景では、僕は既にある程度世界へ見切りを付けていて、実の父親から言われた言葉に関係なく既に現代日本行きを決定していた。己の頭の中では、あの日に関する記憶は無意識のうちにそういう風に解釈をされているのだ。

しかしあの日は確かに分岐点だったのだ。今のように客観的に当時の自身の記憶を振り返れるような状態にあれば、あの夜にフォルガント卿から言い渡された言葉によって自分の心が揺れ動いたことを思い出すことが出来る。

「そのお前が言うことなど、どうして信用に値するといふのだ」

「それは……」

「お前はフォルガント家に泥を塗った。わざわざここにお前を引き入れたのも、謝罪くらはい聞き入れようとしたからだ。しかしその様子では謝ろうという気は無いのだな」
何かを言い返そうとする前に、フォルガント卿の表情が失望したかのようなものに変わった。深くため息を吐き、此方から目を離して再度椅子へと腰かける。その様子は、まるでもう話は終わりだといわんばかりに。

「もう終いだ。レシルティア、客人を連れていけ」

彼はもはやこちらから視線を外し、レシルへと命令を行った。その冷徹な響きは、仮にも実の娘に向けうるようなものには到底聞こえない。

今の状況は最悪だ。上手くこちら側に引き入れられたかと思えばそんなことは無く、むしろ自分の存在に対して失望したかのような様子で会談が切り上げられようとしている。そう、当初の方針からは思いつきりずれてしまっているのだ。なのに僕の心の中に焦りは全く浮かんでこない。代わりに浮かぶのは、自分でもよくわからない感情。怒りか嫉妬か、少なくとも前向きなものではない感情は、果たして何に起因して何に向けられているのか。その悩みの最中、フォルガント卿の言葉にあてられておぼおぼと服のすそを掴んできたレシルの手を感じた。そこから伝わる僅かな震え。これが、実の父親を前にした人間の様子なのか。

「会談は終わりだ。早く連れ出せと——」

「——それが、実の娘に対する父親の態度か？」

気が付けば、そんな言葉が口をついていた。

「……何が言いたい」

「思い返せば、貴方は仮にも実の血縁者であつた僕たちにいつもそんな態度をとつていた。母上が亡くなり今日に至るまで、いつだつてそうだ」

レシルの手を解き、彼の前にある執務机の上に手のひらをたたきつけた。実の父親の目が吊り上がるが、それを前にもまるで熱にうなされたかのように何も感じない。

「あの時だつてそうだ。母の死後碌に会いにも来なかつた貴方に珍しく呼び出されたと思えば、王都にて学び国へ尽くせだ」

この部屋に入る前、それこそこの世界に見切りを付けた当時から胸の中にくすぶり続けていた感情がじわじわとあふれ出てくるのを感じた。たまに向けられる父上の視線は、いつだつて僕たち兄妹自身を見ておらず、いつも異なるものを注視していた。僕たちの能力か使い道か、はたまた全く予想しえない何かか。少なくともその人間性を見てもらえていたことは、僕がフォルガント家を出ていく前の数年間には一度たりとも無かつた。

「魔法の才がないが学の才はある。そんなことは分かり切つていた。そしてその才は、

貴方の言うようなフォルガント家の血筋によるものだなんて、僕は欠片も思つてはいない」

「ラストイレイ!! 黙つていれば好き放題言つて——」

父がこちらに負けじと吠える。しかしその真正面から睨み返した。

「これは俺の才だ。俺が恩師に習い、自分の手で身に着けたものだ!! レシルだつてそうだ。義兄達が受けている魔法の授業を遠くから眺め、独学でその才を開花させた。俺たちは最初からフォルガント家の血筋に頼つたり、ましては胡坐をかいてなんかいい」

父の目が見開く。そこに潜む感情は、激怒驚愕様々なものがまじりあつていゝことだろう。

「……俺たちを、僕たち自身を見て下さい。何なら妹だけでもいい。いくら庶子とは言えレシルは貴方の立派な娘です。その優れた魔法の才能にだけで目を向けるのではなく、等身大の彼女を見て下さい」

そして、ゆつくりと頭を下げた。もはや勘当された身なのだから自分自身は問題は無い。しかし今もフォルガント家の一員たるレシルには、せめてもう少しは良い待遇を願いたい。その願いが欠片でもいいから届いてほしい、その一心だった。言いたい文句は探せばまだまだあるが、もう目を見て話す気力もない。熱にうなされたような状態だつ

た頭から、急速にその熱気がスーツと抜けていくかのような感覚を受ける。そして最後に、ゆっくりと深呼吸をした。

さて、どう川崎さんに言い訳をしたものか。途中まではまあまあ良い感じで大学の話をしていたはずなのに、どこでボタンを掛け違えたかこんな流れになってしまった。まあ元はといえば僕自身の立場に問題があったようだし、僕が大学にかかわっているという話がフォルガント卿の耳に入れば遅かれ早かれこうなっていただろう。こうなったら、リカバリーとして他の六大家のどこかに話を通すしかないか。

「……言いたいことは終わりか」

「……ええ。わざわざお時間を頂きながら、このような話になってしまい大変——」

出来れば好戦的な家系はよした方が良いだろう。どっか良いところは無いかと記憶の片隅に残る他の有力貴族の名前を思い返す中、その瞬間は唐突に訪れた。

全てを打ち消すような衝撃、瞬間的に部屋に満ちる激光。その直後に響き渡る爆音。そして少し遅れて顔にたたきつけられる風と雨。まるで爆発でも起きたのかといわんばかりの衝撃に、気が付けば僕の体は思い切り後ろに倒れこんでしまっていた。直後に消えた紫がかかった白い光が網膜に焼き付いて、光から解放されてもまるで部屋全体が暗闇になったかのような錯覚を感じる。ようやく周囲を見渡す余裕が出来ても、爆音の残

り香がピリピリと指に残っていた。

頬に吹き付ける強風の出どころをたどってみれば部屋の後方にあつた窓ガラスは衝撃で破損しており、そこから雨風が吹き込んできていた。幸運にも窓硝子の破片が自分にたたきつけられたようなことは無く、窓辺にその一部が散乱していた。叩きつけるような雨が部屋の中に容赦なく吹き込んでくる。いつの間にかここまで天氣が激変したのか、話している最中はまったく気が付かなかつた。

「兄さん!! 大丈夫?!」

「あ、ああ。大丈夫だよ」

尻もちをついている僕の右腕を、駆け寄ってきたレシルが引つ張つた。一瞬の出来事に頭がくらくらとするが、何回か頭を振つて特に変な感覚が残っていないことを確かめる。

「落雷の至近直撃か。こんな経験初めてだ。この様子じゃ着弾地点は敷地内のどこかな」

昨今ゲリラ豪雨というものが日本を騒がせているが、こういう激しい落雷を実際に目の当たりにしたのはこれが初めてだった。頭をさすりながら立ち上がり、どんな被害状況なのかを確かめるべく窓の方に目を向けようかと思つた。そんなのんきな様子の僕とは裏腹に、フォルガント卿は一足先に窓を覗き込んだ。

中庭に面したそれなりに大きなサイズの窓は、邸宅の敷地全体はおろかその後ろに広がる城下町も一望できる。いったいどの辺に雷が落ちたのだろうか、後方から窓の外を伺おうとした直後、慌てた様子でフォルガント卿が振り返った。

「退けっ!!」

彼は僕を押しつけて一目散に執務室の外へ駆け出そうとしていた。僕やレシルに構う様子もなく扉に手をかけた彼の表情は、今まで見たことがないような焦りが浮かんでいるように見えた。その様子に呆気に取られながらも、再度窓辺を伺った。

「あれは……兵舎だね」

執務室に取り残されたレシルと僕で、並んで窓辺から外を眺めた。どうやら中庭の向かって右側の建物が被雷したようだ。あの位置だと、先ほどまで僕らが待機していたレシルの部屋がある別邸の隣か。煉瓦造りを主とする建物の一角が落雷の直撃によってだろうか崩れてしまっている。恐らくここら辺の建物は避雷針に相当する落雷防護機能を備えていなかったのだろう。若干ではあるが、雨に混じって焦げ臭いにおいが漂ってきた。

しかしフォルガント卿が気相を変えて様子を見に行った理由が釈然としない。とりあえずレシルを引き連れて部屋の出口へ向かいながら、その兵舎とやらに何かがあるのかを聞いてみよう。

「レシル、そこに何かの危険物、要は燃えやすい物とかがあったりするのかな」

煉瓦造りの建物は木造に比べりや燃えにくい。ただそれでも出火元が貯蓄してある大量の油だとか言ったら話は別だ。フォルガント卿が確認しに行ったということは、そういう危険物でも保存しているからなのかもしれない。

まあ今の天気は幸運にも大雨だ。多少落雷によつて壁が焦げたとしても、外装だったらずぐに消し止められるはずだ。まあそういう火災が起きそうな状態であれば、こちらが出る幕はあまりなさそうだが手伝えることがあれば手を貸すくらいの心づもりでいよう。

「ええと……あそこには近衛兵の居住区のほか、刀剣類が置かれているけど、燃えやすいものつて言ったら兵士と使用人共用の台所回りとか……」

「それでフォルガント卿があそこまで焦るかな」

どうにも釈然としない。彼が使用人の宿舎での台所回りについてあそこまで焦るだろうか。それこそ処置は現場の人間に任せれば良いわけで、当主があんなに焦るのだろうか。

「他には、訓練場整備のための用具とか馬用の干し草、あとは粉末魔石があるくらいかな」

「……粉末魔石？」

聴きなれない単語に、思わずレシルに聞き返した。ある程度の塊であると効果が高い魔石をわざわざ砕いた粉末状の魔石というのは、いったいどういう用途に使うものなのだろうか。

「いわゆる魔力源としての用途じゃなくて、例えば兵士の携帯コンロとかに使うんだ。少量を薪に混ぜれば湿気があっても火の付きが良くなるし、夜間でも発火させれば瞬間的にはとても明るくなるから、信号としての……用途、も……」

その説明をしているうちに、レシルの顔つきがだんだんと険しくなってきた。そして彼女の話を聞いていた僕は、その粉末魔石とやらがフォルガント卿の懸念に違いないと結論付けた。

粉末魔石の用途である、湿気のある中での発火促進。そして燃焼させれば明るさを放つという特性。そもそも、その形態が塊ではなく粉末という状態にあること。これらを統合して考えると、その粉末魔石はかなりの危険物である可能性が高い。しかも現在の状態は、落雷によって建物が崩壊したことによる浸水、及び若干の火の気がある可能性。現在自分の頭の中に浮かぶ、現代日本における粉末魔石と同じような性質をもった危険物に対してそんな環境を用意すれば、待っているのは収束困難な火災である。

「……レシル、急ぐよ。そいつはちよつとシャレにならない。消火方法を誤れば、一発でドカンだ」

「う、うん」

彼女の手を取り、廊下を駆け出した。下手な方法で鎮火をしようとすれば、收拾がつかなくなる恐れがある。今は、そういう状況だ。

マグネシウム粉末。おそらく粉末魔石に近い性質を持つと思われる、危険な化学薬品の名前だ。そもそもが非常に燃えやすいという危険性を抱えている上に、その火を水で消そうと思おうものならば更なる爆発的な燃焼を起こす、扱いを誤れば危険物になりうるものの典型例である。

その7

「状況はどうなっているッ!？」

「貯蔵庫直上に雷が直撃、見張り台の一部が崩壊しています!!」

フォルガント卿に遅れること数分。息を切らしつつたどり着いた兵舎は、確かに雷の直撃によってかなりの損害が出ているようだった。何人もの兵士や使用人が周囲をあわただしく走り回り、被雷した箇所である建物隅の扉付近にある瓦礫をどかしている。そのうちの一人を捕まえて話を聞くフォルガント卿は、半壊状態にある兵舎を慌てた様子で見つめていた。

吹き付ける雨風が容赦なく髪の毛や服を濡らし体温を奪う。雨はつい先ほど前よりは勢いこそ弱くなっているものの、相変わらず水たまりを跳ねる程度には降り続けている。そして時折空からは雷の音と光が伝わってきた。音と光のずれから雷雲は通り過ぎたのだろうか、まだ油断は禁物だ。

「貯蔵庫内部の状況は!？」

「現在内部と外部両方の扉が瓦礫で塞がれており、これをどかし切らない限りは確認も……」

崩落した見張り台からの瓦礫によって開かなくなってしまった小さな扉の先に、どうやら懸念材料である粉末魔石とやらが置かれているそうだ。内部状況は全く不明。そして悠長に瓦礫をどかしているうちにドカンといかれる可能性もある。

唾をぐくりと飲み込み、響燈を買うのを覚悟の上でフォルガント卿と兵士の間に割り込んだ。

「粉末魔石の貯蔵はどのようにされていますか」

「ラストイレイ、邪魔をするなと——」

「フォルガント卿はそれを把握していますか？ もし貯蔵庫全体に敷き詰めて保存されているならば漏水した瞬間にここらは火の海だ。消火どころじゃない。保存状況は非常に重要な情報です」

こちらを睨みつけて退かそうとするフォルガント卿を、努めて平静を装いつつも語気を強めて押しとどめた。はたして更なる激昂をするのではと身構えていたら、彼はハツとしたように目を見開いた。

「……この男の言うことももつともだ。衛兵、どうなんだ？」

驚いたことに、フォルガント卿はこちらの言い分に理解を示したのだろうか、聞いた内容を改めて兵士に対して問いただした。

「は、はい!! いくつかの壺に分けて保存しています!!」

「分かりました。燃え広がる前にいくつかを貯蔵庫から隔離した方が良いな……ここの瓦礫の撤去は我々も助力します」

兵士の話してくれた情報で、まずは一安心といったところか。粉末魔石それぞれがある程度の単位で仕切られているとすれば、ここで作業をしている目の前でいきなり爆発的な火災が発生するリスクは減少したはずだ。

後ろに控えていたレシルの手を引き、瓦礫だらけの扉周辺を指さした。これを手で動かしていたら人手も時間も足りやしない。しかしおあつらえ向きにここらの瓦礫は水で濡れてしまっている。レシルほど氷結術式に長けていれば、一部を凍結させようえで氷の部分を操って瓦礫を動かすことも不可能ではないかもしれない。

「レシル、ここらの瓦礫を撤去するのに力を貸してほしい。付着した水を凍結させれば統制が効くと思うけど、行ける？」

「……大丈夫、何とかなるはず。任せてッ!!」

こちらの問いかけに対して、レシルは力強く頷いた。すぐさま瓦礫に術式陣の浮かび上がった手をかざし詠唱を開始し始めた彼女は、やはり大変頼もしい。こちらについてはいったん任せても問題ないだろう。

そして改めて、兵士たちに混じって撤去作業に取り掛かるレシルを見て呆然としている兵士に視線を戻した。

「貴方にはもう一つ聞きたいことがあります。この近辺に十分乾燥した砂はありますか？ 用途はこの際建築用でも庭の整備用でも、何でも構いません」

乾燥した砂。水を掛ければ爆発的に燃焼する金属粉末の消火に適した、立派な窒息消火剤の一つだ。それがなければ、恐らく粉末魔石に火が回った時に消し止められはしないだろう。もし乾燥砂がないとなれば、もはや大人しく建物が焼け落ちるのを指をくわえてみているほかは無い。これはそういうレベルの代物だ。

「砂、ですか？ 訓練場を整備するための砂があつたはずですが……」

「本当ですね!!」ここの作業は全て引き継ぎます。貴方は砂を可能な限り手配してください。それと個々で砂を運べるように小さな入れ物も複数お願いします。くれぐれも雨でぬらさないように!!」

兵士の言葉に大きく息を吐いた。十分だ。消す手立てのない火災によって始めから終わりまで兵舎の焼け落ちる様を見ているだけにはならなさそうだ。

駆け足で恐らく砂の保存場所へ向かう兵士を見送る。そして久方ぶりに己の手に淡く光る術式陣を浮かべた。いくらレシルに劣るとは言えども、微量の水を凍らせることくらいはできる。最低限レシルのサポートくらいはと駆け出そうとした僕の肩を、背後から大きな手が掴みとめた。

「……現場指揮を任せる。どうやらお前は私よりも適しているようだ」

「承りました。この手の危険物質による事故への対処案件は、向こうでの必修課程ですので」

彼の問いかけに対してしっかりと頷く。現場指揮の委任。フォルガント家公爵から一客人へのそのような行為は、通常であれば考えられない。しかし彼の表情は、これまでの記憶において見たことがないほどに真剣なものだった。身分の上から下へと見下ろすようなものではなく、こちらの目をしっかりと見据えて対等に立っているかのような視線だ。

「私は兵舎の内側から貯蔵庫内部への突入を指揮する。後は頼んだぞ!!」

「分かりました。フォルガント卿、仮に火の手が回り始めたら、決して無理をしないで下さい」

小さく頷いて建物の反対側へと走り向かうフォルガント卿を見送り、瓦礫の撤去作業へと視線を移した。兵士たちの後ろに立ったレシルが手をふるうたびに、一部が凍結された瓦礫は建物の外側に向けて成長をする氷に乗って一個づつ順調に撤去されていく。

だが問題となっている塞がれた扉については、既に瓦礫の半分程度をどかしてその一部が姿を見せているが、何名かの兵士が扉を押し開けようとしても開く素振りは見せていない。恐らく内側からも何らかの障害物によって開かなくなっている可能性が高い。

開かないのならば、もう取っ払うしかない。手に浮かばせた術式陣はそのままに、扉

の近くへと駆け寄った。

「フォルガント卿からここの指揮を託されました!! レシルティアにこの扉そのものを除去してもらいます。皆さん一旦離れてください!!」

何名かの兵士たちが戸惑いつつ頷く中、扉を濡らす水に手を触れた。おっかなびつくり術式に魔力を通すという久方ぶりの行為の後に、急速に熱を奪う感覚が手から伝わった。

ピシリという音が手を起点として響き、そこから白い氷が扉全体に広がっていく。氷点下を下回るはずの扉に触れる手には、慣れない魔術を使用したためかむしろ熱湯に触れているかのような熱さを感じる。額にいつの間にか浮かんだ汗が、背後から吹き付け雨と共に顔を濡らす。

手をついた氷の向こうへ意識を向ける。外部からの熱に対していたく敏感になった手に、凍り付いた扉の内側から伝わる僅かな温度勾配が到達した。こちら側の外気と比較して微弱ながら熱を帯びた感覚に、これまでとは異なる種類の汗が額に浮かんだ。扉の内部は、間違いなく温度が上昇している。

「つく……レシルつ!!」

「了解、だよ!!」

地面に出来上がった水たまりにレシルが手をついた次の瞬間、瞬きする間もなく造り

上げられた氷の鎖が振り上げた手に従い扉へと一直線に向かつていった。鎖の先端に繋がれたクサビが扉に張り付いた氷と一体化して、鎖全体がピンと張られる。誰が音頭を掛けることもなく、兵士や使用人も関係なくこの場にいる皆が一斉に冷え切った鎖へと手をやった。

手を焼くような冷たさが、握り締めた手のひらから伝わる。しかし一層の力で握り締め、全身の力でそれを引いた。まるで綱引きだ。何人も人間が氷の鎖を引っ張り、外向きには開かないはずの扉が軋み始める。ピンと張りつめた氷の鎖、それがつながる扉の表面がきりきりと氷の削れる鳴き声を立てた。鎖が割れるのが先か、扉そのものが枠から外れるのが先か。後者に掛けて、この場にいる全員が叫び声をあげた。

ぼちん、という何かが割れるような音と共に、瞬間的に体が浮遊感を味わう。鎖が切れたか、それとも扉が崩壊したか。どちらかもわからぬままに支える力が無くなった全身が後ろに勢いよく倒れこみ、手痛い尻もちを着く。その眼前に広がる光景は、扉本体が除去された入り口の姿だった。

「扉が開いたぞ!! 内部を確認しろ!!」

兵士の一人が勝鬨を上げるかのような大声で叫ぶ中、自分の限界に近い魔力の使用でふら付きつつも辛うじて倒れずに立ち上がった。気が付けば息がすぐく荒くなっている。そしてまるで重度の風邪を引いたかのような鈍い痛みが、頭の右から左までを駆け

巡った。

「……不味いぞ、粉末魔石の壺がいくつか散乱している!!」

顔をしかめるほどの耳鳴りの中に、焦燥感にまみれた兵士たちの叫び声が聞こえた。どうやら直前に危惧していたことが起きていたようだ。

落雷の直撃によつて建物の外壁がここまで崩壊しているのだ。建物内部にも相当の衝撃が伝わっていることは想像に難しくない。散乱する粉末魔石、そして崩落箇所からの漏水。扉の先に感じた温度上昇は、勘違いなんかでは無かつたのだ。

「畜生、熱だ!! 粉末魔石の一部から煙が上がっている!! 干し草からもだ!!」

「くそ、遅かつたか……貯蓄している藁全部に燃え広がったら始末に負えないぞ!!」

倒れそうになる体を誰かが後ろから支えてきた。そして脇の下から抱えあげられる。視線を横に移せば、雨に濡れて首元にへばりつく銀色の長髪が目に入った。

「兄さんしつかりっ!!」

「あり、がとう……」

レシルの肩を借りながら、兵舎の入り口に向けて足を進める。どの程度延焼が広がっているのか。少なくとも人だかり越しに燃焼時の閃光が見えていない限り、まだ間に合はずだと心の中で何度も念じる。

「み、水だ!! 水桶や井戸から有りつ丈持つてこい!! このままじゃ全焼するぞツ!!」

気合で意識を保つ中、耳にとんでもない叫び声が聞こえてきた。一旦火が付けば爆発的に燃焼する危険物に加えて、建物内部へため込められた可燃物である干し草。両者が合わさればこんな兵舎など簡単に焼け落ちるだろうし、そんな現場を前にすれば人間なんて冷静じゃなくなる。

火災を前にしたときに、その当事者は冷静さを保つことなんてできない。それはこのエルトニアだろうが現代日本だって変わらない。だからこそ、こういう現場には正しい判断が出来る人間が必要となるのだ。そしてこの状況下において、その人間はこの僕だ。

「全員落ち着いてください!! 水を掛ければ粉末魔石は爆発的に燃焼しますッ!!」

己の限界を超えた大声が、焦燥していた兵士たちの動きを止めた。全員が我に返ったかのように言葉を止めて、此方へと振り返った。仮にもこの場を任されたリーダーなのだから、全員を不安にさせてはいけない。レシルの肩から腕を外し、深呼吸をして両足に力を込めた。

水を持つてこいと叫んだ兵士も含め、皆がこちらを見つめている。そして肩を上下させて息をする僕の背後から、荷車を走らす音が聞こえてきた。これ以上ない良いタイミングだ。繰り返し返していた深呼吸が、安堵のため息へと変わる。

「訓練場から砂を運べるだけ運んできました!!」

「ありがとう、ございます……これだけあれば、初期消火くらいなら何とかかなります」
人だかりをかき分けて、水避けの布が被せられた荷車が扉脇に停められた。息を切らしながら大量の砂を運搬してきてくれた兵士の一人に向かつて、こわ張りながらも笑顔を向ける。そして、ようやく建物内部を己の目で視認した。

貯蔵庫の中央付近にいくつかの倒れた壺の周辺に散らばった黄色の粉末と、その近くにある藁の束から煙が立ち上がっている様子が目に入る。このまま放っておけば藁に移った炎が別の粉末魔石に引火して収集が付かなくなるだろうが、今の状態だったらまだ消火が間に合う。

再度手に術式陣を浮かべる。頭に響く鈍痛が強みを増すが、後先なんてもう考えていられない。術式が淡く蒼く光りだすと同時に、ずぶ濡れの頭や腕についていた雨や汗といった水滴が凍結していく。同時に全身へ広がる強い寒気が、むしろ肉体から離れようとする意識を無理やり体に張り付けた。

「ああいう禁水性の危険物には、こういう乾いた砂をぶっかけりや……ッ!!」

荷車に乗せられた木のバケツに有りつ丈の砂を乗せ、そして建物内部へと飛び込んだ。もはや飛び散るような汗や雨などの水滴なんて存在しない。凍結した水滴から発する白い靄をまといながら、煙の見える方向へと走り出す。

眼前の黄色い粉末から上がる煙の中に、まさにマグネシウム火災のように鋭い光を発

する火花が混じりはじめた。爆発的な燃焼の一步手前、とうとう温度が一定以上を超えて加熱から燃焼へとシフトしようとしているその一点に向けて、全力で砂に満たされたバケツを振りかぶった。

「うおおおりやあああ!!」

声帯を潰す勢いで声を出さなきや今にもぶつ倒れそうだった。水滴一つ飛ばさずに、沸き起こり始めた閃光の中心部へ向けて、バケツから大量の砂を放つ。

煙を多量の砂が一気に覆い隠して、その勢いを緩めた。しかし完全に消火するには足りず、そして周囲を見渡せば他にも割れた壺の姿が目に入った。空になったバケツの取っ手を握り締める手に力が入る。

「砂を水で濡らさないようにして、粉末魔石を覆ってください!! 熱と空気を奪えば、こんな初期火災何とかなります!! それと割れていない粉末魔石の壺を、隔離してッ!!」

背後に向けて全身全霊で叫ぶ自身の横を、視認するのも困難な速度で銀の影が通り過ぎた。火元の直前で立ち止まり、僕なんかとは比較にならないほどの冷気をまとって銀色の軌跡を残したレシルは、僕と同じくバケツに入った砂を火元に叩きつけた。そして振り返った彼女の顔には、冷淡な表情なんかでは無く、険しくも勇ましい雰囲気か浮かんでいるように見えた。

「何をボサツとしているんだ!! 全員、ラストイレイに続けッ!!」

そんな妙に勇気づけられる、まるで先陣を切る将のような言葉が、既に立ち上がる力すらも限界だった僕が聴いた最後の言葉だった。足の力が抜けてバケツ片手に倒れる間際、兵士や使用人たちが砂の入った容器を片手に建物内部へと駆け出す瞬間が目に入り――

その8

まず感じたのは、起きることを躊躇うような寒気。そしてそれと相反するような暖かさだった。風邪をひいたときの様な寒気が体を這い回るが、しかしそれに付随するはずのだるさはそれほど大きくは無い。普段だったら明るさを瞼の先に感じたのなら、それはもう起きる時間だ。しかし毛布からじんわりと伝わる暖かさが寒気を感じる体を包んで離さない。一層瞼をきつく閉める。

まどろみの中、この状況にどこか懐かしさを覚えた。いったい何に対してなのだろうか。全身を包み込むような柔らかいベッドか、瞼を優しく照らす太陽の光か、窓辺から吹き込む初夏の香りを含んだ風か。たぶんどれか一つの要素に対してではなく、これらすべてに対して僕は今懐かしさを感じているんだろう。五感のすべてが、今自分が置かれている環境を昔懐かしいものと認識している。

そう、貴族の子息が住まう部屋としてみればお世辞にも広くは無いこの部屋が、再び人生を踏み出した僕が何度も朝を迎えることになった場所なんだ。この昔懐かしい部屋で朝を迎え、そして微睡の中で想う。ああ、なんて久方ぶりなのだろうか。数年越しになっても分かる、この落ち着いた空間にいるという事実だけで、深い充足感が心の奥

底から沸き起こり——

「……いや、なんでここにいるんだよ」

——前言撤回。なぜこの場所で寝起きを迎えているのか。というか今はいったい何時なんだ。今の状況における前後の脈絡が全く分からず、すぐさま体を起こした。急に起き上がったせいだろうか、わずかに頭へ鈍痛が走る。しかしこういう本物の頭痛以上に、現在の状況の意味不明さに対して頭が痛い。

深呼吸をして落ち着いて記憶をたどっていく。フォルガント邸に到着した後、この部屋にレシルと共にフォルガント卿の時間が空くまで待機をしていた。その後彼の執務室へ赴き、旗色悪くなったところで——

「そうだ、落雷だ。落雷で火災が起きそうになって……」

慣れない魔術を使いながら消火活動をサポートし、火元である粉末魔石の貯蔵庫に砂バケツを持ちながら突貫した辺りまでは覚えていいる。しかしその後はどうにも不明瞭だ。どうにもその前後で意識をなくしたのだろう。おそらく無理に己の限界以上に魔法を行使した代償か。

火元近くで気を失うだなんて、普通に考えたらそのまま一酸化炭素中毒でお陀仏だ。集団で消火活動にあたっていたのが幸いした。しかしそうになると、その後の消火活動の行方がどうなったかが気になった。

毛布を体から退かすと、体に残っている寒気が再び優勢になった。風邪に近い寒気と若干のたるさ。最近ではめつきり縁が無くなっていたが間違いない。典型的な魔力切れの症状だ。さすがに足をもつらせるなんてことは無いだろうが、念のためゆつくりと起き上がる。たるさのためだろうか、一步踏み出してみたら案の定少しふら付いてしまった。

扉に手をかけて廊下へと出る。そしてふと己の体を見下ろしてみれば、目に入ったのは真つ白のローブと少し余裕のあるズボン。この時になって、ようやく自分の恰好が寝間着姿になっていることに気が付いた。

幸か不幸か、廊下をいくらか歩いてみても、使用人とは誰一人会わなかった。この建物は、落雷の被害にあつた兵舎や使用人宿舎と隣接しているから一人や二人くらい会いそうなものだが、結局そんなこともなく廊下の端にまでたどり着いた。窓から外を眺めると、十分に空へと上がった太陽に照らされた、一部半壊状態の兵舎が目に入った。目を凝らしても周辺に燃え広がった痕跡は見当たらない。どうやら最悪の事態は避けられたようだった。

窓辺に手をつけて、安どのため息を吐いた。少しでも遅れていれば爆発的な燃焼が始まり、収集がつかなくなっていただろう。間違ひなく兵舎は全焼し、隣接するこの離れも燃え広がる炎に飲み込まれていたかもしれない。思い出の詰まった私室は、意識をし

ていなかったが己の手で守れたということだろう。

「本当に、良かった……」

じんわりとした達成感に、少しの間だけでも浸ろう。フォルガント卿すらも説得し、火災を未遂で終わらす一端に力を添えたんだ。誇ったってバチなんぞあたってやるものか。

しかしどうにも妙だ。なんでこの達成感に混じって、変な胸騒ぎがするんだろう。何か大切なことを忘れているような、そんなしこりのような違和感がある。火災を未然に防ぐという功績にケチをつける事柄なんて早々ない——

「……違う。なんでそもそも僕は今フォルガント家にいるんだ。帰省なんかじゃない、これは……」

今の状況は、端的に言ってヤバイ。爆発火事まで後少しというイベントがあつて頭の隅に追いやられていたが、王都リーヴェルから東の中核都市エルドリアンまでやってきたのは、単なる帰省のためなんかじゃない。そう、川崎さんにわざわざ頼み込んでまでここにいる理由は、フォルガント卿に対する大学理念への協賛依頼だった。

そしてそれは、初っ端で頓挫したのだ。理由は単純、僕がフォルガント家を勘当されており、そんな人間がかかわっている物なんぞ信用できないということだ。関係者だからと名乗りを上げたのが、見事なくらい裏目に出た形となる。最悪なことに、その結果

を早急に川崎さんへ知らせなければならぬところを、消火活動に協力を申し出たばかりに、結果としてぶつ倒れてこの場で寝かされていた。

窓辺を見上げる。太陽はしっかりと上がり、もう朝とは言いにくい時間であろうことは容易に想像できる。

さて、約束の時間はいつたい何時だったかを思い出してみよう。フォルガント卿と顔合わせし、その結果を昨日の夜までに川崎さんへ伝える手筈になっていた。しかし現実には川崎さんと会って話すこともなく、今はおそろく昼前。会談決裂の上、会合のすっぽかすとか結構宜しくない状態だ。

「——それで、昨晩はどのような状態でしたか？」

「外傷はありませんでしたが——」

頭を抱えてどうしたものかと悩んでいると、階段下から聞こえてきた会話が耳に入ってきた。どうやら誰か来たようだ。ちょうど良い、着替えやらなんやらを頼んで早急に川崎さんたちの所へ行けるよう手配してもらおう。少し駆け足気味で声の聞こえてきた階段の方へ向かった。

「ならばひと安心ですね。ただ意識が戻らないようでありましたら一度大月市内の病院に——」

そして目に入る階段が上がってきた人物。それは今正に会いに行こうとしていた、川

崎さんその人だった。こちらの姿を目に入れた彼は、どうにも大変驚いたような表情を浮かべた後、すぐに駆け寄ってきた。

「平塚さん、意識が戻ったんですね!？」

「え、ええ。ご心配をお掛けしてすいません。恐らくただの魔力切れなので、もう粗方大丈夫です」

彼はどうやら僕が寝込んでいたことを知っているようだ。そして彼の背後には、昨日少しだけお世話になったメイドさんが控えており、こちらを見て安心したように破顔した。この家の人間に笑顔を向けられるのは初めてのことだ。ぶっ倒れて爆睡しているうちに随分と株が上がったものである。

体調に関していくつか川崎さんと言葉を交わす。ちよつとした寒気や立ち眩みなどの微弱な風邪のような症状しか残ってないとわかると、彼はようやく安心したようにため息をついた。一段落した今、そろそろ肩の荷を下ろそうかと思う。

「……川崎さん。昨日はフォルガント卿との会談についてお伝え出来ず、申し訳ございませんでした」

「いえいえ。事情が事情ですし、むしろご無事で何よりです。また代わりにレシルティアさんがこちらに来てくれましたので問題はありませんでした」

彼女には本当に頭が上がらない。今度何かしらの埋め合わせをしようと思う。しか

し会談の結果を伝えたということは、つまり川崎さんも今回の交渉が決裂したということともう知っているのだろう。

「本当に、今回の会談について台無しにしてしまつて申し訳ございません。他の六大家に関する情報など、最大限お手伝いはします」

「……ええと、他の六大家ですか？」

頭を下げてから数秒後、下げた頭の上から聞こえてきたのはどこか困惑した川崎さんの返答だった。フォルガント家の助力が得られないとなればリカバリー案が必要なのは当然だというのに、彼はいまいち話が分からないという顔を浮かべている。

「そりゃあ……当事者の僕が言うのもなんですが、フォルガント家が無理ならば他の家に話を通すほかには……」

「あれ、フォルガント家が無理つて……先ほどですが、ここに来る前にもうフォルガント氏とは話を取り付けてきましたが」

その言葉に思わず「えつ」と返す。何かがおかしい。川崎さんと僕で致命的に何かの認識が一致していない。

「……話を付けるつて、大学の協賛についてですか？」

「え、ええ。私たちの大学で教えている科学技術に関心があるご様子で、問題なくご協力頂けることになりました。これも平塚さんの交渉のおかげですよ」

認識がずれている箇所がはつきりした。どうやら僕がダウンしているうちにフォルガント卿はどういうわけか手のひらを返し、大学計画に対して協賛の立場をとることに決めたようだ。結果として僕が不在の状況下で手っ取り早く大学関連の話がまとまったようで何よりだが、どうにも腑に落ちない。フォルガント卿のあの剣幕から考えて早々手のひらを反すようにも思えないからだ。

「後は平塚さんの体調だけが気がかりでしたが、立つて歩ける程度には回復しているようですので安心しました。これで無事朗報を持って帰ることが出来そうです」

「あはは……今回の旅路は一先ずといったところですか」

これまでの遅れを取り戻すため、フォルガント家との間に幸先のいいファーストコンタクトを取るとというのが今回の目的だ。川崎さんの安心した様子も納得である。

一通り現状について話し終えた彼は、そのまま今後の予定、つまりは王都エルドリアンへの帰還についての説明を始めた。本日正午過ぎにここを立ち、そのまま行きと同じペースで車を走らせた夕方暮れ前には王都に到着するとのことだ。仮に僕の意識が戻らなかつた場合も、そのまま車に寝かせて持って帰る腹積もりだったそうさだ。

「そうそう、忘れてました。フォルガント氏から頼まれたんですが、平塚さんの意識が戻っていたら話したいことがあるから呼んで欲しいそうです。行けますか？」

なんとなく、そんな気はしていた。なぜあの後フォルガント卿は考えを変える気に

なったのか。恐らくそれに関する話をしようというつもりなのだろう。丁度良く、こちらもその件に関してには気になっている。

「問題ありません。ただ……服だけを着替えたいなあと」

いくら病み上がりとはいえ、これから会う相手は公爵閣下だ。こんなパジャマに毛が生えた程度の服装で面会をするつもりには流石になれない。

その9

「来たか。そこへ座りなさい」

再び訪れた、静観なフォルガント卿の執務室。落雷や雨風によって散らされた部屋の内装は元通りの理路整然とした光景へと回復している。しかし衝撃波で散らされた窓だけは、今も破損した窓硝子のはめ込まれたままになっていた。ガラス窓が半壊するだなんて、改めて昨日の落雷による衝撃の大きさを思い知る。

そのまま視線を長椅子へと移した。昨日は座らせることが無かったこのスペースを勧めるというあたり、若干雰囲気の違いを感じ取る。そして今日はこちらに対する否定的な空気はあまり見られない。

「体調の方は大丈夫か。レシルティアから現場で倒れたと聞いている」

「おかげさまで回復しました。魔力切れなんて、慣れないことはしない方が吉ということかもしれません」

この人がこつちを労わることなんて、記憶の限りでは初めての経験だ。慣れていない対応を前にして、嬉しさよりも不気味さの方が先行してしまう。勧められるがままに客人用のソファアに座ると、彼もその正面に腰を下ろした。

「さてと。今回の事故についてどこまで把握している？」

「そうですね……肝心なところで意識を失っていたので、多くは分かりません。ただ、どうやら建物の焼失は免れたようですね」

つまりはあまり分からんということだ。まあ詳細が分からないだけで、予想はある程度出来る。あの時現場に集まっていたみんなは、たぶんレシルの後に続いて消火砂散布による適切な消火活動をしてくれたんだろう。そうじゃなければ兵舎は全焼の後に真つ黒こげだ。

「私が建物内部から貯蔵庫に突入した時には、既に火元は消し止められていた。その上、使用人や兵士が一丸となって火災拡大を防ぐべく粉末魔石の隔離を始めていた」

「……使用人の皆さんがスムーズに動いていただけことが幸いました」

彼らがそこまでスムーズに動けた裏には、レシルの先導もあったことだろう。曲がりなりに公爵家令嬢のレシルが先陣切って行動を起こせば、他の皆もそれに続くだろう。

「……落雷の箇所が粉末魔石の貯蔵庫と知った時、私は火災も時間の問題だろうと思っていた。せめて完全に燃え広がる前に無事な物資を搬出する、その程度しか考えてはいなかった」

だからこそそのあの焦り方だったのか。粉末魔石の保存状態やらなんやらを全て度外

視し、救出できる物資のみを外に出す。ただ消火困難な火災を前にした対応としては、少々リスクのある行動に違いは無い。

「だがあの時、お前は私とは違い、完全に火を消す心積もりでいた。知っているか？ 粉末魔石による火災というものは、一般的にそれ自体が燃えきるまでは手だしをしないというのが通説だ」

基本的に燃えるものが無くなれば火も収まる。この建物が全焼しようが、少し距離をとって建てられている邸宅本体にはまず燃え広がらないだろう。恐らくは火災発生の際に兵舎自身が燃えきるまで放置することも視野に入れた設計になっているのかもしれない。

「結果として兵舎の焼失は防がれた。レシルティアの先導とお前の指揮の賜物だと、用人共は口を揃えて言っていた」

「彼らにそう言っていただけなのは光栄です」

それは偽りならざる本心だ。結局のところああいう火事はその場にいる人間たちが団結しなけりや対処することは難しい。指揮者に続いてくれる数名こそが、消火活動において重要になるのだ。そこまで言うと、フォルガント卿の目線が少しだけ鋭くなった。

「……大量の乾燥した砂だったか。お前が手配して使用したものは」

訓練場の整備用にまとまった量の乾燥砂が蓄えてあったのは幸運としか言いようがない。そして、そんなものを用いて消火活動を行うなんて文化は、おそらくこつちの世界にはまだ浸透していないのだろう。

「水ならまだしも砂を掛けて消火するなど初耳だ。しかし事実、粉末魔石の延焼は消し止められた……これは、二ホン国の知識なのか？」

「……窒息消火って言うんですよ。砂で指定箇所を覆って新鮮な空気を遮断すれば、物理的に火災は収まる。そして一般的な水による冷却消火は、対象物質が禁水性物質のため不適です。あの状況じゃ、乾燥した砂以外に適切な消火剤はありません」

おそらくこちらの世界にも砂を使った消火方法は、探せばどつかしらには存在するだろう。しかしそれらは一般的に知られた方法なんかじゃない。経験的に伝わるそれが原理的に見れば至極真つ当な消火行動でも、この世界においてはそれを紐解く段階にまでは至っていない。

「そしてこれは日本の知識というよりも、科学技術に紐づけされた方法です。そしてその科学は、この世界ではまだ十分に発達していません」

「……やはりそうだったんだな」

若干ではあるがフォルガント卿が小さく笑みを浮かべた。そこに見えるのは得意げでな、そして自嘲気味な雰囲気。いろいろなものが混ざった笑顔をこちらに向けて、彼

は意外な一言を漏らした。

「お前を逃がしたのは失敗だったかもしれない。そのまま王都の学校で学ばせていたら、と今になって思うよ」

彼がそんなことを言っているという事実は、僕にとつて相当に意外なものだった。思わず目を見開いてフォルガント卿を見つめるが、笑顔を崩さずに彼は続ける。

「もう知っているだろうが、フォルガント家は二ホンのアカデミーを支援することになった。カガク技術の高々一例を目にしたただけだが、それでも有用性の一旦が見えたからだ。頭ごなしにお前を否定するよりも、その先に隠れたもののほうが重要だ」

事前交渉の結果を裏返してまで川崎さんとの交渉に臨んだ背景には、そういう事情があったのか。火災の発端になりかけた落雷事故によって交渉がうまくいくだなんて、世の中何が成功の秘訣なのかわからないものだ。

「その交渉の場で、二ホン国の役人に言われたよ。アカデミー所属の教員。言葉で言うのは簡単でも、その立場は非常に狭き門だということだな」

「それは……否定はしません」

面と向かつてそういうことを言われると、誇らしさよりもむしろ痒さを感じる。調子が狂うとはまさにこのことだ。

「しかも異国の地で、その歳でその地位に至るなど……結局私は、お前の才を見抜くこと

は出来なかつたようだ」

「……いや、間違つちやいけませんよ。今の地位に魔法の力なんぞ必要はない。貴方が見抜いた勉強、知識、洞察力。これらが物を言う世界です」

何度か夢に見た少年期の思い出。いくら頭の出来が良くても魔力の才能は無い。目の前にいる人間から言われたことは、事実何一つとして間違つちやあいのないのだ。エルトニアを出て今の職に就いているという事実が、それを示している。

「お前の勘当を取り消すつもりはない。一度家を逃げ出した人間は、相応の報いを受けなければならぬ」

「それは、そうでしよう。僕も覚悟の上です」

貴族、それも公爵家の人間からしてみれば一族からの勘当だなんて一大事件もいところだ。一度言い渡されたら身の破滅をも意味する、かなりの重罰に違いない。しかしフォルガント卿も、そして僕自身も、それをなんぞはならないような雰囲気で言葉を交わす。今の僕に対して、勘当なんてものが罰として然したる意味を持つていないことなんて両者共に分かり切っているんだ。

「……取り消せと言つてみれば良いものを」

「出来ないことをお願いすることはしません。それに僕みたいな人間は、大貴族に抱えられて生きるような器じゃない」

貴族という立場から離れて気兼ねなく生きるのが丁度良いと言外に伝えてみると、フォルガント卿は手を叩いて笑っていた。そこに混じる自嘲的な笑いは、逃がした魚は大きいとでも考えているのだろうか。ひとしきり笑った彼は、長椅子を立ち上がった。

「出発前に呼び出して悪かった。役人やレシルティアが待っているだろう」

「……そうですね。では、そろそろお暇しようと思います」

こちらに戻ってきてから二度目になる話し合いの席は、初回に比べてみればずいぶんと平和なものだった。そのまま立ち上がり、会釈をして執務室を後にしようとした背中から、フォルガント卿の声がかかる。

「ラストイレイ。お前の才は確かにお前が造り上げたものだ……そしてお前たちは、私とフロステイーネの子供だ。家系から外れても、それは忘れるな」

「……その言葉、レシルにはいつの日かきちんと面と向かって伝えてやってください」

扉が閉まる間際、振り向きざまにそう伝えた。言うのが10年遅い。ため息とともに苦笑が顔に浮かぶ。もしその言葉をもっと前に聞いていたのであれば、結末だって違ったかもしれないのだ。

* * *

「そうだ……忘れてた……」

「ベルトは締めましたね？　日が暮れる前に到着しなければ危ないので、帰りは行よりも飛ばしますよ」

ドウルンドウルンととても重厚なエンジンの振動が座席下から伝わり、冷や汗がつつた。行きがオフロード車なのだから、帰りだって同じ交通手段になるのは当然だ。なんでそれを失念して、昼食を腹いっぱい食べてしまったのか。そして川崎さん、行きも結構飛ばしていたように感じられました。帰りはどこまで飛ばすんですかね。

「じゃあ出発しますよ。景色も良いし、絶好のドライブ日和です」

　楽し気に喋る川崎さんと、景色が楽しみなのか笑顔を浮かべるレシル。それに混じる、走り出す前から覚悟を決める僕。悲しいことに、今この場にいる誰もが、酔い止めなんて持ち合わせている訳もなく。そして半日以上寝ていたためか夢の世界に逃亡することも困難だなんて。せめてもの抵抗ということで、しっかりと目を瞑り、精神を統一するほかは無い。

結論を言えば、ちよつとばかり吐いた。そう、あくまでちよつとだけだ。

第十話 「大詰め!! 中間報告会まであと僅か」

その1

「——また、六大家の一つであるフォルガント家がバックに着きます。そのため系列家からも何人か訪れる予定になっています」

新キャンパスの中でも大きめの部類に入る会議室にて、ポインター片手に川崎さんが登壇している。議題は大学の中間報告会について。もう開催にまで二か月を切った、リーヴェルキャンパス開校以来初となる対外講演会である。

その彼の話を聞くのは、当事者である国立東都工科大学リーヴェルキャンパスの皆様方だ。藤沢さんなどの学生全出席はもちろんのこと、僕の隣に座る平塚准教授を含めて教職員も過半数以上がこの場に集まっている。聴講者が総勢50名を超す、結構な規模の企画会議だ。

「なので彼らを合わせますと、現時点における貴族の来場者は、おおよそ100名程度と予想されます」

100名の来客が最低でも保障されている。いわゆる相手側が審査員のような形式を取るのならば規格外の人数といつて差し支えないが、今回のような学会形式とした

ら少し寂しい数だ。まあ運営者と来場者の双方にとって初回の学会活動ともなれば、そのくらいの人数が丁度良いのだ。

そのまま発表形式についての話へと内容が移っていく。こちらについては概ねオーソドックスなものだった。前半に教員数名による全体に向けた講演を幾つか行い、その後学生がメインになって個々のポスタープレゼンに移行する。この手の中小規模の発表会じゃあよくある形式だ。

教員数名による講演の内訳についてはもう粗方決まっているようだった。このキャンパスで行っているいくつかの研究グループは、おおむね4つ程度の枠に分けることが出来る。その4つに分かれた各研究テーマから准教授以上の人間が一人ずつ選出されているようだ。ちなみに我がテーマでは、栄光の平塚研究グループの長、平塚礼二准教授がノミネートされている。

「そして、こちらが当日のタイムスケジュール案になります」

スライドに写されたのは、まだ空欄の箇所も見られるが結構形になっているスケジュール表だ。午後1時から開会の挨拶が始まり、その後口頭プレゼンテーション。コーヒータイムを挟んだ後にポスターによる個々の発表となる。そして最後に懇親会である立食パーティー。全体的な流れを見てみても、ライトな研究交流会としてみたら一般的なものだ。

このスケジュール案を今日の会議中に完成版へと持つていくことが、本日の最終目標である。全体的な流れの確認はもちろんのこと、現在このスケジュール案に足りていない決定的なパートを決めなければならない。タイムスケジュールの表題は「第一回日本エルトニア科学技術シンポジウム（副題未定）」とまんま記載されている。キャッチーな副題が必要なのは明らかだった。

「この最初の開会挨拶についてですが、誰が話すかはまだ決まっていますか？」

「ええ、普通の学会では熟練の先生に話していただくことが多いのですが……今回のような特殊な場では少々皆さんの意見を伺いたく思います」

別グループの先生が最初に目を付けたのが開会の挨拶をする人員についてだった。普通に一番高齢な先生を当てはめれば問題なさそうな気もするが、案外川崎さんもこういう点には気を使うようである。

「特殊な場といたしますと、このエルトニアという国自体の特異性についてでしょうか」
「そうですね。皆様もエルトニアで過ごして感じつつあるかもしれませんが、知識や好み、それぞれか我々の常識までもこの地では通用しないものもあります。なので、その違いをまず認識したうえで両者のすり合わせが出来るような挨拶にしたいと考えています」

つまりは最初の挨拶くらいはエルトニアの雰囲気を理解した人に話してもらって、い

い塩梅に講演会本体へと入るような流れにしたいようだ。ならばこの中でもっともえらい先生にエルトニアの知識を詰め込んでもらうのが丁度良いのではと思う。そんな風に考えていたら、隣の平塚先生がこちらをまじまじと見ていることに気が付いた。

「……レイって結構適任だよな」

ぼそりと、しかし周囲に結構聞こえるような大きさの声で平塚先生が漏らす。投下された火種を消さなければと何かしらの反論を考える間もなく、周辺の学生や先生方はこちらに目を向けた。

「平塚さんはエルトニア出身だから良いんじゃないでしょうか」

「確かに平塚君はこちらの環境や雰囲気については詳しいかもしれないね」

エルトニアキャンパスで一緒に過ごすこと数か月、最初はただの銀髪の色物枠だった僕の扱いは、気がついたらエルトニア出身の現地民という認識で広がってしまっていた。

まあ確かに受け持っている授業をエルトニアの共用語で行っていたり、たまに他のグループの学生やスタッフを引き連れて周辺のおすすぬランチを紹介したりなどの行動は行っていた。そんな妙にエルトニア慣れしているところから疑念を持たれ、気が付けば公認のエルトニア人扱いである。

しかしこちらは高々助教一年目の身。裏方業務に終始するのならば快く引き受けよ

うかと思うが、そんな大役を仰せつかるなんて真つ平ご免である。誰か代わりの人員は居ないものかと周囲を見渡すが、誰しもがこちらを見て頷いていたり、後戻りが出来るような状況では無くなりつつある。

「そうですね……僕の出自は適しているかもしれないませんが、やはりこういう場合はベテランの方に決めていただくのが——」

「今回のようなライトなセミナーは、聴いている人たちにどれほど受け入れてもらえるかっていう最初のステップが大事だよ。だから偉い先生よりも平塚君のような両者の架け橋になってくれる人が良いんじゃないかな」

どうにかこうにか絞り出した代替案が途中で遮られ、この場における先生方の中でもベテランに分類される大御所の浜松教授がニコニコとした様子で割り込んできた。言葉通りに受け止めるべきか、それとも簡易セミナーは大御所じゃなくて若手で何とかしろと含みを持たせているか。どのみち彼にこう言われてしまえば、頭ごなしに反論するのは難しい。

結果的に他のメンバーから代わりの意見が出るようなこともなく、あれよという間に最初の挨拶どころか全体の進行をサポートする司会者の役割までを仰せつかることとなった。言わば実質的な会議運営のサポート担当である。

「では最後に報告会の副題を決めてしましましょう。こちらがクリアできれば本日中に

皆さんへスケジュールの完成版をお送り出来ます。皆様の中で何か良い案などはございますか?」

律儀なことに副題なんかまでこちらの意見を伺いに立てる川崎さんも、かなり大変な立ち位置にいるのだと心底思う。もうなつてしまったものは仕方がない。とつと本日議事を終わらせてしまった方がよっぽど有意義だ。

副題。これは結構重要なものである。公的なタイトルである「第一回日本エルトニア科学技術シンポジウム」が書類的な固い名前である一方で、副題には内容を表す軟らかいものが求められる。それも、主賓であるエルトニアの人たちの目線に立ったものが望ましい。ナントカ研究交流会、ナントカ技術の創成と展望とかそれっぽいものは浮かぶが、相手側が科学に初めて触れることを踏まえれば敷居が高く感じてしまう。

もういつそのこと「初めての科学!!」とかド直球のもので良いんじゃないか、そんな風に考えてしまう。周囲の方々も悩んでいるのか、なかなか手が上がる様子は見られない。

「……平塚さん、何か良いタイトルは浮かびましたか?」

結局、川崎さんは公募をあきらめたようだ。このシンポジウムの司会者といういい塩梅に声を掛けやすい立ち位置になったからか、此方に狙いを定めてきた。彼の言葉の意味するところは、他の人の手が上がらないからちやっちやと決めてくださいということ

だろう。

しかしいきなり指名されるというのも困るものだ。なんとたつてなんにも頭に浮かんできちゃいないんだから。両脇に座る我がラボの構成員たちに助けを求めようとしてみても、平塚先生は知らんぷり、藤沢さんもぷりぷりと頭を振った。どんな時も最後に頼りになるのは自分自身なんだと思ひ知る。

「ええと……相手側に立ってみると僕たちのやっていることは身近ではない突飛なもので、言わばファンタスティックなもので……僕らはそんなものを扱っている学術集団なんですよ」

しどろもどろと、まとまる様子の見られない言葉の羅列が口をつく。さあ見かねた誰でもいいから何か案を出せと一旦言葉を切るが、案の定誰の手も上がらない。だめだ、これは一度何でもいから副題案を出さなければまとまらない。自分の喋った内容を思い返す。この内容でなんか一つ名前を作るしかない。

「そうなる……ファンタスティックな学会ですから、例えばファンタスティック・アカデミーとか……」

「ファンタスティック・アカデミー、それでいきましよう。他の案がある方はいますか？」

ぼそりと口から出た代替案上等な一品を川崎さんは逃がしはしなかった。この副題

が思いのほか好評なのか、それともたぶん代替案を出すのも面倒なんだろうか、当然のように他の出席者の手は上がらない。平塚先生に至つちやうんうんと頷いている始末だ。

結局川崎さんの「これでスケジュール表も完成です」という一言と共に、適当に考え付いた文言が公式の副題として採用されてしまった。何ならもう少し格好いい凝った名前にすればよかつたなあと思うが、全てはもう手遅れだ。

「それでは本日の説明会は以上です。後ほどスケジュール表をお送りしますので、皆様ご確認ください」

あれよという間に終了する今日の対策説明会。どうにも釈然としないまま、流れに従つてそのまま会議室を後にした。

* * *

そんな会議からはや一週間。本当に報告会の副題が「ファンタステック・アカデミー」となったスケジュール表が送られてきて微妙な表情になったものだ。良いんじゃないといつてくれた藤沢さんの存在が、あの時は非常に励ましになった。

『次は終点、東京です——』

開催までもはや一か月近い今は、周辺作業が大詰めとなつてきている。平塚研究グループ一同で外部の研究会に出席した帰りの電車内でも、細かな作業は着々と進めている。閉じようとしているノートパソコンの画面に映っているのは、各研究グループに配布予定の講演マニュアルだ。川崎さんから加筆修正を依頼されたそれを、今日中に全体へ共有できるようにしなければならぬ。

ことん、と右肩に重みを感じた。もう終点が近いというのに人様の肩を枕に寝ている藤沢さんは良いご身分だ。まあ彼女も彼女で、日々の実験の中に大月エルトニア間の移動を含む授業日和だ。それに加えてこういった外部の学会参加もあるわけで、そりゃあ疲労もたまるものである。そのまま別件で他の出張へと赴いた平塚先生も大概だ。あの人は教授職という別ベクトルの忙しさを抱えながら時折海外出張まで行っている。なんだかんだ言ってみんな結構忙しいのだ。

「藤沢さん、そろそろ到着だよ」

彼女の肩を数回叩いてみると、それはもう眠たげな様子で目をこしこしと擦りながら意識を戻したようだ。出発直後からうつらうつらしていて、途中数回肩によつかかってくるまで全く起きる様子のなかった彼女は、まだまだ寝足りないという感じに見える。

さて、周囲の光景は完全に東京都内の物に変化をしている。正に超都会。ここ数か月間エルトニアの中世な景色に慣れた感じからすれば、むしろこっちのほうが異世界に見

えてしまう。しかしこの光景に感激していられる時間もそう長くは無い。なんとたつて東京駅に到着したらすぐに中央線に乗って大月に直行だ。大月界限なんぞ、活発さでいえば王都リーヴェルよりも劣る。

「……………めんなさい。完全に寝てたわ」

「すつこい疲れてんだね。大月に行くまでも、ちゃんと起こすから寝てて平気だよ」

ありがたい、と返す彼女はまだまだちよつとばかり意識が寝ているように見えた。今なら多少ちよつかいを入れても反撃が返つてこないかもしれない。やらんけど。

瞬きを何度か繰り返した彼女は、こつちの机の上にまだ仕舞つていなかったパソコンの画面へと目を向けた。画面にはまだ修正途中の資料が映っている。どうせいつか学生にも配るものだからと隠すこともしていないでいると、彼女は興味が出たのかそのままスクロールをして読み始めた。一応助教のパソコンなんだからじろじろ見るなどは思うけど、なんかもう今更な気もする。

「……………この配布資料もそうなんだけどさ。なんかね、気がついたら例の報告会に妙に深く関与している気がするんだ」

「気がついたらつて言うけど、視察団の案内や公爵家へのお伺いとかいろいろやってたじゃない」

藤沢さんの指摘に対してやれやれと首を振った。そういう日々の実績も含めて気が

付けばということである。こう見えても、自分から意識して出張った案件は、先々週フォルガント家に対して助教という立場であいさつに伺ったことくらいしかないのだ。

『——今日も、新幹線をご利用くださいまして、ありがとうございます』

電車はもう減速を始めており、窓の外に見えるのも東京駅近辺の光景になっていた。パソコンをケースに放り込み、小さめのキャリーケースを荷台から降ろす。

しかしここからも長いという事実にげんなりとする。大月に到着して、そこからキャンプスに戻るところまでを加味すると、バスがうまく繋がることを仮定したうえでざつと二時間はかかる計算となる。久々の東京を見て回るというプランはあきらめて正解だったかもしれない。下手をしてまた大月のゲートで職員用当直室にお世話になるのはなんとしても避けたいのだ。

完全に新幹線が停車し、荷物の取っ手を掴んで外へと向かう。その最中にポケットの中の携帯端末が小さく震えるのを感じ取った。すぐに揺れは収まったから、どうやらメールか何か came たようだ。

「ちよつと待つてね。メールが来たみたい」

通行人の流れから離れたところに荷物を置き、携帯端末を取り出して確認する。シンボジウムの司会者という身分になったことで前にもましてやってくるメールの本数が目に見えて増加してしまった。おかげさまでちよくちよく確認しなければ、あつという

間に未読メールが積みあがってしまうのだ。

画面に表示されたメールの送信者は、予想通り川崎さんだった。シンポジウム関連でのメールは、そのうち結構の割合が川崎さんからのお知らせや仕事の依頼なのだ。恐らく追加で何らかの資料作成を頼まれているものと踏んで中身を確認してみると、そこにあったのは意外な文面だった。

——急な話になりますが、本日リーヴェルに戻ってから少しだけお時間を頂いてもよろしいでしょうか。お手数ですが藤沢レナ様と共にお越しください。

僕だけならばまだしも藤沢さん同伴でというところに引つ掛かりを感じる。今までこの組み合わせで呼び出されたことなんて、ライル殿下が大学見学に訪れた後に当日の雰囲気聞かれた一回だけだ。それに出自で今のところボロがないはずの藤沢さんは、外務省の川崎さんとの間に何らかの接点は特にないはずだ。

「……藤沢さん。今日この後ちよつと一緒に寄りたいたいところがあるんだけど良いかな」
荷物を引つ張つてこちらに向かつてきていた藤沢さんは、要領をつかめないといわんばかりに首を傾けた。まったく、むしろこつちが首を傾げたいくらいだ。

その2

中央線を乗り継ぎ大月に行くまでに一時間半。そこから定期通行便のバスを待つのに一時間。最後にバスで揺られてエルトニアへ入国するのに三十分程度。結局東京駅からトータルで三時間もかかったのだ。なんというアクセスの悪さ。東京に出ていくたびにこれなのだから本当にやってられない。

ただし今日は、リーヴェルキャンパスまで赴く前に一旦先約があるのだ。連絡バスをリーヴェル国境警備所にて途中下車し、そのまま警備所の建物に併設されている事務所へと足を向けた。車を降りてこの近辺を歩くのは、最初に大月からリーヴェルに移送されたとき以来となる。外務省管轄と聞いたこの事務棟は川崎さんが現在勤務している地点であるらしい。日本国の大使館がリーヴェルに置かれていない現状では、この国境警備所が実質の大使館としての役割を持っているとのことだ。

建物内部の様子は、エルトニアへの窓口たる国境警備所ほどではないにしろ綺麗な感じだ。人員自体はそれほど多くは無い様子だけど、設備の様子から見るに後々在エルトニアの日本国民に対する支援の場としての役割が期待されているのだろう。

そんな受付にて話を通し、藤沢さん共々ロビーの長椅子で寛ぎつつ待つこと数分。エ

レベーターホールの方から川崎さんが早歩きで姿を現した。

「お疲れ様です。うちの研究室の藤沢共々参りました」

「急なお呼び出しになりすいません。今日は少々込み合った話なので、私たちのデスクへご案内します」

川崎さんと僕の双方で頭を下げあつて簡単に握手をする。たぶんリーヴェルキャンパスにおいて他のどのメンバーよりも僕は彼と接する機会が多いはずだ。お偉いさんになつたわけでもないのに外務省の役人とここまで繋がりがあつたなんて、不思議な縁もあつたものだ。

そのまま彼の後についてエレベーターを上がつた。一つ上のフロアは、受付の階とは異なりオーブンな事務スペースではなく人けのない廊下が続いていた。そのため若干殺風景な雰囲気を感じる。部屋ごとにつけられたプレートに目を通してみると、下のフロアと比較してより小さい単位の部署の名前や個人の役職名が書かれていた。しかし部署そのものは小さくても、ここにある各部署の母体は文部科学省や外務省、ひいては警察庁など大御所どころがいくつかがみられた。実質的な大使館という、この建物の役割に恥じないラインナップだ。

そんな廊下の最奥部に、今回の目的地が存在した。「外務省人物交流室 エルトニア 国境出張所」と銘打たれた部屋の扉に川崎さんが手を掛けた。

「どうぞ、お掛けになってください」

名前そのものは特殊でも、その内装についてはごくごく一般的なオフィスの域は外れていない。エルトニアらしさを微塵も感じない、完全な役所の一部署といった風貌だ。川崎さんの後に続いて何名かがデスクワークをしている後ろを抜け、部屋の片隅に置かれた談話スペースの長椅子に腰を下ろした。

「藤沢さんですね。以前にお会いしていますが、改めまして。外務省人物交流課の川崎義春と申します。本日は急にお呼び出ししてすいません」

「ええと、私は国立東都工科大学の藤沢レナです。平塚と一緒にということですが、どのようなご要件でしょうか」

簡単な挨拶を終わらせたさつそく本題だ。川崎さんから何らかの話が聞かれることはこれまでも何回かあったが、こういった場所に呼び出されて、さらには自分以外の人間を同伴でというのは経験がない。よっぽどの事情があるのかもしれない。

「単刀直入に言います。昨日、日本政府はエルトニア王室より一つの依頼を受けました。それは、十年程前に消息不明となった一人の王女の捜索です」

「——えっ?」

もう見なくても分かる。隣で藤沢さんが完全に思考停止状態となった。不意打ち、その表現するほかは無いタイミングだ。

「伺った話なんですがね、エルトニアと日本の空間的な接点は、この国境警備所以外にもあるみたいなんです。そのため極めて稀ですが日本の物が此方に流れ着くことがあるようです。それについては平塚さんが良くご存じでしょう」

「……そうですね。僕は特異点と呼んでいます、空間的に不安定な場所は確かに存在します」

川崎さんの言う通り、そのような箇所については確かによく知っている。なんとつてその特異点を漂流物の発見情報から見つけ出し、そこで無理やり空間転移の術式を展開して現代日本に帰還した身なのだから。

「そのような不思議な場所で、一人の王女が神隠しに会われたそうです。国同士で交流を持ち数年、ようやく今になってその情報が我々に伝えられました」

淡々と喋る彼とは対照的に、藤沢さんの表情は固まったままだ。この内容では、さすがに助け船は出せそうもない。

「そして私たちはその話が伝えられる前からある程度は調べていました。藤沢さん、貴女はエルトニア出身ですね」

「……ええ、その通りです」

もはや質問ではなく事実を確認するような様子の質問に対し、藤沢さんはこわ張った口調で答えた。これまで彼らがそれを明るみにしていなかったのは、単純にそれが必要

な情報ではなかったからなのだ。藤沢さんの出自にボロがないだなんて、さすがに日本を舐め過ぎていた。

「そう、それだけならば何ら問題は無かったです。しかしお恥ずかしいことながら、我々は貴女がエルトニアの王女とまでは認識しておりませんでした」

恐らく、前々から藤沢さんの出身については調べを付けていたのだろう。しかしエルトニア出身であるという以上の情報については調べておらず、今回向こうの王家から話を通して初めてその事実に至ったということか。

「……その様子ですと、平塚さんは前から把握はしていたようですね」

「ええ。彼女は身分の回復は目指しておらず、うちの大学において他の学生と同様勉学に励んでおります。それを見て判断したうえで、僕は守秘していました」

彼女を庇えるとするれば、その一点についてしかない。僕という人間は藤沢さんの出自どころか昔の身分などすべてを把握しておきながら、関係者各位に全く報告をしなかった。藤沢さんが仮に責められるとするならば、それを隠蔽した僕も共犯も同様だということだ。

「ああ、ご心配には及びませんよ。別に身分を隠していたからどうこうって訳じゃありません。それに今更国籍が云々というつもりも無いですよ。ただ、我々としても今後藤沢さんがどのように生活をしていきたいのかを直接伺いたく思いましたね」

見ているこつちが心配になるくらいどんどん顔面の青くなる藤沢さんに気を利かせてか、川崎さんは少しおどけたように空気を濁した。いつの間にか僕らの前に置かれていた麦茶を彼女の前に差し出すと、ようやく動転から立ち直った藤沢さんがコップを受け取り一気におおった。

「……それで今後、というのは……」

「貴女はエルトニアの王女であり、そしてエルトニア王室は行方不明の王女について此方に情報を求めてきました。もし貴女がエルトニア王家に戻りたいのであれば我々も全力でサポートしますが——」

「——それはっ!! それだけは……」

川崎さんの言葉を遮り、藤沢さんが弾かれたように叫んだ。そして焦燥に駆られたように目を開き、近くにあった僕の手をぎゅつと握り締める。握り締められた手の甲から小さな震えが伝わる。彼女の心の中まではさすがに伺い知れないが、王家への復帰というキーワードに何故かかなりの抵抗感を覚えているのは間違いないだろう。

「すいません、取り乱してしまつて……ですが私は、少なくとも今は王家への復帰なんて、全く考えてはいません」

少し俯きながら彼女が絞り出すように言った内容は、弱弱しい口調ながら川崎さんの提案を真つ向から否定するものだった。そして藤沢さんは口を堅く噛みしめ、僕の手を

より一層強くつかんだ。

「……分かりました。我々は貴女の意志を一番に尊重します。王室側には真摯に搜索しますとだけコメントを送るところに留めますよ」

そんな彼女の行動に若干面食らった様子の川崎さんは、苦笑いしつつそう返してきた。一見すれば川崎さんと藤沢さんの温度差に面食らってしまうだろう。しかしそれほどまでに、藤沢さんの中ではエルトニア王家に復帰するという行動に対して抵抗があるのだろう。無論理由については分からないがその根は深そうだ。

結果として、川崎さんたち外務省が王室側に提示する内容は、日本国主導により国内において行方不明の王女の搜索を開始したという文言のみとなった。もちろん藤沢さんに関する情報は全て秘匿し、彼女の気が変わるまでそのまま触れずにいるという約束も川崎さんと交わす。

少しばかり肩の荷が下りたのか、藤沢さんの表情は先ほどよりも柔らかいものになっている。話が始まったときのこわばり様のたらもう見ていられなかった。そんな彼女にとつてみればクリティカルな話が終着したのだからこそ、こんな変わりようだ。その気持ちは分からんでもない。

しかし安心するにはまだまだ早すぎる。ホッとされた様子の藤沢さんとは対照的に、僕の顔はむしろかなり険しいものになっているだろう。藤沢さんの件を秘匿することが

決まったのは良かった。そしてだからこそ聞いておかなければならないことがある。

「川崎さん、一つお聞きしてもよろしいでしょうか」

「……ええ、答えられる範囲であれば何なりと」

川崎さんからも笑みが消えて、そろって真面目な顔つきで向き合う。どうせ彼も何を聞かれるかなんてわかっているのだ。状況がいまいち読み込めていない藤沢さんは僕たちを交互に見ているが、これは彼女に関するとても重要な話なのだからよく聞いてほしい。

「では遠慮なく。本件、なぜエルトニアと国交を持つてから五年も経過した今になって話題が上がったのですか？」

王室側から日本政府の依頼内容は簡単なものだ。神隠しに会った一人の王女に関する情報の収集。恐らく高い確率で神隠しの転移先となっておりであろう日本、その政府に行方不明者の搜索を依頼するのは全く不自然じゃない。

「よもや五年間、日本がエルトニアからの信頼を得られなかったわけじゃあないでしょう。今になって王室側がこの話題を出した、その理由は何だと思われませんか」

仮にエルトニア王室側が過去に神隠しで行方不明となったヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアの転移先が日本国だと辺りを付けており、尚且つ搜索することを諦めていなければ、普通に考えて日本と国交をもった直後に話を通すはずである。しかし現実に

は、国交樹立から五年というタイムラグが存在する。それは一体何なのか。

「……それは、我々も測りかねているところではあります。昨日にその話を受けてから、各部署と連携して以前に同様の依頼を受けていかなかったか確認をしましたが、記録上には残ってはいませんでした」

「ということは、話が出たのは本当に昨日が最初ということですか」

そこまで言うと、川崎さんは周囲を確認しつつ声のトーンを少し落とした。まだ外部には話してはいけないことを伝えてくれるのだろうか。

「……だけの話ですが……その依頼を我々に伝えてきた使者は、ライル殿下を支持する一派にいるそうです。偶然かもしれませんが、この王女関連の話を打ち出したのは彼の派閥である可能性があります」

ライル殿下。その名前を聞いて少しだけ眉を顰める。彼こそが、エルトニア大学教育計画の支障となりうる大学否定派のトップだ。彼の名前が出てくるたびに、何らかの面倒ごとが此方に舞い込んでくる気がしてならない。

「そして私見になりますが、今回の一件も我々に向けた妨害工作なのかもしれません」
「……今回も、ということはいくらまでにも何件かあったのですか？」

そう聞いてみれば、露骨に川崎さんは表情を歪めた。仕事柄だろうけど普段から笑顔を絶やさない彼が眉間に皺を寄せるだなんて、一体どんなことをされているのやら。

「例えばそうですね……以前シンポジウムのスケジュールをお送りしましたよね。開催場所は新キャンパスの大会議室となりましたが、あれは元々エルトニア王立騎士学園の大広間を貸し切って行う手筈だったんです」

折角の晴れ舞台だ。国内でも有数のエルトニア王立騎士学園内で開催したほうが、確かに交流イベントとしては適していると思う。しかし現実には、それは達成できなかったのだ。

「しかし最終的に決定する寸前、向こうから一方的に断られましたね。詳細については一切なし。恐らくどこかからか横やりが入ったのでしょう。細かい物であれば他にもまだありますよ」

小さなものを上げればまだまだあるぞと、川崎さんは苦笑いを浮かべた。こちらまで上がってこない話の裏で、彼らのような運営サイドにはかなりの負担が来ているようだ。となれば、川崎さんの言う通り今回の一件も何らかの妨害工作の一種であるという可能性も考えられる。

「藤沢さんの件については、それとなくで良いので注意を払っていただければと思います。この一件がこの後どう転ぶかは、我々も分かりません」

「……分かりました。現場の人間として、最大限に気を付けようと思います」

とうとう僕だけではなく藤沢さんまでも、大学計画とエルトニア間の絡まった空間、

その中心部へと否応なく組み込まれつつあった。このまま身動きが取れなくなってしまうのか、それとも雁字搦めになる前に抜け出せるのか。未だ藤沢さんに握り締められたままの手に伝わる力が、俄かに大きくなった。

その3

仕事というものは、ある程度の立場まで上り詰めなければいつまでたつても上から降ってくるのである。そしてある程度の地位まで上り詰めたとしても、今度は下から投げつけられるのだ。じゃあ中途半端に地位が上がるとどうなるのか。単純である、上と下の双方から挟みこんでくるのだ。

「少し休んだらどうかしら」

「サンドイツチつてのはねえ、上下からパンで具材が挟まっているから動けないのさア」
「……駄目ねこれは」

今の僕はサンドイツチに挟まれた鶏肉だ。こちらをつぶさない程度に押さえつける仕事という名のパンにはさまれて、自由な身動きなんて取れやしない。

宿泊寮一階の食堂で軽めのランチセットを頼み、チキンサンドイツチを片手にパソコン画面を凝視する。目の前に映るは、各研究グループの学生たちから送られてきたシンポジウムの予稿だ。シンポジウムの当日は、これらの最終版をまとめた冊子を参加者に配布することになっている。どれもこれも内容自体は相当に単純。科学を全く分らない人でも理解できるようにと、各面々が己の研究分野を非常に簡単な言葉で説明して

いるのだ。

中間報告会を目前に控えて僕が担当する仕事とは、各研究グループの予稿を添削することだ。藤沢さんを除いて全てが博士課程の学生以上という状況では、対外シンポジウムの予稿添削を他の人間に行ってもらうなんて普通は考えられない。しかし今回のような、価値観や常識が全く異なる人間相手のプレゼンテーションを行う場合は、普段の慣れだけではどうしても対処することは難しいようだ。

「……これはちよつと話の持つて行き方が違うな」

例えばだ。現代日本では共通の認識となっている問題があつたとして、とある新技術が解決方策であるとする。その技術を改善することが目的の研究を行っている人は、普通の学会であれば緒言においてそのまんま説明すれば良い。しかしそんなバックグラウンドが存在しないこつちの世界では、同じ流れの説明は通用しない。

何処とも知れない未開の地、二ホンとやらで起きている問題を解決する研究。そんなものにエルトニアの人は興味を示さないだろう。如何にして相手の聞きたい説明をしてあげられるか。そのためには相手のことを知らなければならぬのである。

その技術を用いてこの国ではどんなことに応用できそうか。そこをまず見つけてから、逆説的にその技術がなければ十分ではないというストーリーに持っていく。魔法が発達しているお国柄から言つて、魔法を何らかの形で絡めるとよりキャッチーかもしれない。

ない。そんなことを考えながら予稿にコメントを追記していく。これらを送り主に返すまでが第一段階だ。

「当然といえば当然だけど、エルトニアについての考え方については浸透しているとは言い難いね」

「そりゃあ、大多数にとつては事前情報の全くない世界ですもの。三ヶ月間暮らしているとはいえ、住んでいる場所自体は日本人しかいない寮だし」

エルトニアの雰囲気なんて、インターネットで調べて出てくるものじゃない。そのような情報を得るには実際にエルトニア生活を体験するか、伝手で聞くしかない。開校から三か月経った今は、まだまだ過渡期なのだ。

「——今日は何にする?」

「私はA定食。みんなは——」

ふと周囲が騒がしくなった。耳に入ってくるのは、普段あまりこの場所では聞きなれない若い女子たちの声。どうやら授業を終わらせた学部教育課程の生徒たちがやってきたようだ。壁に掛けられた時計を見てみると納得だ。普段よりも遅めに食堂へ来たためか、いつもは時間的に被らない彼らと重なったようだ。

ここの食堂は研究室所属のメンバーに対してだけではなく、最近では一般学生にも開

放されるようになった。元々は日本人専用だったが、学生側から不公平だとの声が出たために現在へ至る。確かにここ以外で昼を食べるためには、結構な距離を歩いて大学の敷地を抜けて学生街へ向かわなければならぬから大変だ。

「……昼に行く前にカツラを取ってきて正解だったね」

「当然よ。言われなくたって、普段から研究フロアを出る際は最低でも帽子持参は欠かせないわ」

その言葉のわりに、藤沢さんは少しホツとしたような様子に見える。現地人の前で、彼女の特殊な色の髪の毛は晒すことなどできはしない。うっかりも許されないのだ。

先日川崎さんに言われたように、彼女については一層の注意を払う必要がある。何処から情報が漏れるのかわかったものじゃない。常にカツラを携帯することも対策の一環であるのだ。

「先に座っているね——あつ、ヒラツカ先生!!」

開いている席なんぞそこら中にあるというのに、トレーに定食を乗せた一人の女学生がこちらの姿を視認して近寄ってきた。緑色のサイドテールをひよこひよこ揺らす彼女は、確かに見おぼえがある。担当していた授業でいつも前の方の席に座っており、時折授業後に質問をしてきたから印象に残っている。

「先生も来ていたんですね。一緒に座っても良いですか?」

「お疲れ様です。どうぞどうぞ」

藤沢さんの隣に彼女が腰かけたのを皮切りに、一緒に来ていた他の二人も僕たちと同じテーブルについて。緑、金、淡水色。皆さん随分と個性的な髪色だ。それに加えて銀色、カツラで偽装しているけど赤紫色の僕たちが座るこのテーブルは、まるで仮装大会の現場だ。

「授業の外で話すのは初めてですね!!」

「エリツタは授業後いつも質問してたじゃない。あたしはミエルです。ほら、貴女も挨拶なさいな」

「ええと、私も授業を受けていました。名前は——」

方やパソコンで作業をしていて、方やそれをわき目で見ながら時折話しかける。そんな盛り上がる要素の見られない一帯が、女学生たちの加入で随分と賑やかな空間へと変化した。女三人寄れば姦しいとはまさにこのことだ。

「へえ、貴女たちが平塚さんの授業を受けていた学生さんね。私は藤沢レナ、彼と同じ研究室に所属しているわ」

「研究室ってことは、フジサワさんも先生なんですか?」

「いいえ。貴女たちと同じ学生よ。修士課程だけだね」

途端に仲良さげに話し出す学生さん方と藤沢さん。彼女が同伴で本当に良かった。

こういう若い学生相手で、しかも性別まで違うとなれば、こちらの立場が職員ということもあつて壁が多いから中々話かけにくいのだ。

「もう一人ヒラツカつて先生がいるんですよ。初等化学Aの授業を担当しているんですけど」

「そうそう。名前と苗字がそっくりどころかどちらも同じだから、てつきり先生が担当しているかと思えば全然違う人なんですよ。こう、髭がわしやわしやーという感じで」

あごの付近でわしやわしやと手を動かすのは、緑髪が目立つエリツタという名前の生徒だ。平塚先生のひげは、彼女のジエスチャー程は生い茂つていないはずである。

「その人は私たちの研究室のトップよ。ここにいる平塚さんとは同姓同名だし、所属している部署も一緒だから混乱するかもしれないわね」

「そうなんですか。髭のほうの先生は何というか、見た目だけはちよつと怖いですよ。でも授業の時はヒラツカ先生と同じようにユーモアだし分かりやすいですよ」

第三者から知人の評価を聞くというのは結構興味深い。聞いてみれば、平塚先生は授業中にちよくちよく小話や冗談を混ぜていくスタイルのようだ。そういつたところから僕が行っていた授業と似たような雰囲気を感じるらしい。

「似てると言えば、ヒラツカ先生とすごく似てる人を知っているんですよ」

「それって、この前の闘技大会でライル殿下をあと少しまで追い込んだ子のこと？ 髪

の毛の長さ以外はそっくりだけど、性別はちが……」

何の気なしに話の流れが僕のそっくりさんへと移り変わった。そのそっくりな子とは、まあ間違いなくレシルのことだろう。学校が同じ敷地にあつてほとんど共同生活状態なのだから、こつちに通つている人間全員がレシルを見たことが無いなんてことはあり得ないだろう。

きつとレシルとの関係性でも聞いてくるのかなと心の中で身構えていると、先にやつてきたのはエリツタさんの遠慮がちな質問だった。

「……ヒラツカ先生つて、男性ですよね？」

「——えつと……うん、その通りだよ」

何を聞かれているのかを理解するために一瞬だけ考え込んでしまった後、どこか申し訳なさそうな顔をする彼女に対して肯定の意を示した。「ですよね!! 良かったあ」という返事から、辛うじて彼女の中での僕の性別は男性側に触れてはいたらしい。

まあ確かに授業の一回目でやった自己紹介ではわざわざ己の性別を述べてはいないし、名前が日本人の物なのだから彼女たちには響きで理解をしろというのが難しいのは分かる。ただ話し方や服装やらで察してほしかったし、見るからにどちらか判りかねるといった様子で聞かれるとちよつと心が痛む。

「闘技会でちよつと気になつたから騎士学園の友達に聞いたら、あの人はフォルガント

家の一族なんだって!!」

「えっ。フォルガント家って、あの公爵家の!? その子、いやその方ってかなりのお嬢様じゃない」

フォルガントという言葉に対して、彼女たちの反応はおおむね驚き一色だった。確かに国の中でも有数の巨大な一族、しかもその本家となれば保有している権力は計り知れない。彼女たちの反応も納得である。

「……初回の授業から薄々気づいてはいたんですけど、ヒラツカ先生って二ホンの人じゃないですよね?」

そうだ、思い出した。初回の授業の中でエリツタさんからそんなことを聞いてきた気がする。あの時は、レシル回りの状況を知らなかったから下手なことは言えないとノーコメントを貫き通したんだ。それをまた改めて聞いてくるとは、彼女も知りたがりな人間だ。

レシル関係の話からそこに持ってくるあたり、彼女も予想はしているのだろう。僕とレシルの関係性や、その出自について。

「その前にちよつとだけ聞いても良いかな。エリツタさん、今話に出ているフォルガント家の子女についてどこら辺まで知っているのかな?」

「……血筋はフォルガント家だけ……ええと、身分的は庶子ということは知っていま

す」

庶子、という言葉聞いて他のメンバーは少し気まずそうな顔をしていた。キリスト教が闊歩していたこっちの中世ヨーロッパほどではないにせよ、この世界においても庶子という身分は本家の人間よりもどうやったって下になる。お嬢様だと驚いた手前、その身分を聞いて肩透かしな気分になるのはある意味当然といえるかもしれない。

とりあえず、レシルが庶子であるという情報は多少調べれば出てくるものだということが分かった。だとすれば、そろそろ関係性についてばらしてしまっても良いだろう。不自然に黙っていても、それはもはや正体を明かしているのと大差はない。

「それを知っているならばもう黙っている理由もない。僕は確かに出身はこっちで、彼女——レシルティアっていうんだけど、その兄ですよ」

そこからこちらの出自について簡単に説明してみると、三人とも驚いた様子は見せながらも納得したような雰囲気を出していた。自分の出自なんてあんまりベラベラと喋るようなものではないが、相手がある程度把握している状況で下手に誤魔化せば有らぬ勘違いを招きかねない。こういう時は正直に話してしまった方が得策なのだ。

それに、ただ此方から情報を渡すだけじゃない。騎士学園に知り合いがいるというエリツタさんは、もしかしたら向こうの興味深い情報を知っているかもしれない。

「それじゃあ今度はこっちから、騎士学園について少し聞きたいことがあるんだけど良

いかな」

こちらから騎士学園について知りたい情報。それは、ライル殿下の周囲に関するものである。こちらの大学計画を阻害する幾つかの要素、それらを束ねている可能性があるライル殿下についての情報は、噂程度でも良いから頭に入れておきたかった。

その4

先日の昼食の場で聞いた話は、多くは無かったがそれなりに収穫はあった。

特に興味深かったのは、彼がどのタイミングで大学計画に不信感を持つていたかということだ。当然大学計画が始動した去年以前、もしくは日本と交流を持った時からだと思っていたが実際は違つたようだ。確かに彼は当初から大学計画に良い感情を抱いては居なかつたそうだけど、それはあくまで個人の好き嫌いの範疇に収まっていた。しかしそれがつい最近になって明確なものになったそうだ。

身内の人間たち、例えば取り巻きの学生やその近辺の貴族を動かしはじめたのは、ちようど殿下たちが大学キャンパスの見学に訪れた時期と重なる。

『行き過ぎた技術は危険な存在に成りかねない。だがそれに待つたを掛ける人間は散発的でまとまりがない。だから私が懸念を示した』

ライル殿下が大学計画に対して否定的立場を表明した後、直接話を聞くと彼はこう言っていた。まるでずっと前から懸念を抱いていたかのような言い方。しかしエリツタさんの話を信じるならば、彼の考えが明確に変わったのは見学会の前後だ。

果たして見学会で何かの問題があつたのか。川崎さんにいろいろと説明を求められ

て見学会当日の様子について話したからか、一か月以上経った今でのあの時の様子については記憶に残っている。そしてその記憶の中では、見学会の最中でライル殿下が目の色を変えるようなイベントは特に無かったのだ。終始淡々とした様子で見学会に参加をしていた彼が、その沈黙の裏で琴線を刺激されたのだとしたらもうお手上げだけだ。

ならば他にどのような切っ掛けがあるのだろうか。一つだけ引っ掛かるのは、見学会の開催が決定された日にちと理由だ。開催決定のメールを受け取ったのは、ちょうどレシルと王都を散策して平塚先生を交えて知らない人との会話の練習をさせた後だった。あの日がライル殿下と初めて遭遇した日で、彼が日本や大学に良いイメージを抱いてはいないと思ひ知らされた時でもある。

そもそも切っ掛けは、あの日に有るのではないか。昨日エリツタさんの話を聞いて以降、その考えが頭の中をぐるぐると回っていた。

「おはよ——レイ、その頭どうしたんだ？」

「この前学会で向こうに戻った時にこっそり買っておいんだ。どうかな、これで大分日本人感が出たんじゃないかな」

手元のタブレット端末を眺めながら食堂の席に着いた平塚先生は、こちらをチラリと見た後、見事な二度見を披露した。ともすれば素っ気なさすらも感じる普段の彼とは思えない行動に、こちらとしてはしてやったりとニヤリと笑った。

僕の頭の上には、中程度の長さを持った黒いカツラが被さっている。藤沢さんリスベクトというわけではないが、カツラを被る彼女を見ていると確かに雰囲気をごまかすことは可能だということが良く分かった。

「いや、髪の毛がいくら日本人風味でも顔が和風じゃないから絶望的に合っちゃいない」「すごく正直に言うよね。あれだよ、変装ってやつ」

「イメチェンって柄でもないし、どうせそんなところだとは思ったが。何でまた変装なんてしているんだ」

抱いて当然の疑問を口にする平塚先生に、その経緯を端的に説明した。

先日の昼食中に女学生たちと共に会話をしている最中、彼女たちに指摘をされたのだ。曰く、僕とレシルは見分けがつかないほど似ている。同じ服装ならまず違いが分からない、と。闘技大会でレシルの戦いを見た面々が、あの平塚という教員がとうとう頭狂って騎士学園の闘技大会に出たのだと思っただくらいには。自分でも瓜二つだと思っし、藤沢さん等の身内の人間からの評価もそう。だったら他人から見たらなおさらであるに違いない。

ここまでの話は前から分かっていたし、その上で特に変装しなければなどとは考えてはいなかった。しかし最近になって少しだけ事情が変化してきた。僕の存在とは、大学計画を主導する立場にある人間の一人である。その一方で、レシルはあくまで騎士学園

の学生の一人。

「この前、騎士学園に詳しい人たちから聞いたんだ。あの学園の学生の中にも、大学計画をよく思わない人たちが一定数存在するようだよ」

レシルと瓜二つの人間が、この大学の中で研究活動を行う。その事實は、一步間違えればレシルその人が大学計画に含まれる一人であるという誤解を周囲に与えかねないのだ。そしてそれが学園内に存在する反大学計画波の生徒に広まれば、レシルの立場がぐらついてしまう可能性があるだろう。今更手遅れなのではないかとも思う。でもやらないよりはたぶんマシだ。

「妹の立場を考えてみたんだ。姿がそっくりな人間がこっちの施設で研究者生活を行っているんだ。下手すりゃ彼女自身が大学側でなんかやっていると思われるかもしれない」

「……ふうむ。藤沢や俺を交えて何度か顔を合わせている以上、今更効果なんて望めるか疑問だな。まあ、一番顔を合わせるのはお前だから、お守り程度にはなるかもしれない」

こうして変装して外出することを継続していれば、何らかのご利益もあるかもしれない。実益を兼ねたイメチェンと思えば安いものだ。それに今朝方鏡の前に立つてみて、己の髪の毛が黒いという事実に対して違和感よりも収まりの良さの方が強く感じた。

生まれ変わってから十数年と立つが、精神のどこかに残る前世の記憶は案外根が深いようだ。久々に髪の毛が黒いという事実を堪能するのも良いことだろう。

さて、時計を見てみればもうそろそろ七時半時を回ろうとしている。食堂の込み具合は概ねこの時間がピークであるが、土曜日ということもあって平日よりも食堂にいる人の数は少なめだ。家族持ちの人や学生の一部は週末に東京へ帰り、リーヴェルキャンパスは全体的に閑散とするのである。無論研究に没頭するため実験スペースに缶詰の人たちもいるし、自分もレシルと会う用が無ければそちら側の人間である。

では配偶者無しの一人暮らしな平塚先生はどうなのか。彼は概ね週末はリーヴェルキャンパスで過ごすことが多く、自分のデスクで事務作業を結構な時間没頭しているのだ。ならば終日研究棟に缶詰なのかと言われれば、案外そうではない。現在の平塚先生の趣味は、王都リーヴェルの散策である。昼食がてらに学生街を散策して異国風の街並みを楽しんでいるらしい。数日前に先生が見せてくれた自作の昼食マップは、僕個人で細々と作ったものよりもよほど量質共に充実しており、思わず唾然としたものだ。

「今日の昼はどこ行くの？」

「そうだな……西地区は粗方回ったから、南側を新規開拓しようと思う。今日は藤沢はいないんだつたよな。いつも通り正午くらいで考えといてくれ」

一応立场上准教授と卒業一年目の助教という隔たりもあり、リーヴェルキャンパス赴

任当初は周囲の目を気にして藤沢さんを交えた平塚グループ三人での食事は回数を控えめにしていた。しかし新学期開始から一か月ほどが経ったところから結局気を使うのが面倒になったこともあって、今では結構な頻度と一緒に食べることが多い。時間に余裕があり外で食べることが殆どの週末では、平塚先生のグルメマップが猛威を振るうのだ。

本日は所用で藤沢さんは東京に赴いており、今日は二人きりでのサシメシである。大藤藤沢さんやレシルが混ざるため、平塚先生と二人きりで食事というのはあまりないのだ。いつもよりも、遠慮なく愚痴なりなんなりを言い合えることだろう。

「分かった。その時間までは実験室で作業してるね。正午になったらデスクに呼びに行けばいい？」

「いや、今日は俺も手を動かさなきゃならん用があるんだ。南の先生との共同研究で追加で調べたいことが有るって言われてな……本来なら学生に任すとこだけど、ウチは藤沢だけでもんなあ」

ものすごく渋そうな表情で平塚先生がぼそりとつぶやいた。少人数で小回りが利くなんて詭弁に過ぎない。ここまで小規模ならば息が出来ないくらいに手が回らないのだ。昨年まではデスクワークバリバリだったはずの平塚先生は、確かに今年度になってから実験室で作業をしている姿を見かける頻度は高いのだ。果たしてここから別の大

学に栄転すると、リーヴエルキャンパス自体が人員豊富になるのはどちらが先なのだろうか。どちらにせよ早めに訪れてくれないと、いつかリーヴエルキャンパスにいる面々は誰かしらぶっ倒れそうな気がする。

「……やっぱお前の頭違和感あるな。変装なんぞ今日からでなくてもいいだろ、外してけよ」

「いや。また明日を連日続けていたら何時までたつても始まらないよ。今日から着ける、それは決定事項だよ」

悪いがそれだけは断固拒否だ。カツラを取っ払うべくこちらの頭にのばされた手を、ペシッと払いのけた。

その5

ソースの染みた豚肉の衣焼きに刺さったフォークを持つ手が震える。そしてそれを口に持っていていこうとする腕の筋肉までもが異様に硬直した。簡単なことのはずだ。それを口に運び、歯で咀嚼し、飲み込めばいい。何を迷う必要があるんだ。

しかしそんな簡単な一連の作業に向けた第一歩を、己の左手はなかなか踏み出そうとすらしない。ただ皿の上空数センチメートルでフォークに刺されて静止する衣焼きの一切れからは、食べ初めてそこそそ時間がたつにもかかわらず未だにほどよく揚げられた香ばしい匂いが漂ってくる。それが鼻腔に入って刺激するのは、食欲などではなく打倒すべき最後の試練への覚悟だった。

自然と水の入ったコップへと伸びる右手を、強靱な精神力で押しとどめた。この状況下における水は、回復薬などではなく己の寿命を縮める愚策に過ぎないのだ。ゴクリと唾を呑み込み、意を決して口の寸前までフォークをやる。口を開き、後は噛みしめれば良いだけなのだ。笑えてしまうくらい、いつもよりもすべての感覚が鋭敏であった。眼前の一切れの肉片から漂う香り、体温と同じくらいに温まったフォークの持ち手、油分とソースで煌めく衣焼きの表面。これらを前にして込み上げてくるのは、唾液ではなく

拒絶感なのだ。

嗚呼、この一歩が遠い。仮に首の下と上で感覚を完全に切り分けられたらこんな思いなどしなくて済んだものを。唇が衣焼きに触れて、もう後戻りなど出来はしな——

「そんなに多かつたか？ 昔から俺自身あまり食う方じやなかつたが、少食に磨きがかかつてないか」

「僕の食の細さは概ね見た目相応だよ。昔の僕ら自身はおろか、下手すりや藤沢さんより胃が小さいまである」

そろそろ現実逃避をやめよう。いくら頭のなかで考え事をぐるぐる回そうが、満腹感には消えることなんて無いのだから。

本日の昼食は、予定通り平塚先生と一緒に街の一角で取ることになった。場所は学生街の南側にある、宿屋付随の酒場兼食堂である。平日は混雑でなかなか入るのが難しいそうだが、週末の今日は特に並ぶこともなく机にたどり着けた。

店のスタイルはシンプルだ。飾つた感じのない木造の内装の店内で、腕つぶしの強そうな女将と若いウェイターの女性達が賑やかげに店を切り盛りしていく。そして肝心の料理は、おしやれさよりも豪快さを売りにした、お得な価格設定でかなりの量が食べられる、育ち盛りの学生にとつては非常に魅力的なものだった。事実、僕たち以外にも学生と思われる若い客が数名料理に舌鼓をうっている。

「お前の妹さんは見た目はそっくりだが結構な量を食べていた気がするけどな」

「……むしろ彼女が年相応の、育ち盛りの食べ盛りだからね。僕はほら、燃費が良いんだよ」

女子というものは何故そこまで小食アピールをするのだろうかと前世の頃に疑問に思ったことがあるが、今ならばその理由が良くわかる。あのアピールは、大抵嘘偽りのない本心だ。自信の胃袋のキャパが落ちて満腹感がすぐに訪れるからこそ身にしみる。腹八分目から全埋まりまで、本当にあつという間なのである。

女将の押しメニューである豚肉の衣焼き定食は、少な目で頼んだというのに皿への盛り付けは多少なりとも立体的なものであった。それだけでも冷や汗が浮かんだが、一口食べて嫌な予感実感へと昇華した。味が濃い、そして噛みしめた歯の間から滴り落ちるジューシーな油と甘いソース。よく言えば豪快な、悪く言えば大味な料理だ。前世の頃だったらおいしく食べていたであろう料理であるが、悲しきかな。現状の僕の消化器系統はこの料理に対して相性がよろしくはなかった。

「…………ちそうさまでした」

目の前の料理から逃避しよう意識を他に飛ばしていたから、食べるスピードの落ちていく自分に向けられる視線は感じ取っていた。コイツまさか残すんじゃないだろうなどカウンターの内側から鋭い視線を飛ばす女将さんや、興味深そうにこつちを観察す

るウエイターのお姉さん。

だが辛うじて、残すなんてことは無く、すべてを腹の中に収めることが出来た。重さを感じさせる胃袋に口内へ残ったままのタレの風味。しかし飲み込んでしまえばもうこちらの勝ちだ。僕へ向けられていた視線は散っていくことだろう。

「……改めて思うが、本当に食うのが遅いな。藤沢の方がよほど健啖だ」

「それ本人の前では絶対に言わないように。彼女、案外そういうの気にするから」

以前に平塚先生へレシルの対人会話練習をお願ひしたときの話だった。僕は藤沢さんに対してたまにからかいの言葉をかけることが有った。しかしその時の、藤沢さんは僕よりも量を食べるのではないか、という文言は彼女の地雷を踏みぬいたらしい。一瞬口調が変わり、こちらにもんのすぐ鋭い視線を向けてきたのは今でもよく覚えていゝる。彼女への食関連のいじりは、間違いなく自殺行為だ。今だって、彼女がこの場所にいゝないから口にしてゝいるに過ぎないのである。

そんな彼女の話をしてゝいると、そういゝばと平塚先生が何かを思ひ出したように口を開いた。

「藤沢つて言ゝば、今週なんか元気が無かつたな。事情は知らんが、適度にフオローしてやれよ。この閉鎖空間じゃ小さなことが切つ掛けで色々なりズムが崩れかねんぞ」

「……それ、もしかしたら週の頭に川崎さんから言われた話が原因かもしれない」

エルトニア王室の一部から秘密裏に出された王女搜索依頼についてかいつまんで説明してみると、彼はほりの深い表情をややゆがめて眉間を揉んだ。平塚先生は、僕や藤沢さんの秘密について把握をしている数少ない人間の一人である。無論藤沢さんの生まれがエルトニアの王家であることも知っている。唯一となつてしまった直属の学生一人が、ただでさえハードな状況下で研究生活を営んでいるというのに、更に妙な状況へと引きづりこまれつつあるのだ。彼としても頭が痛くなるような話なのだろう。

エルトニア政府はヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアの行方を捜している。それを川崎さんから知らされてからというもの、この一週間藤沢さんはぎこちなく毎日を過ごしているように見える。黒いかつらをつける頻度を増やす等の細かな行動の徹底ならばまだしも、彼女の精神的な側面にも影を落としているのは間違いない。川崎さんに身分を明かすかどうか問われたときの藤沢さんは、これまであまり見たことがないくらいに動揺していた。エルトニアに移ってくる前に僕と互いに愚痴を言い合っていたときよりも、現状の方がよほど問題が近場に迫っているのだからだろう。

無論、ほとんど毎日顔を合わせている以上、そんな彼女の様子にはすぐに気が付いた。だがそれとなく悩みを相談するように促してみてもはぐらかされてしまったのだ。週末の今日とかは絶好の気分転換だから学生街の探索に誘おうとも思ったが、誘うよりも先に先約で彼女は東京に行ってしまった。ならばせめて、久々の都会で気分を発散させ

てくれるのを願うばかりである。

「どうにも色々ときな臭いな。藤沢の一件といい、浜松先生の件といい、最近あまり治安がよろしくないぞ」

「……浜松先生って、なにかあったの？」

「そつか、レイは教授会には出てないから知らんのか。数日前、浜松先生が学生同士数人のいざこざに遭遇したんだとき。それもウチの学部生と、相手側は騎士学園の生徒だった」

我らが国立東都工科大学のリーヴェルキャンパスとエルトニア王立騎士学園は同じ敷地内にあるのだから、その組み合わせそのものについては不思議なものではない。なんとって一番のご近所さんだし、顔を合わせることも多いのだ。

「別に殴り合いのけんかとかではなく、あくまで言い争いの域は出てなかったそうさ。浜松先生が何事かと近づいたら有耶無耶になったというから大事というわけじゃないんだが……ただ言い争いの内容を断片的に聞いた限りでは、科学技術の危険性がどうのこうの言っていたらしい」

それを聞いて思わず眉をひそめた。大学計画への反対派とは、恐らくライル殿下が率いる一派か、もしくはそれに影響された集団なのだろう。そんなものが貴族社会の中に留まらず、まだ若い学生にまで染み出してきているというのだ。ただでさえご近所の工

ルトニア王立騎士学園にそんなものが広がり出しているのは頭が痛い。渦中の人物であるライル殿下が学生として所属をしている以上、彼の派閥にそのような考え方が蔓延していくのは時間の問題だったのだろう。

一人の職員として考えれば今後の大学運営に影を落としそうな一件に悩みが深まる。そしてラストイレイ・フォルガント一個人としては、このままいけば一層レシルの立場が不安定なものになるのではと頭が痛くなる。そもそもから言って彼女は間違いない派閥というものを、形成はおろか属してもいないだろう。それにこれまでの出来事から考えるに、彼女自身あまりライル殿下とは良好な関係はとってはいないはずだ。更に言ってしまうえば彼女の兄である僕が、件の大学計画における日本側の関係者なのだ。彼女の立場を考えたら、あまり良い状況とは思えない。

「予想はしていたとはいえ、大学計画をよく思わない人間が騎士学園側に増えてきたっていうのは大変だね。川崎さんもそれ関連で報告会の運営に妨害がいくつか入ったって言ってたよ。それに、妹のことを考えるとこの状況からなんとか脱したいけど……」
「……あと二週間を切ったんだ。お前の実家の有力貴族を巻き込んだ報告会で、良くも悪くも状況は変わるだろうさ」

平塚先生の言う通り、状況のターニングポイントは報告会以外には無いだろう。ライル殿下を擁する反対派がそのまま広がっていくのか、それともフォルガント公をトップ

とする報告会の参加者一派が、科学技術の有用性をエルトニアの貴族社会に浸透させてくれるのか。大学計画が始動してから初めての転換期は、もうあと少しなのだ。

「さてと、そろそろ腹も落ち着いてきたから出るか」

「……そうだね。んじゃ帰りますか——」

席を立ち上がろうと腰を浮かせたその時に、僕らが座る机に三人の若者が近寄ってくる姿が見えた。彼らは、僕らが店に入った時に先客として食事をしていた集団だ。少々がたいのいい二人の後方に控えるは、恰幅の良い丸顔の青年だった。妙に笑顔を帯びた彼らの表情に、底知れぬ嫌な予感が沸き起こる。

「やあ、少し時間を頂いてもいいかい？」

机を包围しようとする三人組を無視して立ち上がろうとする平塚先生を、彼らの中で代表格であろう恰幅の良い青年が呼び止めた。敢えて気が付かないふりをしていたであろう平塚先生も、直接呼び止められてしまったのならば反応するしかない。メガネの奥に控える彼の視線が鋭くなり、それが僕の方にも向けられる。誰だこいつらはとも思っているのだろうが、僕としても全く見覚えのない面々だ。知らぬと少しだけ首を振って返すと、彼はため息一つと共に青年へと向かい合った。

「……なにかご用でしょうか。我々は急いでいるんで手短にお願います」

「そ、そうかい。ぼくらはエルトニア騎士学園の学生だよ。君たちは二ホン国の研究者

で間違いはないかい？」

平塚先生の、身内の人間でも思わず怖さを感じるほどの冷たい返答に対して、青年側も少しだけだじろいだようだ。その中で彼が言った自己紹介に対して、僕はなるべく表情を変えないように意識をしつつ内心で舌打ちをした。まさかとは思うが彼らが先ほどまで話していたような騎士学園の中に広がる反大学派閥の人間じゃあるまいなど。

「ええ、我々は確かに大学の研究者ですが」

「それは良かった。せっかくの騎士学園のご近所なんだ。君たちについて色々知っておこうと思つてね」

浮かべられた薄い笑顔を何処まで信用できるのかは分からないが、言葉の表面だけ掬えば僕たち日本の研究者について知りたいということだろう。一見して友好そうな言葉でも、平塚先生はその一切の興味を抱いてなさそうな無表情を崩さずに言った。

「それについてはちようど二週間後に良い機会があります。うちの大学は今度研究紹介を行いますので、そちらに伺つてもらえれば色々分かることでしょう」

そう言いながら再度立ち上がった平塚先生を、連れ添いの二人の学生たちが通路を塞ぐ形で邪魔をした。仕方がなく再び椅子に腰を下ろした彼は、不自然なほどに顔を歪めるも睨むもしていない。表情こそに変化は無いが、平塚礼二という人間があまり外面に変化がないような形で怒ることをよく知っている身としては、不自然に無表情へ

固定された彼の顔面を察するにかなりイライラしているであろうことは読み取れた。教員としても研究者としても忙しい身分で、何故こうもアポイントもとらぬ連中に時間を割かなければならないのか。たぶんこんなことを考えているに違いない。

言い放たれた対象でもある青年も、平塚先生の言葉を真正面から受けてこめかみがひくひくと動いていた。確かに平塚先生の返答については取り付く島もない有様であり、いざ自分がそんな対応をされたとしてもいい気分はしないはずだ。それでも表情自体は最低限笑顔を保っている辺り、彼も年齢の割には自制心があるようだ。

「……あの、先生はちよつと予定が詰まっていますのでまた後日でよろしいでしょうか。うちの事務の人に言ってもらえれば、こちらも余裕をもって時間を作れますし——」

「君のような一介の学生には話を聞いてはいないよ。ぼくはこう見えてもレザニア侯爵家の子息だ。文化の違いもあるだろうが、貴族階級の人間に対しては最低限礼節を重んじるのがこの国のルールだ」

仲介に入ろうとした僕を遮るようにして、彼は物事を分かりやすく教えるがごとく妙に落ち着いた様子で話した。彼の家名自体に聞き覚えは無いが、侯爵家ということはどこかの六大家の分家なのだろう。文化の相違というのであれば、確かに平塚先生のような純粹の現代日本人は貴族社会については全く明るくはないのだ。この国における一般的な知識としては、彼の言う通り貴族階級に対しては丁寧に接しろというのは間違い

ではない。

一見すれば、無知な庶民に対して親切に説明をする貴族様という図式だ。だけどなんだか胡散臭いし、それに己と同年代に見える僕について、話は聞かずに切り捨てるという行動にはこちらとしてももちろん良い気はしない。

「そもそもぼくも時間を割いて君たちニホン人の実態を聞こうとしているんだ。君らの国から流入する安全かどうか分からない代物に、レザニア侯爵家は危機感を抱いている。同じ考えを持っている人間が、王都だけでもどれだけいるのか君たちは分かるのかい？」

彼としても、わざわざ時間を使ってやっているのだというスタンスなのだろう。だがそんなご高闊な考えならば飯を食べたついでで絡んでくるのはいかなものかと思う。そしてようやく確信した。彼やそれに付き従う二人の青年たちは、間違いなく大学計画の反対派なのだろう。上手く流せればいいのだろうが、下手な対応をすれば僕らの風評を汚しかねない。

「……一つだけ訂正を。彼は一介の学生ではありません。優秀な研究者であり、そしてれっきとした教員です」

ここまできて表情一つ変えない平塚先生は流石だと思う。その上こちらのフォロワーまで回るのだから、かなりの豪胆さだ。しかしそんな感情の浮き沈みを感じさせない風

を見せながら、彼はそれとなく自信の首もとに触れた。単に首もとを搔いているだけに見えるその行為は、よく見てみれば小さなネックレス——翻訳魔法の効果をもつ魔石を外しているようだ。

『おい、こうすりや連中には通じないんだろ。面倒な状況だがここは俺に任せとけ。レイよりは俺の方が感情が表情に出にくい』

『……ありがとうね。エルトニア人じゃなきや分からない話をふられたら、フォローに回るよ』

『そうしてくれ。食後のついでに国を憂うなど、とんだ笑い草だ』

翻訳魔法を無効かした上で、更に言語すらもあえて英語を用いて話し掛けてくるあたり、平塚先生は徹底していた。急に意味の通じない言葉を喋りだす平塚先生を、青年たちは怪訝そうな表情で見つめる。

この手の面倒な事柄は避けて進もうとする平塚先生から考えれば意外な行動だが、それを引き受けるだなんて珍しいことだった。その根底は、僕に対する親切心だけではないだろう。口調や表情は何一つ変わらないというのに、やはり発言内容から考えて彼も腹に据えかねていたようだ。

「失敬、翻訳魔法のネックレスが外れていたようです。せつかく貴殿方のような識者が話を伺いに来ていただいたのですから、短めにはなりますがご質問にお答えしましよ

う。ただ——」

どこか慌てた風を装い首とものネックレスを直す様子を見せつけた平塚先生は、先程とは一転して妙に柔らかな雰囲気を纏いながら青年側へと向き直った。あまりの様子の変化に僕らを取り囲む青年たちだけではなく、身内の僕でさえも違和感を覚えるほどだ。というか違和感で留まらない、鳥肌すらも立った。この人、多分結構本気で苛ついている。

「まずは場所を変えましょうか。そろそろ女将さんにどやされます」

確かに背後を振り向いてみれば、食べ終わつたのだから出ていけと険しい表情を浮かべた女将の姿が目に入った。しかしそれ以上に、態度を急変させてともすれば獐猛とも見えてしまう笑顔の平塚先生の方が、よほど僕の目には脅威に写った。自分自身が苛苛とする様子を客観的に眺めるのは、思っていたよりも心臓に悪いのかもしれない。

その6

「ここならば十数分くらいはのんびりしても問題ないでしょう」

学園区から少し外れた商業区の入り口には市民たちの憩いの場である大広場があるというの、現代日本に来る前から話には聞いていた。中心部の城や様々な学園区建物と並んで、その広場は王都の名物として有名だったのだ。そして実際に来てみれば、名物だけあって景観や賑やかさはただの広場で片づけられるものでは無かった。面積そのものも広いし、たくさんの人々が噴水の縁や長椅子に腰かけて思い思いの時間を過ごしている。

そんな団らんで溢れていて然るべき場所の一画で、妙な一団が広めの机を占有していた。片や学園指定の制服ではなく少々煌びやか服装に身を包んだ青年たち。そして机を挟んだ向かい側でそれと相對するは、双方共にジャケットとワイシャツジーパン姿という現代日本人感丸出しな恰好の平塚先生と僕である。

「さて、お聞きしたいというのはどのような話でしょうか」

普段はほとんど見せないような雰囲気、妙に張り付いたような笑みを浮かべながら平塚先生は青年たちへと問いかけた。そもそもの言葉遣いが丁寧でも、その端っこには

本性が少しばかり見え隠れしているのだ。ここは特定の個人が所有するものではない公共の広場であり、十数分のんびりするのはおろか、例え半日居座ろうが文句を言う人間はいない。彼がそのような発言をしたということは、言葉の通り十数分でケリを付けようということだろう。

「そ、そうだね……君たちの扱うカガク。それがこの国にもたらす影について、君はどう思う？」

「そうですね。我々はどうにも視野が狭くなりがちでして、客観的に己を俯瞰するのは大切ですよ。それで、どう思うかですか」

言ってしまったえば、あまりにも大雑把な青年の問いかけだ。こんな質問、もとよりどう返そうがエルトニアの歴史やら常識やらをそれっぽく語られて、ひたすらこちらが受け身になるしかなさそうな切り口にしか思えない。だが平塚先生は、わざとらしく額に手をやって如何にも一生懸命に考えている感を出している。

「君たちはあまり知らないとは思うけどね、この国の周辺は昔から戦が絶えなかった。国力を蓄えるためにエルトニアは魔法研究に比類なき力を注いできたんだ。情勢が落ち着いてきたここ半世紀でも、魔法に関する知見の蓄積は他国を圧倒していると言える。この美しい祖国が今まで生き残ってきた理由は、そこにあるのさ」

芝居がかったかのような手振りと共に、仰々しい口調で青年が話す。彼の言う通り、

確かにエルトニアと魔法というものが切っても切れない関係にあるのは間違いないのだ。

この世界における魔法の在り方とは、現代日本世界における科学と似たような立ち位置にいる。特に国同士の情勢があまりよろしくないときには、科学と同じく魔法の技術が国力を左右しうるパラメーターとなるのだ。王都に豊富に存在する魔法技術関連の教育機関は、古くは王室お抱えの研究機関が元になって発足したなんていうストーリーもそこら中にある。

「そして近年では、魔法関連の技術の高さを諸外国にも供与しているんだ。古くは武力の象徴であった魔法技術を、混然たる研究対象として他国と共有する。僕らの魔法技術を生活基盤向上に役立てる、そして他国との共存をするというあり方はようやく入り口にまで達したんだ」

これについても同意だ。せめて第二の故郷の歴史ぐらいは勉強しようと、幼少のころから歴史書に人並程度には目を通してきたつもりだ。流石はエルトニアの人間が書いてだけあって少々自分たちの国を美化しすぎな点は存在するにしても、紛争期から近代にかけての他国との融和路線へシフトしたことは間違いなく評価すべき点だろう。他国からの留学生を最先端の魔法学院に受け入れたことは、大きな転換点の一つに間違いない。

エンジンに火が付いたかのように、魔法が如何に重要で歴史が深いかを熱弁する青年の姿を、しかし逆に僕は冷めた目で眺めていた。確かに彼の言うことには少なからず同意できる点も存在する。この国における魔法の重要性だなんて、王都にある魔法関連の学術機関の数を見れば馬鹿にだってわかる話だ。

この手の話になると、どうしても愛国的な意見が散りばめられる。魔法教育を諸外国に広めたエルトニアという国がどれほどすごいのか。先の歴史書にしたって、その風味をそこかしこから感じ取ったものだ。自国にそのような誇らしさを持つことには心象的に分らないでもないが、魔法の重要性を説くならば中立にならなければどうしたつて鼻につくのだ。加えて後に今はなしていることがすべて科学技術へのアンチテーゼに繋がることを予見しているからこそ、仮にもエルトニア人であるというのに聴き手である僕の感情は更に白けたものになる。

「ある種、魔法とはこの国の信用手形のようなものだ。対立ではなく共栄を目指す。大いなる歴史が後ろにあるからこそ、我が国は現代において周辺国から信用を得ているんだ」

「……要約しますと、魔法は歴史的な位置づけから信用に値して、科学はそうじゃない。それでよろしいですか」

数分間に及んだ青年の力説を、平塚先生は小ぎつぱりとした内容に圧縮した。まあそ

うだろう。純正の日本人である先生にとつちや、この国で魔法がどれほど重要なんで、少しは知っておいても損はない程度の知識でしかない。何かを説明するときは、己の話したいことではなく相手の聴きたいことを話せと日々力説する彼のことで。わざわざ時間を割いてやったのにそんな話を長々と聞かされたことは、あまり心象的に宜しくは無いのだろう。

「そうだよ。今まで魔法に専念して力を入れてきたこの国が、カガクという新たな技術体系を得かねない。それは、これまで培ってきたバランスの崩壊につながると考える人間もいるだろう。それにカガクの存在そのものが、これまで魔法の技術により平和で安定してきたこの国に火種をもたらすかもしれない。僕はそれを危惧しているんだ。その危険性について君たちニホン人どう思うのか、僕はそれが気になるんだよ」

結局はそこに行き着くのだ。ライル殿下も口にしていたような、新しい技術の危険性への危惧。大学計画に反対する彼らの共通の認識であり、常套句でもある。その認識の出どころは、周辺国との関係性に関して国の将来を見据えての物なのか、それとも魔法技術体系でのし上がってきた歴史を重く見てのことなのかは分からない。ただ一つ言えるのは、この手の意見を持った人間はなかなか説得が難しいということだ。特に心の奥深くからそう信じている人間に対しては。

いつこの世界であつても、新しいものへの不安感や抵抗は付き物だ。日本だつて戦

国時代や江戸時代にはキリスト教への禁教令が出たことが有ったし、近代では海外からの輸入関連で揉めたこともあった。新しい価値観の導入は、時には既存の価値観の蹂躪に繋がる。そこに既存物への愛着やら利権やらが交わると、もうどうしようもなく難しい話になるのだ。

波風立てずにこれにうまく答えるには、科学技術は安全な物であり、魔法とも共存していけるというストーリーだろうか。特に後者、魔法に関する話については平塚先生は生憎長けてはいないというのも逆風に感じられる。ならば僕が応えようと口を開きかけたその時、それを遮るかのように平塚先生がやや身を乗り出して机に肘をついた。

「まず科学に関して釈明をする前に一つ確認させて下さい。貴方は、この国は魔法技術で国際的な信用と平和を保ち、科学技術ではそうはならないと仰っている。それで間違いは無いですね？」

「あ、ああ。そうだよ」

頭を捻りながら釈明を垂れるどころか、むしろ待つてましたと言わんばかりに構える平塚先生に、身内ながら寒気を感じる。平塚先生があのような姿勢で議論に臨む際は、大抵相手の議論に何らかの綻びがあるときなのだ。彼は学会なんかじゃそういう矛盾点を適度に突いて相手の間違いをそれとなく指摘したうえで、別の指針を提案したりするのである。自分や同期の卒業公聴会でもそれをやられたため、平塚先生が突撃してく

る攻撃力と切れ味は身をもって知っているのだ。食い気味の先生の態勢は、まさに攻撃サインと捉えて間違いない。

「では質問に答えましょう。結論から申しますと、科学技術教育の導入は然したる危険性は存在しないと思われまます。無論、それは我々と貴方達次第でしょうけど」

「……その理由について伺おうか」

多分先生の答えは青年の意見とは真つ向から対立するものなのだろう。だがその返答に対していきなりに気を悪くするでもなく、青年は平静な様子で先を促した。

「まず前提として、科学技術という物そのものについてです。貴方の仰る通り、科学技術は我々の世界において武力の源となったことがあります。それに我々の研究棟には、一歩間違えれば軍用技術に転化されかねないものもあります」

その横で神妙そうな顔で同意している風を装いながら、はてそんなグループあったかなど頭を捻った自分がいた。

「例えば超音速流域下での燃焼触媒の研究。この技術の主な利用先は、分かりやすく言えばとんでもなく速い乗り物の開発です。基本は航空機の発展、つまりは我々一般人の生活に役立つ仕事です。しかし軍用の兵器に対しても、この技術の実用化は大きな意義を持つでしょう」

「やはりそうなんじゃないか。そんな危険なカガクをエルトニアへ持ち込むことに――

「ですが少なくともうちの人間は民間利用についてのみを考えている。何故なら、我が国において基本的に大学機関は軍事研究をしないという慣習、そして何よりも自身は現状にてその立場にはいないという技術者倫理があるからです。長い人類史の中で、近年ようやく技術の発展に”倫理”が追い付いてきたのです」

勢いをつけたように大口を開ける青年を、しかし平塚先生は最後まで話を聞けと言わんばかりにその発言に被せた。丁寧なはずの口調にも、相手を黙らせるだけの勢いが感じられる。

倫理、その単語を平塚先生は強調して喋る。日本とエルトニアが交わったことで技術的な交流の可能性ができた今、ある意味では倫理観というものが科学技術と共に輸出できる大きなセールスポイントであるのだ。

「世の中の大半の物は、使い手の一存でどのようにもなります。科学技術なんて酷いものです。技術進歩の脇でまさか人類を滅ぼしかねない爆弾までこさえるとは。使い手が馬鹿ならば、科学技術はいつだって我々に歯を剥く。そして、こっちの世界における魔法技術も似たり寄ったりでしよう」

「あまりふざけたことを言うなよ。魔法技術は僕たちの世界を豊かにしたものだ。エルトニアの信用の源だ!! カガクなどと同じだなんて言わせな——」

「——じゃあ何で貴方の学校は魔法騎士学園などという名前なんですか」

間髪入れずに放たれた先生の言葉が、揚揚と反論を口にしようとしていた青年に突き刺さった。開設当初から若年層に魔法技術を教育するだけの機関であれば、その名称に騎士なんていう勇ましい単語は必要はないはずだ。まるで酸欠状態の金魚みたいに無言で口を閉じたり開けたりを繰り返す青年をしり目に、平塚先生は淡々と言葉をつづけた。

「そもそも貴方は自分で言ったはずだ。昔は戦乱が絶えず、そしてエルトニアは国力を維持するために魔法に力を注いだと。魔法を重んじた騎士の養成機関がある以上、この国にだって魔法が武力として国そのものを護った時代があるはずだ」

「そ、それは……だが今の時代では魔法とは僕たちの生活を維持する不可欠な要素で、決して対外侵略のための道具なんかではない!! 騎士という名前も歴史を重んじた儀礼的なものだ!! 魔法を嘲るのも大概に——」

「ならば科学技術も何ら変わりはありません。現代における科学とは、自身を律する科学者倫理も含めてのものだ。科学技術が暴走をしたり、どこかの馬鹿が自分勝手な研究をしないようにするために、我々科学者は常に気を配っている」

さつきまでの平静さは何処へやら、顔を紅潮させて魔法の優位さを説こうとする青年に対して、魔法も科学もあり方はそう変わらないと切り捨てる平塚先生の姿は対照的で

あった。彼の頭の中には、端から優劣がどうのこうのなんて考えは存在しないのだから。

「そして我々は科学技術に関する教育機関です。模範的に倫理を体現するべき存在だ。科学技術の教育について危機感を示す方は多いと思いますが、伝道者は民間の一企業ならいざ知らず、我々大学です。倫理教育については当然学生の必修課程にも含まれていますし、教員たちは全員教えるにたる存在であると自負しています」

堂々とそう言い切った平塚先生は、何か反論があるならば言ってみろと言わんばかりに腕を組んで青年たちへ目をやった。今や先生の表情には不自然な笑顔なんて浮かんでではなく、普段と同じようなやや硬めの無表情さが表に出ている。隣でただ聞いていたんだけど、身近ではないところから見た彼の姿は結構冷徹な雰囲気を感じるものだ。「もしそれでも何か疑問に思うことがあるのでしたら、先ほどにも申したように再来週に開かれる一般公開に来訪されればよろしいかと。当日には、恐らく科学と魔法を絡めたような講演もいくつかあるでしょうから、そこでいろいろと議論をさせていただければと思います」

別に相手をけなした訳では無いし、ただ淡々と己の思うところや青年の理論の弱点を突いた程度に過ぎない。だからこそ、それを真正面から浴びせられた青年一同は、変に激昂しようにも切り口すらもないと見える。怒ればいいのか反論すればいいのか、こめ

かみを引くつかせたと思えば額に手をやったりという彼らの心情はそんなところだろう。

「……おそらく騎士学園にもいろいろな考えの人がいるでしょう。私たち大学の人間も、大学計画が一筋縄ではないかないことくらい痛いほどわかります。だからこそ、いろんな意見を持った人の話をきちんと自身の耳で聞くことは大切なんです。もしお時間があれば、中間報告会にぜひ来てください」

流石にこのまま立ち去るのは気が引ける。相手側が言い返してこないことを良いことに立ち上がろうとする平塚先生の服のすそを掴みながら、穏やかっぽい口調を努めて話しかけた。今の今までただ座っているだけの僕の話の話を果たして聞いてくれるかという不安はあつたが、青年がこちらに視線を向けたことで一安心だ。

「……ああ、そうするよ。こんな簡単に言い負かされるとは、僕もまだまだだつたみたいだ……君には最初に失礼な態度を取ってしまったって済まなかったね。僕の名前はフリツイオ・ヴェツセル・レザニアだ。再来週は僕の派閥の人間もいくらか連れてくるよ。反対派なりに、有意義な話をしようと思う」

「名乗り遅れました。私は当大学で助教を勤めております、平塚礼二です。お手柔らかに頼みますよ」

深呼吸一つと共に返ってきたのは、なんか妙に爽やかな感じの応答だった。こちらに

接触してきた当初のような傲岸不遜な様子は何処へやら、多少なりにはこちらを下に見ているような雰囲気は感じるものの、立場上貴族と平民という関係を顧みたらむしろ普通の対応だ。その様子の変わりぶりに、不気味さを感じてしまうのもしようがないだろう。

そして今の発言から、彼が間違ひなく大学計画に反対する派閥の人間であることが確定した。しかしそれにしては妙だと感じる。川崎さんが愚痴を述べる程度には報告会への茶々を入れる彼ら反対派の人間が、高々十数分話しただけでその会に参加をしようと思うだろうか。それもめっちゃくちゃにしてやろうとか言うのではなく、むしろ異なる視点から建設的な話をしようという意気込みすらも感じた。

「……小手調べだと突っかかった謝罪と言っては何だけど、君たちに少しだけこっちの話をしておこうと思う」

違和感はあると取りあえずはこれで禍根も無いだろうと安心して立ち上がった矢先だった。意味ありげに小さく呟きつつ周囲を簡単に見まわした彼は、折角穏やかになつた表情を少しばかり険しくして口を開いた。

「君たち二ホン国への反対派は一筋縄じゃない。僕がいる、国の歴史と将来を憂い純粹に科学技術に反対する一派とは別に、もう一つの派閥が存在する」

何かと思えば、いきなりのカミングアウトに少々面喰ってしまった。この状況は、そ

れこそ敵情を探っているに等しいものだ。驚きで目を見開く一方で、しかしなるほどという納得も覚える。先ほど感じた違和感、反対派の彼が何故報告会に参加することへ乗り気であるのか。その答えは、彼の語ったようにそもそもその派閥の違いによるということなのだろう。

「……あなた方は、てつきりライル殿下が取りまとめているものだと思いますが」「それは一部では合ってるが、一部では間違いだ。殿下が率いる前から僕たちの派閥というものはあったんだ。そして確かに殿下の意志表明のおかげで動きやすくなったのは事実だ」

確かに殿下の意思表明は彼らにとつてみれば渡りに船なものなのは間違いないだろう。日本との交流は仮にも王室が決定を下した方針であり、それに対して大つびらに異議を唱えるのは貴族社会においては難しいだろう。その状況で、王子という身分の間が中心となれば彼の意見を支持するという名目で動きやすくなるはずだ。

「……だが、恐らく殿下は僕のような二ホン国のカガク導入に対する純粋なる反対派というわけでは無いだろう。これはあくまで勘に過ぎない。だが数回意見を交わした印象では、少なくともあの方と僕は完全に同じ方向を向いているわけじゃ無さそうなんだ」

それは、こちらとしても首を傾げかねない話だった。失礼な話になるけど、てつきり

彼らはライル殿下の遣いとして戦力偵察に来たものとばかり思っていたからだ。

「正直僕には殿下の狙いは分からない。敵に塩を送るようで何だが、あの方の動向には少しだけ意識をしていた方が良くかもしれないよ」

「……そうですね。ご忠告、ありがとうございます」

もし大学計画への反対派を隠れ蓑に何か別のことをやろうとしているのなら、結構面倒事になりうるかもしれない。まだ未成年とはいえ王家の関係者、それも王子様だ。ライル殿下が何をしようとしているのかについては、ちよつと川崎さんにも話を通しつつ探ってもらうのが良いのだろう。

随分重要な話をしてくれたもんだと内心で驚いていたら、どうやらまだ終わりではないようだ。そしてそれは、少なくとも僕自身にとってみれば、一層に重く押し掛かる話であった。

「……それと、殿下が意志表明をされる直前のことだ。急遽開かれた殿下主催の大学見学会について覚えているかい？ その場にいた僕の家の人間が言っていたが、見学会の中で殿下は君たち側の人間の一人と時折話をしていたそうだ。それも普段よりも険しい表情でね」

彼の話を聞いている内に、段々と自分の心音が何故かはつきりと聞こえてくるような錯覚へと陥る。あの見学会については、今だって記憶が詳しく残っている。大学内の各

所を回る見学会において殿下と何回か話す機会のあった人間なんて、案内役の川崎さんか、もしくは――

「名前については分からないが、ちようど君くらい歳の銀髪の者だったらしい。君たちのような黒髪が多い中では銀色の髪の毛なんてそういないだろう。どこまで関わりがあるのかは分からないけど、あの殿下が普段と違う様子を見せるのは少々気になるところだ。もしかしたら件の人物が何か事情を知っているかもしれないよ」

そこまで語った青年たちは、今度は容赦しないよと言い残しながら未だ椅子に腰かけたままの僕たちを残して広場の出口へと歩き去っていった。強張った表情で見送りつつ、己の肩口に目をやる。銀色とは程遠い色の黒い髪の毛が、風に揺れて肩の辺りをさらさらと撫でている。しかしこの髪はその実ただのカツラであり、僕の地毛は完璧なまでの銀色だ。こんな色の人間なんて、エルトニアキャンパスで努めている人間の中での一人しかいない。

「……レイ、とりあえず帰るぞ。風が吹いてお前のカツラがどつか変なところに飛ばされたら色々面倒なことになりそうだ」

冗談めかしたような平塚先生の言葉も頭には半分も入ってこない。青年の話が本当ならば、殿下の意思決定には少なからず僕の存在がかかっているだなんて。いきなり言われたところでどうしろって言うんだ。

平塚礼二という人間は確実に大学計画の中心へと向かっているのだ。自分が想像する／願うよりもずっと、もう後戻りの効かない計画の心臓部へと。

第十一話 「決戦!! ファンタステイツク・アカデミー!」 その1

「パイプ椅子は横10縦5を二列、中心の通路は幅2メートルでお願いします。それと後方の長机ですが——」

今まで内輪の会議ですら数回しか使われてこなかった大会議室が、ようやくその本領を発揮する時が来たのだ。地面は一面高級感漂う赤紫系統が映える軟らかめのタイルカーペットで覆われており、廊下や実験スペースどころか通常の会議室とも一線を画す雰囲気を漂わせる。内装だけ見れば、会議室を飛び越えてもはや講演ホールといって差し支えないほどの立派さだ。

階段状となつている部屋の前方部には小型の机付きの座席が何列もずらりと並び、それでも賄いきれない参加者多数の場合に備えて後方の空いたスペースには予備のパイプ椅子軍団を並べてすらもいる。そして大部屋の後方上部にある投影室からは、前方の巨大なスクリーン周辺に向けて試験的に映像やらスポットライトが投射されている。本気十分と言えるこの大会議室は、本キャンパスにある記念講堂とも何とか渡り合える設備の筈だ。

「平塚さん。椅子の個数が若干足りていのですが、どうしましょうか」
「背に腹は代えられません。二階の小会議室から拝借しちゃいましょう」

ただ部屋の規模が大きな研究会の開催に対応していても、装備全てが完全無欠というわけでもなさそうだ。椅子の不足分を知らせてくる他研究室の学生に、すぐさま普段使っている小会議室からかつぱらってくることを提案した。

新キャンパス開校からあつという間に時間が流れて、今は8月の第一週だ。日本に比べて湿度が低く涼しいエルトニアにしていると気が付きにくいのが、暦の上では夏も真つ盛りである。そしてこの大学の一大イベントである中間報告会、通称ファンタスティック・アカデミーはもう明日に迫っているのだ。

事務系の人たちが費用の捻出や事前参加登録者への連絡を行ってくれている裏側で、僕たち現場の人間もせっせと会場設営に忙しく動き回っている。更には当日参加者に配布する予定の資料や要旨集を印刷する別動隊が、コピー機室を占拠して冊子づくりに追われているはずだ。このキャンパスの助教以下全メンバーを集結させた、まさに集団戦といって過言ではない。

「壇上じゃなくて後方が照らされています。照明の番号と位置をもう一度確認してください」

天井からの照明灯が見当違いの場所に向けられているもの、この部屋に慣れた人間が

未だ皆無であることが大きな理由だ。今のうちにある程度装備に慣れておかなければ、いざ本番になった時に対応が難しくなる。

現場指揮は当然のように僕が任されていた。まあ助教どころか全メンバーひっくるめて一番若いものだから、年功序列社会の中じや矢面にも立たされるので仕方がない。それにこうして思考の多くを費やして大きな物事にあたるというのは、もちろん大変である一方で余計なことを考えている暇もなくなるという意味では助けにもなっていた。

『銀髪の日本人は、ライル殿下に関する事情を知っているはずだ』

つい二週間前に、エルトニア王国立魔法騎士学園の学生から言われた言葉だ。その彼がライル殿下に近い場所にいることから考えて、でたらめの話ではないものと推測される。それから二週間の間、彼の言葉はふと気を抜いた時にはいつも頭の中をゆっくりにぐるぐると巡り廻っているのだ。

銀髪の日本人など、僕を除いて存在などしない。つまりは、一連の殿下による妨害工作の根源には、僕の存在が何かしらかわっているのだ。考えたら当然の気もする。このプロジェクトに参画している日本人研究者のほぼすべてが、プロジェクト前にはエルトニアなどという異世界国家の存在なんて欠片も知り得なかつたのだ。何かの切っ掛けがあるとすれば、その発祥元は自ずと限られてくる。

特に僕は、件の人物とは少なからず顔を合わせている。彼の立ち上げた大学見学会以

外にも、レシルと共に街を散策していた時や、闘技会に顔を見せた時など、数えればいくつか上ってくるのだ。

「藤沢さん。椅子については引き継いどくから……そうだね、冊子の方のヘルプに回してくれるかな？」

「……あつ、えつと……はい、分かりました」

やや疲れた様子で収納スペースからパイプ椅子を持ち上げようとしていた藤沢さん呼び止めた。どこことなく心ここにあらずという感じで、顔色もやや悪く目つきについても何時もの覇気がない。川崎さんから王女搜索の話を聞かされてからというもの、彼女の調子はあまりよろしくないように見受けられた。可能ならば休んでもらいたいところだが、彼女の性格からして他が働いているときに休んでいると余計にストレスを貯めかねない。より負担の少なそうな仕事に回すことが、今できる精一杯だった。

快活ではない様子で大会議室の外へと向かう彼女を見送る。そう、藤沢レナという人間も、僕と同等かそれ以上にエルトニアという国家に深くかかわっている一人である。そしてこの数日間ライル殿下関連で自分自身の行動を洗い出している最中、一つだけ気が付いたことがあった。それこそが、彼女についてのことだった。

僕とライル殿下が言葉を交わしたその場には、大抵の場合藤沢さんも居合わせていた。そして彼の心境が大きく動いたと推測される大学見学会の最中には、殿下は藤沢さ

んと言葉を交わしていたはずだ。

会話内容はなんてことは無い、実験の様子について二三聞いただけであっても、会話をしたという事実には変わりない。今まで大学全体とライル殿下の関わりについてを見ていたから気が付かなかつたが、僕自身の身の回りにのみ特化して注目したら、臭い点がいくらか見つかったのだ。

僕と藤沢さんで比較してみたら、彼女の方が余程殿下との関係性は深い。妹が彼の同級生であるという以外に特段のつながりが存在しない僕と比べ、彼女は腹違いとはいえ同じ血を引いた姉弟という深い関りがある。ライル殿下が大学計画について別の視点を向ける切っ掛けが僕であり、そしてその理由が藤沢さんであるとしたら――

「粗方照明周りの調整は終わりましたよっと。そういえば平塚君、今日は黒いカツラ被ってないんやね。藤沢さんの真似は止めたん？」

「……僕も四六時中使ってるわけじゃないですよ。今日は内輪でしか集まりませんし。そつちが一段落しているならば、プロジェクトのテスト照射もやっちゃいましょう」
考え事を一度中断し、こちらの銀髪を指さして首を傾げる先輩助教を適当にあしらいつつ、彼の後について教授連合から渡されたメモリーカードをポケットから出した。この中には彼らの作成したスライドショーがいくつか入っており、色合いやら明るさをチェックするという仕事も頼まれているのだ。

「あ、ちようど良かった。それ俺も一緒にやらせてくれるか」

そしてタイミングを見計らったように会議室へ入ってきた平塚先生が、壇上のプロジェクターを操作しようとした僕たちを呼び止めた。教授陣の中で彼は自分の目で見たいからとスライド確認の仕事を投げてこなかった数少ない人間である。

「いいえ、ウチ等でまとめてやるときですよ。平塚先生の手をわざわざ煩わせるのは悪いですから」

「こーいゝのは自分の目で見ただ方が安心だ。そもそもこの部屋のプロジェクター自体他の奴とは規格が違うから、正直あまりあてにはしてない」

確かに先生の言う通り、ここの装置は運転させたことなど数えるほどしかない。それに言われてみれば、確かに色合いについては普段使いの部屋のものとは比べてやや異なるという気がしないでもない。下手すりや図が消えると危惧する先生の通り、自分の目で見て確認するのが一番の安全策であるのは間違いないのだ。

まだ正午前にもかかわらず、半分以上の仕事が片付いているのだ。少なくとも現場については、明日に向けた準備は至極順調に進んでいる。

* * *

僕がここ数日黒カツラを被ったりしているのは、さつき先輩の助教に言われたように大方藤沢さんの真似である。この国では酷く重要な意味あいを持つ赤紫色の髪の毛を隠す、彼女にとってみれば最重要の装備だ。すつぽりと彼女の髪を覆ったその姿を見て、僕はずつと確信していた。彼女を王族の一人と見間違える人間なんぞ、これでただの一人もない。9年前に失踪した王女なんて、顔そのものが成長で変化した上に髪の色まで違うのだから、誰も気が付きやしないだろう。

——本当に？ 本当にそうなのか？

そう自問自答をし始めたのは、恥ずかしいことについて最近になってからだ。事態がこうなるまで、僕は藤沢さんという存在が持つこの国における特殊性を全て失念していたと言っても過言ではなかった。この世界において彼女の特殊性を知っているのは僕や平塚先生だけであるという考えが、前提になってしまっていたのだ。

確かにそこら辺の一般人は騙せるだろう。大月駅からエルトニアキャンパスへ向かう往復バスの窓際において、カツラを被った藤沢さんを配置してもそれが9年前から行方不明になっている王女であると思抜く通行人は皆無に違いない。だがそれが彼女と以前から関係があった相手、それも王族相手ならばどうなのか。

「つまり平塚さんは、ライル殿下が既に藤沢レナさんの正体に気が付いていると考えているのですか」

「……ええ。つい最近になつて彼が王女搜索なんて話を出してきたのも、依頼というよりも藤沢さんに対してプレッシャーを与えることが目的なんじゃないかと思うんです」

トイレ近くの談話コーナーで、川崎さんは少々難しい顔をしながら僕の話聞いていた。色々と考えがごちゃごちゃになったところで、話せる人間を捕まえられたことは非常に幸運である。

運のいいことに、仕事が一段落してトイレ休憩に行こうと廊下に出たところで、ちょうど大月―リーヴェル関所からこちらに向いてきている川崎さんを見つけたのだ。彼は何か重大な用があつて訪れていたわけでは無く、大学側の事務課と共に事前登録者の名簿や人数について確認作業をしていたのだという。帰りがてらに会場設営の様子でも見ていこうとしたところを、ちょうど捕まえたというわけだ。

「まああり得ない話ではないとは思いますが。私もそう考えたことはありますしね。ただそれにしちやあ目的と一連の行動が一致していないとは思いませんかね」

「……それって、最終的なゴールがヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアの王女復帰であるとするれば、行動が遠回り過ぎるということですか?」

「ええ。もし目的がそれで、そして私がライル殿下だったとします。即日本政府に直談判して、身柄の引き渡しや最低限直接の面談を試みますね。真綿で首を絞めるにしろ、今のままでは先に真綿が切れてしまう」

僕のような政治素人の考えることなんて、当の昔に川崎さんは考え付いていたようだ。そして彼の言う通り、彼の言う通りライル殿下の行動は回りくどすぎるといのは同感である。直接的な行動に出れば王女奪還まで僅かに数ステップで済むにもかかわらず、結果として未だにずるずると引き延ばされていることになるのだ。

「まあ仮にそうだったとして、単に彼の手筈が遅すぎたというわけでも無いでしょうがね。反対派貴族を纏められた際には、割とすぐに我々はバックヘフオルガント家を持つてくるカウンターで対抗した訳ですし。警戒するに越したことはないですが肩の力をちよつとばかりは抜きましよう。私が平塚さん達に王女搜索関連の話をしてから今まで、特に何も無いでしょう?」

少なくとも川崎さんの見解としては、藤沢さんの正体が露見しているにしては相手側の行動が遅すぎる。よってまだ秘匿できている可能性が濃厚、ということだろう。まあ言われてみれば、王女奪還という目的を達するためにわざわざ大学計画の反対派をまとめ上げるだなんて、少なくとも僕たちへのプレッシャーにはなるかもしれないけど、直接打にはなかなかならない選択だ。

「何にせよ、明日でまずはひと段落です。二週間くらい前から反対派と目される貴族までも報告会へ参加表明を出し始めましたし、順調なことこの上無いですね」

「……それは良かったです。本当に」

おそらく、あの時の青年が本当に仲間を率いて参加を呼び掛けてくれたのだろう。彼らは頭ごなしに大学計画をぶつ潰そうという過激派などではなく、こちらと話し合いをするだけの懐の深さは持ち合わせている。そういう層が来てくれるというだけでも、エルトニアにおける僕たちの立ち位置を深く考えるいい機会になることだろう。

「一応気がかりなのは、ライル殿下に近い人間の参加登録者は未だゼロということですね。先々週に平塚さんが言っていた、反対派が一筋縄じゃないってのはあながち間違いないや無さそうですが……無論、我々も何かあれば十分バックアップしますので、最低限身の回りに気を配って頂ければ後はなんとかします」

そう言いながら立ち上がった川崎さんは、ふと廊下の先に視線をやった。

「そういうわけなので、藤沢さんにも安心するようにとお伝えください。また何かありましたら、何時でもご連絡ください」

「……ええ、分かりました。お忙しいところお時間頂きすいません」

僕たちの方に視線を向けて小走りで近づいてくる、長めの黒髪の女性。疲労を見かねて体力勝負じゃない仕事箇所に向きさせていた藤沢さんその人だ。やや険しい表情から察するに、僕と川崎さんが話している姿を見てまた何かあったのではないかと考えているのだろう。

彼女がこちらに着くよりも早く、川崎さんは出口の方へと向かっていった。彼もま

た、明日に控えているいろいろな仕事を抱えているはずだ。この場にいる人間は、概ね普段以上の忙しさに悩殺されている人間ばかりなのだろう。

「あれ、川崎さん帰っちゃった？　もしかして何かあったんじゃないかって思ったんだけど……」

案の定か、不安げにこちらに尋ねてきた藤沢さんはまた新たな困難の到来を予感していたらしい。別に川崎さんは厄介事の使者というわけじゃあない。ただ、彼がわざわざ顔を見せに来る時には、大体何らかの問題が起きているというだけの話である。

「……いんや、ただの世間話。明日のことについてちよつとだけ雑談してただけだよ」

少し息切れ気味の彼女に対して、敢えて変なことは何もないよとオブラートに被せて誤魔化した。ただでさえ最近疲れ気味の彼女に、これ以上心労を積み重ねてほしくはない。それにしても改めて近場で見たら外見だけでも結構な疲れ具合だと見て取れる。目の下の隈もそうだし、なんとなく全体的に血色も悪そうに見える。

「それと、川崎さんから伝言。王女捜索の依頼について、特に何も問題は無いそうだよ。だから、少しは安心してても良いんだよ。最近、ずっと疲れっ放しでしょ」

そう指摘してみれば、露骨に気まずそうに彼女は顔を反らした。

「い、いえ……そんなことは」

「そんな立派な隈を拵えて何を言うか。あの平塚先生も心配していたくらいだ。昔に得

意でもない魔法の練習をしまくってぶっ倒れた時の僕よりも酷いよ。ちゃんと食事を取ったり寝ているんだろうね？」

「——心配をかけて、ごめんさい」

何らかの言い訳でも考えているのか数秒間押し黙っていた藤沢さんは、観念したようにそういう風に返してきた。しかし謝罪をされてしまうとこちらの立つ瀬がない。なんなら彼女がそこまで心配するループに陥るのを止められなかった僕に非があるのだ。

「君は悪くないんだから謝罪はダメです。これからお昼でしょう？ 今日全部奢ってあげるから、ちゃんと沢山食べること!!」

「……ええ、そうね。じゃあ平塚先生にこれでもかかってくらい奢らせてやるわ」

いつもの調子が戻ったように笑顔を見せた藤沢さんを見て、少しでもホッとした。時折敬語を喋れーとかもうちよつと敬えーとかはふざけて言うこともあるけど、やはり普段の彼女の様子が見ていて一番安心するのだ。少しくらい小生意気な様子が、藤沢レナという人間にはピッタリなのである。

* * *

そして翌8月5日。第一回日本エルトニア科学技術シンポジウム ”フアンタス

ティツク・アカデミー”の開催日。僕たちの大学計画にとって最初の勝負の、万全の準備と共に迎え撃つべき瞬間がやってきたのだ。エルトニアキャンパスのこれからを左右するたくさんの人の意志と共に、僕が最も危惧していたライル殿下の一つの決意を添えて。

その2

決戦の日に相応しく、今朝の天気は昨日以上に一面の快晴だ。窓辺から燦燦と差し込む朝日が容赦なく瞼の裏まで浸透してきた。涼しい気候のおかげで全く寝苦しくない真夏のエルトニアの早朝にて、珍しく目覚まし時計が鳴り響くよりも先に自ずと瞼が開いたほどの強烈な明るさである。

歯磨き洗顔、その他基本的な準備を整えて食堂へたどり着いたのは普段よりも早い朝の六時半前である。何時もならばこの時間はまだ人の数も疎らだろうが、今日に限って言えば僕の他にも何名かのメンバーが少し早めの朝食を取っているようだ。概ねこの場にいる面々は、昨日の準備の時から一緒に作業をしていた人々である。

普段はあまり顔を合わせないような他グループのメンバーも、報告会の準備に向けた顔合わせの中でそれなりに親交も深められた。居合わせた面々に挨拶をしながら、朝食プレートを机に置いてホツと一息を吐く。

『——日本重工業が、四葉工業医療部門の買収を検討していることが、4日明らかになりました。昨年から四葉工業の医療部門は業績不振に陥っており——』

トーストを摘まみながら、テレビで流れているニュースをボーッと聞き流す。世間を

騒がすには十分すぎるようなニュースであつても、エルトニアの大地にいる身としてはあまり身近な話には聞こえない。体感としては海外出張中にふと日本のニュースが気になり眺めているようなものだ。

「へえ、あの四葉グループがねえ。向こうはあんまり景気が良くないわね。レイ、おはよ」

同じく早起きしてきたのであろう藤沢さんが、和食膳を机に置いた。今日の会は若い人間が中心になって進められる。特に受付担当や照明マイク係などは学生が担当する運びになっている。開会自体は正午過ぎだが、昨日に引き続き会場の最終チェックやらなんやらでみんな早起きなのである。特に藤沢さんは、学年的な意味ではこの空間で一番若いため尚更だろう。

「おはようさん。昨日はきちんと寝られた?」

「……ええ。昨日はちゃんと早寝したし、疲労抜きはきちんとしてきたつもり」

確かに彼女の言う通り、昨日の倒れそうな顔いろに比べれば今の藤沢さんは見た目にも大分体力が回復しているような感じはする。彼女の有様を、魔法を限界までぶっ続けで使用したようだと呼びかけたが、それほどまでに疲労困憊という状態だったのだ。よくもまあそんな状態で数日間も頑張ったものだと言わなければならない。適度に私的をしてガス抜きをさせなければ、まだまだ若くて無理をしがちなこの娘はちよつと危ないかもしれない。

「見た感じ、大分元氣そうにはなったね。藤沢さんは来場者が真つ先に顔を合わすことになる受付担当なんだから、そういう見た目の印象は大事だよ」

「分かってる。レイは今日どこの担当だっけ？」

これまでの準備期間において中核メンバーとして奔走してきた僕であるが、当然当日にもやる事が割り当てられている。まずは前々から決まっていた、開会の挨拶。元はと言えば、この役割への就任が事前準備の中心として動き回ることになった元凶である。

それ以外にも、報告会の前半部分における各教員の講演における座長が宛がわれている。先生の紹介や質問者の指名等、講演をスムーズに進行させるには欠かせない役職だ。中でも座長の一番重要な仕事は、聴衆から質問者が出なかつたときに、有意義な議論に繋がりそうな質問を講演者にするというものだ。科学とは一体何ぞという層が集まる会であり、魔法関連の有識者としての立場から質問できる僕はうつつけなのかもしれない。

「冒頭のあいさつと、座長だよ。それと藤沢さんと共同になるけど、後半のポスタープレゼンも入るかな」

「……相変わらず、詰め込まれてるわね」

「しょうがないさ。新入りだし、企画段階の司会でもあつたし」

因みに特別手当としてそれなりな額のボーナスがもらえるというのはナイショの話だ。

程なくして藤沢さん共々朝食を食べ終えた僕は、自室に舞い戻っていた。今の服装は食事用ということもあってただの普段着であり正装ではない。クローゼットを開けて、四か月前の開校記念式典や外部の学会で羽織った以外には袖を通していないスーツ達の片割れを引っ張り出す。

未だに慣れないネクタイ締めのために洗面台の鏡の前に立つが、鏡の中の自分を見て思わずため息を吐いた。一応社会人記念となったことだし使用機会も増えるだろうと思いついた増設した二着の代物である。しかし結局あまりお世話になることも無く、そして己の見た目からしてスーツが似合わないということもあり、まだ服に着られている感が拭えない。どちらかと言えば、エルトニアの貴族の方々が身に着けるような、現代日本のセンスからは遠く離れた社交用の礼服の方がまだ己の外見に合致するだろう。

—— P i P i P i P i P i —— !! ——

そんな悶々とした気持ちを打ち消すかのように、ベッド脇に放り投げていたスマートフォンがけたたましく鳴り響いた。まさか普段用の目覚ましアラームかとも思ったが、さすがに時間が遅すぎる。とすればメールか、それとも電話か。すぐに駆け寄って手に

取ったスマートホンの画面を見て、首を傾げる。

着信中 川崎義春

これまで幾度となく彼と連絡のやり取りをしたことはあったけど、こちらからかけるはまだしも向こうから電話がかかってくるのは初めてのことだ。向こうからの用事は、ライル殿下の件で本人が直接こつちに出向いてきた以外は、急ぎの用であっても基本的にはメールであつたはずだ。だからこの画面に川崎さんの名前が表示されていること自体に違和感を覚える。

「はい、もしもし。平塚です。どうしまし——」

『よし繋がった!! 川崎です!! 緊急の要件です、今すぐ出られますか!?!』

通話へとスライドさせた途端、スピーカーから聞いたことも無いような早口の川崎さんの声が鳴り響いた。驚きに思わず目を見開き、一体全体何の用なのかと聞き返そうとするが、それよりも早くに更なる文言が飛び込んでくる。

『ライル殿下が動きました!! クソツ、なんでこの日に——ともかく私は今一号館の一階ロビーに向かいます。詳細はそこで直接話しますので、急いでこちらに来てください!!』

「は……え? ええと、はい。今すぐそちらへ向かいます」

何が何だか分からぬうちに、スピーカーの奥から聞こえるのは話中音のみ。いつの間

にか通話は切られてしまっていた。話の全体像など何一つつかめていないが、少なくとも一つだけわかることは、あの川崎さんをここまで焦らせる何かがあったということだ。

通話終了から時間が経つにつれて妙な汗が首筋を濡らし始める。髪を整えることもせずスーツのジャケットをベッドの上に放り出したまま、廊下へ走り出した。部屋の力を閉めたかどうかなんて、今はどうでもいい。可及的速やかに、川崎さんの元へ向かわなければならぬ。

ライル殿下が動いたと電話の向こう側で川崎さんが確かに言っていた。つい昨日に、川崎さんと話した時の話題に上げた、現状におけるもつとも注視しなければいけない人間だ。報告会開催日の今日に何かをぶつけてきたか、新たな声明でも出したか。はたまた大学への反対派を率いてデモ活動でも始めたのか。しかしそのようなことが起きたとして、川崎さんが僕を呼び出すだろうか。

これまでの経験から言って、この手の厄介事は大抵のことはある程度川崎さん側で処理をしてから僕たちの耳へと入ってきている。しかし今回はいきなりの平塚礼二召喚だ。つまりはその過程をすつ飛ばすほどの大事か、もしくは渦中に僕本人がいるか。そして最悪なのは、今回の一件がその両方を兼ねているということだろう。

* * *

「まず現状をお伝えします。平塚さん、貴方の身柄一時引き渡しをライル殿下並びにエルトニア王室が早朝要請してきました」

指先に力が入らずに寒くもないのに震えだし、何かが足元に落ちてごとんという鈍い音を立てる。それが己の手から滑り落ちたスマートホンであると気が付くよりも先に、頭から血の気が引いていくのを感じた。

「先方の言うことを信じるならば、第二王女の行方について事情を聴きたいということでした。無論私たちもこちらで検討する時間をくれとは言いましたが……」

少し言いにくそうな表情で、川崎さんは額を揉んだ。その様子からして、碌な話の展開になんかなりやしないことが容易に予想される。そもそも何故僕が、そんなまるで被害者目線のような拙い感情までもが頭の中を駆け巡る。

「出頭期限は本日の正午前、それを越した場合は正式に指名手配とすると……現在うちの人間が交渉にあたっていますが、どう転ぶかは分かりません。そのため、平塚さんにももってお伝えします」

そして先方の人間から告げられたという内容は、明らかに事情聴取などという軟なものではない。理由についてはどうであれ、この僕を確保しようという意思は確固たるも

のに違いない。そしてこれまで見たことも無いような、険しきやら悔しきやら、いろんなものをまぜこぜにした川崎さんの表情がこちらへと向けられた。

「最悪の場合に備えてください。我々は最善を尽くします。しかし今回ばかりは、あなたを完全に守り切れる保証はありません」

その言葉は、冷たい水のような現実だった。いきなりの話で考えのまとまらない僕の頭を一度暴力的なまでの冷たさで真つ白に染めあげ、その白くなつた大地に理解すべき現実を流し込む。理由や経緯についてはどうでもいい。僕は今、その身柄をエルトニア王政府へと移されることがほぼ確定しているのだ。

最悪の場合に備えてなどとは言いが、今の今までこの大学の面々に火の粉を被らせることなどさせなかつた彼ら役人が覚悟を要求してくるということとは、最悪の場合が起る確率はかなり高いとみて間違いないだろう。開国時の日米みたいな治外法権条約でも結んでいない限り、この大学はエルトニアのルールが通用する。王政国家のエルトニアでは、王室の出した声明は逮捕状のように一人の人間を拘束することなど造作も無いだろう。

「平塚さんにはお手数ですが……私共の方に一度来ていただけますか？ 我々はギリギリまで交渉にあたりますが、もしそれが実を結ばなかつた場合には——」

「——やつてられるか、もう」

この状況について考えている内に、一度は冷や水のように真つ白になった頭が、段々と熱くなってくる。事なかれ主義で後手に回り続けた結果がこれだ。

「散々己を第三者だからと信じ込み、静観という名の放置に徹し、そして今は肥大化した状況に飲み込まれようとしている。もうこれ以上、やっつけられませんよ」

怒りの矛先はこの状況、そして自分自身だ。時の流れが解決するだろうと藤沢さんの正体秘匿に積極的に加担し、彼女の肉親たるライル殿下と相對しても対岸の火事のように思い込み、あまつさえ彼が藤沢さんの正体に気が付いている可能性を最後まで考えようとはしなかった。その結果が、この様だ。

間違いない。ライル殿下は、完全に藤沢さんがヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアであることに気が付いている。そして、最終目標である藤沢さん本人ではなく、それをひた隠しにしようとしている僕をとうとう逃げられないように呼び出したのだ。僕らの首を絞め続ける真綿の糸は、決して解れる様子を見せてはいなかった。

「川崎さん。僕、行きますよ」

「……向こうにつけられた条件は一つ。あなたと、一対一で話が見たいようです。弁護人も護衛も、今のままでは平塚さんの脇に立たすことは出来ません。それでも行きますか？」

元より交渉の行く末など川崎さんもあまり期待はしていなかったようだ。弁護も何

もつけずに仮にも日本国民を容疑者として他国の中枢に送り込むなど、普通に考えれば政府の機関としては到底看過できるはずもない状況だ。それでも現状彼らでは覆せないほどの、時間の切迫と強硬な姿勢なのだろう。

「ええ。今日という大事な日に、これ以上の好き勝手はさせません」

「……分かりました。平塚さんのご協力に、感謝します」

いつの間にか手から滑り落ちたスマートホンを拾い上げる。画面に表示された時刻はちょうど八時。期限である正午までは、まだいくらか時間の余裕はあるはずだ。

「戦場に行く前に、仕事の引継ぎをします。何も言わずに抜けるのは非常に宜しくないです。三十分後、またここで落ち合いますよ」

「そう、ですね……よろしくお願いします」

先輩助教に平塚先生、その他話を通しておくべき人間を頭の中でリストアップしながら踵を返そうとした僕を、最後に一つだけと前置きした川崎さんが呼び止めた。

「今回の一件、藤沢レナさんには実情をお伝えしますか？」

「……いいえ。元はと言えば、彼女の立場を護るために始めたことです。僕の方がまだですが、最後まで彼女にこの件で心労を掛けたくはないですよ」

自分の出で立ちで悩み、渦中の人間であると認識したときには一目瞭然なほどに焦燥する。彼女は今年の最後に二十歳の大台に乗る、こちらの世界の基準でいえば十分な大

人の歳である。しかし、それでも自分に申し掛かる重苦しい状況を一人で取り除くには、まだ彼女は若すぎる。

肉体年齢がどうであれ、精神的な距離がどうであれ、僕は彼女に比べたら十分大人だ。大人というものは、後進を育成し、そして適度に火の粉から庇ってなんぼの存在だ。だから最後の最後まで、それが例え自己満足であろうと僕はこの件を彼女には知らせたくはない。それが。せめてもの年長者の意地の見せ所だ。

その3

「当日の朝つてのは困るが、それ以上に大変な事態なんだろ。俺らで何とかするから、ほら行きな」

いの一番に状況を伝えた平塚先生は、拍子抜けするほど至極あっさりとした様子でこちらの話を飲み込んでくれた。てつきり小言や説明要求の一つでも言われるかと思っただがそんなことは全くなく、その様子に少々面食らつて怪訝そうな表情を見せる僕に向けられた言葉からは、あっさりとした物ながら彼なりの親切心を感じる。

「大抵のメンバーは、お前が何か特殊な事情を抱えてんのも、それを明かせんのも何となく分かつてる。そして彼らも深くは踏み入らんよ。ともかく今は、レイが反対派の親玉に参考人招致を食らつて身動きできないってことが重要だ。そんな状況協力せざるを得ないだろう」

僕や藤沢さんの正体について、平塚先生はともかく一般の日本人研究者たちには公式には知らされてはいないはずだ。だが彼らも知らされてないから全く存じませんという訳じゃない。4ヶ月もこちらで過ごせば、僕たちがどうみてもエルトニアに所縁のある人間であろうことは予想も容易いだろう。その上で今まで深く掘り下げて来なかつ

たということは、無闇な詮索はしないという一種の親切心の故だと僕は考えている。

卓上のパソコンを立ち下げた彼が「人員再編だ」と発し気合を入れて立ち上がった。本日の業務で僕が担当する箇所は座長と開幕の挨拶だ。多分に重要な役職ではあるが、事情が事情であるために付け焼刃の人員で対応する他は無い。

あとは任せると言い残して居室を出ていく彼を、再度呼び止めた。彼にはもう一つだけ、伝えなければならぬことがある。今回の渦中の人物、その人に対する対応についてだ。

「……一つだけ、いいかな。藤沢さんについて頼みたいことがあるんだ」

「ほう、彼女がどうしたんだ」

本来であれば今回の出頭命令は藤沢さんに向けられて然りの物だ。そこが敢えての僕という選択肢が最高にきな臭い。主目標ではなく、あえてその近場にいる人間を狙う。ライル殿下が何をどこまで考えているのかは分からないが、ここでぬけぬけと藤沢さん本人を巻き込むのは、彼女にキャパシティ以上の負担がかかるだけではなく少々危険にも感じるのだ。それゆえの、ある仕込みが必要となる。

「彼女には、もし事情を聞かれても僕の件について適当にぼかしておいてほしい。急用で東京に行つてるとか、そんなんで良いから。僕たちの数少ない生徒だし、余計な心配はかけたくない」

「まあ、それは別に構わんが」

平塚先生は、そう頷きつつも少し眉をひそめた。何となく、今回の一件に藤沢さんも関わっていることを感じ取っているのかも知れない。そのうえで彼女を関与をさせるなど言われたのだから、いぶかしむのも無理は無いだろう。しかし彼は、ただ怪訝そうな表情だけではなく、少々その目つきを険しいものへと変化させた。

「……優しさと甘やかしは別モンだ。分かっているとは思うがな」

そこに来て、僕は体の動きが止められた。意気軒昂としていたはずの己の意志に、一瞬の静寂が訪れる。

踵を返して去る彼が振り向くこともせず浴びせてきたその言葉に、ほんの少しだけ答えが詰まった。今の自分の行動に一かけらも甘やかしが混じっていないなどという保証は、一体何処にあるのだろうか。本人のあずかり知らぬところで奔走する、この行動の起源は何だ。それは間違いなく彼女への親切心ゆえの筈。否、それ以外が混じるはずも、混じっていいわけも無い。

口を開きかけた時にはもう廊下の端まで離れた彼に、言葉も何も届くわけもない。しかしその遠い背中に向かって、短い言葉がぽつりと口をついた。

「……うん、分かっているつもりだ」

一つだけ言えることはある。甘やかしだろうが何だろうが、今の自分の行動は己を渦

中の人間だと自覚をした上で立ち回っているものだ。もう第三者だとか、静観をしようなどと考える時期は過ぎている。

* * *

約束の時間になり、川崎さんとの待ち合わせ場所であるロビーにたどり着いたのが数分前の話だ。ちようど彼はどこかに電話をかけていたようで、特に意識をしなくても自然と注意がその会話へと向けられた。最初は彼の所属する外務省派出所との間での会話かと思っていたけれど、時折駐屯地やら要人警護という単語が聞こえてくるものだから段々と冷や汗が湧いたものだ。

粗方話を終わらせたのか、電話を切った後の彼はもう少しだけこの場所で待つようにと伝えてきたのだ。曰く、警視庁に要人警護のための人員の派遣をお願いしたのだとか。

『当初は北富士駐屯地から一小隊をとも考えたのですが、仮にも自衛隊の国外派遣となれば後々問題になります。なので今回は同じくプロ、特殊部隊の精鋭を付けることになりました。せめて直前までの護衛は手配しましょう』

あなたの身に何かがあれば彼らが突入しますと険しい顔で話した川崎さんは、何とい

うか色々々と本気だった。彼も今回の一件で腹に据えかねたものがあつたのかもしれない。呼び出された王宮に行くまでの道すがらでさえ、治安警備のスペシャリストを付けるのは精一杯の示威行為ということだろう。

そんなわけで、彼らが到着してから行動を移すということでもうしばらくの暇ができることとなった。既に部隊は出動しており、ここまでたどり着くのにそう時間はかからないらしい。

「といつてもねえ……」

朝一の特大の知らせで気を引き締めてから一転して待機となると、途端に手持ち無沙汰となってしまう。事務作業に取り掛かろうか、それとも気分転換がてらに実験の準備だけでも行うか。そんなことを考えて、結局適切ではないことを悟る。これから対面する事態を頭の片隅に置きながら、そんなことに取り掛かるのは無理が過ぎるというものだ。特に後者なんて、下手に手順を誤り機具を破損なんてことも考えられるのだ。そんなこと、教職の人間がやるべき行動ではない。

ならば、今日のシンポジウムにむけての準備を始めている一部の学生に混じって手伝いでもするか。しかし仮にも急用という体で今日の会を不在とする人間が朝一で悠長に手伝いというのも違和感が残る。

椅子に腰かけてどうしたものかと悩むこと数分、結局結論が出ないままにポケットの

中に放り込んでおいたスマートホンが震えるのを感じた。発信元は予想通り川崎さんとなつている。しかし想像していたよりも随分と早い連絡だ。僕が考えていたよりも余裕をもつて部隊の派遣要請をしていたのかもしれない。

「……はい、平塚です」

『川崎です。山梨県警の特殊部隊が到着しました。彼らの輸送車は乗り合いバス終点に待機しています。我々も出発しましょう。正面口の車にいますので、こちらに来ていただけますか』

通話先に聞こえないようにゆっくりと深呼吸をする。ついに来たか、という心情が心の奥底から表層に向けて滲み出ようとしている。スマートホンを耳にかざしながら玄関ホールへと歩みを進める。その足の動き方が、いつもよりも不自然ではないか。何も持っていないはずの左手はいつの間にか固く握り締められていた。その手すらも、拳が震えてはいないだろうか。普段であれば絶対に気にしないようなことへ、妙なほどに神経質になる。

情けない話だけど、間違ひなく今僕は緊張のただ中にいる。これが平塚先生に見られるようなものならば、苦々しい顔で窘められかねない。自分自身なのに見えて情けないなごとも言われることだろう。だけどしょうがないじゃないか。見た目以上の人生を過ごしているとはいえ、王族に事件の容疑者として呼び出されるだなんて事態なんて想定

したことは無いんだ。

「ええ、今から向かいま——ちよつとすいません、一旦切ります」

そして視界に映った人物を見て、思わず表情が強張るのを感じた。せめてこの電話が、もう一分早ければ遭遇をしなかったものをと心の中で悪態を吐いたほどだ。

「あれ、レイも手伝つてるの？ あなたつて朝一は準備を担当していなかったと思つたんだけど」

事前の予定の通りであれば、確かに僕は居室で自分の作業を行っているはずだ。本来はこの場所にはいないはずの僕の姿を見て、今一番会いたくはなかった人物——藤沢さんは怪訝そうな表情を浮かべていた。

「本当、精力的だね。でもいくら何でも請け負いきすぎじゃない？ ほら、先生なんだからこういう雑務は私に任せなさいって」

「……ごめん、そういう訳じゃないんだ」

いつもの朗らかな調子で僕を氣遣う彼女の存在が、今は一番目を背けたいと感じていた。これからやることは、彼女のあずかり知らぬ所で行わなければならぬ。だからどういう動機であれ、非常に大切な事柄を当事者である藤沢さんを抜きにして行うのだ。そのことに対する負い目というものが、彼女を目の前にすると無視を出来ないものになる。

「実は……つい先ほど非常に重要な仕事が降ってきたんだ。だから、今から東京の方に向かうんだ」

できれば、このような嘘は自分自身で行うのではなくて、平塚先生のような第三者を通して行いたかった。何故ならば嘘が苦手な僕ではボロが出るかもしれないし、それ以上を負い目が表情ににじみ出してしまうかもしれないからだ。

「東京って、じゃあ今日のレイの担当はどうなるの？ 何なら代役の調整については私も協力するわ」

「いや、もう平塚先生や他の助教の人に話は通したから……大丈夫。何も心配はいらないよ」

普段はあんなに生意気だというのに、何故こういう時ばかりは気を利かせてくるのやら。その気遣いが今は、どうしようもなく見ていたくはなかった。握りしめていたスマートフォンをポケットの中に戻し、頭を振る。これ以上彼女と目を合わせていると、本当にボロが出かねない。

「ならいいけど……なんか残念ね。レイが最前線で頑張ってきたっていうのに、あなた自身が不在だなんて」

「まあ、世の中そんなもんだよ。じゃあ僕は行くから……今日は頑張つてね」

普段よりも素っ気ない対応に、勘のいい彼女のことだから何らかの違和感を覚えてい

るかもしれない。だが、そんなものもすべてが終わってしまえばもう問題ではなくなる。藤沢さんの隣を通り抜け、そして決して振り向かず、正面ホールを潜り抜ける。都合のいいことに、停めてあつた車の窓は、外から見ても人間の顔が判別できない程度には黒さをもつたスモークガラスだった。

そしてこの会話が、何の変哲もない”ただの大学院生”である藤沢レナ／私と、僕／レイが交わした最後の言葉になった。

その4

街の中央へ近づくとつれて、活気立った喧騒は遠ざかり段々と道路の混雑も解消されていく。今や、僕が乗る黒い公用車と後続の特殊部隊員を乗せた人員輸送車の周囲には、ほとんど他の車両の姿は無い。

道脇の建物も学園区で見られたようなおしゃれと賑やかさを同居させた親しみやすいものから、格式のある厳かな物へと変化を遂げていた。この地区は王都における上流階級の住まう居住地区、言わば高級住宅街だ。市街地の賑やかさとは一風異なる雰囲気だ。

王都リーヴェルの中央部。広大な市街地全土を見渡す丘の上に、今回の目的地が聳え立っている。緩やかな上り坂の先に、ようやくその姿が見えてきた。通路の終着点である大きな広場の後方に、鉄の柵が横一列に長々と連なっていた。そしてその先に見える学園区からでも見ても目立っていた巨大な建築物が、この国の施政の中心であり王家の人間が住まう場所でもある、エルトニア宮殿だ。

「身体的な危機が迫りましたら、遠慮なくこちらの小型発信機を押してください。我が国の威信にかけて、貴方を救出します」

街のシンボルたる王城を目にしても、今はそこに感動なんか芽生えないだろう。川崎さんが手渡してきた小さなボタンの付いた小型端末を、ポケットの中に忍び込ませる。こんなものを持参してさえもどうなるかも分からない今回の訪問の中で、宮殿の荘厳さに心を打たれるような余裕などあるはずもない。

「総員、展開!!」

後続の人員輸送車が停止するや否や、その出口から何名もの特殊部隊員が姿を現した。見渡す限り中世風の世界が広がる空間にはとても相容れない、一様に黒い装備一式と体を覆う盾、そして自動小銃。それらを携えた人員が、あれよという間に僕と川崎さんの前方部分に展開を果たした。

「ぎ、貴様らア!! 一体何者だ!! ここが一体何処だとわきまえている!!」

こんな目立つ集団に、宮殿正面を警護する衛士が気が付かないわけも無い。間もなく数名の衛士の一団が、槍をこちらに向けて大声で呼びかけてきた。まあ無理も無いだろう。王都の中でも最上級に重要な場所の正面に、こんな訳も分からない一団が臨戦態勢で陣を組んだのだから。

特殊部隊の面々は、衛士から発せられた口上に対して一言も発することなく、盾を密にして自動小銃を地面へと向けている。例え衛士の集団が槍の切っ先をこちらに向けて居ようと、まだこちらから交戦する意図は見せないということだろう。

「私は日本国外務省、臨時代理大使、川崎と申します。本日早朝にエルトニア第二王子の使者から拝受しました書状に従い、参上しました」

前方に展開した特殊部隊が二つに割れ、その中央部に立つ僕と川崎さんの姿が露わになった。川崎さんの右手に掴まれた羊皮紙。そこに書かれた文面は、一部分しか見えなものの確かに召喚状と記されている。それを衛士に見えるように前面に突き出しながら、彼は歩き出した。特殊部隊と衛士たちがにらみ合う空間へと、ゆつくりと歩みを進める。

「……貴君らは、レイジ・ヒラツカの召喚に関する者でしょうか」

「ええ。私たちは、日本国民である平塚礼二氏の案内、及び護衛のためここへ来た次第です」

向こうの隊長だろうか、同じくこちらへ歩み出た一人の衛士が川崎さんから受け取った羊皮紙に目を通してゐる。たぶん門番たる彼らも話は聞かされていたのだろう。書面から目を上げた彼は、先ほどの威圧感のある喋り方から一転して、丁寧な喋り口へと変化をしていた。川崎さんの言葉に嘘は無いと思うから、今の彼は国交のある国の大使ということになる。いくら物騒に見える集団を引き連れてた奇怪な人間に見えようが、その人物に対して下手に高圧的な態度はとれないということだろう。

「……我らの使者は、貴君らに対し、レイジ・ヒラツカに同伴する人間を一切認めないと

「通達をしていたはずですが」

「もちろん存じております。なので私たちはここで待機します」

結局、僕に誰かを同伴させるといふ交渉は失敗に終わったようだ。だから、この衛士は僕が単身でないということに疑問を浮かべているのだ。衛士の目の前には、臨時代理大使である川崎さんはもちろんのこと、この世界にはあまりにも不釣り合いな黒い装備へ身を包んだ特殊部隊の一団がいる。到底、ただの付き添いなど見えやしないだろう。

「ただ、あくまで仮にですが……平塚氏にもしものことがあれば、私たちは全力をもつて救出にあたります」

何かあれば容赦はしないと淡々と告げる彼の姿は、これまでに見たことが無いくらい無機質な表情を浮かべていた。愛想笑いすらも見せない、感情の読み取れない様子は、とてもではないが僕の知る中での川崎さんと同一人物とは思えやしない。

「我らが、それを許可すると?」

「あまり私たちを舐めないでいただきたい。我が国の国民に具体的な説明もなく嫌疑をかけ、その上弁護人の立ち合いすら許さず参考人招致など、普通であれば到底飲み込める話ではない。平塚氏の要望が無ければ、今回の訴えに頷くことも無かつたでしょう。有事に備えた部隊の用意、それは私たちの最大限の譲歩だということをご理解頂きた

「い」

屈強な衛士から放たれる敵意に対しても、川崎さんは怯むどころかむしろ向かっていくぐらいの勢いで口上を述べる。やはりというか、彼の言葉がつつらと続く中で、衛士の一人は段々と敵意を消失しているように見えた。この衛士が対面しているのは、ただの一人のやせ型の日本人男性ではなく、日本という国の代行であるのだ。そうならば、流石にこの場にいる衛士数人でどうにかなるような話ではなくなる。

「それでは、平塚氏の身柄を一時的にお預けします——平塚さん、ご武運を」
「ええ、ここまでお膳立てしていただき感謝します」

そして、ようやく僕が喋る出番となった。川崎さんの横を通り過ぎ、衛士の目の前へと進む。

「国立東都工科大学助教、平塚礼二。旧姓ラスティレイ・フォルガント。貴国の呼び出しに応じ、只今参上しました」

ここから先は、完全な敵地だ。エルトニアキャンパスという実質的な日本国の一部のようなグレーゾーンではなく、建国から数百年間エルトニアという国の中核として代々続いてきた土地。もう頼りになるのは、己だけ。

* * *

「あ、これも一緒に正面口の方にもっていつてくれっかな」

立て看板用を柱に固定するためのビニールひもと一緒に渡されたのは、当日来客者用への案内用紙の束だった。てっきり受付に予稿集と一緒に置くものだと思っていたから、玄関口に置いてしまうというのは少し意外に感じられる。

「受付だとここに入ってきた人しか取れへんだろ。こういうのはもつと気軽に持つて行ってもらった方がええ。それに沢山刷ってるから、たとえ一人三枚持つてかれても平気や」

そんな陽気な関西弁で、梅田先生は頭に手をやって笑っていた。うちの銀髪頭とは違って、この人は普通の30代前半くらいの若い男性だ。助教の先生とは本来これくらいの年代の人なのである。普段の研究室生活を送っていると少しばかり認識がおかしくなるが、こつちが世間一般であることを忘れてはいけない。

「それにしても、君んとこの先生、今日に外せない仕事つてなると随分急よなあ」
「そうですね……まだ新任の一年目ですから、入用も多いのかもしれない」

そう返しながら、つい一時間ほど前にエルトニアキャンパスを後にした彼の姿を思い出す。いつもは私と目を合わせて喋るはずの彼が、今日はどこかそわそわしたような様子でろくろくっぽ目も合わせずに何処かへと出かけていった。朝食を食べていた時は普

段と何ら変わらない様子だったから、何かの仕事が舞い込んだとすればその後ということだろう。梅田先生の言う通り、確かに急な話だ。

「まあ忙しいってことは良いことだわな。俺らの役職で暇がいつぱいってのは逆に危ないんよ。つまり平塚君は、安泰だつてことだね」

生徒としても安心やろ、と笑顔を向ける梅田先生を適度にいなす。彼の言う通りであるのは間違っていない。彼が助教一年目で生活困窮というのは、いくら何でも悲しすぎるし。でもせめて行ってきますくらいは挨拶はするべき。そんなちよつとだけわがままな感想が、私——藤沢レナの中に沸き起こった。

私にとって、平塚礼二という人間はある意味では恩人で、別の視点から見れば一番仲の良い友達で——そしてこつそりと特別な意識を向けている人だ。

日本という異世界の国に漂流してからの数年間、足掻きを重ね高校に行き大学に行くき、幸運にも世間では成功に部類されるレールに乗ることが出来たというのに。そのレールを走るトロツコの中で、この国は私にとって決定的に何かが違うという意識を抱いたまま生きてきた。

友達と言っても差し支えない人間関係は最低限築けたはずだった。でも話していてもその人たちと私の間には、目に見えないし触れもしないけど、決して破れない薄皮が

張っていた。人間関係だけじゃない。目に見える、耳に聞こえる、その全てに薄皮の存在を感じ取る。そしてその度に、心の奥底から思い知らされた。この日本国という国が存在する世界は、私のセカイでは無いのだと。

大学に入った後もその感覚は消えることが無かった。否、むしろ社会に出るという将来像が近づいたことで悪化すらもした。周囲の人たちと一緒に、このまま卒業して就職して人生のコマを進めていったら、果たしていつかはこの世界に適應できるのだろうか。

高々生まれてから十年にも満たない期間を生きてきただけの世界がこれから先の数十年の人生に与える影響の大きさを考えたら、その理不尽さに怒りだけではなく笑いすらも漏れた。結局、諦観という名の無気力に侵され、高校時代よりも狭い人脈しか築けず、ただだからだと”大学生生活”を行うための日々を歩む。それが、あの日まで続いたのだ。

『日本語で言ってくれないとちよつと何言ってるのかよく分からないです』

入学時から始めた、大学近くでのコンビニバイト。何ら変わらない日常の一コマに、とある劇物が放り込まれたのは唐突なタイミングであった。日本の一般的な男性とはかけ離れた容姿を持つ一人の大学院生。銀色の髪の毛を揺らし、無機質に見えるほどに整った貌の中性的なその人物は、冷徹さすらも感じる澄んだ碧眼をこちらに向けてい

た。まさかと思ひ咄嗟に故郷の公用語で呼び止めた私の言葉に、同じくエルトニアの言葉で生意気な返事をした彼は、間違いがなく同郷の人物だった。

その存在は、まるで目の前に垂らされた蜘蛛の糸だった。おとぎ話とは異なり、自分がいる場所は地獄というほど酷ではなく、そして上った先に天国があるかは不明。それでも今その糸に掴まなければ、もう二度と私に糸を手繰り寄せるチャンスは訪れないという確信だけはあった。別に故郷に戻りたいなんて欲は無い。唯々、私は薄皮一枚が存在しない関係が欲しい。その一心で私は彼——ラスティレイ・フォルガントをつかまえた。

私にとって彼は、薄皮に取り込まれた私をようやく解放してくれた恩人で、互いに隠し事のない心置きなく交流を持てる唯一の友達で、そして同じ時間を過ごしていく内にそんな人へ特別な想いを抱かないはずもない。

ただし実際の関係そのものは、学年にして数年間の開きがある後輩と先輩、それも学部生と博士課程という状態だ。その上今年からは学生と教員だ。個人間の距離がどうであれ、肩書的な距離は離れる一方だ。

せめて同じ場所です日常生活を送るといふ状況だけは死守したけど、思い返せば知り合ってから3年間、私たちの関係は何一つ変わっていない。研究拠点がまさかの異世界たるエルトニアに移るなどという大変化が起きたというのに、個人間の関わりが進展の

兆しも見えないとはいかがなものか。しかしそれが現実である。

そして彼はこのエルトニアに来てから、たった一人の妹さんとの関係や、もう関係ないよと日々語っていた実家との関係など、エルトニアでの過去に一つの決着と清算をつけていた。傍目に見ていたらもう少しまくやり様もあるだろうという過程はあるにせよ、それでも一歩ずつ確実に進んでいるのは事実だ。

それとは対照的に、私はこちらに来てから何もやってはいない。元王族だから下手に動けないというのは半分事実で、そしてもう半分は自分を納得させるための言い訳なのは分かっている。今の、このもどかしくも心地良い関係を壊したくない。なのに歩みを止めた私とは対照的に、彼は一歩ずつ前へと行く。それが着実に取り残されて、また一人ぼっちになってしまうような錯覚を感じて――。

思えば二週間前に唐突に知らされた、王家が第二王女を探しているという話は、私にとって二本目の蜘蛛の糸だったのかもしれない。今度は上ったら確実に天国じゃないことは分かっている。でも変わる切っ掛けになるのは間違いない。そして、結局それを掴む勇気が出ないままに、今日この日へと至ったのだ。

「あーっ!! レナちゃんちようど良いところにー!!」

そこまで考えていたところで、張りの良い声が耳に響いた。ふと周囲を見回すともう目的地である玄関口近くに来ていた。そして私を呼んだ声の主は、その玄関口で手を

振っていた。彼女は、別の研究グループに所属する博士課程の先輩だ。私と同じく、このシンポジウムの準備に明け暮れる仲間でもある。

「ビニール紐と、梅田先生から渡された案内用紙を持ってきました。それで、どうしたんですか？」

「それがねー、騎士学園の子かな？ 一人の学生さんが、平塚先生かレナちゃんを出せーって聞かなくて」

作業台に持ってきた荷物を置きながら、思わず首を傾げる。随分と不思議な状況が起きているようだ。

「あと見た目もなんかね、あなたのとこの平塚先生が女装したみたいな……あ、もちろん助教の方ね？」

「あー……そりゃあそうでしょうね。私、その子に心当たりがあります。ちよつと行ってきますね」

そこまで聞けば、流石に誰が来たかは分かる。まあ間違はなく、レイの妹さんであるレシルちゃんだろう。しかし彼女の方からこっちに訪ねてくるというのは早々無いことだ。それも、私やレイ以外を捕まえて呼び出そうとするなんて初めてではないだろうか。その状況に、少しの違和感を覚える。

玄関ホール抜けたら、すぐに特徴的な銀髪姿が目に入ってきた。相変わらず、レイの

髪の毛を伸ばして胸を適度に膨らまし、そして女子生徒用の制服を着せただけと言えるほどに似ている。そして見た感じの雰囲気、どこかふにやふにやしていそうなレイとは異なり、見た目と違わずの一見してクールなお嬢様というのもいつも通りだ。けどどこことなく、いつもよりも焦燥したような感じも見て取れた。

「だから早く藤沢レナさんか、もしくは——ってレナさん!!」

「はいはい、レナさんですよ。貴女からくるなんて珍しいじゃない。どうしたのかな」

もう一人の先輩学生に突つかかっていたその銀髪娘は、私の姿を視認するや否や、飛びつかんばかりの勢いで駆け寄ってきた。何度かレイがこの子の突っ張りをその身で受けて死にそうな顔をしているのを見たことがあるけど、あの様子を見る限りじゃ彼女が直前で止まってくれなかったら朝食べたものが逆流しかねなかったと冷や汗をかく。

ただ何が原因かは分からないけど、彼女の様子は流石にいつもと違い過ぎる。ただ単に私やレイの顔を見に来たというわけでも無いだろうし、一体何が起きたのかと首を傾げる。

「それが……そうだ。今、兄さんってそっちにいますか？」

「レイ？ 彼なら朝いちばんで急用だと言って、今は不在にしているわ」

それを聞いたレシルちゃんは、その表情をやや険しいものへと変化させた。その様子を見る限りじゃ、間違いなく彼女がここに訪れた要件は、あまり楽しいものではない

のだろう。レイ関連で何か伝えなければならぬことでもあったのかもしれない。

「伝言なら任せなさいな。何ならメールとかで今すぐ伝えるわ」

「いや、そうじゃないんですけど……今朝の学園で、少し耳に挟んだんです。ライル殿下の腰巾着達が、今日の間報告会は大打撃だろうって話して……まさか変な茶々でも入れられたのかと思つて、授業を抜け出してこつちに来たんです」

具体的には何のことかはよく分からない、とレシルちゃんは締めくくつた。しかし茶々が入つたかもしれないとは言うけれど、彼女の言うライルの腰巾着とやらが大打撃と豪語する割には、今日は特に緊急の知らせは入ってきていない。ライル・フランシス・エルトニアが大学計画への反対意志表明をしたときなんて、すぐに外務省の人から事情聴取があつたくらいだ。だから本当に大打撃とやらが起きれば、いつものように早急にこちらでも何かしらの応急処置に向けて行動を始めるわけ——

「——ごめん。その大打撃とやらで、何でも良いから他に聞いたことは何かある？」

「ボク自身あまりこつちの事情に詳しいわけじゃないから、正直ほとんど分かりません。それに一番詳しくそうなライル殿下も今日は姿も見えないし……でも、司会者不在だとか、それに対する説明要求だとか、そんなことは言つてました」

何故今日は上からのアクションが無かつたのか。否、アクションがあつたとしてもそれが私たちまで伝わってきていないだけなのではないのか。その嫌な予感、レシル

ちゃんの話を聞いて現実味を一段と増していく。司会者不在という状況、そしてそれを切っ掛けとして何かを迫及する。この行動の狙いが一体何を突いたものなのかはいまいち分からぬ。でも一つだけ、ほぼ間違いないことがある。

「レイ、あなたまさか……」

本日のシンポジウムにて本来の予定で司会者を務めるのは、平塚礼二。その彼が申し出た不在とは、急な仕事が入ったせいでも何でもなく、あの弟一派による仕組まれたものということなのか。差し出された二本目の蜘蛛の糸は、まるで私を絡め捕ろうとばかりに、目の前へといつの間にか待ち受けていた。

その5

「前半部のセツシヨンの座長代役は梅田さんをお願い出来ますか？ 開幕の挨拶は僕の方でどうかしますので」

「まったく構いませんって。何なら挨拶や後半の座長も僕がやりますよ」

「ありがとうございます。だがうちの若い者の不始末ですから、そこまでお願いするのは悪いですよ」

このシンポジウム全体の世話人であり、当日の現場指揮を不在となったレイから引き継いだこともあって、私たちのトップである平塚先生はかなり忙しい様子だった。本来であればレイが担当していた仕事を、一部は他のメンバーに分配し、一部は自身で行うといった人員配分に追われているのだろう。事実、先生のデスクに行っても姿は見えず、焦りを感じながら周囲を探し回ったところ、梅田先生のとこに仕事分担の交渉に来ていたという次第だ。

「ではすみませんがお願いします。今度何かありましたら、奴をこき使って構いませんので」

交渉は決着し、梅田先生はまた会場の点検に戻り、平塚先生は他の部署の調整に向か

うのだろう。しかし今は、先生にどうしても聞いておかなければならないことがある。「次は豊橋先生の所の誰かを——どうした。なんか用があるのか、藤沢……それとレシルティア君」

手元のタイムスケジュールから視線を上げた先生は、ようやくフリーになったところを捕まえようと歩み寄る私たちの姿を目にしてくれたようだ。私だけならばまだしも、一緒についてきているレシルちゃんをも視界に認めた先生は、露骨にいぶかしむ表情を見せた。

「お忙しいところすいません。先生に一つお聞きしたいことがあります」

「何となく、君が聞きたいことは分かる。レイに関することだろう」

何か事情を知っていきそうな先生の返答に、やはりかという思いが駆け巡る。今日のレイの不在に対して、それを周知させてもろもろの処理を行ったのは平塚先生なのだ。ということとは、その不在の原因について一番詳しく知っている可能性が高い。今考え直してみれば、レイがキャンパスを後にする寸前に妙に態度が余所余所しかったのは、私に対して何かを隠していたのが原因なのだろう。

「……はい。平塚助教が本日不在の要件について、その理由を教えてくださいませんか」
「単刀直入に行こうか。藤沢だけならまだしも、そんな険しい顔をした奴の妹さんが来ているというのは普通じゃない。君の想像通り、あいつは普通の急用なんかじゃない

よ

想像していた通り、レイは何か言えない事情を抱えていたんだ。それが知らされただけでも、このもやもやの一端が晴れるような気がする。

「ライル殿下、君の実際の弟さんだったか。レイは彼の派閥によって、今王宮に招致されている」

それを聞き、思わず握りこぶしに力を入れる。レシルちゃんの話から予想をした通り、この件はあの弟一派によつて仕組まれたことだったのだ。何が急用だ。レイは、やはり私に悟られないように下手なごまかしをしていたんだ。そして彼が誤魔化してまですりかかっていたということを見ると、段々と相手方の思考が読めてくる。

「俺が聞いたのはそこまでだ。だがあいつが王宮に呼び出される理由なんて、そう多くは無いだらう。しかも、俺はそれを君に伝えることをレイ自身からやめるように言われていた。今となつては、藤沢も事情を知るところとなつたから関係ない話だがな」

平塚先生の言う通り、彼が王宮に呼び出されるような理由なんて、彼とライルにどのような関係があるのかを考えたならば一つしか思いつきはしない。それは、十年近く前に消失したエルトニア第二王女の捜索。つまりレイは私に關する争いに巻き込まれ、それを私に伝えぬまま自分自身を差し出したのだ。しかしそこまで予想がついても、どうしても拭えない謎は残る。

「……エルトニア第二王女の搜索。でも、そしたら何故私じゃなくてレイが呼び出されたの……?」

「今度はこつちが質問する番だ。藤沢はともかく、何故レシルティア君までがここにいる? この際入構証の有無を問うつもりは無いが、一体どうしたんだ」

一旦謎について考えるのを中断し、私の後ろでやや険しい顔で平塚先生を見つめるレシルちゃんへと視線を移す。私が単独ではなく彼女を連れて平塚先生を探していたのは、レイ自身の状況を確認すると同時に、レイの不在がこのシンポジウムに与える影響を伝えるためだ。

「それはボクから話します。兄さん——ラストイレイがライル殿下に呼び出されたことは、もう事実として扱います」

そこから、彼女は先ほど私に語ったものと同じ話を平塚先生に聞かせた。曰く、レイの不在はライルだけではなくその配下である大学計画の反対派も知るところであり、今日の報告会にて彼の不在を起点として何らかの攻撃を行う可能性があるという。

通常の勉強会であれば、高々司会者の不在なんて、急用の一言で済ませれば特段の傷にもなり得やしない。しかし、現状における彼の立場や状況をかえりみると、あるかも分からない傷が致命傷へと昇華する可能性を秘めているのだ。彼は第二王女の失踪に關して嫌疑をかけられた身分となった。たとえ事実関係がどうであれ、その一点はこち

らにとって明確な弱点となるかもしれない。

「……大学計画の反対派が一筋縄じゃないって話は、本当だったんだな」

話を聞かされた平塚先生は、露骨に表情を曇めた。本来であれば、ただのシンポジウムに関する運営的な話ならまだしも、要人が絡んだ政治的な話になると准教授という職の彼には任せられるべきものではない。それを押し付けてしまったということに、私としても後ろめたさを感じてしまう。

「……すいません。面倒な話を持ち込んでしまつて」

「いや、この件は報告をしてくれて本当に助かった。とてもじゃないが放置をしていい問題じゃない」

その先生の一言で、いくらか肩の荷がおちる気がする。ため息一つを漏らした先生は、廊下脇の長椅子に腰を下ろして、タイムスケジュールが書かれた紙の裏にボールペンで走り書きを記し始めた。

「悪い展開を想定しようか。当日参加者に大学反対派、それも建設的意見を持った人間ではなくただ単に場を荒らすことを目的とした輩が紛れ込む。それでどのタイミングかは知らないが、そいつらが声高にレイの不在、及び奴の状況について糾弾する、と」
そして糾弾されうる内容は、レイが第二王女の失踪の容疑者であるということ。彼の不在が容疑に対しての取り調べであることは事実であり、そのレイが務めるはずだった

司会者が別人に置き換わっていたら、理由は何故だという切り口で攻められるのだらう。

「そんで第二王女の不在に関与した人間を擁する、大学そのものに対するバッシングをあれよあれよと降らせるといふ感じか。学会進行を聴衆が中断させるなど常識じゃ考えられんが……レシルティア君の言葉を信じれば無いとは言えんな」

何たつてその司会者を浚つた人間と、シンポジウムを妨げようとしている人間が同じ一派に属しているのだ。「そんなに俺たちが邪魔かねえ」と平塚先生は苦笑いを浮かべながら、走り書きしたメモにボールペンの先端をトントんと押し付けた。

怒りというよりは半ば呆れた風を醸し出す平塚先生は、ため息一つと共にポケットから携帯電話を取り出した。

「こんながやのゴタゴタなんぞ、重鎮の先生方に影響を与える訳にはいかんよ。二人とも少し待つてなさい——いきなりお電話すいません。私東都工科大学の平塚と申しますが——」

そしてどこかに発信した彼は、私やレシルちゃんに少し待つようにと手で制してきた。その間にも、私の中には焦燥感や苛々とした感情が沸々と沸き起こる。今回のゴタゴタを引き起こした連中が、最終的に成そうとしていることとは何なのか。一人身を差し出したレイが一体何を問い詰められているのか。そもそも彼は何故私に一言も知ら

せることも無く行つてしまつたのか。

「はい、こちらとしても現状では動きにくいので、そちらの方で調整をしていただければと——」

だが一番にもどかしく思うのは、本来であればこの問題の中心に取り込まれていたであろう私が、こうして外側から問題を眺めるしか出来ていないという現状についてだ。ライルが呼び寄せたのは私ではなく、そしてシンポジウム側の問題でも平塚先生に頼らなければ手も足も出ない。そんな状況が、酷くもどかしかった。

「それと後々の対応をお願いします。それとそちらの状況についてですが——」

二週間前に王室が私の捜索に乗り出したと聞かされて、私は一体どのような行動をしたか？ 確かにあの日から今日にいたるまで、何かの足しにはなればとこの世界に向き合うための準備はしたつもりだった。でも私自身が第二王女であると認めるその一歩だけは踏み出せず、本当の私を知るレイという存在に依存をし、あまつさえその彼がこうして身代わりになるような状況を作ってしまったのだ。あの時レイの後ろでただ怯えるのではなく、この立場を捨てても第二王女であることを認めていたならば、もしかしたらここまで状況が拗れてはいなかったのかもしれないのに。

こうしてただ黙っていると、段々と自身の心情がマイナス方向に振れていく。それと共に考えている内容もネガティブな物へと変化をしていく。こんな精神的な側面へ負

担を掛けるだなんて、一昨日までの精神疲労の状態に逆戻りしかねない。昨日にレイから精神疲労を指摘されて、気が付かれないようにと慌てて睡眠時間を長めに取ったというのに。それはいかんと、少し強めに自分の額を手で揉んだ。ひんやりとした手が頭に触れ、前頭部に伝わる緩やかな痛みが少しだけ気分を上向きにさせたような気がした。「ではこちらも少し話を伝えてみますから、後々の調整をよろしく願います。あとはこちらで適当に誤魔化しておきますので」

それにしても、平塚先生は一体何処に電話を掛けていたんだろうか。先ほどまでの対処の難しそうな面倒ごととに直面した様子にしては、電話口で要件やらなんやらを伝える彼の口調は普段通り理路整然としたものであった。電話の最中も、会話の要約だろうかボールペンをすさまじい勢いで走らせ、僅か数分にも満たない中でも裏紙の半分がびつしりと文字で埋まる始末だ。

「それでは失礼します——とりあえずの行動指針は定まった。二人とも、これからやることについて話がある」

ようやく通話が終了したのか、電話を机の上に置いた先生はスケジュール用紙の成れの果てをこちらに差し出してきた。レシルちゃんとそろってそれを見つめるが、日本語の文字列がそもそも読めないレシルちゃんの良いとして、私でさえお世辞にも丁寧とは言えないその走り書きを見て解読することは困難だった。しかし先生は全く気にする

そぶりも見せず、おそらく論点が書かれた箇所をボールペンの先で叩いた。

「対処すべき問題は二つある。一つはこのシンポジウムの進行を阻害する輩について。そしてもう一つは、現在招致とは名ばかりの弁護士すらいない単独尋問を受けているレイについてだ」

「じ、尋問って……」

「ちようど今電話をしていた相手、外務省の役人から聞いたんだよ。今アイツには、ボディーガードも弁護士人も付けずに、たった一人で敵のただ中にいる。仮にも国同士の付き合いがあるっていうのに、どんな殿様対応だ」

そのどう控えめに言っても穏やかではない単語に聞き返す。レイが招聘されたのは、ただの事情聴取などではなかったのか。電話の向こう側にいるのが外務省の役人、おそらく川崎さんであるとしたら、多分その情報に間違いは無いだろう。それをみすみす見逃して彼を送り出してしまったことに、思わず歯ぎしりをした。

「両者共に、君たちの助けを借りようと思う。まずはレシルティア君についてだが——」
私とは裏腹に、平塚先生はあくまで淡々と行動指針を説明していく。先生のそういう冷静さは一見すれば冷酷にも見えてしまうが、こういう状況で感情的にならない上司の存在は非常に助けになるのだろう。しかし、そのさも当然のように話す行動指針は、よくよく聞いてみればとてつもなくぶっ飛んだものであった。

「君にはレイに成りすまして開会式の挨拶をしてもらおうと思う。証人尋問されているはずの人間が壇上に居るんだ。インパクトは十分だろう」

みんな驚くだろうなあ、ときも他人事のように喋る平塚先生。だけどそれを目の前で聞かされる私やレシルちゃんは、この人は一体何を言っているんだろうかと思わず互いに目を見合わせ、首を傾げあつた。

その6

「……市民に対し、また随分と嚴重な処置ですな」

視線の先にいる相手は、とてもではないが普段の状況では軽口の一つも叩けないような存在だ。しかし今の自分自身の状況をかえりみたら、皮肉の一つでも言つてやらなければ気が済まない。仮にも他国の一般市民である平塚礼二という若い男一人にする処遇としたら、この状態は歪にも程があるものだった。

川崎さんたちに別れを告げた後、一体どのような聴取をされるのかと思つていたら、小部屋はおろかまるで要人との会談を行うのかというほどに立派な部屋へと連れてこられたのだ。ご丁寧な、川崎さんたちの視線から外れる王宮の建物内部で後ろ手を縛られた状態で。両脇を無言で歩いていた兵士がその部屋の扉を幾度がノックをし、短い返答の後にゆつくりと開ける。その先に居たのは、この一連の面倒事を引き起こした張本人だった。

「……市民と言つたな？　生憎、何処の国においても王女の失踪に関与した人間はそういう呼ばれ方はしない」

人払いを済ませたこの広い部屋には、僕とライル殿下の二人しかない。窓辺に立ち

ながら嘲笑するような声色で話す彼と、部屋の中央部に置かれた質素な椅子に座らせた状態で後ろ手を縛られた僕が、お互いの視線を交差させる。彼の配下の人間に根掘り葉掘りあることないことを言われるのかと思っていたらこの有様だ。

「レイジ・ヒラツカ。否、ラスティレイ・フォルガント。お前がこの場所にいる理由が何だか分かるか？」

「……ええ、分かりますよ。ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニア。否、藤沢レナ。彼女に関する話でしょう」

僕の座る椅子に向けて、彼は一歩ずつ近づいてきた。これまでいつ彼の表情を見ても浮かんでいた無表情な貌が、今にも崩れそうな歪んだ笑顔で上書きをされていた。どこかで見覚えのある、仮面のような笑顔。それに、とてつもなく嫌悪感を抱く。

「そうだ。もはや多くの民の記憶からも消え失せようとしていた私の姉、ヘレナだ!!」

この広い空間の中に、初めて聞く彼の大きな声が響く。電車一両よりも奥行きのある大部屋の中、ライル殿下は僕の元へとゆっくりと足を進める。

「十年前、我が国は幼かった第二王女が行方不明になるという失態を演じ、同時に文武共に才覚のある優秀な血族を失った。現王は、彼女が失踪してから丸一年、多大なる報酬金を用意して捜索を行った。嘘か真かも変わらぬ情報にすら褒美が与えられ、三日に一度は第二王女を称する赤の他人が面会に訪れた始末だ」

揚揚と、彼の言葉はまるで流れ出した水のように淀みなく続く。僕が己の才覚の無さに失望し、剣と魔法の世界で生きる道を諦観していたその頃。フォルガント家の統治領から離れたこの王都リーヴェルで、ライル殿下の言うような騒ぎが起きているということとは、あくまで伝手でしか聞いたことはなかった。

「素性も分からぬ怪しげな情報屋が報酬を受け取る、だがそんな日々も長くは続かない。一年が経過した頃、情報料と称した資財の垂れ流しは批判を集め始めた。そして批判の立役者たる私の兄、第一王子の説得に応じた現王は、一年間の搜索を打ち切った。国としては一概に間違った判断ではなかっただろう。だが彼らが私の姉を見捨てたことに変わりはない!!」

その叫びと共に、彼は荒々しく地面を踏みつけた。広い空間に大きな音が響くとともに、踏みつけた足から溢れ出た魔術由来の火花が飛び散る。絨毯を焦がし、すえた臭いが辺りに漂う。まるで痲癩を爆発させるような行動は、いつも一歩引いたところで無感動さを纏っていた彼の姿と重ね合わせるのが困難なほどだ。

「……そのまま時が過ぎ、誰も彼女のことを再び搜索しようなどとは言いださなかった。事実上後継者が一人脱落し、周囲の人間の動きも安定したことも大きいだろう。だがそれでも私は、私だけは探し続けた。心のどこかではもう見つかることは無いだろうと思いながら、しかし希望だけは捨てなかった」

足元に付いた煤を払落しながら、彼は再びこちらに向けて歩き出す。もし手が後ろで縛られていなかったら、腕を伸ばせばギリギリ届くかという距離で、ライル殿下は僕の顔を見下ろしていた。不自然なほど平たんな声色が頭上から降り注ぐ。

「なんとという幸運だ。街並みに紛れた、二ホン国との交流で訪れた渡来人を何の気なしに見てみれば、まさかそこで姉上の姿を見つけるだなんて。だが、同時に私は運がとても悪かったのだろう。ラストイレイ、十年来に見た彼女の中に私は何を見たと思う？」

いつの間にか能面のような薄ら笑いを浮かべながら、彼はそう尋ねてきた。僕がライル殿下と初めて会った時、その場には藤沢さんもいた。日本人の一人として僕たちに溶け込み、そして第二王女としての態度はおろかエルトニア人としての片りんすらも隠し通そうとしていた彼女の姿。それはまるで、あたかも彼女が彼女自身の過去に向き合っているように――

「あの人は、姉上はッ!! このエルトニアを、そしてこの私を、素知らぬとばかりに過ごしていた!! あの人の目は、この国に向いてはいない!! 二ホン国を、そしてお前を見ている!!」

自分の状態を知るよりも、息苦しきの方が先に訪れる。椅子に両手を縛られたままの僕の胸倉を、彼は勢いよく掴み上げていた。腰が浮き、椅子の後ろ脚までもが地面を離れ、そして間近で彼の叫び声を浴びせられる。仮面のような薄ら笑いは剥げ落ち、憤怒

の表情が真正面から僕を見据える。

「あの人がいなくなつてから、ずっと再会を心待ちにした私への仕打ちがこれか。この私の気持ち分かるか!？」

そう吐き棄てるように言葉を乱雑に切り、それと共に首元が解放される。そのまま椅子ごと後ろに倒れこむのではないかという反動と共に胸倉を離され、視線を彼に向けたまま小さく深呼吸をした。

「……お前たちと会つた当初から、あの人の正体には気が付いていた。だが反対に、姉上は私を弟とは扱おうとはしなかった。最初は私の正体に気が付いていないのかと淡い希望も抱いた。だが、あの見学会で言葉を交わした時、名前まで名乗り上げてなお姉上は私を縁のない人間かのように扱った。完全に自身を覆い隠したのか、それともまさか記憶を失っているのか。私にはそれすらも分からなくなつたよ」

だからこそその急な見学会の開催だったのか。藤沢さんは、ライル殿下に遭遇した時点から彼の名前や自身との関係について忘却なんてしていなかつた。その上で、一般の日本人研修者として振舞うべく知らないふりをしていた彼女は、見学会においてもその態度を貫き通したのだ。僅か短い時間でも、ライル殿下と一対一で会話をしていた藤沢さんの様子。は、決して姉弟の間柄ではなく王族と一般人の枠を出なかつた。

一体彼女が自分を偽るといふ嘘をついているのか、それとも記憶がないことに起因す

る本心からの行動なのか。どちらにせよ無関係な他人であるという態度を崩さない実の姉を前にして、たとえ無表情に見えたライル殿下のその心の内は、一体何色であったのだろうか。

「……我々の大学を非難したのは、彼女の出かたを伺うためだったんですか？」

その失意を抱いたまま見学会を終わらせた彼が次の行動を起こすまでの時間はわずかだった。ライル殿下を中心とする、大学計画への反対派の集結。その時から、ゆつくと真綿を締めるような妨害が始まったのだ。つい最近まで、彼の言葉通り、僕は完全にライル殿下は本心から大学計画への警笛を鳴らすべく行動をしていると信じてきた。しかしその全てが嘘ではないにしても、根底にある切っ掛けはそうではないはずだ。

「ああ、そうだとも。元々私自身がお前たち二ホン国に対して慎重派ということもあり、少し声を掛ければ私に群がっていた連中が意気揚々と己の立場を表明したよ。たとえ芯の部分で意見の隔たりがある烏合の衆であろうと、お前たちをけん制する分には十分だった」

何一つ悪びれる様子もなく、彼は淡々と話す。あのタイミングで彼が否定派を支持する声明を出したのは、結局のところ僕らにプレッシャーを与えるていの良い手ごまを用意するために過ぎなかつたのだと。

二週間前に遭遇した大学反対派の学生が言っていた「ライル殿下と僕は完全に同じ方

向を向いているわけじゃ無い」という言葉を思い出す。確かにそうだろう。あの学生のように大学の存在意義を根底から考えるような派閥が、ただそれを手ごまに使うような存在と同じ方向を向いているはずがない。

「姉上は聡明な方のはずだ。私が中核となつた一派がこのような行動を起こせば、あの人も名乗りを上げて表舞台に姿を現す……私はそう信じていた」

彼の言う人物像、すなわち王族足り得る先導性、カリスマ、行動力。それらに期待をして、じわじわとプレッシャーを与えてあぶり出そうと計画を続けてきたのか。しかし藤沢さんは、殿下の考えるほど勇猛な人物ではない。あくまで年相応の若い一人の女子に過ぎないのだ。

「だが、出てきたのは姉上ではなくお前だった。フォルガント家が二ホン国の大学計画へ支持を表明したことで、やられたと思つたよ。そしてようやく私の中にある確信が付いた。今の姉上に王族足る資質は足りておらず、それはお前の存在が原因である」と

彼の金色の双眼がこちらを射抜く。無言のまま、その理由がわかるかとまるで問い詰められているような錯覚に陥る。彼女から王族足る資質が抜けて、そしてそれが僕の存在であるという根拠。そんなこと、少し考えればすぐに分かることだ。彼女と初めて言葉を交わした薄暗い研究棟のロビーで、藤沢さんが見せた表情を思い出す。あれは、ようやく同じ境遇の人間を見つけたという、単純明快なる安心感だった。

「姉上はお前に依存し、その盾の後ろで縮こまっている。これはあくまで私の想像に過ぎないが、仮に本当だとしたら実に嘆かわしい。希代の才女たる長姉のライアにも劣らぬ才覚の持ち主がそのざまか。二ホンという国での生活が、そこまで爪と牙を奪うとはな」

「……たとえ、王族としての意識が無くなろうと、それは現代日本における生活に対応をした結果です。殿下の追い求めるソレは、もはや今の藤沢さんではない」

彼の嘲笑うような口調に、今まで下手に逆鱗に触れぬよう意識をして黙っていたはずの口が勝手に言葉を紡ぎ出す。貴方の追うその姿は文字通り幻影に過ぎない。それはまさしく幻であり本人ではなく、現代日本という完全なる異世界に流れ着いて足掻き続けてきた彼女とは到底重ならない。

「彼女は、現代日本という世界で今日この日まで生き抜いてきた。たとえそれが王族足る資質を捨てることと同義でも、価値観どころか言葉すらも異なる世界を生き抜くにはそれしか無かったはずだ」

それを、この人は適応ではなく劣化と切り捨てた。彼の頭の中には、未だに十年前の希代の王女ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアがいる。その差異を、この人はどうしたって認めることが出来ないのだ。

「何故等身大の彼女を見ようとはしないんですか。人は誰だつて変わる。境遇が変化し

たならば、それに対応しようとする」

「……黙れ」

低くうなるような彼の言葉も、今は敢えて無視をする。こぶしを握り締めて真正面から僕を睨め付ける彼に向けて、さらに続けた。

「今の彼女は、もはや一人の大学院生だ。少なくとも現状は、決して勇猛な意志を持った人ではない。貴方の見ている幻影せれは、決して今の彼女には重なりはしな——」

「——知ったような、口を利くなア!!」

言葉を言い終わるのも待たず、彼の手が僕の顔を打ち鳴らした。脳が揺さぶられるほどの衝撃が頬を打ち、勢いを殺し切れずに椅子ごと地面へと倒れおちる。受け身も何も取れたものではなく、たとえ地面が固い床ではなく絨毯であっても、容赦のない衝撃が肩口から頭へと伝わった。だがそんな視界の歪みを起こさせるほどの眩暈の中でも、明瞭な憤怒の表情を浮かべるライル殿下の顔を睨め付ける。

「それが、貴方の本性ですね」

底知れなさを感じさせる無表情でもなく、張り付いたような歪んだ笑顔でもなく。そこには怒りで息を鳴らす一人ぼっちの若い青年の姿があつた。何を考えているかも分からない、底知れぬ深さを持った第二王子はこの場にはいない。幼少期に生き別れになった姉を追い求め、理想と現実の境界に苦悩してその末に現実から目を背けた、ただ

の若い青年だ。それこそが十台の等身大の青年としての、彼の姿なのだろう。

「……殿下がそこまで彼女を追い求めるのなら、何故直接この場に彼女を呼ばないんですか。貴方が藤沢さんの正体に気が付いてから今日この日まで、殿下は彼女を一回も名指しで召喚はしていない。何故この僕に、彼女が表舞台に立とうとすることを阻止する猶予を与えたのですか」

そしてようやく、ずっと抱いてきた疑問を投げかけた。この質問をすることが、敢えて僕が見え透いた危険な場所であるここに来た理由の一つである。ライル殿下のこれまでの行動は、終始外堀の埋め立てに終始をしている。川崎さんをして真綿で首を締めるとしても真綿が先に切れてしまうとやわしめ、それゆえにライル殿下の狙いを誤認させたほどだ。二週間前の第二王女の搜索願だつて藤沢さん本人に直接向けたものではなく、今日だつて彼女ではなく敢えてその近くにいた僕をターゲットにしてきた。

結果から言つて、彼の行動のすべては、彼女にプレッシャーと猶予を与えることとなつた。だけど、それは彼女を強制的に王宮へ呼び寄せるものとは繋がらなかつた。ただ単に藤沢さんを王宮に迎え入れるには僕のように名指しで呼び寄せればいいものを、彼は敢えてそうしなかつたのだ。ならば、その狙いの根底にあるものは一体何か。

「……姉上は聡明な方だ。たとえ現状が違つていても、根底には王族の血があるはずだ。だからこの王宮にあの人が戻るときには、王族足る意志がなければならぬ。だが無理

やり呼び寄せたところでそうは叶うまい」

そして再び彼の顔に笑顔が張り付く。あの能面のような、剥がれ落ちそうな歪んだ笑顔だ。そしてようやく気が付く。なんでこの笑顔に僕が嫌悪感を抱いていたのか。

「姉上は自分の意志でここに来なければならぬ。それは何時か。大学計画を護るために身を差し出すか、王室が行方不明の第二王女を探しているという声明に応えるべく参上するか。否、あの人は結局足を踏み留めた。ならば、その彼女に吹き付ける風を遮断する盾を取り外したらいい」

彼の笑顔は、僕が昔に浮かべていたものだ。自分よりもはるかに優秀な妹という存在を心のどこかで認められず、そしてだからと言って完全に距離を置くことなんて到底出来ず。そしてすべての状況を解消できるはずの、現代日本への帰還というただ一点に希望を抱き、無理やり自身の表情を笑顔にする。

「ラストイレイ。お前を失って初めて、姉上は本当の己を取り戻すだろう」

見たくないものに蓋をして、ひたすら己の望んだ物事にのみ希望を抱き続ける。彼は今、出口があるかも分からない一本道のトンネルを進み続けているのだ。引き返すことは敵わず、先に進むしかない。

「そしてようやく、第二王女はこの王宮へと戻ってくる……お前は、言うなればそのため
の餌だ」

そこへ来て、ようやく僕は自分の判断が誤っていたことを悟った。目の前の彼は、端から交渉や取り調べなんかで藤沢さんの表舞台復帰を狙ってなんかいなかったのだ。大学計画への反対表明から、他国の一般市民を手配するという行為まで、全ては藤沢さんが自分自身の意志でこのエルトニア宮殿に足を向けるための布石に過ぎなかった。そして最後のピースであり餌である僕は、最後まで彼の底に燃える意志を欠片すらも気付きもせず、こうして彼の目の前で椅子に縛られたまま倒れ伏している。

「お前はそこで無様に倒れて、名実共に第二王女ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアが凱旋する様を見ていれば良い。姉上がここに来るまで、恐らくそう時間は掛からないだろう」

彼女がここに姿を現した後のことなど恐らく考えてもいないのだろう。ただ、第二王女が王宮へ戻ってくるという一点のみを眼に映した青年は、その歪んだ表情を段々と綻ばせながらくつくつと嗤った。

その7

「レシルさんを先輩の代わりとして使うって……先生、本気ですか？」

「冗談を言うような場ではないだろ。俺は本気でそう言っている」

どう聞いても真面目に考えたらまず思い浮かばないような案を出したにもかかわらず、それを疑問と共に指摘してみればまるで心外だと言わんばかりに平塚先生は肩をすくめた。

だが彼の言葉を冗談と思うのも当然だ。不在となったレイの代わりにレシルちゃんを登壇させ、その場を乗り切る。いくら二人の容姿が似ているとは言えども口調やら細かい様子の違いは隠し通せるものじゃないし、そもそも私たちの会を邪魔しようとしている人たちはレイの不在を前提とした上で行動をしている。急造で“レイもどき”を拵えたところで、何ら意味なんか無いはずだ。

「向こうは先輩の不在を知っているんですよ。なのにレシルちゃんを出したら、むしろ嘘を重ねていると紛糾されるんじゃない……」

しかしそんな懸念材料を提言したところで、平塚先生は涼しい顔をしながら首を振った。

「そこは役人の腕の見せ所だな。さつき連絡したときに話したんだよ。今回の一件、向こうの王室の別所に話を通して、そもそもレイの連行そのものが無かったことには出来ないかってな」

その発言の意図がよく理解できず、私は恐らく首を傾げながら不思議そうな表情を浮かべていたのだろう。「すまん、分かりにくかったか」と短く詫びを入れた平塚先生は、スケジュール表の僅かに残った余白部分にボールペンを走らせながら改めて説明を始めた。

「今回の一件をあえて”色眼鏡”を通してみてみようか。ある一人の善良な日本国民が急に身に覚えのない容疑で他国の上層部に召喚を強要される、しかも同伴者すらも許されないときた。話を通された日本外務省としては当然応じる理由も無いが、もし応じないならば指名手配すると強迫を受ける。周囲への影響を懸念した善良な市民平塚礼二は、外務省の反対をも押し切り本心を押し殺して出頭に応じた……といったところか」

平塚先生が揚揚とした様子で説明したのは、本人の言う通り見事に色眼鏡を通したストーリーだ。あることないことを脚色したとまでは言わないけど、善良とか本心を押し殺すとか、実情をかえりみたらその辺りはおそらく完全に正しい説明であるとはとてもじゃないが言えたものでは無い。

「説明の仕方にもよるが、要は日本外務省としては相当メンツを潰されたということだ。

それにエルトニア側の対応も、第二王子が暴走しただけとはいえ友好国に対してやることじゃない」

平塚先生が紙に二つの大きな楕円形をすらすらと記した。それぞれ中心部に日本とエルトニアという名前が書かれ、今回の一件に対する両者の捉え方が簡潔に書かれていた。日本からは信用の喪失および不快感、エルトニアからは一部の勢力が起こした失態。そしてその下に、「それぞれが望む収束点」という文言が踊る。

「レシルティア君、私はこの世界情勢については詳しくないが、国同士のやり取りというのはやはり体面を重んじるものだろう？」

「……そのはずです。国対国の交流では、相手をいかにもてなすかはどこの国も重んじます。それが友好的な相手ならばなおさらで……」

その言葉を聞いて、平塚先生が日本とエルトニアの円の間にも、「友好関係」という一言を付け加えた。つまりエルトニアにとってみれば友好関係のある国に対してとても無礼な行動を起こしたということなのだ。これはレシルちゃんのような国の体面を重視するという習慣とはとてもではないが一致するものではない。

「エルトニアの肩を持つとすれば、今回レイを証人尋問するという話はあくまでライル殿下単独の行動に過ぎない。俺もよくは分からんが、この話は王室の他の一派には届いていないそうなんだ。だがそんな行動を阻止できなかった時点で失態だといわれても

仕方ないだろうな」

そして先生は友好関係という文字の上から大きくヒビの絵を描き加える。民間人一人に関する問題ではあるにしろ、それが及ぼす影響については現代日本がいる世界だつて到底馬鹿にすることは出来ない。不当な理由で相手国の公的機関に拘束され、しかも弁護人すらも付けるのが不可能な尋問が勝手に行われるなんて普通に現場レベルを飛び越えて国の偉い人が動き出す事案だ。多かれ少なかれ国同士の付き合いにも影響を与えかねない。

「だからこそエルトニアの主流派は、何らかの帰着点を見つけたはずだ。何しろ王族の一人が起こした問題だ。関係ありませんなんて口が裂けても言えんだろう」

” それぞれが望む収束点”。その部分を平塚先生がボールペンで黒々と二重線を引いて強調する。

「現時点では王室の他の派閥に、おたくんとこの王子はなにをしてんだと訴えている最中らしいが、向こうの主流派が現状把握するまでそうかからんそうだ。そんなでもって、日本政府はすでにこの収束点の案を持っている」

その収束点とは何か。もし一連の騒動が明るみに出れば第二王子の暴走、並びにそれを看過してしまった主流派の汚点になる。そして日本政府にとつても、せつかく友好的に関係を結び始めた縁に傷をつけるのは望ましくない。つまり――

「おたくの若いのが仕出かしたことは目を瞑りましょう。だからそちらも今回の一件を無かったことにしてください。端的に言えば、臭いものには蓋をしましょうということだ」

全てを無かったことにする。これは、ただ単に双方が今回の一件に対してノータッチでいることなどではない。ライルの仕出かした出来事を消し去る。それは文字通りそのような騒動が無かったことにすること。全力をもつて今回の事態の収束にあたり、そして関係している人間の口をつぐむ。

「……先輩の解放だけではなく、それを盾に強請をかける勢力をも黙殺するということですか」

「そういうことだ。あの役人は本気だぞ。日本側が問題にしないという最大の譲歩していることを良いことに、この件を全て揉み消すと言っていたよ。やはり政治の側にいる人間は怒らせないほうが良いな」

このまま順調に交渉が進めば、レイがライルの派閥に証人喚問をされているところとはおろか、このシンポジウムを不在としているという間違いのない事実さえも”事実”ではなくなるのだ。

「たとえ反対派の一部がレイの不在を理由に俺たちを糾弾しようが、それは誤りですのでもそちらの政府にもご確認下さいととぼければ良い。そのうえ、知らん人間が見たらま

ずレイと見間違えるようなそっくりさんを置いておけば、もうとりつく島もなくなるよ」

そこまで来てようやく、平塚先生がレシルちゃんをレイの替え玉として登用させようとした意図を理解した。いくらエルトニア王室との交渉で事態の揉み消しを図ろうが、シンポジウムの本番にレイ本人がいらないという状態だけはとうしようもない。ただレシルちゃんはその穴を埋めれば、今回の一件を知る人も知らない人も、”予定通りにシンポジウムが進行している”ことを否定出来なくなる。

「長くなつたがそんなところだ。レシルティア君、無茶苦茶で馬鹿げてると思うかも知れんが、引き受けてくれるかい？」

確かにこんな替え玉作戦なんて普通に考えればただの子供だました。でも下地の準備さえ完全に行えれば、立派な作戦になる。平塚先生に問われた彼女の返答は、悩む様子すらも見せずに頷き返すというものだった。

「勿論です。ボクの兄を演じきるなんて、ボクにしか出来ませんから」

彼女に課されたのは兄であるレイを取り戻すにあたり、レイ本人の救出ではなくその不在を埋める、いわばサポート的な役回りだ。普段のレイへの甘えぶりを見たら、直接兄の救出に行きたがるかとも予想はしていた。だけど今の彼女が浮かべている冷徹さも感じさせる険しい表情の通り、レシルちゃんは私が考えていたよりも余程冷静にこの

事態を俯瞰しているのだ。

これで、二つある対処すべき問題の1つについては方針が定まった。ならば次に話すべきはもうひとつの問題。今回の一件の切っ掛けにもなった、ライルによるレイの証人喚問についてだ。

「……藤沢には、もうひとつの問題にあたつてもらおうと考えている」

「先輩の奪還、ですね」

片方の役割がレシルちゃんである以上、私が担当するのは必然的にこちらがわの役回りだ。そしてただレイの身柄をどうにかして取り戻すことだけではなく、他のことに対しても注意を払う必要がある。言わば今回の一件を引き起こした総本山へと挑むのだから、ライルの考えていることについて把握をしておくべきだ。

「藤沢も、薄々はライル殿下の狙いは分かっているだろう。何故呼び出されたのがレイなのか。状況から考えて、彼は君の正体には気が付いてははずだ。なのに何故直接君を呼ばないのか」

平塚先生の言うとおりに、もうライルが私に何をやらせようとしているのかは何となく理解をしている。散々私の周囲に圧力をかけ続け、そして敢えて私ではなく一番近い場所にいるレイをまるで人質のように呼び出す。いや、”ように”なんかじゃなくレイはまさに人質”そのもの”だ。

「……ライルは、私が自分の意思で宮殿に向かうように、これまでずっとけしかけていたんです。そして、とうとうレイを人質にとった」

考えてみれば単純な話だった。彼が大学計画に口を出したのも、直接指名をせずに第二王女の搜索依頼を発令したのも、全てはこの私が私自身の意思でヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアであることを認めさせるための布石だったんだ。

エルトニアに戻ってきてからこれまで、あくまでも元王族ではなく一日本人の藤沢レナとして振る舞い続け、例えライルと顔を合わすような状況でもまるで関係のないように隠してきたつもりだった。彼は、ようやく見つけた探し人が、知らない人のふりをし続けている様をずっと見せつけられてきたんだ。その探し人は、例え周囲を揺すろうが呼び戻そうが、いつまでたつても戻ってこなかった。今のライルは、他人のふりをし続ける姉を取り戻すために、最後の手を打ったということだ。

「彼の真の狙いなんて、ある程度状況を聞いたら難なく予想できる。だがレイは多分そこまで行き着かなかつたんだろう。もしそのことを分かっていたら、俺達に相談も無しにノコノコと出ていかんよ」

それは何故だと思うか。言葉には出さなかつたけど、平塚先生は見極めるようにこちらを伺っていた。

これまで、私は様々なプレッシャーを与えられながらも、良くも悪くもそれに流され

ずここまで一般の日本人大学院生として過ごすことが出来ていた。無論、それはただ私
が耐えきったという訳だけじゃないのは分かつてる。似たような境遇にありながら、毎
日近くで見守ってくれた存在があつたからというほうが余程大きいのだ。

レイは、同じエルトニア出身という立場で私を時に見守り、時には直接的にライルか
らの圧力の盾になつてくれた。そんな日々を過ごしていく中で、私は今までそれに甘え
てきて、彼もそれをいつ頃か自身の役回りと捉えていたのではないか。

「……奴は、藤沢を庇うことに気をとられ過ぎてたんだ。アイツが出ていく前に何て
言つたと思う？ この件は藤沢には伝えるな。余計な心配はかけたくないだとき」

それを聞かされて、私の内心は彼にそこまで大事にされていたという嬉しきよりも、
何故レイ自身が背負い込んでしまうのかという憤りのほうが大きく感じられた。

「俺に言わせれば、完全に己がやるべき範疇を超えている。確かに年長者が若い奴の尻
拭いをするにはある。だが、全てを引き受けていたらそいつの成長はない」

顔をしかめて頭をふつた先生が、銀縁眼鏡の奥から視線を投げて寄越す。

「藤沢の出自は確かにどうしようもない問題かもしれないが、これから少なくとも二年は
このエルトニアで過ごすことになる。お前自身の問題に、指導教員である俺はおろかレ
イですら直接何かをしてやれることはない。勿論助言や相談なら乗るが、最後に駒を進
めるのは結局君自信でしかないんだ」

そう、先生の言うことなんて本当は当の昔に理解はしていた。繋がりの切れた世界と、再び考えてもいなかっただ形で向き合う。人の縁は、細く長くなることはあれどそうそう切れやしない。いつの日か、レイのようにこちらの世界に置いてきた縁と正面切つて決着を着けなければならぬ。

「レイは、もう切れた縁だと口では言いながらも自分から進んで家族とのわだかまりに決着をつけた。レシルティア君だって、俺達の助力は借りながらも徐々に他人とのかわり合いが改善しているようじゃないか」

いつのまにか、レイはおろかレシルティアちゃんにまで先を越されていたようだ。いきなり名前を出されておろおろとした様子の彼女の姿で、少しだけ毒気を抜かれるように感じた。

「次は藤沢、君の番だよ。向こうの意図に乗るよう気で食わんが、あの人騒がせの殿下の元に行つて決着をつけてこい。お前が出張らなければ、彼は止まらん」

もう甘えられる相手もない。いや、むしろその相手は今敵に捕らわれているようなものだ。今まで散々頼っていた人を、今度は私自身が助けにいくだなんて、なんて王道なお話だろう。無言で頷き返すと、平塚先生はその引き締まった表情をようやく崩して苦笑いを浮かべていた。

「……それと、あの小僧の尻をひっぱたいて、首根っこ掴んで連れてきてくれ」

「小僧って……先輩のことですか？」

平塚先生のいう小僧とは、今までの話の流れからしておそらくレイのことだろう。しかし先生が今まで彼をそのような呼び名で呼んだことはなく、若干の違和感を感じる。「ああ、アイツは小僧だ。例えば20と少しの記憶が上乘せされたとはいえ、結局は見た目の通りな17のガキなんだよ。本人は意図的に気が付いていない風を装っているんだろうが、考え方も行動も、俺なんかよりもずっと若い」

「……少し意外です。先生こそ、先輩を同じ目線の存在と捉えていると思ってきましたから」

先生の苦笑いからは、決してレイを見下すような意図は感じられない。むしろ私たちがエルトニアに帰るなんて知らなかった頃、もう決して会うことの出来ない妹さんのことを話していたレイのような、穏和な雰囲気が見てとれる。

先生とレイの関係性を把握していないレシルちゃんは、そんな平塚先生を不思議そうな様子で見つめていた。そりゃそうだ。彼女にとって、平塚先生はレイにとつてただの教員に過ぎない。

「……というわけで、詳しい手筈は例の役人から追って伝えられる。それまで藤沢は、レシルティア君をなるべくレイっぽく見せるような工夫をしてくれ。今のままでは流石にいかん」

仕切り直しとばかりに、彼は手をばん、とうちならした。まだ自分自身が具体的に何をするのかははっきりとはしないが、少なくとも先生の発破のおかげで気合いは十分だ。

そして平塚先生の視線を追い、レシルちゃんへの視線を向ける。改めて彼女の全身像を見直してみるが、まあ概ね先生の意見に同意だ。確かに顔立ちその他諸々がレイの生き写しとはいえ、彼は決して騎士学園用の女子制服には袖を通していない。不思議そうに首を傾げる制服姿の彼女を、どうにかしてレイのような格好に仕立てあげる必要がある。

「向こうから連絡があつたら知らせるから、携帯は生かしておけよ。では、一端解散!!」
その言葉と共に、彼はいそいそと立ち上がって足早に歩き去っていった。ただでさえ過負荷な状態でありながら私の問題にも関わっているのだから、せめて川崎さんの連絡が入る前に可能な限り仕事を片付けておこうということだろう。

そして私は、レシルちゃんの手を引いて先生とは逆の方向へと歩き出す。時おり向けられる他のメンバーからの視線は極力見なかったことにして、足早に玄関ホールを抜けていく。向かうはこの研究棟の外、寮にあるレイの部屋だ。

第十二話 「決着!! 王女の凱旋」

その1

「……」が今の兄さんの部屋なんですか。前のよりも、ずっと広いですね」

レシルちゃんの手を引いて走り出すこと僅か、研究棟に隣接している日本人寮にある目的の部屋に着いたのはあつという間だった。そうとう切羽詰まっていたのだろうか、レイの部屋は鍵がかかってないどころか完全に扉が開け放たれた状態で放置をされていた。いつもであれば不用心だと感じるところだけど、場合によっては扉そのものを丸ごと破壊することも視野にいれていたから幸いだ。

とりあえず部屋の内装を興味深げに観察する彼女をレイのベッドに座らせて、彼のクローゼットをのぞきこむ。平塚先生からの指令は、レシルちゃんをレイつぼく見せるような格好に仕立てることだ。要は、今朝最後に見かけたときのレイのような、男性用のスーツを着せるということである。

以前彼に聞いた着る機会はほとんど無いけど二着目のスーツを買ったよという無駄話が、まさか今日この機会に効いてくるとは思いもしなかった。

「よし、あつた!!」

多分同年代の男性と比べてもこざっぱりした服の少なさのおかげで、目当てのものはすぐに見つけることができた。皺がはいるところか購入して以降着たかどうかも疑わしいくらいに真新しい、一着の男性用スーツ。すぐ近くには予備のネクタイや未開封のワイシャツまで揃えてある。

「レイと貴女は胸以外体型が概ね同じだから、多分サイズは大丈夫だと思う。まずはシャツだけでも着替えてみて貰えるかしら」

「ええと、うん。分かりました」

ビニール包装から取り出したばかりのシャツを手渡すと、レシルちゃんはそれを不思議そうに触ったり、クンクンと匂いを嗅いでみたりしている。クローゼットの奥から引っ張り出したとはいえ未着の新品そのものだから、まず彼の残り香なんてあるわけではない。やがて満足したのか、それを脇に置くと彼女は自分の制服へと指をかけた。

「肩幅とかも見た感じじゃほとんど変わらないし、問題は胸のあたりかしら……っ!」
「どうしたんですか?」

視界の脇で露になる上半身だけ裸のレシルちゃんに、思わず視線を外す。「なんでもないわ」と誤魔化しつつも、内心は言葉とは裏腹に少々乱れていた。

彼女の容姿は同性からみても魅力を放つような代物ではあるが、それ以上に私にとつてレシルちゃんのその姿はとあるものを連想させてしまう。性差というものをどっか

に置き忘れたこの兄妹は、意識をしていないと本当に同一人物のように見えるのだ。レシルちゃんではなく、まるでレイが服を脱ぎかけているような錯覚を空見し、その幻影を頭から追い出すべくブンブンと首を振る。

精々レイと彼女で違うのは胸の膨らみ、その一点につきる。ということは、その一点に注意をすればこんな幻影に悩まされずに済むのではないか。冷静に考えてみれば非常に危ない人間の思考だけど、この際仕方がない。

「……ボクの胸、なにかありますか？」

「え、ええとね……いや、レシルちゃんは脱いだら結構大きいのねーつと」

言ってから後悔した。作り笑いを浮かべて咄嗟に出た言葉がこれか。貴女のお兄さんの半裸を妄想してましたと本音を吐くよりかはいくらかマシでもこれはないだろう。案の定、少し引いたような視線の彼女に、今の言葉は無いなと思いつつた。

「大丈夫？ 苦しかったら言ってね」

シャツは勿論のこと、パンツの丈やウエストの広さに至るまで、まるでレシルちゃんに合わせたかのようなスーツのサイズだった。最後の締めとして落ち着いたデザインネクタイをしめれば、仕立て作業も完了だ。流石にネクタイの着用までは一人で出来ないだろうから、そこだけは私が手伝うこととなった。

「よしつ、完成!! 鏡を見てみましょうよ」

彼女の手を引いて、クローゼットの扉の裏にある鏡の前に立つ。その鏡のなかでこちらを不思議そうに眺める姿は、今朝に見たレイとまるで同一人物かと思うほどの仕上がりがりだ。お世辞にもスーツが似合っているかと問われれば疑問符がつくけど、それはトレース元と同様だから問題ない。スーツ自体がやや余裕を持ったサイズ感のため、多少の体の線の違いも一見すれば分からない。

「なんか不思議な格好ですね。着やすいわけでも、特段動きやすいわけでもないですし」
「公的な場での服装よ。こつちでいうところの礼装に近いかしら。あとは……そうね、髪の毛を誤魔化しましょうか」

背中の中頃までなめらかに伸びた、銀色の長髪。髪の毛を適度に短くまとめたレイとは決定的に違う点である。他の要素がばっちりなだけに、髪型の不一致は非常に目立つ。まあ適度にまとめあげてなびかせなければ、最低限は良しとしよう。

「私の部屋からブラシと髪ゴムを持つてくるから、少し待つて——つてちよつ、貴女何やってんの!?!」

普段使いの髪の毛セットを持つてこようとした瞬間に、彼女が手に持つていたものを目にして慌てて駆け寄ろうとする。右手で自身の髪の毛を纏めて持ち、左手であろうことか白い靄を立ちこませる水の剣を銀髪の中頃辺りに容赦なく刃を入れていく。止め

る間もなくバツサリと切り落とした髪の毛を無感情に眺めたレシルちゃんは、何かを思いついたようにこちらに視線を向けた。

「すみません。くずかごってどこにありますか?」

「屑入れはどこかじゃないでしょッ!! ああもう、こんなばつさりやつちやつて」

彼女の頭の右側は、レイと同じくらいの長さまで乱雑に切り取られてしまった。髪の毛は女の命だなんて格言までできるくらいに、彼女の銀髪は重要なもののはずだった。それを無造作に切り落としただけではなく、不要なごみと言い張るレシルちゃんに焦りと驚きを感じる。しかしそんな私の様子とは裏腹に、彼女は何事もないかのように、そして冷たさすらも感じさせる冷静な様子でこちらの顔を覗き込んだ。

「この髪型だと兄さんに成り代わるなんて無理でしょう。こんなもの、兄さんを取り戻すためだったら要りません。平塚礼二の言った作戦がいくら無茶苦茶でも、私は本気で取り組みます。レナさんはどうなんですか?」

握り締めていた銀の長髪を座っていたベッドの上に置き、今度は左側の長髪を握り締めながら彼女はそう問いかけた。今までレシルティアという人間の象徴の一つであった長い髪の毛を容赦なく切り捨て、それを「こんなもの」と言い張るくらいの覚悟が彼女にはある。レイを絶対に取り戻してやるんだという、確固たる意志だ。ならば私はどうなのか。別働でレイの不在をごまかす側の彼女がここまで覚悟を固めているのに、実

働で彼を取り戻しに王宮へ乗り込む私に、そこまでの覚悟が無いだなんて絶対に言わせない。

「……この部屋に、貴女の大量の髪の毛を仕舞い切るほどのくずかごは無いわ。だから私が処理してあげる」

ベッドの上に無造作に置かれた彼女の切り落とされた銀髪束をつかみ取り、目の前でそれを力強く握りしめる。ここ数日の休息で、十分すぎるくらいに私の力は元に戻った。これからのことを思えば、今からやることなんてほんの肩慣らしでしかない。

魔力を送り込むと共に握りこぶしを起点にして一気に炎が巻き起こり、銀髪を微塵の煤へと変えていく。絹のようになめらかだった原型を欠片も残さず、熱波に煽られた銀髪の前まで紅い炎が見る間に覆いつくした。私が手を開くとともに炎や熱は嘘のように消え去り、残ったのは毛髪が燃えた時特有の嫌な臭いだけだ。

「流石に全部を燃やしたら臭いも半端じゃないわ。せめて窓を開けたりしましょうか」
なるべく平常を保ちながら、僅かに残る煤を払落して窓の取っ手に指を掛ける。しかし内心では、正直なところあまり穏やかではなかった。彼女の覚悟に因應べく、の行動ではあったけど、その内容は切り取られた後とはいえ年頃の少女の髪の毛を跡形もなく燃やすというものだ。

「……ボクじゃ髪の毛を兄さんっぽく切りそろえるのは難しいです。手伝ってもらえま

すか？」

「そうね……構わないわ。でも私もそこまで自信は無いわよ」

自分がやるよりもよっぽど良いですと言いつつ彼女は何事も無かったように笑顔を浮かべていた。現地に赴けないレシルちゃん自分が自分を見失わなくらいにしっかりと知っているんだから、私も自分を持ち続けなければならない。その一見して穏やかに見える彼女の姿が、今はとても頼りがいのある眩しい存在に見えてならなかった。

* * *

「役人からもう行けるよう準備をしとけって言われたんだが……まだ車も来ちゃいないな」

平塚先生からの連絡が来たからレシルちゃんを引き連れて噴水広場近くに来てみたら、先生は携帯電話を片手に周囲を見回していた。彼の言う通り、周辺には迎えの車はおろか大月との連絡バスの姿も無い。しかし川崎さんからの連絡があつたということは、もうそろそろ迎えが来るといふことだろう。

「……本当に、レシルティア君はレイとそっくりだな。髪の毛まで整えると違いが本当に分からんな」

先生は私と並んで立つレシルちゃんに視線を向けた。今の彼女は、全身をスーツ姿に包んで予備の革靴を履き、更に髪の毛も中ほどまで切りそろえた、端的に言つてレイとまるで同じ姿をしていた。レイと異なる点を述べよと言われれば、精々身にまとう雰囲気、平塚先生の眼前ということもあつて令嬢モードになつてゐることくらいだ。ここまで見た感じがそっくりなのだから、大学側の研究者はまず彼女が成り代わつてゐることには気が付かないだろう。

とりあえずレシルちゃんの方は順調として、今度は私の番だ。予定では川崎さんが手配した車で王都の方へと移動して、速やかに王宮へ突入することとなつてゐる。どのような手段で嚴重な王宮の正門を突破するのは知らされてゐないけど、たぶんそこらへんの細かなことは追々話すということだろう。何なら、今の私は勢いで正門突入することも吝かではない。

しかしどんなに覚悟を決めようが、そもそも現地に到着しなければ話にはならない。もう一時間もすれば正午近くということで商業苦から学園区にかけての人通りは非常に多くなり、いつそ自力で走つた方が早いのではないかというくらいに混雑しかねない。図体の大きな車で移動となると渋滞に巻き込まれて結構な時間がかかることだろう。

「……遅いな。もう一回向こうに電話するか」

もしかしたら私の予想した渋滞に既に車が巻き込まれているのかもしれないが、結局待っているしかないことには変わらないのだから電話をしてもしようがないはずだ。しかしややせつかちのきらいがある先生は、舌打ち一つと共に携帯電話のボタンに目を向けた。

「チツ……電話かけてるつてのに煩いな」

先生の言う通り、噴水広場の静けさを遠方から聞こえるヘリコプターの羽音がかき消していく。何かの事件があれば取材のヘリがやかましく飛び回るが、今はそれ以上である。電話をしようとしても、この調子であれば向こうからの通話なんて一切聞こえやしないだろう。

「——あ、もしもし平塚です。現在広場にて待機をしていますが、今送迎の車は一体、何処……え、ヘリ？」

片耳に指を突っ込んでつながった電話口に問い詰めようとしていた先生が、段々と勢いがしぼんでいく。それと同時に、私もそもそ何でこんなヘリコプターの騒音がエルトニアの大地に鳴り響いているんだという根本的な疑問を覚えた。うちの国は、こんなローターで空を飛ぶ機会を開発したなんて実績は持っていない。

「れ、レナさん……なんか、変なのが降りてきます」

若干怯えた様子で頭上を指さすレシルちゃんの言葉すらもかき消す勢いで、ヘリコプ

ターの騒音が一段と大きくなる。それと同時に平塚先生は私たちの手を掴んで広場の隅へと走り出した。

「お前らっ、いったん避難だ!! アイツここに着陸しようとしているぞ!!」

決して広いとは言えない広場にあんなものが降りてくる。エルトニアの街並みを走るマイクロバスという構図も大概だったけど、由緒ある学園の一面に降り立つヘリコプターという絵ずらはそれはもうミスマツチも甚だしいものだろう。

髪の毛を容赦なく揺さぶる強い風が吹きつけ、私たちの視線の先にととうとう一機のヘリコプターが着陸するまでに至った。強風の中顔を抑えながらも胴体を垣間見ると「山梨県警察」という文字が踊り、その胴体の扉が開けられた。

「山梨県警大月ゲート警備隊、航空隊到着しました!! 藤沢レナさんは貴女ですか!!」

すぐさま駆け寄ってくる一人の屈強な警察の隊員さんに、ギョツとしながら唯々首を縦に振った。たぶんSPみたいな人が迎えに来るのかもなとは思っていたけど、まさかヘリコプターで来るだなんて予想は出来なかった。そもそもエルトニアの国内で日本の警察隊がヘリを飛ばすとなると何かしらの手続きが必要になるはずなんだけどという疑問も置き去りにして、彼は私の手を掴んだ。

「それでは王宮までお送りします。お乗りください」

「あ、はい……つと、その前に少し時間を下さい」

流れるままにヘリへ乗りそうになったが、最後に少しだけ言い残しておきたいことがある。後ろを振り返り、未だ目を白黒させているレシルちゃんに向けて声を掛けた。

「レシルちゃん!! 私、絶対レイを連れて帰ってくるからね!!」

「……レナさん、どうかご無事で。ボクも自分の務めをちゃんと果たします」

最後に一言の挨拶を交わしたレシルちゃんが、平塚先生と共に足早に研究棟へと戻っていく。その後ろ姿を見送った私は、隊員の案内に従うまま生まれて初めて乗り込むこととなるヘリコプターのタラップに足を掛けた。

その2

『エルトニア宮殿、正門前広場上空に到着。これより着陸態勢に入る』

騒音防止用の特殊なヘッドセットを着けて、ヘリコプターでエルトニアの空を行く一時。眼下に見る街並みは間違いなくエルトニアのものはずなのに、視点が違うだけでこうも違和感を覚えるとは不思議なものだ。エルトニアキャンパスから王宮に向かうためには、本来であれば学区区から中心街の方に出て大通りに入らなければいけない。しかしそのような煩雑な道順はおろか、正午が近くなり混雑している各通りすらも全て無視した空路を使えば、目的地上空にたどり着くのは本当にあつという間の話だった。「……とうとう来てしまったのね」

自分の声なんてヘリのローター音にかき消されてしまつてほとんど耳に入つてこない。でも眼下から段々と自身の目に飛び込んでくる光景を目の当たりにしたら、そう漏らさずにはいられなかった。

王都リーヴェルの中心地区の更に中央を占有する、城壁と鉄の柵で周囲を覆われた巨大な一区画。百年を優に超える歴史を持った王政国家、その中枢が存在するエルトニア宮殿だ。そして嘘偽りなくその王族の一人である私にとっては、生まれ育つた場所と

言つて差し支えはない。

ただの血族ではなく、たとえ順位は優勢では無くとも正式に王位継承権が与えられた正統一族にいた私は、その政治的な価値の大きさからか基本的に嚴重な警護の元にした。だから幼少期は外遊を除けば宮殿の中で過ごすことが多く、こうやつて王宮の姿を正門の外から眺めるなんて案外経験はないのだ。

『着陸完了を確認。健闘をお祈りします』

そんな見慣れていないにも関わらず幼少期を思い起こさせる外観は、現在混沌とした様相を呈している。開け放たれたヘリコプターの乗降口、そこから見える正門の前には二つの勢力が存在していた。ヘリコプターの胴体と同じく「山梨県警察」と背中に書かれた複数人の機動隊員と、それと相対しているエルトニア宮殿の警備衛士隊。まず経験したことのないであろうヘリの風やら騒音が直撃している後者の面々は、こちらに視線を向けて目を白黒させている始末だ。

「こ、今度は何だア!?!」

衛士たちの最前列で吹き付ける風を防ぐべく顔を手で覆った一人の兵士が、こちらを見てそう叫んだ。ようやくここまで乗り込んできたのだという興奮の傍らで、そりやあそういう反応が返ってくるよねと頭の中の冷静な部分が淡々と判断する。こつちの世界で空を飛ぶ大きな物体なんて人里にはまず姿を現さないとと言われる竜種くらいしか

存在しないし、その上ヘリコプター自体の奇怪なフォルムも合わさり、まさに彼らの前に表れた存在は理解の範疇を簡単に超えているのだろう。

「藤沢さん、お待ちしておりました!!」

そんな状況の中、降り立った私に真っ先に駆け寄ってきたのは、今回の一件をバックでサポートしている外務省役人の川崎さんだ。今しがた何処かに電話をかけていたのだろうか、片耳に指を突っ込んでもう片方の耳に携帯電話を押し付けていた。

「……すみません。私の出自と行動がここまで事態をややこしくしてしまい……」

「過ぎたことはしようがありません。今は別の事に、そう平塚さんの可及的速やかな奪還に注力しましょう」

そのまま彼に手を引かれるがまま、衛士たちと向かい合うように展開した機動隊員の後方で立ち止まった。今だ声も何もかき消すほどのローター音が背後から鳴り響く中、どさくさに紛れてカツラが飛んでいかないように頭を押さえつけながら川崎さんと相対する。私の役目は、この宮殿に突入してレイを連れて帰ること。彼の言う通り、これまでの自身の立ち振る舞いを後悔するのは少なくとも今ではない。自然と握り締めたこぶしに力が入る。

機動隊員の列に切れ目が入り、その間をゆっくりと歩みを進める。正面に見えるのは、こちらを警戒する衛士の人たちとその奥に聳えるエルトニア宮殿の荘厳な正門だ。

彼らを突破し、その奥の正門すらも突破する。私は、そのためにここへ呼ばれたんだ。「平塚さんには緊急用として小型無線機を預けていますが、内部の状況は依然不明です。我々は突入準備及び王室の他の勢力に話を通して、最中ですが……お気持ちを考えると非常に心苦しいのですが、藤沢さんの正体をこの場で明かすのが一番スムーズに事が進むと思われませう」

川崎さんの言う通り、私の正体はこの状況ではひときわ大きな武器になる。エルトニアの王室を護るといふ使命を持った彼らを押し通すには、私が第二王女であるという事実が一番効率のいい突破方法だ。彼らが果たして私の言うことを信じるかはさておき、機動隊が正面から強行突破よりはよほど日本とエルトニア間の亀裂が少ないには違いない。

「ライル殿下の狙いは、間違いなく貴女の奪還です。だから本当ならば藤沢さんをそのまま差し出すなど愚行も良いところです。しかし可能な限り早く殿下に相対しなければ、現在進行中のファンタステック・アカデミーへの妨害行為を阻止できない……最終的な意思の確認です。我々にご協力頂けますか」

彼の問いを、数秒の思考も無しにしつかりと頷いた。既に平塚先生との話し合いによつて、すでに私の意志は固められている。何としてでも自分の生まれと愚弟にしつかりと向かい合い、そしてあの銀髪頭に真正面から言いたい放題言つてやるんだから。

川崎さんとしても、この問いかけは形式的な意味合いが強かったのだろう。私の肯定を受け取った直後から、具体的な計画について聞かされた。私が突入してから問題の収束にあたるまで、本当に達成できるのかどうか不明瞭な箇所もいくらかは存在している。しかし今は、唯一の砦である彼ないしは外務省を信じるほかはない。

「最後に一つ。この件で、貴女の立場は今までのままではいられなくなる。藤沢さんは、この先の立ち振舞いを、どのようにしたいのですか？」

そして、これが私の最大の選択になる。いままで見ないふりをしてきた私自身のこれからについて。もうこの問いから逃げることは出来ないし、逃げるつもりもない。何故ならその答えは本当はずっと昔に決まっただけで、今までそれを口に出す度胸が無かっただけなのだから。

「そんなもの、決まっています。私は——」

私の返答を、彼はただ黙って聞き、そしてゆっくりと頷いた。賛成することも、反対することも無い。外務省の役人である川崎さんの仕事はあくまでこのいざこざをスムーズに解決することだけで、私の決断についてもその是非を問うのではなく道すがらをセツティングする立場に過ぎないからだ。

そうだ。自分は関係ないからなんて風を装いながらも、まるで私のことを自分の問題のように悩み、そして気が付いたら一緒に首をかしげあうような彼とは違う。私は、人

生最大の決断をおそらくその彼の前で行うことになる。レイならば、私の決定をどう見るかな。早とちりだとたしなめるか、それとも英断だと誉めてくれるかな。でもそのどちらであろうと、私は胸を張って彼に宣言するのだ。私も、あなたと同じようにこの世界へ一つの決着をつけたらだ。

「……それでは状況を開始しましょう——今しがた、本件の重要参考人が到着しました。ライル殿下へのお目通りをお願いします」

機動隊員の前方に歩き出し、声高に川崎さんが衛士たちの隊長格へと宣言をした。未だヘリコプターの姿に警戒心を隠そうともしない相手方の一団が、川崎さんの姿を鋭く睨みつける。

「王宮の御前に貴国の部隊を展開するに飽き足らず、そのような摩訶不思議な飛行機械を持ち出し、その上殿下に身元も分からぬ者の謁見を申し出るとは!! カワサキ殿、いくら貴君が二ホン国の大使であろうと限度があるぞ!!」

向こうの隊長はそんな川崎さんの言葉をにべもなく跳ね返す。確かにこのにらみ合ひの中で、友好的に私の謁見が認められるわけも無い。しかし彼らがいくら反対をしようが、私はこの門の向こうにいかなければならない。いや、もはやここを突破するのは決定事項なのだ。

「そうですか。確かに詳細を話さなかった我々に非がありますね。ですが彼女は——」

私を全面に押し出していざその正体を明かそうとした川崎さんを、少し強い調子で見つめる。この先は私がやる。あなたが対応するのはここまでだ。視線にそんな意図を含ませて見ると、それを汲んだのだろうか彼は一瞬だけやれやれという様子で息を吐き、その直後にイヤに芝居染みて仰々しく頭を下げてきた。

「——そうですね。ここは私が出張るところではありませんか、殿下」

敢えて目立つように、私に対してふかぶかと頭を下げ、そして向こうにぎりぎり聞かえているかという音量で「殿下」と口ずさむ。その明らかな態度の変化に、向こうの一団もいぶかしむような様子を見せてきた。この瞬間から、私の王族復帰は始まっているのだ。もう、肩書も無いただの大学院生への後戻りなんか出来ない。

「……………」までの案内、感謝します。エルトニアの兵士の皆様、再度お願いします。エルトニア王国第二王子、ライル・フランシス・エルトニアへの面会を希望します」

私は今この瞬間から、自分の在り方を今までの物とは変えるのだ。徐々に近づく私の姿に、衛士たちは一層警戒心を強めたのだろう。部隊の面々がここは通さないとばかりに槍を斜めに構え、そして私の姿を鋭く見据える。無理やりに昂らせた己の心は眼前の光景に対して、高々二十歳にも満たない未成年の女一人に随分と嚴重なものだなど、すごく偉そうな感想を抱いていた。そんな謎の精神的な余裕のおかげで、たぶん私の表情は妙に大物っぽい顔になっているんだろう。

「と、止まらんかッ!! 二ホン国大使ならばまだしも、一般市民の貴様が殿下に謁見しうなど、身の程を弁え——」

衛士の言葉を遮るように、ひと際強い風が背後から吹き付けてきた。ヘリコプターが一時的にここを離れるために飛びたつたのだろうけど、すごくいいタイミングで風が沸き起こってくれた。容赦なく襲い掛かる突風、そしてそれに呼応して舞い上がる自分の物ではない髪の毛。耐えきれなくなつて頭から飛ばされた瞬間に、私はそのカツラをかみ取つた。

「へえ……一般市民ね」

見せつけるように、肩口に触れた己の髪の毛を片手で払う。視界の端には、これまでキャンパスの外ではまず他人に見せることなんて無かつた赤紫色の髪の毛が映る。現代日本はもちろんのこと、ファンタジーな髪の毛の色が溢れかえるリーヴェルの街並みでもある一例を除いて唯一見かけることの無い特徴的な色合いだ。

「もう一度言います。ライル・フランシス・エルトニアへの面会——いや違うわね」

右手に掴む黒髪のカツラ。これまでの数か月間、これには随分とお世話になった。だからこそ、今からやることはすごく心苦しいけどパフォーマンズにはこれほどの物もない。王の血族は、赤紫の特徴的な髪色と共に、卓越した炎系統の魔術を操る。この国の国民であれば、大体知っているような当たり前の知識だ。

今まで十年以上魔法というものを扱ってこなかったとはいえ、私もやはり王家の一員なのだ。たった数日間、誰にも気が付かれぬようなこじんまりとした鍛練であつても、手に持った小物を焼き付くすなど造作もない。

出力を最大限にして送り込んだ魔力は、握り締めたカツラを瞬時に炎の中に包み込んだ。風に吹かれてなびく私の髪を一樣に驚いた様子で見つめる衛士に見せつけるように、私の体なんて容易に包み込むほどの大きな紅い炎が天に伸びる。しかしその炎は発動者を蝕むなんてことも無く、ひと際大きく輝いたかと思えばこぶしを握り締めると共に弾けるように立ち消え、もはや手や袖口に一片の痕跡や燃え滓も残さない。

「あ、貴女様は……」

「あの愚弟に言いたいことがあります。だからここを通しなさい。十数年ぶりに帰ってきた第二王女ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアを、わざわざここで足止めする理由も無いでしょう？」

呆然とした様子でこちらに視線を向ける衛士に、私は努めて平静な様子でそう問いかけた。

その3

自由の効かない手首と足首が痺れ、無理矢理に曲げた首も鈍痛を訴えかける。人の歩く音や何かしらの機械の動く音もない静かだった空間には、時おり風が窓ガラスを叩く無機質な響きだけが聞こえていた。人けがないとはまさにこの事を言うのだろう。まるで時が停滞したような空間にて、身動きできない僕に出来ることは、ただこの一連の事態を引き起こした元凶を見つめることだけだ。

第二王女が戻ってくる。そう言い切った彼は、妄執と確信の真ん中でただただ彼女がここに来ることを待ち望んでいるのだ。にわかには聞こえてきた、日本という異物を除けばこの世界ではまず鳴り響くことのない羽音が、彼の望むべく結末が間違いなく近づいていることを示している。これでは彼の思うがままだ、そう叫ぼうにも伝えるべき相手は今ここにはいない。未だ両手足の自由を奪われ、そして縛り付けられた椅子と共に横倒しにされた現状では、何かしらの行動を起こすこともままならない。唯一出来るのは、腕時計のように偽装された小型発信器を作動させること。しかし作動させたが最後、この部屋に目掛けて機動隊員が駆けつける代物であるこれは、もはや背水の策だ。否応にも鋭敏になった聴覚が、ヘリコプターと思われる羽音が段々と小さくなるのを

感じとる。高々僕一人の輸送と護衛に機動隊を持ち出した時から川崎さんのともすれば不可解とも言える本気度は感じてはいた。そしてその上王都リーヴエル上空にヘリコプターを飛ばすだなんて、本気を通り越してエルトニアへの立派な示威行為に他ならない。そのヘリの音がだんだんと遠ざかっていくということは、彼らの任務である何かの輸送が完了したのだろう。こんな面倒な事柄に、わざわざヘリを召喚してまで速やかに送り届けたいような人員なんて、僕にはたったの一人しか思いつかない。

「不思議なものだな。あれだけ焦がれたものなのに、いざ目の前にしても実感も湧かない」

彼もどうやら感じ取ったのだろう。僕があの手この手を尽くして矢面に立たないようにしてきた藤沢さんが、エルトニア宮殿に来てしまったことを。覚悟を決めたのか、それとも何かに迫られたような切羽詰まった行動なのか、それは僕には分からない。しかし唯一の事実として、事はライル殿下の望みに沿うように進んでいる。

果たして彼女は、衛士の人たちに両脇を固められながら連行されてくるのか、それとも形だけは自由な風なのだろうか。なんたって、ここはこの国において最高の警備態勢を誇る地だ。たとえ藤沢さんであろうと嚴重な監視下での対応になるのだろう。だが、そんなことを考えていた僕は、彼女の事を何も分かつてはいなかったのだ。

「……来たか。どうした、不満そうだな。その視線の鋭さなんか、まるでお前の妹のよう

じゃないか。仮にも元国民だろう。王女の凱旋くらい笑顔で見届けたらどうだ」

部屋の外から聞こえる幾つかの足音を耳にしたライル殿下は、その笑みを深いものにした。未だ横倒れで何もできやしない僕を嘲るようにゆつくりとそう話す。決して大きな音とは言えないその足音が止まるのに、そう時間は掛からなかった。

「では見せてやろう。彼女こそが、このエルトニア王国の正統な第二王女、ヘレナ——」
『——おかしいわね。鍵でもかかってんのかしら、開かないわ』

扉に近づき、高らかにそう宣言しようとした彼を、その扉の外から聞こえてきた思わず気が抜けてしまうような言葉が遮った。確かに彼が第三者の介入を嫌ったのか、荘厳な扉には取っ手に止め棒が差し込んである。その扉が外側から軽く押されているようにだけ、棒が邪魔をして少し動いたところで止まってしまっているようだ。だから開かないことは確かに事実ではある。だけど、それを何の気なしに君が指摘をするかなあ。

部屋の中に微妙な空気が広がった。外から聞こえてきた声は、散々話題になつていた藤沢さんに間違いはない。ないのだけれども、その雰囲気があからさまに予想をしていたものとは大分様相が違っているのだ。何時かは向き合わなければならぬ己の過去と否応にも向き合わされている決戦前夜のようにには到底思えず、むしろ普段の軽い様子を空見させるほどだ。ライル殿下としても、やや予想していたものとは違っていたのだろうか。怪訝そうな様子を見せつつも、とりあえずということでの止め棒を取り除こ

うと動いた時だった。

『まあ電子ロックとかの破損したら不味い代物でも無いでしょう。ちやつちやと開けるか』

小さくても頑丈そうな扉の取っ手や止め棒のことだ、腕で押したところでどうにかなるようなものでもない。なのにさも何の障害すらも感じませんよと言わんばかりに壊すやら開けると宣った外からの声の主に、疑問に思う以上にとでも嫌な予感が過る。腕で押しても開かないし、体全体でタツクルしたところでたかが知れている。そんな堅牢な扉をどうにかするには、力に頼つても仕方がないのだ。ならばどうするか。正解は多分一つだけ。

『扉の目の前の誰かさん。そこにいると危ないから離れていなさい——喰らい尽くせ、ブレイズツ、サーペント!!』

ライル殿下が扉の前から飛び退くのと、巨大な扉の至るところをいくつもの楔状の炎塊がぶち抜いたのはほとんど同時だった。楔に続いて噴出した紅の鎖たちが、サーペントという文言に負けぬ勢いで蠢きながら重厚なはずの扉に四方八方から絡み付く。器用なことには少しの火炎で簡単に焦げ跡が付きそうな絨毯には掠りもせず、未だ枠にはまったままの重厚な木製の扉だけが炎に蝕まれる異様な光景だ。

高々ただの止め棒で開かないようにされていただけなのに幾多もの炎の鎖に貪られ

ている扉のなれの果て。驚いた様子でありながらも、全ての炎が掠りもしていないライル殿下。加えて、そんな突発的な情報量の多すぎる空間から物理的に目をそらすことが出来ない僕。理解が追い付かないとは、まさにこのことだ。そしてそんなことをやらかしてくれた張本人は、ボロボロと崩れ落ちた扉の外からこちらを見据えていた。

「ああ、いた。案外探し人もすぐに見つかるものね」

彼女が軽く腕を振るうとともにいくつかに寸断された扉の破片に燻っていた炎が立ち消えた。瞬間的な鎮火、でも藤沢さん本人はむしろ爆発炎上一步手前という雰囲気だ。再会しての第一歩を思い切りくじかれたライル殿下を剣呑に見つめ、そしてその後方で椅子と一緒に倒れたままの僕へと視線を向ける。

「……レイには後でたくさん言いたいことがあるから」

逃げるなよと釘をさされたのだろうけど、たとえ逃げたくともこんな状況じゃ動くことすらままならん。そう視線で訴えかけたのが功を奏したか、藤沢さんが僕の方へ向けて小さく手を払うと共に、その手の先から細長い炎の鎖が真っ先に向かつてきた。一瞬だけ身構えるも、その鎖はつい先ほどとても値段の高そうな重厚な扉を消し炭にしたものよりもずっと規模が小さい。器用なことに、その炎鎖は足首と手首を固定していた革紐のみを焼き切った。

あれほどエルトニア王家に関わることを危惧してというのにこの変貌とは、何か

あつたのではないか。それに、いつの間にかこんなレベルの魔法を扱えるようになったんだ。聞きたいことはたくさんあるけど、今はそれどころじゃない。久方ぶりに自由になった体を起こし、そして互いを見つめあうライル殿下と藤沢さんへ目を向けた。

「……随分と閃烈な帰還だ、ヘレナ姉様。後ろの衛兵達が目を白黒とさせていますよ。やはり貴女の本当の姿は、何も変わってはいない」

「能書きは必要ないわ。私はただ私のやるべきことを果たしに来ただけ。まずは、アンタが不当に拘束していた被害者を引き渡して貰おうか」

口調は穏やかながらも、その顔には念願の望みを得たという満面の笑みを湛える殿下。それとは対照的に、淡々とした話口で一見して感情が読み取りにくい藤沢さん。なるほど、確かにこの大部屋のそとでこちらを伺う衛士の人たちもさぞ居心地が悪いだろう。多分急に現れた第二王女を名乗る人物に振り回され、まさかの宮殿内部で放火の現行犯、おまけに第二王子へのこの不遜とも取れる攻勢だ。

「そうだ、貴女の本質は何も変わっていない。我が強く勢いのあつた童の頃のままから。自分のやりたいことばかりをかまかけて、肝心の自身がおかれた状況を何も分かつてはいない」

投げ入れられた彼の挑発に対して、藤沢さんは外見上逆鱗に触れられたような様子はない。一見すれば、流石は元第二王女、簡単な挑発には乗せられず大物らしく振る舞っ

ているように見える。しかし彼女が本当にこの状況を、見たままの淡々とした感情で俯瞰しているのだろうか。

「そうね、アンタと私で認識に隔たりがあるか確認しましょうか。私は紛れもなくこの国の第二王女で、行方不明になってから都合十一年ぶりの帰国。この数ヶ月は日本の学校に所属してたけど、正式に身元を明かしたのは今日が初めてよ」

「……そこまで分かっただけですか。この国において王族の直系が持つ意味を知らないとは言わせない。この私と王位継承権が入れ替わるのだ。そして貴女という才能の原石を取りこぼしたエルトニア家が、再び姉上と合間見えた。貴女にとっても我々にとっても、重大な転機となるべきだ」

なんとなく、僕には藤沢さんが自然体ではないように見えてならなかった。条件が違えば雰囲気がるつきし変わるといふのは、妹という实例を身近に見てきた。彼女は正反対ともいえる甘えん坊な内面と冷徹な令嬢という外面を持ちながらも、良くも悪くもそれらのどちらもが彼女の自然体なのだ。どちらを振舞うにせよ、彼女の行動や態度にどこも不自然な箇所は存在しないのだ。

しかし藤沢さんの普段のちよつと生意気で活気ある姿に、今の彼女が放つ平坦でシニカルな態度はどうにも重ならない。これが藤沢さんの王女としての本当の姿と言われればそれまでだけど、自身の勘はそこに不自然さを見出だしている。

「それもそれ。私は、私の今の状況全てに決着を付けに来た。でもその前に、どうしてもやらなきゃいけないことがある」

ならばなにか。これが自然体ではないとすれば、虚勢や演技なのだろうか。彼女がこの部屋に突入してきた時から感じていた、どこか彼女の人のなりに重ならない不遜な態度。確かに普段の自分自身を覆い隠すには、自分を大きく見せるというのは納得だ。でもその割には一見淡々としながらも、行動の端端から剣呑な雰囲気かじみ出ている。そしてふと、彼女の右手に目をやった。

「貴女が最低限それらを理解しているようならば、私も安心だ。それで、ヘレナ姉様がご自身の帰還をこの王宮に布告するよりも前にやらなければならぬこととは一体何ですか？」

「……レイ、ちょっと離れてて。ライル、アンタの熱意については嫌というほど伝わったわ——」

彼女の右手はきつく握りしめられているどころか、力が入りすぎて震えていた。その上、よく見たら噴火寸前のように細かな火花が彼女の握りこぶしの中から溢れ出ている始末だ。妙にゆつくりとした話口、そしてこの空間において完全な非戦闘員の僕に離れると通告する。途轍もなく嫌な予感に駆られた僕は、情けないと自覚をしながらも藤沢さんへ強く頷いて部屋の出口近くへと早足で向かう。あの彼女の様子、あれはどう見

たつて不遜や冷静とは程遠い。

「——そこに直れ愚弟ツ!! よくもまあ、今まで散々好き勝手やらかしてくれたわね!!」
聞いたことのないほどに声を荒げ、見たこともないほどに表情が歪み金色の瞳が見開かれる。急激に巻き起こる熱波と共に赤紫色の長髪が激しくたなびき、そして両腕にからドアをぶち抜いた時とは比較にならない荒縄のような紅炎が吹き出す。同一人物であることを認めることが困難なくらいに、まるで修羅か何かのような姿で殿下へ怒鳴り声を叩きつける様子を見てようやく理解をした。怒りに駆られると普段は明るいのに急に大人しく見えるような人が時折居る。今まで彼女が本気で怒る場面に遭遇したことが無いから知らなかったけど、どうやら彼女はそういう類の人間だったようだ。

さつきから感じていた違和感の答えが、十分離れていたはずの僕の場所まで顔を覆うほどの熱波として投げつけられる。この部屋に入った瞬間から、端的に言つて彼女は完全に切れていたのだろう。その爆炎に包まれた腕を振りかぶった藤沢さんは、あろうことかライル殿下に向かって殴りかかった。

その4

炎の熱波というものは、今まで見た目以上の熱さがあるものの基本的にはストーブのように温かいものだという認識をしていた。イメージをするならばキャンプなどでおなじみの一般的な焚火だろうか。ぱちぱちと子気味のいい音と見ただけで温くなる暖色系の見た目から、案外大きな熱気を感じるのである。その炎の勢いが強くなれば、そりゃあ熱気だつて強くなるだろう。だから視線の先で藤沢さんの両腕から爆炎が弾けた瞬間は、それなりの熱さはあるだろうとある程度は覚悟をしていたつもりだった。

「アンタがしてきたことが、一体どれほどの影響を与えたのか分かってるのか!? これがこの国の第二王子とは、何という体たらくだッ!!」

「貴女が——貴女だけと言う資格など無い!! 今まで王族であつた過去を隠してきたことを、忘れたとは言わせるものか!!」

燃え盛る炎を両腕に纏わした二人がぶつかり合つた瞬間、部屋の隅ではなく外に逃げるときであつたと後悔をした。まるで嵐のようだと言う他はない。強烈な暴風のような勢いに乗せられた熱が、容赦なく皮膚に痛覚を伝えてくる。別に爆風なんか吹き荒れ

てはいないのに、暴力的な熱波がまるで重い波浪のように僕の体を押し流そうとする。何とかといった調子で辛うじて目を開け、顔を覆った手の隙間からこの途轍もない状況を作り出した元凶たちを垣間見た。

普段は快活な普通の女子であるはずの藤沢さんが何の遠慮も無しに殴りかかり、一方のライル殿下は真正面から彼女の拳をがっしりと受け止めた。そんな両者の押し合いはただの物理的なものなんかじゃなく、双方の腕から轟々と吹き荒れる炎の嵐までもが互いを包み込まんと激しく姿形を変えながら絡み合う。近くにある先ほどまで僕が縛り付けられていた椅子がその炎に巻き込まれ、恐ろしいことに燃え上がって火災に発展するよりも先に煤と化して消滅した。そして絨毯に飛び火した炎の欠片が、その地点だけを消し炭に変えて武骨な石造りの床をあらわにする始末だ。どんな熱量を持つているのか、そして何で両者が互いの炎を目の前にして無傷なのか。さっぱり推し量ることは出来ないが、一つ言えるのはとんでもなく危険な状況だということだ、

「王家の皆が諦める中、私は貴女の帰還を最後まで待ち続けた。偶然見かけた二ホン国渡来人の中に貴女を見つけ、それがヘレナ姉様であると分かったというのに!! その貴女はまるでエルトニアなど故郷ではない、私のことなど知らないと示し!! それを目の前で見せつけられた悲しさと憤りが、貴女に分かるかッ!?」

一体どれほどの想いでその嘆きを吐いたのだろうか。感情を露わにしないというイ

メージとは真逆とも言える悲痛な叫びと共に、ライル殿下の腕から一段と大きな爆炎が巻き起こる。その圧力は両腕に金剛力士像を空見させるほどに野太い炎塊を纏わせた藤沢さんが一瞬たたらを踏むほどだ。数歩後ずさった彼女をたぶん色々な感情が入り混じっているであろう激情を込めた視線で睨みつけた殿下が、右手を周囲に滞空していた火炎に突っ込んだ。

「確かに貴女はこの宮殿へと戻ってきた。だが帰還をしての第一声が第二王女という地位への復帰を宣言するものではなく、こともあろうかこの私への雑言だ!! 長年貴女の帰還を待ち続けた私への褒美が、よもやそれだと言うのか!？」

殿下の手に纏わりついた炎が、形の定まらない臃げな剣のような形へと変化をした。闘技会で妹と相對したときには実体のある剣に炎を纏わせていたが、今回は核となる物体無しの純粹な炎の刃だ。一体何をどうやったら、炎という燃焼反応の産物が剣などという実体を持つに至ったのか。目の前の光景は当の昔に僕の理解の規範を越えていた。まるで彼の心情を示すかのように形が幾重にも揺れる刀身が振りかざされ、その切っ先が藤沢さんへと突き付けられた。

「……ヘレナ姉様、炎を納めください。何年もの間二ホン国で過ごした貴女に、魔法での争いで勝ち目などない。それに私と癩癩を起こしあうよりも先に、貴女にはやるべきことがあるはずだ」

少しだけ頭が冷めたのだろうか、彼は先ほどの怒声を感じさせない落ち着いた様子で藤沢さんを嗜めた。炎を取める、つまりは速やかに武装を解除せよということだ。彼のその勧告を前にしても、藤沢さんは相も変わらず拳に纏わせた炎を消そうとはせず、ライル殿下を鋭く睨みつけたままだ。一見して、対照的な雰囲気、二人は向かい合っており、彼の心情は見た目ほどの落ち着きは無いのかもしれないことは容易に想像できた。

「……確かに、エルトニアへ帰る道を知ってからの私の行動は誉められたものではないわ。私の存在が混乱を招くなんて言い訳に過ぎない理由を盾にして、有耶無耶にしようとしていた。いろんな人に迷惑を掛けて、自分のことだということに見て見ぬふりさえもした。まるで、モラトリウム人間よ。それにあなたが私の帰還にどれだけの心血を注いでいたか、省みることもしていなかった。だからその点に関しては、完全に自分の非だから言い訳のし様も無い。でも——」

少しだけトーンダウンした藤沢さんが、頭を振りながら苦々しい様子で話した。藤沢さんがうちの大学がエルトニアに新しいキャンパスを作るといふ話を聞かされてから、時々僕に話していたことを思い出す。故郷に戻れるつて言うのに、嬉しさよりも先に出て来るものが多い。その先に出てくるものというものが、きつとモラトリウム人間とい

う言葉に集約されているのだ。次の段階へと至る絶大な変化、大人になるというよりもむしろもう無いものとしていた過去へ向き合わなければならぬという責務。間違はなく今までの立場のままではいられないという恐怖に、彼女はその一步を踏み出すことが出来ずにいた。

でも彼女がこの王宮にいるということは、その恐怖に打ち勝ったということになる。それを象徴するかのように、たとえ相手が卓越した魔法の才覚の持ち主だとしても、藤沢さんは握りこぶしに纏わせた炎を弱める様子は全く見せない。一旦言葉を切った間の中で、彼女は目を見開いて殿下を凝視した。

「——私が標的ならば、なぜ私だけに接触をしなかった!?　こともあろうか、政府の役人さんまで巻き込みそしてツ、彼に手を出すなんて!!　それだけは、決して許さない!!」

再度の感情の爆発に呼応して一層の熱気を放つ野太い炎の渦がうねり、生きている大蛇のようにライル殿下の持つ炎の剣に向けて鎌首をもたげる。僕と同じように魔法とはもう関りもありませんよという雰囲気を出していたのはとんだ猫かぶりだ。一体どれほどの才能や魔力制御の技術があれば、実体のある炎なんて代物を作り出せるのやら。

先ほどまでの爆炎混じりの殴り合いなんかじゃなく、これでは本当の魔術を使った決闘だ。そういう文化に全く詳しくはないけど、見た感じじゃ全力でこの二人がぶつかり

合えば周囲への被害は勿論のこと、確実にどちらも重傷を負うリスクがあることは間違いない。本当ならば諫めなければならず、しかしその手段はまるで思いつかない。もし僕がレシルほどの魔力があれば介入して辞めさせるなんて選択肢もあつたけど、実際の実力じゃ本当に焼け石に水の影響しか与えられない。

ふと、場違いな笑い声が響いた。吹き出すような、嘲笑うような、そんな乾いた声だ。炎が轟々と威圧的な音を立てる中で、その笑い声は不気味に耳へと届く。その音の発生源がどこだなんて、もはや探す間もなく見つかった。改めて啖呵を切つた藤沢さんの目の前にして、炎の剣を片手にライル殿下が口元を歪めていた。

「……彼、か。やはりそうなのか……予想はしていたとはいえ、存外に来るものがあるよ

——」
彼のそれは果たして本当の意味での笑顔だったのか。否、そうじゃないことは状況からも言葉端からも、そして彼がつい先ほど僕に語り掛けた話の内容からも考えることは出来た。殿下はずつと彼女の帰還をまつていた。王女たる藤沢さんの牙を抜いたであろう僕を餌にして、そして彼女はようやくここへとやってきたのだ。その彼女が僕に危害が及んだことに怒り吠える。そんな状況、冷めやらぬ怒りの矛先が次にどこへ向くかだなんて、ちよつと考えればすぐに分かる。それを理解したときには、殿下の怒りに染まった金色の双眼が、燃え盛る炎の奥から僕を見据えていた。

「お前が……お前が居なければ、姉上はッ!! この様な醜態を、晒さなかつた!!」
「——レイ避けて!!」

全身を震わす殺気。殿下の怒声。藤沢さんの叫び声。その向こうで殿下の腕がこちら側に振るわれていた。風を切る音を聞いた頭が状況を理解するよりも早く逃げなければという意識が働き、しかしその咄嗟の判断に体がついてこない。見開いた視界の中央には、矢のようにこちらへと迫りくる炎剣の姿があり、その奥には顔を歪めて僕を見据える殿下がいた。刺されば間違いない死ぬだろうなという気の抜けた様な感想が、走馬燈のようにゆつくりな景色の中で心に浮き沈みする。

自分の顔にどんな表情が焼き付いているのかは分からない。でも一つだけ言えることがある。こちらと剣と魔法の世界からは早々にドロップアウトした身だから、その魔法で攻撃するのはまるでナンセンスだ。どうしたってこんなもん防ぎようがないじゃないか。不気味なくらいに淡々とした感情が頭をめぐる中、投てきされた炎の剣はもう目の前まで迫っていた。

「煩いぞ、馬鹿者共」

だから背後から聞こえたそんな声と共に剣が散り散りに砕けた瞬間、緊張を失った両足が立つことを放棄し、糸が切れたからくり人形の如く全身が地面へと投げ出された。

その5

今まさに死に瀕していた目の前で、僕の腹部を食い破らんと猛進してきた炎の剣が横合いから伸びてきた小さな火の玉がぶつかつた瞬間に形を崩した。消え失せる剣、頬に吹き付ける熱気の残り香、死を予見していたのかまるで神経が切れたかのように力を失う両手両足。そのまま背中から崩れ落ちて下半身を強く打ち付けた痛みで、自分の腹部に燃え盛る魔法の剣が付きたてられていないことを頭と体の双方でようやく理解をした。

「大丈夫だ、どこも焼けてはいない。立てるか？」

「あつ……いえ、すいませ——!？」

その背後から聞こえてきた声、そして尻もちをついたところに差し出された手。遙か昔に背中を通り魔に刺された時を思い起こさせる臨死体験からか全く状況が把握できず、頭がよく回らないうちにその手を掴み、そして顔を見上げて絶句した。混乱と混濁の最中にいた頭の中が、まるで磁石を押しあてた砂鉄のように無理やりひとまとまりになるような感覚だ。その理由は単純、僕の背後から手を貸してくれた人に心当たりがあるからだ。

「貴方を一連の騒ぎに巻き込んでしまったようだ。事態の收拾は私がつけよう」

立ち上がり呆然とする僕と同じく、先ほどまで烈火の如く怒りの炎を巻き上げていたライル殿下までもが闖入者に視線を向けて絶句をしていた。そんな無理やりに闘争が沈められた空間に一人歩みを進める黒を基調としたドレスを見に包んだ人物は、腰ほどもある長い赤紫色の長髪をなびかせ、そして一歩づつ殿下と藤沢さんの元に近づいていく。

「……貴女が、なぜここに……」

「つい先ほどニホン国の臨時大使から通達があつた。私の不在中に色々とやってくれたそうじゃないか」

この人のことを直接見たのはただの一回のみ。それも言葉を交わしたなんて近しい距離などではなく、エルトニアキャンパスの開校式にて壇上で開幕の挨拶をしているのを見た時だ。僕の記憶に違いが無ければ、そしてライル殿下がここまで萎縮をするような人間なんて、もう間違いない。エルトニア王国第一王女、ライア・ヴィクトリウス・エルトニアその人が、この混沌たる状況下に現れたのだ。

「まさか私がトウト大学に向いている間ならば、何をやっても邪魔は入らないとでも思つたか。ニホンの技術力は凄い物でな、王都の昼間の混雑など物ともせずはこちらに來れたよ」

苛烈な様子ではなくあくまでも淡々とした、しかし決して逃れられなさそうな強い口で彼女はライル殿下に言葉を浴びせていく。今この場に第一王女が現れるなんて考えてもいなかったのか、彼は何を言い返すでもなくライア王女を驚いた様子で見つめている。それとは対照的に、藤沢さんはどこかホツとしたような様子で二人の様子に目を向けていた。そしてそのまま、状況が膠着したのを良いことに焼け落ちた扉の傍らで動けず仕舞いの僕の方に近づいてきた。

「レイツ!! 何処も火傷していない!?!」

「い、いや……ライア様のおかげで難は逃れたけど……」

「ちよつと見せなさい!! 自分が気が付かないところが火傷してるかもしれないでしょ」

駆け寄ってきて最初の一言が、現在の状況に関するものではなく僕を心配する文言である。大丈夫だと言ってみても、なかなか納得していかないのだろうか僕の服やら背中を見まわしたりペタペタと触って確かめてくる始末である。それだけを見てみれば心配を掛けてしまったようで申し訳なく思うところだけど、今はそれ以上に何故藤沢さんがライア王女の存在に対して驚きを見せていないのかという方が気になってしまう。

「お前のおかげで重要な式典の開会式に欠席せざるを得なくなつた。だがそれはまだ良い。お前はとうとう超えてはいけな一線を踏み越えた。それが何か分かるか?」

「……ラストイレイという男は、王家までもが行方不明と断じていたヘレナ姉様の存在

を知りながら口を噤んでいた。事実この男を隠れ蓑にしていた姉様が、この王宮に姿を

相も変わらず僕のスーツの黒い色に隠れて焦げ跡でも無いかと隈なく探す藤沢さんを、どうあしらったものかと首をひねる。今の僕たちを傍から見れば、完全に危険な目にあつた我が子を心配している親子のソレだ。今はそれどころじゃない、そもそも君は何故ライア王女がここにいることを平然と受け入れているんだと聞こうとしたところで、パシンという乾いた音が響いた。

「言い訳をしろと言つたんじゃ無い。お前がやったことがエルトニアにどういふ影響を与えることになるか分かるかつて聞いているんだよ」

決して大きくない、しかしこの部屋の中に響き渡る平手打ちの音。僕と藤沢さんが二人して話をピタリと止めてその音の発生源にぐるりと首を向けた。どちらもそれぞれどころじゃないという見解が一致したのだ。振り下ろした右手を小さく振るライア王女の前で、ライル殿下は打たれた頬を正面に向けている。王女の言葉は鋭さと冷たさを増し、そして話を強制的に止められた殿下は声を発することはおろか打ち据えられた状態から動く様子は見られない。

「雑多な小国を統一してエルトニアという一つの国が形成されてから、この王都には他国の兵が闊歩したことは無い。しかし先ほどに、王都の外れならまだしもこの王宮の目

の前に異国の武装集団が陣をふんだ。キドウタイというらしいが、二ホン国の持つ治安維持組織さ」

彼女が口にしたのは、僕の身をこの王宮まで護衛するという名目で川崎さんが召喚した、山梨県警の機動隊のことだろう。無論僕は川崎さんが言った内容を額縁通りには受け取ってはいない。確かに護衛という意味で言えば最高級の物であるがいささか過剰にすぎる。彼が取った行動の本質とは、やはりエルトニアへの威圧に違いはないだろう。そしてライア王女は裏側の意味を読み取り、表情を厳しいものに変えている。

「我が国は、他国の兵に立ち入らせたという前例を作った。そして二ホン国側はあくまで自国民の警護に過ぎないという立場を崩しはしない。向こうに大義名分がある以上、抗議など出来るわけがない。分かるか、ライル。お前の行動が二ホン国が付け入る隙を与えたのだ」

そして示威行為は僕が考えていたよりもよほど大きな影響を持ちうるのだろう。エルトニアの建国から数百年、小さな争いも含めれば数十年前までいくつか戦争が起きていたにも関わらず、その全てにおいて王都に戦火が及ぶことが無かった。国家間の記念式典でも無ければ他国の軍が居るなんてことなど無かった都に、警察組織とはいうものの武装した他国の一団が展開したのだ。メンツが潰されたと言う他無い、完全な失態だ。

しかしふと、頭に何かの違和感が走る。どういふものか上手く形に出来ないけど、彼女の話す内容を考えた時に、彼女自身の雰囲気になじみの不思議さを感じるのだ。言ってしまうとあまりよろしくない前例を作る切っ掛けとなった人間を叱咤するにしては、妙に淡々をしているな、と。

「そしてそもそもその問題が、二ホン国の国民をこの場に呼び出したことだ。それこそが彼らに大義を与える源だ。今まではお前の行動を、うっ憤の溜まった一部の連中の適度なガス抜きとして見逃してきた。しかし二ホン国との関係に影響を与えるというのならば、私は黙っているわけにはいかない」

そう、例えるならばライア王女は一連の事態を上から俯瞰しているような雰囲気を感じるのだ。エルトニアの王子が巻き起こした問題に日本の公的組織が介入してくるというイレギュラーが起きたにもかかわらず、この人はまるでそれが元々起きることを知っていたかのように淡泊な様子を崩すことは無い。

「……貴女は何処かがおかしい。確かにこの私がやったことは褒められたことじゃないさ。元より次代の王位への期待が薄いことに変わりはない、何ならこれを機に私の王位継承順位を落とすことを宣言したって良い。だがそれとこれは別だ!! 何故ヘレナ姉様が十年来に姿を見せたというのに表情一つ動かさない!?!」

ライル殿下からは、怒りというよりも得体の知れないものを前にしたかのような困惑

さが垣間見えた。彼の言う通り、僕の記憶の限りでは藤沢さんがライア王女と身分を明かしたうえで顔を合わせるの十年近いブランクを挟んで今日が初めてであるはずだ。にもかかわらず、ライア王女はそんなことを微塵も感じさせないで、殿下のまくし立てる話し声表情一つ変えずに聞き流している。

「そもそも私がここに居る時点で、大方の事情は知っているに決まっているだろう。へレナ、いつまでそこに居るんだ。彼には傷一つ無いだろう」

「あつ……はい、ライア姉様」

藤沢さんがライア王女に呼ばれたことで、再び僕は一人だけの部外者として取り残された。彼女が言う、大方の事情とはどこまでのことを指すのか。ただその情報の範囲が如何ほどかはともかく、間違いなく情報源は日本政府、ひいては臨時大使という役職に上り詰めた川崎さん間違いないだろう。僕がこの場所に来てから今までのわずかな時間の中で、彼はライル殿下とは異なる派閥との交渉ということでライア王女にコンタクトを取ったと考えるのが妥当な所だ。

「……エルトニア王家第二王女、ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニア。この度、再びエルトニア王国に帰還しました」

「壮健だな。扉一つを消し炭にしてなお余りある莫大な魔力、おかげでこの広い王宮のどこに居るのがすぐに分かったぞ」

ライル殿下の言う通り、実際に藤沢さんと言葉を交わすライア王女の様子は、十年以上行方不明だった実の妹と顔を合わせたにしては淡々とし過ぎていた。王家というものが僕の考えるほど兄弟姉妹の間柄が強いかは正直なところ怪しい部分がある。しかしそれを踏まえたくえでも、いくら何でも事務的すぎやしないか。元々藤沢さんと仲が良かったライル殿下との差を見ればより際立つて見えてしまう。

そしてライア王女と相對する藤沢さんの様子を見て、彼女は間違いなく今日この場にライア王女が現れるということを把握していたのだと確信をした。今の彼女から読み取れる感情はあくまで緊張の一色のみ。それに最初に王女と顔を合わせてから、藤沢さんは全く驚いたという風な様相を見せてはいないのだ。例えるならば初めての学会発表に際して緊張気味だった時と、そう大差はない感じに見える。対象にそこはかかない緊張感を抱きながらも、それ自身は決してイレギュラーな事態ではないということか。

「……ライア姉様。貴女は、一体何を企んでいるんですか？」

「企むだなんて、随分と言うじやないか。あくまでも私は二ホン国との関係を考えてお前の暴走を止めることしか考えてはいない」

そこでふと、断片的な事柄たちにある一つの関係性があることに気が付いた。藤沢さんの帰還を既に知っていたライア王女、その王女が現れることを事前に聞かされていた藤沢さん、そして両者が引き合わされる切っ掛けになった、この僕が王宮にいるという

状況。これらすべてにおいてどこかしらに関与をしている人間が、一人だけ存在する。ライア王女に日本の臨時大使として状況を知らせ、藤沢さんに対しては恐らくここまで連れてきた時にライア王女へコンタクトを取っていると伝え、そして僕がライル殿下の呼び出しに応じるといふ判断を最初に聞いた人物。それはつまり――

「ライア姉様、そしてライル。私は、今日あることを宣言しにこの王宮へと戻ってきました」

「……だそうだ。ライル、まずはその宣言とやらを聞いてみようじゃないか」

根拠も何もないけれど、僕の予想が正しければこの状況は全て計画されたものだ。ライア王女という国政に密接にかかわる立場の人間の前で、藤沢さんにあることを宣言させる。そしてそれを傍らで聞いているのは、同じくエルトニア王家の次男という肩書のライル殿下だ。こんなシチュエーション、偶然にしたら出来過ぎている。

この状況に目を白黒させているのは僕だけじゃない。そもその発端であったはずのライル殿下が、訝し気にライア王女と藤沢さんの二人を眺める。ということは彼も利用されたんだ。エルトニア王家のメンバーが会する機会を作るための切っ掛けとして。「私、ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアは、エルトニア王位継承権を完全放棄することをここに宣言します」

ライル殿下が目を見開き、そしてライア王女は淡々を藤沢さんの宣言を聞いている。

たったの一言、しかしそれはとてつもなく大きな意味を持つことは、元貴族の端くれであつた僕にだつて流石に理解をすることは出来た。君は、自分が一体何を言つたのか分かつているのか。そう問い詰めるように向けた視線に、藤沢さんは少しだけ憂いを持つた表情をこちらに向けただけ。

「……川崎さん。貴方は一体何を考えているんだ」

恐らくは今回の状況を全て把握しているであろう今や姿も見えない外交官の名前を、ただ呆然と口にすることしか出来なかつた。

その6

「へ、ヘレナ姉様……今、何と仰られたのですか？」

これまでになく震えた声色で、ライル殿下が藤沢さんへ聞き返す。別に藤沢さんの声が小さくて聞き取りにくいからだとか、言った内容が煩雑過ぎたとか、そういうわけはない。今しがたの彼女の発言内容は、彼をここまでうろたえさせるほどの意味を持っている。

王位継承権の破棄、それは王家という一族に許された最上級の特権を捨てることに他ならない。自分の記憶の限りでは古今東西でそのような権利を破棄するに至った例は数あれど、どれも事情は特殊なものだ。何か良からぬことを企んで強制的に王位継承権をはく奪されたり、はたまた他の国に婿入りするか何かで国から離れたり等々、権利を捨てる背後にはその人自身以上の大きな思惑が働いている。それを考えると藤沢さんの自分の意志で王位継承権を捨てると宣言する行為は、前例から見れば特異に尽きる。

「ヘレナ。自ら王位の継承権を捨てるということは、エルトニアの名をも放棄することになる。君は王家という身分を捨てようとしているんだ。その意味を分かっているか？」

そしてやはりと言うべきか。ライル殿下がそんな空前の宣言を前にしてうろたえる様子を隠せずにいるのとはまるで対照的で、ライア王女はさも当然といった風に藤沢さんの意志を淡々と確認している。藤沢さんをめぐる一連の事柄の背後に川崎さんが関わっているという疑念を持った今では、ライア王女も全てを前々から把握をしていたのではという予想が浮かぶのは当然だ。

「私は、それを理解したうえで宣言しました。王女としての全ての地位が消えてなくなることは覚悟の上です」

藤沢さんは、よどみなくそう言い放った。言葉の意味を理解していないなんてとんでもない。彼女は全てを分かっていたうえで、それを良しとして地位を捨てようとしている。エルトニアという王政国家において、王家の持つ権力は計り知れない。国そのものを司る王や王妃は勿論のこと、例えば王とならなくても一族の血を引く人間の多くは国の要職に就任している。事実、ライア王女は外交の要として日本との関係を取りまとめる地位に居るのだ。藤沢さんの行動は、つまりはそのような約束された地位全てを無いものにするということだ。普通の王族であれば、まず行動の選択肢にも上がるはずはない。

「……これが、君の決着だというのか」

「……これが、君の決着だというのか」

確かに、藤沢レナの決断としては紛れも無く妥当だ。しかしヘレナ・ヴィクトリウス。エルトニアの決断としてみたら到底まともな判断とは言い難い。それを考えると、彼女の宣言からはエルトニアの国そのものとの繋がりがさえも無かったことにしようとしている雰囲気すらも感じてしまう。

「ええ。これが私なりのけじめ、そして私という現状に向き合った結果よ」

彼女はどこか吹っ切れたような、それなのに何故か憂いも垣間見える表情を浮かべていた。何かを成し遂げたその脇で、何かを失ったかのような様相。

エルトニアという国の存在そのものが、ずっと彼女が心のどこかで抱えていて、それでいながら解決というアウトプットに持つてこれなかった一つの問題だった。行き来出来ないと思っていた世界がつながり、そして彼女の帰還をただ願う実の弟に追い込まれ、彼女は答えを出すことを強いられてきた。その決着が、これなのか。

「……一体何が、何が貴女をそこまでさせる!? それほどまでにエルトニアに、そしてこの王家に嫌気がさしたか!？」

たまらずといった様子でライル殿下が叫ぶ。ようやく戻ってきた肉親が自分たちを拒絶したようなものだ。藤沢さんがエルトニア王女に返り咲くことをたぶん誰よりも待ち望んできた彼にとってみれば、彼女の宣言は計り知れない喪失と絶望をもたらしていることは想像に容易い。

「ならば何故ツ、姉さんはこのエルトニアへ帰ってきた!? 貴女が二ホン国から離れなければ全てが平穏でいられたというのに!! この私が姉さんの恨みを買ってまで足掻くことも、そして無意味に希望を抱くことも無かった!!」

決壊したダムのように、藤沢さんへ言葉が浴びせられる。理論も何もなく、全てはライル殿下の感情の内雨が雨あられと叫びへと変わった結果だ。そもその切っ掛け、エルトニアという国に首を振る一方でエルトニアへ帰るといふ行動。果たしてその理由は何か。彼の叫び声を前に俯いていた藤沢さんが、俄かに顔を上げた。

「……耐えられなかった。一度は喪失した故郷を、見て見ぬふりをするのは」

ライル殿下の声とは比べにもならない小さな声が、不思議とこの広い部屋を支配したような錯覚を見る。無言のまま成り行きを事務的に見つめるライア王女、未だ吐き出し切れていないであろう激情を喉元にため込み藤沢さんを見つめるライル殿下、そして決して短くない付き合いの中でベールに包まれない本音を初めて聞くことになる僕の前で、彼女は再び口を開く。

「日本どころか地球全体で見たってエルトニアなんて国は無い。逆立ちしようが何をしようが、帰れないってことなのよ。どうしようも無い疎外感と同郷のレイと出会って乗り切れることは出来た。でも故郷に思いを馳せることはあっても、もはや帰ろうなんて気すらも起きやしなかった」

炭鉱の閉山に伴い故郷の街が廃れたと、前世の頃に父親がしみじみと言っていた。遊び慣れた公園や学校は今や写真の中にしか存在しない。今更赴いたところで廃墟しか無いんだ、と。でも彼女には、廃墟を見返すことすら出来やしなかった。彼女だけがない街がいつも通りの日常を送っていることだけが分かり、それ以外は全く手も届かない。自分だけが切り離された疎外感、それは僕自身も経験したことだ。

「でも日本はエルトニアと繋がってしまった——それを一度知ったら、見て見ない振りなんか出来なかった!! 母様や父様、そしてライルだって、忘れられるわけなんて無い!! 帰りたくなるに、決まっているじゃない……」

僕にとつてエルトニアの大地で日本から流れ着いた物の存在を知ってから帰還することが現実味を帯びたように、彼女もエルトニアキャンパスの存在を聞かされてから帰りたいという純粹な願いが再び日の目を見たのだろう。僕も世界から切り離された疎外感を味わったのだから分かる。例え蜘蛛の糸のようなふとした見失いかねない細いものでも、元の世界への繋がりを意識したら帰りたいという欲望はどうやっても無視することは出来ないのだ。

「……そして私は私の出自を呪った。ただの街娘ならば迷うことも無かったのに、偶然王家の生まれというだけで国への帰還は持つ意味合いが天と地ほど違ふ。十年ぶりに行方不明の王女が現れたなんて、どうにかすれば今の生活全てが吹き飛ぶような途轍

もない話よ。身分を明かして帰還するということは、つまりは今の生活全てを諦めるということだった」

王女の帰還とは、つまり王家への復帰を意味する。良くも悪くも日本という国で自由に生きてきた彼女を、再び王家という頑丈で煌びやかな敷地の中に戻すということだ。もう、ただの異国風な大学生の藤沢レナではいられなくなる。

「貴族社会から外れて育った私でも分かる。行方不明になった王女が戻ったら色んな混乱を招く。そしてそれ以上に、後ろ楯の無い私が政治の良い駒にされるのは目に見えていた」

例えば隣国との友好関係維持のため嫁がされたりね、と藤沢さんは達観を苦笑いに交えながら付け加えた。そんなのは嫌だと言葉の裏側にはつきりと見えている。王族ならばあつてしかりという風潮も、今の藤沢さんにはまるで合致しない。日本という国で過ごした十年間が、彼女の価値観を王政時代から近代的な物へと作り替えたのだ。

「結局エルトニアに戻るといふ選択をしながら、私は身分を伏せていた。どっち付かずの姿勢のままライルにも向き合えることなく、出口と壁一枚隔てたモラトリウムの中であらだらと過ぎる日々。どんどん、一步を踏み出すための足が重くなつていった」

今まで僕は、彼女が内心にそこまでの葛藤を抱えているなんて気がつくことも出来ていなかった。成り行きとはいえ妹や実家の問題に精算をつけていく僕を、目に見えない

鎖に縛られた彼女はどのような視線で見ているのだろうか。

「……でも、そんな日々はもうお終いにする。今日という日は色んな方面を巻き込んだ大変な物だけど、でも私にとっては天啓だったのかもしれない。一步を踏み出すことすらも恐れていたのに、今はこうして王宮に立っている。人質に取られたレイを取り戻すんだという使命感が、モロトリアムの壁をこんなにも簡単に打ち破るなんてね」

確かに彼女は、何かを成し遂げる傍らで何かを失うことになる。でも取捨選択なんて世の中の誰にも訪れるものだ。二者択一のどちらを選ぶのが正解だなんて、結局のところその人自身がどう思うかによって決まってくるし、そしてどちらを捨てようが絶対に僅かばかりでも心残りというものは存在する。そして今の藤沢さんは、こうやって独白をする中で心の整理というものが同時進行で成されていったのだろう。最初に見せていたような憂いを帯びた表情は、不思議と穏やかなものへと変化を遂げていた。

「私は、エルトニア王族のヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアではなく、藤沢レナとしての人生を選択する。王女としての権威と権利、そしてエルトニアという名前、その全てを放棄します」

これは周囲の圧力に屈して苦肉の策でひねり出した解答なんかじゃない。自分自身にとつて最も重要なことは何かを理解した上で選択をしたのだろう。放棄という言葉には、王女という地位を捨てるという意味以上に、藤沢レナという人生を選んだという

意思があるのだ。捨てるか選ぶか、両者は結果的には同じことかもしれない。でも藤沢さんは、捨てることになる過去よりも選ぶことになる未来を見据えている。

「姉、さん……じゃあ、この俺が今までやってきたことは、全て無駄だったと——」

「——違うわ。人の話は最後まで聞きなさいって、散々昔から言ってたでしように」

決して激しくはないけど到底揺るぎようは無い藤沢さんの決意の表明に、それを目の前で受けていたライル殿下が力のない笑みを浮かべる。エルトニア王家の地位を捨てることを選択した藤沢さんは、もはや彼の望みの通りにはならない。全ての行動が無に帰したと首を垂れようとしたところを、藤沢さんが背を伸ばして彼の頭を胸に抱く。

「確かにアンタのやり様に思うところが無かった訳じゃない。むしろ沢山怒るべきところがあるわ。でも、ライルはそれだけ私の帰還を願ってくれたということよ」

頭ひとつ分以上の身長差がある藤沢さんの胸のなかに、すっぽりとライル殿下の頭が収まる。その赤紫色の髪の毛に、藤沢さんの手が添えられた。

「あなたが私のを表舞台に出そうと色々動いていた時、そのプレッシャーに押し潰されそうになりながらも、あなたが本気で探してくれていたことに少しでも救われた気がした。本当はもう誰もが私のことなんて忘れていて、自分だけが馬鹿みたいにエルトニアと日本の間で立ち往生していたわけじゃなかったんだって」

「……でも姉さんは結局エルトニアを選ばなかったじゃないか。俺の行動は、姉さんの

決断を変えることは出来なかつたんだ」

抱きすくめられた姿勢のまま、ライル殿下の小さな声が響く。結果ありきでみたら、確かに彼が望んだものとは異なり藤沢さんはエルトニア王家への復帰を拒んだ。しかし彼女の言い分を信じるならば、結末に向けた心の持ち方は全然異なる。

「あなたがいなかったら、私は本当の意味で帰る場所を失つてた。エルトニアか日本か、散々悩み抜いた結末が自身の原点の消失だったら、私は耐えられなかつた。エルトニアの大地にいること自体が苦痛だったかもしれない」

彼の行動は、ある意味ではエルトニアにおける藤沢さんの原点を保証するものであった。少なくとも彼だけは、ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアとして彼女の帰還を待ち望んでいた。こう言つては何だけど、ライア王女を含めた彼以外の王族は、藤沢さんの帰還についてライル殿下ほどの真剣さは無かつたと言つて間違いはない。その一点に関してのみは、彼の行動は藤沢さんの支えになつたと言つて間違いはない。

「……私を忘れないでくれてありがとう。そしてあなたの期待を裏切るような自分勝手な決断をしてしまつて、ごめんなさい」

藤沢さんの抱擁から、ライル殿下が顔を上げる。赤紫色の前髪が目元に被さり、その表情を伺い知ることとは出来ない。両肩に置かれた藤沢さんの手を掴んでゆつくりと下ろす。決して乱暴な様子ではなく、むしろ腫れ物を扱うかのように慎重そうにも見え

た。

「……私は、まだ全部を受け入れられたわけじゃありません。少なくとも、今日はもう貴女の顔は見たくない」

「もう私は逃げないわ。また、別の日に会えるかしら」

その問いかけに彼は答えなかった。数分前までの激昂が嘘のように、ひどく落ち着いた様子で彼はこちらに振り向いた。その顔には、少なくとも張り付いたような笑顔や隠しきれないような憤怒のどちらもまるで浮かんではいない。

「……ラステイレイ・フォルガント、お前とダイガクには迷惑を掛けた。後日、私は二ホーン国の大使を通じて正式な謝罪の手続きを取る」

今まで僕達が受けた仕打ちの割には随分と淡淡とした謝罪だ。しかし今までの彼の様子からして、こういう形式的な謝罪をするだけでもかなりの前進であると感じてしまふ。そして背中を向けた彼は一度立ち止まり、「すまなかった」と僕にだけ聞こえる声で言い残し、焼け落ちた扉の残骸を踏みしめて出ていった。

彼の姿が廊下に消えていってようやく、この嵐のような出来事がようやく一段落したのだと実感をした。だがもちろん、今度は不在にしまったファンタステイク・アカデミーへ早急に戻らなければならない。一応平塚先生には、色々誤魔化しておいてねとは口頭で伝えてはいるものの、こっちの用が済んだならば不在にしている理由も無

い。丁度時間的には多分そろそろ開会のあいさつが始まる頃だろうから、僕の代理で入っている誰かに後で謝罪なりなんなりをした後に、シレッと座長を引き受ければ良いだろう。

「さて、私もライルや奴の名を良いことに好き勝手やらかした連中の処断を行わなければならぬ。その前にヘレナ。私からも少しだけ言うことがある」

帰りの足はどうしたものかと少し考えていたところで、今までの経過を特に口出しするわけでも無く黙って眺めていたライア王女が口を開いた。その藤沢さんと言えば、何かを言いたそうに僕の顔をちらちらと見ていたところ、話しかけられた瞬間まるでライア王女の存在を忘れていたんじゃないやねえだろうなつてくらいにビクッと肩を震わせた。

「君がエルトニアの名前を捨てること、私は承諾した。ライルもあの様子だが恐らく日が経てば飲み込むだろう。だがな、長兄や父上は果たしてその限りかは正直怪しい」
「父上と兄上、ですか……」

藤沢さんの声が少しばかり強張る。父上とはこのエルトニアを統べる国王その人であり、彼女たちの兄とは現状では恐らく王位継承権第一位である第一王子のことだろう。どちらもこの国に転生してから名前を聞いたことしかない、まさに雲の上の存在だ。そんな人物の話の切り出された藤沢さんの表情は、さっきまでとは一転して固く強

張つて見えた。彼女がいくら王家の名前を捨てると宣言しようが、彼らがそれを認めなければすべては無意味に終わる。

「既に分かつてはいたようだが、後ろ盾のないヘレナは外交の良い駒だ。同じ女でも私のような好き勝手は難しいだろう。年齢的にも、すぐにどこぞの家に嫁がせるなんて可憐性は捨てきれんよ」

ふと手がギョツと握られる。いつぞや川崎さんからライル殿下関連の話を受けた時も、藤沢さんはこうして人の手を握つてきた。彼女にとつて対処の難しいものを前にしたとき、近場に居る僕の手をにぎにぎとするのはもう癖なんだろうか。案の定追い詰められたような難しい顔を浮かべる彼女と、それを間近で見せられたからとりあえず一緒に真剣そんな表情を浮かべる僕。その両者を前にして、ライア王女はそう難しいことじゃないよと前置きをした上で少しだけ口端を上げた。

「要は、そういう政治の駒にはなれないと明確に示せばいい。幸いヘレナはその条件を満たしているようだしな。多少のゴタゴタはあるだろうが、そこは私がうまい具合に納得させてやるさ」

僕と藤沢さん両者を見つめ、心配ないさと太鼓判を押すライア王女。その自信は一体何処からくるのだろうか。それに藤沢さんがその実政治の駒にはなれないという根拠は何だろうか。何か知ってるかいと彼女に目配せをしてみると、さっぱり分からないわ

と言わんばかりに藤沢さんは困惑した様子で首を振る。

「……ええと、姉様。その条件とは一体——」

「いや、よく考えれば分かるだろう。既に一人の男に操を捧げた娘を、一体何処の誰が別の家に嫁がせるものか。あの人たちもわざわざ仲を引き裂いてどうこうだなんて考えはしないさ」

ライア王女の発言内容は、一度聞いただけでは理解が出来なかった。頭の中で言ったことをリピートして、そこで初めて言わんとしていることを分かったような気がした。つまり彼女は、藤沢さんには将来を誓った相手が既にいるからそういう政治の駒には全く使えませんよということを行っているのだ。しかし操を捧げるだなんて、男の僕がいる所なんかじゃなかなか言わない方が良い内容である。端的に言えばデリカシーに欠けている。ただ彼女にそんな相手が居るのかとか、なんでそれをライア王女が知っているのかを藤沢さんに尋ねようとして——びっくりするくらい顔を真っ赤にしてあたふたしている姿が目に入って思わず首を傾げた。

「な、ななっ——操って……っ!! ね、姉様!! まだそういう関係じゃっ」

「なんだ、まだ違うのか。ただその感じだともはや時間の問題にも見えるがな。とりあえず私はそういうつもりで説得をするから、問題が拗れる前に嘘を真にしておくことだ」

すぐさま顔を上げて何やら言葉になりきれていないぶつ切りの反論をあれやこれや漏らすものの、ライア王女は軽い様子でいなして背中を向ける。そのままさっぱり話についていけない僕を藤沢さん共々部屋に残し、最後に彼女は振り返った。

「では後の処理は全て引き受ける。君たちはダイガクの方へと戻りなさい。二ホン国の兵士は相変わらず正門前に待機をしているようだから、早めに吉報を伝えてやると良い——それとヘレナ。頑張れよ」

結局終始淡々とした様子で、川崎さんとの関係もよく分からないままに、部屋の外にライア王女の姿は消えていった。さつきまで部屋の外に待機をしていた衛士たちの姿もいなくなり、いつの間にかこの広い部屋の中には僕と藤沢さんだけしか残っていないかった。

「……僕らも帰ろっか。後の処理は、上がやってくれるさ」
「あつ……えつと」

なぜかフリーズしている彼女の手を引いてみると、そこでようやく藤沢さんはハツとした様子でこちらに顔を向けた。さっきの状態からまだ顔が紅く、なんだかソワソワとしながら僕の顔を見たり視線を外したりと忙し気だ。どう見たって普段の彼女と比較すると浮足立ったように見えてしまう。そこでようやく、彼女にフオローを入れてなかつたということに気が付いた。

「大丈夫だよ。僕は君のプライベートには立ち入らない。藤沢さんとそのお相手のことは、平塚先生をはじめ誰にも絶対に漏らさないから安心してね」

「……そうだ、レイはそういうのだった……私だけが馬鹿みたい」

そういうのとはご挨拶な。せっかく親切心から声を掛けてあげたというのに、藤沢さんはぼそりとそう呟いた。みるみるうちに彼女の顔の赤みは引いていき、そしてジトつとした目でこちらを睨みつけてくる。元通りと言えばそうかもしれないけど、ただの一言でここまで普段のちよつとご機嫌斜めな藤沢さんになるというのは正直予想外だった。何か地雷に近い何かを踏んだのかもしれないが、これ以上踏み込むと更なる地雷原に突入しそうだからやめた方が吉だろう。

「それと、まだ私たちには大きな問題が残っているの。レイの不在を良いことに、ライルの名の元に報告会を邪魔しようと思んでいる連中がいる。レシルちゃんをあなたの代理にして誤魔化そうとしているけど、早く戻るに越したことは無いわ」

彼女はやや険しい顔つきでそう言うのと、僕の手を引いて歩き始めた。手から伝わる彼女の手の温かさからは、さつきまでのすがるようなものじゃなく、明確に僕を引っ張って行ってやろうという意思を感じる。その頼もしさに不思議と笑顔が浮かぶ傍らで、最後に残された仕事に再び気合を入れていく。

「……それと全部が終わったら、レイに言いたいことがある。絶対に、逃げないでね」

「これから同じところに行くんだろ。逃げる場所も余地も無いでしょうに」

冗談めかして言ってみれば、彼女もそうねと小さく笑みを浮かべた。煤と化した扉の破片を踏み越えながら、僕は最後の戦いへと挑む。ファンタステイク・アカデミー。これを成功させるためにエルトニアやうちの大学の面々、そして一連の問題の裏側で動く川崎さん、各所のメンバーが多く時間を費やしてきたのだ。そう簡単に邪魔をさせるわけにはいかない。

その7

王宮から外へと出る道すがらは、こちらが一応は部外者であるにもかかわらず衛兵に呼び止められるといったトラブルはなく、思いのほかあっさりとしたものであった。多分ライル殿下やライア王女に付き添っていたためか道中にはあまり衛士の人たちの姿は見えず、その中で時折ばったりと出会った人はずんずんと歩く藤沢さんの姿を見て姿勢を正す始末だ。

仮にも十年來不在としていた王女のはずだけど、一応は彼らにも藤沢さんの正体は知っていたようだ。ただ彼らの敬礼が妙にきびきびとしていたのが気掛かりだった。まさか僕が拘束されてた大部屋に彼女が駆けつけてきた際に、ものすごい憤怒のオーラを纏ってたんじゃないだろうな。そう頭のなかで考えたけど口には出さなかった。藪をつついたら蛇どころか猛虎が飛び出しかねない。

そんなわけでもどり着いた正門には、当然のように機動隊の面々やごっつい車が待機をしてきた。こちらの姿を視認するや否や、待つてましたと言わんばかりに機動隊員に護送をされて藤沢さん共々車に押し込められ、あれよという間に車は王宮に背中を向けて走り出す。それを見送る正門守護の衛士さんたちは、もはやげんなりとした表情を浮

かべていた。彼らも正直なところ巻き込まれた側だ。僕が招致されてくるのを待ってたらいきなり機動隊が、そして藤沢さんに乗せたヘリコプターまでもが出現するなんて、実害は無いにせよ災難が過ぎるといふものである。

危惧していたような交通渋滞はさほど酷くはなく、道中で機動隊に乗せたマイクロバスと別れた後乗り合い馬車たちの流れにのって、うちのキャンパスが間借りするエルトニア王立騎士学園の正門口に到着したときは三十分も経ってはいなかった。同乗したSPの人に礼を告げてキャンパスへ向かうなか、ここまでの道で予想通りある人物が居なかつたことを思い出す。

川崎義春。とうとう日本の臨時代理大使としての地位にまで上り詰めた、外務省の若い役人だ。今日という特異な日の裏で、その影が見えかくれしている人物でもある。彼の姿は王宮を出てから研究棟のエントランスを潜るまで、結局欠片も見えることは無かつた。

* * *

「…………え。あれ、平塚君? ……いやちよつと待てや、どゆこと?」

時間の上ではちょうど数分前から会の方がスタートしている。幸運にも早めに王宮から解放されたけれど、開幕には間に合わなかったのだ。大会議室の扉はもう閉められ、外には遅れて参加をする人の対応のために一部のスタッフが残っているという状況である。息を切らした僕と藤沢さんを迎えたのは、そんなスタッフの一人として受付業務に勤しんでいた先輩助教の一人だった。

「ええと、君さつきまで平塚先生と一緒にあったよな。今ちようど開幕の挨拶をしてるはず……えっ?」

僕の姿を二度見した彼は、頭の上に大量のクエスチョンマークを浮かべている様子だ。その混乱については、既に藤沢さんから僕が拘束されてた間に起きたことをかいつまんで説明してもらったから理解はできる。

「少々込み入った話なんですけど、多分梅田さんが見たのは不在としていた僕の代理で入ってもらった親族の者です。無論通常であればそのようなことなど考えられないことですが、特異なこの場ではそれしか無かつたんです」

普通の学会で出席者が自分の不在を埋めるために無関係の親族を立てるだなんて、馬鹿を通り越して非常識で理解不能な行為だ。でも今日の間報告会ではその非常識な策がむしろ必要になりにかねない事態なのである。

——平塚礼二という日本人が、エルトニア第二王女の失踪を企てた。それを調べるた

めに、ライル殿下直々にその人物を取り調べしているのだ——

なんとという根も葉もない、妄言にも程がある。しかしそのぶつ飛んだ理論を盾にして、今日この場には報告会をぶち壊してやろうと企てている輩が数名紛れ込んでいられる。その情報を聞きつけたレシルが今朝方こちらに来てその旨を平塚先生に伝えたところ、傍から見て僕がいけないようには見えなければ良いのだろうという狙いのもと、レシルを僕そっくりに変装させて代打で送り出すというこれまたぶつ飛んだ采配を行うに至ったとのことである。

確かに彼らが僕という人間の不在を突破口にして切り込んでくることが予想されるから、その前提条件を無くしてやろうというのは分からない話ではない。平塚先生は普段から真面目な風に見えて時折このようなねじの飛んだ行動を起こすのだから、一応は自分自身であるとはいえ中々に意外性のある人物だと感じる。

「なんとというか、終日不在にすると思つてたらそれがキャンセルになって、そして本当はご家族さんが代理で出て、しかも本人はなぜかこの場に戻つてきてるって。混乱するわこんなもん」

先輩助教は腕を組んで少しだけ考えるそぶりを見せたが、結局分からんということ为首を振つていた。正直なところ、僕だつて自分が部外者ならばこんなことをいきなり言われたところで到底すべてを飲み込むことなんかできないだろう。それだけこんがら

がった状況というわけだ。

「……で、ちょうど今中で君の親族さんが壇上において、開幕の挨拶が始まったところや。そんなところにそっくりさんの君が現れたらもう意味不明やから、中を確認したいなら映写室の方からが良いよ」

まだ到底納得はしきれていないが少し焦った様子の僕たちに配慮をしてくれたのだろう。先輩助教は更に何かを問いかけてくることも無く、さっさと行きいやとそのまま受付の右側にある扉を指さした。後で何かしらの納得いく説明をしようと思いつきながら、藤沢さん共々会釈をして彼の親切心に乗じることとひた。

大会議室の二つの入り口に挟まれる格好で位置しているあまり目立たないこの扉は、大きなスクリーンに投影するための装置が備えてある映写室へ通じている。会議室がもはや小型の映画館とも言えるサイズだから、システムをコントロールする機器をまとめたら小部屋一つが出来上がった次第である。大会議室内の面々にばれないように内部を伺うには、ちょうどいいロケーションだ。

映写室には幸運なことに誰もいなかった。照明やプロジェクターの操作は会場の方からでも可能であり、こちらで直接操作しなければならぬ事象はそうそう訪れることはないのである。映写機の隣の小窓からはやや薄暗い大会議室を一望することができ、先ほど先輩助教が言っていたように銀色の短髪が目立つ一人の司会者が壇上にて佇ん

でいる……短髪？

「……レシルちゃん、格好をレイに似せるため自分で髪の毛を切り落としちゃったのよ」
「ああ、そういう……」

言葉端は特に何も思っていないように心掛けたけど、彼女にそのような決断を強いてしまった自分の行動に、改めて歯がゆく思った。僕がそもそもライル殿下の呼び出しに応じるなどという決断をしなければ、レシルが代役としてこの場に居なければならぬことなんてなかったのだから。

そして彼女だけではなく大会議室全体を俯瞰していると、どうやら僕たちが危惧していたことが起こり始めていたようだ。僕に扮して壇上であらかじめ教えられていたであろう開幕の挨拶をしていたはずのレシルは、その視線を鋭いものにして聴衆の中のあ
る一点を見つめている。

『ライル殿下は、たった今この瞬間にレイジ・ヒラツカという名前の男をある容疑で取り調べておられる。何故別所に居るべきその人物が今壇上にいるのだ!!』

部屋を隔てる小さな小窓の向こう側で、聴衆の中一人立ち上がった青年が壇上を指差して大声で叫ぶ。他の聴衆はもちろんのこと、講演者として予定されているうちの先生方も何事だと振り返った。

『座長の平塚です。お言葉ですが、私平塚礼二はここにいますよ。それと開会式の最中

につき、静肅に願います』

『お前などではない!! 本名、ラスティレイ・フォルガント。お前達日本人のふりをした、エルトニアの売国奴だ!!』

人一人を凍らせそうなほど鋭く冷徹な視線で青年を眺めるレシルに代わり、最前列の座長席にいた平塚先生が飄々と淡々をまぜこぜにしたように答えた。しかしこれが好機と見たのだろうか、青年は一度開いた口を閉じる様子はまったく見られない。それどころか、会場の数カ所から彼を擁護する野次まで飛ぶ始末だ。

エルトニアの売国奴とは、随分とした言いぐさだ。あくまでも魔法というものに見切りをつけて科学へと復帰を果たしただけのことを、事情を何も知らないただの未成年の貴族子息が好き放題言ってくれるものである。思わず握りこぶしに力を込めていた僕の肩に藤沢さんの手が添えられなければ、舌打ちのひとつでも漏れかねなかった。

『その男は、十年前に行方不明になったエルトニアの第二王女、ヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニア殿下の失踪に関わったという疑いが濃厚だ。それにも関わらず、このダイガクの人間は事態の揉み消しを計り、代理の者をこの場に立たせるなどという暴挙すらも敢行した!!』

大会議室のざわめきがにわかになきくなる。エルトニア側の参加者は今日の司会者がそのような事態に関与をしていたことに驚いているのだろうし、うちの先生方はこん

な会で聴衆が会議の進行を邪魔している事実に対してカルチャーショックを感じてることだろう。

レシルが僕の身代わりとして壇上に上がったと聞かされて最も危惧していたことが、身代わりを使ったという事実そのものを紛糾されるということである。彼らにとつて平塚礼二という人間が今日この場に居ないことは確定事項であり、こちらはその居ないべき人間があたかも何ら問題なく出席しているように装おうとした。相手側に切り込み口を与えないようにという作戦は、逆に言えばその矛盾点を真正面から突っ込まれば弱点にもなりうる。彼らは、平塚先生が想定していたよりもこの会を台無しにしようという意気込みが大きかったのだろう。

『壇上にいる貴様、正体を述べよ!!』

『……ボクの名前は、紛れもなくヒラツカ・レイジです。有りもしない疑いで、この会の進行を阻害しないで頂きたい』

そしてこの青年や同じく野次を飛ばす数人の参加者擬きたちは、壇上で僕に扮しているレシルの正体を知っている。特に何の捻りもなく自分を平塚礼二と言い張る彼女に対し、彼らから待ってましたと言わんばかりに追求が続く。

『あくまで白を切るつもりか、レシルティア・フォルガント!! 貴様の正体など既に明らかだ。浅はかさが露呈したな、氷の魔女めがッ!!』

吐き捨てるような言いぐさに加え、飽きもせずはその呼び名を口にしたのか。思い返せば彼の後ろ姿には見覚えがある。おそらく、レシルの二面性を初めて知った時に噴水広場にて彼女と対立していた青年なのだろう。レシルを再び糾弾する背の高い青年に、言いいのない敵意を抱く。本当ならばその胸ぐらに掴みかかつてやりたい。好き放題邪魔をしやがって、妹へ再三の侮蔑をしやがってと。だけど、今僕が大会議室に走り込めば全てがおしまいだ。僕らが今回の一件を取り繕っていたのが明るみになり、強硬的な大学否定派閥の迷惑通りになってしまう。

「……レイ、耐えて。さつき平塚先生からメールが来てた。とっておきのカードがあるから、早く戻ってこれても絶対に手を出さなつて」

小窓ひとつ隔てた先の光景に同じく険しい表情をむける藤沢さんが、そう言いながら携帯電話を差し出してきた。画面には一通のメール、送信者は平塚先生になっている。受信時間は王宮を出た少し前で、その文面は確かに僕たちの手出しは無用としつかりと記されていた。彼には何らかの奥の手があるのだろうが、現実はどうどんと調子に乗せていく青年達。とてもではないが、全うなシンポジウムの進行具合などとは言えない。『壇上にいるあの人間は、本物のレイジ・ヒラツカではなく、その妹であるレシルティア・フォルガントだ!! 我らの至宝たる第二王女ヘレナ殿下の行方をひた隠し、そのうえその罪を嘘で塗りたくったお前達の報告など、何の価値があるというのだ』

誰も彼もが何も言い返すこともない空間で、青年達の紛糾が響き渡る。正直なところ、僕の内心は会が自分を理由にされて台無しにされてることに憤り、そして取り返しのつかない事態になることへの焦りで満ちている。僕だけじゃない、僕を押し止めていたはずの藤沢さんの手でさえ、肩の上からわなわなという震えが伝わるほどだ。心なしか不自然な熱波までもが感じられる気がする。

それだというのに、レシルは相変わらず冷徹を極めた視線で彼を眺めるだけで、そこに怒りや焦りといった感情はまったく現れてはいない。平塚先生については表情に感情が出ることは稀な話ではあるけど、それでも普段となんら変わらない姿勢を崩す素振りも見られないのだ。好き放題紛糾を続ける青年達やそれに何事だとざわめきを漏らす聴衆達とは、不自然さすらも感じされる対照具合。まるでここまでの全てがまるで規定路線であるように――

『我々』エルトニア青年騎士の令、は、お前達二ホン人など――』
『失礼。この茶番劇はいつになったら終わるんだ?』

未だに勢いそのままに続くと思われていた青年の追及に対して、疑問と具現を混ぜ合わせた文言が覆い被された。途切れる青年の紛糾、そして声の発生源を探して彼は周囲を見回す。僕も彼の周囲にそのような人物がいるのかと薄暗い空間に目を凝らす、しかし全く見つかるとは様子も見えない。

『座長のヒラツカ先生、発言許可を頂いてもよろしいか』

『ええ、どうぞ。何ら問題ありません』

そして目を凝らしていた一般参加者の座る区画ではなく、講演者や大学関係者の座る会場の左前方からおもむろに手が上がる。立ち上がった人影は、薄暗い部屋の中においても明らかに恰好がその座席区画に座る人間にしてはそぐわないように見える。その人物はフォーマルなスーツやジャケットといった出で立ちなんかでは全くなく、むしろエルトニアの貴族のような礼服を身にまとっていた。

『ありがとう。私は現フォルガント家当主、テオル・アルマルク・フォルガントだ。もう一度だけ確認させていただこうか。君のその取るに足らんと太話はいつ終わるんだ』

茶色の髪をオールバックのようにまとめ上げ、ほの暗い会議室の僅かな明りの中で無機質な碧眼を青年に向ける一人の男性。なぜこの人がここにいるという疑問が浮かび、そして同時に彼の存在こそが平塚先生の切り札なんだということを理解させられた。あれはフォルガント家当主に間違いない。意識してその声や姿を確認すればそんなことはすぐに明らかになった。仮にも今の人生における実の父親のことは、そう簡単に忘れられるものじゃあない。

この国の貴族階級に属する人間だったら彼の肩書の重さは把握しているだろう。何たってエルトニアにおいて王族に次ぐ強権力を持った六大領主の一つ、フォルガント家

の人間だ。それも妹のように庶子としての身分なんかではなく、むしろ頂上たる当主である。いきなりの闖入者に対して飛ばされ始めた野次が、その身分を示された途端にすべてが嘘のように途切れる。

『おい、その君。今壇上に居る者が私の娘であると言ったな。その根拠は何だ』

『あ……えっ……わ、私はリユードベリ子爵家の長男——』

『君の名前など聞いていない。偽物だと壮語した根拠を述べよと言っている』

有無を言わさぬ威圧感。年齢的な差もあるがそれはさておき、子爵家と国の一部の統治を王家から任された公爵家では家の位に雲泥の違いがある。あの人を前にしたら、ただの騎士学園の生徒でしかない青年は到底太刀打ちできるわけがない。事実、公的な場におけるルールでもある自分の名前の紹介も、必要ないとフォルガント公に突っぱねられた。威勢の良さなんて幻だったのではないのかと思うほど、青年の表情が青く染まる。

『ラストイレイ君は……今しがたライル殿下によって王宮で取り調べを……』

『二ホン国のアカデミーの研究員を君付けとは、お前は随分と位が高いようだな。そしてラストイレイが取り調べを、か。ならばあの“ラストイレイ”は一体誰なんだ？』

フォルガント公はそう言っただけで壇上を、紛れもない僕本人だと指し示す。その瞬間から、もはや青年の勝ち目は万に一つもなくなつたと言つても良かっただろう。

『それは……妹君のレシルティア様で——』

『自分の発言には責任を持つことだ。親であるこの私が娘と廃嫡したとは言え実の息子を取り違えていると、君はそう言っているのか?』

立場のある人間が白いものを黒と言い張ったら、それを白であると反論するのは難しい。公爵家の人間であり、しかも実の親でもあるフォルガント公が壇上にいるレシルティアを僕だと言いきつたら、蚊帳の外の人間である青年一人がどう喚いたところでひっくり返すことなど出来やしない。

『一度ライル殿下に確認をしてみれば良い。本当に今日この時間に、レイジ・ヒラツカの招致を行っていたのか。恐らくそれは、情報伝達時の誤りか何かだろうがな。これ以上何かあるようならば、次は君の家の人間をエルドリアンに寄越すことだ』

そして唯一の取り付く島であるライル殿下についての話も、フォルガント公にここまですっきり切られてしまった以上掘り下げることなんか出来やしない。正直なところ今日に起きている一連の事象について全容を把握しきれていない僕にとつては、彼が何故そこまでライル殿下に関してそこまで誤りだと主張できるのかは分からない。しかし公爵家の当主である彼がそう断言できるだけのからくりがどこかに存在することと、青年たち強硬的な大学否定派閥はこのシンポジウムで好き勝手騒ぐことが不可能になったことは断言できる。

『……一時的な中断はありましたが、これにてシンポジウム開会の挨拶を終了致します。平塚助教、ありがとうございました。それでは本日最初のご講演に移ります。講演者は本学教授、浜松仁先生です。講演題目は——』

呆然とした様子で立ち上がったままの青年を置き去りにするように、平塚先生の淡々としたナレーションが会場内に響き渡る。壇上から降りるレシル、それに入れ替わるようにパソコン片手に登壇する浜松教授、講演者情報を読み上げる平塚先生、そして何事も無かったかのように再び座席へと腰を下ろしたフォルガント公。会場内の誰もが立ち竦んでいる青年からは意識を外し、今まさに行われんとしている講演へと興味を寄せる。

浜松先生の穏やかそうな口調でプレゼンテーションが始まるまでには、いつの間にか力なく座る青年や彼に味方をして野次を飛ばしていた数名など最初からいなかっただかのような雰囲気は会議室の中に漂っていた。

「……一件落着、なのかな」

「ええ、多分。次の休み時間でこっそりと先生にコンタクトを取りましょう。ポスタープレゼンまで先生に任せるわけにはいかないもの」

心底安心したような表情で、座席に戻るレシルの姿を見つめる藤沢さん。無論僕も、最悪の場合僕自身が出ていかなければならないと覚悟をしていたうえでこうやって事

態が落ち着きつつあるのだから安堵は感じている。でもそれ以上に、シンポジウムで起きていたトラブルでさえもが不自然とも言える収束をしたことに、違和感はどうしたつて拭えない。僕の隣で今日のタイムスケジュールを見せてくる藤沢さんにありがとうと言いつつ、その内心では“彼”に聞くべき事柄を頭の中で整理をしていた。

その8

いくつかのハプニングをほらみその都度継続が困難になるかと思われた中間報告会は、結果的に見ればスケジュールにあった全行程を無事に終了しつつある。会の本番も、レシルが僕の代わりに代理で行った挨拶で起きたいざこざで一時はどうなるかと思われたけど、その後は嘘のようにスムーズに進行したのだ。

あの場で状況を持ち直せたのは、フォルガント公の鶴の一声だけではなく、一般の参加者や大学関係者のみならず強硬派ではない大学計画への反対派閥までもが強硬派の過激な意見に耳を貸さなかったことが大きかったのだろう。前に聞いていた通り大学計画の反対派も一枚岩ではないようで、質疑応答の時間には大学で取り扱う技術の信用性やエルトニアにおける展望の是非を問うといった建設的な議論がいくつかなされる場面もあった。その一方で、ポスタープレゼンが始まる頃には、レシルに対して威圧的な発言をしていた青年やその仲間たちの姿は消えていた。本日最後のイベントである立食パーティーの会場には、もうそのような異物は存在しない。

「……僕は一体誰に挨拶すりゃ良いんだろ」

「んなこと俺に聞かれてもな。絶対にレイの方が万倍はこっちの事情に詳しいだろう

に。フォルガント公には済ましたのか？」

「あの方についてはさっきのポスタープレゼン時に感謝の意を伝えておいたよ。なんとたつて彼が今日居なければ、全部おじやんだつたし」

その立食パーティーの会場である、普段はうちの学生や教員しか使えない食堂にて、適当にそこらへんから持つてきたソフトドリンク片手に隅っこで会場の喧騒を眺める。僕ら大学側の人間がスーツやカジュアルなジャケットを着た出で立ちの面々が多い一方で、エルトニア側の参加者は少しおしやれ気味の儀礼服を身にまとつた人びとが目立つ。見事にはつきりと見分けることができる格好の違いではあるけど、双方が料理をつまみながら会話を交わす光景は全うな交流会のそれである。

そんな全く異なる価値観や文化をもつた人々が意見を交わす中で、その中間に立つているとも言つて過言ではない僕は、特段活躍するわけでもなくこうやって同じ研究グループに属する平塚先生と無駄話に興じていた。本来であれば周囲の面々を見習つて動き回るのが研究者の好例なのは分かつてる。でも挨拶回りではなくて本当にやらなければならぬことは別にある。そしてそれ以上に、今の僕には意見交流に飛び込むだけの気力は正直なところ尽きていた。

当たり前のことだけど、一日は24時間という長さで成り立つている。でも今日あつたことを整理してみるととてもじゃないけどその範疇に収まらない気がしてならない。

今日の頭から既に何かがおかしかった。藤沢さんを取り返そうと画策するライル殿下に王宮へ呼び出され、そこで椅子にがんじがらめに縛られて国際問題上等の監禁状態となり。そこへ藤沢さんが乱入してきて自分の正体を明かしながらまさかの殿下と殴り合いに発展し。更にライア王女が嵐のようにすべての問題を取りまとめ、そして早々に大学の方へ舞い戻ってきたのだ。それだけじゃない、僕がいない間は中間報告会でもトラブルがあり、ライル殿下の名前を借りた過激な若者達が報告会をオシヤカにしようとして画策までしていた。結果的にどれも致命傷を負うことなくここまで漕ぎ着けたけど、精神にかかった負担は無視できるものではない。

「ほら、藤沢を見てみる。助教がこのザマなのに、随分と精力的に動いているじゃないか」

「……僕はもう40近いんだ。若いのとは違うんだよ」

「ほざけ。20にも満たん子供が偉そうなことを言うもんじゃない」

実際に40へ差し掛かっている先生に対して皮肉気に返してみれば、ため息を吐かれると同時に頭をガシツと掴まれた。相も変わらず背だけは高いだけあって、僕自身がそこまで小さいわけでもないのに二人並んだ様を見たら年齢差もあって大人と子供のよいうな対比になってしまう。そのデカい方が小さい方の頭を掴んでわしゃわしゃとしてくるなんて、親が子供を叱りつけるという構図そのものだ。

なんとか彼の手を引きはがし、そして彼が言及した藤沢さんへと目を向ける。平塚先生の言うとおり、僕と同じく一連の事態の中心近くで動き回った彼女は、エルトニア側の参加者の面々に話しかけたり談笑をしていた。本日の後半のポスタープレゼンテーションにてうちの研究グループの説明をした一人だけあって、うちで扱う技術の応用や展望など話の種はまだまだ尽きないのだろう。平塚先生から座長の任を引き継いだ後は特に何にもしていない僕とは大違いである。

そんな彼女ではあるが、今日の会が終わった後には本日の総括か何かを話し合うのだろうか、彼女に時間を寄越せと言い渡されてはいる。藤沢さんも僕と同じく朝っぱらから色々あったというのに、今日の終わりまでそういう姿勢であり続けるとは見習いたいほどの勤勉さだ。

「藤沢とレシル君は今日のMVPだよ。そういえばレシル君はどうしたんだ」

「彼女は休憩時間に僕と入れ替わった後、他の人にばれないように校舎の裏手から離脱したよ。フォルガント公にあそこまで堂々とはつたりをかましてもらったんだ。それなのに僕とレシルが同時にこの場に存在したら流石にマズいからね」

長い銀髪をこざっぱりとした短髪にまとめあげ、僕の部屋から引つ張り出してきた予備のスーツを身につけたレシルの格好は、近くで見ると改めて僕と異様に似ているなど感じた。その彼女と向かい合う様を見た藤沢さん曰く、まるでミラールームか何か

のようだとのことである。

本当ならばこの立食パーティーの場においても功労者たるレシルと歓談したいものであるけど、僕とよく似たそっくりさんが報告会の会場にいることが他の参加者に見られてしまうとフォルガント公がやってくれたはったりが意味を為さなくなる。だから後日に何らかの形で埋め合わせをするということで、レシルとは一旦分かれたのだ。

そんなわけでこの場にレシルの姿はない。ちなみに先ほどフォルガント公に挨拶と感謝の意を伝えようと顔を会わせた際に、レシルは居ないのかという問いかけをされた。事情が複雑であるため一度帰してあるという旨を伝えたところ「そうか」という短い答えが帰ってきた。返答としてはあっさりとした物ではあるけど、ほんの少しばかりの気落ちした様子を垣間見た気がする。もしそうだとしたら、レシルに会えなくて残念がるだけの意識はあるようだ。

こうして平塚先生と駄弁っている間にも特段何の問題も起こらず、平塚先生は再び挨拶回りに出撃しようと机に置いていたグラスを持ち上げた。そこで彼は何かに気が付いたように僕の肩を叩いてきた。

「ほら、レイ。奴が外務省の手先だろ」

「手先って……まあ、そうだよ。彼が川崎さん、何度か顔は見てるでしょ」

酔つて気分が良くなつたのだらうか、真顔ですつとぼける平塚先生を適当にいなしながら彼が手で指し示す方へと視線を向ける。フォルガント公と何らかの言葉を交わしている、スーツ姿の若い男性。間違ひなく日本の在エルトニア臨時代理大使、川崎義春だ。

「見た目は若いんだが流石は外交の人間だ。今日フォルガント公に一芝居打つてもらつたのも、彼の提案さ」

先生の言葉を聞いて、やはりなと思う。僕や藤沢さんとは違い、平塚先生はエルトニアにおいては特段の人脈は築いてはいない。そりやあ当然だ。一度こちらの世界に転生をして曲がりなりにエルトニア人として過ごした経歴のある僕とは違い、彼は順当にアカデミックの研究者としてのキャリアを積んできたのだから。あくまで一般の日本人研究者に過ぎない彼がエルトニアの北西部を統治する地方領主たるエルトニア公と話を付けるだなんて、彼だけの人脈からは考えにくい話だった。そうなれば仲介となつた人間が存在して然るべきだ。一度フォルガント公と直接話したことがある川崎さんならば、その仲介たる存在になつていてもおかしくはない。

やはり彼は今日の一連の出来事に際し、何らかの形で関わっている。この日に僕が絶対にやらなければならぬこと、それは川崎さんと一対一で話をする事だ。一体どこまでが彼の手のひらの上での出来事だったのか、それを知らなければ僕自身が納得をす

ることが出来ない。

「……川崎さんにちよつと挨拶してくるね」

「そんじや俺もまた挨拶巡りにでも行くかね。それと最後に、おっさんからの明日に役立つ小話を一個だけ伝えてやろう」

フォルガント公との挨拶を終えて会議室の外へと向かう川崎さんを追いかけようとしたところで、平塚先生に呼び止められた。何事かと振り向いてみれば、少しだけ苦笑いをしている先生の姿が目に入る。

「相手がこつちを利用してしようとしているときは、逆にこちらも相手を使い倒してやろうという気概を持って。利用されつ放しは割りに合わんし、何より出世も出来ん。レイも人を使う立場になりつつあるんだから、そういう意識を持ってよ」

「……例えばその相手が、公共のためを思っているも？」

「ああ、勿論。相手のためになってやるのは前提で、その上で己の利益も追及してこそだ。100パーセントの受け身には、ならないにこしたことはないさ」

僕たちがいつの間にか川崎さんの計画の上に乗ったことを、おそらく先生は気が付いているのだろう。そして彼は川崎さんの計画に乗ったうえで自分の目的も達成している。大学反対派が引き起こした面倒事を最小限に抑えて、今回の中間報告会を乗り切るという形で。僕も本当ならばそういう割り切りが出来なければならぬ。何たって、もうこ

の身は既に学生ではないのだから。

* * *

「おや、平塚さん。色々トラブルはありましたけど、今日は本当にお疲れ様でした」

校舎の前に停めてある車に乗り込もうとしていた川崎さんが、エントランスを出た僕を見つけてドアに掛けた手を外した。今日の朝見た時と何ら変わりはない、いつも通りのスーツ姿に人当たりの良い笑顔を浮かべてこちらに歩み寄ってくる。しかしそれに対峙する僕は、お世辞にも普段通りの様子とは言えないだろう。

「……どうしましたか？　あまり気分が優れないようならば、お早めに休まれた方が良いかもありませんよ」

「いえ、問題ありません。今日一日色々としていただいたようで、ご挨拶をしようと思ひまして」

多分僕の険しい顔を見て疲れていると思ったのだろうが、それを否定する。そして色々との部分を強調して話してみると、彼の眉毛が少しだけ動いた。

「そうですね、確かに色々ありましたよ。貴方をお送りしたり、機動隊に出勤要請したり、後処理に奔走したり……こんなトラブルはこれつきりにしたいものです」

しかし結局彼の調子は特段変わらず、苦笑いを浮かべて頭を掻いている。今日の頭から終わりまで、様々な事柄の対応に追われたと彼は言う。確かに今日の川崎さんは一見して、藤沢さんとライル殿下を巡るいざこざと大学の中間報告会の最中に勃発した妨害騒動の双方の対処をするべく、動き回った功労者だ。しかし果たして本当にそれだけなのか。ライア王女が事態を取束させたりフォルガント公に話をつけていたりという、最初から今日のような事態が起きることを見越していたかのような周到さ。一度疑いを持つと、もはやこの人の人の良い笑顔が仮面か何かには見えなくなってしまう。

「……腹の探り合いは苦手なので、まどろこしいやり取りは無しにしましょう。今日の一連の事象、何処までが川崎さんの計画なんですか」

「け、計画って……考えすぎですよ。私はあくまで今日起きた全ての出来事にやれるだけ奔走したに過ぎません」

目を細めて首を振る川崎さんを、意図して陰しく冷徹な視線で見つめる。彼の無害そうなその仮面を取り払うことにもはや然したる意味など無い。しかしこのままやられっぱなしでは、僕の気が収まらないのだ。

「……過激な大学反対派とライル殿下の関係を断つことで大学の地盤が強固になった。ライル殿下が僕を拘束したことをエルトニアの不祥事にまで昇華させて、敢えてそれを追及することなく見逃した。建国以来他国の侵略を受けたことのないエルトニアの宮

殿前に正統的な理由によって治安維持部隊である機動隊を展開させて前例を作った。そして、立ち位置が曖昧だったヘレナ・ヴィクトリウス・エルトニアの身元を日本国帰属とした」

パツと思いつくだけで、今日という一日の中でこれほどまでにエルトニアと日本という二つの国が関与する問題が起きている。そしてその全てで、日本はエルトニアに対して有利な立ち位置にいくような結末へと至った。

「最初から気が付くべきだったのかもしれない。外交官であるあなたが、一時的とはいえ一国民である僕をそうあっさりとライル殿下のもとに行かせるのか。そして解決に外交的な話し合いではなく藤沢さんを乗り込ませるといふ方策を取るのか。機動隊の配備だつてそうだ。電話で呼び出して30分やそこらで装備の準備を全て済ませてキャンパスの外に待機しているなんて、よくよく考えたら不自然です。多分あなたは前もって話を通していたんだろう」

そもその切っ掛けである、僕の王宮への参考人招致。僕がそこへ赴くことで、波乱に満ちた一日が幕を開けたのだ。あくまで僕は自分の意志でライル殿下のもとに話を聞きに行こうという選択をしたと思っている。しかし冷静になれという一言を掛けず、にそのまま僕の背中を見送ったのは、僕にその知らせを持ち込んできた川崎さんだった。

「……もう一度確認させてください。どこまでが、川崎さんの計画だったんですか」

絶対に答えてもらおう、そう強く念じる。停車している車のエンジン音や背後から聞こえる懇親会の雑音も耳には入らない。あくまで川崎さんの放つ一字一句にのみ意識を向けるのだ。その疑似的な静寂の空間に、乾いた拍手が響き渡る。あきらめたように苦笑をし、そして手を叩く川崎さんは、ようやく硬い殻を開ける気になったのだろうか。

「そりゃあ気が付かれますか。今日は全てを欲張りすぎた。もう一手と欲張るうちに計画していたすべてを達成してしまうなんて、厄日であると同時に佳日でもあると思っただけ」

彼の顔に浮かぶ笑顔、それは本音を隠すヴェールを脱いだということを示している。人の良さを感じさせるような苦笑いなんかじゃない。爽やかさと残酷さを同胞するような、本心からの純粋な笑いだ。どこことなく鋭さを増した彼の目が、再びこちらへと向けられる。しかし僕は絶対に視線をそらさない。外務省在エルトニア臨時大使の川崎義春という人間そのものを、ようやく目の前に引きずり出したのだから。

その9

「それで、どこで気が付かれましたか？」

「ライア王女が介入したところでようやくおかしいと思えましたよ。ライル殿下がやらしたことは結構な問題なはずなのに、あの人の様子は淡々とし過ぎていた。まるで最初からこうなることを知っていたかのように。その彼女に状況を伝えうる人間なんて、臨時大使の川崎さんくらいです」

川崎さんは核心を突かれてうろたえるどころか、僅かな微笑みをたたえてさえいる。そして殻を破ったところで彼の本質は見えては来ない。これはボロが出ましたなんて様じやない、別に計画遂行がばれようが何ら問題は無いということか。

「まったくあの人は……ライア様は良くも悪くも表情と行動が淡々に過ぎますから。十年来の妹さんとの再会に違いは無いのだから、もう少し驚いて見せれば良いものを」

エルトニア側の日本への窓口がライア王女が率いる派閥であるのならば、対エルトニアの使節の代表者たる川崎さんはライア王女と幾度か顔を合わせていてもおかしくない。しかし彼がライア王女についてそのような苦言を軽い調子で呟く様を見ると、双方の関係性は僕が想像している物よりも友好的なものである可能性が高い。少なくとも

も今日のスムーズな情報伝達から考える限り、川崎さんとライア王女の間には何らかの専用の連絡手段があってもおかしくはないだろう。

「それでどこまでが私の計画だったか、でしたか。信じていただけるか、は平塚さん次第ですが、発端であるライル殿下の暴走は全く関与はしていませんよ」

つまり、中間報告会が行われる重要な日にライル殿下が動き出したのは、川崎さんの計画の範疇には無かったということだ。切っ掛けが彼の計画ではないということは、あくまで今日あつた一連の出来事を狙って起こしたわけでは無いのだろう。しかし、それでも彼が動く兆候を知らなかったとは到底思えない。

「数日前、僕はあなたに提言しましたよね。ライル殿下が本当は藤沢さんの正体に気が付いているかもしれないって。だけどあなたはその仮説を否定した。その時はあなたの説明に納得はしたけど、今では到底そうは思えない」

「……つまり、私が敢えて本当の情報を伝えなかったとお思いのですか。それはある部分では正解かもしれませんが、私からすれば誤解ですよ」

やや肩をすぼめて心外そうに話す彼を、鋭く見据える。何が嘘で何が正論かなんて、この場ではもはや辞遊びにしかならない。嘘を真のように見せれるような人間でもなければ、今日起きた一連のトラブルを計画の範疇に収めることなんか出来ない。目の前にいるのは、そういう人間なのだ。

「彼は自身の狙いを隠すことに関しては徹底していたようで、ライア様等の外部から見るときはただの大学反対派にしか見えないように行動していたんですよ。おそらく、彼は藤沢さんに近いところにいた平塚さんにしか、本心を仄めかしてはいなかった」

当時のライル殿下からの僕への当たりの強さは、今思えば絶対に僕個人へ何らかの思惑があつたことを如実に示していたのだろう。そして、そんな態度は他の人間には見せていなかったという。

「彼の本心は、ライル殿下が行方不明の王女の搜索を願い出た時に概ね推測できた。しかし彼の狙いについての確定的な根拠が無いまま、今日まで来ました」

「……要は、確定してこない出来事は伏せた、と」

「そういうことです。あの時に平塚さんへ伝えたのは、私個人ではなくエルトニア人物交流室の総意ですよ」

逆に言えば、川崎さん個人の考えは違っていたということか。彼は外務省という組織の人間だから、たとえ個人がどう思っているようが組織の総意に従ったという体なのだろう。しかし彼はその組織でも上位に位置する、大使級の役職であるはずだ。彼の考えが総意に反映されないということは、恐らく敢えてそうしていたはずだ。

恐らく僕が何を問おうが、目の前で仄かに笑顔を浮かべる男は絶対に己が嘘をついていたと発言することはないだろう。ライル殿下が藤沢さんの奪還に執着していたこと

を黙っていたことも、そして今日僕が王宮に行くことと決めるよう誘導したことも、全て彼に非が無いように繕うはずだ。だからとやかく問い詰めたところで全てが徒労に終わることはめに見えている。

「まあ計画とは言ったものの、全ては『偶然』起きた出来事に少しかり手を加えたに過ぎませんよ。ライア殿下についても、事態を打破するために協力して頂いただけです。あくまで偶然の方向性を変えただけのことですから、手のひらで状況を転がすだなんてとてもとても……」

芝居がかった様子で彼は首をふった。確かに手のひらで転がすようなほど川崎さんは積極的な行動をしていない。それどころか、全ての発端はライル殿下であり川崎さんではないのだ。だけどそれだからこそこの人は恐ろしい。他人が起こしたいざこざを上手い具合に操って自分の狙いを通すだなんて、下手な黒幕よりもよほどたちが悪い。

時間にして数秒くらいか。僕は黙って彼を見つめていた。どうしてこの人がというような意外さは不思議とない。むしろこの人ならばそういうこともあるかもしれないという気すらも沸いてくる。

僕の周囲にいる人間は、みんな表情や雰囲気から内面が読み取りやすい人間ばかりだ。藤沢さんは言わずもがなで、平塚先生は僕みたいな身内の人間相手ならば変な隠し

だては基本的に行わない。レシルについては二面性を持っていてもそのどちらもが考えていることが分かりやすい。

そういう人たちと川崎さんは、明らかに毛色が異なる人種だ。彼は東京のキャンパスにレシルを連れてきた時から今まで、基本的に無害そうな笑顔を浮かべていたことがほとんどだった。常に人が良さそうであるということは、言い換えれば何を考えていても内心が分らないということである。だから今日みたいなことがあつたとしても、裏切られたというよりもなるほどと思うことの方が大きいのだ。

「あなたの迷惑通り、日本はエルトニアに対して優位な状況に傾いた。これから先、あなたは何を望んでいるんですか？」

もし彼に何かを成し遂げようという目的があるのであれば、今の状況はあくまで本当の狙いのスタートラインに過ぎない。国同士のパワーバランスを変える等という暴挙に出るくらいだから、まだ腹の中に大きい何かを隠しているのは明白だろう。それを包み隠さず聞き出すのはどうせ無理だろうけど、その一端くらいは教えてもらわなければ割に合わない。

「……いったんはここまでです。直近の何かへの足掛かりというわけでは無く、今は日本が少しでもエルトニアに有利である状況に持ち込んだことに意味がある」

しかし彼は頭を振ってそれを否定した。両国の関係性を日本側に有利とすることは、

手段ではなく目的ということか。

「あなたは散々捲き込んでしまいましたが、ご内密に願いますよ。来年初頭、政府は国内外に向けてエルトニアの存在を公表します。相応の審査を通過した人ならば、誰でもこの地を訪れることが出来る日が来るんです」

「……やはりあるんじゃないですか、とてつもなく大きな目的が」

周囲に誰か他に居ないかを確認した川崎さんが、小声でとんでもない重要な話をのたまう。確かにそんなものを見据えているのならば、多少の無茶をしても二国間の関係性を有利なものにしようとも思うだろう。巻き込まれた側としてはたまったものではないが、一応理解する余地はある。

「ただ一般への公表も、あくまで今後の両国間の繋がりを維持していくための足掛かりに過ぎません。私の本当の目的、それはエルトニアの体質をどうにかすることです」

彼の返答は、しかし僕の予想に反するものであった。普通に考えたら彼のような立場の人間であれば一般公表に向けた事務調整を念頭に入れて然るべきなのに、彼はその先を見据えているとでもいうのだろうか。この国の体質とは何か、と思わずそのまま聞き返す。

「……ライア王女のような改革派が頭角を現す傍ら、まだこの国は保守的な層が多い。拡張主義を忘れていない旧体制の残党たちが、まだ完全には姿を消してはいないんで

す」

紙の表と裏の如く、川崎さんの薄い笑顔が一瞬にして陰りを見せる。今まで見たことが無いような様子は、常に温和な雰囲気を纏っていた彼とは一致をしていない。僕に語り掛けるわけでは無く、まるで彼自身に説明をするように、揚揚と言葉が勢いを増していく。

「この国は歴史に威光を持ちすぎている。周辺国随一の学術都市を持つているからといって、魔術の宗主国を名乗れるわけではない。しかしそれを理解していない人間も多い。エルトニアは、力を失わなければいつかまた戦乱に沈む」

目の前にいる人間が誰なのか、僕は一瞬の間だけわからなくなつた。別にいつの間にか別人に置き換わっていたわけではなく、確かに感情がみえない声でエルトニアを語る彼は川崎さんに違いはない。しかしその雰囲気は、彼の体を借りた何処かの知らぬ誰かがいるかのように僕の目には映つた。

確かに川崎さんの言うとおり、エルトニアという国は魔術国家としての伝統がある。いくつもの学校やアカデミーがある王都リーヴェルはその象徴みたいなものだ。彼はその伝統の存在そのものが、癌となると言っている。その考えが正しいかどうかを断ずることはさておき、日本の外務省役人である彼がそのような内容を口にするということに戸惑いを感じる。

「この国が最初に相対した地球国家が日本だったことは最上の幸運だ。日本が相手であれば、仮にパワーバランスが崩れたところで少なくともエルトニアという国は無くならない。それに国一つが変わるには、中から新たな国の形を作り上げる他はない」

「……文化の地盤を確実に変える、そのための科学教育ですか」

彼の発言は、ひどく物騒に聞こえてならない。武力を行使する国家の占領か、それとも文化的侵略による実質的な支配か。どちらも手段は異なるものの目的は同一だ。

「……これから国交を深めていく国が、みすみす泥沼へ浸かることを避けよう。私は、その一心で動いています。ただ国を思い、国のために行動をする。これからもそれは何ら変わりはありません」

この人のいう国とは、果たしてどちらなのか。日本国外務省に属している公人として考えれば断然日本を示しているはずだ。しかしこれまで話していた内容を振り返ると、彼の言う国がもしかしたらエルトニアを示しているのかもしれない。彼が一体どちらの側に立っているのか、それともその両者に片足ずつ置いているのか。だけど、いつの間にか穏やかな笑顔を蓄えて「喋りすぎましたか」と頭をふる川崎さんからは、そこまでの真意を読み取ることが決してできないだろう。

しかし一つだけはつきりとしたことがある。彼は文化的侵略によるエルトニアの支配は望んでいるわけでは無いのだ。あくまでも泥沼に沈まないための措置であり、その

先に何かをしようという意思はないのだろう。無論、彼の言っていた内容が本心であるという仮定の下で成り立つお話であり、その前提が崩れればすべてがおじゃんだ。しかし今日という日で彼に翻弄をされた身でいうのも変な話だが、先ほどの別人のような彼の様子はとても嘘や狂言を喋っていたようにには見えなかった。少なくとも、彼は彼が想定する危機を回避するために動いている。

「……川崎さんの考えがとても高尚だということは分かりました。だがそれに全て賛同できるわけじゃない」

「無理はありません。あなたにとってみれば、祖国と今の国という難しい組み合わせなのだから」

僕と彼は、それぞれもう言いたいことは互いに言い終えたのだ。僕は今日という日の裏側の真実を、彼は本心の一端を。それを交わした今、もう気残りはない。僕としてもこれ以上彼を問い詰めたところで利は薄いし、彼にしたってこれ以上内心を語るようなことは無いだろう。結局何かを言い出すことも無く、彼は再び迎える車の方に足を進める。そしてドアに手を掛けたところで、ふとこちらを振り返った。

「今回は私があなたを結果的に利用する形になりました。償いといつては何ですが、今度は私があなたの窮地をお救いしましょう。私にしか出来ないことがありますたら、遠慮なくお申し付けください」

「……少なくとも直近では、在エルトニア大使のあなたに頼み事は無いですね」

やや冗談めかしたように「そうでしょう」と小さく笑った彼は、スモークガラスの張られた車に乗り込むと、月明りの下ほの暗い道の奥へと消えていった。学園の外へと続く下り坂の向こう側を照らすヘッドライトの明かりが見えなくなったところで、僕はようやく深いため息を吐いた。

川崎さんが私利私欲で動いているただの畜生であれば簡単に怒りを向けられたものの、そんなことはあり得ないと最初から分かっていた。さつき彼に言った通り、彼の考えに対して全て賛同できるわけじゃない。しかしそれは、一部は理解を出来てしまうということだ。曲がりなりに僕はエルトニアを第二の祖国とする人間だ。その祖国が抱える問題を提言されて全く心当たりがないというわけでは無いし、それをどうにかしようとするのは分からなくもない。ただ不思議なのは、それを日本人である川崎さんが言ったということだ。結局、この短い時間の中で川崎さんのことを一部は理解できたが、一方では理解が難しい点が浮かび上がってきたということだろう。

「……うん？ 着信かな」

そこでふと、ポケットの小さく震えた。何事かとスマホを取り出してみると、薄暗闇の中に明るい画面が目を刺激する。そこに表示がされていたのはメッセージアプ

りの通知で、「今日10時、噴水広場で」と記されている。送信者の名前は藤沢さん。ついさつきまで精力的に懇親会で動き回っていた、僕と並んで川崎さんに翻弄された人物である。10時ということは、間違いなく懇親会の片づけまでが終了している時間だろう。彼女は先ほどから何かを話したいと言っていたが、恐らくその件に違いない。

スマホの右上を見てみると、まだ会の終了予定である8時にはまだまだ時間がある。えらいさん型にあいさつ回りをするにはちょうどいい時間の余り方だ。胸の内にあつたもやもやが幾分なくなつたためか、さつきまであつたはずの疲労感も少しは和らいだ気がする。最後の仕事とばかりに、僕は坂道に背を向けて新校舎の入り口へと歩き出した。

その10

日没の遅い夏盛りの日であっても、流星に夜の10時となると日の明かりは欠片も見られない。夜間の王都リーヴェルは街道に最低限の魔導灯が設置されているだけで、基本的には眠らない街こと東京の夜よりも暗い空間が広がっている。しかし空気が澄んでいることもあって、晴れの日になると星の明かりだけで最低限の視界は確保できる程度には明るさがある。そして今日のように満点の月明りの下では、一層視界がはつきりとしてくるのだ。

交流会の終盤は、酒類を含んで良いあんばいに皆さんが賑わっていた。日本とエルトニア、双方の名酒が振る舞われたからか、どちらの方も割りと満足げにしていたのだろう。ただ、さすがに僕らが所属する学会の懇親会のような、良い歳したおっさんどもが大学生のようにはしゃぐような頭を抱えたくなる展開にはならなかった。さすがに相手はエルトニアの貴族階級の皆様だ。無礼講を吹っ掛けるにも相手を選ぶ理性はこの場の人間は持ち合わせている。

この国における未成年の飲酒制限は、日本のような法律という厳正なルールに則したものでなく、酒に弱い人間や若い子供は飲まない方がいいというざっくりしたもの

だ。だから何回か顔を会わせたことのある騎士学園の生徒達が、日本酒のグラス片手にこやかに話しかけてきたのも自然な光景である。大学計画に慎重な見方をする人々も酒が入れば皆朗らかになる。これぞ懇親会の醍醐味、エタノール様々だ。

「日中とは全然違う。まるで異世界だ」

新校舎を出ること数分、夜ということもありいくら歩か歩くペースを普段よりもゆつくりとしていたが当然迷うこともなく目的地についた。そして目に入った光景に、思わず誰にむけたものでもない言葉が漏れ出す。

夜間につき給水を止められた噴水は、静かに水面を揺らしながら月明りによってぼんやりと白いその姿を薄暗い空間へ彩る。月光で淡く光る、白を基調にした石畳の地面やその周囲に植えられた蒼い花。日中には溢れていた噴水の音や若者たちの声を取り除かれた広場全体が、周囲とは切り離された別の空間のように落ち着いた幻想的な雰囲気醸し出す。

その噴水の縁に、目的の人物が腰かけていた。エルトニア王族の象徴たる赤紫色の髪の毛は、銀色の月明りの中まるでそれ自体が淡く光っているかのよう。もしその姿を日中のこの広場で晒そうものならば、間違いなく騎士学園の学生たちの注目を集めるだろう。しかしこの場には、僕と彼女の二人しか存在しない。星空を見上げていた藤沢さんは、僕の声に気が付いたのだろうか、こちらへと振り返った。

「あなたの言う通り、ここは異世界よ。何も間違っていないわ」

「……確かにね。まだエルトニアを知らなかった頃は、こんな世界は現実には存在しないと信じてた。いや、むしろそんなことすら考えなかったよ」

彼女の隣に座り、そして一緒に空を眺める。月の明かりが強すぎて星が見えないほどだ。地球と同じく、一つの月が満月の夜に街を照らす世界。しかしそこにある文化、人々、そして魔法と科学、どれもがまるで異なる価値観の中で時が流れてきたのだから、こうやって現実に存在する世界をふと立ち止まって見ると異世界であると感じさせられる。

「……来てくれたのね」

「何度も釘を刺されているのに来ない輩がいるか。ホットココア、飲む？」

「レイはそうやっていつもひねくれてるんだから。それと、ありがとっ」

適当に羽織ってきたパーカーのポケットから取り出した缶ココアを渡すと、藤沢さんはやれやれと苦笑いをしながら受け取った。リーヴェルの夏は日本よりも爽やかで過ごしやすい。夜にもなれば、少し肌寒く感じるくらいまで気温は下がる。下手すりや連日の熱帯夜で夜中に熱中症を起こしかねない東京とは比べるのも馬鹿らしい。ちなみにこんな全体的に過ごしやすいエルトニアの中でも、更に避暑地として知られる我が故郷エルドリアンは現代日本感覚だともはや日中ですら結構涼しく、日が沈んだら普通に

寒い。先ほど川崎さんがエルトニアの存在を一般に公表すると言っていたが、もしそのまま彼の計画が順調に進むのであればいつの日かエルトニア各地は有名な避暑地となるだろう。

缶を開けるカシユつという小さな音が、僕たちの他に誰もいない噴水広場に響く。今日一日はずつと忙しかった。トラブルまみれの報告会は勿論のこと、あいさつ回りをする羽目になった懇親会でもなんだかんだ動き回る機会は多かった。会場の片づけを終わらせてここに来るまで、気が休まる暇はほとんどなかったのだ。甘めのコーヒーや紅茶とは違う強烈に甘みを伝えてくる味わいが、疲れた頭にはちようど良い。

「……私、もう王族じゃなくなっちゃんだ」

飲みかけのココア缶を片手に、藤沢さんがポツリともらす。思えばこうなるのは必然だったのかもしれない。最初から彼女はいつか昔の王女としての自分に対して決着をつけなければならぬと分かっていたはずだ。曲がりなりにも近隣諸国の中でも力のある国の王女が、異世界の大学で普通の学生として過ごすという二足の草鞋は、二つの世界がつながった時からどうにかしなければならなかったのだから。

果たして、彼女は自分自身の決断についてどう思っているのだろうか。生まれながらに背負ってきたはずの王女ではなく学生という身分を選択したその意志は、並大抵のものではなかったのは想像に容易い。

「ものは捉えようだよ。ただの大学院生じゃなくて、元王族の学生という立場になったとも言える。もしかして、少しだけ後悔をしているのかな」

「まったくしていないと言えば嘘ね。私の今は王女だった頃の過去のうえにある。だから、王族としてのつとめを果たさないまま身分を変えるのは、本当はあつてはならないことだもの」

藤沢さんの反応は、想像の通りだった。まさか彼女が王族の特権を手放すことに躊躇をするとはとても思えなかったから。むしろ廃嫡を申し出ることによる周囲への影響を考えて、その影響力の大きさに一步目を中々踏み出せないような人間だ。

「あくまで僕の意見だけど、後継者争いに加わる間に自ら廃嫡を申し出たのは英断だったと思うよ。その処理を自分の意志で行うことが、藤沢さんの最後の責務だったと言っても良い」

「……うん。レイにそう言ってもらっただけで、大分救われた気がする。ありがとね」
憂いを帯びながらもそう言つて笑顔を向けてきた彼女に、僕は妙にこつ恥ずかしくなつて顔を逸らす。すると何を勘違いしたのだろうか、すすすと彼女はこちらの顔を覗き込もうと距離を詰めてきた。

「今のは本心よ。私にはレイしか本当の意味で頼れる人がいなかった。だからそのあなたの言葉が、何よりも嬉しい」

「わ、わかったからっ」

何とか彼女と距離をとりつつ気を紛らわせようと手で目をこする最中、脳裏に浮かぶ藤沢さんの笑顔。月明りに照らされた、僕だけに向けられたそれが何故か離れない。実年齢じゃ甥っ子のような歳の差で、更にはこの娘にはライア王女曰く将来を誓った相手が居るのだ。そう何度か心の中で復唱している内に頬の熱が少しばかりは引いていく。同時にむなしくもなってくるが、そんなこと知ったこっちゃない。

「レイ、どうしたの？」

「なんでもないよ。本だから、熱とかも出ていないッ」

今度は僕の額めがけて手を伸ばしてきた。なんか妙に今日はこの娘はアクティブだな、と頭の中の冷静な部分が冷めた分析をする。まさか風邪をひいていると誤解させるくらい、今の僕は紅くなっているのだろうか。確かに前世時と比べて地肌が白くなった分、顔色が少し変わればすぐに周囲にばれるということは傾向からして知っている。僕の言葉に少し頭を傾げた藤沢さんは、再びその手をもとあつたところへと引つ込めてくれた。

「……私、今まで怖かったんだ。私と同じようにエルトニアへ色々なものを残していたレイがどんどん過去に清算をつけていくのに、私は一歩目すら踏み出せなくて。いつの日か、本当に置いて行かれるんじゃないかって」

僕は、彼女を置いて行こうなどとは一回も思ったことは無かった。ただ僕自身が、置いてきたはずの世界と対面し、現状打破のために足掻いた結果が今の状況だ。

藤沢さんの生い立ちが所以で絡まった事情を解決することに関して、僕は積極的に動いてこなかったのだと今になって思う。彼女の事情は複雑だ。だからまずは静置して状況を伺い、あわよくば時間が解決してくれていることが望ましいとすらも心のどこかで思っていた。僕が彼女にしてあげていたこと、それは全て現状維持に向けた協力に過ぎなかつたんだろう。

「今の状況を維持する、僕はそれが藤沢さんの願いだと思っていた……でも、君はそういうことを願っていたんじゃないやなかつたんだね」

「……踏み出すのが怖くて、今のどっちつかずの状況がずっと続けばいいって思ったこともある。でも本当はずっと、あなたと一緒にエルトニアへ向き合いたかった」

僕は、今まで彼女の本当の願いではなく、それに蓋をして隠していた表層だけを読み取っていたんだ。エルトニアを向き合うのが怖くて、だからなあなあで済ませられる日々を続けようという代替案。ふと、今日王宮に行く前に平塚先生からいわれたことを思い出す。優しさと甘やかしは別物だ。あの時僕は分かっているつもりだと答えたけど、その実何もわかつちやいなかつた。彼女の本心を読み取り、そしてお尻をひっぱたいてでも藤沢さんの本当の望みをかなえるための協力をする。それが出来ていなかった

たのだから、僕のやっていたことは結局のところただの甘やかしに過ぎなかったのかも
しれない。

「今日レイがライルに連れていかれて、ようやく分かったんだ。もうあなたに甘えてば
かりじやられない。それに、レイが今まで私を助けてくれていたように、私もあなた
を助けなければいけない——いや、助けたいんだって」

「助けていたなんて、買い被りだ。僕は、何もわかつていなくてずっと見当違いのことを
していたんだよ」

藤沢さんのことを一番理解をしているのは僕だなんて、思い上がったことも考えてい
ただろう。でも実際はそんなことは無かった。もしかしたら、既に平塚先生は彼女の本
心を分かっていたうえで、僕がそれに気が付くまで敢えて黙っていたのかもしれない。
自嘲するように額を抑えて首を振る。しかしその手が引き寄せられ、温かいものに包ま
れる。

「ううん。あなたは最後にこうして分かってくれた。それにレイが私のことを思ってい
てくれたことに変わりはないわ」

「で、でも、そんな——」

いきなり利き腕を藤沢さんの両手に抱かれたせいで動揺し、しどろもどろとした言葉
が僕の意志を無視して漏れ出す。慌てふためきココア缶を咄嗟に噴水の縁に置き、そし

て立ち上がって体勢を整えようとした瞬間、グイと藤沢さんが掴んでいた腕を引き寄せた。バランスを崩しかけてよろめくのもつかの間、上半身が温かく柔らかい何かに受け止められる。

「……このまま話を聞いて。今顔を合わせたら、恥ずかしくて何も言えなくなっちゃう」
自分の今の状況を理解するよりも前に、耳元から藤沢さんの声が聞こえた。その声と共に耳にふりかかる彼女の細い髪の毛の感触、上半身全部に感じるやわらかさと温かさ、頭をくらくらと揺さぶるどことなく甘い匂いと胸に響く早いリズムの鼓動。背中にまで回された彼女の両腕がぎゅつときつく締めまり、これらの感覚がより一層の存在感をもつて僕の脳内から冷静さを奪う。

彼女の言葉に、こくりと小さく頷いて返す。この状況じゃ無理に振りほどこうとすれば二人そろって噴水の水だまりに落ちるかもしれない。それに下手に声を出そうとすれば、緊張のあまり上ずった声になるのは目に見えている。ああ、確かに恥ずかしいだろう。こんなゼロ距離で密着して抱き合うなど、双方の顔が見えるような立ち位置ならば互いに真っ赤な顔を見合わせているに違いないさ。先ほどの比ではなく熱を持ち始めた頬を藤沢さんにひけらかしたら、恥ずかしさでもう失神しかねない。今だって正直ギリギリなんだ。

「私は、もつとあなたを知りたい。そして、あなたにもつと私を知ってほしい」

焼ききれそうな思考の中で、一字一句が欠けることなく頭へと入ってくる。その言葉の意味は、僕たちの関係性を今よりももっと強いものにしたいたいということか。互いに周囲へは秘密にしていた出自を知っている特に親しい友達という間柄以上に強いものだなんて、そうそう在りはしない。普段であればそれは何のこつちやと頭を捻ったかもしれないけど、その普段ではあり得ないような状況が思考の方向性でも振じ曲げたのだから、幸か不幸か一個の可能性に思い当たった。でもまさか、そんなわけがあるはずが無い。だって彼女は――

「き、君には、将来を誓ったっていうお相手が居るって――」

「……呆れた。この期に及んでまだそうわけわかんない誤解をしているなんて」

考えていたことが思わず口から出てしまい、それを彼女は誤解であるとはつきりと言いつつ。ならばライア王女が言っていた一人の男に操を捧げた云々は一体何――

「姉様は、私とレイを見てそう言ったの。あの時、正直少しかだけ傷ついた。私は自分の気持ちがあなたに知られちゃったらどうしようって慌てたけど、本心ではレイがどう反応してくれるのかちよっぴりわくわくしてた。でも結局空回り。まさか第三者の可能性を出してくるなんて、本当にあなたらしいわ」

もうその言葉が答えだった。密着していたぬくもりが離れ、そして熱にうなされたように思考も何もまとまらない僕の目の前に藤沢さんの顔が現れる。ふとしたきっかけ

で触れ合いそうな距離にある彼女の顔には、ほのかに紅く染まりながら静かな微笑みが浮かんでいた。僕はただ呆けたようにその表情を見つめる。彼女が恥ずかしさに負けて目を反らすことも、僕がこの状況に耐えられなくなつて視線を外すことも無く、早くなつた脈拍の音だけが鼓膜の内側から聞こえているだけ。

静かに見つめあつていたのは時間にして数秒も無いだろう。でも僕にとつては、それがとつともなく長い時間を感じられた。そして、意を決したように開く彼女の唇。

「私は、あなたのことが好きです」

好き、そのたった二文字のとても短い言葉がこれほどまでに胸をざわめかせるなど、なんとという理不尽なことだろう。噴水の縁に腰かけているという体勢でも無ければ、そのまま力が抜けてへたり込んでしまつていたかもしれない。純粹過ぎる想い、その破壊力を止めることなんて出来やしない。何をどう答えたら正しいのかなんてという理性的の判断が、まるでまとまる様子が見られない。

「あなたがたとえ先生でも、きつと本当は歳が大きく離れていても、私はあきらめない。もう自分の気持ちに目を背けない。私は、あなたが欲しい」

「ぼ、僕は……」

自分は一体何を言おうとしたのか。僕は先生なんだとか、本当は平塚先生と同じ歳だとか、そんなことはもう彼女は分かっている。じゃあこの開きかけの口は何のために声

を出したんだろう。そうだ、僕が僕であり続けるための、何か確固たる言葉はないのだろうか――

「……レイも、今は本心を出して良いんだよ。研究者の平塚礼二じゃなくて、レイ自身の言葉を聞かせて？」

その瞬間、確かに何か壊れたのが分かった。それが何かは分からない。でも、さっきまで何とか考え出そうとしていた自分を繕うような言葉の数々が、全て頭の中から消え去った。僕という人間を護ろうとして身に纏わんとしていた幾つもの壁が無くなり、そして優しく微笑みかける藤沢さんの顔がずっとずっと鮮明に目に映る。それが、不思議とすごく怖くて、そして嬉しかった。

「僕は……僕も、君のことが好きでっ、でもそれを認めたらッ、僕はッ!!」

僕は、”平塚礼二”じゃなくなってしまう。その一言が出てくるよりも前に、口を動かすことは出来なくなつた。とてつもなく熱く、それでいながらほんのりと温かい感覚。目の前一杯に見える藤沢さんの顔、抱きかかえられる頭。彼女の顔が持つ熱が容易に伝わってくる。そして一瞬の遅れの後、驚きと多幸感をごちやませにした震えが体中に伝わる。重なり合っていた唇と唇が離れるまでには、頭の中は真っ白になっていた。

「……やっつと、あなたの本心が聞けた」

真っ白になった思考の中で、ふと瞼が熱くなる。その目じりを、藤沢さんの細長い指

が小さく触れた。久しく味わっていないかった、泣くという行為。今はその切っ掛けや理由は自分でも分からない。でも、僕の目が涙を流し始めていることは、疑いようのない事実だった。

「ありがとう、そしてこれからもよろしくね」

彼女の胸に頭を抱きかかえられる中、そんな言葉が頭上から聞こえてきた気がする。一度流し始めてしまった涙はそう簡単には止まらない。だって、流している本人が、何で流しているのかをよく分かっているのだから。でもたぶん、自分の本心を自分で認めて、それを人に知ってもらおうということとはとても大変なんだということだろう。

再び“平塚礼二”となつてからたぶん初めて、僕はまるで赤ん坊のように藤沢さんの胸の中で泣き続けた。

エピソード

ここは異界の学術都市

黒歴史、という言葉がある。その意味をざっくりと言えば、無かつたことにしたい過去の出来事のことである。そういうものが極力無いような生き方をしてきたはずだけど、その僕が先日ドでかい黒歴史を打ち立ててしまったとは不覚も不覚。まさか、赤ん坊のようにわんわんと泣く羽目になろうとは。それも藤沢さんに抱きかかえられて、時々頭を撫でられながらなんて。今思い出しても、ここが実験室だというのに頭を抱えて転げまわりたくなる。劇物やら精密機械をはつ倒しかねないから実際にはやらないけど、それほどまでに羞恥心をぶっ叩かれるような代物なのである。

「おーい。レイ、ちよつと聞きたいことがあるんだが——なんだ、まだ悶えてんのか。実験作業中なんだからメリハリを付けろ。怪我をしたらどうするんだ」

実験室に入ってきた平塚先生が、その僕を見て窘めた。そりやあそうだ。僕だつてここにあらずという人間が実験室で呆けていたら声の一つは掛ける。共用の実験作業スペースには幸運なことに僕一人。今日はやや長めの夏季休暇が始めて記念すべき一日目だ。普段から曜日の概念が消えかける程度には実験室に誰かしらいるという状

況が続く中の長期休暇なんだから、そういう期間はみんな東京の方に帰還しているせいで土日よりもずっと人けがない。

色々なことがあつたファンタスティック・アカデミーが終結してから早二日。あれだけ準備や何やらで追われて当日もすさまじいトラブルまみれだったあのイベントも、過ぎてしまえばただの記録だ。僕たち現場の人間達の仕事は学術研究に戻り、後の処理や政治的な話はこちらが何か手出しをするようなもんじゃない。多分川崎さんを筆頭とする政府系の人達がエルトニアの科学技術振興に関する調整をしているんだろう。僕らの見えないところでやってきているんだから、こちらもそれをわざわざ関知するよなことでもない。先生を見習って、僕も少しはそう思うことにした。

そこでふと、平塚先生に関して疑問が浮かぶ。何故この人は、僕の様子を見て悶えていると判断したのか。一見すりやあ体調不良か何かを真っ先に思いつきそうなものを、ピンポイントで当ててくるなんて、何か裏があるに違いない。

「……つかぬ事を聞くけど、どこまで知ってるの？」

「どこまでって、そりゃあお前と藤沢がようやくくつついたこと程度しか知らんぞ」

そんな当たり前のことを聞くなよと言わんばかりに平塚先生は呆れ気味に話す。でも僕からすれば、むしろ何故それを知っているんだと聞き返したくなるような回答だ。気まずさと気恥ずかしさで頬が熱くなり、そして冷や汗まで出てくる。少なくとも僕は

藤沢さんとお付き合ひすることになった話は一切漏らしていないし、多分藤沢さんの性格から言つて彼女もばらすようなことはしていないだろう。なのに何で、と聞き返すよりも先に、先生は僕の考えを読んだのか頭を振つて話す。

「あのなあ、昨日の様子を見ればちよつとお前たちを知つてゐる人間なら誰だつて気が付くぜ。この前まで軽い調子で冗談を言い合つてた連中が、ちよつと互いを見合わせただけで甘酸っぱく笑いあう。なんだこの青春模様は、こりやあ報告会の後になんかあつたなつて。本人たちはそれで隠してゐるつもりだつたつてのが俺としてはむしろ驚きだよ」

「……それ、誰かに言つたりした？」

「ああ。朝の散歩の時にお前の妹さんに出会つてな。午後に藤沢と一緒に会いに行くんだろ。ちゃんとお前の口からも伝えてやれよ」

目の前の景色がぐるぐると回り出す。端的に言つて、全部パーになつた。授業関連で大学の事務用に用があるという藤沢さんがこちらに戻つてくるのはちようどお昼ごろの話だ。その後に僕たちの関係性をそれとなく空気を讀みながらレシルに伝えようとしていたのに、おしやんだ。

少しジト目で見つめてみるが、本人はなんか悪いことでもしたのか、などとむしろ疑問符をつけて怪訝そうにする始末。それに僕はため息を一つはいて首を振つた。僕な

らば、それとなく示唆するのは良いとしても流石にもう少し空気を読む。確かに僕と先生じゃ、やることなすことは完全な一致をしない。こう行動で示されたら、苦笑いをして受け入れるしかないじゃないか。

「そうだ、こんな話をしに来たんじゃないよ。多分後期に入る頃に、一人外部から研究員を受け入れることになったんだ」

意図していなかった言葉のボディブローでくたくたの体に、平塚先生が更に追い打ちをかけるように重要な話をポンと投げかけてきた。ただしこちらの話題はさつきまでの内輪の話とは明らかに毛色が異なり、重要というよりもむしろ意外といった方が的確かもしれない。

「研究員って、どういうジャンルで募集を掛けるの？」

「それがな、その選考は俺や学科じゃなくて、エルトニアキャンパスプロジェクトが独自に行っているんだ。だからどういった層が来るのかも分からないし、何なら日本人か外国人かも分からない。ただ、うちが一人受け入れることは確定しているそうだ」

つまり、その新メンバーを雇い入れるのは単純に大学ではないということか。そうすると案外僕と近い立ち位置の人間になるかもしれない。僕も所属自体は東都工科大に間違いはないのだけど、僕を雇う予算の出どころは新キャンパスを運営するプロジェクトからである。これは大学と外務省、そして監修に文科省を入れた複合組織であ

り、言うなれば僕は正規というよりも特任という形に近いのだ。新しい人も、恐らくそんなポストになるのだろう。

「せめてジャンルくらいは教えてくれても良いのにね。こつちとしても何をやってもらうか詰めておかないと面倒だし」

「それな。ただ、一人でも戦力が増えるのであれば贅沢も言つてられない。最初の世話役はレイにやつてもらふことになるから、まあそういうつもりでいてくれ」

それだけを言うと、彼はまた来た道を逆戻りするようを実験スペースから立ち去つて行つた。本当にそれを伝えるだけの用だつたようだ。立ち去る間際の先生は、面倒事だなんて表情ではなく、どこか楽し気に見えた。そりやあそうだろう。今までたつたの三人、うち一人だけ学生という狂気の布陣で研究活動を回していたこの修羅の環境に、研究員という強力な戦力が加わるのだ。どう転んだつて、状況は間違いなく改善に向かうはずだ。彼の肩の荷も、少しは降りることだろう。

異世界で大学教育をだなんて、無茶が過ぎる話だとは常日頃から思つていた。でも僕たちは、たつたの四か月目とは言えどもなんだかんだでまだ持ちこたえている。

* * *

「レナさんと兄さんが……むう」

レシルが机の上に置いた手の甲にあごを乗せて、僕と藤沢さんをジトつとした目つきで見つめている。どことなく彼女はご機嫌斜めな様子で、そのままフンスと鼻を鳴らし頬を膨らませた。

「……ボクが仕方なく帰った後で、そんなふうになってたんだ」

「べ、別にレシルちゃん居ないから抜け駆け駆けしたなんて、そういう訳じゃないのよ」

それにしどろもどろになりながら釈明を行うのは、僕と同じく張本人の藤沢さんである。それにひきかえ特に喋る機会が与えられない僕は、少しでも手持ち無沙汰になっていた。少なくともこういう話題で僕が喋れば、間違いなくドツポにはまるだろうという賢明な判断のもとである。

ここはレシルが行きつけのカフェテリアだ。彼女曰く、学生街の中にありながらも薄暗く落ち着いている雰囲気が好きであるという。ここならば普段騎士学園で威張っているプリンセスの皆様方も訪れないから、そういう派閥争いに全く関与しないレシルにとっては居心地の良い場所であるのだろう。僕たち三人で集まるときもまずはこの場所集合することが大半であるくらい、僕や藤沢さんにとっても慣れ親しんだ場所になった。だからこれからもお世話になるような場所において、自分の恋煩いな話を他の人に聞こえるような大ききさでやることに抵抗が無いわけじゃあないのである。

「でもボクが手出しできない状況で賭けに出たのは変わらないじゃないですか。フェアじゃないです!!」

「……レシルちゃんには真つ先にきちんと説明しなきゃとは思つてたわ。それに、フェアじゃないって、あなたはレイの妹さんでしょ」

会話を半分以上聞き流しながら、ブーブーと互いにそりの合わなさそうな緩い文句の言い合いをする二人を眺める。こんな組み合わせでも、平塚先生曰く僕を王宮から救出する前に言葉を交わしていた時の二人は、びっくりするくらいキリつとしていたそう。目の前の光景からは、そんな様相などさっぱり想像できないのが悲しいところだ。

ただこうしてみると、レシルと藤沢さんはまるで姉妹のような親しい関係に見える。特にレシルに関しては、フォルガント家の本妻側の娘とは僕と同じく完全にそりが合わない間柄だったから、彼女に親しい姉妹のような存在が出来たというのは彼女自身に良い変化をもたらすかもしれない。現にこうして口喧嘩のような状況ではあるが互いに言いたいことが言えている。レシルが自分を変えたいと言いつつ前は、こういうちよつとした言い争いを行えることすらも無かったのだ。彼女も彼女で、順調に自分というものを変化させているのだ。

「……兄さんが選んだのならばボクは何も言いません。でも、ボクはれつきとした妹ですから——」

「なっ、ちよつと!？」

仲良きことは良いことかなと、のほほんとしていた僕の首に、ひんやりとした腕が巻き付けられる。何事かと思っただけど、頭上から聞こえてくる僕とそっくりの声色ですぐにレシルが後ろから寄つかかかってきたのは分かった。

「ねえねえ兄さん!! レナさんがちよつと怖いよ」

「こ、怖いって……私何も怒っちゃいけないでしょ!？」

怖いとは、また物騒な話だ。彼女達の話にはあまり意識を向けず適当な考え事をしてる内に、なにかあったのかもしれない。僕の顔に頬を押し付けて藤沢さんを指さすレシルと、それを目の前にして呆れた様な、そしてムツとした表情を浮かべる藤沢さんに視線を向ける。

「レシルがなんか変なことを言っちゃったのかもしれないけど、藤沢さんもその辺にしてあげてね」

「……ああ、もう。本当にレシルちゃんには甘いんだから」

猫のようにすりすりと体を押し付けるレシルに、思わずこちらも頭をわしゃわしゃと撫でようと腕を伸ばしたところで、ようやく我に返る。藤沢さんからの異様に冷たい視線はもちろんのこと、今僕らがいるのは自室なんかじゃなくカフェテリアのど真ん中、思いつきり衆人環視だ。こりゃいかんと、心の奥底に眠る理性に働きかけ、彼女の背中

をポンポンと叩くに留めた。

「……それで、今日はどこに行くのかな？」

「そうだね……学生街は粗方散策したし、貴族街は別にみて楽しいもんじゃないよ。一応王宮は観光スポットとして有名だけど、兄さんとレナさんはわざわざ行きたい？」

元々、今日こうやって集まったのはレシルに報告会の最中色々やってもらったことに感謝を伝えるためである。カフェに集まって適当に談話した後は、いつも通り街を散歩しようという流れになると思う。ただ、レシルの言う通りリーヴェルで観て楽しいと思われるエリアはもう概ね探索済みなのは事実だ。唯一このメンツでは王宮の観光に行ったことは無いけど、二日前にもう散々堪能をした。二人そろって首を横に振る様を、レシルは苦笑して眺めた。

「なら、今日は意向を変えてボクの学校を案内するよ。エルトニア王立騎士学園はこの街じゃ王宮に次ぐ歴史のある場所なんだ。兄さんたちのダイガクと隣接してるけど、案外見て回ったことは無いでしょ？」

「でも、流石に部外者が入るのは問題じゃないかしら」

「大丈夫です。ボクはこう見えても公爵家の令嬢なんですから、こんくらいの無茶は通りますよ。学園で威張り散らすメスのボス猿共も見逃されてるんだ。こつちが許されないいわれは無いですよ」

フンス、とレシルは強気に鼻を鳴らす。確かにエルトニア王立騎士学園は今まで散々ご近所さんとして外観を眺めてはいたけど、実際に中に入ったのは闘技大会の一回のみ。しかもその時は、アリーナに赴いただけで観光という趣向ではなく、それに人で溢れかえっていたから風情もくそもなかった。一応、フォルガント公に連れられて幼少期に一回だけ来たこともあるけど、流石に昔過ぎるからノーカンだ。

「そんじやあ今日はそこに行こうか。藤沢さんもそれでいい？」
「もちろん。さっそく行きましょう」

お会計を机の上にポンと置く。騒がせ代ということで、チップをいつもよりも割増しにしている。これからもこの店を使いたいから、こういう気配りは大事なのである。ただし元々の値段設定が強気な店なもんだから、財布へのダメージも無視できるようなものでもないのが悲しいところである。

机の上に残してきた銅貨数枚に後ろ髪惹かれる思いを持ちながらも、張り切った様子で先陣を良くレシルにほほえましさを感じながらそのあとに続いた。

* * *

レシルも藤沢さんも、そして僕も、みんな一生懸命変わろうとしている。レシルは身

内以外の人間に対して社交的になろうとして、藤沢さんは王族だった過去に向き合おうとしていて、僕は過去と今の関係性に決着を付けようとしている。まだまだ僕らの変革は終わつちやいないけど、でもその過渡期であることは間違いない。

公爵家の庶子として縮こまつてた”ラストレイ・フォルガント”の時と比べれば、大学所属の研究者である”平塚礼二”として同じ光景を見ると、確かに色々な違いがあった。父親との関係や魔法に関する考えだつて、当事者の視点から少し離れてみるとより広いものの眺め方になった。でも、どちらか一つの立ち位置を選ぶんじゃないくて、その両方をその場で都合よく混ぜ合わせていけばいいんじゃないかと、僕は新たに学ぶことが出来た。それを知れただけでも、僕がエルトニアに戻ってきた意味はあつたんだらう。

ファンタステック・アカデミー！ 完

後日談

電気と電腦の街、秋葉原 その1

「では、鉍物表面が酸化層で被覆されていることが、本来であれば大気中で速やかに酸化失活するほどの化学的不安定さを補っている。でもナノオーダーの被膜層でこんな反応性の高い材料を保護できるなんて……」

「でもこの被膜層の強さは並大抵じゃないですよ。エルトニアじゃこれを粉末状にした奴が閃光粉として使われてますけど、そんな反応性の高い形態でも火気や湿気が無ければ安定的に存在しますし」

実験台の上に置かれた蒼い鉍石を、僕と数名の研究者が取り囲んで眺める。近場に置かれたホワイトボードに書かれたこれまでの議論のまとめは、色々書き足し過ぎてもう解読不可能なんじゃないかという域に達していた。

「……マグネシウムやアルカリ金属類を基盤とする複合金属材料。そんな不安定の権化ともいえる粉体が空気中で保存が利くとは。ただ、それが魔力とやらにどう結び付くのかは我々にはさっぱり分からん」

さて、僕らの議論の的になっているこの純度の高いラピスラズリみたいな見た目の石

ころは、何を隠そうエルトニアの特産資源の一つである魔石である。魔力が詰まった鉱石と言ってしまうは一見単純なものに見えるけど、我々科学の世界で生きる人間にとつてみたらまるで意味不明な材料である。青という特異な色なのに成分はほぼ金属質だとか、失活したら黄色系統に変化するとか、そもそも魔力が詰まったってどういうことなんだとか。

日本有数の研究学園都市として名高いつくば市のとある研究施設で、魔法という未知のエネルギーの研究が密かに開始したのは今年の四月。僕らの大学計画と同じ時期にスタートをしていたのである。ただ研究人員は現段階では二十人やそこらという、まだまだ小さい規模だ。本腰を入れてスタートするにも、そもそもそんなわけのわからない研究を任せられるフリーな人員というものが非常に少ないというのが実情らしい。そんなでもって研究を本格的に始めてから八月中旬の今日に至るまで、魔法とは一体何なのかという科学的な立証研究は正直上手く進んでいないというのが現状だと聞いている。

研究がスムーズに進まない原因は主に二つだろう。第一に、先述したように人員が少ないということ。そしておそらくそれ以上に、ノウハウが全くないということだ。物理や材料化学、果ては地質学に至るまで自然科学の分野を網羅できる人間を揃えてみたのは良いけれど、皆さんも流石に魔法とやらは何それ状態であることに違いはない。初期投資ということでエルトニアの魔術アカデミーから提供された情報は、既存の魔術体系

をどう扱うかという実戦的なものが多数だとか。日本語訳されても何言ってるのかさっぱり分からんとグループフェローの教授がぼやいていたのは、至極当然で仕方がない話だろう。

「ただ先ほど平塚さんにやつてもらった、この鉱物に含まれるエネルギーと同等規模の魔術について、そのエネルギーを試算したら相当な高密度ですが概ね化学的なエネルギー密度となりました」

「……つまり、そのエネルギー密度から言つて、核分裂や核融合が魔術のエネルギー源となつている可能性は無くなつたか」

そんな折、僕に連絡が来たのは当然な流れだったのだろう。魔術関連の知識が最低限はそろつていて、尚且つ自然科学関連の分野を研究している。それに加えて専門用語が銃弾のように飛び交う議論をスムーズに行えるような日本語もしくは英語のスキルを保有している。こういう風に書いてみれば、確かに今の彼らにとつてみれば理想的な人員だ。

数日前に、このグループフェローから僕のもとに届いた一通のメールには、それはもう悲惨な状況を示す文言が踊つていたものだ。君の話は外務省や文科省から伺つている、もう手詰まりだから何とか一日でも良いから協力してくれ。そんなわけで、僕にとつては初めてとなるまったく畑違いの人たちとの共同研究がスタートしたのである。

ただ、わーいやったあ夏休みだあと喜んでいたのがペアになったのは、正直なところ残念だ。

昨日の朝からつくばの研究所に来てやったことと言えば、僕が保有している魔石関連についての知識と、前々から気になってきた構造や組成分析のための実験結果の共有。そして実際に魔石が持つ魔力を全て使った場合にどのような規模の魔法になるのかを確かめるべく、温度変化と物質の移動をマイクロ秒スケールで事細かに記録していく実験。実験結果が上がってから皆の目が猛獣のよういらんらんとしていたのが若干怖かったけど、ようやく現物として出てきた進捗にそういう気概となるのは分からなくもない。

「魔石とは、つまり超不安定な重アルカリ金属並みのエネルギー密度を持ちながら、安定的に存在しうる形態を持つ特異性の高い材料ということが明らかになったか。そしてその高密度エネルギーが、魔力に流用できると。前々からその線は考えてはいたが、今日の結果でそれがほぼ確実となった。平塚さん、あなたのおかげでようやく一歩目が踏み出せそうだ」

「い、いえ。それに僕でもさっぱり分からないことがあります。何故エルトニアではそんな自然じゃまず生成しないものが鉱山資源として得られるのかや、そのエネルギーがどういう機構で魔力に変換されるのか、皆目見当もつきません」

そう、最大の問題はそれだ。魔石そのものは研究すれば高密度のエネルギー蓄積素子としての実用化が見えてくるかもしれないけど、そこから摩訶不思議な現象を生み出す魔法という技術の解明につなげるにはもう一步踏み込む必要があるだろう。

「まずは一つ結果をまとめる必要があるから、これで良いのさ。恐らく我が研究グループは今後デバイス班と技術解析班に分かれて研究を続けることになる。そのどちらでも、願わくば君にも合流して欲しいものだ。いつでも席を空けておくから、そちらの仕事が一段落したらぜひ連絡をくれ」

「あ、あはは……ありがとうございます。ちよつと考えさせてください」

僕みたいな研究者はこういうストリートな誉め言葉や勧誘というものに弱い。実際こういう特殊な研究グループの統括を任された研究所の先生から評価をされるということに、悪い気持ちは全くしない。むしろケロッと心が動かされてしまうような感じだ。でもよく考えてみれば、ラストイレイ・フォルガントという人間の扱いは、外務省の川崎さん率いるエルトニア人物交流室により管理された、自分が思うよりも高度に政治的な話になっているはずだ。ちよつと転職したいです、なんてテンションじゃそうそう動けるもんじゃない気がする。それに……

「……うちの研究グループも人材難で、僕が消えたら准教授と学生の二人きりになっちゃいますんで」

「それはまあ……うちよりも相当な状況じゃないか」

先生が思わず半笑いの表情になる。今僕が平塚研究グループから抜けるようなことがあるれば、間違いなく平塚先生が発狂する。前世の自分に対してそんなことを強いるのは、やはり望ましくはないのである。

* * *

一度転生という形で現代日本からいなくなり、再び戻って来れるまでに十年近いブラックが開いた。その空白の十年間を思い知るような出来事はいくつも列挙出来るが、その中でも一番大きいのが交通網の複雑化だ。大江戸線が開業した時点でもう新規路線は打ち止めだろうと考えていたけど、戻ってきてみれば副都心線なんていう路線が出来るというじゃないか。それだけじゃない、全体的に列車の本数が増えて、もう目が回りそうな勢いだった。

そうした路線拡張の極みというものが、個人的にはつくばエクスプレスの開業である。秋葉原からつくばまで列車で一本なんて、まだ若かりし頃の平塚礼二にしてみれば良く出来てすらもない嘘にしか聞こえないだろう。当時からつくばに赴いて実験装置を借りさせていただいたことは何回かあるけど、移動手段は基本的には高速道路のみ

だった。終夜ぶっ続けて作業をした後は、事故を起こさないように最低三時間は仮眠せよという規則が、大真面目に早川研究室では施行されていたものだ。それが今じゃ列車でウトウトしてれば東京に到着。良い時代になったものである。

つくばの研究施設から出発して早一時間半くらい。ここ秋葉原に到着した後は、大月からエルトニアに戻る前にこの街を見て回ろうと計画をしていた。この街も昔と比べて随分と様変わりをしている。二十年近く前は辺り一面が古き良き電気街という様相だった。小さな無線機器商店やソフトウェアショップが大通りに面した場所から路地裏までずらりと並び、街を歩くのもいい意味でオタク気質の人たちばかりという、とても“濃い”街だったと思う。

それが今じゃ、ラジオ商店はその多くが路地裏に引つ込み、代わりにアニメやゲームといったサブカルチャーを全面に押し出した、当時からすれば別の街とも言える姿に様変わりしている。大通りには常に何かしらのアニメ音楽が響き渡り、そしてそのらの広告ではにっこり笑顔の二次元少女達が通りを行く通行人に愛想を振りまく。こんな変貌、エルトニアで例えれば学術都市リーヴェルが何かの間違いで鉾山都市に早変わりするようなレベルだ。東京に帰還して初めてこの街に足を踏み入れた時は、冗談抜きに降りる駅を間違えたと思ったものである。

「め、めいあいへるぷゆるー?」

「……すまない。君たちが普段話している言語で対応してくれるか?」

「は、はいいい!! すいませんご主人様!!」

……うん。元々今日秋葉原に用があつたのは、うちの実験室にある古い機械の部品を仕入れに來たのである。その機械というのは曲者で、転生前に早川研究室で学生をしていた頃に既存の機器を修理という名の魔改造を施したおかげで、見事に平塚礼二以外には使いこなせない実験機器が誕生した。平塚研究室独立に伴い一緒についてきたそれ以外は、未だに現役ながら流石に二十年近くも働いていればあちこちボロも来るので、こうしてちよくちよく代わりの部品が必要になるのだ。

「ご、ご注文はお決まりでしょうか?」

「ふむ。すまないが私はあまりこういうものは馴染みが無くてね。ラストイレイ、どれがおすすめなんだ」

「……適当にコーヒーとか頼めば良いんじゃないですか。すみません、ホットを二つと、それとサンドイッチ盛り合わせとオムライスでお願いします。あとオプシオンサービスは全て無しで」

……そういう訳で今日僕が用があつたのは、今の秋葉原がメインとしているサブカルチャー的なお店ではなく、昔ながらの電子部品を専門とする商店である。転生後最初に

伺ったときは、見た目が奇抜であることから昔の行きつけだった店の店主からおそるおそるといふ感じで話しかけられたものの、欲しいパーツの名前や種類を幾つか言っている内に大分打ち解けることは出来た。今日行った時だって、また会いましたねなんていうちよつとした世間話も出来た。元の姿じゃもしかしたら覚えてくれるかもしれないけど、ラストイレイという今の自分でも再び行きつけにすることが出来たのだろうと思う。

「二ホン国というのは、エルトニアとは大分文化がことなると聞いてはいたが、案外近いところもあるじゃないか。ひいふうみい……ぎつとフロア担当のメイドが十五人といったところだな。それで、この館の主はどこに居るんだ。来訪を前もって知らせていなかった私たちを招き入れてくれたことに感謝の意を伝えたいのだが」

「……ここ、そういうコンセプトのお店なんですよ。別にここは貴族の館じゃないし、彼女らもホントのメイドじゃないです。そもそも彼女たちの恰好、純粋なメイドにしちゃ肌が出すぎでしょう」

「そういうえばそうか。不思議な文化もあるものだな」

何故、何故こうなったんだ。やらなきやいけない用が粗方済んで、折角だから漫画を買い足そうかなと思っていたところに掛かってきた一本の電話が、今の状況の元凶である。普段じゃ絶対に足を立ち入れないメイドカフェという名前の魔境にて、同じテーブ

ルの向かいに座っている、華やか過ぎて逆に落ち着かない店内の様子を興味深そうに観察する、赤紫色の髪の毛が異様に目立つ長身の美青年。その人こそ、ライル・フランシス・エルトニア。ついこの前僕を不当に拉致監禁したという異色の経歴を持つ、エルトニアの第二王子である。

* * *

『あ、平塚さん。お世話になっております、川崎です』

端的に言う、今回もまた川崎さんからの電話が切つ掛けであった。携帯電話の向こう側から聞こえてきたその名前と声に、一瞬だけ眉をひそめる。何たって数日前にこちをよくもまあ嵌めてくれたアンチクシヨウその人なんだから。ただ同時に大学計画の幹部であるのも事実であり、こうして電話を掛けてくることはもしかしたら何かトラブルでもあったのかもしれないと、その時の僕は気を利かせて普通に対応をした。

『今そちらは秋葉原でしょうか。少々、いや結構面倒な頼みを受けてしまいました……』
「……面倒、ですか。ええ、こっちはいま秋葉原で、ちょうどいま用事が終わったところです。それでどういったご用件でしょうか」

彼が正直に面倒事だといったことに、身構える反面で安心もした。少なくともこれか

ら伝えられることが面倒事であると自白をしたということであり、こっちもそれ相應の覚悟をして聞くことが出来る。

『実は……あるエルトニアの方が東京を観光したいと仰っており、それに同伴して頂けないかと』

「え、いや。それ僕じゃなくても大丈夫な奴ですよ。それにエルトニア人がこちらに来るといふことはそれ相應の準備も必要でしょうし、専門の観光案内を付けた方がよほど良いんじゃないかと」

『いや、それが——』

川崎さんにしたなら、妙に要領を得ず、そしてしどろもどろな感じに聞こえた。あの時はまたこの人は僕になんか隠し事でもしてんじゃないかと疑念を持っていたけど、今になってみれば彼もこんなんやつてらんねえという状態だったに違いない。電話の向こうから釈明の言葉が聞こえてくるよりも先に、そいつは訪れた。

「ようやく見つけたぞ、ラストイレイ。それにしてもなんだこの人の量は。祭典か何かでもやるのか？」

「……ええ？」

背後から聞こえてきた、一人の青年の声。その名前を呼んできているという時点でエルトニアの、それも僕と関係のある人物に間違いない。それどころか、この声にイヤと

いうほど聞き覚えはあった。でもここは秋葉原、百歩譲って大月ならばゲートがあるから理解できなくはないけど何で——という所で、耳元の電話がこの話の本当の姿を伝えてきた。

『……本当にすいません。ライル殿下から平塚さんとどうしてもお会いしたいと依頼され、平塚さんが出張中だと当然却下したのですが……ゲートの人間に圧力を掛けて気が付けば日本側に……ああ、もうツ!!』

最後の魂の叫びと思われるシャウトについては敢えて聞かなかったことにする。つまりは、どういう訳かは知らないけどライル殿下が僕と話をしたかったけど生憎エルトニアにはいなかったから、日本の観光を兼ねてわざわざこっちまで会いに来たということのようだ。

「……どうも、数日ぶりですね。しかし数日ぶりとはいえ、まさかまたお会いするとは」「今日はこの前とは違うさ。あくまで純粹にお前と話がしたかっただけだよ」

流石に本人を目の前にして無理だなんて言い出すことは出来ない。「仕方がないんで受け持ちますよ」と川崎さんに伝えてポケットにスマートフォンをしまい、改めて後ろを振り返る。恐らく近くに止めてある車でここまで送ってもらったのだろう、白を基調とするさっぱりした礼服に身を包んだライル殿下が、この往来の中で堂々と佇んでいた。服装から背の高さ、そして顔立ちに赤紫色の髪の毛と、そりゃあ見事にキラッキラした

王子様オーラを放っていてた。この街が多少のコスプレならば自然に受け入れられるサブカルチャーの街になっていたことに、初めて感謝をした。

「……それで、どういったご用件で？」

「積る話はどこか座れる場所で行うのが筋だろう。それに外はこの暑さだからな。付いて来い、どこかに入るぞ」

「え、あつ、ちよつ!! そつちの店は——」

ちよつとしたシリアスなオーラを出す暇もない。秋葉原どころか日本自体が初めて訪れるはずだろうに、それを一切感じさせない力強い足取りで気ままに歩き始める彼を慌てて追いかける。なんでここに来たのかとか要件は何だとか、そんなことは全部後回しだ。まずはこの暴走機関車が、そこらの変な店に突撃するのを何とか抑えなければ——

「おい、その君。どこかにすぐ入れる軽食屋はあるか？」

「ひ、ひう!! え、えと、あの……」

もう、頭を抱えなくなった。というか本当に額を抑えてお天道様を見上げてしまった。何を血迷ったか、ライル殿下は見事な早足で人込みをかき分け、そしてあろうことか通りで『めいど いん へぶん』というポップな文字が書かれたボードを持つメイド服姿の女の子にそう話しかけていた。この往来でまさかメイドカフェのキャッチャー

に話しかけるとは血迷ったかコイツと思う反面、逆に異世界の住人である彼にとつてむしろメイド服の人間の方が落ち着いて話しかけやすく見えたのだと解釈出来なくもない。

「い、いやあすいません、連れがちよつと暴走して——喫茶店なら知ってるのがあるからそつちに行きますよ!!」

具体的にはノルオールや月乃珈琲店とかその辺り。まあ間違はなくライル殿下の恰好は浮くだらうけど、でもメイドカフェに入るよりは万倍も良い。身分差はこの際無視をして、彼の手をムンズと掴む。そして歩き出そうとする僕に、思わぬところから追撃が襲い掛かる。

「あのつ、うちの店が、おすすめですよご主人様っ!!」

「やかましいわツ、僕は労働者階級だ!! ほら、行きます——ムグツ?!!」

何がご主人様だこのヤロウと思わず吠え、そして何とか離れようとした僕の口をデカイ手が塞ぐ。何事かと思つてみれば、ライル殿下が僕を黙らせようとしているようだ。もごもごと口を動かしても満足に声は出てこないし、口どころか一緒に体も抱えられて身動きまでもが不自由と来た。天下の往来でこの有様など、羞恥と焦りで思考停止状態に陥りかけるも、目の前の状況はそれを待つてはくれなかつた。

「……連れの人間が無礼なことを言つてしまひ済まない。それで、君の言う店とは何処

だ？」

「えと……こつ、こちらですつ!!」

目の前でこんな醜態を晒した人など客として招待しちやいけないだろうという至極真つ当な思いも、どこかウキウキとした様子で先導するメイド服の彼女には届かない。まあね、こんな如何にもご主人様と言いたくなるような類稀なるリアル王子様もそう居ないだろうから、上客だと舞い上がりたくなる気持ちは分からんでもない。

しかし僕の気分はまさに馬車で運ばれていく羊のよう。多少暴れたところで彼の拘束はびくともしない。結局サブカルの一つの到達点とも言えるキュルルンとしたポツプなメイドカフェにたどり着いたころには、せめて彼が店の中でわけのわからない行動はしないように見張ろうと、僕は覚悟を決めていた。

その2

「藤沢さん、平塚さんの方が終わりましたよ」

「ありがとうございます。どんな感じになりましたか？」

「髪質がすごいサラサラなので、ショートボブ気味にまとめました。ただ今後はロングにするという話だったので、のびてきたらまた少しセットが必要ですね。まあ論より証拠、ぜひご覧になってください」

待合室で携帯電話をいじっていたところ、後ろから声がかけられた。ランチをどこで取るかについてロケーションや同伴者の好みを照らし合わせて選ぶのはいったん中断だ。「藤沢さんと一緒に彼女も地毛なんですか？」とちよつと驚いた様子のスタイリストさんの話に適度に合わせながら、カットが完了したというその姿を見るべく後に続く。

「あ、レナさん。待たせちゃってごめんなさい」

「……すごく良いじゃない。貴女、こういう快活な感じのショートもかなり似合ってるわ」

「えへへ……そう、ですか？」

照れ臭そうに笑う銀色ショートボブな女の子の呼び名は、平塚レシル。現代日本に来るにあたって、お店で使いやすい呼び名にするために名字を兄から拝借した次第である。貴族の身分だからもしかして別の名字を一時的にでも名乗るのは嫌かなと心配をしたのも一瞬で、兄さんと同じ名字ならばむしろ歓迎ですと二つ返事が帰って来て安心をした。

レシルちゃんと言えば、やっぱり銀色のロングヘアというイメージが強い。でもつい最近、レイに成り代わるために髪をバッサリと切り落としてしまったせいで、一転してショートヘアの女の子に変身をした。ただその時は時間がなかったこともあつてきれいに切り揃えることはできず、それにカットといっても氷剣で文字通りバッサリと切っただけなので、近くで見たら少々違和感があつたのだ。

断髪に立ち会っていた者として、彼女の髪型をなんとか行きつけの美容院で整えてもらおうと心に決めてから早数日が経った今日。ようやくレシルちゃんが日本に行くための申請が通つたので、すぐに彼女に連絡を取って東京へ行くこととなつた。本当はレイにも一声かけるつもりでいたけれど、彼は彼でつくばでの実験という急用が入つてしまったので泣く泣くの不参加である。用件だけに仕方がないことだから、せめて彼には写真を送つてあげるくらいはしてあげようと思う。

「ほんと、藤沢さんと平塚さん、二人とももつとコスプレすればいいのにー!! 折角の秋

葉原なんですよ?」

「ま、まあ……私たち、実はあまりそっちの知識が無くて」

「じゃあ例えば藤沢さんはこの作品の——」

私が行きつけにしているこの美容院は、一般にはとても特殊な場所にカテゴライズされている。スタイリストさんたちの腕前が優れているという以上に、彼ら彼女らのアニメやゲーム方面の知識がかなり深いという特徴があるのだ。このコンセプトは、オタク用の美容室。カットしてもらっているときの会話は漫画やアニメに関するものが多くという点でも風変わりだけど、この店を愛用している客層も独特だ。スタイリストさん周囲の客をこっそりと見まわせば、アニメか何かのキャラを模した格好の人や、また髪の毛の色が奇抜な人もそこそ居る。

別に、アニメや漫画の話に花を咲かせるためだけに、大月から遠く離れた秋葉原の美容院に行きつけにしているわけでは無い。最大の原因は、己の頭に生えている赤紫色の髪の毛にある。日本という国においてはこんな色の髪を地毛として持っている人間などほとんどいない。というか世界中どこを見ても赤紫色の髪の毛がメジャーな国などどこにも無いだろう。

そこまで髪の毛の色が特異に過ぎれば、ヘアスタイルのセットにまで影響を及ぼす。普通のヘアサロンではどうやら私の髪の毛は手に余る代物だったらしく、どうにかこう

いう奇抜な髪色に慣れた店が無いかと探し見つけたのがこの秋葉原の美容院である。有名なコスプレイヤーさんも客として訪れるくらいだから、青やら緑といったパツションカラーの髪の毛も扱いなれているだろうという予想はピタリと的中した。結果、特別に漫画やアニメに精通しているわけではないけど、私はこの店の常連となるに至ったのだ。

「そうだつ、平塚さんと藤沢さん、お二人ともサロンモデルになりませんか!」

「い、いやー……私はともかくこの子はちよつと特殊な事情が……」

現状の日本におけるエルトニア人の法的な扱いについてはよく知らない。ただ、彼女の足跡を今の段階で日本側に残す行為は気を付けた方が良いだろう。勿論、銀髪ショートボブのレシルちゃんは、このヘアサロンの広告写真に使うには十分すぎる可愛らしさを感じる。でも、ちよつとした気のゆるみが後々大事に繋がる可能性は捨てきれない。結局、後ろ髪を引かれる思いで、レシルちゃんをサロンモデルにするのは取りやめてもらった。

「……なんか、すごい街ですね。トウキョウ見学には来たことありましたけど、ここは今まで観た中でも一番賑やかです」

ヘアサロンが終了したのは、およそ正午くらい。朝よりもいつそうの活気が街に溢れる時間である。レシルちゃんと言うとおり、東京の街の中でも秋葉原はかなり賑やかな部類に入るとおもう。新宿渋谷も人の多さじゃむしろ上回っているけど、この界限は人の数だけじゃなくて街自体が放つ強烈な多種多様なサブカルチャーという特色がある。街の通りに立つメイドさんの数は間違いなく日本最多に違いない。

このまま周辺でランチにするか、それとも午後に彼女の洋服を見繕うことを考えて別の駅に移動をするか。その二つを天秤にかけていると、レシルちゃんが被っていた麦わら帽子を持って、うちわのように扇いだ。

「あと、すごく暑いですね。まるでお風呂みたい」

「……まずは涼しいところに入りましょうか」

茹だるような暑さに、正直なところ私も参ってはいた。常に最高気温が25度以下の快適な気候であるリーヴェルと比べれば、30度近い炎天下に加えて高い湿度を合わせた東京は堪えるものがある。天気予報で今週は例年より涼しいなんて言っていたが、何の冗談かと思う。

「午後の予定はどこかカフェに入りながら話しましょ——」

『僕は労働者階級だ!! ほら、行きます——ムグツ!?!』

ふと、視界の端に見覚えのありすぎる人影がちらりと映る。それも一人じゃなくて二

人も。一緒に来ているレシルちゃんに異様にそっくりな中性的な見た目の、ポロシャツ
 ジーンズ姿の少年。それを羽交い締めにしてメイド服の女性の後について歩く、コスプ
 レみたいな礼服を纏った長身赤紫髪青年。何故と思うよりも先に、頭が痛くなった。
 「レシルちゃん、今襲撃をかけるのは得策じゃない。追うわよ」

「……了解です。ここはニホンですから、手荒な真似はしません」

背を屈めて今にも飛び出しそうだった彼女に呼び掛けると、そんな答えが帰ってき
 た。ほつといたら構えたその手に氷剣が握られてそうだったのに、手荒な真似はしな
 いとはなんたる矛盾。

「あとレナさんも、火事は厳禁ですからね」

「……何のこことやら」

ちよつとだけ熱くなった握りこぶしをほどき、知らんぷりする。今は、妙ちくりん
 な組み合わせであろうことかメイドカフェに向かう馬鹿二人を追跡する、それだけだ。

* * *

「お待たせしました!! デミグラスソースオムライスと特製サンドイッチセットです
 !!」

メイドカフェの内装を見回して時折頭のねじが飛んだようなボケをかますライル殿下に突っ込みと解説を入れること十数分、拷問のような時間は頼んでいた料理が届いたことで一旦は終わりを告げた。客との会話を売りにしているこういう場所だから料理なんて二の次だろうと高を括つていたけど、目の前に置かれた二種の料理は存外においしそうな見た目をしてらっしゃる。目の前の青年の相手をしているだけで気力がゴリゴリと削られていく中、せめて食べ物美味しくないとやってられない。

料理を持つてきてくれたのは、僕らの机を担当することになっているメイドのりーなさん（仮称）。しかし他の客がメイドじゃんけんやメイドチェスという不可思議な競技に明け暮れる中で、僕らの机は打つて変わつて静かな雰囲気は無理やり保っている。これはひとえに、ライル殿下が他の客のような接客は必要ないと直々に仰つたからである。曰く、「今日はこの男と話がしたいから他のような対応はよしてくれ」とのことだ。

「ほう、旨そうじゃないか。話の続きは昼食を食べながらにするか」
「続きつて……さつきからそんな重要なことなんて話して無いでしょうに」

やれ、なんでウエイターがメイド服を着ているのか、このメイドさん達を雇った覚えは無いのに彼女たちがご主人様と称してくるのは何故か。んなことメイドカフェという不思議な場所の文化だと言つてしまえば全てが終わるだろうに、彼の好奇心は落ちていた見た目の割には尽きなかった。

ふと、彼の前に置かれたオムライスに視線を移す。ふわふわの卵の隣にかけられた濃厚な茶色のデミグラスソース。中々にポリューミーであり、見た目香りとともに良い感じの洋食屋で出てきそうな具合だ。しかしそのオムライスには、メニューの写真とは決定的に違うところがある。ただ忘れていただけならば別に然したる問題じゃないけど、未だ机の脇に控えるりーなさんが手に持った物品を見て悟った。まさかこの人、この場で

「て、ではつ。これから美味しくなる魔法をかけますっ!!」

「魔法……だと? ニホン国では魔法体系が成立していないという話だったが。それに料理の味を補強する魔法だと……とても興味深い、是非ともよろしく頼む」

双方が斜め上の方を向きながらも絶妙に合致した酷い会話が目の前で展開されている。というか、まさか本当にここでやるのかアレを。話には聞いたことがある、ケチャップで文字を書きながら唱えるという例のあれを――

「ではつ、ご主人様、たち”も”一緒に!!」

「――え、何。これ僕もやる流れなの!? いや僕は観てるだけでツ」

「ラストイレイ、お前もこのような特異な術式に興味くらいはあるだろう。それに私だけに詠唱しろと?」

真面目くさった顔でライル殿下が馬鹿を言う。そんな大層なもんじやないよと言っ

たところでどうせこの人は聞かないだろう。というか、注文時にそういうオプシヨンサービスは要らんと言つただろうと待つたを掛けようとしたところで、机端に立て掛けたメニューのオムライスの欄に、魔法の言葉サービス込みという文言を見つける。は、という意味の無い声のため息と共に出て、全てを悟る。今は、やるしかない。

既に美味しくなる魔法とやらの術式構成準備は完了済みだった。さすがはプロ、仕事早い。オムライスの卵の上に描かれた「萌え萌え(ハートマーク)」の文字、そしてりーなさんの胸の前に両手で形作られたハートマーク。もう後戻りは効かない。覚悟は、決めた。

「ではせえーのっ」

『萌え萌えきゅーん!!』

三者三様とはまさにこのこと。船頭たるメイドのりーなさんは満面の笑顔で元気よく、本当に魔術の発動が起きるのかと予想をしているライル殿下はひどく真剣な顔で注意深く、そして壮絶なる試練に向けて頭を空にした僕は悟りを通り越して究極の無表情で、その言葉を叫ぶ。

「……魔法とは、術式そのものよりも如何に自分の望みを願うかだ。己の意識の強さは、時に術式を通さなくとも世界を変えることだってある」

半ば放心状態で再起動を待つ身の僕の隣で、オムライスにスプーンを刺し入れたライ

ル殿下が低く穏やかな声でそう呟く。メイドさんの魔法とやらは、言わゆるただのパフォーマンスでありあくまで出し物や非日常の雰囲気作りの物に過ぎない。しかし彼はまるで本当にその魔法があつたのかのように、慈悲深い表情でスプーンの上に乗せられたオムライスをほおぼり、そしてりーなさんに笑いかける。

「君のおかげで、とても美味しい食事になりつくことが出来た。君の魔法は確かに伝わったよ。感謝する」

「は、はうっ……あ、ありがとうございます(主人様っ)」

そんな完全イケメンモードに突入したライル殿下から逃げるようにして、りーなさんがあたふたした様子で机から離れていった。こういう客商売がメインの店で売り手側が根負けするとは、流石は現役の王国王子、通っている騎士学園で貴族の女子達を侍らせているだけある。そんなりーなさんの後ろ姿を見つめ、案外可愛らしいなと思ったところで——ゾクリという寒気を感じた。いや、寒気というよりも一瞬だけ首元がチリチリと熱くなったような、そんな不気味な感覚だ。

「……どうした。何か探しているのか?」

「いえ……気のせいです」

ただ、僕のような平和な世界で暮らしていた人間が殺気なんてものを感じ取れるはずが無い。それに周囲を見渡したところで、普通にメイドさんやお客さんの姿しか見えな

いし、気のせいに違いないだろう。チクリとした感覚があつた首元を撫でて、ライル殿下にそう取り繕つた。

周囲を見渡したところで気が付いたけど、この客層は別に若い男性ばかりではないようだ。大学生くらいの友人同士で来ているらしい男子グループの他に、三十くらいの男性やもつと上の層、それだけじゃなくて女性の姿まである。中には麦わら帽子を被つたままで細かな年齢については分からないけどすごく若い二人組の女性客もいるし、いろいろな層の人たちがメイドカフェを使用している。今まで全く縁のなかつた場所であるが、世間様にはそれなりに浸透しているようだ。

「料理も来たところだ。今日の本題に入るぞ」

野菜のサンドイッチに手を伸ばしたところで、彼はそう言いだした。確かに今までしてきたような無駄話を続けることが、今日わざわざ彼が僕に会いに来た理由とするのは不自然過ぎた。姿勢を直し、そして真面目に聞きますよオーラを出す。

「先日の件で、私ははじめとして自分の王位継承権の順位を下げた。結果、王弟殿下の息子よりも下の位まで落ちたんだ。国王本人の息子でありながら、異例とも言える待遇だよ」

「……その割にあまり落ち込んでいるようには見えませんが」

落ち込むどころか、むしろ穏やかに笑いながらしゃべるライル殿下の姿に、何処とな

く違和感を覚える。普通こういう王族の人たちは王位を目指す存在であり、その目標への足掛かりが遠のいたことに悲しみやくやしさを抱くことはあっても、嬉しそうに思うことなんて無いはずだ。しかし彼は、どうやらその範疇にはいないらしい。

「そりゃあ、端から王位継承など考えていなかったからな。元々長兄のベルナルドや長女のライアと比べると低位だったのは変わらない。彼らが王位につかなければ私が回ってきただろうが、その時はエルトニアは相当の事態に違いないさ」

ならば王位が下がったということはけじめでも何でもないんじゃないか、と思わず口を突きそうになったところで、恐らくその返答を予想していた彼が「もちろん痛手もある」と口を開く。

「私の元で旨い汁を吸おうとしていた連中は露骨に距離を置いたよ。これで下手な企みはもう出来なくなる。身軽になったとも言いがな」

「……やっぱりあまり痛手と思っていませんよね」

「まあ、これからを考えたら特に困らんというのが実情だ。ヘレナ姉様をかけて二ホン国に喧嘩を売るような行為はあれで最初で最後だ。ライアのおかげで不完全燃焼に終わったが、ようやく元ある鞆に収まったとも言える。ヘレナ姉様は王族復帰とはいかなくともその生存が王家の知るところになり、私ももう下手な策略は行わなくなる。それで良かったのさ」

ついでに言えば、川崎さんという背景のよく分からない人間に手のひらの上で弄ばれた同士でもある。この人が企てた事柄に巻き込まれた立場として、どうにも納得いかないところは存在する。しかしあの無表情がデフォルトだったライル殿下が肩の荷が下りたかのように朗らかに話す姿を見て、どうにも文句や苦情が吐き出せなくなってしまうのだ。

「さらに思ってもいかなかった副次的な効果もあつた。昔に決められていた六大公爵クーベルタン家の娘との婚約が、向こう側の家の懇願で無しになつたよ。全くの英断さ、私に取り入るよりも叔父上のまだ小さい子供たちと取り付けた方がよほど良いだろう」

まるで人物関係の断捨離とも言えそうな事象だ。王位継承権が下がったというだけでこうもまあ彼の周囲から人が減つていくなど、悲しいくらいにドライでビジネスライクな関係だということを感じさせられる。王位から遠のいた彼は、六大家ほどの力を持った家からすれば用無しと判断されたのだろう。婚姻は彼ら有力貴族にとつてみれば家と家の結びつきを強化する手段の一つに過ぎない。つい数年前まで身を置いていた貴族社会の恐ろしさを垣間見た気分だ。

「やつと、私は自分の気持ちに正直になれる環境を手に入れたんだ」

「……自由恋愛も、ですか」

ふと、闘技大会の時のライル殿下の姿を思い出す。レシルとの模擬決闘の後に姿を見

せた彼の周囲には、同じく学園の生徒と思われる見目麗しい女学生数人がつきまといいた。当時としてはコイツモテてんなどしか思わなかったけど、今考えてみれば家の事情で婚約者が決められていた彼にとって、周囲の女学生たちにすら正当な恋愛感情を向けることは敵わなかったのだろう。

「……貴方が若者として当たり前な生き方を少しでも出来るようになったことは、非常に喜ばしいことだと思います。僕は学生ではないし、ましてや騎士学園の所属ではない。しかし人生の先達として、相談事があれば可能な限り乗りますよ」

いきなり自身の自由が得られたら、最初は混乱するかもしれない。それに学園内の学生たちの中にも第二王子としての彼に付き従っていた人間も居たことだろう。夏の休暇に入った学園が新たな学期を迎えた時に、彼の周囲の環境は激変している可能性は高い。そんな一人の悩める若者である彼に対して、せめて相談相手になるくらいならばやぶさかではない。

「……やはり今日お前に会って正解だった。ならば早速相談に入らさせて貰おう」
「ええ、何なりとどうぞ」

ようやく彼のの人となりがつかめてきた気がする。ライル殿下はただの歳のわりに落ち着いた雰囲気をもった青年なんかじゃない。その心の内に持つ年相応の悩みを、王子という身分で蓋をしてきたのかもしれない。だからその彼がこうして僕に相談事を持

ち掛けてくるということとは、ようやく数日前までの敵対関係が解消できたということだ。当初こそは川崎さんの電話でとんでもない面倒事を吹っ掛けられたと恨みもしたが、存外悪い会でもないじゃないか。そんなどこか晴れやかとした気分でサンドイッチ片手に彼の話を聞き――

「お前の妹、レシルティア・フォルガント。私は彼女に恋をした」

――ポトリと手に持ったサンドイッチを皿へと取り落とし、真剣な顔で爆弾発言を吐いた目の前の青年を絶句して見つめることしかできなかつた。

その3

” めいど いん へぶん”

果たしてこの文字の並びを見て何を想起するか。何も知らなければ可愛らしい文字で天界の冥土などという物騒なものを思い付こうがものだけど、流石に10年もこちらで暮らしていたらそんな思い違いはするはずもない。

そもそも私達が追っていた彼らを先導するように歩いてきた可愛らしいメイド服の女性を見た時点で勘違いする要素も無くなる。加えてここはサブカルチャーの聖地、秋葉原。たどり着いた先が立派なメイドカフェだったことに、もはや驚きようが無いのだ。

「お帰りなさいませ!! お嬢さ——ピイツ?」

しかしそれは、あくまでも私の話。現代日本にあまり慣れておらず、現役でメイドというものが普遍的に存在する価値観から見たら、ここはメイドカフェではなくとてつもなく異様な空間に見えることだろう。

「お嬢様、だって? とんだ冗談を言ってくれるね。ボクは君たちの主人になんてなった覚えは——」

「は、はいはい!! この子こういうお店に慣れてなくてごめんなさいねー」

向ける視線は氷点下、まとう雰囲気も氷点下。出迎えてくれたウェイターのメイドさんに対して氷の令嬢モードで対応し初めたレシルちゃんを寸でのところで諫めながら、すっきり萎縮した様子のメイドさんになんとか笑顔を向けた。

「……………」、メイドカフェっていうんですね」

「そうよ。私も実際に入るのは初めてだけど……………案外そこまでドキツイものでも無いのね」

ようやく注文を終えて時折メイドさんとお話をしつつ、やっとこの特異な雰囲気になれたつつあるレシルちゃんにホツと胸を撫で下ろす。ポップな店の名前にふさわしく、賑やかな雰囲気店内を彼女はキョロキョロと見回している。あの男衆を衝動的に追いかけるはじめての勢いでここまで来てしまったが、そこまで大変な空間というわけでも無さそうでも私も内心かなりホツとしていた。

メイドカフェは行ったことがあるかはおき、その存在自体は大分メジャーなものだ。しかし、エルトニア人のレシルちゃんにとってみれば、雇った覚えの無い何人ものメイドさんにお嬢様と呼ばれる怪空間だったのだろう。元々人見知りの上に警戒心の強い彼女だからだろう、対面一発目でメイドさんを威嚇してしまったのかもしれない。

がない話だ。

「それで、レイたちは——」

「駄目です。麦わら帽子で顔を隠しているとはいえ、変に観察するとこちらに気が付かれます」

そうして一段落したところで、私たちがここまで来た元凶を確認しようとして首を伸ばし掛けたところで、すかさず彼女の待ったが入った。そしてまるでお手本のようにして、レシルちゃんは視線だけを対象へと向けた。流星はレシルちゃん、私やレイとは比較にならない身体能力を誇るだけある。ただし、果たして六大家の高貴なる家柄の令嬢としてみたら似合わぬ能力ではあると思う。

彼女に做つて視線だけをチラリと対象へと向けると、そこにはちやうどメイドさんによつて料理が運ばれてきたとあるテーブル席があった。その片側に座る人物は、置かれた料理や運んできたメイドさんをしげしげと興味深げに見つめる、赤紫色の髪の毛を無造作に撫でつける長身の青年。そしてその前に座ってどことなく疲れた様子を見せているのは、銀髪の中性的な見た目の少年。どちらもその見た目は周囲のメイドさんたちとは別ベクトルでかなりの派手さぶりであり、その上他のテーブルほどメイドさんのサービスを受けていないこともあつて、何故か神聖な雰囲気すらも漂っている。

「……さつきからまともな話し合いはしていないわよね」

男二人でメイドカフェに突撃したあの二人組——レイとわが愚弟ことライルは、聞き耳を立てている範囲ではどうにも普通の世間話しかしていない。こうしてレシルちゃんとメイドカフェをたしなみつつこそそそと様子を探っているのが馬鹿らしくなるほどだ。

やれ、なんでメイドさんがいるのか、なんでこんなカフェが存在しているのか等々。少なくとも、ライルがわざわざ東京にまで出てきてレイを捕まえてするような話し合いになど思えない。つい数日前に日本とエルトニアの対立を煽ったライルとそのただ中にいたレイ、この二人の組み合わせとということとただ事じゃないとわざわざここまで乗り込んできたのが、馬鹿らしくなるような雰囲気だ。

『萌え萌えきゅーん!!』

「あれ、何やっているんですか?」

「たしか魔法の言葉だったかな。取りあえず、こういう店にはよくあるお決まりのサービスよ」

話には聞いていたけど、実際にああいうサービスを知り合いの人たちがやっているのを見るのは興味深いものがある。それも、あんなに見た目だけは見目麗しい組み合わせで全力で馬鹿をやっている物だから、否が応にも異様に目立つ。

きつと流れて無理やりやっていたのであろう放心した様子のレイをジッと見つめている内に、ふと彼が恥ずかし気に小走りて去っていくメイドさんに視線を向けていることに気がついた。その横顔から僅かに察することが出来るのは――

「レナさん、一端収めてください。ちよつとですが、魔力が漏れ出していますよ」
「あ、あらー、それは注意しなきゃね」

絶対あのメイドさんに見惚れてた!! そんな嫉妬心を慌てて頭から追い出そうと首を振る。レシルちゃんの言う通り、確かに魔力が漏れ出していたようだ。その証拠にレイが首筋をスリスリと擦っている。

「なんだか、なんにも無さそうですね」

「そうね……まあ、レイには後で色々しつかりと聞いておこうかしら」

レシルちゃんの言う通り、彼らの話し合いからは重大じゃ無さそうな雰囲気しか漂ってこない。レシルちゃん共々、ライルが何か変なことをした瞬間に飛び出すぞとまで言っていたのに、全くそんな場面は訪れようも無さそうだ。一応、告白をして恋人になった相手がこういう女の子がたくさんいる空間に訪れていることに何も思わなくはないけれども、それを差し引いたら単に彼らは世間話をしているに過ぎないのだ。

当の彼らは食事 came ということで少々真面目な話をしているようだけれども、レイの様子から見て重大な話というよりは何らかの相談に乗っているように見える。それ

も、ライルの現状を考えれば何となく察しは付かなくもない。彼は、現在王位継承権を下げられた、言わば手傷を負った王族だ。そんな彼に対して中立を保って話を聞いてくれる相手というのは、そう多くは無いだろう。そしてあのレイのことだ、色々仕出かしたライルの対しても邪険な態度はそう取ることも無いだろうし。

「なんか、馬鹿らしくなっちゃった。折角だから私たちもメイドカフェつてものをもうちよつと楽しんでいきましよう?」

「……そうですね。一応聞き耳は立てておきま——」

『——お前の妹、レシルティア・フォルガント。私は彼女に恋をした』

その瞬間、レシルちゃんと見合わせていた笑顔が両者共に凍り付き。追加注目のついでに何かゲームでも、と手に取ったメニユーがポトリと落ち。そして彼女と目と目で通じ合う、今のは聞き間違いないよなと。

爆弾発言つてのは、きつとこういうことを指すのだろう。本当に何の前兆も無く放り込まれた、とんでもなくその場を引つ掻き回すような発言。再びわき目で観察したその視線の先で、レイは手に持ったサンドイッチをポトリとサラの上で取りこぼしている。そして私の目の前にいる、急に彼らの話題の中心となつてしまったレシルちゃんと言えば、数秒前の人懐っこい笑顔は完全に引つ込んで絶零の如き冷徹な無表情へと化してしまった。オーダーを取りに来たのか近寄ってきたメイドさんが「ピイツ!」つと小さな

悲鳴を上げたくらいだ、相当の変貌である。

一体、我が愚弟は何を話しているんだ。こちらの頭が完全に向こうに追いついていないのを自覚しながらも、私はまた耳をそばだてて一字一句逃がさないように注意を向けた。

* * *

「——へ？　今、なんて」

「二度も言わせるな。私は、レシルティア・フォルガントを好いている」

ついてこない頭を総動員しながら、そしてどこかで聞き間違いか何かなら良いなあと思いながら問いかけなおした解答は、残念ながら僕の期待していたものでは無かった。再び宣言される、妹さん大好き発言。しかも二回目はちよつとばかり恥ずかしいのか頬をかきながらやられるとなると、こりやあ本当にそうなんだあと納得させるだけの説得力がある。

「それを、何故フォルガント家の人間では無くなった僕に話したんですか？」

数秒間、頭のなかで彼の言葉を反芻して出てきた疑問はそれだった。今の僕はフォルガント家の家督を継ぐ資格はおるか、その家名を名乗る権利すらも持ち合わせていな

い、ただの平塚礼二という名前の日本人だ。もし家へのお伺いを立てる一步目としての選択だとするならば、それは完全に誤ったものである。

「私はフォルガント家の一員のお前ではなく、レシルティアの兄としてのお前に、話をしたかった」

「分かりました。ではこれ以降、僕は一人の兄として話を聞きましょう」

幸い、言わずとも知れた話だったようだ。実際に出来るかどうかはさておき、この僕に対してフォルガント家との取り次ぎを願うのは無意味なこと。それが念頭にあるならば、まだ話についていけるだろう。

「……助かる。この話をするのは、彼女の兄であるお前が最初でなければならぬと思っていた」

人は見かけにはよらない。ライルという青年は王族として当然の尊大さを醸し出しながらも、その辺の筋は通すということか。ただ、いきなりレシル本人には話しくかつただけかもしれないけれど、それでもこうまで言われたら此方としてもしつかりと構えて話を聞いてやる他はない。

「それで、何故僕の妹なんですか。確かに彼女はまだ婚約者はおらず、そしておそらく特定の誰かと恋仲というわけでも無いでしょう。しかし彼女の身はあくまでも公爵家の庶子、政略結婚の駒にすらもならない身分です。第二王子である殿下の相手としては、

到底なり得ないはずの存在です」

「……いきなり私を試してきたか。まずひとつ、断っておかなければならない。私は、レシルティアという人間に惹かれたのだ。彼女の背景など二の次だ」

王家の人間の発言としてみたら、妃か側室か、そういう立場に迎えようという人間の背景を気にしないというのはひどく無責任なものだ。僕も、今日出会ってそうそうこんな話を聞いていたらきつとそう思っていた。だが、先ほど彼は自身の置かれている状況を話している。王位継承権は遠退き、付き従う人間さえも遠退いた。そんなある意味柔軟な状況だからこそ、こう言つてのけたのだろう。

「……じゃあ、何故レシルなんですか。言い方は悪いですが、それこそ殿下の周囲には様々な女性がいたでしょう」

「私の周囲には、確かに女性がたくさんいたさ。しかしそれらは、録に顔も会わせていない何歳も年下の婚約者、私の立場に群がる各家の令嬢たち。婚約者はつい先日赤の他人となり、そして令嬢たちには友と呼べる者さえ居なかった」

あれほど周囲に令嬢たちを侍らせてたじゃねえかとトゲを刺してみても、まるで痛がる様子もせずにはライル殿下は達観したように小さく笑った。なるほど、確かにエルトニアで見かけたときのライル殿下は、そんな令嬢たちときの一緒にいたのは確かだけど、彼女たちと親しげにはしていなかった。

しかし、だからと言ってレシルと彼の関係が良かったのかと言われると首を振らざるを得ない。ライル殿下に対する彼女の対応は、とてもじゃないけど友好的なものとは言えない。それどころか、今回のライル殿下の暗躍によって、恐らくレシルは僕以上に彼へ対してのイメージを損なったことだろう。その上で、彼がレシルに対してそのような想いを寄せたとすると――

「――色眼鏡の無い対応、ですか」

レシルは、良くも悪くも本音を隠しながら立ち振る舞うことが苦手な子だ。僕や藤沢さんの前で見せる元気な姿も、きつと学園で見せているだろう冷徹然とした令嬢としての姿も、そのどちらもが彼女の本来の姿だ。だからきつと、ライル殿下に対しても王族への敬いを前面に貼り付けたような行動を一切取ってこなかったのだろう。

「……あの宮殿での出来事から数日後、私は一度彼女に呼び出されたんだ。正直、あんな事を仕出かした手前で私が言うのも変な話だが、レシルティアとは顔を合わせにくかったよ」

彼のその気持ちは、僕にだって分かる。様々な人たちを巻き込んで、その末に僕という人間を拘束したことで彼はレシルの怒りを買ったのだ。そんなことがあってから日も経たずしての、二人きりでの対面。僕が思うライル殿下の人となりからして、そんな状況は気まずさを覚えないうわげがない。

「どんな罵声を浴びせられようと、それを私はずっと胸にしまってようと思っていた。そう意味のない覚悟を決めていたその時、頬に激しい痛みが走ったのさ」

「……えっ」

え、ちよつとそれは果たして王族に対する行動としてどうなんだ。頬に痛みつて、それつてつまり問答無用のガチビンタつてことじゃあ——

「放心していた私に、彼女はこう言った——

『これで、ボクからは以上です。兄さんはそこまで禍根を残したいと思つてはいないだろうし、ボクも今回の一件をずるずる引きずるつもりもない』

——そして私がかを言う間もなく、すぐに彼女は立ち去つていった。レシルティアは私の一件を、有耶無耶にする気も、それどころか政治的な好機ととることすらもしなかったのさ」

レシルとしては、多分これは終わった話ということにして、ビンタの一つで後腐れなく終わらせたということなのだろう。そりゃあなんともクールなことである。相手が第二王子ということを除けばの話ではあるが。

もう少し穏やかな話が出てくると思つていたところのビンタ騒動であるから、僕としても果たしてどう反応するべきか悩むものである。謝るにしたつてレシルの意図を踏みにじることになるし、だからと言つて知つてしまった以上何らかの対応をしなければ

こちらとしてもわだかまりが残る。

「……今や一平民に過ぎない私には、もはや頭を下げる以外に出来ることはありません」
「別に謝罪など求めてはいない。むしろ、あの出来事に彼女なりの方法で終止符を打つてくれたことに、私は感謝しているくらいさ」

そんな彼の反応を見てホッとすると共に、きつとその出来事がレシルへの好意を抱いた最後のパズルピースだったんだろうなと思う。レシルはライル殿下と決して親しい間柄では無かったけど、きつと王族として特別に敬遠もしていなかったんだろう。取り巻きに突つかかれようが淡々と対応し、闘技大会では手加減抜きにして全力で立ち向かう。身分の差を理由にした忌避とは無縁の、良くも悪くもその人柄同士の関係性。きつと、彼にとってレシルはそんな数少ない特殊な立ち位置にいたんだ。

「レシルティアは私を特別扱いなどしない。私は今まで、そういう人間が少しは居た方が気が休まる程度にしか思っていないかった。いや、きつとそう思い込んでいたんだ」
敵対的か友好的か、そんなある意味どうでもいい価値観よりもずっと前提の、彼を第二王子のフィルターを通して観ているか否か。レシルは、間違いなく否な側の人間である。

「……そんな存在の有難みをようやく知ったんだ。そしてそれを実感した瞬間から、私

は彼女の特別になりたいと願った。私すらも特別としてみてはこなかった彼女にこそ、今は特別として見てもらいたい」

照れくさそうに誤魔化すなんてことは一切なく、ライル殿下はその胸の内を僕へと語り切った。なんてこっ恥ずかしくて青臭い話なんだろう。つい先日に関自分が藤沢さんに語った内容をすっかり棚上げしつつも、このライル殿下という若い男子が話しているのはまさに青春模様の恋バナという奴に分類されるものに違いない。そしてそれが純粹で混じりつけの無いものだからこそ、一層の若々しきを感じさせるのだ。

家柄が良いとか、容姿に惹かれたとか、そんな即席の物であるはずが無い。決して仲が良かったわけじゃないからこそ抱いている、その立ち位置に向けての羨望や手に入れないと願う欲求。知らぬ間に心へ積っていたそれらがレシルのピンタで一気に表層化して、居ても立っても居られなくなつてここ東京まで出てきて僕をとつ捕まえたということか。

「レシルティアの生まれについては、私も少しは調べたから知っている。実質的に彼女を育ててきたお前にこそ、最初に話したかったんだ」

「育てたなんて買い被りです。僕は、自分の夢を達成するため、そして彼女への嫉妬心を増強させないために、レシルを育てることを放棄した層だ。僕はもはや公爵家の令嬢た

る彼女に対して何かを言えるような資格はないんです。だから僕のことなど気にすること無く、殿下の本心をレシルへと伝えるべきですよ」

やはり、彼ほどの立場になればレシルや僕の生まれやその後の話についてはちよつと調べれば出てくるのか。ただの兄妹にしては歪んでいるであろうその背景を分かたうえでまずは話を通そうというその姿勢だけは、たとえ彼にされたことを抜きにしたつて僕はとても評価をしている。きつとライル殿下という男は、僕が想像している以上によほど誠実な人間なのだ。

「……」までが、公爵家令嬢レシルティア・フォルガントの兄だった者として、本来言わなければならぬ台詞です」

「構わない。お前が思う、本当の言葉を聞かせてくれ」

僕はもはや公爵家の人間じゃない。レシルが誰と婚姻を結ぼうがそれに意見をする立場では無い。彼女が誰かと結婚をするのであればそれを一步引いたところから見守るべきだろうし、それに仮にも王位継承権を保有する者との関係なのであれば祝福するのが元貴族だろうと当然の姿勢である。

だけどその本心はそうじゃない。本心を語っても良い、その甘い言葉に今は全てをゆだねることにする。

「——ならば遠慮なく言おうじゃないか。反対に決まっている。この僕の大切な妹を、貴方などに委ねられるか」

彼がその心の内を全てさらけ出すというのならば、僕だつてその本音を見せるのが筋というものだ。僕は身を乗り出して、彼の胸倉をつかみ上げていた。

「貴方はレシルを幸せにすることが出来ますか。貴方の立ち位置が現状宮殿の中ではどのようなになっているかは知りませんが、一度やらかしたことがそう簡単に消えるとは思えない」

がちやんという大きな音が鳴り、周囲の人たちやメイドさんがギョツとした顔をしているのが見えた。しかし今は、彼らにまで構う余裕なんてこの僕には無い。目の前の、この青年の真価を見極めなければならぬのだから。

「そしてその行動理念。自身の行動すらも客観的に見て修正出来ないような輩には、たとえ誰であろうと伴侶を持つ資格は無い」

ライル殿下は凶行に出たこの僕をただ真正面から見つめながら、掴まれた首元を気にするそぶりも無く聞くに徹していた。その態度が果たしてこの場を乗り切るためのただの忍耐なのか、それともレシルを振り向かせるために本気で心に刻みつけているのか——その化けの皮を今ここではいいでやる。

「最後に言わせてもらおうか。貴方がレシルを好いている、それは理解している。だが

それは果たして何人の側室と一緒にいるんだ。それとも、まさか側室として迎え入れようなんて思っちゃいないだろうな。エルトニアではたとえ王族が側室を何人取ろうが常識だろうが、僕にとってはそれは到底看過できない。王子と庶子、その身分差から考えたら実情は側室が良いところでしょうが、そんな待遇で“俺”の妹をやる気には到底なれな——」

「——お前の最後の意見、それこそ看過出来ない。この私の、俺の好意は、そんないい加減なものじゃない!!」

気がつけば僕の手は振り払われていて、目の前には明確な“怒り”を宿したライル殿下の姿があった。彼の身の回りを刺激する内容にはただ神妙に表情を変えず聞いているというのに、その彼の好意を無下にした瞬間にこの怒りようだ。内心ではニヤリと笑いながらも、こちらも表情を変えずに更に続けた。

「ならばどうするっていうんだ。まさかフォルガント家の当主に、本妻の娘や直系の分家として貴族としての血のつながりのある子女たちではなく、ただの庶子である彼女との婚約を締結したいとでも頭を下げるか？ それこそ貴族社会における王族としての貴方の評価は地に落ちるぞ」

「たとえ私の評価がどうなるかが知ったことか。辺境へ飛ばされようがどうしようが、私はこの夢を諦めない。絶対に、彼女と正面から向き合い、そして想いを伝えてやる」

最後のセリフ、そこまですを聞いたのならばもはや僕の役目は終わったようなものだ。目を閉じて彼の言葉を反芻する。レシルという存在に對して、その身を捧げる。そこまでの覚悟があるっていうのならば、もうこちらが何を言っても仕方が無いんだ。

「……そこまでの啖呵をきったんだ。その決断が生半可な物じゃないのは分かりました。ならば、僕が言うことはもう何もありませんよ」

僕がせめて出来るのは、精々が呆れたように、しかし眩しいものを見るようにただ笑うだけ。そんな僕の態度を見たライル殿下も、ここに来てようやく敢えて過激な発言をすることで覚悟を試されていたことに気がついたのだろう。どこか疲れた様子で、彼もまた再び食べかけのオムライスの前へと腰を下ろした。

さて、と一息ついたところで慌てて周囲を見回して目についたメイドさんに深々と頭を下げる。メイドカフェという場において急に「妹さん下さい!!」「やらんぞ戯け!!」なんてやり取りをするなんて迷惑行為にも程がある。苦笑いを通り越して空笑いのメイドさんに頭を下げ続けること数秒、「アイスコーヒーお代わりを……」という事実上の迷惑料を払ったことで一旦は解決したものとする。

「……今日は話を聞いてくれて助かった。これで、自分自身に對しても己の気持ちというものを言い聞かせられた気がするよ」

「人に話を聞いてもらうってのは、それだけで色んなことが好転したりするんですよ。殿下も、そんな相手をまずは探すの良いかもしれないません」

ならば何かあればまた話を聞いてもらおうか、という冗談なのかなんなのか分かりにくい返答を、僕は曖昧に笑って誤魔化した。

自分に言い聞かせるというのは、きつと正にその通りなのだろう。どう足掻こうがレシルへの好意は消えることは無いから、その事への覚悟を決めるために彼は今日この場に來たのだ。少なくとも僕が見た通りでは彼の覚悟に相違は無く、そうなればあとは実際に行動に移せるかという彼自身の問題だけでしかない。

いつの間にか再び他愛もない世間話に戻りながらも、その合間合間にレシルの好物やらなんやらをそれとなく聞き出そうとしてくるライル殿下を見てみると、あんな啖呵をきったにも関わらず応援したくなってしまう。心の根底にある妹をあげたくないという気持ちとのせめぎあい、僕は意味もなく苦笑いを浮かべた。

* * *

レシルちゃんが、フリーズしている。

あのとんでもない宣誓の後は、ライルとレイに気がつかれないようにこそそとメイドカフェを嗜んでいる最中も、お会計を終えて灼熱の街に繰り出してからも、まるで魂が8割方抜け出たような有り様。

まあ、それも仕方がないことだろう。急過ぎる第二王子の大好き結婚してほしい宣言（本人一応不在）に、大好きな兄の「妹はやらん」宣言。そして色々あつてライルが少なくとも兄公認の恋人候補枠に見事に収まる。

当初こそ「そんないい加減な好意に付き合うほどボクは暇じゃない」と言つてたレシルちゃんも、段々と話が逼真さを帯びてくると顔をほんのり赤らめたり俯いたり、なんかスツゴく可愛らしい動作をしはじめて私も顔面が福笑い状態へと陥ってしまったものだ。

「これはきつと、学園でまともに顔会わせられない奴ね」

「う、うううううー!!」

やつべ、変な声でそう。レシルちゃんの声にならない叫びを受けて、変に顔を緩ませないようになんとか堪えながら、ポンポンと頭を撫でる。本当、こういう方面に心が追いつけなかった時は、兄妹ともに人格変貌レベルの行動をするんだなあと一周回って感心してしまった。

聞き耳をたてていた限りでは、ライルはレシルちゃんの壁を作らない姿勢に憧れたと

言っていた。でもそのレシルちゃんも、その人間性そのものに好意を持ったのだという話が出た辺りで氷の令嬢モードはもはや跡形もなく霧散していた。両者ともにそういう直接的な姿に弱いとは、案外似た者同士だなあとしみじみ思う。

「に、兄さんがボクをやらんって……でもでも、やっぱり認めるって……っ!!」

「そうね……まずは、ゆっくりと考えるのが良いよ。動転した頭じゃ焦るばかりでも、一晩寝たら少しは落ち着く。そこで改めて、あのバカをどうしてやろうかと考えるのも悪くは無いわ」

こうして頭をぐりぐりと押し付けられていると、まるで本当に彼女が妹に見えてくる。その悩みの種というのが、もう既に半分その身分とは言えども究極的には私の義妹になるかどうかというのも、ある意味面白い巡り合わせだ。

「……もしくは、もう一人のおバカさんにも話を聞いて貰ったらどうかしら。ほら、言っただけでしょう？ 人に話を聞いてもらうのは良いことだって。私と彼で、今日は夜遅くまで貴女の相談に乗ってあげるとしますか!!」

「う、うん!! 兄さんにもお願いします!!」

携帯電話の通話アプリに彼のアカウントを映してみれば、レシルちゃんはまるで待つてましたと言わんばかりに首を縦にブンブンと振った。それを見て、再び小さな笑いもれる。

「……ようやく、私以外の大切な人を見つけたのね。頑張りなさいよ、おバカさん」
小声でそう呟きながら、『メイ ド カ フ エ、 楽 し か っ た わ よ
ねえ』とメッセージを書き残す。焦ったような様子の通話が着信するのは、きつともう
すぐのはず。